

---

# 転生担当女神が100人いたのでチートスキル100個 貰えた

---

九頭七尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生担当女神が100人いたのでチートスキル100個貰えた

### 【Nコード】

N8429DJ

### 【作者名】

九頭七尾

### 【あらすじ】

【4月15日に書籍3巻が発売されます！】

異世界転生に憧れていたカルナ。交通事故で死亡した彼の前に現れたのは、転生担当の女神様だった。

「はじめまして、カルナさん。私は女神アーシアです」

異世界転生キター！！とカルナは狂喜乱舞。転生特典としてチートスキルを貰い、ついに夢にまで見た異世界へと旅立つ

「あんたがカルナね。あたしは女神イスリナよ」

はずが、なぜか別の女神が現れた！？

首を傾げつつもカルナは彼女からもチートスキルを貰い、今度こそ異世界へ

「わたくしは女神ウエルミスですわ」

は行けず、また別の女神が……！

「はあ、はあ……ま、まだいるのか……!？」

結局、全部で100柱もの女神と出会うことになるカルナ。

しかしそのお陰で、なんとチートスキルを100個も入手してしまった。

「俺はこの1000個のチートスキルで異世界を満喫する！」

第1話 女神Aがあらわれた！ 女神Bがあらわれた！ 女神C  
が（ry（前書き）

書籍化が決定しました。10月15日頃にGAノベル様より発売予  
定です。（2017.8.27）

第1話 女神Aがあらわれた！ 女神Bがあらわれた！ 女神Cが(r y

「はじめまして、東城カルナさん」

名前を呼ばれてゆっくりと瞼を開くと、目の前に女の子がいた。

うお、何だこの美少女？

アイドル？ いや、アイドルでも見たことないくらい可愛いぞ？  
なんか全身から光が出てるしな。

って、光？ どういうことだ？ 普通、人間の身体から光なんて  
出ねえだろ。

しかもすごい髪の色だ。

まるで鏡のような煌めく長い銀髪。こんな髪、外国人でも見ない  
ぞ。

辺りは何もない、ただ真っ白いだけの空間。

俺はそこにふわふわと浮かんでいて、少女もまた俺の眼前で宙を  
浮遊していた。

一体何が起きているんだ？

俺が大いに困惑していると、その少女がにっこりと微笑みかけて  
きた。

なんて眩しい笑顔だ……っ！

「私は女神 女神アーシアです」

「め、女神……？」

「はい。どうやらまだ混乱されていらっしやるようですね。無理も

ありません。死というものは唐突に訪れるものですから」

痛ましいものでも見たかのように、彼女は顔を少し俯け、眉尻を下げた。

「え……？ 俺……もしかして、死んだのか……？」

「はい。残念ですが、カルナさんは亡くなりました。死に際のシヨックで覚えておいではないかもしれませんが、交通事故により」

「よっしやあああつ！！」

彼女の言葉を遮り、俺が思わずガッツポーズを決めながら叫んでいた。

少女 いや、女神様が は、ポカーンと呆氣にとられたような顔をする。

「あの……亡くられたのですよ？」

「だよな！？ それで、これから異世界に行けるんだよな！？」

「え、ええ……」

俺が前のめり気味に確認すると、彼女は少し身を引いた。

「いや、悪い。実は俺、異世界転生するのが夢だったんだ」

エルフにドワーフに獣人にハーフリンク。  
スライムにゴブリンにコボルドにオーク。

色んな種族がいて、色んな魔物がいて。  
それから魔法や伝説の武器なんかがあつて。

俺がイメージしているのは、いわゆる「剣と魔法のファンタジー世界」なんだが……俺は、昔からそんな異世界が好きだった。そしていつか死んだら、転生してみたいって思ってたんだ。

まさかそれが本当に実現するとは。

「か、変わってますね……」

「確かにそうかもしれないな。で、どんな世界に行けるんだ？ 何かスキルみたいなゲームっぽい設定はあるのか？ できればエルフとかドワーフみたいなのがいる世界がいいんだけど。あ、もちろん魔法は必須だよ必須！ 魔王はいてもいなくてもどっちでも構わないけど、人間たちと戦争とかしてない方がいいな！ 俺あっさり死にたくないし！」

「……カルナさん」

「はい！」

「とりあえず、落ち着いてください」

「あ、はい」

女神様によると、これから俺が転生することになる世界は、まさしく俺がイメージしていたような剣と魔法のファンタジー世界らしい。

転生するか、天国に行くか。

一応、どちらかを選ぶことができるらしいが、当然ながら俺は転生一択だ。

さらに、どうやら俺が今まで生きてきた世界の方が魂魄の質が高く、転生により生じる不均衡を是正するためとかなんとかで、好きな能力 スキルを一つ手に入れることが可能なのだという。

つまりは転生特典というやつだ。

「どれにしようかな……」

虚空に文字が浮かび上がり、獲得可能なスキル名とその簡単な説明文がずらりと並んでいた。

さすがは転生特典というだけあって、どれもこれも強力そうなものばかりだ。

当然、悩む。

いずれも捨てがたいものばかりだし、この選択が俺の新たな人生を決定づけると言っても過言ではない。

「これ、やっぱり一つだけ？」

「一つだけです」

「そこをなんとか」

「一つだけです」

「いよつ、女神アーシア様超絶美女！ ナイスバディ！」

「褒めても一つだけです」

ぐぬぬ。

俺は散々迷ったが、最終的には何とか一つのスキルを選んだ。



まあ仕方がない。

これ一つでも怖ろしく強力なスキルなんだ。これ以上を望むのは贅沢というものだろう。

「カルナさんの新たな人生に、幸多からんことを」

そして俺は女神様に見送られ、ついに念願の異世界へと旅立った

「あんたが東城カルナね。あたしは女神。女神イスリナよ。今回はあんたの魂の導き手として選ばれたわ」

はすが、気が付くと目の前に別の美少女がいた。

しかもまた自分が女神だと言っている。

どうということ？

困惑する俺の様子を、女神様は死んでまだ戸惑っている状態だと勘違いしたらしく、

「ま、状況が呑み込めていないのも無理もないわね。特に交通事故っていうのはほとんど突発的なものだし」

「は、はぁ……」

こっちとしては曖昧に頷くことしかできない。  
ちなみに先ほどアーシアと名乗った温和な女神様と違い、かなり  
自尊心の強そうな女神様だ。

それからイスリナは、アーシアとまったく同じ説明を聞かせてく  
れた。

「というわけで、転生特典として一つだけ、あんたはスキルを手に入  
れることができるわ」

俺の目の前に、スキル名がずらりと並んだ画面が出現するのも同  
じだった。

スキル名まで先ほど見たものとまったく一緒だ。

だが、俺が先ほど選んだスキルの名前だけがない。  
あれは無かったことになってんのかな？  
それとも、すでに獲得済み？

俺はちらりと女神イスリナに視線を向ける。

……黙っておくか。

俺は二度目のスキル選びをスタートする。

先ほどいったん目を通していたということもあって、今度はすん  
なり    とはいかず、また迷いまくってしまった。

欲しいスキルが多すぎるんだよ。  
てか、そもそも全部で何個あるんだ、これ？

……九十七……九十八……九十九！

さっきのと合わせると百個もあるのか！

そりゃ時間もかかるだろう。

文字通り人生がかかっているのだから。

まあ自動的に決まってしまうケースもあることを思えば、やっぱ  
選べる方がありがたいけどな。

次がつかえているのか、女神様は「早くしてよ」とプレッシャー  
をかけてくる。

俺は「もう決まるところ！ 頭の中では決まった！」などと蕎麦  
屋の出前のようなことを言いつつ、じっくり時間をかけてスキルを  
選択した。

「……ようやく決まったみたいね。じゃあ、頑張つて。あんたの新  
しい世界での活躍に期待しているわ」

そうして俺は、今度こそ本当に異世界へ

「わたくしは女神ウェルミスですわ」

どうなってんの！？

「あれ、おかしいね。君、選べるスキル一つしかないんだね」  
「みたいだな」

「しかもそれ、使いどころが限られてて不人気なやつだね。うーん、  
どうやら君には才能がなかったみたいだ。残念」

「そっかー。じゃ、そのスキルで」

「……随分と平然としてるね？」

「だって才能がないんじゃ、仕方ないだろ」

「ふーん。ま、いいや。んじゃ、頑張つてちょ」

「ああ。ありがとな、女神様」

礼を言つと、俺の身体が光に包まれ始めた。

バイバイ、と手を振ってくる女神様に手を振り返しながら、俺  
は思わずほくそ笑む。

結局、俺は全部で百柱もの女神様に会った。

そして、それぞれから別々のスキルを　つまり全部で百個も  
頂戴したのだ！

長かった。

むちゃくちゃ長かった。

なんたって、まったく同じ説明を百回も受けたんだからな。

だがついに、俺は異世界にやって来たのだ。

「いっせかつい、だーっ！！」

百個のチートスキルとともに。

## 第2話 ガイドさんはとても優秀

俺はついに夢にまで見た異世界にやってきた。

さあ、この世界を満喫しよう      と思いきや、見渡す限り、木、木、木、木、木、木。

どう見ても森の中だった。

どっちに行けばいいんだろうか。  
いきなりこんなところに飛ばされるとは思わなかったぞ。

『南東方向およそ五キロで森を抜けることが可能です。さらにそこから東に真っ直ぐ進めば、およそ十キロ先に町があります』

不意に、脳内にそんな声が聞こえてきた。心に直接語りかけてくるってやつだな。

「誰？」

『申し遅れました、マスター。わたくしはマスターが取得されたナビゲーション道案内・極 スキルです』

「おお、よろしくな」

いわゆるガイドさんというやつだ。

女の人の声で、淡々とはしているものの、どこことなく人間味を感じさせられる。

「もっと機械的なものかと思ってたんだが」

『レベルの低い 道案内 であればそうです。ですがマスターは当

スキルを極めておいでですので、このように擬似的な人格を有しております。情報量は元より、取捨選択して提供するなど、より高度な機能も備えております』

なるほど。これはありがたい。

『罵倒や嘲笑といった、マスターへの言葉責め機能も備えております』

「その機能必要？」

俺はドMか。

だが少し気になる。いつか試してみよう。

「ところで俺、ちゃんと百個のスキルを獲得できているのか？」

『はい。間違いなく獲得しておられます』

おっしや。

まったく同じ説明を百回も受けるのはマジでしんどかったが、そんなこと全部のチートスキルを手に入れた俺の前途を思えば大したものではない。

俺はこの百個のスキルを使って

異世界をめいっぱい満喫

してやる！

ただちよつと不安もあった。

「大丈夫なのか？ 女神にバレたら怒られたりしない？」

『通常、転生を担当する女神が百柱いらっしゃるといのは、あり得ないことです。ですが問題はないかと。なぜならマスターは、然るべき手順で獲得されておられます』

ふむ。道案内・極ナビゲーション さんが言うのなら大丈夫なのだろう。

「しかし 道案内・極ナビゲーション って長いな。何て呼べばいい？」

『お好きにお呼びください』

「じゃあナビ子で」

『……』

「あれ、反応なし？」

『…… 申し訳ありません。マスターのネーミングセンスが思いのほか酷く、しばしフリーズしてしまいました』

「意外と辛辣だな！？」

早速、罵倒されたよ。

結構いい名前だと思ったんだけどな。ナビ子。かわいいし。

「じゃあナビ子な」

『…… あえてそのまま押し通すその姿勢に驚嘆します』

「おお、ありがとな！」

『いいえ、マスター。今のは褒めてません』

まさかそのツツコミをしてくるとは……。

ナビ子さん、なかなかやるじゃないか。

がさがさ。

そのとき、近くから木の葉が擦れる音が聞こえてきた。  
ん？ 何かいるぞ？

現れたのは豚の頭を持つ二足歩行の怪物 オークだった。



「おおおつ、マジで豚が二本の足で歩いてる！」

って、感動している場合じゃない。

俺は何の武器も持ってないし、服も向こうで着ていたものそのままだ。

一方のオークは、手に槍のようなものを持っていた。

身長は百八十センチくらいあって、ガタイも良い。プロレスラーみたいな体格だ。

つか、最初はスライムとかゴブリンだろ？ 何でいきなりオークなんだよ。オークって言ったら、こいつをソロで倒せば冒険者として一人前として認められる的な存在だよな？

「ちなみに俺の今のレベルは？」

『1です』

「レベル1ってオークを倒せる？」

『不可能です』

やべーじゃん。

『もつとも、それは普通の人間のレベル1であれば、の話です』

「つまり？」

『まず 鑑定・極 を使って、オークを鑑定してみてください』

「鑑定って、どうやって……あ、できた」

どうスキルを使うのかということも、どうやら頭の中にインプットされているらしい。

オーク A

種族：緑オーク族

レベル：23

スキル： 槍技

視界の端に文字が浮かび上がった。

俺の知ってる言語じゃないのに、なぜか読むことができる。

『言語理解・極 スキルを取得されているからです』

なるほど。しかし不思議な感覚だな。

『もっと詳しく各アビリティを見ることが可能です』  
「やってみる」

生命：401/413

魔力：31/31

筋力：131

物耐：137

器用：76

敏捷：98

魔耐：48

運：32

『今度はご自身のステータスを確認してみてください。鑑定でもいいですが、【ステータスオープン】と唱えていただいても構いません』

「ステータスツ、オーオープンツツ！！！」

『そんなにカッコ付ける必要はありません』

いいじゃんかよー。

カルナ 22歳

種族：人間族

レベル：1

スキル：ナビゲーション道案内・極

鑑定・極

言語理解・極

身体強

化・極  
……

スキルはちよつと多過ぎて見るのがしんどい……。  
各アビリティを確かめてみる。

生命：9999/9999

魔力：9999/9999

筋力：999

物耐：999

器用：999

敏捷：999

魔耐：999

運：999

「どこがレベル1!？」

全部カンストしてるじゃねーか。

「スキルのお陰です。例えば 身体強化・極 スキルは、生命力に  
+9999、筋力、物耐、器用、敏捷値にそれぞれ+9999されま  
す」

「あ、うん。つまり素の能力とかどうでもいいわけね」

「ちなみにマスターは リミットブレイク 限界突破 スキルを持っているため、見か

け上はカンストしていても、実際にはそれ以上の数値です。 鑑定・  
極 であればその詳細を見ることも可能ですか？」

「今はいいや。とりあえず、あのオークさんをどうにかしよう」

向こうも俺に気づいたようだし。

「ブヒオッ！」という豚っぽい雄叫びを上げて突進してくる。

俺の胸目がけ、オークは槍を突き出してきた。

よっと。

俺はそれを飛び上がって軽々回避 ちよっと地面を蹴っただけ  
で二メートル近く跳んでしまった すると、オークの顔面に膝蹴  
りをぶちかました。

「ぎゅっ。」

うお、何かやばい音がしたぞ！？

首が後方に折れ曲がったオークが、物凄い勢いで吹っ飛んでいく。  
進行方向にあった大木にグシャツと激突した。

確実に死んだな……。

中身がアレして、かなりグロテスクな感じになってるし。

「オーバーキルです。400しかHPがない敵に、9999のダメ  
ージを与えてどうするのですか」

「ダメージまでカンストしやがった！？」

しかし相手が魔物だったから良いけど、人間を相手にするような  
ときには手加減しないといけないようだ。

『魔物の素材を高値で売るためにも、できるだけ綺麗な状態のまま

仕留めてください』

「へいへい。おっ、武器も鑑定できるのか」

・石の槍：攻撃力+13

俺はオークが使っていた槍を拾い上げると、適当に振り回してみた。

おおっ、すごい。

まるで何年も使っていたかのように手に馴染むし、色んな槍技を身体に染みついていくかのように繰り返せる。

『武神 の効果ですね』

あらゆる武芸に通じるようになるというスキルである。

『武芸 というスキルは、汎用性が高い反面、特定の武器における効果は 剣技 槍技 などの専門スキルに劣ります。ただし武芸 の最上位スキルである 武神 となると話は別。専門スキルと何ら遜色のない効力を発揮します』

「そもそも武器を使う必要すらなさそうだけどな」

大抵の敵は腹パンで仕留められそうだ。

「しかしこの森にいる魔物はオークだけか？」

『いいえ、マスター。その他、七種類ほどの魔物が棲息しています。ですが、オークの数が最も多いようです。なお、近くにオークの巣があります』

「オークの巣？」

『千里眼 をお使いいただければ分かりやすいかと』

言われた通り、俺は 千里眼 スキルを使ってみた。  
千里先でも見通すことが可能になるスキルだが、上空から地上を  
俯瞰するといった使い方も可能らしい。

おおっ、しかも縮尺を変えたり、場所を移動したりできるぞ。  
まるでグーグ マップみたいだ。

『念のため伏字にしておきました』

おお、助かる。って、何でグーグ マップ知ってんの！？

「かなり遠くまで見ることができるな」

『ちなみに 鷹の目 スキルであれば、せいぜい半径数百メートル。  
千里眼 は軽くその数千倍の範囲まで見通すことが可能です』

グーグ……じゃない、 千里眼 で森を見てみると、砦のような  
ものを発見した。

『その砦がオークの巣です』

「よし、行ってみよう。捕らわれのくっ殺騎士がいるかもしれない  
からな」

『この世界にそんな文化はありません』

くっ殺騎士まで知ってるナビ子さん、すげえ。

### 第3話 女騎士とオークのハッピーセット

ナビ子さんが言うには、砦にはオークが棲息しているらしい。

『……その呼び名、やはり変えませんか？』

「ナビっちとかはどうだ？」

『マスターにセンスを期待したわたくしが愚かでした』

俺は木々を掻き分けるようにしてその砦へと向かう。

丘の上に立つ、石造りの巨大な建造物だった。

思ってたより大きいな。普通に攻略するとなかなか骨が折れそう  
だ。

ちなみにオークは知能が低く狂暴で、この世界では敵性生物として認識されているという。

亜人とかではなく、魔物扱いということだ。

砦の門扉は固く閉ざされていて、周囲を囲う石壁の高さはゆうに四メートル以上ありそうだ。石壁の上を監視役のオークが巡回していた。

「さて。あの中にくつ殺騎士がいると仮定して、どうやって助けに行こうか。正面から？」

『その仮定については理解しかねますが、マスターであれば内部への侵入は容易です。あの程度の門など容易く破壊可能ですし、あるいは壁を飛び越えて侵入することもできます』

なるほど。

「バレずに侵入することはできないのか？」

『可能です。 隠密・極 スキルをお使いください。しかし、わざわざ身を潜める意味はないのでは？』

「ばっか。くっ殺シーンを近くで見るためには身を隠す必要があるだろうが！」

『……なぜ怒られたのか、まったくもって理解できないのですが』

俺は隠密スキルを使ってみた。

「これでバレないんだな？」

『はい。 隠密・極 であれば、すぐ目の前まで接近したり、大声で叫んだりしない限り、オーク程度に見つかることはないでしょう』

ほとんど光学迷彩並みだな。

俺は砦の正面まで堂々と歩いて行っただが巡回しているオークがこちらに気づく様子はない。

すげー。マジで俺が見えてないみたいだ。

俺はその場でズボンを下ろしてみた。

パンツも脱ぐ。

風が股間を撫でていき 超 開放感 ！！

『……そんな汚いものを晒して、一体何をされているのですか、マスター？』

「いや、見えてないと分かったら、裸になってみたくなるのが人間の心理ってものなんだよ」

ていうか、汚い言うな。



俺はジャンプして石壁の上に飛び乗った。

あ、ズボンはちゃんと穿き直したぞ。

そのまま砦の中へと侵入する。

『マスター。砦の中にオーク以外の生物と思しき生命反応があります』

「すげえ、ナビ子さんってそんなことまで分かっちゃうのか」

『はい。探知機能も搭載されておりますので。もっとも、およそ半径二百メートル以内と、範囲は限られています』

「へえ」

ナビ子さん有能過ぎだろ。

『マスターも探知が可能です。探知・極 スキルをお持ちです。なお、地形、建物の構造、熱源、魔力、敵性個体、トラップなどを詳細に探知できます。有効範囲はおよそ半径三キロメートル』

俺の方が有能だった。

ちなみに 探知 はこちらの意志に応じて発動するアクティブスキルであるが、 感知 という意志に無関係に発動するパッシブスキルもあるそうだ。

俺は 感知・極 を有していて、危険やトラップ、気配、悪意、殺意などを自動で感知してくれるという。

実際に探知能力を使ってみた。

「おお、砦の構造が手に取るように分かるぞ」

地図要らずの便利能力だ。

砦の中心に建つ尖塔に、多くのオークたちが集まっていた。ギャグじゃないぞ！

その中に、一人だけ違う種族が交ざっているようだ。

「くっ殺騎士はここだな！」

「まだ人間とは決まっていませんし、人間だとしても男かもしれません」

「オークに捕まっているのは女騎士って相場が決まってるんだよ！」  
「……………」

ナビ子さんの何か言いたそうな気配を感じつつも、俺はその場所へと急いだ。

すぐに辿り着く。

いたぞ！ やっぱり女騎士だ！

美しい白銀色の甲冑に身を包む、赤い髪の少女だった。

天井から吊るされた鎖で手足を縛られた彼女は、その端正な顔を歪め、苦悶の表情を浮かべている。

その周囲には、下卑た笑みを浮かべたオークたち。

「くっ……………殺せ！」

くっ殺、いただきました！

って、喜んでいる場合じゃない。

じっくり観賞せねば！

「……………助けにきたのではないのですか、マスター？」

ナビ子さんの指摘を無視して、俺はオークたちに交ざった。  
バレないよう、ブヒブヒ鼻を鳴らすことも忘れない。完璧だ。

「っ！ き、貴様は人族<sup>ヒューマン</sup>っ？ なぜそんなところに……っ？」

ドキドキワクワクしながらこれから行われるであろう蛮行を待っている、女騎士が俺に気づいた。

くっ……なぜバレた！？

『さすがにそこまで堂々と目の前に陣取っては察知されます』

どうやら最前列の特等席に座ったのがいけなかったらしい。映画館でも一番前に座るタイプです。

「ブガっ！？（何者だ！？）」

「ブヒッ？（どこからッ？）」

「ブヒヒ！（人族だ！）」

遅れて俺に気づいたようで、オークたちがブーブー鼻を鳴らし始める。なぜか豚語（？）が理解できたのは、恐らく言語理解・極のお陰だろう。

俺は颯爽と前に出た。

「助けにきた。もう大丈夫だ」

「今オークたちに交ざって観賞しようとしてなかったか！？」

「気のせいだ」

そう言って安心させつつ、俺は女騎士の身体を抱きかかえた。

当然、これはセクハラじゃなくて救出活動の一環だ。

ちよつと手元が狂って、胸当てからはみ出た乳をぷにゅとしてしまったのは事故である。この女騎士、おっぱいマジでかい。

オークどもが一斉に襲い掛かってきた。

女騎士を抱えたままこいつらを相手にするの、結構大変そうだな。

『マスターは 時空魔法・極 をお持ちですので、転移魔法を使ってください。それで砦から脱出できます』

例のごとく、使い方は頭の中にインプットされていた。

「テレポート」

「う、うわあああつ!？」

女騎士が甲高い悲鳴を上げる。

俺は彼女を抱えたまま、砦の上空百メートルくらいの場所に転移していたのだ。今は風魔法を使って空中に浮かんでいる。

「もしかして高いとこダメだったか？」

「し、死ぬっ……死ぬっ……助けてくれええっ!」

さっきオークに向かって殺せって言ってたよな？

女騎士は目を回しているが、とりあえず我慢してもらっしかない。

俺は 自然魔法・極 ってのを持っている。

自然魔法というのは、この世界の自然現象に関わる魔法全般を指している。

風を操作する魔法もその一つだ。

『なお、風魔法の他に、火魔法、水魔法、土魔法、雷魔法などが一般的です』

俺は続いて火の魔法を使ってみることにした。面倒だし、砦の中にいるオークをまとめて焼き豚にしてやろう。他に捕まっている人はいないみたいだしな。

「超級魔法 プリムストーン 地獄ノ業火」

『……マスター、オーバーキルにもほどがあるかと』  
「え？」

直後、巨大な魔法陣が虚空に展開されたかと思うと、凄まじい火炎放射が砦を襲った。

一瞬にして砦が炎に包まれ、火柱が天へと突き上がる。かなり離れた位置にいるというのに、その熱風がここまで吹き付けてきた。

「な、な、な……」

女騎士は目の前の光景に声も出ない様子。

てか、俺もびっくりしてる。まさかこんなとんでもない威力だなんて思わなかった。

森まで燃えてるし。

って、やっべ！ このままだと森ごと全焼してしまう！

俺は慌てて別の魔法を発動した。

「超級魔法 フミッドミス 神話ノ洪水」

『……マスター、もしかしてワザとやっていますか？ この辺りの地形でも変えるつもりですか？』

「うそん」

今度はバケツをひっくり返したような豪雨が、燃え盛る砦に降り注いだ。

幸い火はあつという間に消えたが、周囲の木々が濁流に飲み込まれて薙ぎ倒され、辺り一帯が池のようになってしまう。  
砦も一緒に流されたようで、跡形もなくなっていた。

「うん、次からはもっと威力の低い魔法にしよう」  
『ぜひそうしてください』

### 第3話 女騎士とオークのハッピーセット（後書き）

4 / 18 修正 基本属性魔法・極 を 自然魔法・極 という少し  
汎用性の高いスキルに変更しました。

## 第4話 女騎士は大抵脳筋

水浸しになった場所を避け、俺は地上へと降り立った。

地面に下ろしてやると、女騎士は腰を抜かしてしまったのか、へなへなぺたんとその場に尻餅をついた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ。た、助けてくれたことには礼を言う。だ、だが、貴様は一体、何者なのだ……？」

「俺はカルナ。ただの旅人だ」

「ただの旅人って…… 超級魔法を連発しておきながら、ただの旅人はないだろう！ あんな魔法、うちの宮廷魔導師にも使い手がいないぞ！」

そんなにすごい魔法だったのか。まああの威力だからな。

『この世界の魔法は、初級、中級、上級、超級、神級の順で威力が上がっていきます。神級魔法の使い手など、人間や亜人に限れば数百年に一人というレベルです』

ナビ子さんが教えてくれる。声にはやや呆れが混じっていた。

……てか、本当はその上の神級魔法を使うつもりだったんだが、一段階抑えてみたんだ。

神級だったら森ごと消滅してたかもしれん。危なかった。

「ま、まあいい…… あ、あたしはエレン、アルサーラ王国騎士団に所属する騎士だ」



女騎士はどうか立ち上がりつつ、そう名乗った。

エレン 18歳

種族：人間族

レベル：39

スキル： 剣技 怪力 闘気

生命：1087/1132

魔力：91/91

筋力：401

物耐：368

器用：331

敏捷：304

魔耐：242

運：81

ふむ。

確かに騎士に相応しいステータスを持っているようだ。たぶん。ていうか、この世界の相場を知らないの、強いのかどうか俺には判別できない。

『強いです。いっばしの戦士の基準がオークを単独で討伐できるところとされていますが、彼女なら瞬殺できるでしょう』

あ、やっぱりオークはそういう位置づけなのね。なお、SからFまでの七段階で示されるといいう危険度において、オークはCらしい。まあ俺も瞬殺できるけどな！

『……なぜ張り合ったのですか？』

ところで、アルサーラ王国って？

『質問にはスルーですか。……主に人間族が暮らしている国で、今マスターがいるこの場所はその領地内です。この森を出て東に四十キロほど進めば王都があります。アルサーラ騎士団は王都周辺の防備を任されている他、魔物の討伐なども行っているようです』

しかし普通、騎士が一人でオークの砦に挑むものなのか？

『そこまでは分かりかねます。ですが、マスターの鑑定・極を使えば、さらに彼女の情報を引き出すことができるかもしれません』

へー、鑑定ってそんなことまでできるのか。

身長166センチ

体重57キロ

B91 W57 H90

『マスター。誰がスリーサイズを調べると？』

つい。

しかしGカップか……すごいね！

『……称号を確認してみてください』

称号：アルサーラ王国王女    アルサーラ騎士団団長

「って、王女？」

ただの女騎士ではなく、姫騎士だったのか！

「っ？　なぜあたしが王女だと分かったのだ！？」

あ、やべ。

鑑定で判明した情報を、つい口走ってしまった。

「王族っぽいオーラがあった」

「オーラ」

「あと、こういうところできなり身分の高い女性に出会うのはお約束だからな」

「????」

適当に誤魔化すと、エレンは「何を言っているのだ？」という顔になった。

『著名な人物であれば、基本情報を知ること可能です』  
(なるほど)

・エレン：アルサーラ王国現国王の三番目の娘。女ながら剣の腕前は国内でも指折り。現在、アルサーラ騎士団団長を務めている。

「ただ、かなりの脳筋で、よく単身で魔物の群れに突撃しては危険な目に陥っている、と」

「だ、誰が脳筋だ！？」

「今日も単身でオークの砦に突っ込んでいった方がいいが、予想以上の戦力に敗北して捕まってしまったといったところか」

「なぜそれを！？　い、いや、あたしは負けてなどないぞ！　向こうに魔法を使えるオークメイジがいて、睡眠魔法で眠らされてしまっただけだ！」

「それを負けたというんだ」

「まったく、正々堂々と向かって来ぬとは！ 武人の風上にもおけぬオークだ！」

その発想が完全に脳筋だった。

単純なステータスで言えば、並みのオーク程度では相手にならない強さなんだけどなあ。

『どうやら頭の方が残念なお方のようですね』

「ナビ子さんって俺以外にも普通に辛辣なんだな……」

とそのとき、どこからか声が聞こえてきた。

「なっ、砦がなくなっている！？」

「なんだこの湖は！？ 一体何が……？」

すいません。俺のせいです。

「そんなことより姫さ エレン団長はどこだ！ エレン団長！  
エレン団長！」

「おい、呼ばれているぞ？」

「む。どうやら追い付いてきたようだな」

エレンが率いる騎士団らしい。きっと苦労してるんだろうなあ。

「カルナと言ったな？ 貴様はこれからどうするつもりなのだ？」

「とりあえず王都にでも行ってみるかな。その後のことは考えてない」

「ならば、ぜひ一度、城に足を運んでくれ。今回の礼をしたい」

「いいよ、礼なんて」

おっぱいちょっと触らせてもらっただし。

「そういう訳にはいかぬ。もしカルナが来てくれていなければ、あたしは……その……た、大変なことになっていた！」

「裸に剥かれてオークたちに輪姦されてたな」

「言っただけ！ わざわざ濁したのに！」

エレンは顔を真っ赤にした。かわいい。

『今の発言はセクハラです、マスター』

異世界にもそういう概念あるの！？

「そ、そういう訳だから、必ず城まで来るんだぞ！ あたしの名前を衛兵に告げればいいから！」

「分かった。そしたらおっぱい揉ませてくれるんだな」

「そんな礼をする予定などない！」

なんだ……ないのか。

『マスターこそ、セクハラを自重する気はないのですか？』

もちろん、ない！

『……………』

エレンがこちらに背を向けて歩き出す。

だが何を思ったか、途中で足を止めて振り返ると、

「あと、あたしは別に高いところが怖い訳ではないぞ！　ただ少しびっくりしたただだからな！」

やっぱり怖かったんだな。

「すげえ！　獣人がいる！　ほんとに獣耳だ！　あっちにいるのはドワーフか！？　筋肉すげえ！　おおお、向こうにいるのはハーフリンク！？　かわいい！」

お上りさん状態の俺を、道行く人々が胡乱な顔で見ながら通り過ぎていく。

「マスター、明らかに不審者です。涎を垂らして幼女にしか見えな  
いハーフリンクをガン見しては、衛兵にしょっ引かれかねませ  
ん」

「仕方ねえだろ。夢にまで見た異世界の街にやってきたんだからな  
！」

ここはアルサーラ王国の王都だ。

アルサーラ王国は、人族が治めている国ではあるが、多種族との交流も深く、そのためドワーフなどの亜人も多く住んでいるという。

遠くには城が見える。

あの脳筋の家だとは思えないほど立派な城だな。

さて。

どうするか。

やっぱ異世界って言ったら、冒険者ギルドかな。  
教えてナビ子さん。

『ご自身で探知することも可能ですが？』

「面倒」

『……ここは街の西側ですが、ギルドは街の東にあります。あの大通りを真っ直ぐ進んでください。三階建ての銀色の建物ですので、近くまで行けば猿でも分かるでしょう』

「おっけー」

そして、徒歩およそ三十分。

「派手な建物だな……」

ギルドは三階建てで、外壁は銀箔でも塗っているのか、キラキラと輝いていた。

すごい存在感だ。これは確かに猿でも間違わないだろう。

一階が受付になっていた。

どうやらここで仕事の依頼や受注ができるらしい。

そして二階は酒場。

三階はオフィスのようだ。

おっと、どうやら地下もあるらしい。

地下は闘技場になっているようで、冒険者たちの訓練場として利用されるほか、時々、ギルド主催の見世物なども開催されているそうだ。

「さて。早速、冒険者登録をするか」

俺は受付へと向かう。

ちようど人の多い時間帯だったのか、結構並んでいるな。

窓口は三つあって、それぞれ五人、三人、二人が待っている。  
俺は五人の列の最後尾に並んだ。

「マスター。なぜあえて人の多い列に？」

「バカ、受付嬢は美人に決まってるだろ」

そこは絶対に譲れないところだった。



## 第5話 ステータスを怪しまれた

十五分ほど並んで、俺の番がくる。

「いらつしやいませ。どのようなご用件でしょうか？」

残念ながら定番のエルフ族ではなかったが、かなり美人の受付嬢だった。

俺は彼女のステータスを鑑定した。

リユーナ 20歳

種族：人間族

身長160センチ

体重49キロ

B84 W55 H82

エレンほどではないが、なかなかスタイルもいい。Eカップくらいかな。

『だからなぜスリーサイズを？』

俺はナビ子さんの呆れ声を無視し、受付嬢に用件を伝える。

「冒険者登録をしたかったんだが、君を見て気が変わったよ。どう？これから俺と一緒にお茶でも？」

『……なぜいきなり口説いているのですか、マスター。しかもどう見ても相手は仕事です』

受付嬢はにっこりと微笑んで、

「はい。冒険者登録ですね。推薦状はお持ちでしょうか？」

「あ、スルー？」

「頭のおかしな冒険者さんの対応には慣れてますので」

あ、そうなの。さすがはプロですね。

ていうか、今さらつと酷いこと言われたよね？

しかし、しまったな。

登録には推薦状が必要なのか……。

エレンに頼んで作ってもらうか。

けど、さっき会ったばかりだしな。

なのにもう城に会いに行ったりなんかしたら、「そ、そんなに早くあたしに会いたかったのか！ 仕方のないやつだな！」なんて頬を赤くしながら言われそうだ（妄想）。

「推薦状はお持ちではなさそうですね」

「あ、はい、すみません……」

「ふふ、大丈夫ですよ。風貌からして、絶対お持ちではないだろうと思っていましたから。念のための確認です」

「俺、貶されてね!？」

綺麗な顔してなかなか辛辣な受付嬢だった。

「ですが、ご安心下さい。推薦状をお持ちではない場合も、定期的開催されている試験に合格していただければ登録が可能です」

なるほど。

試験内容は筆記と模擬戦らしい。

模擬戦はともかく、ペーパーテストか……。

俺、この世界の常識とか何にも知らねえぞ？

『問題ありません、マスター。ギルドの加入試験程度の問題であれば、わたくしが解答をお教えできるでしょう』

おお、さすがナビ子さんだ。

「実はちょうど本日の午後、試験が行われる予定です」

「よし、受けよう」

「ではまず、ステータスを計測させていただきますね」

そう言っ受付嬢が取り出してきたのは、水晶玉のような道具だった。

それを 鑑定・極 スキルで鑑定してみると、

・鑑定具：ステータス鑑定用の魔導具。

『鑑定具ですね。かなり高価なもので、どのギルドにも置かれています。もつとも、マスターの 鑑定・極 と比べれば大きく性能は劣りますが』

この水晶玉に触れると、ステータスがプレートに表示されるらしい。

「これ、見られても大丈夫なのか？」

『……一応、問題ないでしょう』

頷くナビ子さんだが、なぜか少々齒切れ悪かった。

『表示されるのは名前とレベル、それから筋力値や敏捷値などの各アビリティくらいのもんです。それからもし犯罪歴があればバレてしまいます』

俺は犯罪歴がないから大丈夫だな。

『はい。この世界ではまだありませんね。今のところ』

ナビ子さんや、前の世界ではあつたかのような口振りはやめてもらえませんか？

あと、今後も犯す気はありません。

「試験を受けるためには最低限の能力が必要となります。また、過去に犯罪歴があるかどうかも分かりますので、ご注意ください」

「これで能力を見れるのであれば、わざわざ模擬戦をする必要はないんじゃない？」

「……よく言われます。ですが、そういう決まりですので」

お役所みたいな返答だった。

いや、単に実力を見るだけの模擬戦ではないのかもしれない。最低限、冒険者ギルドの名に泥を塗らない人物であるかどうかを確かめるための、面接も兼ねているのだろう。

『マスターの人格ですと少々心配です』

おいこら。

俺は鑑定具へと手を伸ばし、触れた。お、意外と柔らかいな。

「……それはわたしの手です」

「おっと、失礼」

『マスター、隙あらばセクハラをかますのはおやめください。さすがの受付嬢も笑顔が引き攣っておられます』

改めて俺は鑑定具に触れた。

「ええと、お名前はカルナさんですね。犯罪歴は………ない？」  
「何で犯罪歴がないことに驚いてるんですかね？」

受付嬢は、ごほん、と咳払いして、

「レベルは……21ですか」

どうやらオークを倒したことで一気に上がったらしい。

『マスターは 経験値上昇・極 を持っておられるので、レベルが上がりやすくなっています。また 成長率上昇・極 のお陰で、ステータスも上昇しやすいです』

「……はあっ!？」

突然、受付嬢が頓狂な声を上げた。

目を丸くし、鑑定具と繋がっている表示プレートをまじまじと見ている。それから少し焦った様子で、

「も、申し訳ありません。どうやら鑑定具が壊れてしまっているようです」

「ん？ いや、普通にちゃんと表示されているぞ」

「そ、そんなはずがありませんっ。こんな数値、どう考えてもおかしいですし……」

俺のオールカンストした能力値を見て、あり得ないと判断してしまったようだ。

「こ、困りましたね……。ギルドにある鑑定具はこれ一つ……修理には時間がかかりますし、何より次の試験は一か月後……」

受付嬢は弱った顔をして悩んでいる。  
それから自分の手を鑑定具に乗せてみて、

「あれ？ 普通に計測されている……？」

だって壊れてねーもん。

おい、どうするんだよ、ナビ子さん？

『やはりこうなりましたか』

予想できていたなら先に言えよ。

『どのみちどうしようもありませんでした。魔法で改変しておくという方法もあったのですが、万一のことを考えて提案しなかったのです』

もし魔法でのステータスの隠蔽がバレると二度とギルドへの登録ができなくなり、さらには犯罪者として罰せられるという。

「申し訳ありません。少し、ギルドマスターに相談してきますので」

受付嬢はそう言って奥へと引っ込んでいった。  
しばらくして戻ってくる。

「お待たせしました。カルナさんはレベル21とのことで、十分に受験資格を満たされております。こちらに名前をご記入いただければ、申し込みの完了とさせていただきます」

どうやらアビリティの件はなかったことにするらしい。いいのか、それで。俺としてはラッキーだけどな。

『このギルド長は仕事がテキトウであることで知られています。一人の受験生のために、わざわざ専門の鑑定士を呼ぶのは面倒だと判断したのでしょう』

お役所仕事も時には役に立つものだな。

まあもし今日の試験を受けられなくても、エレンに頼めば推薦状を貰えただろうけど。

それから俺はまず筆記試験を受けた。

ナビ子さんのお陰で楽勝だった。

合否はすぐに出るらしく、受付で待っていたら名前を呼ばれた。

先ほどと同じ、バスト84センチ、Eカップの美人受付嬢だ。

「カルナさん。……………合格です」

どこか腑に落ちない顔で試験結果を伝えられる。

「満点ですね……。わたしがギルドで働くようになって初めて見ました」

全問正解だったようだ。

『当然です』

ドヤ声のナビ子さん。

「では、これから次の試験がありますので、地下の闘技場に移動してください」

さてと、次は模擬戦だな。

『マスターであれば余裕で突破可能でしょう』

「腕が鳴るぜ」

『……手加減してくださいね？ マスターが本気を出してしまうと、建物ごと破壊しかねませんので』



## 第6話 ギルドマスターは犯行の隠蔽を目論む

「おお、けっこう広いな」

地下の闘技場はなかなか立派なものだった。

すでに試験を受ける受験者たちが集まっている。俺を含めて全部で六人。いずれも筆記試験を突破した連中だ。俺以外はみんな十代だろう。

試験の内容は、試験官を相手にした模擬戦だ。

「俺が試験を担当するギースだ」

筋骨隆々の禿頭のおっさんが出てきた。頬には大きな傷跡があり、いかにも冒険者といった風貌だ。もしくはヤクザ。

ギース 42歳  
種族：人間族  
レベル：36  
スキル：剣技 闘気  
生命：908 / 924  
魔力：63 / 63  
筋力：312  
物耐：322  
器用：263  
敏捷：280  
魔耐：209  
運：127

レベルはエレンより少しだけ劣るくらいか。

試験は申し込み順で行われ、俺は最後だった。

受験者たちを鑑定してみたが、どいつもレベル10前後だ。

あのおっさんと戦っても、ほとんど子供をあしらうような感覚で負けるに違いない。

「よし、全員一緒にかかってこい」

と思っていたら、どうやら一度に相手をするらしい。

さすがに一对六には抵抗があったのか、受験者たちは困惑の表情を浮かべる。

「いいから来いよ。もちろん全力でな。安心しろ、てめえらごときではオレに傷一つ付けられねえよ。もし一撃でも当てることができたら、最初からDランクにしてやる」

しかしおっさんに挑発され、さらには褒美まで提示されたことで、受験者たちは一斉に目の色を変えた。

『冒険者のランクにはFからSまであります。駆け出しはF。二つ上のDランクに上がるためには、最低でも一年以上はかかると言われています。もちろん、ランクが高い方が依頼を受けやすく、その分、稼ぎやすくなります』

ナビ子さんが教えてくれる。

俺も他の受験者たちに交じって、闘技場の中央へと歩を進めた。そんな俺を、おっさんが訝しげに見てくる。

「……まさかお前、素手で戦うつもりか？ 見たところ杖もないし、魔法使いではなさそうだが……」

あ、しまった。

俺、完全に手ぶらだった。

まあいい。適当に誤魔化そう。

「俺は武闘家だからな」

「武闘家か。あまり強そうには見えんが……」

嘘ではない。

武神 スキルを持つ俺は、体術もマスターしているのだ。

そして試験が始まった。

合図とともに、我先にと受験者たちが一斉に試験官に躍りかかる。俺以外の。

一人では難しくても、全員で行けば一撃くらい見舞えるかもしれない。そう考えたのだろう。

だがその考えがいかにかいものだったのか、彼らは即座に痛感することとなった。

「遅え遅え」

「っ！？」

「おらよ」

「がっ」

「見え見えだ」

「くっ！」

試験官のおっさんは蝶のように舞い、五人がかりの猛攻をひらりひらりと躲しては、逆に素早く斬撃を当てていく。と言っても、剣の腹だ。

やがて五人の受験者たちはあっさりとその場に膝を折った。

「ふむ。お前とお前は合格だ。あと三人は不合格。また挑戦してくれ」

手も足も出なかったせい、合格を言い渡された二人に喜ぶ様子はない。不合格となった三人はがっくりと項垂れた。

「で、今のままだとお前さんも不合格だが？」

彼らの戦いを傍観していた俺に、おっさんが視線を向けてくる。

「そいつらが負けるのを待ってたんだよ。おっさんと一対一で戦いたくて」

「はっ、随分と自信があるじゃねえか。なら、いつでもかかってきていいぞ」

おっさんこそ随分と自信満々だな。

だったらこっちからいかせてもらっぜ。

オークはスプラッタになったが、このおっさんなら多少は力を出しても大丈夫だろう。

せっかくだから知っている体術を試してみることにした。

縮地。

「なっ………？」

突然目の前に現れた俺に、おっさんが目を見開く。

縮地つてのは、相手との距離を瞬時にして詰める技術だ。  
相手の意識の隙を突くことにより距離を一瞬で詰めたように見せているだけで、転移魔法のようにワープしている訳じゃない。

「くっ！」

さすがは熟練の冒険者と言うべきか、おっさんは即座に身を横に投げ出した。

お陰で俺の拳は空を切ってしまう。

あ、さすがにちよつと手を抜きすぎたかも？

今ので決着をつけてしまうつもりだったんだけどな。

「な、なんだ、今の……？」

おっさんは瞠目し、その禿げあがった額から汗を噴き出していた。

「は、はははははっ！ やるじゃねえか！ こいつは、オレも本気を出さなきゃならねえみたいだな！」

俺の実力を悟ったのか、おっさんがいきなり笑い出す。

このおっさん、あれか。

強えやつ見っとオラわくわくしてくっぞ、ってタイプか？

「おおおおおっ！  
オーラブレイド 闘気剣 ツ！」

しかもなんか必殺技っぽいキターーーッ！

剣が煌々と光っていた。

おっさんが地面を蹴り、大上段からそれを振り下ろしてくる。

って、その距離だと当たらなくね？

目測を誤ったのだろうか。

しょうがない奴だな。

俺は前に出た。

「真剣白刃取りッ！        っで、あれ？」

おっさんの剣を両手で挟み込もうとして、俺は相手を舐めすぎていたことを悟る。

止められなかった。

てか、手が刃に弾かれたんだけど！？

『闘気のせいです。剣に纏わせることで、攻撃力、切断力が大幅に上昇します。さすがに手で受け止めるのは難しいかと。せめてマスタ―も闘気をお使いください。    闘神    スキルを持っておられますので』

いやそれもつと早く教えてよ、ナビ子さん。

次の瞬間、おっさんの剣が俺の身体を切り裂いていた。

「お前っ、何で自分から前に出てきやがるんだよおおっ！？」

と叫ぶおっさん。

いやいや、受験者相手にこんな物騒な技を使うあんたが悪いって。

ぶしゅわっ、と血が吹き出す。

試合の様子を見ていた受付嬢、顔面蒼白。

こうして俺の異世界での新しい人生は、呆気なく幕切れに  
つて、まだ続くよ？

「何で自分から前に出てくんだよおおっ！？」

「いやあ、取れると思ったんだけどなあ」

「アホか！ 素手で闘気纏った剣を掴めるわけがないだろ！ しかもこのオレの全力の一撃だぞ！？」

「あれ全力だったのかよ。手加減しろよな。普通なら死んでたぞ？」  
「新人ごときに舐められてちゃ、ギルドマスターとしての沽券に  
関わる！ だからここでしたっけ！ ビビらしておいてやろうって思っ  
たんだよ！」

「しかも理由が最悪だった！」

てか、このおっさんがギルドマスターだったのか。

「くそつたれっ、マジでどうすりやいいんだ！ 冒険者ならともか  
く、まだ登録前の素人をこんな目につ……。このままじゃ、オレは  
責任を取って辞任……。よし、ギルドには来なかったことに  
して死体は森にでも……」

「隠蔽する気まんまんかよ」

「お前が死ぬからいけねえんだろがッ！」

「そして逆切れか」

「……って、何でまだ生きてるんだああ！？」

ようやく気づいたんかい。遅えよ。

そう。

俺はピンピンしていた。

「傷が、ない、だと……？」

「治った」

「そうか、治ったのか　　って、いやいやいや、治るわけねえだろ！？　お前、オレの必殺技をまともに喰らったんだぞ！？　必ず殺すと書いて必殺技だぞ！？」

「いやあー、何かの見間違いつて線も？」

「そんなわけあるか！　そもそもオレもお前も血だらけじゃねえか！　いや、意外と血の量が少なえな……」

先ほどの一撃は、確かに俺の身体を斬り裂いた。

いや、身体というか、額だな。

しかし頭だからそこそこ血は出たが、傷自体はそれほど低くなかった。

俺のリミットブレイクした物耐値のお陰だ。

『先ほどのダメージは128でした。マスターの生命力はいったん「9923/9999」になりましたが、一秒後に自動回復で「9999/9999」に戻りました』

しかも俺には　自然治癒・極　というスキルがある。

あつという間に受けた傷が治り、生命力が回復してしまったのだ。

『なお、計算が合わないように思われるかもしれませんが、それはマスターの実際の生命力が9999を超えているからです』



「おい、一体どんな手を使ったんだよ!？」

おっさんが詰め寄ってくる。

「女神の加護か!？ それとも何らかの補助魔法で……」

うーん、あんまり自分の手の内を明かしたくないんだよなあ。  
よし、誤魔化そう。

「おっさん、一応まだ試験中ってことでいいんだよな？」

「は？」

「秘技、さっきのお返し拳ッ!」

「……ぐべっ!？」

俺はおっさん、もといギルドマスターをぶん殴り、昏倒させた。  
泡を吹いてるけど、まあ生きてるだろう。

『894のダメージです。現在の彼の生命力は「14/924」。  
……瀕死状態です』

あつ、やつべ〜。

もうちよつとで死なせるところだった……テヘペロ!

『まったく可愛くないです、マスター』

そんなこんなで、俺は試験に合格し、晴れて冒険者になったのだ  
った。

## 第7話 S級ダンジョンに装備無しで挑んでみる

美人受付嬢のリユーナさんから、冒険者の会員証を発行してもらった。

「そ、それでは、カルナ様のご武運を、お、お祈りしております…」

めっちゃ俺にビビってた。

まああんなの見せられたら仕方ないか。

ちなみに俺のランクはDである。

通常はFからのスタートなのだが、ギルドマスターに一発喰らわせることができたため、約束通りにDランクにしてもらえたのだ。

服は着替えた。

血で赤く染まっていたこともあり、あの後しばらくして目を覚ましたギルドマスターがくれたのだ。

なぜか俺を見る視線が泳いでいて、あれ以上、深くは追及してこなかった。

『なぜか何も、マスターの規格外の力に怯えただけです』

「確かに、ちょっと失禁してたっぽいもんな」

『マスター、そこは気づいたとしても触れないでお願いあげましよう』

さて、せっかく冒険者になったんだし、なんか依頼クエストでも引き受けるかな。

『現在マスターは無一文ですし、早急に今晚の宿代と食事代を確保する必要がありますね』

おっと、そうだな。

俺、この世界の金を一円も持っていないんだった。円じゃないだろうけど。

『この世界では主に、銭貨、銅貨、銀貨、金貨、大金貨が利用されています。それぞれの価値については、銭貨1000枚⇔銅貨100枚⇔銀貨10枚⇔金貨1枚と考えていただいて構いません。大金貨は変動が大きいですが、おおそ金貨30枚の価値があります』  
「昼食の相場はどれくらい？」

『銅貨5枚から6枚といったところでしょうか』

なるほど。ということは、銅貨1枚は日本円だとだいたい百円くらいの価値ってことか。銀貨で千円、金貨で一万円だ。分かりやすい。

俺は掲示板のところへ移動した。

色々な案件が張り出されているな。

依頼にもFからSまでのランクがあるらしく、当然、ランクの高い依頼ほど成功報酬が高い。

ランクによる制限がある依頼もあった。

Dランクなら大抵のものは受けることができるみたいだが、やはり高レベルのものとなるとCランク以上とか、Bランク以上という条件が書かれていた。

「ダンジョンに行ってみたいな」

掲示板には、ダンジョンの情報が書かれた紙も貼り付けてあった。王都を拠点にしている冒険者たちが主に活動しているのは、以下のダンジョンらしい。

ダンジョン『小鬼の巣穴』

難易度：F（攻略済み）

場所：王都北部の森。片道1時間弱。

主にゴブリンが棲息している洞窟型の迷宮。

ダンジョン『シルザ廃鉱山』

難易度：E（攻略済み）

場所：シルザの町北東部。片道4時間。

主にコボルトが棲息している鉱山型の迷宮。

ダンジョン『ルーン遺跡』

難易度：C（攻略済み）

場所：王都南部の廃墟。片道2時間強。

ダンジョン化した古代遺跡。ゴーレムの他、獣系の魔物が棲息している。

ダンジョン『奈落の大穴』

難易度：B（攻略済み）

場所：ラザ山の麓。片道7時間。

ラザ山南部の樹海に開いた巨大な大穴。下級悪魔<sup>レサードエモン</sup>が出没する。

……うーん。

どれも攻略済みだな。

「やっぱダンジョンと女の子は初物がいいよなー」

『今、マスターの性癖を暴露する必要ありましたか？』

「おっ、もう一つあるじゃん」

ダンジョン『大賢者の塔』

難易度：S（未攻略）

場所：王都南部。片道5時間。

古の大賢者オーエンが遺したとされる塔。百階層からなり、上層に進むほど魔物が強力になる。下層の難易度はD。

これは未攻略のようだ。

ナビ子さんによれば、大賢者オーエンというのは、魔導の真髄を極めたとされる超有名な魔術師らしい。

二百年くらい前に生まれた人族<sup>ヒューマン</sup>なのに、現代の魔術士でも未だ解明できていないような魔術を幾つも使っていたという。

『「大賢者の塔」は、そんな彼が晩年に建造し、引き籠ったという巨大な塔です。その最上階には、彼が遺した貴重な研究資料があるのではないかと言われています。ですが、未だ誰一人として最上階にまで辿り着いた者はいないようです』

そんな人物の研究資料ともなれば、途轍もない価値を持っているのだろう。

『なお、ダンジョンの攻略については、国王から直々に依頼が出ています。難易度Sのダンジョンですと、報酬は大金貨一千枚です』

決めた。

まずはこのダンジョンに挑戦しよう。

ダンジョン『大賢者の塔』までは片道5時間かかるということだったが、風魔法で空を飛ぶと三十分ほどで到着した。

「でかいな」

さすが百階までであるという塔だ。天を貫くかのように聳え立っている。

地震きたら倒れそうだ。

「しかしこれ、空から外壁をぶち破ったら最上階にいけるんじゃないのか？」

誰もが一度は考えるであろう、塔型迷宮の攻略法だ。

『可能です。ただし、結界を突破するにはさすがのマスターでも少々時間がかかります』

できるらしい。

けど、そんな方法で攻略してもつまらないよな。

結局、俺は普通のルートでダンジョンに挑むことにした。

「完全に迷路だな」

ダンジョン一階。

無数の分かれ道があつて、マップがないとあっさり迷子になりそうだ。

だが俺にはナビ子さんがいるため、簡単に正しい道順を特定することができる。探知・極スキルがあるので、別にナビ子さんに頼らなくてもいいのだが。

最短ルートで進んでいると、第一モンスターを発見した。

ホブゴブリンA

種族：ホブゴブリン族

レベル：19

スキル：怪力

「ホブゴブか。ゴブリンよりも先に遭遇してしまったな」

ゴブリンと言えば、ファンタジー世界ではお馴染みの緑色の身体をした醜悪なモンスターだが、ホブゴブリンはその亜種。しかし人間の子供くらいの大きさしかないゴブリンに対し、ホブゴブリンは身体が結構でかい。ちなみにゴブリンは危険度F（ただし単体）で、ホブゴブリンは危険度Dだ。

ホブゴブリンは手に棍棒のようなものを持って躍り掛かってきた。

裏拳一発。

ホブゴブリンは吹き飛んで壁に叩き付けられると、灰になって消滅してしまった。

どうやらこのダンジョン内のモンスターは、倒すと灰になってしまっらしい。

『大賢者オーエンが作り出した偽物だからです』

「へえ。エグイ死体が残らないのは助かるな」

灰に交じって、赤い宝石のようなものが落ちていた。

モンスターを動かす核になっていた魔石である。

売ればお金になるらしいので、拾っておくことにした。

『ところでマスター。今さらなのですが』

「どうした？」

『なぜ全裸なのですか？』

「いやさ、一度、装備無しでダンジョンに挑んでみたかったんだよ」

『……だからと言って、下着まで脱ぐ必要がありますか？』

「ははっ、いいじゃねーか。誰も見てないんだし。ほら、ホブゴブリンだって全裸だろ？」

『……まさか、そこで知性の乏しい魔物を引き合いに出してくるとは思いませんでした。さすがですね、マスター』

「それほどでも」

『いえ褒めてません』

もし他の冒険者に遭遇したら 隠密・極 を使えば問題ないしな。



ちなみに服はすべて、無限収納 スキルによって生み出せる亜空間に入れておいた。魔石や他のドロップアイテムなんかも全部放り込んでいる。要領制限はないらしいし、非常に便利な能力である。それからしばらく魔物を瞬殺しつつ進んでいると、次の階へと繋がる階段へと辿り着いた。

気づけば十階まで到達していた。

ぶっちゃけここまで楽勝だった。

ホブゴブリン以外にも、オーガやトロール、リザードマンといったお馴染みのモンスターが沢山出てきたが、どれもパンチ一発で吹き飛んでいったもんな。

やがて俺はただっ広い部屋に辿りつく。

「おお、こいつがボスか」

どうやら十階ごとにボスが配置されているらしい。

十一階へと続く階段の手前に立ちはだかるのは、牛の頭と人型の身体を持つ巨大なモンスターだった。

ミノタウロス（ボス）

種族：ミノタウロス族

レベル：30

スキル： 怪力

身の丈は三メートルを軽く超えている。

バカでかい戦斧を手にして鼻息荒くこちらを睨み、今にも突進し  
てきそう。

なかなか強そうだ。

まあ結局ワンパンで倒したけどな。

ブモーツ、という雄叫びを上げながら猛進してきたミノちゃんの  
懷に飛び込み、拳を腹にぶち込む。

それでお終いだった。

壁まで吹っ飛んだ後、ミノちゃんは灰と化して散った。

「やべ。ボスキャラ瞬殺するのって快感だわ」

『9999のダメージです。相変わらずオーバーキルですね』

カルナ

レベルアップ： 21

22

レベルが上がったようだ。

ドロップアイテムのミノタウロスの角を回収すると、俺は十一階  
へと進んだ。

それから俺はガンガン塔を上っていった。

二十階のボス、キングマンティコアを蹴り一発で片付け。

三十階のボス、メタルゴーレムを手刀で一刀両断し。

四十階のボス、レッドグリフォンを上級魔法一撃で仕留めた。

途中、三回ほど冒険者のパーティに遭遇しかけ、慌てて気配を消して隠れたが（全裸だから）、三十階を過ぎるともはやモンスターしか見なくなった。

どうやらこのダンジョン、これまでの最高到達記録が三十四階らしい。

気づいたら超えてたっぽい。

となると、もう堂々と裸で闊歩することができるな！

『……今までも十分に堂々だったかと』

そして 俺は五十階のボス部屋へと辿り着く。

「あれ、先客がいるんだが……？」

巨大な三つ首の魔物 ケルベロスと、魔法使いっぽい格好をした一人の少女が交戦していたのだった。

## 第8話 エルフ少女を助けたのに逃げられた

五十階のボス部屋に辿り着くと、先客がボス ケルベロスと戦っていた。

魔歩使いっぽい格好をした少女だ。  
頭に被ったとんがり帽子から流れる、艶やかな金髪。  
そして、ピンと先端の尖った耳

エルフ、キターーーッ！

ティラ 21歳

種族：エルフ族

レベル：36

スキル： 雷魔法 火魔法 風魔法 弓技

生命：846 / 901

魔力：628 / 1132

筋力：274

物耐：265

器用：301

敏捷：298

魔耐：314

運：178

鑑定してみても、確かにエルフだ。  
見た目は十五、六といったところだが、年齢は21歳だった。

『エルフ族の寿命は人間の約三倍。200年弱と言われています』

そのエルフ少女へと三つの首が次々と襲いかかり、その華奢な体を噛み殺さんとしている。

しかし少女は素早いステップでそれらを回避。

同時に呪文を詠唱していたらしく、手にした杖の先端に魔法陣を展開させる。

強烈な雷撃が放たれ、ケルベロスの頭部の一つを焼いた。

『今は中級の雷魔法です。エルフは種族的に得意とされる風の魔法しか使えないケースが多いのですが、彼女は少々珍しいタイプのようです』

直撃はしたが、あの威力じゃ致命傷にはならないだろう。

少女もそれは分かっているのか、必死に距離を取りながら再び詠唱を開始する。

ていうか、魔法使いなのにあの身のこなし。

ステータスの高さもさることながら、かなり戦い慣れているようだ。

それでも三つの首が相手となると、ほとんど余裕がない。

しかも徐々に動きが鈍くなっていく。

息を荒くしているので、体力がキツイのだろう。

少女も何度も中級魔法をぶつけてはいるが、ケルベロスの生命力はなかなか減っていない。三つの頭部それぞれに生命力があつて、そのせいでダメージが分散されているしな。

「っー！」

ついに限界が来たのか、少女がよろめいた。

ケルベロスはその隙を見逃さず、三つの首が我先にと争って少女に迫った。

「させるかよ」

縮地。

俺は一瞬で距離を詰めると、少女の前に躍り出た。

「なっ……」

息を呑む声を背後に聞きながら、俺は闘気を纏わせた拳を横薙ぎに振るった。

ズバシュッ!!

頭部右に9999のダメージ!

頭部中央に9999のダメージ!

頭部左に9999のダメージ!

爽快な斬撃音とともに、ケルベロスの三つの頭部が同時に破砕した。

カルナ

レベルアップ： 25 26

直後、肉の塊が灰と化し、一帯に灰色の霧が舞い上がる。

「うっぺ! 口に入っちゃった! ペペっ。……あ、大丈夫だった

「？」

俺は口内に入った灰を吐き出しつつ、振り返る。  
エルフの少女は地面にへたり込み、目を丸くして俺を見上げていた。

その頬が見る見るうちに紅潮していく。

俺はさながら、ピンチのときに颯爽と現れたヒーローだ。  
これはもしかして、いきなり惚れられちゃったかもしれないな？

「キヤアアアアアアアアッ！！」

「え？」

だが俺の甘い想像とは裏腹に、エルフ少女はいきなり甲高い悲鳴を轟かせたかと思うと、背を向けていきなり逃げ出した。

「ちよつ、え？ な、何で逃げるんだ！？ 待ってくれ！」

「い、嫌です！ 来ないでくださいッ！」

俺は慌てて後を追いつづけた。

しかし待つてくれと叫んでも、少女は全速力で俺から離れようとする。そのままボス部屋を飛び出してしまった。

ダンジョンの通路を走りながら、逃げる彼女に訴える。

「俺は怪しい奴じゃないって！」

「どこからどう見たって怪しいじゃないですか！？ いえ絶対に見たくないですけど！」

どういうことだ？

俺はこんなにもナイスガイだというのに。

『……マスター。彼女の反応はもっともなものかと』

ちょ、ナビ子まで？

「ふへへ、逃がさないよ？」

『その言い方はさらにヤバいです』

「ひいつ！？」

俺は全力で床を蹴り、一気に彼女を追い越した。

エルフ少女は慌てて足を止めると、顔を真っ青にしながら後ずさった。

「ま、まさかダンジョンのこんな奥深くで、変態に襲われるなんて

……」

「いや、俺は変態じゃないから。信じてくれ」

「信じる要素が皆無ですッ！　そ、そんな格好してッ……」

「格好……？　あッ」

少女のその言葉でハッとした。

そうだった！　俺は今、何も装備していないんだった！　下着も。

『……まさか、マスターの脳みそがここまで腐っていたとは思いませんでした』

いや、もっと早く教えてよね？



「悪い！ つい全裸だったこと忘れてた！」

「普通は忘れませんよね！？ そもそも何でダンジョンで裸になってるんですかッ！？」

「そういうプレイ（ゲーム的な意味で）」

「ああ、お父さん、お母さん、親不孝な娘を許してください……。私は今から最悪の変態の慰み者にされるようです……」

「ちょ、泣かないでくれっ。すぐに隠すから！」

俺は両手で股間を包み込んだ。

「これで安心だろ？」

「どこがですかッ！？ 早く服を着てくださいッ！」

俺は服を着た。

しかしエルフの少女は一向に警戒心を解いてくれない。

『当然かと』

それにしても、見たところ彼女は一人のようだ。

まさかこんな上階まで単独で上ってきたのだろうか？

「もしかしてここまでソロで来たのか？ 今までの最高到達記録が三十四階なのに、信じられないな」

「五十階のボスを一撃で倒したあなたの方が信じられませんかよっ」

少女が即座に言い返してきた。

「今までも全部一撃だったぞ」

「な……一体、何者ですか、あなたは……？ ……そもそも武器も持たずにこんな上階まで単独で来るなんて、ただの変態ではなさそうですね……」

「ただの変態ではなく最強の変態です。性質が悪いにもほどがあるかと」

少女が驚愕し、ナビ子が毒を吐く。

確かに、全ステータスがリミットブレイクした変態ってやべえな。って、誰が変態やねん！

「マスターを変態と呼ばずして誰をそう呼べと？」

失敬な。俺はむしろ紳士だろ。

「そうですね。マスターは紳士（笑）ですね」

（笑）って付けるな。

「そうですね。マスターは紳士（全裸）ですね」

果たしてこれほど怪しい紳士がいるだろうか？

それにしても、さすがはエルフ。

物凄い美少女だ。

夜空に輝く星を流したかのような金髪に、空色の瞳。怖ろしく端正な顔立ちに、白磁のような肌。

そして、種族の気高さを表すかのように、つんと尖がった耳。

「よかつたら、ちょっとだけ耳に触らせてくれないか？」

「ダメです」

一蹴された。

くそ、エルフの耳に触るのが夢だったのに！

『エルフの耳は敏感です。他人に触らせるようなことはめったにありません。ましてや、マスターのような変態であればなおさらかと』

マジかよ。

だが難しいと言われれば、かえってやってみたくするのが人の性というもの。

「そう言わずにさ。ちょっとだけでいいから」

「ダメです」

「先っちょだけ、先っちょだけ」

「ひ、卑猥な言い方しないでくださいっ」

顔が赤くなった。かわいい。

『……やはりマスターはド変態ですね』

「そ、そんなことより、あなたもこのダンジョンの攻略を？」

「ああ。挑んだのは初めてだけどな」

「それでいきなりここまで？ ……ま、まあ、先ほどの強さを見れば納得もできますが……」

そこで少女はぺこりと頭を下げてきた。

「とにかく先ほどは助かりました。たとえ変態とは言え、助けていただいたことは事実ですので、お礼を言わせてください。ありがとうございます」

律儀にそう礼を述べてから、少女は「それでは」と立ち去ろうとする。

俺はそんな彼女に提案した。

「せっかくだし、一緒に最上階まで行こうぜ」  
「遠慮します」

またあっさり断られちゃったよ。  
だが何を思ったか、少女は足を止めると、

「……と、言いたいところですが、私には絶対にこのダンジョンを攻略しなければならぬ理由があります。ですが今の私の實力では、この階が限界。あなたのような実力者の助力は願ってもないところです。願ってもないのですが……」

ああ、本当に変態でさえなければ……と物凄く葛藤した様子で咳くエルフ少女。

それからしばらくうんうんと悩んだ後、彼女は決心したように、

「私はティラ。……もしよろしければ、しばらくパーティを組んでいただけませんか？」

「もちろん！ 初めての共同作業だな！」

「……やっぱり今のはなかったことに」

「うそうそ！ 冗談だから！」

俺は慌てて発言を取り消して、こちらも名乗った。

「ちなみに俺はカルナ。よろしくな」

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

こうしてティラが仲間になった。

「じゃあ、お近づきのしるしに耳を」

「ダメです」

## 第9話 ハイテンションエルフ

俺はエルフの少女、ティラとともに複雑なダンジョンを進んでいた。

途中で骸骨騎士が剣をドロップしたので、俺はそれを腰に下げている。装備無しでの攻略は失敗に終わったし、ここからは剣を使って戦おう。

「私、以前にも四十階まで一人で上ってきたことがあるんです。ですが、あのときはボスを倒せなくて……。それで再挑戦した今回は、四十階のボスにはどうにかリベンジできたのですが、今度は五十階のボスに苦戦してしまい……」

どうやら彼女は、これまでも幾度もこのダンジョンにチャレンジしてきたらしい。

「そこを俺が助けたってことか」

「……そうですね。もっとも、助けがなくても倒せていたとは思いますが」

「いやいや、明らかにヤバかったよな？」

「そ、そんなことはありません。呪文の詠唱は終わりかかってましたし……」

負けず嫌いな子なんだろう。

……某女騎士さんと似てるな。

「ちなみにさ、だったら何で最高到達記録が三十四階ってことにな

ってるんだ？」

「私は冒険者ではないですし、どこにも報告してませんので。なので公式記録では、アルサーラ王国の姫騎士が到達した三十四階ということになっているのだと思います」

「あいつだったのかよ！」

どうやら記録保持者はエレンだったようだ。

「お知り合いですか？」

「一応、ちよつとだけな」

「本当は五十階まで行く予定だったにもかかわらず、自らトラップに引っ掛かっていくせいで、三十四層で食糧が尽きて断念したと聞いてますが……」

ああ、あいつ確かにトラップにかかりそうだな。警戒心とか薄そうだし。

「てか、剣士ならともかく、魔法使いのソロでよくここまで来たよな」

「森に棲むエルフは普段、狩りをして生きていますので。魔法使いとは言え、身体能力にも自信があるんです」

「へえ」

「ところでカルナさんは剣士だったんですね？ ……なのになぜ素手だったのか理解に苦しみますが……いえ、服すら着ていなかったのですね。それ以前の問題ですか……。……それはともかく、前衛をお任せしてもいいですか？」

「ああ、もちろん」

本当は魔法も使えるんだが。

まあせっかくテイラがいるんだし、魔法は彼女に任せよう。

それから俺たちは六十階、七十階と、順調に踏破。  
そしてついに

「食糧が尽きました」

「やべえじゃん」

「って、カルナさんのせいでしょうっ？ 私は十分な量を持ってきたのに、あなたに分けてあげたせいで無くなってしまったんですから！ そもそも何でダンジョンに潜るのに、何の食糧も持ってきてないんですかつ」

「いやあ、夕方までには帰れるかなって」

「バカなんですか？ 遠足じゃないんですよ？」

「怒った顔もかわいいなあ」

女の子に責められるとちよつと興奮しちゃうよね。

『DSの上にDMですか。マスターの性癖は留まるところを知りませんね。変態・極 スキルでも保有しておられるのかと疑いたくなります』

ぶっちゃけ、ダンジョン攻略にこんなに時間がかかるとは思ってたかったんだよなあ。



それに、食事をとらないと徐々に生命力が減って行くのだが、俺は9999だからな。

加えて 自然治癒・極 があるし、減ってもすぐに回復する。結果、食べなくても生きて行けるらしい。

食事をとらなくても生存していけるって、この世界の物理法則は一体どうなっているのやら。

え？　なのに何でティラの食糧を分けてもらったかって？  
美味そうだったから！

けど、このままではティラが空腹で死んでしまふ。それはとても困る。

「どうするんですか……これでは最上階まで行けませんよ。それどころか、今から引き返すとしても果たして体力が持つかどうか……」  
「仕方がない。最終手段を使うか」  
「最終手段……ですか？」

そして、一分後。

「何でこんなことになってるんですかあああっ？」

ティラの悲鳴がダンジョンに轟いていた。

最終手段を発動した俺は、ティラと合体していた。

……正確に言うと、彼女を背中に負ぶっていた。

「……って、何で私、背中に乗せられているんですかつ？」

「このまま俺が全力で走る。そうすれば最上階まで一時間もかからないらしい」

『はい。マスターの走力、持久力であれば十分に可能です』

俺には 身体強化・極 で強化された身体能力がある。

しかもナビ子さんのお陰で、途中で迷うことはない。最上階までは最短距離だ。

「は、走るって、どれだけ距離があると思ってるんですつ」

「体力には自信があるんだ。それにティラは軽いしな。あと柔らかい」

「やわつ……お、下ろしてくださいっ」

「大丈夫大丈夫」

「……わ、私、ここ数日、お風呂入ってないですし……たぶん、匂いとかも……」

「むしろ大歓迎だッ！」

「この人、やつぱり変態でした      ツ！？    い、一刻も早く下ろしてくださいッ！」

「だが断る」

俺はティラの太腿を腕でがっちりホールドした。

バタバタ暴れてくるが、逃さない。逃してなるものか！

ていうか、全然変な匂いしないけどな。

くんくん、すーはーすーはー。うん、むしろいいにおい。

「ちょ、嗅がないでくださいよっ！ ひゃっ？」

俺はクラウチングスタートの体勢を取った。

よーい、どん！

一気に加速。

「きゃああああ！？」

悲鳴を上げるティラ。

振り落されかねないと思ったのか、俺の首に腕を回し、思いっきり密着してくる。

お陰で俺の背中に、彼女の胸の感触が……あんまりないな。残念。どうやらティラは貧乳らしい。

ティラ

身長154センチ

体重43キロ

B65 W54 H66

あー、Aカップですね……。

「……今、何か失礼なこと考えてませんか？」

首筋にジトつとした視線を感じた。この子、エスパーかな。

「それより、前方にモンスターだ。突っ込むぞ」

「突っ込むって……ちょ、本気ですかっ？」

「俺はいつだって半分くらいは本気だ」

「それかなり適当な方ですよね!？」

「ティラは魔法で援護してくれ」

「ああもう、分かりましたよっ」

前方に現れた一つ目の巨人　サイクロプスの集団へ、俺は真つ向から突撃していく。

ティラが中級魔法を唱えた。

凍てつく冷気がサイクロプスたちを襲い、その身体を凍らせて動きを鈍らせる。

「ナイス、ティラララ!!」

「変な呼び方しなでくださいっ」

俺はティラを背負ったまま、サイクロプスたちの間を駆け抜けた。何体かは邪魔だったので拳で殴り飛ばしつつ、強引に突破する。

次々と襲いくるモンスターたち。

今までならまともに相手をしていたが、ほとんど無視して走り抜けていく。

「一体、どんな体力してるんです……っ?」

「ティラが背中にくれるだけで、幾らでもエネルギーが湧いてくるんだよ。たぶん、愛の力ってやつ?」

「なに馬鹿なこと言ってるんですか!」

後頭部をぽかぽか殴られた。

気づけばあっという間に次階に続く階段。その階段も一気に駆け上がり、次の階へ。

そしてまたモンスターをシカトしつつ、階段を目指す。

今までのペースが嘘のように、どんどん攻略が進んでいく。あっさりと八十階のボスも粉碎してやった。

九十階を目前にした頃、ふと俺は異常に気が付いた。

「ティラ、大丈夫か？ …… ティラ？」

最初は俺が飛んだりしゃがんだり曲がったりする度に「ひい」とか「きゃ」とか言っていた彼女が、いつの間にか無言になっていたのだ。

「ふふっ」

「ティラ？ どうし」

「あはっ …… あははははっ！」

この子、いきなり大声で笑い出したんですけど！？

もしかして恐怖でおかしくなったのか。

やべえ、もうちょっと速度を落とすべきだったか……。

『マスターが変態なのが悪いかと』

いや変態は関係ないよね？

「はははははっ！」

「あの……ティラさん……？ えっと……」

「ほんつとに、出鱈目な人ですね、あなたはっ！」

それからティラは捲し立てるように叫んだ。

「こんなに走り続けているのにまったく疲れてないし、モンスターの大量に馬鹿みたいに突っ込んでいくし、ボスはあっさり瞬殺するし！ 出鱈目にもほどがありますよ！ 下手なモンスターなんかよりも、よっぽどモンスターです！ お陰で常識的な考えばかりしていた自分が、何だか馬鹿らしく思えてきました！」

これは褒められているのか？

それとも貶されているのか？

「このまま百階まで行っちゃいましょう！ そしてラスボスも瞬殺です！」

「あ、ああ」

「なんですかその曖昧な返事は！ ほら、もっと速度上げてください！ あなたならできるでしょう！？ ゴーゴーっ！ あははははっ！」

ティラがおかしくなっ  
てしまっ  
た！

あ、けど。

さっきはにべもなく拒否されたが、今のテンションなら触らせてもらえるかもしれないぞ！

「ティラ」

「なんですっ？」

俺は意を決し、言った。

「ちょっとおっぱい触らせてくれない？」

「何でさっきよりハードル上がってるんですか!？」

「先っちょだけ、先っちょだけ」

「余計にダメですから!」

駄目だったか……。

『むしろなぜ可能だと判断されたのか、理解に苦しみます』

そんなこんなで、俺たちはついに前人未到の最上階へと辿り着いたのだった。

## 第10話 ラスボス（よわい）

百階へと続く階段の前で、俺たちはいったん立ち止まった。

「いよいよですね」

「そうだな」

ついに次が最上階だ。否が応でも緊張が高まる。

「……あの、すいませんでした。柄にもなく、テンションが上がってしまつて……」

急におずおずとティラが謝罪してきた。

「いいよ。そんなティラもかわいかったし」

「……もつつ、やめてください。そうやって、私をからかうのは」

本当のことを言ってるんだけどなあ。

「さて、泣いても笑っても最上階だ。行くぞ」

俺は気合を入れた。

「あ。その前に下ろしてください」

「頑張ろっぜ、ティラ」

頼れる仲間に関心をかけることで、さらに闘志を湧き立たせる。



「下ろしてください」

「さあて、最後の戦いだ！」

拳を握り上げ、えいえい、おー。

「絶対聞こえてますよね！？ 下ろしてくださいって！ 人に負<sub>ぶ</sub>われたままラスボス戦とか、恥ずかしいじゃないですか！」

ティラの悲鳴が響き渡る。

彼女はまだ、俺の背に負<sub>ぶ</sub>われたままだった。

「大丈夫、誰も見てないから」

「私の矜持的に嫌なんですよ」

「残念だけど、俺はもうティラと密着してないと生きられない身体にされてしまったんだ」

「人聞きの悪いこと言わないでくださいっ！？」

『マスター、はつきり申し上げると非常に気持ち悪いです』

ナビ子さんは相変わらず辛辣な毒を吐いてきますね。

「あと、ティラの吐息が首筋にかかってハアハア」

「ただの変態じゃないですか！？ って、お尻掴んで降りるのを妨害しないでください！」

「お尻揉まれて興奮するティラたんハアハア」

「興奮してません！」

「イテツ、ちょ、髪の毛引つ張らないでっ、禿げる！」

「全部抜いて禿げ頭にしますよ！？」

「そうなる前に、いざ突撃っ！」

「ひゃっ」

俺は階段を駆け上がった。

ティラの脱毛作戦に耐えつつ、ようやく百階層に到達する。

そこには広大な空間が広がっていた。

そしてその中央に、全長五、六メートルはあろうかという巨大な生き物が。

レッドドラゴン（ボス）

種族：赤竜族

レベル：60

スキル： 炎の息      咆哮

「レッドドラゴンっ！？　どうやら、あれがこのダンジョンのラスボスのようですね……。……っ、ま、マズイですっ、火の息が来ます！　レッドドラゴンが吐く高熱の炎は、真面に浴びたら骨も残りません！　早く逃げてくださいっ……。……」

「よし、正面突破ああっ！」

「人の話聞いてました！？」

レッドドラゴンの喉首がボコリと膨らんだかと思うと、赤々と燃える火炎が口腔から吐き出された。

次の瞬間、俺は思いきり地面を蹴った。

石造りの床が陥没し、石片が後方へ四散する。

ゴオオオッ、とすぐ足元を凄まじい炎が擦過。ギリギリで躲したのだ。ティラが耳元でキヤーと叫んでいる。

俺は跳躍の勢いそのままにドラゴンの頭上へ。

「おおおおおっ！」

大上段に剣を構え、レッドドラゴン目がけて思いきり振り下ろした。

パキイインッ！

「つて、剣が折れたっ？」

「レッドドラゴンの鱗は鋼鉄よりも硬いんですっ！ カルナさん、予備の剣……は持っていないですよね……。……くっ……。……さすがのカルナさんでも、徒手空拳では……。ここはいったん、退いて……」

「よし、だったら拳だ！」

「だから人の話聞いてます！？」

俺は剣が駄目なら拳があるじゃないとばかりに、今度はレッドドラゴンへ拳を叩き込む。

ズゴオンッ！！！

凄まじい殴打音が轟き、レッドドラゴンの巨体が勢いよく地面に叩き付けられる。

俺が殴った部分の鱗が大きく凹み、中から血がブシュウウツと噴き出してきた。

「レッドドラゴンの鱗を拳で粉碎した

ッ！？」

ティラが驚愕の叫びを上げる。

「あ、あなた剣士じゃないんですかっ!？」

「剣士たるもの、時には拳で語ることも必要だからな」

「全然まったく意味が分からないです!」

「理屈じゃない。心で感じるんだ。大丈夫、長年連れ添った俺とティラは、もう完全に気持ちを通じ合っているから」

「私たちまだ出会ったばかりですよね!？」

まあ悪い剣ではなかったが、ぶっちゃけ俺の拳の方が攻撃力が高いんだよな。

『5473のダメージ。まだ生命力を刈り切れていません。ご注意ください』

「オアアアアアアアアアアッ!」

「一撃じゃ仕留められなかったか。タフだな」

レッドドラゴンが怒りの形相で躍りかかってきた。  
だがそのとき、ティラが上級魔法を発動。  
雷撃がレッドドラゴンを襲う。

「ギアアアアアッ」

全身を焼かれ、レッドドラゴンが絶叫を轟かせる。

『873のダメージです』

レッドドラゴンの鱗は魔法にも強い耐性を持つらしいが、俺が鱗を破ったこともあり、体内にまで電流が流れたのだらう。

「上級魔法、使えたんだな」

「はい。詠唱に少し時間はかかりますが、一応。先ほどカルナさんが剣を破壊されたときに、これは上級魔法を使わないと倒せないと思います、詠唱を始めていたのです」

「詠唱しながら、よくあんなにバンバンとツツコミ入れられたよな……」

随分と器用だった。

レッドドラゴンは息絶えたようで、灰と化していく。

「ふう。私も少しは役に立てて良かったです」

「むしろ、完全にいいとこ持ってたな」

てか、意外と弱かった。

あれでラスボスか。呆気ない。

「さて。何とかって人が遺した研究資料を探すか」

と、そのときだった。

突然、ティラが俺の背中にギュッと抱き付いてきた。

「……そうか。ついにティラも俺のことを受け入れて」

「ち、違いますっ。それより、あ、あそこにつ……」

ティラが震える声で指差したその方角を見遣る。

そこにいたのは老人だった。

だが空中に浮かんでいる。最初は魔法だろうかと思ったが、よく見ると老人には足がなかった。いやそれどころか、身体が薄らと透けている。

まさか、幽霊？

『はい。死者の怨念によって生み出されるモンスター、ゴーストです』

ナビ子さんが教えてくれる。

「……何者だ、あんた？」

俺の誰何に、幽霊が重々しく口を開いた。

『わしはオーエンじゃ』

ダンジョン作った本人が登場したんですけど。

## 第11話 真ラスボス（やばい）

レッドドラゴンを倒した俺たちの前に現れたのは、老人の幽霊だった。

身体がめっちゃ透けている。

ボロボロの布を身体に纏っていて、空中にふわふわと浮かんでいた。

「何者だ？」

と思わず訊いてみたけど、まあ答えてくれないよな。幽霊だし。  
こんなときは、鑑定・極で

『わしはオーエンじゃ』

「普通に答えてくれたぞ！？……けど、誰？ 応援？」

「だ、誰じゃないですよ！ オーエンと言えば、この塔を作った大賢者ですよ！ けど、まさか生きていたのですか……っ？」

「いやどう見ても死んでるだろ。幽霊だし」

「そ、そうですね……って、そんな冷静に突っ込まないでください  
っ」

言い合う俺たちを見下ろしながら、幽霊が唇を動かす。

『わしはオーエンじゃ』

「うん、それさっきも聞いた」

『わしの研究を邪魔する者は、何人たりとも排除する！』

直後、虚空に魔法陣が出現したかと思うと、凄まじい風の渦が発生し、こちら目がけて飛んできた。

「上級魔法っ！？」

「よつと」

俺はティラを背負ったまま地面を蹴り、襲ってくる竜巻を回避した。だが大賢者の成れの果ては、間髪入れず再び上級魔法を放ってくる。

「上級魔法を連射するなんてっ……それに、この詠唱速度……っ」

「ティラ、こつちも上級魔法だ」

「もうはじめてますっ！」

ティラが対抗して上級魔法を発動。相手と同じ魔法      トルネー  
ドだ。

巨大な風の渦を射出すると当時、向こつもまた放ってきた。

二つの豪風が激突する

「今だっ」

俺は右の拳に闘気を収束しつつ、二つの上級魔法がせめぎ合う地点目がけて突っ込んでいく。

「必殺っ                      獣    会心撃ッ！！」

豪快に拳を突き出し、闘気による衝撃波を前方に撃ち出した。それがティラの風を後押しし、敵の魔法を撃ち破った。

『っー』



目を見開く大賢者。

直後、鬨気と風の渦が彼を呑み込んだ。

煙が四散するかのようになり、大賢者の身体が弾け飛ぶ。

「やった、んですか……？」

「いや、生存フラグが立ったからまだだ」

「フラグって何ですか……？」

直後、辺りに散らばった身体が一か所に集まってくる。

何事も無かったかのように、大賢者の幽霊は元の姿を取り戻していた。

『無駄じゃ。幽霊と化したわしには攻撃が効かぬ』

『はい。ダメージは0です』

オーエン

種族：ゴースト族

レベル：58

生命：0 / 0

ていうか、そもそも生命力が最初からゼロじゃねーか。

これでは完全に不死身だ。

どうやって倒せばいいんだ、ナビ子さん？

『マスターであれば、彼を倒す方法は幾らでもあります。例えば

』

「ん？ ちょっと待て。この爺さん、なんか面白そうなものを隠し

ているようだぞ」

俺は 鑑定・極 を使い、詳しく奴のことを調べてみた。  
どうやらこいつ、とある研究を完成させたいがために自分に死霊  
化の魔法をかけたっぽい。

「へえ。随分と面白い研究してるじゃねーか」

「な、何の話ですか？ それより攻撃が効かないのでは倒しよう  
がないですッ！ ここはいったん退いて」

「突撃いいいッ！」

「またですか！？ 何となくそんな予想は付いてましたけどッ！」

俺は真っ直ぐ大賢者に突っ込んでいく。

だがそのまま大賢者の身体をすり抜けてしまった。

「ちよっ、今、身体の中身が見えませんでした！？ 物凄くグロテ  
スクだったんですけど！？」

うん、見えたね。俺もちよつとびつくりした。

『ゴーストの身体を構成しているのはアストラル体と呼ばれるエネ  
ルギー体ですが、高レベルのゴーストのアストラル体は生前の肉体  
を精巧に再現しているのです』

「なんて無駄なこだわりだよ」

大賢者の体内を通り抜けた俺は、そのまま部屋の隅へと走った。  
元より俺の目的は大賢者を攻撃することではない。  
そこにあつた扉を豪快に蹴り破る。

『そこはわしの研究室っ！ 立ち入りは許さぬ！』

大賢者が慌てて追い駆けてきた。  
俺は背後から放たれてくる魔法を躲しつつ、探知・極で目的地へ直行する。

そして、その部屋へと辿り着いた。

「……あれだ！ あれこそが、古の大賢者オーエンが、自分に死霊化の禁呪を使つてでも完成させたかったものだ」

「お、女の子、ですか……？」

部屋の中央。

病院の手術台のようなテーブルの上に寝かされていたのは、十歳にも満たないくらいの幼い女の子だった。

「いや、彼女は魔導人形だ」  
マシンドール

「魔導人形……？」

「それもほぼ完璧に人間を再現させた、超高性能の」

「そ、そんなことが可能なのですか……いえ、大賢者なら……。ですが、なぜあんな幼い女の子を？」

大賢者のすることだ。何か遠望な目的でもあるに違いないと思つたのか、ティナは恐る恐る訊いてくる。

俺は首を振つた。

そして真実を告げた。

「趣味だ」

「はい？」

「あの幽霊じーさんの趣味だ」

『みいゝたゝな』

背後から、幽霊らしいおどろおどろしい声が聞こえてきた。  
追い付かれてしまったようだ。

しかし俺は躊躇することなく、彼の所業を高らかに叫ぶ。

「大賢者オーエンは、別に魔導人形を作りたかったわけじゃない！  
自分好みの幼女を作りたかったんだ！」

「いやいやいや、そ、そんなことないですよ！？」

俺の背中、ティラがぶんぶんと首を振りながら否定する。

「だって、仮にも伝説の大賢者ですよ！？ あの女の子だって、たぶん、娘さんとか、お孫さんとかですって！ きつと死別が悲しくて、同じ姿の人形を作ろうとしたんですよ！」

まあ普通ならそう思うだろうな。

だが大賢者の幽霊は、彼女の希望を打ち砕くかのように声高らかに叫んだ。

「娘でも孫でもない！ その子のモデルは、かつて近所に住んでいた女の子、ミレーユちゃんじゃ！」

「本人があつさり認めた ツ！？」

「かわいかった……遠くから見ていただけで幸せじゃったというのに……あの忌まわしき母親め！ 年増の分際で、わしを不審者扱いおつてっ……」

ゴゴゴゴ、と凄まじい負のオーラを発散させる大賢者。

「わ、私の中の大賢者像が、がらがらと凄まじい速度で崩れていっ

てるんですけど……」

同じ魔術師として、大賢者のことを少なからず尊敬していたらしいティラは、愕然と呻いている。

「残念だが、ティナ。はつきり言おう。大賢者オーエンはロリコンだ！」

「嫌ですっ……そんなの知りたくなかったっ！」

『左様、わしはロリコンじゃ！　しかし、それが何だと言うのじゃ！　ロリコンで何が悪い！　小さい女の子が好きで何が悪いんじゃああああっ！』

ティラの想いも虚しく、大賢者は力強く拳を握りしめ、己の欲望を曝け出す。

それから不意に糸が切れたように肩を落とし、

『じゃが残酷なことに、わしがどんなに頑張っても、わしに振り向いてくれる幼女はおらんかった……』

「そりやそうですよ！」

『だからわしは、自分の手で作ることにしたのだ！　わしだけの、わし好みの、わしにしか懐くことのない完璧な幼女を！』

「衛兵さん！　この人です！」

『しかし無念なことに、その前に寿命が来てしまったのじゃ！』

いつしか大賢者は涙を溢れさせていた。

「だから幽霊と化してまで……くっ、その情熱っ、俺にも理解できる！」

「理解しちゃうんですか！？」

『変態同士、まさに同類と申し上げて構わないかと』

大賢者の虚ろな瞳が俺の方を向いた。

『お主……わしの苦しみを分かってくれるのか……？』

「ああ。俺も昔、好きな女の子を模したラブドールを作ろうとしたことがあるからな」

だが母親に見つかって捨てられてしまったのだ。

あのときは無念だったな……。三日は泣いた。

『おお、心の友よ！』

大賢者がジャ アンみたいなことを言いながら近づいてくる。

俺は彼と握手を交わした。すり抜けたけど。

「そつだ。俺たちはもう友人だ！」

「……」

ティラが物凄く白い目をしている気がするが、気にしない。

「そんな友のために力を貸そう。この魔導人形、俺が完成させてやる」

『っ……お主に、できるのか？』

「任せておけ」

綻るような顔で訊いてくる大賢者 いや、友に、俺は力強く頷いた。

なにせ、俺には 鑑定・極 というスキルがある。

対象に接触すればその物体の詳細な情報を知ることが可能なため、

どこが問題なのか分かるだろう。

さらに俺は 製作・極 スキルも持っている。自らの手で一から魔導人形を作り出すこともできるはずだ。

「さあ、幼女を完成させようじゃないか、友よ！」

俺は高らかに宣言した。

『おおおおっ』

歓喜の声を上げる大賢者。

そのとき背後から、今までにないくらい冷ややかな声が聞こえてきた。

「その前に下ろしてください。早く。この変態」

## 第12話 既成事実の作り方

幼女型の魔導人形が瞼を開けた。

そして、台の上でゆっくりと身体を起こす。その動作は人形とは思えないくらい滑らかで自然なものだった。

『お、おおおっ！ う、動いた！ ついに、ついに動いたあああっ！』

幽霊と化した古の大賢者が感動の叫び声を上げた。

「……？」

きよとん、と小首を傾げる幼女。

ツインテールにまとめられた青みのある黒髪が、傾けられた頭部に合せてさらりと流れる。

ちなみにツインテールは大賢者の趣味だ。

『うおおおおおおおおおっ！ きゃわいいいいいいっ！ なんと愛くるしい仕草なんじゃあああああっ！』

滂沱のごとく涙を流し、黄色い声を轟かせる大賢者。端的に言ってやばい。

そんな彼を、幼女は不思議そうに見つめている。

『そうじゃ、ミレーユ！ わしがお前の主人じゃ！ さあ、わしの胸に飛び込んでおいで！』



ちなみに今、ティラはゴミでも見るような目で大賢者を見ている。もはや魔術の大先輩に対する尊敬の念など、欠片も感じられない。

そのときだった。

突然、幼女の視線が大賢者から外れた。

そして彼女は満面の笑みを浮かべ、

「パパあゝっ」

という言葉とともに抱き付いた 俺に。

「あゝ、よしよし、俺がパパでちゅよ」  
「んふう」

俺が頭を撫で撫でしてやると、幼女は気持ちよさそうに身を振る。しかし撫でているこっちも気持ちいい。艶やかで柔らかなこの髪質、まさに一級品だな。

幼女は不思議そうな顔をして、呆然としている大賢者を指差した。

「ねえ、パパ、あのおじいちゃん、だれ？　なんで、ないてるの？」  
「な……ん、だ、と……？」

愕然と目を見開く大賢者。

「たぶん何か悲しいことがあったんだろうな。それにしても優しいなあ、フィリアは」

「フィリア、えらい？」

「ああ、偉いぞ、フィリア」

『ふ、フィリア、じゃと……？　ま、まさか、貴様っ……』

「ちよっと俺好みにイジってみましたけど、何か？」

そう。

俺は魔導人形を完成させるとともに、その知能システムを改変しておいたのだ！

「ちょ、何やってるんですか       ツ!？」

今までで一番大きなツツコミを入れてくるティラ。

「ごめんな、爺さん。……たぶん、幽霊のあんたの娘になるより、俺の娘になった方がこの子の幸せのためだ」

『マスターは変態の上にロリコンでしたか。早く収監された方が世界のためでは?』

いやいや、ナビ子さんや。

俺は別にロリコンじゃないからね。

本当にこの子のことを想っての行動だからね？

『き、き、貴様ああっ！ 謀ったなあああっ!』

大賢者が怒声を轟かせる。

ビリビリと周囲の空気が震えた。

しかし俺はそれに動じることなく、はつきりと言ってやった。

「あんたはもう昇天すべきなんだよ。禁呪がどれほどヤバいものか、あんたほどの魔術師なら理解しているはずだ」

『こ、小僧のくせに、わしに説教をするかッ!？』

「ああ。こんなことのために禁呪を使っちゃまう耄碌爺さんには、馬の耳から念仏かもしれないけどな」

『貴様アツ！ 殺してやるッ！ 殺してやるウウウッ!』

「そうはいくか」

俺は素早く詠唱し、一瞬で魔法陣を展開する。

『なっ！ こ、これは ツ！？』

「見ての通り、浄化魔法だ」

俺は 死霊術・極 というスキルを有している。これは名前の通り、死者を扱う魔術であるが、その中には悪霊などを浄化する魔法も含まれていた。

『ま、待てっ、わしはまだ、消えたくは 』

「じゃあな、爺さん」

『 おのれエエエツ！ 』

浄化の光に包まれ、古の大賢者の身体が消えていく。  
後には何も残らなかった。  
完全に消滅したのだ。

「お、終わった…… んですね？」

ティラが恐る恐る訊いてくる。

「ああ」

「それにしても、カルナさん…… あなた、浄化魔法なんて使えたんですか……？」

「うん」

「だったら最初から使ってくださいよっ」

「いやあ、大賢者さんの怒る顔を見たくて」

「しかも物凄く酷い理由だった！？」

「最後に短い間だが夢を見させてやったんだ。あいつも本望だろうよ」

「その夢を思いつ切りぶち壊しましたよね!？」

ティラと仲良く言い合っていると、幼女型の魔導人形      フィリア  
アがくいくいと遠慮がちに俺の服の袖を引っ張ってきた。

「パパ……」

それからティラと俺の顔を交互に見てくる。

「フィリア。あの人がお前のママだぞ」

「ママ？ ……ママなの？」

「そうだ。フィリアのママだ」

「ママあっ!」

フィリアが嬉しそうに破顔し、ティラに抱き付いた。

「ちょ、何で私が母親になってるんですか!？」

「ママ……フィリアの、ママじゃないの……?」

瞳を潤ませ、フィリアがティラを見上げている。

「うつ……そ、そんな顔で見られたら……」

「フィリア、ママいないの……?」

「うつん、そんなことないですよ、フィリアちゃん。私がママですよ」

「わあっ! ママ! ママ!」

ティラはあっさりと陥落した。

さすがは天使の涙。子供は強い。

「これで俺とティラは晴れて夫婦だな！」

「既成事実作られた　　ッ！？」

愕然と叫ぶ俺の嫁。

ふっふっふ。

実は大賢者の幽霊を倒すための作戦を練ったとき、俺はすでにこの展開まで見越していたのだ！

『マスター、　思考加速・極　を使われましたね？』

その通り。

『マスター＋　思考加速・極　＝完全犯罪。……もはや世界の危機ですね』

何で俺が罪を犯す前提になってるんですかね？

見てろよ、俺の善人っぷりを。

俺はフィリアに優しく問いかける。

「フィリア、妹か弟が欲しくないか？」

「ほしい！」

無邪気に笑うフィリア。とてもかわいい。

「そうかー。欲しいかー。ママが作ってくれるって」

「なに言ってるんですか！？　作りませんよ！？」

「ママ、つくってくれないの……？」

しゅんとなるフィリア。

その反応を見て、ティラが「うつ」と怯む。

「こ、子供をそんなことに利用するなんてズルすぎます!」  
『……マスター、今のやり取りの一体どこに善の要素が?』

俺に向かって怒鳴ってから、ティラは深々と溜息を吐いた。

「はあ……何だかもう、叫び過ぎて疲れました……」

「確かに、突っ込みどころの多いラスボスだったからな」

「半分以上はあなたのせいなんですけど。その辺、自覚してます? 自覚してます? してませんよね?」

「ちょ、杖の先端で俺の鼻の穴を突くのやめて。それ、魔法を使うためのものだから。俺の鼻の穴をぐりぐりするためのものじゃないから」

だんだんティラの俺に対する遠慮がなくなってきた気がする。  
心の距離が近づいたってことかな!

『マスターは常に前向きですね。いえ決して褒め言葉ではなく』

と、ナビ子さんが俺を褒めてくれたそのときだった。『だから褒めてません』

コッココッコッ。

「ぎゃ」

いきなり凄まじい震動が起こり、ティラがよろめいた。  
フィリアがびっくりしたような顔をして、俺の足にしがみ付いてくる。

「何だ？」

地震か？ いや、この塔だけが揺れているのか？

俺は 鑑定・極 で調べてみた。

……って、マジかよ。

どうやらこの塔、崩れるらしい。

塔を維持していた大賢者が昇天したせいだという。

「ティラ、すぐに脱出するぞ」

「っ！ ま、待ってください！」

「ティラ？」

「大賢者の研究記録を回収しないとっ！ それを手に入れるために、私はここまで来たんですから！」

血相を変え、ティラが部屋のあちこちに散らばっていた資料を掻き集めはじめる。

塔は今にも崩壊しそうだ。

それでもティラは必死に資料を集めていく。

「私はこれをエルフの里に持ち帰らなくてはいけないんです……っ  
！」

### 第13話 孝行娘

塔は今にも崩れそうだというのに、ティラは必死で大賢者が遺した研究資料を掻き集めていた。

「私はこれをエルフの里に持ち帰らなければいけないんです……っ！ カルナさんはフィリアちゃんと先に脱出してください！」  
「そうか。よし、分かった！」

地響きが轟く中、俺は頷きつつその場にしゃがみ込んだ。

「っ……カルナさん……？」

時間がない。

俺は床に手を振れた。鑑定・極を使い、すぐさまこの塔のことを調べる。接触することで、より詳しく解析することが可能なのだ。

……なるほど。

この塔は、それ自体が一つの巨大な魔導具のようだ。本来なら建築理論的に建っているはずのない構造をしているが、膨大な魔力によって維持されていたという。

だがその供給源であるオーエンが昇天したことで、崩れ始めてしまったのである。

しかもオーエンは大賢者の名に相応しく、ほぼ無限とも言える魔力を有していた。ロリコンだが。



彼だったからこそ、この塔を維持し続けることが可能だったのだ。  
だが

『マスターの無尽蔵の魔力は、大賢者に勝るとも劣りません』

魔力量上昇・極　：魔力値が＋９９９

魔力回復・極　：一秒ごとに魔力が９９９回復。

俺の持つチートスキルもまた、それを可能にする。

俺は魔力を解放した。

「な……なんて、濃密な魔力なんですか……」

俺の身体から溢れ出る凄まじい量の魔力を感じ取ったのか、ティ  
ラが思わずといった様子で手を止めた。

さらに　魔力操作・極　スキルを使い、その魔力を塔へと注入。  
魔力路を通じて膨大な魔力が循環していく。

『恐らくこれで崩壊は収まることでしょ』

ナビ子さんが言う通り、やがてゆっくりと揺れが収まっていった。

「ふう。どうにかなったみたいだな」

俺は大きく息を吐いた。

ずっと魔力を放出し続けているが、同時に回復し続けてもいるの  
で、永遠にカラになることはない。

「もう大丈夫だ。爺さんの研究資料、ゆっくり集めようぜ」

『大賢者の塔』がガラガラと崩れ落ちていく。  
もうもくと土煙が上がり、大地が揺れる。  
俺たちはその様子を離れた場所から見守っていた。

「……なんだか少し、勿体ない気がしますね」  
「まあな。なかなかの傑作ダンジョンだったしな。……結局、装備無しでの攻略はできなかったか」

さすがに俺がずっと魔力の供給をし続ける訳にもいかず、外に脱出（俺が転移魔法を使った）すると同時に供給を絶ったのだ。中にいた冒険者たちは、最初の揺れの際に危機を感じて逃げたらしく、あの塔の中には誰もいない。

「それに俺たちの出会いの場だ。思い出として残しておきたかったんだけどな」

「……二度と思い出したくないくらい酷い出会いでしたけど」

あれ、おかしいな？  
ティラがじつとりとした目で睨んできてるぞ？ 俺、何かしたっけ？

『あんなトラウマを植えつけておいて、なに惚けておられるのですか、マスター』

「そつか。お互い全裸で出会い頭にぶつかっちゃったんだっけ」  
「何で私まで変態にされてるんですか！？ 裸だったのはあなただけですよ！」

少女漫画でよくあるパターンだよな。

「パパ、パパ！」

「ん、どうした、フィリア？」

「おんぶ、おんぶ！」

「よしよし」

あの塔で生まれたフィリアだが、初めて意識を手にしたのはつい先ほどのことだ。

壊れていく塔を見ても、感慨などはないのだろう。

オーエンの爺さんにはちよつと気の毒だけだな。

「それにしても、何で黙ってたんですか。魔法も使えるってこと。浄化魔法だけじゃなくて」

「剣だけでも攻略できそうだったからな」

「……そうですか。まあ、今さらそれくらいじゃ驚きませんけど……」

ぶつぶつと呟くティラは、心なしか自信を喪失している様子。

問い詰められたので白状したが、やっぱり黙ってた方がよかったかもな。

超級や神級の魔法まで使えることは、さすがに言わないでおいしたが。

「……つまり、私なんかいなくてもよかったと……むしろ足手まとい……」

「そんなことないって。ティラの存在はすげえ重要だったよ」

「……本当ですか？」

「ツツコミ役として」

「その役目ダンジョン攻略に必要ないですよね!？」

ナイスツツコミ。

俺にはナビ子さんという隠れツツコミ役もいるんだけどね。

『マスターは存在そのものがボケですので、単独ではツツコミが追いつかないところでした』

ただしかなり辛辣である。

「それより、里に戻るんだろ？」

「あ、はい」

実は彼女の母親が、どんな優秀な治療師さえも匙を投げた、ある不治の病にかかっているのだという。

それを治す方法が、大賢者の遺した研究の中になれば見つかるかもしれない(あの爺さん、回復魔法にも長けてたそうだ)。

そう思い、危険を冒して単身でダンジョンに挑んでいたのだという。

何て健気でいい子なんだろうか。

感動のあまり抱き締めたくなる。

「ちょ、何ですいきなりっ？」

本当に抱き締めようとしたら避けられた。

「でも、本当に良いんですか、私が先で……? ギルドに持っていけば、カルナさんはすぐにでも大金持ちになれるのに。そもそも、

攻略できたのはほとんどカルナさんのお陰ですし」

「いいって」

「膨大な量なので、いつになるか分かりませんよ？」

「大丈夫大丈夫」

「……ありがとうございます」

ティラが嬉しそうに微笑む。

その笑顔を見られただけでも安いもんだと俺は思った。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

「それにしても、エルフの里か。すげえ楽しみだなあ。自然いっぱいだし、やっぱり樹の上とかに家があるんだよね？」

「そうですね。大森林は雨期になると地面が川のようになってしまうので、可能な限り高いところに家を  
って、えっ？」

ティラが訝しげに俺を見てくる。

「ん、どうした？」

「何で当たり前のように一緒に行こうとしてるんですっ？」

「え？ ダメなの？」

「だ、ダメじゃ……ないですけど………一応、お世話になりましたし……」

「俺ら夫婦だし」

「それ既成事実化させないでくださいって!!」

この世界って婚姻届とかないのかな？ エルフだとまた風習が違いそうだ。

俺はフィリアの柔らかい髪を撫で撫でしつつ、

「フィリアもママの家、行きたいよな？」

「いきたーい！」

「うう……だから子供を使うのはズルいですって……」

フィリアさんは無敵である。

まあ俺自身がエルフの里に行ってみたいというのもあるが、それよりも重要なのは、もちろんティラの母親の病気のことだ。

たとえ大賢者の研究資料に、現代にはない高度な回復魔法についての情報があったとしても、それを実際に発動できるかどうかは別問題である。

修得するにしても時間はかかるだろうし、それまでティラの母親の容態が持つかどうか分からない。

『マスターであれば、治せる可能性は極めて高いでしょう』

俺は 回復魔法・極 を持っているからな。

ティラの母親の病気を鑑定すれば、その原因も分かるだろう。

「はあ、分かりました……。一応、カルナさんには借りもありますし、仕方がないです。では一緒に行きましょう」

最後は頷いてくれたティラだが、彼女が及び腰になってしまふ気持ちも分かる。

「どうしても緊張してしまうものだよな。親に好きな男性を紹介するのって」

「やっぱり連れていくのやめましようかね？」

『マスター、そういうのを独り合点といいます』

## 第14話 住んでみたい場所ランキング一位・エルフの里の嫁の部屋

ティラが魔法の巻物を取り出した。

魔力を込めることにより、特定の魔法を発動することができるという魔導具だ。

「転移魔法の巻物です」

彼女は転移魔法を使うことができないため、ダンジョン内でもしものことがあったときに備えて持ってきていたのだという。

だが巻物は使い捨てで、しかも転移魔法用のものはかなり高価だそう。

まあ転移魔法の使い手は珍しいみたいだからな。

だから普段は移動のために消費するようなことはしないらしいが、

「ダンジョンを無事に攻略できましたので、これくらいの贅沢は許されるでしょう」

ちなみに俺なら転移魔法を使えるんだが、この魔法、行ったことのある場所にしか行けないんだよな。

たと言ったことがなくても、探知・極で詳細情報を得れば可能なのだが、有効範囲は半径三キロメートルという制限があった。エルフの里はもっと離れている。

ティラがおずおずと手を差し出してきた。

「……っ、繋いでないと、一緒に転移できませんし」

頬を少し赤くして、ティラはぼそぼそと言った。

俺はティラの手を両手で握ると、その甲に頬をすりすりさせた。

「何やってるんですか（怒）。あなただけ連れていきませんよ？」

杖で頭を叩かれた。

それからフィリアも含めて親子三人で仲良く手を繋ぐと、ティラが巻物を使った。

一瞬にして周囲の風景が変わる。

どこかの部屋の中だった。

ログハウスのような建物なのか、壁は樹木の幹や枝を使って作られていた。

家具などが少なくてもシンプルな室内だが、木の温もりが感じられて、どこかホッとする。

「ここは？」

「私の部屋です。……その、里にはあまり人族のことを良く思っていない人もいますので、転移先は家の中の方がいいかと」

というティラの説明を余所に、俺は近くにあったベッドに飛び込んでいた。

「ひゃっはーっ！ ティラさんのベッドだーっ！」

さらに俺は枕に顔を埋める。

「うおおおおおっ、ティラの匂いがするううっ！」

「ママのべっどー」



俺のマネをしてか、フィリアがすぐ隣にダイブしてきた。

「よし、フィリア。俺と一緒にママの匂いを堪能するぞ！」

「たんのう、するーっ」

「すーはーすーはー」

「すーは、すーは」

全身全霊でティラ成分を味わう俺とフィリア。

樂園とはここか。

ここだったのか！

ブチッ。

そのとき血管が切れるような音が聞こえてきた気がした。

視線を向けると、ティラが拳を握りしめ、ふるふると全身を震わせていた。

「……何を、やっているのですか……？」

その後、めちやくちや怒られた。

しかも俺だけ。

不公平だ！

『マスター、当然かと』

俺も幼女になりたいです。

『変装・極 を使えば可能です。見た目だけなら』

「マジか」

「す、っげえ……」

部屋の外に出た俺は、目の前の光景に息を呑んだ。  
信じられないほど巨大な木々が乱立する大森林が広がっていたのだ。

確か向こうの世界では、最も高い木が百メートルちよつとだった。  
だがこの森の木は、どれも余裕で二百メートルを超えている。  
さすが異世界だ。スケールが違う。

それに、本当に樹の枝の上に家が建っている。  
幹と幹が橋で結ばれていて、樹の間を移動することができるようだ。

「ここがエルフの里。そして、大森林です」

ティラが少し誇らしげに教えてくれる。

「しゅごーい！」

この大自然を前に興奮したのか、フィリアがぴょんぴょん飛び跳ねながら歓声を上げた。ウサギみたいでかわいい。

俺たちは回廊のような廊下を通って、別の部屋へと移動する。それにしても、この家かなりでかいな。

もしかしてティラの実家は金持ちなのかもしれない。

スキルを使って調べようと思えば調べられるのだが、一応そこは個人情報ということで。俺って意外と真面目じゃね？

『女性のスリーサイズを平然と鑑定していたというのに、今さらですか』

ナビ子さんが何か言ってきた気がするが、気にしない。

「帰りました、ティラです。失礼します」

「どうぞ」

中に入ると、ベッドの上でゆっくりと身を起こす一人の女性がいる。た。

ティラとよく似ていた。

フィリアがびっくりした顔で「ママがふたり？」と呟いたほどだ。

「お帰りなさい、ティラさん。無事で何よりよ」

「はい、お母様」

どうやらティラの母親らしい。

二十代にしか見えないんだが、鑑定してみると64歳だった。さすが長寿種のエルフである。

だが見た目の若さとは裏腹に、少しやつれているように見えた。恐らく不治の病とやらのせいだろう。

……なるほど。確かに。

彼女の身体から、通常ではありえない量の体内の魔力が放出し続けているのが俺には見て取れた。

魔力は絶えず体内で作られ続けているが、それでも常時あの量の外に出続けているとなると、いずれ枯渇し切ってしまうだろう。

魔力の消耗は精神力の消耗に繋がり、そして生命力すらも奪う。高い魔力量を有するエルフでなければ、もうとっくに限界がきていたかもしれない。

「ティラさん、そちらの人族の方は？」

ティラママの視線が俺の方へと向いた。

確かにティラとよく似てるけど、もう少しおっとりしている感じだな。優しいそうだな。

「私の恩人です。彼のお陰で、今回、無事にダンジョンを攻略することができたのです」

「あら、そうだったの」

ティラの紹介を受けて、俺は前に出た。

「カルナと言います」

「カルナさん、ですね。娘を手伝っていただいて、ありがとう」

「いえ。大したことはしていません。そんなことより、お母さん、お願いがあります」

「はい、何ですか？」

ティラそっくりの顔で訊いてくるティラママ。

俺は彼女の目を真っ直ぐ見て、言った。

「娘さんを俺に下さい」

「いきなり何を言ってるんですかッ!？」

「いいですよ」

「何で認めてるんですッ!？」

お母上の許可が下りたあああつ！

俺、ガッツポーズ。

「ちょ、お母様!？ え、え？ ここまでのやり取りで娘の結婚を認める要素ありました!？ なかったですよ!？」

「そうね……強いて言えば、認めないと怖いことされそうな気がしたことかしら……」

「それ余計に認めちゃダメですよね!？」

ティラが目を剥いて母親に詰め寄る。

「でも、こんなに目が血走っていて、鼻息を荒くしているなんて……それだけあなたのことを愛してくれているという証拠じゃないかしら?」

「全然違いますよ!？ それを愛という言葉で表現しないでください! むしろ愛という言葉に謝るべきレベルですから!」

「ごめんなさい、愛」

「本当に謝った      ツ!？」

はあはあ、とツツコミを入れ過ぎて息を荒らげるティラ。

「……? わたし、また何か変なこと言ったかしら?」

そんなティラの様子を不思議そうに見ながら、ティラママは可愛らしく首を傾げた。

てか、ほんとにかわいい。こんな人を蝕む病とか、マジ許せん。

「……それにしても、随分と変わった人なんだな」

俺はぼそりとティラに耳打ちした。

「あなたにだけは言われたくないですけど、その通りです。お母様は、昔からこうで……」

ティラのツツコミが鋭い理由が分かったような気がした。

「それで、そちらの子は？」

ティラママがフィリアを見て訊いてくる。

俺は答えた。

「俺たちの娘です」

「さらに話がややこしくなるので、もうちょっと段階を踏んだ説明をしていただけませんか！？」

「あら、ティラったら、いつの間に産んだの？ やだ、わたしもお婆さんになっちゃったなんて……どうしようかしら」

「お母様も人の話をすぐに鵜呑みにしないでください！」

そんなこんなで、俺はティラの実家にやってきたのだった。

第14話 住んでみたい場所ランキング一位・エルフの里の嫁の部屋（後書き）

思いつきで頭の悪い短編を書いてしまいました。よろしければどうぞ。

『うちのトイレがダンジョン化したせいで用を足すのが大変すぎる』  
<http://ncode.syosetu.com/n8987du/>

## 第15話 エルフ幼女がかわいい

「まあ、そういうことだったの」

ティラの必死の説明のいかいもあって、ティラママは納得がいったというふうに頷いた。

それから、ティラママはフィリアを見て、

「よかったわね、フィリアさん。怖くはなかった？」

「うん、だいじょうぶだった！ こわいやつは、パパがやってくれたの！」

こわいやつ……。

オーエン……なんか、すまん……。

「それでは、お母様。早速ですが、私はこれから手に入れた研究資料を調べてみようと思います」

「あ、そのことなんだが。残念だけど、その資料にお母さんの病気の治療に役立ちそうなことは載ってないぞ」

「え？」

「そもそも回復魔法じゃ治せないんだ、この病気は」

「そ、そんなつ……」

「ま、でも安心してくれ。お義母さんの病気の原因ならもう分かっているから」

顔を青くするティラに自信を持ってそう告げつつ、俺はティラママのベッドに近付いていく。



「これは呪いだ」

呪い。

呪術。

それは原始的な古い術体系で、現在この世界で主流となっている魔法とはまた別の系統に属している。

セイラ 64歳

種族：エルフ族

レベル：31

状態：衰弱の呪い

「呪い、ですか……？」

「ああ。けど、そんなに厄介なものじゃない。……えっと、お義母さん、体調に異変が起こった直前くらいに、何か古い道具や武具などに触れたりしなかったか？」

「どうだったかしら……もう半年以上、前のことだし……あ、でも、うちの倉庫を整理したのが、その頃だった気も……」

「じゃあそれが原因かもな。長い年月を経た道具などに、時に霊魂が宿ることがあるんだ」

日本で言うところの付喪神だ。

「けど、そうと知らずに捨ててしまったりすると、その怒りを買って呪いをかけられてしまったりするんだよ」

一応、人族の方だと呪術師なんていう呪い専門の職業があって、解呪なんかをしてくれるみたいなんだが。

「こんなに精霊の力の強い場所で呪いが発生するなんてことは、ごくごく稀のことだろうし、疎いのも仕方ないだろうけどな」

「お詳しいのね」

「いやいやそれほどでも」

「……何で顔を赤くしてるんですか」

しまった。

ティラママは当然ながら人妻だ。幾ら可愛くても懸想してはマズイ。

『懸想したのですか……。幼女から64歳の熟女まで、マスターの守備範囲の広さには驚嘆を禁じ得ません』

幼女には懸想してませんよ？ しかも64歳といっても、見た目はせいぜい二十代だからな？

それはともかく。

これくらいの呪いなら解呪するのは簡単だ。

『マスター。呪術・極は悪用しないようにしてください。強制的に相手を自分に惚れさせることができる呪いなども存在しますので』

マジか。

くくく、それを使えばハーレム作り放題……

って、俺がそんなことするやつに見えるかよ！

『はい』

ナビ子さんからの信用が皆無です。

「よし、もう大丈夫だ」

俺はティラママにかかっていた呪いを解呪した。

「……魔力の放出が……止まったわ」

垂れ流しになっていた魔力が、蛇口を閉めたようにぴたりと止まる。

「治った……んですか？」

「ああ」

俺が頷いてやると、ティラが感極まった表情でいきなり走り出した。

これはまさか……っ！

う、狼狽えるな。

ここは男らしく、堂々と彼女の気持ちを受け止めてみせるべきだ！

俺は大きく手を広げ、彼女を迎え入れる準備を整える。

さあ、俺の胸に飛び込んでおいで！

「お母様っ！」

次の瞬間、ティラは俺の脇を通り抜けて、ティラママに抱き付いていた。

ですよー！。

「よかったっ……お母様っ……」

「あらあら、何も泣くことないのに」

泣きじゃくる娘の頭を、ティラママは優しげな手つきで撫でていく。

「フィリア」

「んー？」

「パパと一緒にちよつと外に出ていようか」  
「うんっ」

俺はフィリアの手を引いて、部屋を出た。

親子水入らずってやつだ。

俺は空気を読める男なのである。

まあ外からでも 千里眼 を使えば見れるんだけどな！

エルフの美少女母娘が抱き合う眼福光景を堪能する。

脳内メモリーにもしっかり保存しておこう。

ティラママを救った俺は、その日、ティラの家で手厚いおもてなしを受けた。

ティラパパにも会った。

美人の妻と娘を持つ上に、自身も超イケメンという憎き野郎ではあるが、俺の義父になるべき相手。いきなり爆裂魔法をぶっ放すよなことはしなかった。

『当然かと』

そして俺は「娘さんをください」と頭を下げた。  
すると、こんなやり取りになった。

「どこの馬の骨とも分かん男に、はいどうぞと言えるわけがない！」

「ですよ、お父様っ。それが普通の反応ですよっ」

「そもそも娘は誰にもやらん！」

「お、お父様……？」

「結婚なんかさせるものかつ！ たとえ幾つになつたとしても、テイラはずつとこの家におるんじゃっ！ おばあちゃんになつてもわしと一緒になんじゃっ！」

「ちょ、それはそれで困るんですけど！？」

テイラパパは、かなりの親バカらしかった。

まあこんなにかわいい娘なのだから、無理もない。

これはじっくり攻略していくしかなさそうだな……。

そんな親バカだが、実は族長だという。

道理でデカイ家に住んでいるわけだ。

エルフの里は七つの集落に分かれており、各集落を族長が治めている。

テイラパパはその内の一人だ。

ちなみに族長たちの家はすべて、伝説のエルフの王　ハイエル  
フに連なる血筋らしい。

「だからティラたんはこんなにも神々しいのか」  
「……なに言ってるんですか」

俺の呟きに、ティラが半眼を向けてくる。

一晩ティラの家に泊めてもらって、翌日。  
俺たちはエルフの里を歩いていて、  
ティラに里を案内してもらっているのだ。

俺たちは三人連れ立って、樹の枝で作られた橋を渡っていく。  
地上がむちゃくちゃ遠いな。二百メートル近くあるから当然だ。  
その上、橋とは言っても、ほとんど不安定な吊り橋である。  
かなり怖い。

無邪気に走り回っていたフィリアが橋から転落しかけ、肝を冷や  
した。

まあいざとなったら風魔法で空を飛べばいいんだが。

途中、何度か里のエルフたちとすれ違った。

「ティラ様、お帰りなさいませ」

「ティラ様、無事でよかったです！　お母様がすっかりよくなられ  
たとか！」

「ティラさま、ダンジョンクリアしたってほんと？　すっごーい」

族長の娘ということもあってか、ティラは随分と慕われているら  
しい。

「ところで君は？　あまり見かけない顔だけど……」

「ずっと旅をしていたからな。偶然、ダンジョンで彼女と会って、この里に連れてきてもらっただ」

「へえ」

俺も里の人たちと何度かそんなやり取りを交した。

エルフたちは人族に対していい印象を持っていない。

それどころか、人族を嫌悪しているエルフも多いという。

なので本来なら、こんなふうに平和なやり取りはできないのだが、

「そんな魔法まで使えるんですね……。本当にエルフにしか見えな  
いです」

俺は変身していた。

どこからどう見てもエルフにしか見えない、完璧な変身だ。

『補助魔法・極 スキルは、身体強化魔法、封印魔法、反射魔法、  
隠蔽魔法、変身魔法など、サポート系の魔法を高レベルで使用する  
ことが可能になります』

説明ありがとう、ナビ子さん。

ちなみにフィリアも、この力でエルフの少女に変身させていた。

てか、エルフ少女、マジでかわいいんだが……。

オーエンの爺さんには絶対に見せられないな。

「呪術のことといい、もはやあなたが何をしても驚かなくなっ  
てしまいましたよ……」

「パパ、しゅーい！」

「ふっふっふ、パパは凄いだろー」

「……ですが、本当に申し訳ありません」

不意にティラから謝られ、俺は面食らった。

「え？ 何が？」

「……母を救っていただいた恩人だというのに、姿を変えなければ出歩くこともできないなんて……」

うーん。俺は別に全然気にしてないんだけどなあ。

普通に里を満喫してるし。

そもそも人種間の軋轢なんて、別におかしなことではないだろう。

「けど、何でエルフたちは人族のことを嫌っているんだ？」

「それは……」

それからティラは教えてくれた。

エルフたちがなぜ、人族のことを嫌悪しているのかということ。



## 第16話 エルフと人族と精霊

エルフたちの多くは、人族<sup>ヒューマン</sup>に対する悪感情を抱いている。

エルフは争いを好まない種族であり、そのためずっと昔から、戦ばかり起こしている人族のことを蔑視する傾向があった。

それでも里に利益を与えてくれる人族に対しては、比較的友好的に接していたという。

それが一変したのは、今から百年ほど前。

原因は、人族が彼らの住む大森林の木を勝手に伐採してしまったことだった。

エルフにとって、自分たちが住む大森林は信仰の対象とも言えるきもの。

当然、彼らは激怒した。

そしてそれ以降、人族との交流の一切を絶つてきたという。

とは言え、それはもう百年も前のことだ。

「里の中には、人族との交流を望んでいる者もいます。お父様もその一人です」

「だから俺を快く家に迎え入れてくれたのか」  
「はい」

エルフの里は小さい。

すべての集落を合せても、せいぜい千人ほどしかないという。

エルフは魔法の才能にも身体能力にも優れ、かつ長命という、非

常に優秀な種族ではあるが、繁殖力が低いのだ。  
もし強大な敵対勢力に攻め込まれてもしたら、一溜りもないだろう。

「だからこそ人族との交流は不可欠であると、お父様は考えているのですが……」

ちょうど今、人族の国　アルサーラ王国が、エルフの里と対等な同盟を結ぼうと幾度か使者を寄こしてきているのだという。

対等な同盟を結ぶということはすなわち、エルフの里を「国」として認めるということでもあり、その内容は感情論さえ抜きにすれば、エルフたちにとって文句なしのものだった。

アルサーラ王国は獣人やドワーフなどの他の亜人の国とも深い交流があり、信頼もおける。

だが、

「やはり人族との交流には反対の声も多く、話はなかなか進展していない状況です」

「……なるほどな」

「って、すいません、いきなりこんな話をして。何でもできてしまいうカルナさんなら、こんな問題もどうにかできてしまうんじゃないかって……そんなふうに思ってしまったのかもしれませんが」

「いや、いいよ。むしろ俺も知りたかったことだし」

そんな話をしつつ、俺たちは里の中でも最も高所にある祭事場へとやって来ていた。

祭事の際には里のすべてのエルフが集まるというだけあって、めちゃくちゃ広い。

とてもここが樹の枝とは思えないな。

周囲の木々よりも一際背の高い木に設けられており、それゆえ大森林を上から一望することができる。素晴らしい絶景だった。

俺はこのエルフの里のことをとても気に入った。

空気は綺麗だし、女の子は綺麗だし、食べ物美味しいし、ぶっちゃけ天国である。嫁の実家だしな！

しかし、人族との軋轢か。

転生者ではあるが一応人族の一人として、何とかできないもんかな。

俺は改めて手持ちのスキルを確認してみる。

もしかしたら何とかできる方法があるかもしれない。

『マスター、このスキルを応用してみるのはいかがでしょう？』

お、いいかもな。

「なあ、ティラ。もうすぐ祝祭があるんだよな」

「あ、はい。大森林に感謝の祈りを捧げるための、月に一度の祝祭の日です」

「それ、俺も参加していいか？」

「え？」

「一つ、考えがあるんだ」

空が薄闇に染まる中、エルフたちの祭事が執り行われていた。

広大な祭事場には里のすべてのエルフが集まっていた。

千人近い大所帯である。

だが誰一人として私語をする者はおらず、老若男女が静かに祈りを捧げている。

こういつ雰囲気、正直言って俺は苦手なのだが、今は我慢である。すぐ隣にいるティラからいい匂いが漂ってくるので、それを嗅ぎながら時間が過ぎるのを待とう。

『こういつ神妙な状況でさりと変態的行動を取るマスター、さすがです』

どういたしまして。『もちろん褒めてません』

ちなみにフィリアはティラの家にお留守番させている。あの子にこういう場は無理そうだしな。

しばらく退屈な時間が続いたが、祈祷の時間が終わると少し賑やかな空気になった。

祭事は終了し、これから宴会みたいなことが行われるという。

もうお喋りしても大丈夫そうなので、俺は転移魔法でフィリアを連れてきた。

宴会と言っても、エルフたちのそれはかなり静かなものだった。大森林に感謝しつつ出された食事を採りながら、ご近所さんたちと談笑するという程度のもの。

お酒も少しは飲むようだが、アルコールが回って暴れ出すような  
傍迷惑なおっさんはいない。

「諸君、一つご報告がある」

そんな中、族長の一人であるティラパパが前に出てエルフたちに  
呼びかけた。

妻の病気が完治したことの報告だった。  
すでに周知のことだったようだが、エルフたちはそれを聞いて破  
顔する。

だが続く言葉に、エルフたちの笑顔が凍った。

「妻を救ってくれたのは他でもない、彼　　人族の青年だ」

その紹介を受けて、俺は前に出た。  
同時に変身を解く。

「なっ……人族が、この里に……っ？」

「しかも、神聖な祭事場に足を踏み入れるなんてっ……」

多くのエルフたちが息を呑む。

あらかじめ事情を知らされていなかった反人族派の族長たちの中  
には、すぐさま俺を取り押さえようと動き始めた者までいた。

そのときだった。

不意に聞こえてきたのは、笛が奏でる美しいメロディー。

吹いているのはティラだった。

笛はエルフたちにとって最も馴染み深い楽器で、里の大半が嗜ん

でいるという。

その中でもティラの腕前は、神童と謳われたほどのレベルにある。一瞬にしてエルフたちの心を驚掴みにしていた。さすがは俺の嫁だな。

『事あるごとに嫁、嫁と内心で言うところ、正直言ってかなり痛いです、マスター』

はいナビ子さんは黙る。

直後、どよめきが起こった。

その笛に合せ、いきなり俺が唄い出したからだ。

もちろんJ POPではない。

エルフたちの大森林に対する厚い信仰と感謝の想いを、自作の歌詞に乗せて唄ったのだ。

俺の歌を聞き、今にも躍り掛かろうとしていたエルフの族長たちが足を止めた。

それどころか、真剣な表情で歌に聞き入っている。

ざわめきはあっという間に収まっていた。

誰一人として、俺を止めようとする者はいない。

## 芸術・極

『芸術 スキルは、幅広い分野の芸術に対応しています。例えば、演劇、創作、音楽など。マスターの 芸術・極 であれば、そのいずれにおいてもトップレベルの実力となります』

今の俺は最高峰の歌手だ。

それどころか最高の作詞家であり、役者でもある。

長い年月をこの里で過ごしてきたエルフに成り切って、彼らの琴線に強く触れる歌詞を最高の歌唱力によって唄っているのである。

彼らの心に響かないはずがないだろう。

……ちなみに本当の俺はド音痴。

やがて音楽が止んだとき、エルフたちは涙を溢れさせていた。  
族長も、若いエルフたちも、皆。

エルフに成り切っていた俺もいつの間にか泣いていた。  
エルフに変装したフィリアだけが不思議そうに首を傾げている。

「……素晴らしい歌だった……」

「なぜ、そこまで、我々の文化を……」

もはや俺に対し、嫌悪や侮蔑の視線を向けてくるエルフは一人もいなかった。

「私はカルナと言います。見ての通り、人族です。過去に俺と同じ人族が、あなた方の逆鱗に触れてしまったことは知っています。そのせいで、今もなお、人族への恨みを持っていることも」

俺は今度は誠実な人族の青年を演じつつ、彼らに語りかけた。

「けれど、人族にも、俺のようにあなた方の文化や価値観のことを理解し、崇敬している者もいます。あなた方と手を取り合い、互いに協力し合うことを願っている者もいるのです」

俺の訴えを、エルフたちは素直に聞いてくれていた。

「そのことを伝えたくて、今日はこの場に参加させていただきました。……この里に、そして神聖な場に無断で立ち入ってしまったことは、お詫びいたします」

「……あんな人族の若者がいたなんて……」

「彼は我々と同じく大森林に感謝を捧げる者ならば、種族など関係ない」

エルフたちが口々に俺を賛辞する。

最初は俺に嫌悪の視線を向けていた一部の族長たちも、今は完全にその表情を和らげていた。

と、そのときだった。

すでに暗闇に包まれていた辺り一帯に、突然、無数の緑色の輝きが浮かび上がった。

「な……これはまさか、精霊……？」

「大森林の精霊たちが姿を現したのかっ？」

「しかも、こんなにもたくさん……？ 信じられん……」

エルフたちが口々に驚きの声を上げた。

精霊。

それは森羅万象に宿る霊的な存在だ。

古くは信仰の対象となっていたようだが、だんだんとその存在を知覚できる者が減ってきたこともあって、今では彼が言う通りほとんど伝説上の存在と化してしまっている。

だが彼らは今もありとあらゆる自然に宿っており、それはこの大森林も例外ではなかった。

こうした木や森に宿る精霊は、ドリュアス木精霊と呼ぶようだ。



幻想的な光景に、俺もエルフたちもつい魅入ってしまふ。  
まるで人族とエルフたちの友好を祝福しているかのようだった。

## 第16話 エルフと人族と精霊（後書き）

「ぐおおお、シリアスは一話だけで精神が限界っ……。よし、次回は気力回復のためのペロペロ回だ！」

『……一体何を舐める気ですか、マスター』

## 第17話 ついムラムラしてやった。後悔はしていない

「まさかこれほど多くの精霊が姿を現すなんて……君には本当に驚かされてばかりだよ」

ティラパパが俺のところへとやってきた。

「これで里の者たちの人族に対する見方が大きく変わったはずだ。族長たちも君の言葉に耳を傾けざるを得ないだろう」

確かに族長たちが俺を見る視線には、畏怖の念が見て取れた。

あの様子なら、ティラパパの言う通り、アルサーラ王国との同盟の話も大きく進展するに違いない。

「なんと感謝すればいいことか……」

ティラパパもまた随分と畏まった様子だった。

「別に気にすることはないって」

「いや、この礼は必ずしよう」

お礼か……。

はっ、これはもしかして……今ならいける!?

「じゃあ、ティ」

「ただし娘だけは絶対にやらんぞおおっ!」

ほんと親バカだった。

『マスター、バカはお互い様かと』

祭事が終わり、その晩のこと。

ティラの家に帰り、借りている一室でそろそろ休もうかと思っ  
ていると、とんとん、とドアをノックする音が聞こえてきた。

「あの……私です。まだ、起きていますか？」

ドア越しに、ティラの声。

「起きてる起きてる！ もうギンギンのビンビンに！」

「……出直してきます」

「待つて！？ 目が冴えてるってことだから！ アソコのことじゃ  
ないって！」

「言わなくていいです！」

『……マスター、ワザとやってますね？』

しばしの沈黙の後、「はあ……」と、ティラが溜息交じりに部屋  
に入ってきた。

それから、おずおずと切り出してくる。

「……今日のこと、ちゃんとお礼をしておこうと思ひまして」  
「お礼？ 礼なら、何度も言われた気がするけど……？」

俺は首を傾げる。

「いえ、その……やっぱり、感謝の気持ちを伝えるだけでは、足りないかと……」

言いながら、なぜかもじもじし始めるティラ。

その恥ずかしそうな様子。

そして、気持ちだけでは足りないという言葉。

この二つから導き出される答えは……っ!?

エロいことか!?

エロいことだよな!?

むしろエロいこと以外に何がある!?

もしかしてフィリアに妹か弟ができてしまう!?

やっぱりギンギンにしておいて正解だったみたいだな!?

『マスター、落ち着いて下さい。鼻息が荒くてぶっちゃけかなりキモイです。それはもう、平常時の二倍ほど』

それ平常時でもキモイって意味?

俺の期待が最高潮に高まる中、ティラは俺のすぐ目の前まで寄ってきた。

そして覚悟を決めた表情をしたかと思うと、顔をゆっくりと近付けてくる。

そ、そうだな!

最初はそこからだよな!

ティラの可憐な唇を凝視する俺。

それが徐々にこっちに迫ってきて

彼女は頭を横に向けた。

「……み、耳を触ることを、許してあげます」

その耳を先つちよまで真っ赤にしながら、ティラはそんなことを言ってくる。

「え？」

「だ、だって、ほら、最初に会ったときから、ずっと触りたがってたじゃないですかっ」

「……そ、そうだな」

なるほど。

うん。

……えっと。

悪い。すげえ反応に困るわ、これ……。

もっとレベルの高い（？）ものを期待していただけに、俺のテンション、一気にトーンダウン。

『まさにザマアですね、マスター』

最近、ナビ子さんの性格がどんどん悪くなってきた気がするます。

『そもそも、エルフというのは人族より遥かに貞操観念が強いです。婚前に性的交渉を行うことは最大級のタブーです。キスですらアウトです』

つまり、ティラはまだ綺麗なままの身体だってことだな！

『年齢〓恋人いない歴〓童貞歴のマスターと同じですね』

おい、俺のことはいいだろ。

ていうか、何で俺の前世のこと知ってんだよ。

『マスターを見ていればそれくらい予想が付きます。女性とまともに手を繋いだことすらなかったのでは？』

ひ、酷い！

俺だって、小学生低学年の頃は集団登校で、高学年のお姉さんと毎朝手を繋いで学校に行ってたっての！

『……………』

ノーコメントやめて！

……………ともかく。

エルフにとっては、異性と肌を触れ合わせることですら恥ずかしいことらしい。

つまりティラからしてみれば、これでも最大限のお礼であり、少なからず俺に心を許してくれたということだろう。

「分かった。じゃあ、遠慮なく触らせてもらおう」

「す、少しだけですからっ」

俺は手を伸ばした。

ティラはぎゅっと目を瞑り、緊張しているのか、身体を強張らせ

ている。

「大丈夫。痛くないから」

「は、はい……」

このやり取りだけ聞いてると、もっとエロいことしてる感じなんだけどなあ……。

そして俺の指先が、ついに彼女の耳に触れる　その寸前、

ぺろんっ。

「~~~~~~~~ッ!??」

指先より先に、俺の舌が彼女の耳を舐めていた。

おっと。しまった。

舌が滑ってしまったようだ。てへぺろ。

「な、な、な、何をしたんです今!??」

「俺の指がティラの耳に触った」

「違いますよね!?? どう考えても指の感触じゃなかったです! もつとねっとりとしてましたよね!??」

「緊張して汗が」

「いくら何でもあんなに水っぱくならないでしょう!??　なんかぶよぶよしてましたし!　背筋がぞっとしたんですけど!」

部屋の端まで後退り、声を荒らげるティラ。

「大丈夫大丈夫。美味しかったから」



「やっぱり舌ですね！？ 舌で舐めたんですね！？」

「ついムラムラしてやった。後悔はしていない」

「では今から後悔させてあげましょうか……？」

杖の先端を俺に向け、ティラは今にも呪文の詠唱を始めそうな勢いだっただ。

てか、なんで俺の部屋に来るのにわざわざ杖を……？ 護身用……？

「わ、分かった。じゃあ、俺も舐めていいから、それで許してくれ」

「別に舐めたくなんかないんですけど！？」

「え、マジで？ 舐めたくないの？ほんとに？」

「何で舐めないのがおかしいみたいな空気出してるんですか！……」

「って、ちょっと待ってください！ 何でスボン脱ごうとしているんです！？ 一体どこを舐めさせる気ですか！？」

「だって、下手なところを舐めさせるのは失礼だろう？」

俺は至って真剣な顔で言う。

「だから俺のもっとも大切なところを」

「風よ、斬り裂く」

「じよ、冗談！ 冗談だから！」

マジで詠唱を始めたティラを、俺は慌てて止めた。ていうか、どこを斬り裂くつもりですか……。

『むしろすべての女性たちのために、ぜひとも去勢してほしかったところですよ』

ナビ子さんや、俺を犬や猫みたいに扱わないでくれませんか？

「んう……」

そのとき、眠そうに目を擦りながら可愛らしい天使が部屋に入ってきた。

フィリアだ。

どうやら今の騒がしいやり取りを聞いて起きてきてしまったらしい。

「パパ、ママ、なにしてるの？」

「パパとママはフィリアの弟か妹を作ろうとしていたんだ」

「ほんとっ？」

「してません！！」

「う、うん。してないよ、フィリア」

ティラの睨みを受けて即座に前言撤回。

「……そうなの？」

フィリアは残念そうに俯く。

「命つてのはとても大切なものだから、軽々しく作るわけにはいかないんだよ。フィリアは賢いから分かってくれるだろう？」

「うん」

俺がもつともらしいことを言つと、フィリアはあっさり頷いてくれる。

「そうか。偉いな、フィリアは」

「えへへ」

俺が頭を撫でてやると、フィリアは天使の微笑みを浮かべた。なんていう純粹無垢な笑顔だろう。

『それに引き換え、マスターときたら……』

うつ……罪悪感が。

俺は穢れている……っ！

「じゃあママと一緒に部屋に戻りましょうか、フィリアちゃん」  
「うん！」

ティラとフィリアは仲良く部屋を出ていこうとする。  
二人は一緒に部屋で寝るのだ。

「カルナさんは来なくていいです」

付いて行こうとしたら、ぴしゃりと言われた。  
俺も一緒に寝たいです。

## 第18話 パパがすきです。でもママのほづがもつとすきです

祭事の日から三日後。

俺は数日間過ごしたエルフの里を旅立とうとしていた。

「なんだか寂しくなるわねえ」

「そうだな。短い間だったけど、まるで子供が増えたようだった」

見送りに来てくれたティラママとティラパパが、そんな嬉しいことを言ってくれる。

「君のお陰で族長全員がアルサーラ王国と同盟を結ぶことを承認してくれた。本当に感謝しても仕切れない」

「ギルドにダンジョン攻略の報告をした後、城にも行く予定があるので、俺からもその話を伝えておくよ。一応、伝手があるからな」

もちろんエレンのことだ。

しかし、いかにもメインヒロインっぽく3話に登場したのに、その後ずっと放置とか……。

『そういうメタ的な発言は控えてください、マスター』

ティラパパは頷いて、

「それは助かる。しかし君には妻のことと言い、何から何まで世話になりっぱなしだな……」

「気にしないでくれ。俺が勝手にやってるだけだから」

俺なんてスキルに世話になりっぱなしだな、はっはっは！

『スキルがなければただの変態ですが、スキルがあるせいで最悪の変態ですね』

いやあ、照れるなあ。『だから褒めてません』

「じゃあ、そろそろ行こうか、フィリア」

「ねえ、ママは？ ママはいかないの？」

俺が声をかけると、フィリアがこちらを不安げな顔で見上げて訊いてきた。

ティラはこの里に残る予定だった。

見送りにも来ていない。

何で来てくれてないんだろ……？

あ、あれだ。

きつと涙を見られるのが恥ずかしいからだ。

うん、そうに違いない！

俺が耳を舐めて以降、やけに余所余所しくなった気がしているけどそれは間違いなく気のせいだ！

『どう考えてもそれが原因かと』

ほ、ほら、嫌よ嫌よも好きのうちって言うじゃん？

『それは最凶のストーカー理論です、マスター』

マジか……。

「だ、大丈夫。またすぐ会える！」  
「……ママと、おわかれ……？」

フィリアは今にも泣き出しそうだった。  
もちろん俺だって悲しい。  
だが、ここはティラの実家だ。故郷だ。  
彼女の住む家があるのだ。

俺もこのままエルフの里に定住することを考えた。  
本当に住み心地のいい場所だったしな。

けれど俺は、もっとこの世界の色んなところを自分の目で見て回りたい。

その欲求が、ここに留まり続けることを許さなかったのだ。

妻を取るか、それとも仕事を取るか。  
究極の選択だった。

『マスター、妻でもなければ仕事でもありません』

ナビ子さん、たまには俺に優しくしてくれてもいいと思いますよ？

「うう……ママ……」

「泣くなよ、フィリア」

「パパもないてる！」

「な、泣いてねえし！ これは汗だし！」

まあ俺は転移魔法が使えるし、その気になれば本当に毎日でも会えるんだが。

それでもやつぱ物理的に距離が離れるとなると、寂しさを覚えてしまうものだ。

「まったく、そんなことではフィリアちゃんのお父さんは務まりませんよ」

と、そのとき呆れたような声が聞こえてきた。

「ママ！」

ティラだ。

フィリアが走り出し、彼女の胸に飛び込んだ。

「ママあゝ、フィリアっ、パパもしゅきだけどママもしゅきなっ

……いっしょじゃなきゃ、いやっ……」

「はいはい、大丈夫ですよ。ママはフィリアちゃんと一緒ですから」

「……ほんと？」

「本当です」

ティラはにつこり微笑んでそう応えてから、両親の方へと視線を向けた。

「……行ってしまうのか、ティラ……」

「寂しくなるわねえ……」

「大丈夫です。またすぐ戻ってきますから」

そこでようやくティラは、状況について行けずに呆けていた俺の方を向いた。

「……わ、私も、もっと外の世界を見てみたいと思ったんです。べ、

別に、カルナさんのためにについていくわけじゃないですからっ」

っ、っ、っ、ツンデレだああああっ!？」

「わーい、ママ、だいしゅきーっ!」

ティラと一緒に来てくれるのだと知って、フィリアが涙を散らして大喜びする。

俺も涙を溢れさせながらティラに抱きつこうとした。

「ダメです」

あっさり拒否られた。相変わらずガードが固いです。しかし嫌よ嫌よも好きのうち……いずれきつと……

『だからそれはストーカーの発想です、マスター』

嘆く俺を余所に、フィリアはティラの胸に顔を埋めてすりすりしている。

「ママのにおい、だいしゅきなっ」

「ありがとう、フィリアちゃん。ちなみにパパとママ、どちらの方が好きですか?」

「いまはママのほうがいしゅきーっ!」

ティラの質問に即答するフィリア。

「フィリアを取られたああああっ!？」

パパ、大ショックである。



そ、そんな馬鹿な……。

『この数日間、彼女はずっとティラ様と一緒に寝ていましたからでしょう』

その間に二人の仲が深まったということか……。  
くっ、俺も一緒に寝れていたなら！

「なんでまだ泣いてるんですか？ 行きますよ、ほら」  
「うう……嬉しさと悲しさが交ぜになったこの涙よ……」

俺は涙を拭くと、二人の手を取った。

と、そのとき初めて気付いた。  
木々のあちこちから、里のエルフたちが俺たちに手を振ってくれていたことを。

あの祭事の夜以降、俺は人族の姿に戻ったが、それでも彼らは友好的に接してくれた。  
この様子なら、きっとアルサーラ王国とも上手くやれることだろう。

さらにそんなエルフたちを見守るかのように、幾つもの淡い緑の光が漂っていた。  
木精霊たちだ。

彼らもまた、俺たちの旅立ちを見送りに来てくれたのだろう。

「では、行ってまいります」

ティラが両親にぺこりを頭を下げ、俺は転移魔法を唱え始める。

できるだけ詠唱を長くした。  
そもそも詠唱すら必要ないんだが、その方が別れの雰囲気が出そうだったしな。

ちなみにティラパパは「やっぱり嫌じゃー、ティラはずっとわしの傍におるんじゃー」と駄々をこねている。スーパのお菓子売り場で母親を困らせる幼児かよ。

転移先はアルサーラ王国の王都にあるギルドだ。  
ダンジョンクリアの報告をして、報酬を貰わなければならない。

俺はギルドマスターのおっさんの執務室に直接飛ぶことにした。  
あのダンジョンは攻略難易度がSだったし、受付で他の冒険者に聞かれてもしたら騒ぎになって面倒そうだからである。

一応、この間の加入試験の後にちよつと立ち入ったことがあるんだ。

やがて魔法陣が完成し、俺たちは光の中に包まれていく。

こうして、俺はエルフの里に別れを告げた。  
多くのエルフや精霊たちに見送られて、ちよつと感動的なシーンだったと自分でも思う。

なのに、それが一瞬にしてぶち壊しにされることとなる。  
というのも転移した先で

「オウツ、オウツ、オウツ」

おっさんがオットセイみたいな声を上げながら、ブリッジオ

ニーしてました。

『マスターに並ぶ変態が……』

「さすがに俺もここまでじゃねえよ!？」

オ ニーはちゃんと隠れてやります。

## 第19話 ギルドマスターの野望

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

エルフの里からアルサーラ王国の王都にあるギルドへと転移すると、おっさんが執務机の上でオットセイのような声を上げながらブリッジ ナニーをしていた。

「オウツ、オウツ、オウツ」

「きゃああああああああっ!？」

ティラの甲高い悲鳴が上がる。

「オウツ、オウツ、って、ぬおおおっ!？ お、お前らっ、一体どこから現れた!？」

おっさん、もといギルドマスターが俺たちに気づき、怒声を轟かせた。

しかし右手は動き続けている。いやまずそれ終了させるよ。

「爆散せよ、焰の」

「ちょ、ストツいでっ」

据わった目で攻撃魔法の詠唱を始めたティラ。慌てたおっさんは、

バランスを崩して執務机の上から落下した。

「いいか、二度と勝手にオレの部屋に入って来るんじゃないぞ？」

「ああ、分かった。悪かったよ」

服を着たおっさんに叱られ、俺は素直に謝罪していた。

確かに、横着していきなりギルドマスターの執務室に移りしめた俺にも非があったのは間違いない。

「けど、執務室で何やってんだよ、あんた？ やるなら自宅でやれ、自宅で」

「い、いいじゃねえか別に！ ここだと背徳感が堪ねえんだよ！ 自宅じゃこんなに興奮できねえんだ！」

思っていた以上にとんでもなく酷い理由だった。

『ダンジョンを全裸で徘徊していたマスターも、そう大差ないレベルかと』

あ、あれは装備無しでのダンジョン攻略をやってみたかっただけであってだな……？

「しかも何であんな体勢だったんだよ。ブリッヂ ナニーしてる奴なんて初めて見たぞ」

まあ他人のオニー自体、見る機会なんてめったにあるもんじゃ

ないけどな。

あれは暑い夏の日のことだった。その日は午前中で授業が終わり、俺はいつもより早い時間に家へと帰宅した。しかし家に帰ると、なぜかリビングから聞き慣れない声がある。誰か客でも来ているのかと訝しみつつ、リビングの扉を開けてみると、親父がA Vを見ながら

『その話、聞きたくないです』

え？　ここから衝撃の展開が待っているのに……？　『聞きたくありません』

「オレはな、自分がギルドマスターである内に、過去のギルドマスターたちを凌駕するような、何かしらのでかい実績を打ち立ててやりたいと考えているんだ」

いきなり真剣な顔つきで語り始めるおっさん。

もしかして意外と真面目な理由があつたのかもしれない。って、ブリッヂ　ナニーの真面目な理由ってなんだよ。

「だが、過去のギルドマスターどもは、どいつもこいつも揃って化け物揃いだ。今さらこのオレが何をやろうと、連中を超えることは容易じゃねえ。だからオレは考えた。オレはオレなりの、もっと奇抜な方法で今までにない偉業を残してやろうとな！」

徐々に熱を帯び始めていくおっさんの声。

そして彼は力強く宣言した。

「それが、この執務室の天井にオレの体液を届かせることだ！　そ

んなことを成し遂げたギルドマスターなんて、今まで一人もいねえだろうからな！」

「当たり前だ！ てか、歴代のギルドマスターたちに土下座して謝れ！ ちよつとでも真面目な話を期待した俺が馬鹿だったよ！」

こんな奴がトップで、果たしてこのギルドは大丈夫なのだろうか……。

「……」

ちなみにティラは、先ほどからずっとおっさんを肥溜めでも見るかのような目で見ている。

おっさんはボソリと呟いた。

「……その視線、オレにとってはむしろ褒美だぜ……」  
「死にたいのですか？ 死にたいようですね。死んでください。死ね」

ティラの口調から敬語が消えた！

「ま、待て！ 冗談、冗談だ！ 詠唱やめてくれ！ しかもそれ上級魔法じゃねえか！？ ガチで死ぬから！」

「くっ……いつもは俺の立ち位置だというのに……何だか寝取られた気分だ……」

「何と張り合っているんですか！？」

大人たちがそんなやり取りをしていると、不意にフィリアが好奇心いっぱい瞳でおっさんに訊いた。

「ねえねえ、おじさん、さっきなにしてたの？」

おっさんは大いに慌てた。

「ちょ、待て！ そんな無垢な目でオレを見るんじゃないよ！ まさかこんな幼女に見られちまうとは……………ゾクゾクしちまう」

直後、ティラが詠唱なしに発動した初級の雷魔法がおっさんを焼いた。「ぎゃあ!？」

『…………これは、マスター以上かもしれせん』

いや確実に俺以上の変態だろ。

うん、他人から見ると変態ってこんな風に見えるんだな。今後はもう少し自重しよう。

『ぜひそうしてください』

全身からぷすぷすと煙を漂わせて倒れるおっさんを後目に、ティラはフィリアへ諭すように言う。

「フィリアちゃん、いい子だから先ほどのことは忘れなさい。何も見ていなかったことにしなさい」

「えー、でも」

「でも、じゃないの。あなたは何も見ていない。いいですね？ 何も見ていないんですよ。」

なにもみていません」

「…………うん、ママ…………」



ティラの有無を言わさぬ圧力に、さすがのフィリアも大人しく頷くしかなかった。

「……そ、それで一体、オレに何の用だよ？」

ダメージから復活したおっさんが訊いてくる。……心なしか少し嬉しそうだ。

「あ、そうそう。『大賢者の塔』をクリアしたから報酬を貰いにきたんだ」

「……は？」

おっさんは間抜けな顔で口をぽかんと開けた。

俺はオーエンの研究資料を執務室の上に放り投げ、証拠を見せる。

「ま、マジかよ……。そういや、『大賢者の塔』が消失したなんて話を耳にしていたが……。あれは本当だったのか……」

「という訳で、報酬を貰いにきたんだ」

単刀直入に告げると、おっさんは、う、うむ、と頷いて、

「わ、分かった。だがこれが本物かどうか、王宮にいる専門の鑑定師に見てもらう必要がある。だから、いったんこいつは預からせてくれ」

「だったら俺が直接持っていった方が早そうだな。どのみち、これから城にも行くつもりだったし」

「なに？」

「一応、城に伝手があるんだ」

もちろんオークに捕まっていたところを助けてやった、あの姫騎

士のことだ。

お礼をしたいから一度城に来てくれと言われて、もう随分と経ってしまっている。

というわけで、俺はおっさんと別れ、直接、お城にいるという専門の鑑定師のところにオーエンの研究資料を持っていくことにした。

「エレンは城にいるかな」

俺は 探知・極 を使う。

これの使用可能範囲はおよそ三キロ。お城は十分に圏内だ。

そして城をスキヤニング。

エレンは……いた。

「よし、行くぞ」

俺はティラとフィリアの手を取り、転移魔法を使用した。  
いちいち衛兵とのやり取りをするのも面倒そうなので、エレンのところまで一瞬で移動するつもりだった。

「ちょ、さっきのこと、もう忘れたんですかつ？」

転移する直前、ティラの咎める声が聞こえてきたが、もう遅い。  
直後、俺たちはもわっとした水蒸気の中にいた。  
視界が悪く、随分と蒸し暑い。

「ここはどこです……？」

ティラが呟いたそのとき、すぐ近くで、ちゃぼん、という水が跳

ねる音がした。

そして水煙の中から赤い髪の少女が姿を現す。

エレンだった。

「な……何で貴様がここにっ！？　って、ぎゃあああああっ！」

一糸まとわぬ、生まれたままの姿の。

## 第19話 ギルドマスターの野望（後書き）

次話もすぐ投稿します。

## 第20話 全力でラッキースケベ

王宮内へ転移魔法で飛ぶと、そこに一糸まとわぬ美少女がいた。

年齢は十代後半といったところ。

きりつとした眉に、意志の強さを感じさせる紅玉の瞳、整った鼻筋。

可愛いというより、美しいと形容すべき凛々しい容姿だ。

それでいて、どこかしら幼さも残している。今は頬が紅潮し、水気を含んで赤ちゃんの肌のように艶々しているせいか、そちらが少し強く出ていた。

しかし身体つきは、完全に大人のそれ。

その最たるものが胸だ。

瑞々しく、張りのある二つの巨大な双丘。

それでいて、怖ろしく形がいい。

濡れそぼった赤い長髪が張りついていて、何とも言えない妖艶さを醸し出していた。

しかもそんな破壊的な膨らみが今、支えるものが何もないせいで、ぷるっぷるっと大胆に揺れている。

そのたびに付着した水滴が左右に四散し、その様もまた凄まじくエロい。

下手をすれば永遠に目を釘付けにされてしまいそうなその双丘から、俺は無理やり視線を下げる。

すると現れたのは見事なくびれだ。

そして鍛え抜かれた美しい腹筋に、可愛いおへソ。

そのすぐ傍をつうつと流れていく水滴がまた、何とも言えないエ

口さを醸し出している。

その雫を追いかけて俺はさらに視線を下へ。  
そこにあつたのは

「つて、いつまでジロジロ観察しているつもりなのだ貴様あああ  
っ！」

拳が飛んできた。

しかし俺はそれをあつさり躲す。

「なぜ避けるのだ!？」

確かに、ここは殴られて意識を手放すのがセオリーかもしれない。  
だが、俺は声高らかに主張する。

「そんなラノベ主人公みたいなお約束なんてクソ喰らえだ！ 目の  
前に女の子の裸体がある！ ならばその光景を目に焼き付けないな  
どという道理があるだろうか!？」

「な、何を言っているのだ貴様っ!？」

「いや、ない!!」

俺は力強く叫び、観察を再開する。

このラッキースケベを全力で楽しむのだ！

「いい加減にしてください！」

「ぎゃあ」

ティラが放った雷魔法が俺の頭部に直撃しました。

俺じゃなきゃマジで死んでたよ？

『死ねばよかったかと』

「いいか！ さっき見たことは忘れるのだぞ！」

残念ながら服を着てしまったエレンが、顔を真っ赤にしながら怒鳴ってきた。

「分かった分かった。てか、湯気のせいであんまり見えなかったし」

「ほ、本当だなの？」

「本当本当」

本当はバッチリ見えた。

いつでも楽しめるよう、脳内メモリーにしっかり保存しておこう。

『マスター、自重するのではなかったのですか？』

何の話ですかね？

「……まったく、本当に最悪のタイミングで現れてくれたな、貴様は。いくら転移魔法を使えるとは言え、あのような登場の仕方は心臓に悪いぞ」

エレンは深々と溜息を吐き出した。

ちなみにここはエレンの自室の応接室。

自室に応接室があるなんて、さすがは王女である。

「まさかお風呂に入っているとところだとは思わなかったんだ」

いやあ、おっさんのときと同じ失敗をしてしまったみたいだ。  
今度からは気を付けないといけないなあ、ハハハ。

「……それ、本当に偶然ですよね？ まさかと思いますが、わざとではないですよ？」

ティラがじろりと睨んでくる。

「ソナナワケナイ」

「何で片言なんですか？ 本当のことを言うてください。言わなければもう一発、喰らわせますよ？」

「偶然じゃない。ついムラムラしてやった。後悔はしてないがやあ  
っ」

本当のこと言ったのに撃たれた！

「パパのえつち！」

「ははは、そうだぞ、フィリア、パパはエッチだぞ」

「子供の前でそれを認めないでくださいよ！？」

ティラが今度は杖で叩いてくる。

この杖、魔法の補助用なのに、だんだんと打撃用になりつつあるな。



『ぜひとも打撃にも転用できる、より攻撃力の高い錫杖メイヌに変えてほしいですね』

痛いからやめて！

「それにしても、あれからもう何日経ったと思っているのだ。すぐに城にくると思って、ずっと待っていたのだぞ」

幸い先ほどの俺の自白は聞こえてなかったらしく、少し拗ねた様子で別のことを責めてくるエレン。

それから、ちらりとティラやフィリアの方を流し見て、

「それにこの二人は……」

そんなエレンを、フィリアが不思議そうな顔で見つめ返し、逆に訊ねた。

「ねえねえ、パパ、このひと、だーれ？」

ふっ……ついにこのときが来たか……。

だがこれ以上、可愛い娘にこの真実を隠し続けることはできないだろう。

「この人はな、フィリアの二人目のママなんだ」

俺は白状した。

「貴様は何を言っているのだ!？」

「ちょ、何で増やそうとしてるんです!？」

エレンとティラが血相を変えて同時に叫んだ。  
そんな二人の反応を余所に、フィリアは満面の笑みを浮かべてエレンに抱き付く。

「わーい！ フィリアの、ふたりめのママあゝ」

お風呂上りでいい匂いがするからか、フィリアはエレンのお腹辺りに顔を埋めて犬のようにクンクンしている。

「あ、あたしはママではないぞっ！」

「ママじゃないの……？」

エレンを見上げ、潤んだ瞳で問うフィリア。

「ぐっ……か、かわいい……」

「だめ……？」

「……だ、ダメなわけないだろう！」

フィリアの愛らしさに、あつという間に陥落するエレンだった。  
さすが天使。最強伝説は揺るがない。

「……フィリアちゃん……もしかして誰でも良かったの……？」

一方、ティラが物凄くショックを受けていた。

「フィリアはママがいっぱいいる方が嬉しいんだよね？」

「うん！ フィリアね、たくさんママがほしい！」

「そうかあゝ。フィリアがそんなに言うなら、ママをたくさん増やさないとなあゝ」

「わーい！ パパ、がんばって！」

よし、パパ、可愛い娘のために頑張っちゃおうぞ！

「……………」

「……………」

エレンとティラが俺に物凄く冷たい視線を向けてきている気がしたが、たぶん気のせいだろう。

『気のせいではありません。なお、わたくしに目という器官があるならば、確実に同じ視線を向けていることでしょう』

と、そこでふと俺はある疑問を抱く。  
フィリアに恐る恐る訊いた。

「ち、ちなみに、パパは俺一人だけで十分だよね？」

「……………うんっ」

答えるまでにすごい間があった気がするが、たぶん気のせいだろう。

## 第21話 脳筋王女と変態執事

「……と、言うわけなんです」

エレンへの説明を終えたティラは、きっぱりと断言した。

「ですので、私たちは夫婦ではありません」

「これから愛を育んでいくところだよな」

重要な補足をする俺。

「育んでもいきません」

ええっ？ 育まないの？

俺がショックを受けている一方で、エレンがプルプルと全身を震わせていた。

「エレンさん……？」

ティラが心配して声をかける。

すると突然、エレンはカッと目を見開いて、

「あのダンジョンを攻略しただど！？ くっ、あたしが攻略する予定だったのに！ というか、なぜあたしも連れて行ってくれなかったのだ！」

ズルいぞズルいぞ！ と怒鳴り声を上げるエレン。  
それから何を思ったか、いきなり立ち上がって、

「こうなったら貴様らを倒し、あたしがダンジョンを攻略したことにしてやる！」

「何でそうなるんです!？」

「脳筋だからな、こいつ」

「脳筋ですか……」

「の、脳筋ではないぞ！　ただ物事は力で解決する方が手っ取り早いと考えているだけだ！」

それ完全に脳筋だから。

「おやめ下され、姫様」

そうエレンを窘めたのは、彼女の執事だという老人だった。

最初にお茶を出してくれて以降、ずっと部屋の端っこの方で静かに直立していたのだが、さすがに主人の行動を見咎めたのだろう。

「爺や、貴様は黙っているのだ！」

「そんなわけにはいきませぬ」

きつぱりと告げ、爺さんはエレンと俺たちの間に割って入ってきた。

「もしお客人との試合を臨むというなら、爺やを倒してからにしてください」

「普通は話し合いですよね!？」

ティラがもつともなツツコミを入れた。

「姫様に話し合いは通じませぬ」

嘆かわしげに首を振る爺さん。

随分と苦勞しているらしい。

にしても見た感じ、結構なよぼよぼっぷりだが、大丈夫なんだろうか？ しかも徒手空拳。

ライオネル 78歳

種族：人間族

レベル：10

スキル：執事

生命：123 / 124

魔力：22 / 22

筋力：41

物耐：57

器用：70

敏捷：37

魔耐：34

運：64

……よ、弱い！

しかしライオネルって、名前だけはカッコいいのな。

「ならば遠慮なくいくぞ、爺や！」  
「ぐはっ」

エレンが爺さんを裏拳で殴り飛ばした。

爺さんの貧相な身体が吹き飛び、近くの家具に激突する。  
やっぱり弱い……。

てか、エレンも爺さんに対して容赦なさ過ぎだろ……。

『103のダメージです。残存生命力は「20/124」。瀕死状態です』

うおおおおいつ!?

もう少して爺さん死んでるところじゃねえか!

「だ、大丈夫ですか?」

ティラが慌てて爺さんの傍に駆け寄った。

フィリアも心配そうに「おじいさん、しんだの?」と俺に訊いてくる。まだ何とか死んでないよ。

爺さんはよろよろと身を起こしながら、

「し、心配は要りませぬ、お嬢さん……」

「で、でも……」

「……わしは姫様が生まれた頃から仕えている身。乱暴な姫様には、幾度となく暴力を振るわれてまいりました……」

「そんな……酷い……」

ティラは痛ましげに睫毛を伏せる。

「……お陰で今では、すっかりそれが気持ちよくなっちゃったのですぞ!」

「はい?」

爺さんはドMだった!

「さあ、姫様っ! これで勝ったとは思わないでください! まだ

まだ勝負はこれからですよ！」

おい、やめる爺さん！ お前はもう瀕死だ！

「くくくくく！」

と思っていたと、懐から取り出した治療薬を豪快に飲み干した。  
爺さんの生命力が全快する！

「とりやあああ　ぐはあっ」

エレンに立ち向かい、またも殴り飛ばされる爺さん。

『112のダメージ。残存生命力は「12/124」』

さっきよりヤバイ！

だが爺さんは再び治療薬を飲み、

「ま、まだまだですよおお　ぐはあっ」

それから爺さんは幾度となく治療薬を飲んでエレンに突っ込んでいき、その度に殴り飛ばされて瀕死状態になった。

未だかつて、これほど無駄な治療薬の使い方があっただろうか…

…。

「……ハアハア、も、もっと……もっと爺やに、ご褒美を………」

ついには体力的な限界がきたらしく動けなくなってしまったが、爺さんの表情は恍惚としていた。



「この世界の爺さんは変態ばかりなのか……」

「人の心配をしてこれほど後悔したのは初めてです……」

俺とティラはドン引きしていた。

一方、エレンはいつものことなのか、何事も無かったかのように爺さんを放置して、

「勝負あったようだな。では次は貴様だ！ 行くぞ！」

抜刀して一気に間合いを詰めてきた。

「貴様は確かに強力な魔法使いかもしれん！ だが接近戦に持ち込めさえすればあたしの勝ちだ！」

「お前、この間、オークが正々堂々じゃないと言ってたなかったけ！？」

そんなツツコミを入れつつ、俺はエレンの斬撃をひょいっと躲した。

「っ！ 貴様、少しは体術も使えるようだな！」

「一応、剣もな」

俺も剣を抜いた。

「ふんっ、アルサーラ王国の破壊姫とまで謳われたこのあたしの剣、貴様に受け切れるかっ！？」

「誇らしげに言ってるけど、それ明らかに蔑称だよな？」

エレンが繰り出す斬撃を、俺は軽く捌いていく。

「くっ……貴様っ、なかなかやるなっ。だがこれならどうだ！ハ  
アアアアアッ！」

エレンの持つ剣が、凄まじい闘気を纏っていく。  
オーラブレード  
闘気剣だ。

しかもギルマスのおっさんより闘気の量が多い。

「って、本気過ぎだろ！？」

「てやあああああっ！」

エレンの剣が迫る。

直後、パキイイインツという破碎音が響いた。

「な……」

エレンが愕然と目を見開く。

まあ驚くのも当然だろう。

全力で闘気を纏わせた剣を、真っ二つに折られてしまったのだから。

「闘気剣くらい、俺にも使えるんだぜ？」

俺もまた闘気を纏う剣で応じたのだった。

エレンも確かに達人だが、闘神を持つ俺の闘気には敵わない。  
交錯した結果、エレンの剣だけが破壊されてしまったのだ。

「そ、んな……」

呆けたように呟くエレン。

俺はそんな無防備な彼女に接近した。

左手でおっぱいを揉みつつ、彼女の喉首に剣先を突きつける。

「俺の勝ちだな」

「このあたしが……剣で負けた、だと……？」

エレンが掠れた声で呻く。

「ああ、お前の負けだ」

俺はエレンのおっぱいを揉み揉みしながら言う。  
でかくて片手じゃ収まらねえぜ……。

「剣だけなら……誰にも負けないと……思っていたのに……」  
「まあでも、かなりの腕だったと思うぜ」

おっぱいの揉み心地もかなりのものだ。  
めっちゃ柔らかいし弾力もやばい。

「ていうか胸を揉む意味ないですよね！？ なにドサクサに紛れて  
揉んでるんですか！」

「そこに胸があるから」

ばこっ。ティラに杖で頭を叩かれた。

「う、うわあああああんっ！ 負けたあああああっ！」

エレンがいきなり大声で叫んだ。

そのまま奥の部屋の方へと走っていつてしまう。

「姫様っ！ つ、ぐはあっ！」

執事の爺さんがエレンの突進を浴びて吹き飛ばされる。  
てか、今わざわざ自分から進路上に飛び込んだぞ。

『123のダメージ。残存生命力は「1/124」』

1っ！？

本当にあと少しで死ぬところだったじゃねえか！

「ひ、姫様あああつ……もつと、もつと爺やを痛めつけてくだされええええつ！」

「うえええええんっ！ 負けたあああつ！ あたしが唯一誇る  
ことのできる剣で負けたあああつ！ 他には何の取り得もないの  
にいいいいつ！ 剣以外には何にもできないのにいいいいつ！ 剣  
術バカから剣術を取ったらただのバカなのにいいいいつ！」

床の上で身を擦らせながら興奮している執事。

扉の向こうで子供のように大泣きしている王女。

「……私、この国と本当に同盟を結んでいいのか、物凄く心配にな  
ってきました……」

何とも力オスな状況に、深々と嘆息するティラだった。

第21話 脳筋王女と変態執事（後書き）

すぐにもう一話上げます。

## 第22話 おっぱい要員が仲間になった！(前書き)

本日2回目の更新です。

## 第22話 おっぱい要員が仲間になった！

オーエンの研究資料が本物であることが確認された後、俺は国王から直々に褒賞金を頂戴することとなった。大金貨千枚である。

難易度Sのクエストを攻略した俺に、ぜひとも直接会ってみたいと向こうから言ってきたのだ。

エルフの里のことについて話したいとも思っていたので、こちらとしても好都合だった。

国王は柔和な笑みが印象的な、いかにも温和そうなおっさんだった。

年齢は四十前後といったところだろうか。

「よければ我が国の騎士団に入団せぬか？」

「気持ちはいがたいけど、組織に入るのとか苦手なんで」

どうやら自ら俺を勧誘するためだったらしい。

しかし俺はあっさり断った。

「そうか。それだけの大金を手に入れば、わざわざ宮仕えをする必要もないしのう」

国王は特に気分を害するでもなく、顎髭をさすりながら頷いた。それからテイラの方へと視線を向け、

「エルフのお嬢さんはどうじゃ？」

「いえ。せっかくですが、私も……」

「ふうむ。残念じゃのう。ではそちらの可愛らしいお嬢ちゃんはどう

うじゃ？」

「パパとママといっしょじゃなくちゃ、いや！」

「そうかそうか」

フィリアにまで訊いたのは、国王なりのユーモアだろう。

子供好きなのか、フィリアの返答を聞いて嬉しそうに笑っていた。いや、ロリコンじゃないと思うよ？

それから俺はエルフの里のことについて伝えた。

「ほう。それは良かった。我々としても、以前からエルフの里とはぜひ友好関係を築きたいと思っておったのじゃ。では早速、改めてこちらから使者を派遣することにしよう」

反応はかなり好意的だった。

しかしエルフの里と同盟を結んだところで、アルサーラ王国としては大した利益にはならない。せいぜい、大森林でしか得られない食材や素材などを入手できるようになるくらい。一方で、アルサーラ王国は同盟国に対し、その安全を保護する責務を負うことになる。

アルサーラ王国ほどの武力があれば、エルフの里を支配下に置くことも簡単だろう。

なのに対等な、いやそれどころか、エルフの里側がほとんど一方的な恩恵を受けるような関係を築こうというのである。

俺がそのことについて指摘すると、

「誰かと仲良くなることに、わざわざ理由が必要かのう？」

逆に不思議そうに訊き返されてしまった。



「無論、それだけではないが。長期的に見て、エルフとの同盟は我が国に利益があると考えておる。それに、様々な種族と友好関係を結ぶことによって我が国は国力を高めてきた。エルフたちと友好関係を築くということは、未だ非友好的な種族に対する良いアピールにもなるのじゃよ」

王女であるエレンがあんなので、「この国大丈夫かよ？」と本気で心配していたのだが、これならエルフの里のことを任せても大丈夫そうだな。

「父上！」

そして謁見を終え、俺たちが立ち去ろうとしたときだった。

突然、エレンが謁見の間に飛び込んできた。

「父上！ お願いがあるのだ！」

国王の元へ、ずかずかと歩いていくエレン。

「あたしを騎士団長の任から解いてほしい！」

「どういうことじゃ？」

「あたしは先ほど、あの男に敗北を喫した。そして自分の弱さを痛感したのだ！」

「……うむ。それで？」

「だからあたしは、あの男に師事することにした！」

エレンはそう勝手に宣言した。

いやいや、それ初耳なんだけどさ？

「あの男はこれから旅に出るといふ！ あたしもそれに付いていくつもりだ！ だから騎士団長を続けることはできないのだ！」

三段論法っぽい言い方なのだが、かえって頭が悪そうに聞こえるのはなぜだろうか。

「なるほど」

「父上！ 頼む！ この通りだ！」

エレンは深々と頭を下げた。

それから今度は俺の方を向いて、

「お願いだ！ あたしを弟子にしてくれ！ あたしには剣しかないのだ！」

鬼気迫った表情で嘆願してくる。

「そんなことないと思うぞ。お前には他にも誇れるものがあるだろう？」

「っ……あたしにそんなものがっ……？」

「ああ」

「それは、一体……？」

不安げな上目づかいで聞いてくるエレンへ、俺は声高らかに告げた。

「おっばいだ！」

あと尻も。

俺が 鑑定・極 で調べたところによると、「B91 W57

H90」である。モデル顔負けだ。

エレンは天啓でも得たかのように、

「そ、そうかつ……あたしには、おっぱいがある……っ!？」

「いやいやそこ、流されないでくださいよ!？ おかしいですから

！ 意味不明ですから!」

「はっ……」

ティラの突っ込みに、エレンは我に返る。

「お、おっぱいなど何の役にも立たないではないか！ 動くときに邪魔になるだけだ！ むしろ彼女のように小さい方がいい!」

エレンはティラの胸を指差して怒鳴った。

「……今の発言、微妙にかなり失礼なんですけど……?」

確かに私は貧乳ですけど、と唇を尖らせるティラ。ちなみに「B  
65 W54 H66」でのAカップある。

それを見て「ママ、だいじょーぶ。フィリアもちいさいよ」と慰めてあげているフィリアさんは健気で可愛いが、何の慰めにもなっていないどころか返って逆効果だな、うん。ティラの頬が引き攣っているし。

「カルナ殿。わしの方からもぜひお願いしたい」

そこへ国王が口を挟んできた。

「いいのか？ 騎士団長が抜けると大変じゃないか?」

「むしろこの脳筋に騎士団長を続けられる方がよっぽど大へ げ

ふんげふん」

咳で誤魔化したが、今ちらつと本音を言いかけなかったか？

「確かに、エレンはこの国一の剣士。抜けてしまうのは大きな痛手じゃ。しかし我が騎士団は、その程度ではビクともせぬよ」

「しばらく娘と会えなってしまうぞ？」

「むしろ早く嫁に出したいところなのじゃがどこも受け入れてくれない　ごほんごほん」

また咳で誤魔化したが、明らかに本音を言いかけたよな！？

「エレンがこれほどの決意をもって決めたことじゃ。国王として、父として、それに答えてやるべきじゃろう」

真剣な顔で主張する国王。

『どうやら一刻も早く出て行ってほしいようですね』

エレン、可哀想な奴……。

まあ連れていくのはいい。

貴重なおっぱい要員だしな。

けどせっかくなので（？）、俺はちょっと意地悪してみることにした。

「……やっぱりエレンは国に残るべきだと俺は思う」  
「なっ！？」

俺の言葉に、国王は愕然としたように目を見開いた。

そして捲し立てるように、

「い、一体、何が気に入らぬのじゃ？ 親バカかもしれぬが、エレンは本当に良い娘じゃぞ？ 見た目だけなら美少女じゃ！ こんな可愛い子を弟子にできるなど、幸せ者じゃぞ！」

「確かに、剣を振ったときにぶるんぶるん揺れるこの爆乳は惜しい」  
「そうじゃろうそうじゃろう？ 弟子にすれば幾らでも見放題じゃぞ？」

国王は玉座から身を乗り出して主張してくる。  
だが俺は首を左右に振った。

「けど、この国にエレンは必要な存在だと思うんだ」

「なぜそうなるんじゃ！？ こんなに素晴らしい娘を弟子にできるんじゃぞ！ 胸だつて揉み放題じゃぞ！」

「それは本人の了解を取るべきですよね！？」（ティラのツッコ  
ミ）

「そんなに可愛い娘と離ればなれになるのは、あんたも辛いだろう？」

「た、確かに辛い！ それはもう、我が身を切るような辛さじゃ！ じゃがな、それでも僕はエレンの決意を無駄にしたいくはないのじゃ！ 国王として！ 父親として！」

必死の形相で叫ぶ国王。

俺はうんうんと頷き、

「その気持ちは分かる」

「そうか！ 分かってくれたか！」

国王は目を輝かせた。

「けどやっぱり連れていけない」  
「なぜじゃあああつ!?!」

一転、天国から地獄へと突き落とされたかのように、絶望的な表情を浮かべる国王。

「連れて行ってくれええつ!! 可愛い可愛い儂の娘のためにいいつ! お願い! お願いじゃからあああつ!! この通りじやあああつ!」

ついには玉座から降り、絶叫とともに俺に土下座してくる。

「父上……そこまであたしのことを想って……くう……」

エレンは感極まったように涙を拭っていた。

ティラが溜息を吐きつつ、俺をジト目で睨んでくる。

「……いい加減、遊ぶのはやめた方がいいと思っんですけど?」

こうして、おっぱい要員、もといエレンが仲間に加わったのだった。

## 第23話 父娘の仁義なき戦い

「今まで世話になったな」

「エレン団長……っ！」

騎士団員たちは、彼女が騎士団長を辞任して旅に出るということを知って、皆一様に涙を浮かべて喜んだ。

「……ああ、これでようやくいつもの意味不明な命令から解放される……」

「あの理不尽なシゴキからも……」

「くう……今夜は宴会だぜ！」

そんな団員たちの反応を目の当たりにしたエレンは、その瞳に涙を浮かべて、

「……そうか。あたしがいなくなるのが、そんなに悲しいのか……」

「いやいや、そうじゃないと思うぞ？」

「どう見ても喜んでるよな？」

「貴様らにそんなことを言われると、さすがのあたしも気持ち揺らいでしまうではないか！」

エレンが前言撤回の可能性を匂わせると、騎士団員たちは大いに慌てた。

「わ、我々のことなど構わないでくださいー！」

「そうです！ 団長はぜひ己が決めた道をお進みください！」

「早く王都を出て行ってください！ お願いします！」

まさに鬼気迫る、といった表情だ。そんなに嫌なのか……。

「くうっ、貴様らのその気持ち、受け取ったぞ！ あたしは必ずもつともつと強くなって戻ってくるからな！」

涙を拭って、力強く宣言するエレン。

「え……戻って来るの……？」

「しかも今より狂暴になって……」

「最悪だ……俺、それまでに退団しておこうかな……」

騎士団員たちは愕然としていた。

ていうか、もうちょっとオブラートに包もうぜ？ エレンは頭がお花畑だからか、聞こえてないみたいだが。

「エレンさんと一緒に旅をするということが、非常に不安になってきました……」

「心配しなくていい。俺も一緒だからな」

「言っておきますけど、もつとも不安なのがカルナさんですから」

騎士団員たちへの挨拶を追えて城を出ようとしたところで、旅支度をした執事の爺さんが追い駆けてきた。

「姫様あああつ！ この爺やもつ、爺やも連れて行ってくださいえええつ！」

ぶつちやけ旅の邪魔なので、俺たちは近くの木の幹に爺さんにく



くりつけた。

「おおおっ！ 拘束プレイでございますねえええっ！？」

何か勘違いしているようだが、俺たちは爺さんを放置して歩き出す。

「っ！？ ど、どこに行かれるのですかっ！？ お待ち下されえええっ！ 爺やも連れて行ってくだされえええっ！ 姫様あああっ！ いつものようにわしを痛めつけて下さぎやああっ！？」

ティラが雷魔法を浴びせて黙らせた。『57のダメージです』

「すいません。うるさかったもので」

「……」

ティラがだんだん暴力的になってきている気がする……。

「それで一体、これからどこに行くつもりなのだ？」  
「獣人の国 エクバーナだ！」

エレンに問われ、俺はそう応えた。

エクバーナ。

アルサーラ王国とも懇意にしているというこの国は、獣人たちの国だった。

アルサーラにも獣人が暮らしているのだが、その数は少ない。しかしエクバーナに行けば、もっと多くの、そして多様な獣人たちに会えるのだという。

もちろん獣人に会って何をするのかと問われれば、あれしかない。

「獣耳をもふもふしたい！」

猫耳、犬耳、狐耳。

それから兎耳に猿耳……は人間の耳と変わらないか。

俺はぜひとも色んな獣耳をもふってみたかった。あと尻尾もね！

『かなりどうでもいい目的ですね』

ついでにペロペロできたら言うこと無しである。エルフ耳みたい

に。  
「……今、背筋がぞわつとしたんですが……」

あのときの舌触りを思い出していると、ティラがぶるぶると身体を震わせた。

「それはいいのだが……大丈夫なのか？」

エレンがフィリアを見ながら訊いてくる。

道中では危険な魔物に遭遇する可能性もある。

子供を連れていっても大丈夫なのか、ということだろう。

「こう見えてフィリアはけっこう強いんだぞ？　魔導人形だしな」  
「えっへん」

フィリアは腰に手を当てて胸を張った。

「……とてもそうは見えないが……」  
「なんなら試してみるか？」

そして俺がエレンに提案したのは、フィリアとの腕相撲対決だった。

「フィリアが勝つと思うぞ」

エレンは冗談だろうという顔をして、

「まさか、あたしが子供に負けるはずがないだろう。これまでに破壊したドアノブの数は百を下らないのだぞ？」

そんなに壊す前に加減というものを覚えようぜ。

「フィリアはまけないもん！」

一方、対抗心を燃やして腕捲りするフィリア。

「本当にいいのか？　あたしは勝負事に関しては手加減ができないぞ」

「だいじょーぶ！」

「ふん。なかなかの覚悟だ」

本気モードの二人は石畳の街道の上に寝転がり、手を組み合った。

「レディ……ファイっ！」

俺の合図で、二人は同時に腕に力を込める。

メキメキメキッ！！

直後、石畳に凄まじい亀裂が走った。

二人ともんでもない馬鹿力だ。

だが勝負は拮抗することなく、一瞬でついた。

ズゴンッ！！

「ぎゃあっ！？」

悲鳴とともに、エレンの身体が地面にめり込んでいた。

エレンに押し勝ったフィリアの腕が、勢い余って石畳を陥没させたのだ。

「勝者、フィリア！」

「わーいっ！」

「だ、大丈夫ですかっ」

ティラが慌ててエレンを引っ張り上げる。

「一体どんな力をしているのだ！？」

さすがは脳筋剣士だ。

石の中に半身がめり込んだというのにピンピンしている。

「フィリアは凄いだろ」  
「しゅごーいしゅごーい！」

俺はフィリアを抱き上げ、ぐるぐるとその場で回転した。

『彼女は筋力値がカンストしていますので、当然の結果でしょう』

フィリア 0歳

種族：魔導人形

レベル：

生命	：5000 / 5000
魔力	：5000 / 5000
筋力	：999
物耐	：999
器用	：700
敏捷	：999
魔耐	：800
運	：300

魔導人形である彼女はこれ以上の成長は見込めないのだが、エレンを大きく上回る能力値だった。

「くっ……もしかして貴様より強いんじゃないのかっ？」

負け惜しみのように、エレンがそんなことを言ってきた。

「パパにもかてるー？」

「はっはっはっ。エレンに勝った程度で調子に乗るなよ我が娘よ」

という訳で、第二ラウンド。

今度は父娘の腕相撲対決である。

「フィリア。負けても泣くんじゃないぞ？」

「だいじょーぶ！　だって、まけないもん！」

開戦前から、バチバチと火花を飛ばし合う俺と娘。

「……子供相手になんで本気になってるんですか……」

ティラの呆れ声が聞こえてきたが、しかし俺は父親の威厳を保つためにも絶対に負けられないのだ。

「で、では、行くぞ。レディ……ファイッ！」

エレンのやや緊張した声を合図に、俺とフィリアは同時に腕に力を込める。

確かに、フィリアの筋力値はカンストしている。

だがそれは俺も同じ。

いや　限界突破　スキルのお陰でリミットブレイクしており、実際には999以上の数値だ。

まず負けることはないだろう

「~~~~~っ!？」

やばいやばいやばい!？

開始早々、俺は一気にピンチに陥っていた。

予想を遥かに超えたフィリアの力に押され、地面まであと五センチというところまで追い込まれてしまったのだ。

なぜだ！？ 俺の方が筋力値は上のはずだろ！？

『力のモーメントの問題です。腕相撲では腕が短い方が有利になります。片方が相手の手首を掴むことで、手首を掴まれている方を有利にするなどといったハンデの与え方は有名でしょう』

そんな重要なことはもっと早く教えてくれよ、ナビ子さん！

「パパ、よわーい！」

フィリアたん、すでに勝利宣言である。  
だが俺は不敵に笑った。

「ふっふっふ、残念だったな、フィリア。実はな、パパはあと三回もの変身を残しているんだっ！」  
「ほえ？」

変身その一！

俺は腕に全身の闘気を集める。

これによって腕の筋力を強化させることができるのだ。

闘神 スキルを有する俺であれば、通常時の五倍近くにまで跳ね上がる。

まさに界 拳五倍だ！

ズゴーーーーンッ！！

次の瞬間、轟音とともにフィリアの身体が石畳の中に埋まっていた。

「パパ、ウィンナーッ!」

ふっ、娘相手にちょっと本気を出してしまったたぜ。



## 第24話 キャンピングカーでGO

「何やってるんですかっ！？ フィリアちゃん、大丈夫っ！？」

フィリアが石畳に埋まり、めちやくちゃ慌てるティラだったが、

「んぱっ！」

という謎の叫び声とともに、フィリアが穴の中から飛び出してきた。

さすが魔導人形。無傷である。いや、少しだけ生命力が減ってるけど。

「フィリアはあれくらいじゃビクともしないって」

「だからって、もうちょっと手加減してあげて下さいよ！ 大人げない……」

ティラが睨んでくる。まだあれでも一回目の変身んだけどなあ。一方、フィリアは喜色満面で俺の胸に飛び込んできた。

「パパ、しゅごーい！ つおーい！」

「はっはっはー、そうだ。パパは強いぞー。けど、フィリアも良い線いってたぞ？」

「ほんとー？」

「ああ」

フィリアを高い高いしながら頷く。  
それが楽しかったのか、フィリアは、

「おもいつきりやってーっ！」  
「よし」

俺は地面すれすれまでフィリアの身体を下げてから、おりやつ、と腕を振り上げた。

「わあああああ

キーン。

……  
……  
……

「思いつきり投げ過ぎたああああああああつー!?」

「言ってる傍から何やってるんですかあああっ！」

そんなハプニングがありつつ、俺たちはアルサーラ王国を出発した。

獣人の国、エクバーナまで徒歩で移動すれば三週間以上はかかるという。

しかし風魔法で空を飛ぶならば、恐らく二、三日で辿り着けるだろう。

「そ、空を飛ぶのは嫌だぞ！」

だがその方法はエレンが強く拒否。

「セクハラされそうなので、私も反対です」

さらにティラまでもが反対してくる。

三人を俺が抱えて飛ぶことになるため、警戒しているのだ。

「そんなに俺のことが信用ならないのか？」

「むしろどうして信用してもらえんと思ってるのかが不思議なくらいです」

相変わらず厳しいティラさんである。

他には転移魔法を繰り返すという手もあった。

というか、これが一番簡単な方法で、恐らく数時間ほどで到着できるに違いない。

魔力回復・極 を持ち、魔力値がリミットブレイクしている俺なら、転移魔法を百回以上連続で使っても魔力は枯渇しないだろう。

しかしせっかく旅をするというのに、それでは何だか味気ない。という訳で、 製作・極 スキルを活かして作ってみました。

昨晚、ほぼ徹夜で作り上げたそれを 無限収納 から取り出す。

「な、何だこれは!？」

「ゴーレムですか？」

「おっきいー」

それは身の丈ゆうに五メートルを超えるゴーレムだった。

ただしよくRPGのモンスターとして登場する、のっぺりとしたやつではない。

むしろ戦隊モノとかで、巨大怪人と戦う人型ロボットに近いだろう。

材料は鋼と聖銀<sup>ミスリル</sup>の合金。聖銀は高価だが、S級ダンジョンクリアの報酬で購入した。

土魔法を使えば、硬い金属も自由自在に曲げたり切断したりすることが可能だ。 魔力操作・極 を持つ俺なら、もっと繊細な加工作業もお手のもの。

ちなみにこのゴーレム、しゃべることもできる。

『あーあー、マイクテス、マイクテス』

「ゴーレムがしゃべったぞ!？」

いきなり響いた声に、エレンが腰を抜かしかける。

『初めまして、ティラ様、エレン様、フィリア様』

「私たちの名前まで……っ？」

「しゅごい！」

実はこの声の主、ナビゲーション道案内・極のナビ子さんだった。

これまでは俺にしか彼女の声を聞くことができなかったのだが、これまた俺が自作した特殊な外部スピーカー的魔導具によって、その課題を克服したのである。

『いつもマスターが大変ご迷惑をおかけしております。マスターに代わって、深くお詫び申し上げます』

「このゴーレム、なんて礼儀正しいんですか！」

ティラが感動していた。

実際にはゴーレムとナビ子さんは別物なんだけどな。

ゴーレムには独自の人工知能を搭載している。フィリアを完成させた俺なら朝飯前だ。

ナビ子さんにはこの人工知能に対し、命令する権限の一部与えているだけに過ぎない。

「この子の名前は何というのだ？」

「ナビ子さんだ」

「なびこ……っ？」

『やはりマスターのネーミングセンスの酷さには誰もが絶句するようです』

そんなに酷いかなあ？

「しかし考えてみたらまるで女性っぽくないな、このゴーレム」

ナビ子さんは女性（たぶん）だというのに、ゴーレムは何となく男っぽい。

「よし、ここにパラボラアンテナを二つ並べて付けてみようか」  
『絶対にやめてください』

何で？ おっぱいっぽいのに。凹んでるけど。

「じゃあ代わりに股間に猛々しい巨砲を」  
『それも絶対にやめてください』

ナビ子さんは本気で嫌そうだった。

実はこのゴーレム、何と変形ロボットばりのトランスフォームま  
でできるのだ。

早速、ナビ子さんに第二形態へと変身してもらった。

「す、すごい！ 形を変えたぞ！？」

「かっくい」

「何ですか、これは……？」

それはキャンピングカーだった。

当然のことながら、車内に乗り込むことができるようになってい  
る。一応、ゴーレム状態でも中に入ることは可能だが。

「な、何だこれは……？ 中にリビングやキッチンまであるぞっ？」

ちゃんとお風呂やトイレも付いている。

しかも二階建て。

二階にはベッドがあり、寝室となっていた。

「しゅーい！」

瞳をきらきらと輝かせ、一階と二階を行ったり来たりしながら走り回るフィリア。

「これ、本当に動くんですか？」

「もちろん」

このゴーレム兼キャンピングカー “NABIKO” は俺の魔力を動力源としている。正確には蓄魔石にあらじめ溜めておいた魔力で走る。なので外部からの燃料の補給は必要ない。

車輪がゆっくりと回転を始め、車は前進を始めた。

『出発いたします。目的地・エクバーナは、北北東方向におよそ六百二十キロ。到着予定時刻は、現在からおよそ百三十時間後です』

車内にナビ子さんの声が響く。

運転は基本的には彼女任せだ。

障害物は勝手に回避してくれるし、何かあれば警告音で知らせてくれる。

俺たちは乗っているだけでいい。何て楽チンな旅だろうか。

『警告。三十を超す騎馬集団が接近中です』

NABIKOのリビングでのんびりしていると、不意にナビ子さんからの警告があった。

「野盗か」

後部の窓から外を見ると、いかにも野盗っぽい連中が車を追い駆けてきていた。

「なんだあの馬鹿でかい馬車は！」

「いや、馬がいねえぞ？ どうやって動いてんだよ？」

「ゴーレムの一種かもしれねえな。破壊して部品を売れば金になるぜ！」

キャンピングカーなど見たこともない彼らは、ゴーレムの一種と思ったようだ。実際、その通りなのだが。

「ひやつはー、俺に任せろおおっ！」

やけにハイテンションな野盗の一人が魔法を唱え始めた。  
中級の火魔法だ。

炎の塊がこつちに飛んできて、車体に直撃した。

「なっ……無傷だとっ？」



ただの金属じゃなくて、聖銀を含んだ特殊合金製だからな。  
聖銀は魔力を帯びた金属であり、ちょっとやそつとのダメージでは傷一つ付かない。

『迎撃システムを作動しますか？』

ナビ子さんが訊いてくる。

「ここはあたしに任せてくれ！」

俺が返事をする前に、エレンが窓を開けて身を乗り出した。  
走行中のキャンピングカーから飛び降りる。

注：脳筋だからできることです。良い子は絶対にマネしないでね。

「フィリアもいくーっ！」

早速、良い子がマネをしてしまった……。

「なんだ、人が乗っていやがったのか？」

「女と子供だぜ？」

「ひやはははっ、しかもかなりいい女じゃねえか！ 捕まえて楽しもうぜ！」

お約束な下衆台詞を吐く野盗たち。

「ふん。貴様らごとき、準備運動にもならんぞ」

エレンは迫りくる騎馬隊の群れへ、恐れる様子もなく突っ込んでいった。

「ば、馬鹿かこの女っ、馬に轢き殺されぐべっ!？」

先頭を走っていた野盗が、気がつけば馬ごと宙を舞っていた。  
エレンが拳で馬体を殴り、吹っ飛ばしたのだ。

「剣を抜く必要すらなさそうだな」

さらにエレンは次々と野盗を殴り飛ばしていく。

「何なんだあの化け物は!？」

「あの赤い髪っ! まさか……破壊姫っ!？」

「アルサーラ王国最強の脳筋女が何でこんなところに!？」

エレンの正体に気づいた野盗たちが戦慄する。

「くっ……仕方ねえ! あっちの幼女だ! 幼女を人質に取れ!」

野盗たちの首領と思しき男が叫んだ。

「ただし絶対に傷はつけるなよ! 幼女を傷つけたらただじゃ置かねえからな!」

「当たり前っす!」

「幾ら野盗でも、幼女を傷つけるほど落ちぶれちゃねえ!」

「たとえ餓死したとしても幼女だけは護る! それが俺たちのポリシーだ!」

随分と幼女好きな野盗たちだった。

「さあ、こっちにおいて……怖くないよ、ハアハア」

「お、おじさんたちと少しおしゃべりしようよ?」

「お菓子あげるから……」

数人の野盗たちがフィリアを取り囲む。

完全に変質者である。

「フィリア、おじさんたちきらい!」

フィリアがはつきり言うと、野盗たちはショックを受けたようで、

「な、なぜだ!? 俺たちの何がいけないんだ!?」

「だって、くさいもん!」

「「お風呂に入っておくべきだった——っ!」!」!」

天を仰ぐ野盗たち。

フィリアは鼻を摘みながら彼らを蹴り飛ばした。

十メートル以上も吹き飛んでいく。

「なんだあの少女は!? めちゃくちゃ強いぞ!? 俺も蹴られた  
い!」

「くそっ、退避っ! 退避だあああっ!」

「待て! 逃がさんぞ!」

泡を食って逃げ出す野盗たち。それをエレンが追い駆ける。

その様子を、俺はキャンピングカーの上から見下ろしていた。

「とりあえず風呂代わりにこいつでも喰らっておけよ」

逃げていく野盗たちへ、上級の水魔法をぶつ放す。

巨大な水塊が怒涛と化して野盗の群れを一拳に呑み込んだ。

ついでにエレンも。

「なんであたしまでえええぶふあっ」

後からびしょびしょになったエレンを回収した。

服がすけすけになってて非常にエロかった。

さすがはおっぱい要員である。

## 第25話 幻のドラゴン

俺たちを乗せたNABIKOは山麓の道を走っていた。

アルサーラ王国の王都からおよそ四百キロ。

正確には定められていないらしいが、この辺りが国境らしい。

この先は山岳地帯になっていて、エクバーナに行くには立ちどころ山を超えなければならないという。

その麓にある町にNABIKOが辿りついた。

ここで少し休憩しようと、俺たちは車を降りる。無限収納で

異空間に仕舞っておく。駐車料金を取られないので便利だ。そんなのこの世界にはないが。

「一体どうやってるのだ、それは？」

「私も気になります」

「企業秘密だ。……どうしても知りたければ、おっぱ」

「やっぱりいい」「やっぱりいいです」

町に入ると、ティラが怪訝な顔で呟いた。

「何だか少し騒がしいですね」

閑静な田舎町といった趣なのだが、様子がおかしい。

武装した集団を町のあちこちで見かけるのだ。

「冒険者のようだぞ。だがなぜこんな辺鄙なところに大勢いるのだ？」

『どうやら近くの山にドラゴンが棲み付いたようです』

エレンの疑問に、携帯式のスピーカーを通じてナビ子さんが答える。

さらに町の住人たちから話を聞いてみると、ドラゴンは時々麓の町に降りてきては食い物を荒らして帰っていくのだという。

人への被害は出ていないが、住民たちが冒険者ギルドに討伐を依頼したらしい。

しかもそのドラゴン、目撃者によれば随分と珍しい種族のようだ。希少種ドラゴンの鱗や牙、骨などといった素材は、かなり高値で売れる。

それゆえ各地から続々と冒険者たちが集まってきたというわけだ。

「せっかくだし、俺たちも行ってみようぜ」

「ひいっ」

「あんなの倒せるわけがねえ！」

ドラゴンがいるという場所に向かって山道を登っていると、上から冒険者と思しき集団が駆け下りてきた。

見るからにボロボロだ。

恐らく返り討ちに遭って逃げ帰ってきたのだろう。

あつという間に俺たちの脇を通り過ぎ、麓へと走り下りていく。

「なるほど！　なかなかの強敵らしいな！」

これは楽しみだとばかりに、エレンが不敵に笑う。

さらにしばらく進んだとき、後ろから声をかけられた。

「君たちもドラゴンを狩りにきたのかい？」

若い男だった。

しかもイケメンで長身。

細身なのに腕力に自信があるのか、背中にかなり巨大な剣を担いでいた。

彼の後ろには、パーティメンバーと思われる女の子が二人。

どちらもけつこく可愛い。

まあ俺の嫁たちには敵わないけどな！

「そうだけど、あんたたちは？」

「僕たちもそうさ。僕はアルク。よろしく」

「俺はカルナだ。よろしくな」

手を差し出されたので、俺は握り返した。

なかなか爽やかな奴だ。

「アルク……？　どこかで訊いたことがあるな」

エレンが呟くと、アルクが引き連れている女の子の一人が自慢げに叫んだ。

「当然よ！ アルクはAランクの冒険者なんだから！」

「ははは、と言っても、まだまだひよっこさ」

そう謙遜するアルク。

「なるほど。過去に単独でレッドドラゴンやツーヘッドドラゴンを倒したこともあるという、あのドラゴン殺しのアルクか」

エレンが納得いったというふうに頷く。

脳筋ではあるものの、実力のある冒険者の情報については結構詳しいようだ。

「この先に居るのはかなり強力なドラゴンらしいし、必ず討伐できるとは限らないけれどね」

アルクはやはり謙虚なやつだった。

だがパーティメンバーたちはそんなことはなく、

「何を言ってますの。アルクがいれば、どんなドラゴンも敵ではありませんわ」

「そうよそうよ！ それに、あたしたちもいるしね！」

ちなみにこの二人はBランクの冒険者らしい。

声がやかましい方が魔法使い。

もう一人のお嬢様っぽいしゃべり方をしている方は、治癒術師のようだ。

「あなた方には悪いですけど、獲物はわたくしたちがいただきますわ。もっとも、あなた方に討伐できるとは思えません」



その治癒術師の女の子が嫌味を言ってくる。

「しかもこんなところに子供を連れてくるなんて！　ぷぷっ、バカなんじゃないのっ？」

魔法使いが吹き出した。

アルクは良い奴っぽいけど、こいつらはちょっと性格悪いな。

「だけど確かに少し心配だね。女の子が多いみたいだし……って、それは僕らも同じか。そうだ。もし君たちが良ければ、せっかくだし一緒に行かないかい？　相手はドラゴン。少しでも味方が多い方が僕たちとしても助かるからね」

真摯な態度で、アルクはそんなことを提案してくる。

「相変わらず優しいですね、アルク」

「ほんと！　放っておけばいいのに！　よかったわね！　これであんなたち、死なずにすんだわよ！」

一方の女子二人の見下したような言葉に、ティラがムツと眉根を寄せた。

エレンに至っては今にも殴り掛かりそうな勢いだったので、俺が羽交い絞めして止めた。

フィリアは「あたらしいママキタ？」と呟いている。意外と見境がないな、この子……。

まあ、わざわざ獲物を取り合うのもめんどくさいしな。別に報酬や稀少なアイテムが欲しい訳でもないし。

「いいぜ」

俺はあっさりOKした。

そしてアルクたちとともに、件のドラゴンがいるという洞窟までやってきたのだが、

「いない？」

何もいなかった。

結構広い洞窟内を隅々まで探してみたが、ドラゴンの姿が見当たらない。

「すでに討伐されてしまったのかな？」

「いや。どうやら入れ違いになっただけみたいだな」

「入れ違い？」

「もうすぐ戻ってくるぜ」

俺の言葉に、アルクの女の子二人は「何言ってるのこいつ？」という顔を向けてきたが、すぐに俺が正しかったことが証明されることとなる。探知・極 スキルを舐めんなよ。

ゴウツ、と凄まじい風が突如として洞窟内に吹き込んできた。

次の瞬間にはもう、俺たちの目の前にそいつがいた。

ドラゴン、というより、東洋的な龍という言葉の方が相応しいかもしれない。

翼はないが、魔力によって空中に浮かんでいた。

全長は八メートルほど。見た目は巨大な蛇だ。

全身は新雪を思わせる真っ白な鱗に覆われていて、しかも淡く発

光している。

その様はなんと幻想的だ。

しかしその圧倒的な存在感は、『大賢者の塔』で遭遇したレッドドラゴンを遥かに凌いでいた。

「なっ……こんなドラゴン、見たことないぞっ?」

アルクが瞠目している。

「そりゃそうだろ。こいつ白輝竜だぜ」

「白輝竜だって!? バカな……神竜の一種じゃないか!」

鑑定・極 でドラゴンの種類を調べた俺の言葉に、アルクはさらに驚愕した。

ドラゴンは一般的に、下位竜、中位竜、上位竜の三種類に分けることができる。

上位竜が最も強く、例えばレッドドラゴンはこの上位竜に相当する。

上位竜（成竜）の討伐は、難易度A。

これをもし単独で討伐することができれば、即ランクAに認定されるという。

だがその上位竜の上にも、伝説級とされるドラゴンがいる。

まずは超竜。

もしこれが暴れば、たった一匹で国が滅びるとまで言われている災厄級の化け物だ。

かつて九つの首を有するヒュドラに、Aランクの冒険者十数名で構成された討伐隊が挑み、その半数を失ってようやく倒すことに成功したという話が残っているほど。

そして、その超竜のさらに上に位置づけられるのが、神竜である。

これは超竜以上に目撃されることは少ない。

地上に降りてくることがめったにないせいだ。

そのため幻のドラゴンとも言われ、存在そのものが疑われているほどである。

白輝竜はその神竜の一種だった。

しかしこんな珍しい奴と出会うことができるなんて、さすが 幸運・極 スキルを持っているだけのことはあるぜ。

……よし。

決めた。

「こいつを我が家のペットにしよう」

## 第26話 VS 白輝竜

伝説の神竜、白輝竜が俺たちを見下ろしながら呟いた。

『……また人間』

言語理解・極 を持つ俺にしか聞き取れない言葉だったが、ちょっと不機嫌そうだ。

「ふん、バカね。神竜がこんなところにいるわけないでしょ！ レッドドラゴンより小さいしさ！ ほら、いつものようにさくつと殺っちゃうわよ！」

威勢よく宣言したのは、アルクのパーティの魔法使いの女の子だった。

彼女は呪文の詠唱を始めた。

さすがはBランク冒険者というだけあって、二秒ほどの詠唱で中級の雷魔法が発動した。

雷撃が白輝竜に直撃する。

「ふふん、どうよ！ えっ！？ き、効いてないっ？」

白輝竜はまったくの無傷。

『0のダメージ。中級程度の攻撃魔法では、あのドラゴンにダメージを与えることは不可能です。白輝竜の鱗は魔法にも物理攻撃にも高い耐性を有しています』

並みのドラゴンならいざ知らず、神竜ともなればこちらも相應の攻撃をしなければダメージすら与えられないのだ。

だがノーダメージのはずの白輝竜は、なぜかわななと身を震わせていた。

『わたしのご飯が……』

白輝竜の近くにお皿が浮かんでいた。

しかしその上に乗っているのは、今の雷撃で炭化したのだろう、真っ黒い物体だった。

『許さない』

白輝竜が大きく口を開けて、咆えた。

オオオオオオオオオオオッ！！

「「「っ！？」「」」

それだけで凄まじい衝撃波が放たれ、俺たちは後方へと吹き飛ばされる。

「く……まさか、咆哮だけでこれほどの衝撃波をつ……。二人とも大丈夫かい？」

「う、うん、ありがとう、アルク！」

「た、助かりましたわ……」

アルクは自分自身は壁に叩き付けられながらも、二人の女の子を身を挺して護っていた。

さすがである。

助けられた女の子たちは完全に恋する乙女の顔。

まあけど、俺には負けるな。

なにせこっちは三人だ。

「一応礼は言いますけど、ドサクサに紛れてお尻触らないでほしいんですが？」

「あ、あたしは胸を揉まれたぞ！」

「パパのえっちー！」

なのにこの反応だぜ？

やっぱり顔か？ 顔なのか？

『すべての責任を顔に負わせる前に、その変態行為をどうにかした方がよいかと』

ちなみにフィリアには何もしてないからな（重要）。

「こ、こんなときに君たちは何をしているんだっ？ ……くっ、こは僕が時間を稼ぐっ！ 早く逃げるんだ！」

アルクが巨大な剣を抜き、決死の形相で白輝竜へと斬りかかった。自らが囷になることで、仲間や俺たちを助けようとしているのだ。なんてイケメンだよ。

キーン、と甲高い金属音が響いた。

アルクの大剣と白輝竜の尾が花火を散らす。

「おおおおっ！」

凄まじい速度でアルクが大剣を振るう。

白輝竜は尾を剣のように扱い、アルクの斬撃を捌く。

「<sup>ミスリル</sup>聖銀製の剣が……っ！？」

アルクの大剣が刃毀れしていた。

逆に白輝竜の鱗には一切の傷が付いていない。

鋼の数倍の高度を持つとされる聖銀ですら、白輝竜の鱗の強度には敵わないのだ。

アルク自身の実力もさるものだった。

さすがはAランクの冒険者だ。

アルク 21歳

種族：人間族

レベル：40

スキル：両手剣技 闘気

生命：942 / 1189

魔力：72 / 72

筋力：374

物耐：358

器用：301

敏捷：299

魔耐：197

運：203



ステータスを覗いてみても、同じ剣士であるエレンには匹敵する。

『意外とやる。けど、所詮、人間』

白輝竜が口を開き、アルクに噛みつかんと迫った。

剣を振るうだけで精一杯だったアルクに、それを躲す余裕はない。

「アルク!？」

「いやあああつ！」

アルクの女の子たちが悲鳴を上げた。

「あ、あれ……僕は……？」

「大丈夫か？」

俺はアルクを救出していた。

喰らいつこうとしていた対象を失い、白輝竜の罅からガキンという音が響く。

「き、君が助けてくれたのか……？」

アルクが目を見開いて訊いてくる。

って、そんな至近距離で見つめてくんناよ。

俺は彼をお姫様抱っこしていた。

ぎりぎりだったため、さすがの俺も体勢を考慮する暇がなかったのである。

イケメンをお姫様抱っこするとか、なんて罰ゲームだよ……。

『今の速さ、なに？』

白輝竜がこつちを見て驚愕の声を漏らす。

俺はアルクを地面に下ろすと、白輝竜と向かい合った。  
そしてドラゴンの言葉で話しかける。

『俺はカルナだ』

『人間が竜語を？ ……珍しい』

『お前に一つ、提案がある』

『なに？』

微かに首を傾げたドラゴンに、俺は言った。

『俺のペットにならないか？』

『……なんの冗談？』

『俺は本気だぜ？ ほら、ちゃんと首輪も用意している』

俺は鎖の付いた首輪を見せた。

こんなこともあるうかと作っておいたのだ。

「……なんかまた口クでもないことしようとしてません？」

竜語でのやり取りは理解できないだろうに、ティラが半眼で俺を見ってくる。

『……条件がある』

白輝竜は意外にも俺の提案に乗ってくる気配を見せた。

『美味しい食べ物、食べさせて』  
『ああいぜ』

俺はあつさり頷いた。

この神竜、なぜこんなところにいたのかと言うと、実は人間が作る料理の味を覚えてしまったかららしい。

だから人里に現れては、作りたての料理を奪っていたのだ。

『もう一つある』

『なんだ？』

『弱い者の下にはつきたくない』

それは恐らくドラゴンとしての矜持だろう。

『じゃあ俺がお前に勝てばいいってことだな？』

『勝つのは無理。だから認めさせればいい。それで十分』

『ありがたい譲歩だけど、それは遠慮するぜ』  
『なぜ？』

不思議そうに聞いてくる神竜へ、俺ははっきりと断言してやった。

『お前より俺の方が強いからだ』

神竜の雰囲気が変わる。辺りの空気がビリビリと震えた。

『……身の程知らずは、早死にする』

『ご忠告ありがとよ』

白輝竜が長い身体を撓めた。

その全身を強烈なドラゴンの闘気　竜気が覆っていく。

先ほどアルクとやり合ったときとは違う。  
本気モードだ。

「ティラ、エレン、フィリア、それとその他三人。できる限り離れてろ。巻き添えを喰うぞ」

皆に注意しつつ、俺もまた全身に闘気を纏って戦闘モードへと移行する。

こいつは間違いなく、俺がこれまでに戦った中で最強の敵だ。  
それなりに本気を出さないと。

『いく』

『来いよ』

そして俺と神竜は激突した。

第27話 被告人「信じてくれ。俺はペットに首輪をつけたただだ」

白輝竜が凄まじい速度で突っ込んでくる。

「っと！」

名剣すら凌駕する切れ味を持つ牙を寸でのところで回避しつつ、俺は白輝竜の口を掴んだ。

身体強化・極に加え、闘気を纏うことで跳ね上がった俺の握力で、みしみしと白輝竜の口部が軋む。

さらに俺はその場で身体を回転させた。

「おらああああっ！」

遠心力を付け、円盤投げの要領で白輝竜を投擲。

『っ！？』

己の突進の勢いも利用された白輝竜は、音速に迫る速度で洞窟の外へと吹き飛んでいく。

俺は転移魔法を発動。

一瞬で先回りすると足を振り上げ、こっちに飛んでくる白輝竜へと踵落しを叩きつけた。

落雷のような速度で白輝竜の巨体が山道に激突し、大量の土砂が辺りに四散する。

「やったか！？ って、一応言ってみる」

『やっていません。ダメージは243です。竜鱗のお陰で元より高い物耐値ですが、竜気を纏ったことで限界突破リミットブレイクしています。やはりマスターの打撃でもダメージは低いようです』

ナビ子さんの言う通り、舞い上がった土煙の中から白輝竜が飛び出してきた。

『さすが。ほとんどダメージなしか』

『……ちよつと痛かった』

白輝竜はムスツとしたように呟いてから、口腔を大きく開ける。轟く咆哮。

そしてそれは強烈な衝撃波と化し、迫りくる。

「ぐおっ」

咄嗟に全身を闘気で覆ってガードするも、馬鹿みたいに重たい衝撃により、俺の身体は空高く吹き飛ばされてしまう。風魔法でどうにか空中に停止したが、身体が痛い。

『マスター、163のダメージです』

「いってえ、闘気で身を護ってたつてのに、今までで一番大きなダメージだな」

『生きてる？ 普通の人間なら、今ので粉々』

白輝竜が驚いた様子で物騒なことを言ってくる。

こいつ、今のは完全に殺す気で放ちやがったな。

俺は 自然治癒・極 のお陰で瞬く間に痛みが消え、生命力が回復していくのを感じつつ、

『さて、遊びは終わりだ。もうちょっと本気を出すか』  
『わたしもそうする』

白輝竜が身を躍らせて迫りくる。  
俺は牙撃を転移魔法で回避。

白輝竜の死角である頭上へ転移するが、あらかじめ予期していたかのように尻尾が襲いかかってきた。

咄嗟に身を捻って躲す。

しかし尻尾はすぐさま反転し、追撃してきた。

硬質な鱗でできたあの尾の強度は、聖銀製の剣すらも上回る。  
さらに今はドラゴン特有の闘気　竜気を纏っているのだ。  
正直、真面に喰らいたくはない。

白輝竜は牙と尾、そして前脚と後脚の爪を振るって俺を攻め立ててくる。

器用なことに、まるでそれぞれが独立した意志を持っているかのようだ。

それでいて高度な連携で俺を追い込もうとしてくる。

俺は転移魔法を駆使しつつ、それを避けていく。

『逃げてばかり』

『本気でそう思ってる時点でお前の負けだぜ？』

『っ！？』

白輝竜の攻撃が停止する。

ようやく、自由な身動きを封じられていたことに気が付いたのだ。

『絡まった……？』

白輝竜の長い身体がもつれた糸のようになっていた。当然、そうなるように俺が誘導していたのである。ただ闇雲に逃げていた訳ではないのだ。

『……やられた』

かなり複雑に絡まっているので、そう簡単には抜け出せまい。俺はあっさりと白輝竜の尻尾の先を掴んだ。

「セーのっ」

という掛け声とともに、その場でぐるぐる回転する。

白輝竜の巨体が振り回される。

音速を超え、轟音が鳴り響く。

「おおおおっ！」

先ほどとは比べ物にならない遠心力を付けてから、俺は白輝竜を山岳の岩壁目がけて放り投げた。

『クリティカルです。1986のダメージ』

間髪入れず、俺は神竜目がけて魔法を放たんとする。

まああの場所なら破壊しても問題ないだろう。

「ミルニル 超級魔法 神怒ノ雷霆」

巨大な魔法陣が虚空に展開される。直後、視界が稲光で埋め尽くされ、破壊的な雷鳴音が天地を豪快



に震わせた。

『わたしの負け』

俺の姿を認めるなり、白輝竜はあっさりと敗北を認めた。  
その美しい鱗はあちこちが黒焦げになっている。  
竜の鱗は魔法耐性も高いが、さすがにあの威力の雷魔法には耐え切れなかったようだ。

『生命力が残り2割にまで減っています。戦闘続行は可能ですが、宣言通りその意欲は無いようです』

神竜の高い自然治癒力なら放っておいてもそのうち完治するだろうが、俺は回復魔法をかけてやることにした。

「グレイトヒール」

『回復魔法まで使えるとか』

驚く白輝竜に、俺は言う。

『約束は守ってもらうぞ？』

『ドラゴンに二言はない』

白輝竜は頷いた。

『ただし、そちらも約束は守ってもらう』  
『男に二言はねーよ』

俺もまた頷く。

この白輝竜、別に人を襲うためにここに棲みついていた訳ではない。

ドラゴンにしては珍しいことだが、ただ美味しい物を喰いたかっただけなのだ。

だがこのままだと、もっと本格的な討伐隊がやってきていたことだろう。

化け物クラスの力を持ったSランクの冒険者も現れたかもしれない。

そう簡単にこいつが負けるとは思えないが、神竜とはいえ、まだ幼竜だ。

もしものこともある。

という訳で、我が家のペットにすることにしたのだ。

まあそれだけが理由じゃなくて、俺、異世界に行ったらドラゴンを飼ってみたいと思ってたんだよな。

『ん』

白輝竜は大人しく首輪を受け入れた。

サイズが自動的に変化する魔導具なので、ぴったりである。それ以外の機能はない。

なのでぶっちゃけ逃げようと思えば逃げれるんだが、まあそのときはそのときだ。

「パパ、しゅごーい！」

向こうからフィリアたちがやってくる。

俺が手を振って応じると、ティラとエレンが驚愕していた。

最初は俺が単独で白輝竜を倒したからだと思っていたのだが、どうも様子がおかしい。

二人が俺に向ける視線が、明らかに軽蔑の感情を含んでいたのがある。

「……前々から変態だとは思ってましたが、まさかここまでだとは思いませんでした」

「あ、あたしでも、それはさすがに引くぞ……？」

え、どういうこと？

なんで二人の俺への好感度が凄まじい勢いで下がりつつあるんだ？

俺は訝しげに首を傾げつつ、後ろを振り返った。  
するとそこには

首輪をつけた全裸の女の子がいました。

## 第28話 まさかフラグが立っていたなんて案件

振り返ると、首輪をつけた全裸の女の子がいた。

白い。

それが第一印象だ。

髪が純白。

そして肌も怖ろしく白い。

人形のように整った顔立ちをしているが、表情は寝起きのようにぬぼーっとしている。

その雰囲気はどこか儚げ。

見た目の年齢は中学生くらいか。

意外にも胸はそこそこあって、真っ白い乳房の上に可愛い桜色の小さな蕾が乗っている。

一方で、下は完全につるつるだ。

にしても、全裸の少女が首輪を付けていると、こんなにもエロいのか……（歓喜）。

「って、いつまでじろじろ見ていますかっ」

「目の前に全裸の女の子がいるなら絶対に目を逸らさない。それが俺のポリシーだ」

「そんなポリシー今すぐ捨ててください！」

ティラが怒鳴り声を上げつつ、自分が羽織っていたマントで少女の裸体を隠した。

「あ、あなた一体、誰なんですかっ？ 何で服を着てないんですっ」

すると少女は、ぬぼーっとした顔のまま、

「わたしはドラゴン。服は着ない主義」

「えっ……？」

「そいつはさっきの白輝竜だ」

俺が言うと、少女はこくと頷いた。

白輝竜 A

種族：白輝竜

レベル：7 1

スキル：咆哮 竜気 限界突破

生命：7 8 9 1 / 7 8 9 1

魔力：4 2 3 2 / 4 4 8 8

筋力：7 1 2

物耐：9 5 3

器用：6 0 1

敏捷：8 7 9

魔耐：9 1 2

運：7 7 8

鑑定してみると、はつきりと白輝竜であることが分かる。もっとも、俺以外には見ることはできないのだが。

ティラは目を丸くして、

「で、でも……どう見ても人にしか……」

「わたしは特別。人の姿を取ることくらい、造作もないこと」

少女は少しだけ自慢げに答えた。

『高位のドラゴン是人化することが可能です。彼女ほどの年齢で、ここまで使いこなせるのは珍しいですが。さすがは神竜ですね』

にしても、あのドラゴンが人の姿を取ると、こんな風になるなんてな。

人語も使えるようだし、頭が良いのだろう。

淡々としていて抑揚に乏しいが。

「その姿のまま人里に行けば、こんな騒ぎにならないで済んだんじゃないですか？」

「行った。けど、なぜか店を追い出された」

ティラの質問に、少女は微かな不満を滲ませて応じる。

「ちなみにどんな格好でした？」

「この姿」

つまりは裸で店に入っただけらしい。

「むしろ追い出されて当然ですッ！」

「あと、お金がない」

「それでよく入店しようと思いましたね……」

「ちゃれんじ」

少女は胸を張った。

「そんな誰かさんみたいなチャレンジやめてください!」

「え? 誰かさんってもしかして俺のこと?」

「……他に誰がいるんですか……?」

ティラが俺を見て深々と溜息を吐く一方、フィリアがきらきらした瞳を向けてきた。

「ねえ、パパ。もしかして、あたらしいママ? あたらしいママきたー?」

少女が小さく首を振って否定する。

「違う。わたしはペット。よろしく」

「ペット?」

「そう」

「ママじゃないけど、ぺっと! わーい、ぺっと! ペっとーっ!」

ママじゃないと知って残念がると思いきや、フィリアは大喜びだった。

この子の中でママとペットの差は何なんだろうな……?

フィリアは目いっぱい背伸びをすると、よしよしと白輝竜の頭を撫でた。

白輝竜はそれが気持ち良かったのか、「ん」と声を漏らしながら自分から頭を下げる。

「よしよしよしよしよしよしよしよしよし」

フィリアは白輝竜の白い頭を物凄くもふもふし始めた。

お前はムツ　ロウさんか。

「まさか、本当に白輝竜をペットにしてしまつとはな……」  
「人の姿だとすぐ犯罪臭がするんですけど……」

エレンが驚愕し、ティラが半眼になって睨んでくる。

「ところで貴様の名前は何というのだ？」  
「わたしは幼竜。名前はまだない」

エレンが訊ねると、夏目漱石っぽく答える白輝竜。

『ドラゴンは普通、成竜となって初めて名前を与えられます。ただし彼女のように群れから外れた個体の場合、一生、名無しのままであるケースもあります。なお個体差はありますが、概ね百歳前後で成竜になります』

この白輝竜はまだ15歳らしい。もし百歳まで待つとしたら、あと85年だ。

「それじゃ不便だし、名前を付けるか」  
「好きにすればいい」

俺の提案に、白輝竜は興味なさそうに頷いた。

「じゃあ、白いからシロで」  
「安直すぎじゃないですか！？」　犬じゃないんですから！  
「それでいい」

俺に意見にティラが異を唱えてきたが、本人はあっさりOKした。



「いいんですか！？　せめてもうちよつと女の子っぽい名前にしましょうよ！」

そこでエレンが手を上げた。

「あたしに良い案があるぞ！」

「そうですね、やっぱり女の子の名前は女の子が付けた方が無難でしょうし、ここはエレンさんに良い名前を　」

「ガチムチはどうだ！」

「　期待した私が馬鹿でしたよッ！」

『マスターに匹敵する酷いネーミングセンスですね』

俺は、ふむ、と頷いて、

「ガチムチか……それもアリだな……」

「無しですよ！？　絶対にやめてあげてください！」

「おおつ、貴様にもガチムチの素晴らしさが分かるか！　さすがだぞ！」

「エレン、お前も意外と優れた感性の持ち主のようだな」

「何で自分たちこそが“分かってる”感だしてるんですか！？」

「「芸術は爆発だ！」」

「名付けにそういうの要りませんから！　ていうか、フィリアちゃんにはちゃんとした名前を付けてるじゃないですか！」

カッコいいと思うんだけどなー、ガチムチ。

「シロ！　シロ！　よーしよしよし」

そうこうしている内に、フィリアがシロシロと連呼していた。

まあもうシロでいいんじゃない？ という雰囲気になり、結局、俺たちは白輝竜のことをシロと呼ぶことになった。

「じゃあ戻ろうか」

そして俺たちが山を下りようとしたときだった。

「き、君のお陰で助かったよ……」

アルクのパーティがやってきた。

「まさか、あんなに強かったなんてね……。勝手に自分の方が強いなんて思い込んでいた自分が本当に恥ずかしいよ……。正直、アラシクだからって自惚れていたみたいだ……」

素直にそれを認めるなんて、随分と殊勝な奴だ。

勝気な女の子二人も、今や完全に意気消沈していた。

「……それで、その子は……？」

アルクがシロを見ながら訊いてきた。

「こいつはさっきの白輝竜。首輪を付けているのは俺がペットにしたからだ」

「……そ、そうか」

アルクはさすがにちよつと驚いた様子だった。

一方、女の子二人は露骨に引いていた。

「い、行きますわよ、アルク」

「そうねっ。いずれはアルクだって、神竜くらい倒せるようになるって！」

二人がアルクを励ましつつ急かす。

だがという訳か、アルクはその場を動かなかった。

「アルク？ どうしたんですの？」

不思議がる二人を余所に、アルクは、

「も、もし……その……君が、良かったら、なんだけれど……」

「……どうした？」

「えっと……その……」

爽やかイケメンのアルクなのが、今はまるで数か月ぶりに人と会話した引き籠りのようだった。

頬を赤く染め、なぜかもじもじしながら、ちらちらとシロの方を見ている。

なんかすげえ嫌な予感がするんだが……。

やがて、アルクは意を決したように言った。

「ぼっ、僕も君のペットにしてくれないかっ？」  
「断る」

## 第29話 カルナ家のペットなドラゴン

俺はアルクにも首輪をつけてやった。

「ありがとうっ……………」

感極まった様子で礼を言ってくるアルク。

「アルク……………あなた、一体どうしてしまったんですのっ……………？」

「こんなの、アルクじゃないよっ！」

彼のパーティーメンバーである女の子二人はドン引きしていた。

まあそりゃそうだろう……………。

百年の恋も冷めるレベルだよな。

俺はアルクの首輪に連結された鎖を、近くにあった巨大な岩に括りつけた。

これでよし、と。

「じゃ、そういうことで」

「なっ……………待ってくれ！ 置いて行かないでくれっ」

自分が放置されようとしているのだと気づいて、アルクが声を荒らげる。

鎖を引き千切ろうとするが、聖銀を混ぜて作った合金製。Aランク冒険者の腕力でも不可能だ。ならばとアルクは背中 of 剣を抜こうとしたが、生憎とそれは俺が転移魔法で遠くに飛ばしておいた。

巨岩も硬度の高いものを選んだため、素手で破壊することはでき

ないだろう。

「そ、そうかつ、僕のペットとしての忠誠心を試そうとしているんだねっ？」

ハッと悟ったように叫ぶアルク。

んな訳ねー。

俺は無視して山を下りていく。

「僕はここで君を待ち続ける！　ずっと、ずっと待っているからね！　わんわん！」

しばらくの間、後方からアルクの咆える声と、パーティメンバーの女の子たちが喚く声が聞こえ続けていた。

さすがにキャンピングカーの状態では山越えは不可能だ。

なので再びゴーレムへと変形し、山道を進んでいた。このタイプでも中に乗り込むことができるのだ。

というか、内部はキャンピングカーのときとほぼ変わらない。変化はサイドガラスがなくなってしまう点ぐらいだろう。ゴーレム状態でも、腹部と背部にある窓から外を見ることが可能なのだ。

しかも時空魔法を応用することで、ゴーレムがのしのしと崖を歩いていてもほとんど中は揺れない。進行速度は遅いものの、快適な

旅を続けることができた。

「お腹すいた」

ペットになったシロが、早速食い物をねだってきた。  
そう言えばそろそろお昼時だな。

「よし、じゃあ少し待ってろ」

麓の町で買っておいた食材で、俺はキッチンで料理を始めた。

「カルナが作る？」

相変わらずぬぼーとした顔でシロが訊いてくる。

全裸だった彼女だが、今は服を身に付けていた。これも麓の町で買ったのだ。本人は着るのを嫌がっていたが、ティラが無理やり着せたのである。

「ああ。こう見えて料理には自信があるんだよ」

「そう」

すでに涎を垂らしているシロを後目に、俺は猛スピードで料理をしていく。身体強化・極で器用さがリミットブレイクしているため、漫画のような速度で野菜を切ることができる。

「フィリア、できた奴から運んでくれるか？」

「いいにおいする！」

リビングのテーブルへと、せっせと完成した料理を並べてもらう。  
みんなお腹が空いているだろうと思って結構大量に作った。

うむ、我ながら美味しそうだ。

シロはくんくんと鼻を鳴らし、だらーと滝のような涎を垂らした。

「見たことない料理ばかり。美味しそう」

俺が作ったのはどれも地球の料理だ。

こっちの世界にも似たようなものがあったりもするが、シロだけでなくみんな珍しがっている。

シロがトマトソースで煮込んだハンバーグを手づかみで口に運んだ。

噛み千切ると、肉汁がだらりと零れ落ちる。

「……っ！」

とろんとしていた目がいきなりカツと見開いた。

「……美味い」

それだけ呟くと、後はもう、がつがつがつと喰いまくる。

さすがはドラゴン。サ ヤ人並みの食べっぷりである。

彼女に釣られるように、ティラたちも食べ始めた。

「お、美味しいですっ！」

「な、何だこれはっ？ こんな美味しいもの、王宮でも食べたことないぞ!？」

「ふーひーひー！ もぐもぐ」

絶賛の嵐である。

ふっふっふ。それもそのはず。

『料理・極 スキルのお陰です』

そう、俺には料理の世界でも天下を取れる力があるのだ！

「げふ……ペットになって、よかった……一生忠誠誓うまである」

やがて一人で十人前近くを平らげたシロが、げっぷ混じりに呟いた。

胃袋がチヨロイな、このドラゴン。

エクバーナに向けて、NABIKOは進んでいく。  
自動運転なので、夜も勝手に俺たちを運んでくれる。

「……朝か」

俺はリビングのソファの上で目を覚ました。  
夜の間に山岳地帯を超えたようで、エクバーナまでの道のりもあと少しだ。

ちなみに二階に寝室があるのだが、俺だけ一階で寝ていた。  
一緒に寝ようとしたのに締め出されたのである。

『マスター、当然かと』



せつかく大きなベッドにしたのになあ……。

「にく……たべたい……」

「ん？」

ふと聞こえてきた。

リビングに白い少女が入ってくる。

シロだ。

寝ぼけているのか、足取りが覚束なかった。

そして何を思ったか、ソファで寝ていた俺の上へと乗っかってきた。

しかもよく見ると全裸である。寝る前はパジャマを着ていたはずなんだが……。

「にく……」

寝ている間にはだけてしまっていた俺の胸を、シロは食べ物か何かと勘違いしのか、ぺろぺろと舐めてくる。

非常にくすぐりたい。

だがすぐに彼女は顔を顰めて、

「まずい……」

まあそりゃあな……。

「しかし肌、すべすべだな」

俺は彼女の剥き出しの白い背中に指を這わせた。

そのままお尻まで指を持って行って、ぷにぷにと揉んでみる。柔らかい。

「何してるんですかつ？」

リビングにティラの怒鳴り声が響いた。  
どうやらシロを追い駆けて下りて来たらしい。

「人体の研究」

「ただ触ってただけじゃないですか！」

「いや、揉んでもみたぜ？」

「ドヤ顔で言わないで下さいッ！　なお悪いですから！」  
「ん……朝？」

ティラの叫び声でシロが目を覚ました。

俺の上で身を起こす。

目の前で胸がぶるんと揺れるが、ドラゴンの彼女はそんなことには無頓着。

ふわぁ、と欠伸をしながら腕を伸ばした。

「ちよっ、シロ！」

ティラが慌ててシロを抱き締めるようにして裸体を隠した。

「何でまた裸なんですっ」

「服は………勝手に脱げた」

「脱げたんじゃなくて、脱いだんですよね！？」

「そうともいう。あの束縛感が嫌」

「それでも人の姿をしているときは、ちゃんと服を着てくださいって言うてるでしょうっ」

「……ん」

ティラに脱衣所へと連行されていくシロ。

「ちゃんと下着も穿いてくださいよ！」  
「ん」

扉越しにそんなやり取りが聞こえてくる。

「まったく……」

溜息を吐きつつ、脱衣所からティアが出てきた。

「ティラ、何だかお母さんみたいだな」  
「誰のせいで私がペットの世話をしていると思っているんですか！」  
「仕方ない。じゃあ俺がやるか」  
「そ、それもダメですっ！」

とそこへ、シロが脱衣所から戻ってくる。  
もう着替え終わったのかと思ったが、全裸に上着を羽織っただけだった。

手にはパンツを持っていて、

「穿き方が分からない。カルナ、穿かせて」  
「よし分かった」

俺はシロからパンツを受け取った。

「ちょっと！」

それを横から物凄い勢いでティラが奪い取ってしまう。

「何で普通に受け取ってるんですか！ しかもこれ、よく見たら私のなんすけどっ」

「知ってた。だから頭にかぶろうと思ってハアハア」

「いつぺん本気の魔法をぶつけてあげましょうか！？」

ティラはツツコミ過ぎて疲れたのか、ぜえぜえと息を吐いてから、

「もう、私が着せてあげますから。ほら」

再びシロを脱衣所へと連れていく。

「上もちゃんと付けてくださいよ」

「付け方が分からない」

「はいはい。やってあげますから」

「ん……窮屈」

「我慢してください」

「何でこんなもの付ける？」

「女性は全員付けるものなんです」

「フィリアは付けてない」

「フィリアちゃんはまだ子供ですし、胸が成長してないですから」

「じゃあティラも必要ないと思う」

「うるさいですね！？ 確かに小さいですけど、さすがに子供よりはありますよ！」

五感強化・極 を持つ俺には、二人のやり取りが丸聞こえである。

「ふあああ……一体、何を騒がしくしているのだ、朝っぱらから？」

「パパ、おはよーっ！」

そこへ、欠伸を噛み殺しながらエレンが起きてきた。朝から元気なフィリアも一緒だ。

二人は、洗面台も設置されている脱衣所へと入っていく。俺も後に続こうとしたのだが、ティラの魔法の杖が飛んできて眉間にヒットした。魔法の杖は投擲武器ではありません。

「シロがまた裸になってウロウロしてたんですよ」

「全裸はドラゴンの基本」

「こら、シロ。あたしだって本当は全裸が好きなのだが、懸命に我慢しているのだ。貴様も自重しろ」

「エレンさんも、いきなりそんな性癖暴露しないで下さいよ!？」

「フィリアもぜんらすきーっ!」

「ん、みんなで一斉に裸になればいい」

「絶対にダメですから! ……はあ、このパーティに常識人はいないのですか……」

扉越しにティラの大きな溜息が聞こえてきた。

『心中お察しします、ティラ様』

「ナビ子さん! 私の味方はあなただけです!」

そんなこんなで仲間にペットを加えた俺たちは、獣人たちの国、エクバーナへと辿りついたのだった。  
しかし

「あゝ、どうやら大変なタイミングで来てしまったっばいな」

「……? どうしたんですか?」

「この国、絶賛戦争中だ」

### 第30話 ケモミニ女王は逃げ出したい

俺たちはエクバーナに辿りついた。

「変だな？」

エレンが窓の外を見ながら首を傾げる。

「いつもなら多くの獣人たちで賑わっているはずなのだが……」

エクバーナの街はその周囲を強固な市壁で取り囲まれているのだが、出入り口となる門から伸びる街道は閑散としていた。

というか、人っ子一人見当たらない。

まあ門扉自体が閉じられているのだから当然だろう。

俺たちはキャンピングカーを下りると、固く閉じられた門のところまで近付いていった。

すると市壁の上から、この国の兵士と思しき武装した者たちが顔を出して、

「敵軍の使者か！？」

「一方的に攻めてきておいて、今さら使者だと！？」

「捕まえる！」

「いや待て！ あの赤い髪は……」

俺たちはエクバーナの兵士に案内され、この国の王宮へとやってきていた。

「どうぞ、お入りください。こちらに女王様がいらつしやいます。緊急時ですので、礼儀作法などはお気になさらず」

そして謁見室へと通される。

この国を治めるのは代々、女性だという。

獣人の美女だったらいいなあ、なんて思いつつ、俺が部屋へと入ると

「うわ~~~~ん！ 嫌じゃ嫌じゃ嫌じゃ~~~~っ！ どうしてわらわがこんな目に遭わねばならんのじゃ~~~~っ！」

部屋の奥に設けられた玉座の上で、見た目十歳くらいの少女が喚いていた。狐の獣人らしく、頭には金色の頭髮に交じって三角形の獣耳が生えていた。普段はピンと立っているのだろうが、今は情けなくへによってしまっている。

「女王陛下。落ち着いてください。それでは臣下たちに示しがつきませぬ」

彼女を窺めるのは、二十代前半くらいの知的な印象の美女。もちろん獣人で、こちらは虎だろうか。

「そんなの知らん！ どうせこの国はもうお終いじゃ！ お終いなのじゃ〜〜っ！」

獣人少女が手足をバタバタさせながら叫んだ。

股を開いて足を上げているものだから、パンツが丸見えだ。

『どうやら現在、レイン帝国の軍隊がこの国に向かって進軍してきているようです』

ナビ子さんによれば、レイン帝国というのは東方の大国らしい。人間族の国で、アルサーラ王国を越える経済力、軍事を有しており、小国のエクバーナでは到底太刀打ちできないという。

「まだそうと決まった訳ではございませぬ。敵軍の侵攻を食い止めんと、つい先ほど我が軍が出撃いたしました」

「……我が軍の兵力はどれくらいじゃ？」

獣人少女はいったん静かになると、唇を尖らせながら問う。

「一万でございます」

「……敵のレイン帝国軍の兵力はどれくらいじゃ？」

「十万でございます」

「無理じゃ〜〜っ！ 勝てるわけがない！ そんなのわらわにも分かるぞっ！」

また大声でわめき始めた。

「ですが、我々獣人は勇猛果敢。十倍の戦力差など覆してみせましよう」

「そんな精神論で覆せる戦力じゃなかるうが！ それにわらわは知



つておるのじゃ！ レイン帝国の前には、あの鬼族すらも手も足も出なかったことを！」

「……」

「しかもじゃ！ レイン帝国の男どもは皆、好色で残虐非道の最悪な奴じゃと聞く！ 彼奴らに捕まったら最後、絶世の美女なわらわには、餓えた十万もの男が我先にと争って群がってくるじゃろう！そして鬨り者にされてしまふのじゃ……っ！ うわあああん！」

ついに獣人少女は玉座から転げ落ち、赤い絨毯の上で泣き始めてしまった。

「……陛下に群がってくるのは一部の特殊な性癖を持つ者だけかと思えますが」

「何か言ったか？」

「いえ何も」

獣人少女は急に泣き止むと、さっと立ち上がって、

「とにかく、そんなことになったらわらわは正気を保っておられぬ！……というわけで、後のことは任せたぞ」

「どこに行かれるおつもりですか、陛下」

どこかに立ち去ろうとした獣人少女の首根っこを、獣人美女がむんと掴んだ。

「離せ……っ！ わらわは逃げるのじゃ……っ！」

ジタバタと暴れる獣人少女だが、彼女の力が弱いのか、それとも獣人美女の力が強いのか、拘束を解くことはできない。

「なりませぬ。我が軍の兵が命を懸けて戦おうとしている最中に、陛下が逃亡するなど言語道断にございます」

「そんなこと知らぬ〜〜っ！ どうせ兵士にはバレぬしな！」

「そう言う問題ではございませぬ」

獣人美女は首を左右に振る。

「よしでは今からお主に女王の座を譲り渡すことにする！ これでわらわは一介の狐人族！ 逃げてても問題はない！」

「確かにわたくしの方が陛下よりも女王に相応しいかもしれません、そういう訳にはいきませぬ」

「お主、実はけっこう腹黒いんじゃないか！？」

獣人美女がさらりと言った一言に、獣人少女が目を白黒させた。

「ご安心ください、陛下。もしもの場合には策がございます」

「ほう！ わらわが助かる方法があるのか？ そんなものがあるのなら、先に言わぬか！」

獣人少女は逃げることをやめ、獣人美女の言葉に耳を傾ける。

「もしもの場合には、わたくしが陛下を介錯して差し上げましょう。これならば連中の慰み者になる心配はございませぬ」

「嫌じゃ〜〜っ！ わらわは死にたくないのじゃ〜〜っ！」

再び暴れ出す獣人少女。

「すぐにわたくしも後を追います」

「そういう問題じゃない！ やっぱりわらわは逃げる〜〜っ！」

うーむ、何だこの主従のやり取りは？

緊迫した状況なのは間違いないのだが、コントでも見せられている気持ちになった。エレンやティラはポカンとしていた。

「陛下っ！ 女王陛下っ！」

「……ん？ なんじゃ？」

と、そこでようやく獣人少女がこちらを見た。

さつきから兵士が呼んでくれていたのだが、ずっと気付いてくれなかったのである。

「お客様でございます！」

「客じゃと？ こんなときに客の応対などしておれるか！ とつとと帰って」

獣人少女が言いかけた言葉を呑み込んだ。

「お、お、お主はっ……アルサーラ王国の破壊姫ではないかっ！？」

そう叫び、獣人少女はエレンの元へと駆けてくる。

「うむ。あたしはアルサーラ王国第三王女、エレン＝アルサーラだ」  
「おおお、おおおおおっ！ わらわを助けに来てくれたのじゃな！？」  
アルサーラ王国には援軍を要請しておったのじゃが、あまりに急の進軍じゃったため、間に合わぬと諦めておったのじゃ！  
それで、どれくらいの兵力を動員してくれたのじゃ！？」

獣人少女は歓喜するが、エレンは首を左右に振って真実を伝えた。

「すまないが、あたし一人だ。そもそもあたしはもう騎士団長を退任した身。この国に来たのは偶然だ」

「な……ん、じゃと……？」

獣人幼女は愕然と後ずさった。

「じゃ、じゃが、お主は一人で一万分もの兵力に匹敵すると聞く！　お願いじゃ、破壊　じゃない、エレン殿っ！　どうかっ、どうかその身を挺して、少しでもわらが逃げる時間を稼いでくれっ！」

随分と自分勝手な提案だった。

獣人幼女は周囲からのじっとりした視線に気づいたのか、

「わらわは自分が助かれればそれでいいのじゃ……っ！」

開き直ってそう叫んだ。

いやいや、明け透け過ぎだろ。

ちなみに見た目はフィリアと同じくらいの幼女なのだが、鑑定してみると十六歳だった。それでも女王としてはかなり若いだろうが。

リリアナ　16歳

種族：狐人族

レベル：14

この国の宰相らしい獣人美女の方は、俺と同じくらいの年齢のようだな。

セリーヌ　23歳

種族：虎人族

レベル：28

スキル： 剣技      政治

エレンが俺に「どうする？」と視線で訊いてくる。  
十万の軍か。

このままだと確実にこの国は敗北するだろうな。  
ちよつと力を貸してやるか。

「獣人女王。俺が加勢してやるよ」

「っ？ ほんとうか？ じゃがお主一人が加勢してくれたところで、  
どうにもならぬ気がするが……」

獣人女王    リリアナは、訝しげな顔で俺を見てくる。  
そこへエレンが横から、

「リリアナ女王陛下、この男の実力は確かだ。あたしよりも遥かに  
強い。何せ、あたしの剣の師匠だからな」

余談だが、一応この旅の途中にちよくちよくエレンに剣の指導を  
してやった。

「なんと！ 破壊姫と怖られるお主よりも強いじゃと!？」

リリアナは驚愕の声を上げる。

「ああ。ぶつちやけ俺なら一人で戦況を覆せる」

「ほ、本当かつ？ お願いじゃ！ 力を貸してくれ！」

「ただし一つ条件がある」

「何でもする！ 何でもするからわらわを助けてくれ！」

「何でもするって言ったな？」

縋るように懇願してくるリリアナに、俺はニヤリと口端を吊り上げながら言った。

「その獣耳をもふもふさせてくれ  
「ファッ!？」」

### 第31話 もふもふ払いで

俺の指先が、獣人女王ことリリアナの獣耳に触れた。

「ひゃっ……」

それだけでリリアナは悲鳴を小さな漏らし、ビクンと身体を震わせた。

おお、これが獣耳か。

すっげえもふもふだ。めっちゃ柔らかい。

「や、優しくするのじゃぞ……わらわたち獣人の耳は繊細なのじゃ

……」

「分かつてる分かつてる」

俺は壊れ物に触れるような慎重さで獣耳を揉んでいた。  
もふもふ。もふもふ。

「んっ……あひゅ……ひゃ……」

指を動かすたびに、リリアナは吐息のような声を出す。

ちなみに彼女は今、俺の膝の上に乗っかっていて、俺は後ろから抱き締めるような感じで獣耳を触っていた。

たまに逃げようとするので、肩を掴んで食い止める。  
へっへっへ、逃がさないぜ？

俺は耳の内側へと指先を入れた。

少ししつとりと濡れていて、外側よりもさらに敏感な場所である。

ついでに俺は、彼女のふさふさの尻尾にまで手を伸ばした。  
竹箒みたいな見た目だが、とても柔らかくてさらさらしている。  
毛の中に簡単に指が埋まってしまう。

「ひゃうんっ……はぁ……そ、そこはっ……だめ……じゃ……」

耳と尻尾を同時に撫でられ、ハアハアと喘ぐリリアナ。

その言葉とは裏腹に、明らかに快感を覚えている。

いつの間にかびっしょりと汗を掻いていて、見た目幼女とは思えない色気を放っていた。

「だめ？　ここが気持ちいいんだろ？」

「……そ、そんなことは……ないのじゃ……」

俺が問うと、リリアナは強情にもぶるぶると首を振った。

「ふーん。そうか。じゃあ、やめちゃおうかなー？」

「っ……」

俺が素っ気なく言うと、リリアナは、えっ、という顔で俺を見上げてきた。

「いいのか？　やめちゃうぞ？」

俺は彼女の目を覗き込みながら確認する。  
するとリリアナは顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに声を絞り出した。

「……い、意地悪は……やめるのじゃ……」



「だったら、もっと欲しいのお兄ちゃん、って言ってくれよ」

俺の要求に、リリアナはしばし苦悶の表情を浮かべていたが、ついには欲望に負けてしまい、

「う、うう……も、もっと……もっと欲しいの……お兄」

「もうそれくらいにしてくださいっ！」

「いでっ」

ティラに杖で頭を殴打された。

しかもかなり強く叩かれたぜ。

俺は痛む頭を抑えつつ、

「つう……そうだよな。ティラだってしてほしかったんだよな。気が付かなくてごめん」

「違いますっ！」

「ハッ……わらわは一体、何を……？」

どうやら今の拍子に我に返ってしまったらしい。リリアナは俺の膝の上から逃げるように床へと転がり落ちた。

「……わ、わらわは……穢されてしもうたんじゃ……」

「大袈裟だな。耳を揉んだだけなのに」

「し、尻尾もじゃ！」

リリアナは狐耳を震えさせながら涙目で訴えてくる。

まあ幾ら獣耳が敏感だと言っても、普通はこんなふうにはならないだろう。俺は器用さがリミットブレイクしているため、こうした繊細なタッチ　つまりは愛撫が得意なのだ。

『変態ここに極まれり、ですね』

これからはぜひ、もふもふマスターと呼んでくれ。

「こ、これで、わらわに力を貸してくれるんじゃない……？」

潤んだ瞳で訊いてくるリリアナ。

「おいおい、誰がお前の獣耳だけでいいと言った？」

「な、なんじやとっ!？」

愕然とするリリアナを後目に、俺はこの国の宰相である獣人美女の方へと視線を移した。

「ま、まさかわたくしの耳も差し出せと……?」

俺の意図に気づいて、獣人美女が後ずさる。

へっへっへ、とあくどい笑みを浮かべつつ、俺は訴えた。

「やっぱ主君だけを犠牲にするのは臣下として心苦しいよな？」

「そうじゃ! わらわだけというのは納得がいかぬ! これは女王としての命令じゃ! お主もこやつの餌食になるのじゃ!」

「ぐ……」

リリアナが俺の味方に付いてくれて、獣人美女が苦々しげに顔を顰める。

俺は指をわきわきさせながら彼女に近付いていった。

「大丈夫大丈夫。すぐに気持ちよくしてあげるから」

『マスター、顔と発言が完全に悪役のそれです』

「ハアハアハア……こ、こんな、屈辱を……味わうことになるなんて……」

俺の足元で、服を乱れさせた獣人美女　セリーヌが激しく息を荒らげていた。

いやあ、やっぱり知的系の美女が身悶えしてるのはエロいわ。

セリーヌは見た目によらず、リリアナよりもずっと敏感だった。俺が指を動かすたびに身を擦らせ、めちゃくちゃ喘いでくれた。

「エクバーナの鬼宰相と内外から怖れられる彼女をこんなふうにするとは……相変わらず貴様は怖いもの知らずだな……」

エレンが呆れたように言ってくる。

ティラはもう呆れを通り越して無表情だった。逆に怖い。

「と、とにかく、ここまでして差し上げたのです」

セリーヌが乱れた髪と服装を直しながら立ち上がった。

「先ほど叩いた大口、必ず嘘でなかったと証明していただきますしよ  
う」

「もちろんだ。つーわけで、行け、しろ」

「ん？」

ここまでのやり取りを、シロはずっと興味なさそうにぼーっと傍観していた。急に声をかけられ、不思議そうに小首を傾げている。

「乗せてつてくれ」

「美味しいもの」

「戻ってきたらたらふく喰わせてやるよ」

「わかった」

俺が頼むと、シロはすぐに頷いて服を脱ぎ出した。

何のためらいも恥じらいもなく下着も脱ぎ捨て、あっという間にすっぽんぽん。何とも良い脱ぎっぷりである。

「なんじゃ！？ お主はやはりただの変態じゃったのか！？」

いきなりシロが真っ裸になったので、リリアナが不信の目で俺を見ってくる。

だがその直後、シロの全身が輝いた。

「なっ……ドラゴンじゃと……？」

突如として現れた白いドラゴンに、リリアナが目を丸々と見開いた。

「こ、これはまさか、白輝竜……？ な、なぜ神竜がこんなところに……？」

お、セリーヌの方はよく知っていたな。  
さすがは宰相といったところだろう。

「俺のペットなんだ」

「ペットじゃと!？」

「まさか神竜を手懐けたのですか!？」

驚愕する二人を後目に、俺はシロの頭の上に飛び乗った。

「じゃ、ちよっくら行ってくる。フィリア、ちゃんと留守番してるんだぞ」

「うん! パパはやくかえってきてね!」

フィリアのことはティラたちに任せておけば大丈夫だろう。

「よし、じゃあ頼むぜ、シロ」  
「ん」

シロが俺を乗せたまま空中で身を躍らせた。  
加速し、謁見の間から外へと飛び出す。

「カルナ、空飛べる。なぜ私を使う？」

「だってこの方がかつこいいだろ。相手もビビるだろうし」  
「よく分からない」

俺の言い分に、シロは小さく首を傾げた。

『目的地までおよそ十キロ。両軍が激突するまで、あと十分といったところですよ』

まあ余裕で間に合うだろう。

俺たちは戦場に向かって空を駆けた。

### 第32話 戦場で血の代わりに尿が流れました

見えてきた。

手前にエクバーナ軍一万、向こうに敵軍十万。  
互いの距離は一キロもない。

千里眼 を使えば、各軍の兵士たちの様子まではつきりと見ることが出来る。

歴然とした戦力差を前に、エクバーナ軍の兵たちは厳しい面持ちで進軍している。

一方で敵軍には余裕が感じられた。

俺はエクバーナ軍の上空をシロに乗ったまま飛んでいく。  
何人かが俺たち というかシロに気づき、目を見開いて驚いていた。

やがてエクバーナ軍を越え、敵軍近くまで来たところで、

「じゃあちよつと遊んでくる」  
「ん」

俺はシロの上から飛び降りた。ここは高度約三百メートルといったところか。東京タワー並みの高さだったが、俺は敵軍のすぐ手前へと難なく着地する。

地面にちよつとしたクレーターができ、砂埃が舞い上がった。

「な、何だこいつは!？」

「空から降って来たぞ!？ 魔法使いか!？」

「構わねえ、殺っちま がっ!？」

俺は縮地で距離を詰めると、先頭の一人を殴り飛ばした。さらに近くの敵兵を三人まとめて回し蹴りで吹き飛ばす。敵軍は俄かに騒然となった。

「こいつ強いぞ!？」

「一斉にかかれ!」

「怯むな! 敵はたった一人だ!」

怒号と地響きを轟かせながら、敵兵が次々と躍りかかってくる。だがぶつちやけどいつも雑魚ばかりだ。

攻撃が当たったところで痛くも痒くもなさそうなので、俺は防御を無視して拳を振るった。

怒涛のごとく迫りくる軍団が、あつという間に負傷者の山へと変わっていく。

ていうか、殺さないように手加減する方が大変だ。

いやここは戦場だし、相手も覚悟して向かって来ているんだから別に殺してもいいんだろうが……。

「だっだ一人に何やつでるだ。おでがやる」

「おー、でかいなー」

敵軍の中から一際身体の大きな奴が姿を現した。

見た感じ人族だが、背丈は三メートル近くあるんじゃないか？

巨人族の血でも混じっているのかもしれない。

装備が他の兵たちと違うのは、単純にサイズの合う鎧が無かったのか、それとも傭兵だからなのか。

デル 33歳

種族：人間族

レベル：32

スキル：怪力

「オーガスレイヤーのデルだ！」

「オーガ数十体を素手で殲滅した化け物だぜ！」

「いいぞ、殺っちまえ！」

敵兵が歓声を上げた。

五感強化・極で強化された聴覚で声を拾ってみるに、どうやらそれなりに有名な傭兵らしいな。

「じね」

そいつは俺の前までのしのし歩いてくると、手に持っていた巨大な戦斧を俺目がけて降り下ろしてきた。

うーん、遅い。

いくら力が強くても、これじゃあ簡単に躲せてしまう。

まあでもせっかくだし、俺はそれを片手で受け止めてやることにした。

ずしつと腕に衝撃。

だがそれだけだ。

『32のダメージです』

「まあ、そんなもんか」

確かに臂力はそこそこあるようだが、闘気の量が大したことない。



ギルドマスターのおっさんの一撃の方が遥かに強かったな。エレンはさらにその上。

「っ！？　ば、ばがな……おでの斧を、片手で……」

「おらよ」

目を見開いて驚愕する巨漢の腹へ、お返しとばかりに拳を一発ぶちこんでやった。

巨体が吹き飛び、後ろにいた何人かを巻き込みつつ地面に引っくり返る。

「ば、化け物っ……」

「くそ、魔法隊だっ！　魔法隊出る！」

そこで隊列が入れ替わり、魔法使いの集団が前に出てきた。すでに彼らは詠唱を始めていた。

「撃てえええっ！」

幾つもの魔法陣が展開され、そこから一斉に魔法が放たれた。炎塊、氷矢、風刃、雷撃、鉄弾　次々とこっちに飛んでくる。大半が中級。たまに上級が交じっている程度だ。

「超級魔法　<sup>キングゴーレム</sup>大地ノ魔王」

俺は超級魔法を発動した。

直後、凄まじい轟音とともに俺の目の前に巨大なゴーレムが姿を現す。

先ほどの大男すら子供に見えるほどの、ゆうに十メートルを超える巨体が敵軍の魔法をすべて受け止めてくれた。



天地に轟くその大音声が、敵軍十万人の間を一気に駆け抜けた。  
戦意に燃えていた彼らの目から一斉に光が失われ、次々と白目を  
剥いていく。

そして口から泡を吹きながら、ドサドサとまるでドミノ倒しのよ  
うに倒れ伏していった。

威圧・極

咆哮で威圧し、戦意を奪ってやったのだ。  
霸王の覇気みたいなもんだ。

……が、ちょっとやり過ぎたな。

戦意どころか意識すら奪ってしまった。

しかも股の辺りから液体を滴らせている奴もたくさんいる。むさ  
い男たちの大量失禁。うええ……。

空から白いドラゴンがふらふらと落ちてきた。  
シロだ。

「今のなに？　びっくりした」

さすがは神竜。少し朦朧としているようだが、ちゃんと意識はあ  
るようだ。

「お前は洩らさなかったか？」

「大丈夫。……少しだけだから」

どうやら少し漏らしたらしい。

背後を振り返ると、エクバーナ軍の兵士たちにまで影響が出ていた。

後方にいた連中はよろめいている程度だが、前の方の連中は完全に気を失っている。

そしてやはりこっちにも漏らした奴がたくさん……。

『マスターにはそういう癖へきもあったのですか』

ねえよ！

「……次からはもっと抑えよう……」

まあ被害は抑えられたし、良しとしよう。

この状態ではさすがにもう戦闘は継続できないだろう。

さて。

指揮官はどこにいるだろうか？

俺は 探知・極 を使い、ステータスの高そうな帝国兵がいなか調べてみた。

おっ、後方に強そうな連中が集まっている場所があるぞ。

「レポート」

俺は転移魔法でその地点へと飛んだ。

「竜騎兵、というやつか」

そこにいたのは、馬の代わりに地竜と呼ばれる翼のないドラゴンに騎乗した兵士たちの一団だった。

全部で十数騎という少数部隊であるものの、ドラゴンはもちろん、その背に跨っている兵たちも高い戦闘能力を持っており、彼らだけで歩兵数百人分の戦力はあるそう。

俺の威圧を受けたせいで、大半がドラゴンの上でぐったりしているが。

ドラゴンたちもフラフラしている。

『中位の成竜程度では、マスターの威圧には耐えられないでしょう』  
そんな中で唯一、まともな状態を保っている奴がいた。

セルゲート 32歳

種族：人間族

レベル：57

スキル： 槍技      騎竜      闘気

こいつだ。

一際大きなドラゴンに騎乗した屈強な体格の男である。いかにも歴戦の武人といった雰囲気醸し出して、頬には大きく深い傷痕があった。

レベルもステータスも、今まで会った人間族の中では群を抜いて高い。

「お前が指揮官だな」

「そう。オレはレイン帝国、四将<sup>が</sup>一人、竜將軍セルゲート」

四将だっさ。

### 第33話 鎮まれ、オレの右腕！

本当に鎮めてみた

「貴様は何者だ？」

帝国軍を率いていた將軍・セルゲートが鋭い眼光で誰何してくる。

「俺はカルナ。ワケあってエクバーナ軍に加勢させてもらってるぜ」

「……これは貴様の仕業か？」

「まあな」

「まさか、こんなところにも化け物がいたとは……」

こんなところにも？

「だが我々に負けは許されぬ！ 行くぞ、バイルド！」

バイルドというのは、彼が乗っているドラゴンの名前らしい。同じ中位のドラゴンではあるものの一回り体格が良く、鑑定してみるとステータスも高かった。レベルは50を超えている。

しかしセルゲートの命令を受けても、バイルドは動かなかった。

「どうした？」

「しょ、將軍！ 我々の竜たちもっ……」

バイルドだけでなく、他のドラゴンたちまで勝手に後ずさっている。

「ん」

「シロか」

同じドラゴンだからか、どうやら神竜であるシロに怯えているようだ。

「なんだあのドラゴンは!？」

「もしかしてこのドラゴンのせいで……?」

さすがは竜騎士だけあって、シロがそこらのドラゴンとは格が違う存在であることに気づいたようだ。

「……ならば!」

セルゲートはバイルドが使えないと見て、その背中を蹴って単身で攻めかかってきた。

竜騎士の一人が叫ぶ。

「將軍は槍の名手! たとえドラゴンに騎乗していなくても、たかが敵兵一人に後れを取るはずがない!」

「しかもあいつ、素手で將軍と戦うつもりだぞ!」

「はははっ! 四将を相手に愚かな男だな!」

分かりやすい負けフラグをありがとう。

「よつと」

「っ!」

空中から繰り出してきた刺突を半身で躲すと、俺は槍の柄を掴んで力任せにセルゲートを地面に叩きつけてやった。

「將軍っ!？」

「くっ……」

セルゲートはすぐさま立ち上がって槍を振るってくるが、俺は完壁に見切ってひよいひよいと避けていく。

「こ、これならばどうだッ！」

セルゲートが手にした槍が闘気を纏い、同時に超高速で回転し始めた。

「おおおおっ！ “閃滅突”ッ！！」

「でたぞっ！ 將軍の必殺技！」

「五十センチもの鉄板すらも貫くことができる最強の刺突だ！」

「あれをまともに喰らったらミンチになるぞ！」

俺は右拳に闘気を集束させ、

「どっせい」

迫りくる槍の穂先をぶん殴った。

凄まじい激突音が轟き、闘気と闘気が鏝迫り合う。

しかしそれも一瞬。すぐに俺の拳が槍を粉碎した。

「素手で將軍の必殺技を撃ち破ったあああっ！？」

竜騎士たちが驚愕の声を上げる。

俺の闘気は相手の槍を破壊するに飽き足らず、セルゲートを吹き飛ばす。

愛竜のバイルドに激突したが、なお勢いは収まらずに一緒に数メートルほど地面を転がった。



「いつて。ちよつと拳の皮がめくれた」

「「皮がめくれただけ!?」」

竜騎士たちが一斉にツツこんでくる。

「貴様……出鱈目にもほどがある……」

セルゲートは全身ボロボロになりながらもどうにか立ち上がった。  
いた。

そして悲愴な覚悟を決めた目で、

「こうなつたら、この右腕の封印を解くしかないか……」

そう言つて、右腕の籠手を外す。

彼の右腕は無数の呪文が書き込まれた包帯で覆われていた。封印  
を施してあるのだろう。

「將軍!?!」

「正気ですか!」

「その力を使つたら今度こそ將軍は……っ!」

竜騎士たちが口々に悲鳴を上げた。

だがセルゲートは包帯を解いていく。そして露わになったのは、  
とても人間の腕とは思えない、禍々しい腕だった。

「かつてオレは大規模な部隊を率い、悪魔を討伐したことがある。  
だがその際、右腕に悪魔の血を浴び、呪いをかけられてしまったの  
だ」

セルゲートは額に汗を掻きながら、必死に何かを堪えるような顔で言う。

説明どうもありがとう。

『彼が言っていることは間違いないようです。あの右腕は確かに悪魔のそれ。恐るべき力を秘めています』

・悪魔の右腕：上級悪魔の呪いにより、悪魔化しつつある右腕。いずれ宿主の意識を乗っ取り、悪魔が復活する。攻撃力+724

鑑定してみると、かなり厄介な代物のようだった。

急にセルゲートが苦しみ始める。

「あ、アアアアッ！」

「將軍っ！」

悪魔の右腕が振るわれる。

ただ地面に向かって虚空を引き裂いただけ。にもかかわらず、地面が爪痕状に大きく抉れてしまった。凄まじい威力だ。

部下たちが血相を変えて呼びかける。

「おやめください！ このままでは本当に……っ！」

「ぐアッ……し、心配は要らぬっ……」

苦悶の表情を浮かべ、セルゲートは必死に耐えているようだ。あの腕に意識が乗っ取られようとしているのだろう。

しかし彼の意に反し、悪魔の腕は勝手に動いて地面に無数の傷痕を付けていく。

「……し、鎮まれ、オレの右腕……ッ！　言うことを聞けッ！　ア  
アアアッ」

まさか、リアルでこの台詞を吐く奴を見るとときがくとは思わな  
かった！

よし、せっかくだし鎮めてやろう。

「解呪」

俺は 呪術・極 スキルを持っている。

あの呪いを解くことくらい容易いことだ。

「アアアアアッ……………ん？」

セルゲートが怪訝な顔になった。

「やはりその力を使うのは無謀です！」

「……………??？」

「將軍っ、お願いですっ！　将ぐ……………將軍？」

「おかしい……………急に右腕から力が……………」

懸命に声をかけていた竜騎士たちも、セルゲートの異変に気づい  
たらしい。

俺は言った。

「呪い、解いたから」

「は？」

「しょ、將軍！　腕が！」

「な……………っ？」

見る見るうちにセルゲートの右腕が普通の人間の腕へと戻っていく。

「これでもう悪魔化する心配はなくなったな。感謝しろよ」

しばし呆然と己の右腕を見下ろすセルゲートだったが、いきなり大声で叫んだ。

「な、な、なんてことするんだあああつ!？」

オレのっ、オレの呪われた右腕があああつ! と怒鳴り、俺に詰め寄ってくる。

「これではもう二度と、『鎮まれ、オレの右腕よ!』って言えないではないかあああつ! なんてことをしてくれたんだツ!? 返してくれ、オレの右腕をツ!」

「いや、鎮めたかったんだろ? 自分で言ってきたじゃん。苦しそうにしてたし」

「あれは演技だツ! 本当はまだまだ余裕があつたんだよツ! それくらい察しろツ!」

察しろって言われてもな!。

『マスター、察した上でやりましたよね?』

YES!

「「「將軍……演技とは?」」」  
「ギクツ」

部下たちの白い目に気づき、セルゲートはヤバイ！ という顔を  
した。

「い、いや、その……今日は確かに少し、大袈裟にやり過ぎた気は  
するが……」

「嘘だな。巻き付けられていたあの包帯のお陰で、悪魔の右腕はほ  
とんど眠った状態だったぞ」

俺が断言すると、竜騎士たちの視線がセルゲートに突き刺さる。

「將軍……」

「いい歳して……」

「心配して損した……」

「ま、待ってくれ！ 違うんだ！ あの方が気持ちに乗って、実力  
が発揮されるというかなんというか……っ！」

まあ何にせよ、これで中二病な指揮官も無力化したし。  
こいつを捕虜として王宮に連れて帰るか。

敗戦した帝国軍の兵士たちは、意識を取り戻した者から次々と潰  
走していった。

「よくやったぞ！ まさか本当にたった一人で十万もの兵を倒して

しまつとはのう！ お主を信じて正解じゃった！」

王宮にセルゲートを捕虜にして連れて帰ると、リリアナが子供のようにはしゃいで喜んでくれた。

「途中、何度も逃げ出そうとされていましたが？」

「あ、あれはトイレに行こうとしただけじゃ！ 断じて逃げようとしたわけではない！ ほ、本当じゃぞ！？」

セリーヌがぼそりと暴露し、リリアナが慌てて誤魔化す。

そんな彼女にフィリアが後ろから飛び付き、獣耳をもふもふした。

「けもみみーっ」

「ちょ、やめるのだ！ ひゃうん！」

「わーい、あたらしいペットっ！」

「違う！ わらわはお主のペットではない！」

どうやらフィリアは彼女の獣耳が気に入ったらしい。助けてくれー、と涙目で訴えてくるが放置した。

「面倒だし、戦後処理とかはそっちでやってくれよ」

これで一件落着。受けた依頼は完了だ。

後はゆっくりとこの国を満喫するとしよう。

### 第34話 兎追ひし

エクバーナには色々な種類の獣人が暮らしている。

獣人というのは人間と獣を融合させた姿をしている亜人のことだが、その割合は種族によって違う。

例えば、見た目はほぼ人間で、獣耳と尻尾が生えている程度の獣人。女王のリリアナや宰相のセリーヌなんかはこのタイプだな。

リリアナは狐の獣人で、セリーヌは虎の獣人だった。

中にはケンタウロスのような、身体の半分が獣という獣人もいる。

また、普段は人間と変わらない姿をしているが、変身することで獣の姿となる人狼族ウェアウルフのような獣人もいるようだ。

一方で、獣の割合の高いものは魔物として扱われることが多い。

例えば、オークとかミノタウロスなんかがそうだ。

また人間の割合が高くて、知能が低くて狂暴なものは魔物とされるらしい。ラミアとか、ハーピーとかだな。

『数が多い獣人と言えば、やはり猫人族と犬人族でしょう』

「ちなみに、もふもふのし甲斐がある獣人は？」

『……兎人族などでしょうか』

兎！

いるのか、ウサ耳の獣人が！

『数は少ないですが、この国にもいるはずですよ』

「よし、今からウサ耳をもふりに行こう」

方針が決定した。

道行く獣人たちの中から特徴的なウサ耳を見つけ出そうと、俺は意識を集中させる。

「げへへ……可愛い可愛いウサ耳っ子はいねえかあ………?」

「不審者にしか見えないのでやめてくださいッ!」

「あたし、他人のフリをしてもいいだろうか……」

まったく世知辛い世の中だぜ。ちょっと目を血眼にして鼻息を荒くして、女の子たちをガン見しているだけで不審者扱いされるとは。

「フィリアもウサ耳もふりたいよな?」

「もふもふしたーい!」

と、そこで俺はあるものを発見してしまう。

・喫茶店ラビットホーム

『どうやら兎人族がやっている喫茶店のようですね』

「合法的にウサ耳をもふれる場所キターッ!」

何という絶好のタイミングか。

これはきつと、俺にウサ耳を好きになだけもふもふしなさいという神様の思し召しに違いない!

『単に 幸運・極 スキルのお陰かと。それと喫茶店はウサ耳をもふるための場所ではありません』



俺は意気揚々と、その喫茶店へと飛び込んだ。

「いらっしやい」

「ウサ耳もふもふ一杯！」

早速、もふもふを注文する俺。  
だがカウンターの奥にいたのは、

「ふっ、もふもふか……久しぶりだな、その注文を受けたのは。いいだろう。しかし私のウサ耳は決して安くない。ひと揉み銀貨一枚だ」

兎人族は兎人族でも、ダンディなおっちゃんだった。

「やつぱなし！ 普通にコーヒーくれ！」

俺は慌てて注文を取り消した。

くっ……俺としたことが痛恨のミスだ！ バニーガールのイメージのせいで勝手に兎人族は女の子ばかりと思っていたが、そりゃ男もいるだろうに。

しかし四十がらみのバーテンダーっぽい服を着たおっさんが頭にウサ耳を生やしているとか、もはや違和感の塊だな……。

「店主」

「なんだい？」

「他に店員はいないのか？」

「生憎、今は私一人だ」

何で一人なんだよ！ 兎は寂しいと死んでしまっ生き物じゃなか

ったのか！

仕方なく俺はカウンター席に座って、涙ながらにコーヒーを啜った。苦いけど美味しい。

「何で泣いてるんですか……」

ティラが呆れ顔で隣の席に腰掛ける。

「ブレンドコーヒーを一杯。ブラックで」

「何っ？ 貴様、ブラックを飲めるのか！？」

「ん。当然」

「も、もちろん、あたしも飲めるけどな！ ま、店主っ、あたしもブラックで！」

シロがブラックで注文し、エレンも強がってそれに倣う。

「フィリアはね、それをもふもふしたい！」

「お嬢ちゃん、私のウサ耳に注目するとはなかなかやるな」

店主は頭を下げ、ウサ耳をフィリアの前に差し出した。フィリアは手を伸ばし、店主のウサ耳をもふり始める。

「ふおおおおつ。しゅごーい！ しゅごいもふもふ！」

目を輝かせるフィリア。

「そ、そんなにもふもふなのか……？」

「しゅごーい！」

店主のウサ耳はフィリアの小さな指が隠れてしまっほどに毛量が

多く、しかも質感がふわふわとしている。気持ちいいはずだ。  
ごくぐり、と思わず唾液を嚥下してしまう。

俺は葛藤した。

もふもふしてみたい。

だが相手はおっさんである。

おっさんの耳を揉むなど、俺にとっては屈辱と言っても過言ではない敗北。

もふる相手は、可愛い女の子でなければならないのだ！

『マスター、わたくしには理解不可能なこだわりです』

だが目の前で嬉しそうにもふもふしているフィリアを見ると、耐え難いもふもふへの欲求が湧き上がってくる。

「ぐうつ……もふりたくないっ……もふりたくないのにいいいっ！  
！！」

意志に反し、俺の腕がおっさんのウサ耳へと伸びていく。  
懸命に堪えようとするも、抗うことができない。

そのときだった。

「ただいまー」

ドアが開いて、一人の少女が店内に入ってきた。  
年齢は恐らく十代後半。

少し日焼けしていて、快活な印象のある美少女だ。  
頭には立派なウサ耳があった。

「あ、お客さん。いらつしゃいませー」

買い出しにでも行っていたのか、彼女は食材の入った袋を手には  
握にぎりてくる。

「はい、お父さん。頼まれていたやつ」

「あ、ありがとう……」

娘がいたらしい。

俺と店主の視線が合う。

「店主」

「な、なんだい……？」

俺はにっこりと微笑んだ。

「娘がいたんだな？」

「あ、ああ……」

店主はだらだらと額から汗を流し出した。  
次の瞬間、店主が叫んだ。

「レーナ、逃げなさい！」

「えっ？」

「早く！」

「う、うん！」

ウサ耳美少女が訳も分からず走り出す。

「ふはははっ！ 逃がすかああっ！」

俺は高笑いとともに後を追った。

あたしの名はレーナ。

ここエクバーナで、お父さんと一緒に小さな喫茶店を営む兎人族だ。

つい昨日まで他国が攻めてきたとかで街中がぴりぴりしていたけれど、兵隊さんたちがやつつけてくれたらしい。お陰で今日からまた、いつも通りに営業を再開することができる。

と、思っていたんだけど……。

「な、何なの一体!？」

買い出しを終えて店に戻るなり、お父さんから逃げると言われたのだ。

訳も分からないまま、あたしは言われた通りに店を飛び出す。

直後、あたしを追い駆けて人間族の男が店から出てくる。

「ウサ耳もふもふウサ耳もふもふウサ耳もふもふウサ耳もふもふッ

!!」

あれはヤバい!

あたしはそう直感した。だって目が完全にイっちゃってるし……。お父さんが逃げると言ったのは、きつとあいつのせいだ。

けれどあたしは兎人族。獣人の中でも、足が速いことで知られている種族だ。しかもあたしは、毎年エクバーナで開催されている短距離走選手権で、二年連続で上位入賞しているほど足に自信がある。あつという間に引き離して

「つて、速い!？」

あたしは後ろを振り返り、驚愕した。

あの人間族の男は、あたしのペースに付いてきているのだ。いや、それどころか徐々に距離が詰まってきている!？」

「うーさーぎーおーいしー」

しかも鼻歌混じりで超余裕なんですけど!？」

「くっ……」

あたしはごちゃごちゃとした路地裏へと飛び込んだ。あたしは身のこなしにも自信がある。ほとんど迷路と化しているここなら、相手を見失いやすいし、あいつを撒くことができるはずだ。

そしてあたしは路地から飛び出す。適当に路地を走ったため、意外と喫茶店から近い場所だったけれど、この方が相手にとっても予想外かもしれない。

これであいつは一人、延々と路地の迷路であたしを探し続ける羽目に

「無駄だよお、小兎ちゃあああん」

「つて、何で先回りされてんの!？」

あろうことが、そいつはまるであたしの行動を予測していたかの  
ように、飛び出した先で待ち構えていたのだ。

あたしは観念して足を止め、がつくりと項垂れた。

「……大丈夫……すぐに気持ちよくなるからね……げへへ……」

男が鼻息と呼気を荒くしながら近づいてくる。

ああ、あたしの貞操もこれまでか……

「何やってるんですか      ツー!」

そのとき女性の叫び声とともに、男の頭に激しい雷が落ちた。

### 第34話 兎追ひし（後書き）

『ふるさと』は著作権が切れてます。念のため。



### 第35話 ようこそ、カルナ式マッサージ店へ

「ああ、もふりたかったなあ……」

俺は喫茶店を溜息交じりに後にした。

結局、少女のウサ耳をもふることはできなかったのだ。

「仕方がない。代わりにティラの耳を」

「やめてください。ていうか、私の耳はもふもふしてません」

「じゃあ、エレンの乳をもふる」

「じゃあって何だ！？ あたしの胸はそんな安いものではないぞ！」

二人からあっさりと拒絶されてしまう。

俺はがっくりと肩を落として、

「あーあ、好きなだけ獣耳をもふれる方法がないものかな……」

と、そのときだった。

俺の目端をとあるお店の看板が過った。

熊式マッサージ

どうやら熊の獣人である熊人族がやっているマッサージ店らしい。

「ウアアアアアアッ！！！！」

「ギアアアアアアッ！！！！」

「中から絶叫が聞こえてくるんですけど……」

『熊人族は怪力の持ち主が多く、それを活かしたものが熊式マッサージです』

客が思わず泣き叫んでしまうほどぐりぐりやるそうさ。しかしその痛さが病み付きになる獣人もいるようで、かなり流行っているという。

「はっ、俺に言わせれば痛いマッサージなんて邪道だ。適度な強さで優しく揉んでこそ……」

その瞬間、俺の頭に天啓が降りてきた。

「……それだ！」

世界最高のマッサージ師が、たったひと揉みであなたを天国へと誘う……

「……何ですか、この怪しげな謳い文句は？」

看板に書かれた文字を読んで、ティラが胡散臭そうな顔で俺を見てくる。

「カルナ式マッサージだ」

「いつから流派を名乗れるほどのマッサージ師になったんですか……」

「ふっふっふ……マッサージと称して獣耳をもふりまくる！ 我な

「から最高のアイデアだな！」

「貴様、動機が不純過ぎるぞ……」

「わざわざこんなところに店まで構えて……」

エレンとティラが半眼になっているが、気にしない。

そう。

俺はこの国にマッサージ店を開店したのだ！

「そもそも客が来るんですか？　こんな路地裏に」

ティラが言う通り、生憎、お店は目抜き通りから少し奥に入った路地にあつた。人通りなどまったくない場所だ。

「心配は要らない。道行く女の子たちに金を握らせて口コミを広げてもらったからな！」

「しっかり宣伝しました！？」

「『私もカルナ式マッサージでこんなに綺麗になったのよ』って」

「完全に嘘じゃないですか！」

「何より『リリアナ女王御用達』という宣伝文句が効果的だった」

「何で勝手に使ってるんですか！　怒られますよ！？」

実際に俺のマッサージを受けたのだから、完全な嘘という訳ではない。

そのとき店のドアが開いた。

「あの……ここでカルナ式？　とかいうマッサージを受けられるって聞いたんですけど……」

キターーーーーっ！！

第一来店者である。

しかも立派な犬耳の美少女だ。

年齢は十七、八といったところか。

彼女はどこか不安げに狭い店内を見渡しながら、恐る恐る訊いてくる。

「本当にここに女王陛下がいらっしゃったんですか……？」  
「もちろん！」

嘘です！

「……」

ティラやエレンがジト目で睨んでくるが、気にしない気にしない。

「じゃあ、そのベッドでうつ伏せに寝てもらえるかな。あ、上半身は脱いでね」

「は、はい」

マッサージだから脱ぐのは当然だよね！

少女はおっかなびっくり上半身裸になると、こちらに背を向ける形でベッドに横になった。

「では、マッサージを始めよう」

もちろんエッチなやつじゃないぞ。

俺は普通にマッサージをした。いや、普通と言っても、器用値が

リミットブレイクしている俺がやれば、それはもはや世界最高レベルのマッサージだ。まさしく神の手。ゴッドハンド

「あっ……んんっ……」

少女の唇から艶めかしい吐息が漏れる。

「はうう……す、すごいっ……噂通りですう……」

「俺のマッサージを受ければ、誰しも例外なく綺麗で健康になれる」

実はマッサージをするだけでなく、同時に回復魔法をかけていた。これで体調不良や病気までもがバッチリ治る。

「耳の方もマッサージするからね」

「え？ あ、はい」

ふっふっふ、思った通りだ！

獣人にとって、耳はとても繊細な場所。そう簡単には他人に触らせることはないが、この流れなら自然にイける！ もふれる！

「もふもふ」

「はあっ」

「もふもふ」

「んあっ」

「尻尾も行こうか」

「えっ？ ひゃ！？」

「もふもふ」

「ひうううあっ」

「もふもふ」

「ふあああんっ」

こうして俺は合法的に少女をもふもふしまくった。

マッサージが終わると、少女は息を荒くして汗びっしょりになっていた。

しかしとても満足してもらえたようで、

「す、すごく良かったです……ま、またぜひ来ます！」

少女はそう言っただけで店を後にしたのだった。

「……なんか、釈然としないんですけど……」  
「ふっふっふ、動機はエロくてもマッサージ自体は本気でやったかなー！」

そして

その後も噂が噂を呼び、次々と獣人たちが俺の店にマッサージを受けにやってくるようになった。

「私もマッサージしてください！」

「あたしも綺麗になりたい！」

「かさかさ肌が治るって本当ですか!？」

今日もまた開店と同時に、噂を聞きつけた若い女の子たちが我先にと店内に入ってくる。

店舗前には長い行列までできていた。

「俺はもふもふできて、女の子たちは美しく健康になれる！　こんな素晴らしいことがあるだろうか！　はっはっはっはっは！」

この大成功っぷりに、俺は高らかに笑う。

「パパ、しゅごーい！」

「ん、カルナのもふもふは気持ちいい」

「……まさかこんなに人気が出るとは思いませんでした」

時には女王リリアナがお忍びでやってくることもあった。

噂は王宮まで轟いているらしい。嘘が真になったよ。

「べ、別に、お主のもふもふが気持ち良かった訳じゃないんじゃないのか  
らのっ！」

さらに宰相のセリーヌまでもが来店してくれた。

「お、店を開いたと聞きましたので、先日のお礼も兼ねてと……」

ふっふっふ、どうやらあの一回だけで二人とも俺の神の手の虜になつたようだな。

リピーター率も高いし、今後ますます繁盛していくことだろう。

このときの俺はまだ気づいていなかったのだ。

大成功かと思われたこのもふもふ作戦に、大いなる欠陥があった  
ということに。

「あたしもマッサージしてほしいの」

小さな店舗に大きな身体で入ってきてそう言ったのは、象だった。正確には象の獣人。

しかもオバハンである。

「最近、やたらと肩がこっちまってね。あんたのマッサージなら簡単に治せるんじゃない？」

その全身は分厚い皮膚に覆われていて。

ぜんっぜん、もふもふしてねええええっ！

さらには虎人族のおっさんが来店して。

「俺もマッサージしてくれ。連日の土木仕事で筋肉疲労が酷くてよ  
お」

野郎はお呼びじゃねええええっ！

拳句の果てには針鼠の獣人が現れて。

「ぜひ僕の身体をマッサージしてくれ！」

手に刺さって痛いだろうがあああああっ！

そう。

最初は若い女の子を中心だったはずのロコミが、おばさんや男、あるいは、もふれないタイプの獣人たちにまで広がってしまったのである。



「ちょっと待て！ 美少女以外の来店は禁止！ 毛の生えてない獣人も禁止！」

俺は懸命にそう訴えたのだが、獣人たちはまるで納得してくれなかった。

「男女差別だ！」

「獣種差別をするな！」

「わしゃ、リウマチが酷くてのう……」

「ハゲも治るって聞いたんだ！ お願いだ！ これ以上、前髪が後退したらっ……」

「おいらのアソコを……ドウフフ……」

おい変態まで交じってるぞ！？

拳句の果てには、半ば暴徒と化した獣人たちに追い駆け回される羽目に。

「もう嫌だああっ！！」

俺は獣人の国を逃げ出したのだった。

**第36話 黒輝竜襲来！（前書き）**

本日2回目の更新です

### 第36話 黒輝竜襲来！

エクバーナを脱出した俺たちは、再びNABIKOで移動していた。

まったく舗装されていない凸凹の大地を進んでいるはずなのに、まったく揺れを感じない。時空魔法を応用することによって、内部の居住空間を空間的に固定しているのである。

俺はリビングのソファでまったりと寛いでいた。

この超高性能のゴーレム兼キャンピングカーは、自動で目的地まで連れて行ってくれるのだ。特に何もすることがないので、本を読んでいるティラの横顔をじいつと眺めてみる。

「さ、さっきから何じろじろ見てるんですか」

「視姦」

「サンダーボルト」

「ぎゃあ！……じよ、冗談だって！ただ何となく見てただけだから！」

読書しているエルフって、何だかとてもカッコいいよね！

「……気になるからやめてください」

禁止令が出たので、俺は仕方なくリビングの端っこで筋トレをしているエレンの乳へと視線を転じた。

「こっちも見ろなっ！」

「俺は一体どこを見てろと？」

『そのイヤらしい視線そのものが問題かと』

それにしてもエクバーナでは酷い目にあつたな……。美獣人以外をもふるなんて正直ごめんだ。しかしある意味、マッサージ作戦が上手くいき過ぎたと言つべきかもしれない。

「ところで次はどこに行くつもりですか？」

俺が嫌なことを思い出して嘆息していると、本を読んでいたティラが顔を上げて訊いてきた。

「ガロナ火山だ」

「火山、ですか？」

ティラが小首を傾げる。

ガロナ火山というのは、エクバーナの北方にある活火山だった。

『最後に噴火したのは今から百年ほど前のことで、山の麓には幾つかの集落があります』

もちろん火山を見に行くわけではない。

近くに火山があるということはすなわち、あれが湧くということだ。……ふっふっふ。

「だがこの時期はかなり寒くて、深い雪に覆われているはずだぞ」「ゆきつてなーに？　おいしいの？」

フィリアが興味津々で聞いてくる。  
残念ながら雪は食べ物じゃない。

「ん。雪は食べられる。しやりしやりしてる」

どうやらシロは雪を食べるようだ。

「しゅーい！」

「シロ、フィリアちゃんに変なこと教えないでください。普通、雪は食べませんから」

「なにっ？ ティラは食べないのか？ 結構、美味しいのだぞ。あたしは毎年、冬になると積もった雪でかき氷を作っていた」

「エレンさん、本当に王族ですか！？」

この世界なら大気汚染とかないし、食べても問題なさそうだけだな。

「フィリアちゃん、雪が積もると地面が真っ白に染まるんですよ」  
「みたいみたい！」

『窓の外をご覧ください。その雪が降っています』

ナビ子さんに言われて窓の外に目を向けてみると、確かにちらちらと空から白いものが降って来ていた。まだ積もってはいないが。

「ゆきー？」

「そうです、あれが雪です」

ちなみに外は零度近い気温だろうが、NABIKOの中はちょうどいい温度にずっと保たれている。魔力を熱に変換して温めているからだ。

「しゅーい！ パパ！ さわってみたい！」

というフィリアの無邪気な希望で、俺たちはいったんNABIK  
Oを停止させると、外に出てみた。

「さ、寒いなっ」

エレンがぶるぶるっと身体を震わせる。乳も一緒に揺れる。

「そんな大きな乳袋があるのに、寒いのが苦手なのか」

「さ、寒いものは寒いのだっ！」

「なのにティラは平気そうだな」

「何でそこで私の胸を見てくるんですか？ 普通に寒さに慣れてい  
るだけです」

「つめたーい！ しゅごーい！」

フィリアは薄らと雪化粧された大地を駆け回ったり、ジャンプし  
て落ちてくる雪を捕まえたり、大はしゃぎだ。

「ん、冷たい。味はない」

シロは舌を出して、落ちてくる雪を受け止めていた。

それからNABIKOに戻ってさらに北へと進んでいると、だん  
だん雪の量が増えてくる。地面は薄らと雪化粧され始め、辺りは銀  
色の世界に。

「何だかシロみたいですね」

白輝竜であるシロは白髪だし、透き通るような白い肌をしている。  
外の銀世界に交じると、きつと周りの景色に完全に溶け込んでしま  
うだろう。

そのときふと、窓の外から見える真っ白い空間に黒い異物を見た。何だろうか、あれは？

雪に埋め尽くされた空から、こちらに向かって何かが飛んでくる。鳥だろうか。

それにしてもデカい気がする。

『マスター、空から敵性個体が近づいてきます。それもかなり強力です』

ナビ子さんの声が車内に響いた。

その黒い物体はどんどん大きくなって、ついにはNABIKOのすぐ目の前までやってきた。激突寸前で停止すると、その風圧だけで車体が大きく傾いた。中にいるとまったく振動を感じなかったが。

「ドラゴンじゃねーか」

NABIKOの目の前には、黒光りする鱗で覆われたドラゴンが浮遊していた。

黒輝竜 A

種族：黒輝竜

レベル：61

スキル：咆哮

竜気

限界突破

『白輝竜に並ぶ神竜の一種です』

また神竜か。

しかし滅多に現れないはずの神竜に、こんなに頻繁に出会うことなどあり得ない。

もしかしたらシロの知っているやつだろうか。

「シロ、知り合いか？」

「ん、違う。黒輝竜に知り合いはいない」

違うらしい。

だがNABIKOの外から、竜語による怒鳴り声が聞こえてきた。

『テメエが中にいるのは分かってんだよ！ 出て来やがれ！』

「……やっぱり知り合いじゃないか」

「？」

シロは小首を傾げつつ、窓の方へと近付いてくる。  
外にいる黒輝竜を見て、

「知らない」

やはり見覚えがないらしい。

『ちょ、知らないってどういうことだよ！？ オレだよ、オレ！』

ドラゴンの里でよくテメエに勝負を挑んでただろうが！』

幼竜は名前がないためオレオレ詐欺みたいになっているが、相手としては明らかにシロと面識がある感じだ。……たぶん、シロが忘れちゃってるんだろうなあ。

「……？」

『何で覚えてねえんだよっ！？』



「興味のないものは覚えないう主義」

『酷え！？ ていうか、オレがわざわざ出向いてやったんだ！ と  
つと出て来やがれよ！』

「寒いから嫌」

『オレだって寒いんだよオツ！』

どうやらドラゴンも寒いらしい。

『出て来い！』

「嫌」

『だったらこっちから中に入ってやるぜ！』

それでもシロが出て来ないと知るや、黒輝竜は人間へとその姿を変えた。どうやら人化できるらしい。

「って、どうやって中に入るんだよ！？ 入れろコラ！」

人語で怒鳴り、どんどんと車体を叩いてくる。

『マスター、どうしますか？』

「ドアを開けてやってくれ」

ナビ子さんがドアを開けると、褐色の肌をした少女が中に飛び込んできた。

「ううううっ、寒いっ！」

その乱暴な口調通り、目付きが鋭くて随分と気の強そうな少女だ。  
……今は鼻水を垂らしているが。

見た目の年齢はシロと同じくらいだが、もう少し背が高い。髪は

黒く、片側だけ逆立てながら後方に流していた。  
そして

「全裸じゃない、だと……？」

俺は愕然と呻いた。

期待を裏切って少女は服を身に纏っていたのだ。ちなみにセーラー服（黒）っぽいやつ。なんか一昔前の不良少女　スケバンみたいだな。

「まさか、人化の際に服を作り出すことができるというのか……？」  
「あ、当たり前だろ！　人化して裸のままだったら恥ずかしいだろうが！」

ドラゴンにも人間と同じ感覚があるらしい。

「シロは全裸だぞ？」

「そいつが異常なんだよ！」

「違う。全裸は由緒正しきドラゴンの伝統」

「もう何百年も昔のことだろうが！」

シロの価値観がおかしいようだ。

それにしてもこの二人、一体どんな関係なんだ？

『白輝竜と黒輝竜はその相反する見た目通り、犬猿の仲であると言われています』

仲が悪いのか。確かに見た感じ、シロはともかくとして、この黒輝竜の少女の方はさっきから敵意を隠そうともしていない。

「テムエには絶対に負けるわけにはいかねんだよ！　なぜならオレは、いずれ全てのドラゴンの頂点に立つべき存在だからな！」

黒輝竜の少女は腰に手を当てると、そう力強く宣言して、

「なのに何で覚えてねえんだよオオオ　　ッ！？」

今度は涙目で叫んだ。

### 第37話 黒輝竜逃走！

「ん、思い出した」

「っ、ようやく思い出しやがったか！？」

それまでの苛立った様子からは一変し、黒輝竜の少女はパツと表情を輝かせる。

「よく勝負を挑んできたドラゴンがいた」

「そう！ それがオレだ！」

「とても鬱陶しいやつ」

「えっ……オレ、鬱陶しがられてたのか……？」

黒輝竜の少女が、がーん、という様子で顔色を青くした。

こいつ、実はシロのことが好きなんじゃないか。

「今のところわたしの全勝中。いつも負けると泣きながら逃げてく  
「な、泣いてなんかねえし！ ぜ、全敗中なのは確かだけだよっ…  
…だが、ここから挽回していくんだよ！」

どうやらシロに一方的に絡んでいたらしい。

何となく二人の関係性が見えてきたな。黒輝竜の方はシロのことをライバル視して何度も戦いを挑んでいたようだが、シロの方は彼女を意識すらしていなかったようだ。……覚えていないくらいだもんな。

「っーかテメエ、オレとの勝負をすっぱかしやがっただろ！ オレが待ち合わせ場所でどれだけ待ち続けたと思っただよ！？」

「どれだけ？」

「二年だよ、二年！　ず~~~~と待つてんのに全っ然テメエが来ねえから、二度目の冬が来たじゃねえかよっ！」

二年も待つたのか……。

この黒輝竜、やっぱりシロのこと好き過ぎるだろ。

「ん。悪かった。謝る」

「え？　そ、そうか？　ま、まあ、そんなにテメエが必死に謝ってくるなら、仕方ねえから許してやってもいいけどよ……」

「約束は覚えてない」

「覚えてねえのかよっ！？　テメエが忘れちゃいけないと思って、リマインド果たし状まで送ったのによッ！」

リマインド果たし状なんて言葉、初めて聞いたな。

リマインドメールの果たし状版だろうけど、そんな文化がドラゴンにもあるのか……。

「しかも一週間前、三日前、一日前と、計三回も！」

このドラゴンがマメ過ぎる。

ていうか、そんなに頻繁に送られてきたら怖いわ。

「手紙は数か月に一度しか確認しない主義」

このドラゴンはテキトウ過ぎる。

その頻度は日本だったら「死んでるんじゃないか？」とガチで心配されるレベルだろ。

「とにかく！　今日こそあのとき果たせなかった決闘をするぜ！

「さあ早く表に出やがれ！」

「嫌。寒い」

「オレだって寒いっての！」

「ん。じゃあ一緒にここで寛げばいい」

「え？ そうだな……ここはとても暖けえし、のんびり過ごすには最適　　って、違ああう！　オレはテメエと馴れ合いに来たんじゃねえの！　果し合いに来たんだよ！」

黒輝竜の少女は迷いを振り切るように首を振ると、覚悟を決めて NABIKO から外へと飛び出した。

「寒っ！　……さあ、勝負だ！　って、何でその気持ちよさそうな椅子の上で猫みたいに丸くなってんだよおおっ！　出て来やがれよおおっ！」

「これはソファと言う。至高の寝床」

「寝るんじゃねええっ！」

何だろうか、このコントは。

「ん。そもそも竜王になる気はない」

「はっ？」

「そんな資格も無い。今は飼われている身」

「か、飼われてる……？」

シロが俺を指差して言った。

「わたしは彼のペット」

黒輝竜の少女は目を大きく見開く。

「こ、この人間の、ペット……?」

「どうも、俺が飼い主です」

「う、嘘だろ!? テメエは神竜だろうが! 神竜が人間ごときのペットになる訳ないだろ! テメエがこいつらを飼ってるんじゃないのかよ!？」

今までそういう認識だったのか。

「残念だが、逆だ。シロは俺がペットにした」

「しかも名付けまでしてやがる!? ま、まさか……あんなことや、こんなことまで……」

「シロはいつも俺の命令に忠実だぜ?」

嘘は言っていない。

黒輝竜の少女はわなわなと全身を震えさせ、キツと鋭い目で俺を睨んでくる。

「よ、よくも! よくもそいつを穢してくれたな! この鬼畜! 変態! しかも他の女まで侍らせてやがるじゃねえか!」

「そうだ、全員俺の女だ。ふっふっふ、これこそがすべての男の夢、ハーレム! いでっ」

ぼこっ、と背後から二つの衝撃。

「いつ私がカルナさんの女になったんですか?」

「勝手に貴様の女にするな!」

あれー、おかしいなー? なんで俺、ティラとエレンから殴られたんだろうなー? こんなに愛しているのに。

「許さねえ！ 絶対に許さねえぞ！」

少女は人の姿から再びドラゴンへと変貌した。

『まずはテメエから相手をしてやる！ オレが勝ったらそいつを返してもらっぜ！』

そして三十秒後。

『ひいいいっ。ごめんなさいごめんなさい、オレの負けですッ！  
だからもう許してくれええっ！』

あんなに威勢よく挑んできた黒輝竜だったが、俺にボコられて今は情けない声で鳴いていた。

ステータスを鑑定した時点で分かっていたけど、シロよりも弱いな。全敗する訳だ。

「よし、お前も俺のペットにしよう」

雪の上でぐったりとしている黒輝竜に乗っかり、俺は宣言する。

『そ、それだけはやめてくれ！ オレは将来、すべてのドラゴンの頂点に立つべき存在！ 人間なんかには飼いやられるなんて、あつてはならねえんだよ！』



「わーい、あたらしいぺつとーっ！ パパしゅごーい！」

「そうだぞー、パパはすごいぞー」

『話を聞けよ！？ あと子供！ オレの鱗をぺしぺし叩くんじゃねえ！ しかも結構痛いんだが！？』

俺の下で何やら喚いている黒輝竜を無視し、フィリアは天真爛漫な顔で訊いてくる。

「パパ！ なんてなまえつけるの？」

「そうだな……」

『しかも勝手に名前を付けようとすんじゃねえ！』

「決めた。お前の名前はクロだ」

『だから勝手に名付けるなって言っただろうがあああつ！！』

黒輝竜が暴れ出す。

「ちょっと大人しくしてろ」

俺は硬い鱗を殴った。黒輝竜が『ぎゃあ！？』と叫んで大人しくなる。

人間の女の子の姿をしているとさすがに抵抗があるが、ドラゴンの姿だったら別に心は痛まないな。

『うう……あり得ねえ……何でたかが人間の拳がこんなに痛いんだよ……。オレたち黒輝竜の鱗はアダマントタイト級の堅さがあるって言われてんの……』

涙目で呻く伝説のドラゴン。

「カルナさん。可哀想ですし、それくらいにしてあげてください」

「そつだぞ。神竜とは言え、まだ子供ではないか」  
『くううつ、人間ごときに憐れまれるなんてっ……なんという屈辱……っ！』

ティラとエレンに同情されて、黒輝竜はかえって悔しそうにしている。

直後、人間の少女の姿へと変わった。

お陰で俺が女の子の上に乗っかっているような形になってしまう。傍から見たら通報ものだ。

「くはははっ！ 女を男が組み伏せているこの状態！ さすがに退かざるを得ねえだろ！」

黒輝竜が、どうだ！ とばかりに勝ち誇る。

「お、柔らかいのにしっかり引き締まってるなあ」

「ちょ、なに触ってんだよ！？」

「お尻」

人間の姿だったら殴れないけど、触れるぜ。へっへっへ。

「場所を聞いてるんじゃないやねえ！ お願いだから早く退いてくれ！

テメエこのままだと変態扱いされるぜ！ ほら、お仲間が白い目で見てるぞ！」

「はははっ、残念だったな！ 俺はすでに自他ともに認める変態だ！ 今さらそんなことを気にするとも思ってたか！」

「ぎゃああああっ！ 誰か助けてくれええええっ！」

しばし黒輝竜は喚きながらジタバタと暴れていたが、不意に大人しくなった。

そして瞳から雫が零れ落ちるのが見える。  
こいつ、ガチ泣きしてやがる……？

「ぐすんぐすん……」

少女の姿で泣かれるとさすがに少し罪悪感を覚えるな。

……ちよつとイジメ過ぎたかもしれない。

俺はベソをかいている黒輝竜を解放してやった。

「ぐすん……なんちゃって！ くはははっ、引っ掛かったなアっ！  
女は自由に涙を流せる生き物なんだよ！ 次は絶対にギャフンと  
言わせてやるから、首を洗って待ってやがれ！ バーカバーカバー  
力！」

するとそんな捨て台詞を残し、黒輝竜はドラゴンの姿へと戻って  
空へと飛び上がった。いった。

ただの嘘泣きかよ。

「テレポート」

『ぎゃふん！？』

なので転移魔法で先回りし、叩き落としてみた。

『今のは普通に逃がすべきシーンだろ……ほんと何なんだよ、こい  
つは……もうヤダ……』

### 第38話 あくまでも混浴を目指す

俺たちはガロナ火山の麓へと辿り着いていた。

NABIKOから見える窓の外には一メートル近い雪が降り積もっている。この辺りは豪雪地帯でもあるのだ。

「こんな寒い地域に何をしにきたんですか？」

「寒いからこそいいんじゃないか」

「どういうことです？」

首を傾げるティラに、俺はここにきた目的を告げた。

「この一帯は有名な温泉地なんだ」

「温泉！　そうか、温泉に入りに来たのだな！」

真っ先に喰い付いてきたのはエレンだった。

アルサーラ王国には温泉が少なく、湧いても湯量が少ないため入浴に利用することはめったにないらしい。だが知識だけはあったように、いつか行ってみたいと思っていたそうだ。

「温泉、ですか……？」

一方のティラは聞いたことすらなかったようだ。

「地中から湧いてくるお湯のことだ。それに浸かれば美容や健康にとってもいいのだぞ」

と、エレンが説明してくれる。

「だがこの温泉の効能はその程度じゃない」  
「なに？」

俺はナビ子さんから得た情報をさも知っていたかのように語った。

「浸かればありとあらゆる傷や病気が癒され、身体能力が上がり、さらには運氣も上昇するという凄まじい効能があるんだ」

まさに魔法の温泉。

こういうのって地球だったら胡散臭いのだが、この世界にはリアルに存在している。そもそも魔法が普通にあるもんな。

「け、剣の腕も上がるのか！？」

「上がる上がる」

たぶん。

『上がります。 剣技 スキルに一定の熟練値が加算されます』

上がるらしい。すげえ温泉だな。

「さらに発育にもいいらしい」

「っ、発育……」

発育という言葉にティラが喰い付いてきた。

「……なるほど。お湯に浸かるだけでそんな効果が……。っ、強くなれるというのなら入ってみてもいいかもしれませんね」  
「ティラの胸も大きくなるかもな」

「あえて言つのを避けたんですから察してください！」

俺、空気読むのが苦手なんだ。

『読めないのではなく、読まないだけでは？』

「パパ！ フィリアもおおきくなれるー？」

「な、なれるなれる……」

「わーい！」

『なれません』と、ナビ子さんが俺の頭の中にだけ悲しい現実を伝えてくる。

そうなんだよな……。フィリアは魔導人形だからこれ以上、成長しないんだよな……。

恨むならロリコンだった製作者を恨んでくれ。

やがて麓の町へと辿り着いた。温泉宿と思しき建物が数多く並んでいる。

しかし俺はそれをあっさりと素通りする。

「む、どこに行くのだ？ この先にはもう宿などなさそうだぞ？」  
「ふっふっふ。これから俺たちが行くのは山の奥にある秘湯だ！」

NABIKOをゴーレムタイプに変形させ、雪に覆われた深い山の中へと分け入っていく。

「秘湯！？ なんかにさらに凄そうだぞ！」

今までの流れで秘湯って言うとか確かに凄そうに聞こえるが、実際のところ効能的には大差ない。源泉が同じだもん。

なのになぜわざわざそんなところに行くかと言つと、もちろん、宿に泊まるお金を節約するため ではない。

混浴だからだ！

自然にできた温泉なので、入浴する場所が一つしかないのだ。つまり必然的に男女が同じお湯に浸かるしかないのである！  
そうだよな、ナビ子さん？

『……その通りです。マスターがマスターである以上、訊ねられれば答えざるを得ないわたくしの苦しみを察してください』

そうして俺たちがやってきたのは、落差二十メートルはあるだろ  
う大きな滝だった。

激しく飛沫が上がっているが、よく見るとそれが濛々とした湯気  
となって辺り一帯を真っ白に染めている。

「もしかしてこの滝そのものがお湯ですか？」  
「その通り」

これだけ大きな滝でありながら、それがすべて地熱によって暖め  
られた温泉なのだ。

その滝壺は、まさしく天然の露天風呂。  
ここが秘湯だった。

「すごいぞ！ 思いつ切り泳げそうだ！」

「わーい！」

「温泉は全裸。素晴らしい」

エレンが子供のように目を輝かせて服を脱ぎ始めた。それに釣られるように、フィリアとシロも服を脱ぎ出す。

「つて、エレンさん！　こんなところで脱がないでください！」

「ぬあっ……す、すまない、つい興奮して……」

くそっ、もう少しでポロリするところだったのに！

「ちっ」

「カルナさん今、舌打ちしましたね！？」

「む。しかし待て。これだと温泉が一か所しかないぞ？」

どうやらエレンが気づいたらしい。

「おおっとー。これは予想外だったなー。でも仕方ないかー。混浴なんて別に珍しいことじゃないしなー（棒）」

「カルナさんは百メートル以上離れた場所で待機してください」

女性陣が温泉に入っている中、俺は一人そこから百二十メートルくらい離れた位置に停めたNABIKOで待機していた。

……ここまでは計算通りだ。

「くっくっく……俺を誰だと思っている。チートスキルを百個持つ最凶の変態ことカルナ様だぞ！」



『マスター、自分で言わないでください』

千里眼 スキルがあれば、彼女たちの裸など幾らでも見放題なのだ！

だが、俺はあえてそれを使わない。

『……マスターにも人として最低限の倫理観があったのですね』

なぜか。

理由は単純。

『俺はあくまで混浴に拘るからだ！』

『……少しでもマスターを見直したわたくしが馬鹿でした』

千里眼 越しの映像というのは、やはり肉眼には劣る。

画面越しの全裸美少女と目の前の全裸美少女。

どっちがいいかなんて、愚問だろう？

『俺はこの目で直接裸を見たい ツ！！！』

という訳で、俺は変身魔法で姿を変えた。

人間の女性の姿である。

艶やかな黒髪に端正な小顔。ちゃんと胸は膨らんでいる。

どこからどう見ても今の俺は美少女だった。

「どうかしら、ナビ子さん？ うふん」

口調も変えてみた。ちょっと色っぽくポーズを決めてみる。

『キモイです』

ナビ子さん、ばっさり。

だがこれなら同じ湯に浸かってても絶対にバレないはず！

俺は早速、服を脱いだ。

「しかし身体まで完璧に女だな………すげえ………」

Dカップくらいの胸を思わず揉んでみる。おおお、柔らかけえ……。そして股間にアレは付いてない。今の俺は完全無欠な女の子。

「さあ、いざ逝かん！ 楽園へ！」

俺は乳を揺らしながら温泉へと走った。寒い！

「あら、先客がいらっしやったみたいね。ご一緒させていただいても？」

滝壺前までやってくると、俺はたまたま温泉に入りきた一般人を演じて彼女たちに声をかける。

「もちろんだ」

気持ち良さそうに湯船に肩まで浸かっていたエレンが、俺だと気づかずに返事を寄こす。

今はまだ湯煙が多過ぎて身体が見えないが、近付いてじっくり拝ませてもらうことにしよう。

と、湯船に浸かるうとした、そのとき。

「サンダーボルト」

なぜかティラから雷撃が飛んできた。

「ぎゃあ！？ な、何でいきなり攻撃してきた！？ いえ、きたのですか！？」

「こんな秘湯に女性が一人でやってくるはずないでしょうッ！」

し、しまったあああッ！

そこは盲点だったあああッ！

それはそうだ。魔物も出るような山の中だ。こんなところに普通、女性が一人で温泉に入りに来るなんてあり得ない。

「あと、そのイヤらしい顔がどう見てもカルナさんですッ！ 女に化けていても分かりますからッ！」

「パパのえっちーときのかおしてるー」

マジか！ 俺、そんなエロい顔してやがったのか！

『はい。放送禁止レベルの顔をされています』

「ま、まさか変身魔法まで使えるのか……？ 危うく騙されるところだったぞ！ 油断も隙もない奴だな！」

「だが今の俺は中身はともかく外見は女！ 外見が女ならばそれはもう女と言っても過言ではない！ そして女同士ならば一緒に入っても何の問題もない！」

「問題大ありますッ！ 早く出て行ってくださいッ！」

無理でした。

混浴作戦その一、失敗。

### 第39話 それでも俺は混浴を目指す

女性に変身して混浴しようと試みた俺だったが、あっさりバレて失敗に終わってしまった。

『マスター。諦めてここで待機しておくべきかと』

ふっふっふ……この程度で引き下がる俺だと思ったのか？

「作戦その二だ！」

俺は先ほどの反省を生かし、今度は別のものへと変身することにした。

目線が低くなり、全身が毛に覆われる。

「ウキキ、ウキイ！（これなら、どうだ！）」

猿だった。

この山には猿も棲息している。道中、幾度かNABIKOの窓からその姿を確認することができたし、間違いない。

そしてこの山の猿たちは、時に温泉に浸かることもあるのだという。日本にもいたよな。温泉に入っている二ホンザルたちが。

変身魔法が使えるとは言っても、体型が大きく異なる人間以外の生き物に変身するのは容易なことではない。まさか動物にまで変身できるなんて、さすがの彼女たちも思わないだろう。

いける！

これなら絶対に混浴できる！

俺はそう確信しながら、今度こそと滝壺温泉までやってきた。  
エレンとティラは中央付近にいて、シロは流れ落ちてくる滝を浴びている。フィリアの姿だけは見えないな。と思っていたら、滝と一緒に上から降ってきた。

「わーい！ たーのしー」

危険だからやめなさい。

まあ魔導人形だし怪我することはないのだが。

「ん？ 猿がいるぞ」

エレンが俺に気づいてこっちを見てくる。

俺は少し人間に警戒するような猿の演技をしつつ、離れた場所からお湯に浸かった。

「猿も温泉に入るのだな」

感心したように頷いているエレンは、俺だと気づいている様子はない。まあ彼女はアホだからな。問題はティラの方だ。

先ほどの反省を生かし、特に自分の表情には注意する。

「お猿さんですか？」

「ああ。気持ちよさそうに湯船に浸かっているぞ」

チラリと横目で見ると、二人はそんなやり取りを交している。もっと近づきたいが、焦ってはならない。俺は猿だ。今はまだ人間を警戒している。少しずつ警戒が解けていく様を演じるのだ。

「わーい！ あたらしいぺつとーっ！」

とそのとき背後から忍び寄ってきた影が、いきなり俺に抱き付いてきた。

フィリアだ。

「ぺつとぺつとー」

「ウキイ！？」

ちょ、やめなさい！ 俺は君のパパだ！ ペットじゃない！

「よしよしよしよし」

「ウキイイイツ！？」

フィリアに撫で回され、悲鳴を上げる可哀想なお猿さん。

ペット好きな飼い主って、意外とペットを可愛がるあまりペットにストレスを与えてるものなんだよね……。いや俺はペットじゃない。

「こらフィリア、やめないか。どう見ても怯えているだろう」

エレンが近づいてきて、フィリアを窘めた。

くっくくく……まさに計画通りッ！

フィリアに可愛がられて嫌がるというリアルな猿を演じることによって、二人を引き寄せるといって完璧な作戦！ フィリアは餌だったのだ！

湯気の向こうから大きな肉袋が現れた。

エレンの胸だ。

すごい。猿の低い視点から見ると迫力がいつもの三割増しだ！

「大丈夫か？」

「ウキィ……」

エレンが俺の頭に手を置いて撫でてくる。すぐ目の前に胸があった。

「ウヒヒ……」

「ん？ 何か今、嫌らしい笑い方をしたような……」

「ウキキキ？」

「気のせいかな」

眼福である。

と、そこへさらにティラがやってきた。

「フィリアちゃん。この子にも家族がいるかもしれないですし、勝手にペットにしてはダメですよ」

「うん、ごめんなさい、ママ」

ティラに怒られ、素直に謝るフィリア。

ちゃんと反省できるところが彼女の偉いところだ。

『マスターとは大違いですね』

そんなことより！

絶好のチャンスが到来した！

エレンよりも遥かにレア度の高いティラの裸！

ついにそれを拝めるときが来たのだ！

……って、タオルを巻いてるだとおおおっ！？

「ウキイ！ ウキキキキツ、ウキイイ！（おい！ 温泉にタオル巻いて浸かるとか、邪道だろ！）」

「え？ なんかお猿さんがいきなり怒り出したんですけど……」

「ウキーッ！（脱げえ！） ウキーッ！（脱げえ！）」

「このお猿さん……なんか、変じゃないですか？」

ま、まずい……っ！

興奮し過ぎたせいで、ティラに怪しまれてしまったようだ。そのときだった。

「ウオホッ！！」

突然、滝の上から巨大な影が降ってくる。

盛大な水飛沫とともに滝壺に着地したのは、真っ赤な毛並みのゴリラだった。

レッドビッグモンキー A

種族：レッドビッグモンキー族

レベル：26

いや、デカいからゴリラかと思ったが、どうやら猿のモンスターらしい。猿とゴリラの違いは良く知らないが。

「ウホウホウッ！」



赤い大猿は大きな手でバシャバシャとお湯を叩き、何やら興奮している様子だ。

さてはこの猿、覗きにきやがったな！

こんなに堂々としてくるなんて、ド変態野郎じゃねえか！

『それをマスターが言いますか？』

大猿は「ウホウツ！」と鳴くと、いきなり一番近くにいたエレンに飛びかかった。

覗くどころか襲いかかっただど！？

『襲うは襲うでも、マスターが想像されている襲うとは意味が違うかと。レッドビッグモンキーは人肉を喰らう危険な狂暴な魔物です』

肉食……ッ！ やはりこの猿、肉食系なのか！

『……』

「く……っ！ この猿、思った以上に動きが素早いぞ！」

咄嗟に飛び下がり、大猿の飛び付きを回避するエレン。おっぱいを揺らしながら怒鳴る。

「ウホウホウホッ

ウホ？」

ドラミングで威嚇をしていた大猿だったが、ふと何かに気づいたように首を傾げた。

直後、大猿の視線が俺に向く。

「ウホホ（あらいい男）」

言語理解・極のせいなのか、何を言っているのか分かってしまった。

魔物の多くはそもそも言語を持ってないため、理解できないはずなんだが……。

って、そんなことよりこの猿、雌だったのか！

「ウホッ　　ウホッ　　ウホホッ」

何かめちゃくちゃ求愛されている！？

『おめでとunggございます、マスター。ついに初めて異性から告白されましたね』

まったくこれっぽっちも嬉しくねえ！

「ウキイイイ！（お断りだ！）」

俺は即行で拒絶した。

美少女に生まれ変わって出直してきやがれ！

「ウホっ！？　ウホウ……」

大猿はショックを受けたらしく、顔を俯けてぶるぶると震え出した。ポタポタと涙が温泉に落ちる。しかしすぐに顔を上げると、怒りの形相で俺に襲いかかってきた。

「ウホッ、ウホホホオオオッ！」

『あんたを殺してあたしも死ぬ！　と言っています』

魔物がそんなこと言わねえだろ！？

いや、確かにそんな雰囲気醸し出しているけど！

お湯飛沫を上げて迫りくる大猿のモンスター。

丸太のように太い腕が俺をぶん殴ろうと迫りくる。

「ッ？」

だが俺は身軽に腕の上に飛び乗ると、その腕を伝って大猿の顔へ。その顔面に蹴りを叩き込んだ。

「ウホウツ！？」

悲鳴を上げて盛大に引っくり返る大猿。

白目を剥きながら滝壺の中に沈んでいった。

「ウキイ……」

ふう。慣れない猿の身体での戦いだったが、どうにかなったな。俺は後ろを振り返ろうとして、

「ストップ！　……こちらを振り向かないでください、カルナさん」

ティラの声に戦慄を覚える。

「ウ、ウキイ……？」

「誤魔化しても無駄です。今の動き、どう考えても普通の猿ではないですよ？　そもそも猿なのに何で言葉が通じているんですか」

「何っ！　このお猿さん、カルナなのか！？」

「このおさるさん、パパー？」

「ん。カルナのにおいする」

くっ……万事休すか……っ？

いや、諦めるな！　諦めたらそこで覗き終了だ！

「ウキッ　ウキッ　ウキキッ」

「さっきの大猿の真似してもダメですからああッ！　ていうか、こっち向かないでって言ってるでしょうが！　サンダーボルトッ！」

「ウギイイイイイッ！？」

覗き終了。

混浴作戦その二、失敗。

## 第40話 天空の城

秘湯を後にした俺たちは、再びNABIKOに乗って旅を続けていた。

「次はどこに行く予定なのだ？」

温泉のお陰で心なしか肌がツヤツヤしているエレンが訊ねてくる。

「特に決まってないな。とりあえず東に進んではいるけど」

元より目的のある旅ではない。途中で様々な国や都市に立ち寄りつつ、気の向くままにこの世界を満喫していくのだ。

『マスター、面白いものを発見いたしました』

「面白いもの？」

『はい。現在地から南東方向、上空およそ五百メートルの位置にスカイアイランドがあります』

スカイアイランドというのは、その名の通り空に浮かんでいる島のことだという。

島を構成している岩石が、地上の岩石と反発する性質の魔力を帯びているらしく、それによって常に浮遊しているのだそうだ。

窓の外に目を向けると、確かに空に巨大な塊が浮かんでいた。

「スカイアイランドではないか！」

「本当ですね。久しぶりに見ました」

「だがあれだけ大きいのは初めて見たぞ」

どうやらスカイアイランドというのは、この世界の住民たちであれば時々見かけるようなものらしい。

ずっとその場に留まっている島もあれば、常に移動し続けているものもあるという。中には決まった軌道を動いていて、一定周期で現れるような島もあるそうだ。

その大きさも様々で、人間一人が乗るだけで精一杯といった小さな島もあれば、都市を丸ごと移転できそうなほど大きな島もあるという。

現在、俺たちの上空を飛んでいるのは、だいたい東京ドーム二個分くらいの面積を持つ結構でかいやつだった。

「しゅごーい！　いつてみたい！」

「気持ちは分かるが、やめておいた方が賢明だ。スカイアイランドには、地上とは異なる進化を遂げた危険な魔物が棲息していることがあると聞く。……べ、別に、高いところが怖いから言ってるのではないんだからなっ」

エレンは軽い高所恐怖症なのだ。

「ん。ドラゴンの住処もスカイアイランドにある」

と、シロ。

『あの島に魔物は棲息していません』

「では安全ということですか、ナビ子さん？」

『いえ。あの島は少々特殊で、どうやら天使が暮らしているようで

す。人間が足を踏み入れても安全かどうかは、その天使次第かと』

なぬ！ 天使だと！

「よし、行こう。一度、天使をペツ 会ってみたいと思っていたんだ」

「今、ペットって言いかけましたよね！？ 天使をペットにするとか、恐れ多いにも程があります！」

「わーい、てんしてんしー。てんしをぺつとー」  
「フィリアちゃんまで！」

そんなわけで俺たちはスカイアイランドへ向かうことになった。

「ですが、どうやってあそこまで行くのですか？」

「そうだな……」

時空魔法を使って転移するのが楽だろうが、それでは味気ない。せつかくだから空を飛んで行きたかった。

「実はこういうこともあるつかと、NABIKOに改造を加えていたんだよ。ナビ子さん、飛行タイプにトランスフォームだ！」  
『了解しました。第三形態へとトランスフォームいたします』

NABIKOが変形する。中にいたら何が起こっているか分からないのだが、今頃車体が鋭い流線型になり、両翼が出現していることだろう。

翼にはジェットエンジンを搭載している。これも動力は俺があらかじめ蓄魔石に溜めておいた魔力だ。

噴流によって更なる推進力を手に入れたNABIKOが、一気に

加速する。やがて揚力を得て、ゆっくりと離陸した。

「しゅごーい！ とんでる！」

「ひいいっ！？ だ、大丈夫だろうな！？ 落ちたりしないよな！？」

「大丈夫だつて。たとえ落ちたとしても、NABIKOの中にいれば大した衝撃は来ないしな」

フィリアとは対照的に、壁に抱き付いて顔を青くしているエレン。

空飛ぶ島が近づいてきた。

至近距離から見ると思っていた以上にでかいな。

島の起伏は乏しく、割と平面な土地の上には木々が点在した草原が広がっている。

そして

「随分と立派なお城ですね」

島の中央に聳え立っていたのは白亜の巨城だった。

中世西洋風の美しいお城で、白い外壁が太陽の光を反射して輝いている。空高い場所にあるからか、天国にでも来たかのような錯覚を覚えた。

恐らくこの城に天使が住んでいるのだろう。

俺たちは城の周囲に広がっている庭園部へと着陸した。

滑走路などないため、着陸の際は 時空魔法・極 スキルを持つ俺が空間制御の魔法を使い、ヘリコプターのように垂直に地面へと降り立った。

外に出て、 無限収納 にNABIKOを仕舞う。



「人っ子一人いないな」

軽く 探知・極 スキルで辺りを調べてみたが、生命反応はまったくない。衛兵などいないようだ。もしいたとしても人間ではないだろうが。

だがその代り、庭のあちこちに彫像が立っていた。

「随分とリアルな彫像だな」

俺はその内の一つにまじまじと魅入る。

それは裸体の女性 背中に翼が生えていることから、天使だろう の彫像だった。

女神めいた美しい容姿に均整の取れた素晴らしい肉体。しかも細部までしっかり作り込まれていて、乳首とか陰部とかが結構生々しい。

「何でジロジロ見てるんですかッ！」

「違うぞ、ティラ。これはあくまでも芸術鑑賞だ。決してエロい気持ちで見ている訳ではない」

「そんなイヤらしい目付きをして、何の説得力もないんですけどッ！」

声を荒らげているティラを余所に、俺は真面目くさった顔をして彫像に触れてみた。

「……うーむ、素材は一体何だろうか？」

「どこ触ってるんですかッ！」

「乳首」

「触るなら腕とか足とか、他にあるじゃないですかッ！」

「ここか」

「そこはもつとダメです！」

秘部を触ると余計に怒られた。

それにしても本当に彫像ばかりだな。

しかもそれぞれ年齢や格好、体型が違う。

幼い女の子の彫像もあれば、筋肉質の女性の彫像もある。すべて裸体という訳ではなく、ちゃんと服を着ているものもあった。

ポーズも様々だ。

ていうか、どれもエロティックだな。服を着ているやつだって全体的に露出度は高いし、中身が見えそうで見えない躍動的なスカートを穿いているものまである。

共通しているのは、彫像が女性ばかりだということ。

天使って女性しかないのだろうか？

『そんなことはありません、マスター。男性の天使も存在します。ご覧ください、あちらに男性の天使がモデルと思われる彫像があります』

ナビ子さんに言われて視線を向けてみる。

「いや、普通に女……お？」

そこにあつた彫像は見た目こそ完全に女の子であるものの、股間に可愛いアレが付いていたのだ。

「男の娘、だと!？」

俺は衝撃を受けた。

この世界にも似たような概念があつたなんて！

「ななな、何なのだこれは！？ 女の子ではないのかっ？」

女の子の彫像だと思って油断していたらしいエレンが、ちこを見て狼狽えている。すぐに手で目を塞いだのだが、指の隙間からちらちらと見ていた。

「ママ、みえないーい」

「見ちゃダメです」

「ぶー」

ティラの手で目を塞がれ、フィリアが不満げな声を漏らしている。

芸術なんだし、そんなに神経質にならなくても……。

と思ったが、あれだな、これ。

彫像って言うより、フィギュアって言った方がしっくりくるわ。等身大フィギュア。しかもちよつとエツチな。

美少女フィギュアだらけの庭園。

あの城に住んでいるのは本当に天使なのだろうか……。

## 第41話 トラップ×トラップ

俺たちは城の内部へと侵入した。

衛兵はおるか、こういうケースではお約束と言えるモンスターの姿もない。小さな生命反応ならあるが、たぶん鼠とか虫の類だろう。

城の中にも所々に彫像が置かれていた。

天使だけでなく、人間や獣人、ドワーフ、そしてエルフをモデルにしたと思われる彫像などもある。

「このエルフ像、ティラに似ているな」

「ん、似てる」

「ママがいるー！」

しかも、四つん這いになってこちらに向かってお尻を突き出しているという、グラビアなんかでよく見かけるちよつと卑猥なポーズである。

俺がまじまじと鑑賞していると、

「サンダーボルト」

激しい閃光とともに彫像目がけて雷撃が放たれた。

俺は咄嗟に彫像を庇い、その身に電流を浴びる。

「ちよ、何してるんだ！？」

「何って、破壊しようとしている決まってるでしょう！」

「こんな芸術作品を破壊するなんてとんでもない！」

「何が芸術ですか！　そこをどいてください！　そいつ壊せません

「！」

俺はエルフ像を抱き締めて懇願した。

「やめてくれ！ この子だけは！ ティラだけは！」

「それが私みたいに言わないでくれませんか？ あと抱き付くのもやめてください！ って、お尻を撫でるなああっ！」

ついにティラから敬語が消えた。

「ああ……俺のティラ像が……」

「だから私じゃないですって」

結局、ティラの手でその彫像は完全に破壊されてしまった。

いつでも愛でることができるよう、ぜひとも 無限収納 に保管しておきたい一品だったのに……。

「って、そうか！ 自分の手で作ればいいんだ！」

俺には 製作・極 スキルがある。

「その場合もう一生口を利きませんから」

「そんなあ」

まあバレないようにこっそり作ればいいんだけどね！

『……………』

城内を奥へと進んでいく。

内部は迷路のように複雑な構造をしていた。だが 探知・極 ス

キルのお陰で、城内の構造は完全に理解している。迷うことはない。

唯一、大きな生命反応のある部屋があった。  
恐らくはそこに天使がいるのだろう。

モンスターは出ないものの、所々にトラップが仕掛けられているようだった。しかしこれも 探知・極 を持つ俺にはすべて把握できているため、引っ掛かるはずもなかった。

「気を付けろ、トラップだ。その壁から出ている出っ張りを押さないようにな」

「……どうしよう。もう押してしまったぞ」

注意したときには遅かった。

石壁の隙間から煙が噴出し、エレンを襲った。

「うあっ」

まともに浴びてしまったエレンがその場に蹲る。

「まさか毒ですか！？　すぐに解毒しないと……」  
「いや、違う」

慌てるティラに、俺は首を振る。

「媚薬入りの煙のようだ」  
「え？」

直後エレンが身悶えし始めた。

「ん……ああ……な、なんだ……か、身体がつ……あ、熱いつ……」  
頬を紅潮させ、艶っぽい声を漏らすエレン。

「び、媚薬ってどういうことですか!？」  
「性欲を高める薬のことだ。特にこれは全身が敏感になるみたいだな」

俺はエレンの首筋に指をそつと這わせてみた。

「ひゃうッ!？」

ビクンッ、と身体を震わせ、エレンが艶めかしい悲鳴を上げる。

「こんなふう」

「はんっ!」

「触れられると」

「んあっ!？」

「めちやくちや感じてしまっ」

「にゃうっ?」

俺が身体に軽く触っただけで、エレンはもう立てなくなってしまう。四肢が痙攣したようにビクビクしている。

「や、やめっ……は、はやく治してくれっ……」

「ぐへへへ、本当は気持ちいいんだろう? 素直に言ってごらん?」

「馬鹿なこと言っていないで早く治してあげてください!」

「ひ、酷い目に遭ったのだ……」

結局、俺が回復魔法で媚薬の効果を解いてやった。エレンが安堵の溜息を吐く。

「ていうか、何であんなトラップがあるんですかね……。殺傷力は皆無のような……」

「毒よりはマシだろ」

「あれなら毒の方がマシなのだ！」

そもそもトラップに引っ掛かったエレンの自業自得だろう。

「だから気を付けろって言ったのに」

「も、もっと早く言って欲しかったのだ！」

しかし、その後もエレンはトラップに掛かり続けた。

俺の制止の声を無視して罫の宝箱を開けてしまい、中から飛び出してきた白濁液で全身ぬるぬるになってしまったり。

足元に仕掛けられていたロープに引っ掛かり、亀甲縛りで宙づりになったり。

色の違う床を踏み、下から凄まじい突風が吹き出してきたり（エレンは鎧なので何の問題もなかったが、巻き込まれたティラのロープが捲れあがってパンツが丸見えになった）

いずれも殺傷力はないが、イヤらしいトラップだ。ありがとうございませう。



と、そこで俺は新たなトラップに気が付く。

「そこにも出っ張りがあるけど、押すなよ」

「わ、分かっている！」

「絶対に押すなよ？ 絶対だからな？」

「うっ……そう言われると、逆に押したく……」

「エレンさんやめてください！」

「ああああっ、手が勝手にいいいっ……」

……重傷な気がする。

プルプルと全身を震わせながら、それでもどうにか堪えようと頑張っているエレンだったが、

「わーい！ こんどはなにー？」

フィリアが横から押してしまった。

足元の床が消失する。

落とし穴タイプのトラップだ。

「わっと」

「ぬああああっ！？」

フィリアは直前に察知し、ジャンプして難を逃れる。  
エレンだけが真っ逆さまに落ちていった。

「おーい、大丈夫か、エレン？」

「た、助けてくれええっ！」

俺は風魔法で空を飛びつつ、ゆっくりと穴を下りていく。

穴の深さはせいぜい五メートルほど。

下は正方形の空間になっていて、その真ん中でエレンが涙目になっていた。

「き、気持ち悪いっ！ こっちに来るな！」

部屋の中には小さなスライムが無数に蠢いていた。

残念ながらこの世界のスライムは某有名RPGに出るような可愛いタイプのものではなく、結構グロテスクだ。ナマコとか、そういう系。

「しかもこのスライム、身体が振動しているぞッ!？」

バイブスライムA

種族：スライム族

レベル：3

スキル：振動

『バイブレーションすることが可能なスライムの特殊個体です。その性質から性具として使われることもあります。これほど大量発生しているのは珍しいかと』

おお、なんて素晴らしいスライムなんだ！

ブルブル震えながら、バイブスライムたちがエレンの身体に纏わりついていく。

「あうん！ こ、こら！ 見てないで早く助ける！ ひゃ!？ ど、

どこに入っているのだ!？」

「大丈夫か、エレン！ 一体どこに入っただ!? 教えてくれ！」

「お、教えられるか！」

「安心しろ！ 俺がすぐに取ってやるぞ！」

「こつち来るなああつ！ 自分で取るからッ！」

「ひ、酷い目に遭ったのだ……」

数分前とまったく同じ台詞を吐きながら、エレンが嘆息する。

「カルナさんもカルナさんですけど、エレンさんも本当に気を付けてください」

「ん。自業自得」

「う……。わ、分かっている……だが先ほどのフィリアが押したのだからなっ」

「このすらいむ、しゅごーい！ ぶるぶるー」

エレンから非難されているのを余所に、フィリアは一匹捕まえてきたバイブスライムで遊んでいる。こら、元いた場所に帰してきなさい。

それから何度がエレンがトラップにハマったものの、どうにか無事に目的の場所へと辿り着くことができた。

「この扉の向こうに天使がいる」

「……神々の使者とされる存在がここに……」

「ほ、本当にこんなところにいるのか？」

俺の言葉に皆がぐくりと息を呑む。……フィリアは相変わらずバ  
イブスライムを可愛がっていて、シロは興味なさそうにぽーっとし  
ているが。

意を決し、俺は扉を開く。

「ようこそですわ」

透き通るような声が俺たちを出迎えてくれた。

「彼女が、天使……？」

幻想的な淡い水色の長髪に、信じられないほど整った美貌。

背中には純白の翼が生えていて、神々しく輝いている。

その圧倒的な存在感は、神話の世界に紛れ込んでしまったのかと  
錯覚を覚えるほど。

部屋の中央にいたのはまさしく天使だった。

ただし

全裸でM字開脚していました。

## 第42話 そりゃ天界から追放されるわ

その天使は美しかった。

淡い水色の髪の毛は南国の海のごとく煌めき、背中に生えた翼は初雪のように白く眩しい。

そしてその顔立ちは、俺が転生前に会った女神たちにも劣らないほど完璧な美貌。

「彼女が、天使……？」

「はい。わたくしは天使ですわ」

その天使は男女問わず魅了する最高の笑顔を浮かべ、俺たちを出迎えてくれた。

「当惑されるのも無理はありませんわね。天使に会うことなど、地上に住むあなた方にはめったにないことですもの」  
「そ、そういう問題じゃなく」

ティラが叫んだ。

「何で裸なんですか ツ!？」

天使は全裸だった。  
しかも地べたに座ってM字開脚している。

その体勢のまま天使はにっこりと微笑みながら言った。

「これが天使流の挨拶なのですわ」

全裸M字開脚でご挨拶　それこそが天使にとっては当たり前  
の作法なのだと、目の前の天使は断言した。

「嘘ですよね!？」

「そんなことはありませんわ」

『いえ、嘘です。そんな風習、天使にはありません』

天使がはつきりと否定するも、ナビ子さんがきつぱりと告げた。

「ほら！　ナビ子さんが嘘だと言ってるじゃないですか!」

「ふふふ……」

ティラが問い詰めるが、天使は誤魔化すように微笑んで、

「己のすべてを曝け出すことによって心の壁を取り払う。わたくしが  
考案したこの方法、これから間違いなく天界の主流になるはずで  
すわ」

「あなたが考案したんですか!？」

「ですから！　早くあなた方も脱いでくださいませッ！　さあ早く  
！　早くお見せくださいませッ！　うふふふふっ!」

天使の笑顔がヤバイ。

「フィリアちゃん、見てはいけません!」

「どうしてー？　てんしみちゃだめなのー?」

「あれは天使などではない!」

ティラとエレンが頬を引き攣らせ、フィリアを庇いながら後退り

する。

「ん。分かった」

「つて、脱がないでください!」

一方で素直に服を脱ぎ出そうとする我が家のペット、シロ。

「よし俺も」

「貴様も脱ぐなああつ!」

俺も空気を読んで裸になろうとしたらエレンにぶん殴られた。

「うふふふっ……みんなで脱げば怖くありませんわア!」

「嫌ですよ! ていうか、何なんですかあなたは!? 本当に天使なんですかッ!?!」

ティラが問い詰めると、天使は両腕を大きく広げた。

「失礼ですわね。どこからどう見ても天使ですわ。ほら、見てくださいな」

「貴様、少しは隠せ!」

「いいえ! もっと見てくださいませ!」

天使はハアハアと鼻息を荒くしながらこっちに近づいてくる。

「来ないでください!」

「ぎゃう!?!」

ティラが天使に向かって雷魔法を放った。

「ああッ……らめえッ……全身が、ビリビリして、ビクビクしちゃいますわァッ！」

恍惚とした顔で悶える天使。

「もつと！ もつとわたくしに下さいませッ！ 淫乱なわたくし目にお仕置きを！ ご主人様ああッ！」

「こんなの天使じゃないです！ 私の知ってる天使は清廉潔白で神聖な存在なはずですから！」

ティラの嘆きの悲鳴が轟いた。

ティラの必死の説得により、天使はようやく衣服を身に纏った。いかにも天使っぽい、古代のローマ人たちが着ていたトーガのような服だ。

「改めまして、わたくしはルシーファ。見ての通り天使ですわ」

天使 ルシーファは優雅に微笑み、そう自己紹介した。こうしていると確かに天使そのものだが、ティラやエレンはゴミでも見るかのような目をして距離を取っている。

「で、何で天使がこんなところに住んでいるんだ？」

「実はわたくし天界から追放されてしまいましたの」

「追放？ 何をしたんだ？」



俺の問いに、別に隠すようなことでもないのか、ルシーファはあっさりと教えてくれた。

「ちょっと天使たちのパンツを盗んだだけですの」

「天使が一体何をしているのだ!？」

「いや、パンツくらい普通、盗むだろ」

「ですわよね」

「盗みませんよ!？ あなたたちの感覚でモノを語らないでください!」

いや冗談からね？

さすがに俺もパンツを盗んだことはない。ぱんつくったことはあるが。

「ちなみにどれくらい？」

「五千枚ほどですわ」

「五千枚!？」

さすがの俺も驚愕する。

予想を遥かに超える量だった。

それ、どれだけ時間がかかるんだよ。

「二百年ほどかけて少しずつ収集したんですの」

さすがは天使。年季が違い過ぎる。

「よくそんなに長い間バレなかったな……」

「ふふふ、パンツを盗むことに関しては、わたくし誰にも負けない自信がありますわ」

「偉そうに言わないでください！」

「……そもそもパンツなど盗んで一体何をするのだ？」

怖いもの知りたさか、エレンが恐る恐る問う。

「もちろん、嗅いだり穿いたり被ったり食べたり挿れたりですわ」

「き、聞かなければよかった……」

「あと、パンツプールを作って泳いだりもしましたわ」

パ、パンツプールだと！？

俺ではせいぜいパンツ風呂で満足してしまう！

この天使、何てハイレベルなんだ……っ！

『……マスターを越える変態ですね』

「くっ……俺もまだまだ未熟……もっと精進しないと……」

「何と張り合ってるんですかッ！」

「この程度で追放だなんて、どう考えても酷過ぎると思いますわよね？」

「あなたの方がよっぽど酷いですから！」

まあ、さすがに天界から追放されてもおかしくないわな……。

「しかもこの島から出ることができない罰を与えられてしまいましたの」

つまりこの島自体が巨大な牢獄というわけか。

天使というか、完全に堕天使だ。

「ですからっ！ 生の女の子を見るのは久しぶりでっ！ すーはーすーはーすーはーっ！ ああ！ やっぱり本物は良いニオイがしま

すわ！ もっと、もっと近くで嗅がせてくださいませ！」

涎を垂らし、とても天使とは思えない顔でティラたちに迫っていき墮天使。

「近づかないでください！」

「こっち来るな！」

「酷いですわ！ ニオイくらい嗅がせてくださってもいいではないのです！」

そして思いつ切り拒絶されている。

『誰かさんと同じですね』

「だれー？」

『マスター、娘のマネをして誤魔化さないでいただけますか？』

と、そこでルシーファは何かに気づいたように足を止めた。

「……なるほど。分かりましたわ。わたくしをそんなにも拒む理由が」

ゴゴゴゴ、と全身から負のオーラを湧き起こすルシーファ。天使なのに。

彼女は俺を指差して、

「すでにこの男のモノだからですわねッ！」

「全然違います！ しかも拒んでいるのはあなたに原因がありますから！」

「その通りだ！ 彼女たちはすでに俺のハーレム要員！」

「だから違いますって！」

ティラのツツコミを無視し、ルシーファは俺を睨んでくる。

「許せません許せません許せませんわッ！　こんな美少女を四人も侍らせるとはッ！」

四人つて、娘のフィリアとペットのシロまで数に入っているらしい。

「ママー、はーれむってなにー？」

「まだ知らなくていいことです！」

「わたくしはここに閉じ込められてから百年もの間、ずっと妄想の中でしか女の子とイチャイチャできなかったといえますのにッ！」

ルシーファは怨嗟に満ちた言葉を吐き出すと、不意に昏い微笑を浮かべだした。

「ふふふ……ですが、飛んで火にいる夏の虫というのはこのことですわね……あなたを殺し、彼女たちをわたくしのモノに……ふふふ……」

バサアッ、とその純白の翼が広がる。

どうやらこの墮天使、俺とやる気のようなのだ。

「いいだろう。勝った方には彼女たちを好きにできる権利が与えられることにしよう」

「望むところすわ」

「勝手に私たちを賞品にしないでくださいッ！」

### 第43話 VS 大天使

ルシーファが翼を広げ、ふわりと宙に浮かび上がった。  
だが翼で浮遊しているようには見えない。何か別の力で空を飛んでいるのだろうか。

俺は彼女を鑑定してみた。  
しかし、バチンツという音が頭の奥で響き、鑑定に失敗してしま  
う。

「あれ？ 鑑定できない？」  
『いえ。確かに高位存在である天使に通常の 鑑定 は効きませんが、マスターの 鑑定・極 であれば可能です。ただしより集中が必要になります』

俺は再度、鑑定を試してみた。

ルシーファ 824歳

種族：天使族

レベル：

スキル： 天力・極

生命：9999/9999

魔力：9999/9999

筋力：999

物耐：999

器用：999

敏捷：999

魔耐：999  
運：999

全能力カンストしてんじゃねーか。

さらに詳しく見てみると、カンストどころか<sup>リミットブレイク</sup>限界突破していた。  
本当のステータスはこっちだ。

ルシーファ 824歳

種族：天使族

レベル：

スキル：天力・極

生命：20000 / 20000

魔力：15000 / 15000

筋力：2000

物耐：2000

器用：2000

敏捷：2000

魔耐：2000

運：2000

『どうやら並みの天使ではないようですね』

「レベルがフィリアと同じように空欄になってるのは？」

『天使は最初から完成体として生まれてくるため、成長することはありません』

天力・極 というスキルは、天使の固有スキルらしい。恐らくこの力で宙に浮いているのだろう。

「ふふふ、泣いて許しを請いて、大人しく彼女たちを渡すなら今の内ですよ？ 天界にいた頃のわたくしの位階は最上位の熾天使。人間ごときでは一秒たりとも持ちませんわ」

全身を煌々と輝かせながら、ルシーファは最後通牒とばかりに宣言する。

こんなのが最上位の天使だったのか……天界、大丈夫か？

『同感です、マスター』

俺は不敵に笑って、

「生憎と負ける気はさらさらないんでな」

「ではその自信に免じて、痛くないように一瞬で消滅させて差し上げますわ」

ルシーファは右手をこちらに向けてきた。

刹那、掌が光ったかと思うと、レーザーのような一撃が俺目がけて放たれていた。

「ふん！」

俺の敏捷値を持ってしても反応不可能な攻撃だったが、未来予測・極スキルで読んでいたため対応することができた。闘気を纏わせた拳で閃光を薙ぎ払う。

「なっ？ わたくしの攻撃に反応した！？ いえ、それよりも拳で打ち払うなんて、あり得ませんわっ！」

ルシーファが目を見開いて驚愕している。

てか、拳が痛い。闘気で護っていたというのに、皮膚が焼け焦げている。まあ 自然治癒・極 のお陰ですぐに治ったが。

「今度はこっちから行くぜ」

俺は地面を蹴り、軽く音速を超える速さで天使との距離を詰めた。

「は？ 速過ぎ」

啞然として何かを言いかけた天使の腹部へ、蹴りを叩き込む。  
ルシーファは吹き飛んで部屋の壁に激突した。

『2371のダメージ』

思ったよりダメージが通ったな。相手の物耐値は2000もあるし、せいぜい三ケタ程度かと思ったのだが……。

『これまでの戦いにより、マスターのレベルも上がっているからです』

カルナ 22歳

種族：人間族

レベル：59

スキル：百個

生命：43982 / 43982

魔力：48756 / 48756

筋力：3752

物耐：3521



器用：3362  
敏捷：3670  
魔耐：3544  
運：4023

……ちよつと上がり過ぎじゃないか？

『経験値上昇・極 と 成長率上昇・極 の効果です。十倍の速さでレベルが上がりますし、レベルアップによる成長量も十倍です』

つまり普通の人より百倍の速さで成長していくらしい。

そんな俺の異常チートのことなど知らない天使は、めり込んだ壁から飛び出してきながら、

「に、人間にはしてはできるようですわねっ……。ですが、残念ながら今のわたくしを怒らせてしまいましたわ！ おいでなさい、”天槍イブリース”！」

ルシーファの手に神々しい輝きを放つ槍が出現した。

・天槍イブリース：ルシーファ専用の槍。攻撃力+1000 天力倍化。

さすがは天使の槍だ。攻撃力が半端ない。  
それをくるくる回しながら躍り掛かってくる。

一方の俺は素手。無限収納 の中には魔物からドロップした武

器が幾つか入ってはいるが、あの槍とともに打ち合えるようなものはさすがになかった。

「はあああつ！」

「どりゃ」

俺の手刀と槍の切っ先が激突。

闘気と天力がぶつかり、押し合った。

「何で普通に受け止めていますの!？」

「女の子の好意を受け止められずして何が男だ」

「意味が分かりませんわ！」

槍と拳が幾度も交錯する。その度に凄まじい衝撃波が発生して、観戦しているティラたちが吹き飛ばされそうになっていた。

「くっ……このわたくしが押されている……? 何という闘気の量

っ………ですが、人間の闘気には限界がありますわっ。わたくしの膨大な天力を前に、いつまで持つことか……」

「あと一年くらいは持つと思うけど？」

「出鱈目にもほどがありますわっ！」

そう叫んだ天使は、高く舞い上がって両腕を掲げてみせた。

「でしたら、これで確実に消滅させてあげますわ！」

先ほどより遥かに強力な光が収束していく。

『マスター、あの攻撃は危険です。闘気を全開にしても防ぎ切れない可能性があります。死ぬことはないでしょうが、転移魔法等によ

る回避、もしくは 絶対防御・極 スキルの使用を推奨します」

絶対防御・極 は一定時間、ありとあらゆる攻撃を無効にすることが出来るスキルだ。制限と使用後のインターバルがあるものの、百個ある中でも最高レベルにチートなスキルだろう。

しかし今回は別のスキルを使うことにした。

「エーテルストライク 聖光滅球”ッ!”」

「スキル 反転・極」

暴力的なエネルギーを秘めた光の塊が、俺のすぐ目の前で突然向きを変え、放った本人目がけて飛んでいく。

反転・極 は、あらゆるものの性質を反転させることを可能にする特殊スキルだった。

熱を冷気に変え、硬い物を柔らかい物へと変える。

意図して特定の性質だけを反転させることもでき、今は光球の運動量の向きだけを反転させたのである。

「ちょ、戻って」

目を剥くルシーファに光球が直撃する。

「あああああッ!」

悲鳴を上げる天使を巻き込みながら、光球は部屋の天井へと激突。大理石でできているはずの天井が抉れ、そのまま外まで突き抜けていった。

「あー、やべ。死んでないよな?」

『はい。そもそも天使は光に耐性がありますので』

生命値を調べてみたが、まだ半分以上残っていた。  
空が見えるようになってしまった天井の穴から、ボロボロになつたルシーファが戻ってくる。

「あ、あり得ません！　あり得ませんわ！　どうして人間がわたくしの必殺技を跳ね返してくるのです！？」

「俺のイケメンオーラにビビって逃げてっ たんだろ」  
「どこがイケメンですよ！」

そう怒鳴ってから、ルシーファはがつくりと肩を落とした。

「はぁ……わたくしの負けですわ……まさか、人間相手に敗北を喫することになるとは思いませんでしたわ」

負けを認めたようだ。

「彼女たちを好きにする権利はあなたのものですわ」

「よし、じゃあ早速」

「だから私たちを勝手に賞品にしないでくださいってッ！」

## 第43話 VS大天使（後書き）

次話以降、第70話まで隔日更新となります。

#### 第44話 脱獄補助

「これでまた一人寂しくこの城に籠ってオ ニーし続ける毎日ですね……」

俺に敗北を喫した天使ルシーファは、がっくりと頂垂れた。

「ほんと何なんですかね、この天使は……」

ティラが汚物でも見るような目をして呟く。

「ああ……わたくしを慰めてくれるのは自分で作った彫像たちだけですわ……」

「やっぱりあなたが作ったんですかッ！」

予想通り、外や城内にあった彫像はすべてこの天使が作ったものだったらしい。

「ずっと城の中に閉じ込められていたのに、よくあんな多彩なものを作れたな？」

「当然ですわ。天使には下界を覗く能力が与えられていますの。それで色んな女体を研究したのですわ」

「そんなことに天使の能力を悪用しないでください！」

「悪用とは心外ですわね。あれは芸術ですわ！」

その芸術をオ ニーに使う天使である。  
と、そこで俺はあることに思い至った。

「まさか、あのエルフ像は……」

「エントランスに飾っていたものですわね？ あれはわたくしのお  
気に入りの一つですわ。もちろん、本物のエルフを覗きながら作っ  
たんですの。……あれ？ そう言えばこの方、あの像とかなり似て  
ますわね………っ、もしかして！？」

どうやらティラがモデルだったらしい。  
似ているわけだ。

「ああ！ 道理で初めて会った瞬間から他人とは思えなかったんで  
すわね！」

「完璧に赤の他人ですから！ ていうか、何で勝手に覗いてるんで  
すか！」

「これは運命ですわ！ もうわたくしたちは結ばれるしかありませ  
んの！」

「人の話を聞いて下さいッ！」

大声でツツコンでから、ティラは昏い声音で呻いた。

「……あの彫像、ぶち壊しておいて正解でしたね……」

天使が愕然と目を見開く。

「ななな、なんてことするんですの！？ わたくしの最高傑作の一  
つでしたのに！ ああでも、本物を堪能できるのであれば……」

「できませんから！」

「そうだぞ。お前は俺に負けたからな。ティラを堪能できるのは俺  
だけだ」

「あなたもできませんから！」

「くっ……なんて羨ましいんですの！」

ルシーファは縋るようにティラの足にしがみ付いた。

「せめて！　せめて口づけだけでも！」

「しません！」

「では舌を！　舌を入れさせてください！」

「もつとダメですッ！」

「下のお口でも！」

「今すぐ離れてくださいッ、この変態天使ッ！！！」

ティラが容赦なくルシーファを蹴り飛ばす。

「うう……………しくしく……………」

「ママー、てんしさん、ないてるよー？」

「フィリアちゃんは優しいですね。ですが騙されてはダメです、あれは演技ですから。さあカルナさん、早くここを出ましょう」

泣き崩れる天使を冷たく放置し、ティラが急かしてくる。

「ていうか、この島から出られないってどういう状態なんだ？」

気になって問うと、ルシーファは深い溜息を漏らした。

「島の外に出たとしても、強力な天力によって島の内部へと引き寄せられてしまうのですわ。残念ながらわたくしの力でも逆らうことはできません」

「へー。試してみるか」

「はい？」

俺は転移魔法を使い、ルシーファと一緒に飛んだ。



一瞬で視界が切り替わると、そこは島を見上げる地上。

「普通に外に出ることができたけど……って？」

「こうなるのですわああああああっ！」

ルシーファが本人の意思に反して凄まじい勢いで空へと舞い上がっていく。どうやら島へと引き戻されているらしい。

「呪いの一種なのか？」

『いいえ。天力によるものですので、呪術とは別物です』

俺の 呪術・極 スキルで解呪できるかと思ったのだが、呪いでないというのなら不可能だ。

「となると、またこいつを使うか」

俺は転移魔法で天使に追い付くと、 反転・極 スキルを使った。

「っ！？ 今度は島が遠ざかっていきますわ！？」

島に引き寄せられるという性質を反転させ、引き離される力に変えたのだ。

だが天使は地面に落下すると、そのまま土の中へとめり込んでいく。

「逝くううっ！ 大地の中にッ、大地の中に逝っちゃうううっ！」

天使の悲鳴が轟く。あのままだと世界の裏側まで行ってしまいそうだ。この世界が球形だったらの話だが。

『この世界は円盤の形をしています』

って、球形じゃないのか、この世界。

まあそれはともかく。

反転・極 では駄目だったな。想定内だが。

「どうすればいいと思う？」

『天使とあの島との間に天力が働いています。それを断ち切れればよいかと』

「となると、このスキルが使えるか」

スキル 絶対切断・極

単にどんな硬いものでも切り裂けるというだけでなく、事象や目に見えない力すらも切り裂くことが可能なチートスキルである。

「おりゃ」

天使と島とを結ぶ光の柱のようなものを切断するように、俺は剣を横に薙いだ。

「逝くうううつ……………あれ？」

地面の中からルシーファの驚く声が聞こえてきた。  
どうやら無事に解放されたらしい。

「わたくし決めましたの！」

天空の城へと戻るとルシーファがいきなり宣言した。

「助けていただいたカルナ様のペットになりますわ！」

「何で本当に天使をペットにしてるんですか、あなたはッ!？」

ティラが俺に詰め寄ってくる。

「いや、こいつの方から言い出したんだよ」

「で、す、が!! カルナ様にはすでにシロ様というペットがいて、そのお世話でお忙しいとのこと！」

俺のジト目を無視し、ルシーファは勝手に話を進めていく。

「つきましてはわたくしのお世話を、ティラ様に担当していただきたく思いますわ!　じゅるり」

舌舐めずりしながらティラの方を眺め見る天使。

「嫌です！」

「そんなつれないことを!　わたくし、ティラ様の言うことであれば何でも聞きますわ!　どんな卑猥で鬼畜な命令でもどんとこいですの!　ハアハア！」

「カルナさん!　この天使、早くどつかに捨ててきてください！」

「あああつ、まるで犬猫のような扱い!　逆に興奮しますわあああつ！」

「こんなペット、絶対に飼いたくないですッ！」

というわけで、我が家に新しいペット（変態）が加わった！  
タララララ、タラララララ、タラララララララララ

「つて、何で勝手に決めてるんですかあああつ！」

「わーい！」

「フィリアちゃんも喜ばないでくださいッ！」

ルシーファに案内され、俺たちはこの城の宝物庫へと連れて来られた。

「この場所に閉じ込められて以降、わたくしがこつこつと作り続けてきた芸術作品たちを保存しているのですわ。可能であれば幾つか持っていきたいのです」

重厚な扉を開くと、そこは宝物庫とは思えないくらい広々とした空間だった。

だが凄まじい数の彫像によつて埋め尽くされていた。

もちろん全部えっちいやつである。

というか、外にあったものよりもさらに過激だぞ。しかも彫像だけでなく卑猥な絵画なんかもある。

「素晴らしい。全部持っていこう」

俺は宣言した。無限収納 スキルがあるため、幾らでも格納することが可能なのだ。

「サンダーストーム」

突然ティラが雷撃を放った。

幾つもの雷光が走り、近くにあった彫像たちが粉々にされる。

「あああああああああつ！？ 何するんですのおおつ！？」

目の前で作品を破壊され、悲鳴を上げるルシーファ。

「サンダーストーム」

しかしティラはガン無視し、次々と破壊行為を繰り返していく。

「はっ？ もしかしてこれは嫉妬！？ 自分だけを見て欲しいという、ティラ様の気持ちの表れですね！ それならば仕方ありませんわ！ わたくしは涙を吞んで、ティラ様ただ一人に心身ともに捧げると誓いますのぎゃあ！？」

雷撃は天使にまで飛来した。

## 第45話 ウォシシュレット

新たに天使を仲間（？）に加えた俺たちはスカイアイランドを後にした。

NABIKOに乗って整備されていない道でも楽に進んでいく。途中で遭遇する魔物もNABIKOが自動で撃退してくれていた。

人数が増えてきたこともあり、俺は部屋数を増やした。時空魔法によって空間を歪めているので、外から見ると内部はずっと広い。

元々、一階は台所とリビング、それからトイレとバスルーム、そして二階は寝室が一部屋あるだけだったのだが、一階と二階に寝室を設けたのだ。一階は俺用の寝室で、二階はルシーファ用の寝室である。

これまで俺はリビングのソファで寝ていたのだが、やっぱりちゃんとベッドで寝る方が快適だな。

ちなみに女性陣の中でルシーファだけが別の部屋で寝ることになった理由は、わざわざ言わなくてもお分かりのことかと思う。

今はみんなリビングに集まっている。

ティラは読書、エレンは剣の素振り、そしてシロはソファの上で猫のように丸くなって寝ている。フィリアは「わーい！ たーのしー！」と叫びながら窓から身を乗り出している。危ないからやめなさい。

「何を書いてるんだ、ルシーファ？」

リビングのテーブルで何やら書き物をしている天使に、俺は声をかけた。

「小説ですわ」

「へえ。彫刻や絵画だけじゃなく、そんな特技もあるのか」

この天使、かなりの多芸だな。  
読書をしていたティラが顔を上げ、話に入ってくる。

「そうなんですネ。今読んでいるのは旅行記ですが、私もたまに小説を読みますので、どんな話なのか気になります」

ティラさんは読書家なのだ。

「ちょっと読ませてくれ」

「いいですわよ」

ルシーファはあっさりと原稿を俺に渡してくれた。

普通は人に読まれると恥ずかしいものだが、こいつにはそういう感覚はないようだ。

ティラも横から覗きこんでくる。

『ああ、ダメですわ、ご主人様……そこは……ひゃう！』

『ふふ、ここが感じるんですね？』

『いや……嫌ですわ……』

『その割にはこんなに濡れていますよ。どうやら身体の方が正直のようです』

『い、意地悪しないでくださいまし……』

『まったく、そんな物欲しそうな顔をして素直ではありませんね。正直に言ってみてください。もっと欲しいと』

『あう……も、もっと……もっと欲しいですわあああっ！』

「何なんですかこの卑猥な小説はああッ！？ しかも勝手に私を登場させないでくださいッ！」

完全にエロ小説だったよ……。

しかも現実の人物を登場させた一番イタイやつ。

「タイトルは『堕ちた天使　くご主人様の忠実な性奴隷になるまでく』。わたくしがティラ様によつて徐々に墮落させられていくという、実体験に基づいた作品ですわ……ハアハア」

「徹頭徹尾妄想じゃないですか！ 私に会う前からすでに完全に墮落してましたよね！？」

「うふふふ……大量に刷つて、ぜひ世界中の人にこの作品を呼んでほしいですわア」

「サンダーボルト」

「あああああっ！？ わたくしの最高傑作があああっ！？」

ティラの雷撃で黒焦げになった自作小説を前に、変態天使はがっくりと頂垂れる。

「ふふふ、ですが中身は完璧に暗記してますの」

「その脳みそごと吹き飛ばせばいいですかね？」

「ぎゃあう！？ ああつ、ティラ様のお仕置きタイムですわ！ もっと、もっと激しくして下さいませええっ！」

「……カルナさん、コレ、どこかに捨ててきてくれませんか？」

「お、おう……」



コレ、って……。

俺はティラの圧力に負け、変態天使の身体を縄で縛りつけて走行中の窓から放り捨てた。

「あああつ、放置プレイですわねえええつ！」

地面を転がる天使は、あつという間に見えなくなってしまう。

「これで静かになりましたね」

ペットを遺棄してはいけません。

「ひゃうつ！？　なな、なんなのだこれは！？」

天使を遺棄してしばらくした頃。

トイレに入ったエレンから悲鳴が聞こえてきた。

「どうしたエレン！　大丈夫か！」

俺はすぐに駆けつけ、ドアを開け放つ。

そこにはパンツを脱いで便器に腰掛けているエレンがいた。

「ドアを開けるなああつ！」

「ぐげっ」

殴り飛ばされ、俺は転がって床に頭をぶつける。ボタン！ とドアが閉まった。

「べ、便器からいきなり水が出てきたのだ！ あたしのお尻がつ、お尻が攻撃されている！」

一体どういことですか？ とティラが怪訝な顔をしているが、俺にはすぐにピンときた。

「ウォシュレットだな」

「うおしゅ……何ですか、それは？」

「お尻を温水で洗ってくれる機能付きのトイレのことだ。たぶん、ボタンを押してしまっただろう」

この異世界にはまず存在しないだろう機能だ。このNABIKOに搭載されているものが、世界で唯一のウォシュレットということになる。

「ど、どうすれば止まるのだ！？」

「一番左のボタンを押せば止まるぞ」

「一番左だな！ よし！ ひゃうん！？」

エレンがまた面白い悲鳴を上げた。

「むしろ勢いが強くなったのだが！？」

おっと、どうやらボタンを間違えたようだ。

「くっ……はうっ……こ、これ、はっ……だ、だめっ……」

激しい水流を浴び、色っぽい声を漏らすエレン。  
こ、このままではエレンが開発されてしまう！

「大丈夫かエレン！ 今すぐ助けに行くぞ！」  
「だからドアを開けるなああっ！」  
「ぐほっ」

今度は蹴り飛ばされた。バーン！ とドアが閉まった。  
ティラが呆れた顔で俺を見下ろしてくる。

「何をやってるんですか……」  
「エレンを早く救出しないと！ このままではお尻に穴が開いてしまっ！」

「な、何だと!？」

エレンが切迫した声を上げた。

「そんなことになったらもうお嫁に行けなくなるではないか！ は、早く助けてくれええっ！」

「落ち着いて下さい、エレンさん！ 穴は最初から空いてます！」  
「はっ？」

ティラの言葉で我に返ったエレン。……アホの子だ。

「確かにお尻には最初から穴が空いている！ だがその穴が水圧で拡張されてしまうんだ！」

「な、なんと怖ろしい機能なのだ!? 早く助けてくれ！」

「よし今すぐ助けに」  
「待ってください」

ティラに首根っこを掴まれた。

「……エレンさん、普通に便器から離れればいいだけでは？」

「そ、そうか！」

「いや待て。便器から距離を取っても無駄だ。その水は一度照準を合わせたら最後、どこまでもお尻を追い駆けてくるんだ」

「そんな！？」

「どう考えても嘘ですよ！ エレンさん、すぐに真に受けなくてください！」

それからどうにか自力で停止ボタンを見つけたようで、エレンはぐったりした様子でトイレから出てきた。

「うう……お尻を犯された気分だ……」

「大丈夫か、エレン？ 尻穴が拡張されてないか？」

「わ、分からぬ……」

「よし、俺が見てやろう」

「あなたは引っ込んでいてください！ わ、私が見ますから……」

「ティラ殿、頼む」

姫騎士のお尻の穴を確認するエルフ……ごくろ。

「わたくしも！ わたくしもティラ様にお尻の穴を見ていただきたいですわっ！」

「ちよっ、いつの間に戻って来たんですか！？」

遺棄したはずのルシーファがどこからともなく姿を現した。  
そしてトイレへと駆け込む変態天使。

「これがウォシュレットですね！ スイッチ、オンですわ！ ……  
っ！？ あああつ、らめえええつ！ ティラ様つ、激し過ぎますわああつ！」

「だから勝手に私を妄想に利用しないでくださいッ！」

## 第46話 闇將軍、動く

「へー、随分と賑やかな街だな」

『ここメルシアは交通の要所ということもあって、商業都市として栄えているのです』

俺たちはメルシアという街にやってきていた。

ナビ子さんによれば、周辺の国々とは独立した政体を持ち、独自の軍も有しているらしい。いわゆる都市国家というやつだな。

移民の多い都市らしく、行き交う人々の服装一つ取ってみても非常に多彩だ。様々な文明が混じり合っているため都市の景観もこった煮という印象を受けるが、そういうのはむしろ俺の好むところだった。

今まで行ったことのあるどの街よりも人口密度が高い。

「話には聞いていたが、アルサーラの王都以上の人だな」

「ん、暑苦しい」

「しゅごーい！　ひとがたくさん」

エレンが感嘆の声を漏らし、シロは無表情ながら鬱陶しそうに呟く。

一方でフィリアはとても嬉しそうだ。何でも無邪気に喜べる子だからな。

「生身の美少女がたくさんいますわぁ……ぐへへ……」

ルシーファはちゃんと見張っていないとマズイな……。すぐ近くを通り過ぎた女の子を涎を垂らしながら凝視しているし。今はまだただの不審者だが、すぐに犯罪者にレベルアップしかねない。

「私も人混みは少し苦手ですが、活気があるのは嫌いじゃないです」

エルフの里とは真逆だが、意外とティラはこうした空気も好きらしい。

俺たちはしばらくこの街に滞在することに決めた。

すでに陽が暮れかかっているため、まずは宿を探すことに。

「ぜひ共同の大浴場がある宿がいいですわ！ ティラ様の裸体を合法的に拝める最高のチャンス、ぐへへへ……」

「いや、そのネタもうやったから」

「……どういうことですか？」

首を傾げる変態天使を後目に、俺たちが向かったのはこの都市でも最高クラスの宿である。

「こんな高そうなところ、大丈夫なのか？」

「ああ。S級ダンジョンをクリアした際の報酬がまだまだ余っているしな」

王女のくせに不安げなエレンだが、無限収納の中にはまだ半分近い大金貨が残っていた。

「ですがあれ以来、まったく収入がないですよね？」

「稼ごうと思えば幾らでも稼げるんだけどな。この街には巨大な力ジノもあるらしいし、後で行ってみようか」

「……もつとまっとうな手段で稼いでくださいよ」

白い大理石が美しい宿に五人でチェックインする。

「わたくし、ティラ様と同じ部屋がいいですわ！」

「それだけは絶対に嫌です」

「じゃあ俺と同じ部屋にしようか」

「それもやめてください」

部屋割りで少々手間取ったが、結局、ティラとフィリア、エレンとシロというペアでそれぞれ二人部屋を、俺とルシーファは一人部屋となった。

「この宿、娼婦の斡旋はしてませんか？」

「う、うちは売春宿ではありませんので……」

ルシーファがフロントのお姉さんにアホな質問をしている。

「そうです。ではあなたでいいですわ」

「え……？」

ルシーファは見た目だけは絶世の美女だ。そんな相手から手を握られたお姉さんは、困惑しつつも頬を赤く染めた。

「ぜひ夜にわたくしの部屋に」

「何やってるんですか！」

墮天使の後頭部をティラが杖で殴打した。

「ああつ、わたくしとしたことが、つい浮気を……」



「すべてこの人の戯言です。お手数かけてすみませんでした」

「は、はあ……？」

ティラの謝罪にポカンとしているフロントのお姉さんを置いて、俺たちは部屋へと向かった。

街は騒がしいが、大きな庭のある宿なので室内は静かだった。

この世界では珍しい五階建ての五階にある部屋で、窓を開けると商業都市の街並みがよく見える。

「NABIKOも快適だが、やっぱり宿もいいもんだな」

俺はふかふかのベッドに倒れ込み、しばし旅の疲労を癒すのだった。

別に疲れてないけど。

真夜中。

商業都市メルシアでも最高級として知られている宿泊施設の屋上に、完璧に気配を殺した人影があった。

闇に溶け込む黒装束を身に付けており、よほど高度な探知能力を有していない限り、その存在に気づくことすらできないだろう。

「この宿にターゲットが泊まっているっすね」

ぼそりと、その人影が覆面の奥から微かに声を漏らす。

「この闇將軍メア様の手に掛かれば、たとえ地の果てに逃げようが無駄っす」

彼女はレイン帝国の“四将”が一人、最強の暗殺者<sup>アサシン</sup>として知られる“闇將軍”だった。

世界各国に部下を潜ませており、その膨大な情報網から逃れることは容易ではない。

だが今回はターゲットを特定するまで、かなり時間がかかってしまった。

というのも、どうやら何らかの手段で各地を転々としているようだからだ。

しかも、辻馬車を利用した形式は無く、かといって馬車を保有しているようでもないというのに、恐るべき短期間で長い距離を移動している。

いや、そもそも馬車を使っても不可能な速さだ。  
その謎は未だに解明できていなかった。

ともあれ、この都市に宿泊しているという情報を掴んだ彼女は、こうして自ら出向いて確実に任務を果たしたという訳である。

ターゲットは他でもない。

獣人の国エクバーナに加勢し、たった一人でレイン帝国の敗走を決定づけたという男。

と言っても、十万の軍を一人でどうこうできるはずがない。恐らく恐慌に陥った兵士たちが自分たちの臆病さを隠すために半ば誇張

して報告したのだらうと、メアは考えていた。

「竜將軍セルゲートが率いる竜騎士部隊を単身で壊滅させたというのは、どうやら事実みたいっすけど」

命令はターゲットの捕縛　難しければ、殺して死体を持ち帰ってこいとのことだが、“四将”の一人を破ったほどの相手。最強の暗殺者と言えど、油断はできなかった。

「しかし所詮、竜將軍は四将最弱っす……」

くくく、とメアは覆面の奥で笑う。

実のところ、単純な戦闘力では竜將軍セルゲートの方が彼女より上なのだが……単純に今の台詞を一度言ってみたかったのだ。

「さて、それでは任務開始といくっすかね」

ターゲットおよびその仲間らは全部で六人いると聞く。つい先日まで五人だったのだが、この都市に現れたときには一人増えていたのだ。

だが幸いターゲットは一人部屋に泊まっているらしい。

「この下の部屋っすね」

屋根の上を素早く移動し、彼女はその部屋の上までやってきた。そこから身軽な動きですりりと窓枠まで下りる。ここは五階だが、命綱など必要ない。

窓の鍵は開いていた。

たとえ閉まっけていても開く手段は幾らでもあるが、お陰で手間が

省けた。

音を立てずに窓を開けると、さっと室内へ忍び込む。

……どうやら暢気に熟睡しているようっすね。

ベッドに膨らみがあった。

闇將軍は呼吸すらも止め、ゆっくりと近付いていく。

そして腰から毒の塗られたナイフを引き抜いた。もっとも、致死性の毒ではなく、身体を自由を奪うためのものだ。

そのときだった。

突然、毛布の中から伸びてきた手がメアの腕を掴んだ。

「っ!？」

その拍子に毛布が捲れ、そこで寝ていた人物の顔が露わになる。

それは聞いていたターゲットのそれではなかった。それどころか性別が違う。

べ、別人っ!？

って、なんていう美女っすか！

そこに寝ていたのはターゲットではなく、幻想的な髪の色をしたあり得ないほど美しい女性だったのだ。

丁寧に造られた人形のような美貌。

しかし今はそれをだらしなく弛緩させ、彼女はうつとりと言った。

「うふふふ……わたくし初めてなのですね。こんなふうに夜這いに来ていただいたのは……」

その瞬間、メアの暗殺者としての直感が凄まじい警鐘を鳴らしてきた。

や、殺<sup>ヤ</sup>られる！？  
いや、犯<sup>ヤ</sup>られる！

メアは咄嗟に腕を振り払おうとした。すぐに逃げなければヤバイ。

って、なんて力っすか！？

だが振り解くことができない。それどころか物凄い怪力で引っ張られてしまう。

そして気づけば組み敷かれ、同時に手にしていたナイフがどこかに飛んでいく。暗殺者として高い体術を修めているはずのメアが、まったく反応できないほどの恐るべき手際だった。

「うへへへっ！ 夜はまだまだこれからですわ！ たあ~~~~~  
つぷり、可愛がつて差し上げますわよおおっ！」  
「ぎゃああああああああっ！」

## 第47話 パパはギャンブル。ママは二人

商業都市メルシアに来て数日。

俺たちは初日からずっと泊まっている宿の一階で朝食を取っていた。

最高級の宿だけあって料理も美味い。

まあ 料理・極 スキルを持つ俺ほどではないけどな。

『ところでマスター。昨晚、マスターの隣室に襲撃者が現れました』  
料理に舌鼓を打っていると、ナビ子さんからそんなことを聞かされた。

マジか。

なぜ起こしてくれなかったんだ？

『起こす必要はないかと判断しました。マスターの 感知・極 スキルも察知していたかと思いますが、脅威度は低いと判定されたのでしょう。何よりマスターの隣室にいるのは、中身はともかく最高クラスの力を有した天使ですので』

なるほど。

たぶん俺が泊まっている部屋と間違えたのだろうが、随分と間抜けな奴だ。

襲撃者の予想は付く。

先日、俺が加勢したことでエクバーナに敗北を喫したレイン帝国の連中だろう。彼らは俺の居場所を突き止めようとしているようだ

った。

秘密裏に動いているつもりのような下っ端を寄こすなんて、なんともお粗末なものだ。

『レイン帝国の四将の一人、最強の暗殺者として恐れられる闇將軍です』

全然下っ端じゃなかった！

で、どうなったんだ、そいつ？

『犯<sup>ヤ</sup>られました』

闇將軍はどうやら若い女性らしい。

あの変態天使の部屋に単身で忍び込むとは、まさに飛んで火に入る夏の虫ってやつだな……。

闇に紛れ、しかも顔は覆面で隠していたというが、あの天使は一瞬で女を嗅ぎ分けることができる。

着ていた黒装束をあつさりと剥ぎ取られ、その後は朝方まで慰み者にされたそうだ。最後はエロ天使が満足し切って気が緩んだこともあり、どうにかその隙に逃走したようだが。……真っ裸で泣きながら。

「くそっ……むしろ何で俺の部屋に来なかったんだっ！」

『結局、どちらに転んでも彼女にとっては地獄だった訳ですね』

次回はぜひ間違えずに俺のところに来てほしいものだ。  
若い女性の暗殺者とか俺得過ぎる。

「む？ どうしたのだ、ルシーファ？ 今朝は随分と機嫌が良さそうだが……」

「ふふふ、分かります？ 昨晚、わたくしの元にとても熱烈な方がいらっしやったのですわ」

にこやかに微笑むルシーファ。

窓から差し込む朝の陽光に照らされ、まるで天使のように輝いて見えた。いや、実際に天使なんだが。中身は堕天使だけだな。

朝食は何となくみんなと一緒に食べているが、その後はそれぞれ自由行動である。

ティラは毎日、図書館に通っているらしい。各地から書物が集まって来ているそうで、本好きの彼女にとっては天国のような場所だとか。恐らく今日も行ুকつもりだろう。

エレンはこの国の闘技場で腕試しをしているそうだ。今のところ全戦全勝。あまりの強さから、正式な闘士にならないかとの勧誘を受けているという。貴様も出てみないか？ と誘われているので、今度行ってみようと思っている。

シロは毎日のように食べ歩きをしている。ちゃんと服を着ていてお金も持たせてあるため、以前のように門前払いされることはないようだ。

変態天使は女の子のナンパ。ほんと、ブレない奴だよ……。

そして俺はというと、カジノでのギャンブルにハマっていた。

「って、あれ？ フィリアがないぞ？」



そこでふと気が付く。

「？ フィリアちゃんならカルナさんの部屋に行くって言ってましたけど……」

「そう言えば朝食に行く前に来たな。けど、すぐに戻ってったぞ」

誰も彼女の行方を知らなかった。

「勝手にどこかに遊びに行っただのかもしれないな」

「ですが朝食も取ってないですよね？」

「まあ魔導人形だし、そもそも朝食を食べる必要はないんだが」

フィリアは好奇心旺盛なので、時々ふらりといなくなることがある。

今回もその類いだろう。

探知・極 スキルを使えば、すぐに居場所が分かるはず。

おっ、いたな。

結構ここから離れているぞ。

「市場の方にいるっぽいな」

「大丈夫ですかね？」

「心配ないって。フィリアはめちゃくちゃ強いからな」

「わーい！」

朝から賑わう商業都市を一人の幼い少女が目輝かせながら歩いていた。

フィリアである。

魔導人形として目覚めてまだ日の浅い彼女にとっては、見るものすべてが物珍しい。きよろきよろと忙しく首を振り、面白そうなものを見つけるとすぐに近づいていく。

「いいにおい！」

甘いにおいに釣られてふらふらと近付いて行ったのは、果物を販売している露店だった。

小さなお客さんに気づいて、店員の中年オヤジが声をかける。

「お嬢ちゃん、一個どうだい？　うちの林檎は甘くて美味しいぜ」

「たべてもいいの！　わーい！」

「おっと。ちゃんとお金持つてるだろうな？」

「おかね？　ないよ！」

中年オヤジがしかめっ面になる。

「金がねえのに市場に来てんのかよ……。ていうか、もしかして迷子か？　お父さんやお母さんは？」

「フィリアひとりできたの！」

おいおい、とオヤジは溜息を吐いて、

「まったく、親は何やってんだか」

「んーとね！ パパはいつも、かじのでぎゃんぶる！」  
「なんて父親だよ！？」

こんな幼い子供をほったらかしてギャンブルに耽っていると、  
口でもない父親だとオヤジは内心で見知らぬ人物を非難する。  
目の前の少女はまだその辺りのことが分からないのだろっ、ここ  
にこと無邪気な笑顔を浮かべていて、それがとても可哀想に思えた。

「お母さんはどうしてるんだ？」  
「ティラママはね、ほんをよんでる！」  
「ほう。本か」

子供を放置しているのはただけだが、どうやら母親の方は父  
親よりもまともようだ。

「エレンママはとーぎじょー」  
「もう一人母親がいるのか！？」

思った以上に複雑な家庭のようだった。

「二人も妻がいながらギャンブル漬けの毎日かよ……くそ、なんて  
父親だ……」

会ったことも無い人物だが、果物屋のオヤジの中でどんどん株が  
下がっていく。

そんな彼の様子を不思議そうに見つめるフィリア。しかしすぐに  
また興味が果物の方へと移り、

「おいしそう！」  
「……普通はお金がないと食べることができないんだぜ」

「だめなの……？」

オヤジの言葉に、フィリアは眉根を下げてしょんぼりする。

「……嬢ちゃん、そんなに食べたいのか？」

「うん！ でも、フィリアね、たべなくてもだいじょうぶなからだなの！」

魔導人形だから食事をとる必要はない、という意味だったのだが、これまでの流れからオヤジは盛大に勘違いした。

「くうっ……いつもそう自分に言い聞かせて我慢してきたんだな……っ！ なんて健気な子なんだ！ こんな子を餓えさせるなんて、本当に酷え父親だ！」

オヤジは目尻に涙を浮かべ、店頭に並んでいた林檎を一つ手に取った。

そしてそれをフィリアに手渡す。

「？ おかねないよー？」

「これは嬢ちゃんへのプレゼントだ」

「ほんと？ わーい！」

ぴよんぴよん飛び跳ねて喜びを露わにする少女に、オヤジは小さな声で呟いたのだった。

「……嬢ちゃん、強く生きるんだぞ」

しゃりっ、と瑞々しい音を立てて林檎を齧る。

甘い水分が口の中に広がり、フィリアは「おいしーっ」と叫んだ。

「おじさんいいひとー」

果物屋のオヤジに改めて感謝しつつ、フィリアは街の探索を再開する。

小柄な身体を活かし、人混みの間をすり抜けるように進んでいると、

「引ったくりよッ！ 誰か捕まえてッ！」

そんな叫び声が聞こえてきた。

## 第48話 知らない人に付いていつてはいけません

「引ったくりよッ！ 誰か捕まえてッ！」

その甲高い声に振り返ったフィリアが見たのは、市場に買い物に来ていたらしい四十がらみの女性と、彼女から奪った鞆を抱えた大柄な中年男だった。

「どけどけっ！」

そう怒鳴り散らし、男は行き交う人々を押し退けてその場から逃げ出そうとしていた。そして走り去ろうとしているその方向に、ちようどフィリアがいる。

突き飛ばされては敵わないと、誰もが蜘蛛の子を散らすように道を開けていく中、フィリアだけは「みんなどうしたのー？」と不思議そうな顔でその場に立っていた。

「邪魔だ、ガキ！」

「……？」

「「「危ない！」」「」

男は速度をまったく落とさずフィリアに突っ込んでいく。恐らくその体重差は数倍。誰しもが女の子が吹き飛ばされる光景を想像し、思わず顔を背けた。

「えい」

「ぶごおっ！？」

なのに次の瞬間、男の悲鳴が轟いていた。  
フィリアが右手一本で男の突進を止めていたのだ。華奢な腕が腹にめり込み、男の口から胃液が飛び出す。

「あ……ぐお……」

そのまま男は蹲ってしまった。

信じがたい光景にしばし誰もが啞然としていたが、

「「「おおおっ！」「」」

やがて大歓声が弾けた。

「すげえ！ 何だあの子！」

「片手で大の大人のタックル止めたぞ！？」

「なんて幼女だ！ しかも可愛い！」

口々にフィリアの活躍を讃えている。

そこに騒ぎを聞きつけたらしい保安官がやってきて、男を拘束、連行していく。

鞆を取り戻した女性がフィリアに礼を言う。

「ありがとう。あなたのお陰で助かったわ」

「……？ えへへー」

何のことがよく分かっていないフィリアだが、褒められたらしいのでとりあえず喜ぶ。

「大したお礼はできないけれど、よければこれをあげるわ」

そう言って女性が手渡してきたのは、チョコレートでコーティングされた美味しそうなクッキーだった。

実はメルシアでも有名なお菓子屋で買ったもので、人気の品の一つである。

「おかし！　くれるの？　ありがとーっ！」

林檎に続いてフィリアはお菓子をゲットしたのだった。

「このまち、いいひとばかり！」と思いながら、フィリアは探検を再開していた。

クッキーはすでにお腹の中だ。

「さあ、次の挑戦者はいないか！？　俺に勝ったら金貨十枚！　挑戦料は一回たったの銀貨五枚だ！」

ふとそんな怒鳴り声が聞こえてきて、フィリアはそちらへと視線を向けた。

ちよっとした人ばかりができています。

何だろうかと、フィリアは近付いていった。

「すでに六試合目だ。そろそろ俺の腕にも疲労が溜まってきた頃だぜ？」



人だかりの中心にいた青年が煽る。

「よし、オレがやろう」

腕捲りしながら前に出たのは、筋骨隆々の大男だった。

青年と大男が台を挟んで向かい合い、そして互いに腕を組み合わせた。

フィリアはすぐにピンときた。

「パパとやったことある！」

腕相撲である。

そしてどうやら、あの青年に腕相撲で勝てば賞金を貰えるらしい。

しかし彼はどちらかと言えば華奢な体躯だ。どう見ても大男に勝てそうにない。

が、決着は意外な形で付いた。

青年が大男をあっさりと打ち負かしてしまったのだ。

「残念、俺の勝ちだ」

「くそ、その細腕になんでそんな力があるんだよっ！」

大男は悪態を吐きつつ悔しげに去っていった。

「我こそはって奴はいねえか！ 次が七試合目、さすがに俺の腕も限界が近いぜ」

さらに対戦者を募るが、今度はなかなか出て来るものが現れない。すると青年は挑戦を渋る男たちを嘲るように見渡して、

「おいおい、メルシアの冒険者つてのはこの程度かよ。はははっ、聞いてた通り腰抜けが多いみたいだな」

「なんだと？」

すぐ近くに冒険者ギルドがあるということもあって、ここにいるのは大半が冒険者、そして屈強な男たちだった。血気盛んな連中ばかりで、煽られれば弱い。

それから立て続けに五人もの男たちが挑戦して、しかし結局、全敗を喫したのだった。

（へへへっ、なかなかいい小遣い稼ぎになるな）

十一人目の挑戦を退けたルーカスは、内心で下卑た笑いを浮かべていた。

これで銀貨五十五枚である。

（にしても相変わらず冒険者つてのは馬鹿な連中だ。俺がインチキしているとも知らずに。つっても、さすがに気づくのは不可能かなんたつてこの精巧さだもんなア）

ルーカスは自分の右腕に視線を落とす。

いや、実はそれは本物の腕ではなかった。

義手だ。

しかも普通のものではなく、恐らく魔導具の一種だろう。なにせ自分の思い通りに動かすことができるし、見た目はもちろん、触って見ても本物と区別がつかない。

加えて恐るべき怪力を発揮する。当然ながら疲れることもなかった。

（忍び込んだ貴族様の屋敷で偶然見かけたときは人間の腕かと思っ  
てぞっとしたが、持ち出してきて正解だったぜ）

そして当初は売るつもりだったのだが、腕のある人間でも装着することができると気づき、こうして自分が利用することにしたのである。

「次の挑戦者は誰だ！ 金貨十枚が欲しくねえのか！」

ルーカスは威勢よく声を張り上げる。

だがこの場にいた連中は一通り打ち負かしてしまったようだ。  
さすがにそろそろ終わり時かと思いついたとき、

「フィリアもやるーっ！」

むさい男たちの中から可愛い声が上がった。

見ると、幼い少女が目をキラキラさせて手を大きく上げていた。

（ま、最後の余興としてはちょうどいいか）

ルーカスはそう考え、少女に笑いかけた。

「ははは、お嬢ちゃんが相手なら挑戦料は要らないぜ」  
「ほんと？ わーい！」

兎のようにぴょんぴょん跳ねながら前に出てくる愛くるしい幼女に、ルーカスに負けて悔しげにしていた男たちの頬も緩む。

「とどかなーい」

腕相撲用の台に届かなかったため、近くに放置されていた木箱を足元に置いてやった。

（手え小さつ。こりやかなり手加減しないと、この義手だと壊しかねないぜ）

少女の手を握り、ルーカスは心の中で苦笑する。

「おにーちゃんとパパ、どっちがつおいー？」

「お嬢ちゃんのパパは強いのかい？」

「うん！ フィリアね、さいしょはかってただけど、パパがほんきだしたらね、あっさりやられちゃったの！」

「へ、へえ……」

子供相手に大人げのない父親だなど、ルーカスは内心でツツコンだ。

「だけどたぶん俺の方が強いと思うな」

「ほんと！？　じゃあ、フィリアぜんりよくでいく！」

ふん、と鼻息荒く気合を入れる幼女。

「よし、じゃあ始めようか」

そしていつものように観客から合図を貰うと、ルーカスはゆつくりと義手に力を込めようとして

「えい」

ベギッ！！！！

義手が粉碎した。

「っ！？　今やばい音がしなかったか！？」

「おい、兄ちゃん大丈夫か！？」

その圧倒的な握力に耐え切れず、義手が破壊されてしまったのだ。周囲にいた男たちが慌てて駆け寄る。

だが彼らが見たものは、義手の皮膚を貫いて飛び出す金属製の部品だった。

「こ、これはどういうことだ！？」

「まさか、義手？」

「くそ！　インチキだったのか！」

「や、やべ……」

絡繰りがバレてしまい、ルーカスは後ずさった。全身から汗が吹き出す。

しかし逃げ場はなかった。すぐに屈強な冒険者たちに取り押さえられ、服の中に隠していた本物の腕を発見されてしまったのだった。

「さっきのおかね！」

林檎をタダでくれた果物屋のオヤジに、フィリアは金貨一枚を渡した。

先ほど腕相撲に挑戦したら、何だかよく分からないうちに金貨十枚が手に入ったのだ。それで林檎の分の代金を支払うことにしたのである。ちなみに林檎一個の値段は銅貨一枚である。

「は？　ちょ、なんで金貨なんか持ってたんだ、嬢ちゃん！？　って、もういねえ！？」

頓狂な悲鳴を上げるオヤジを背に、すでにフィリアは人混みの中へと消えていた。

「お金がないんじゃないかなかったのか……？」

そんな彼女の姿を追っている四つの瞳があった。  
二人組の男だ。

「見たか？　あのガキ、すげえ大金持ってやがるぜ？」

「ああ。恐らくどっかの貴族か大商人の娘だろう」

「くくく、こりゃあ付いてるぜ」

彼らは後を追い駆けると、少し人通りが少ない場所に入ったところで声をかける。

「お嬢ちゃん、お菓子ほしいかい？」

「ほんと！？」

「だから付いておいで」

「うん、わかった！」

なんとも古典的な手法によって誘拐されるフィリアだった。

## 第49話 魔導人形は空気を読まない

「おかしまだー？」

ひんやりとした薄暗い部屋に押し込められたフィリアは、素直にお菓子を貰えるのだと信じていた。

そこは地下牢である。

お菓子に釣られたフィリアは、まんまと誘拐犯に捕まってしまったのだ。

「……バカね。あなた騙されたのよ」

そんな彼女に、横から冷ややかな声がかかる。

見た目上はフィリアとそう歳の変わらない、金髪の少女だった。せいぜい十歳前後といったところだろうが、しかし随分と大人びている。そして身なりも良かった。

「だまされたー？」

「誘拐されたのよ。……あなたも、わたしも」

その少女もまたフィリアと同じように浚われて、この地下に閉じ込められてしまっていたのである。

「ゆーかい？」

「奴隷としてどこかの国に売られるか、もしくは親から身代金をふんだくるか……そのどちらかでしょうね」



金髪少女は溜息混じりに言う。歳の割に随分と落ち着いているのは、自分の場合、後者に違いないと思っているからだった。

牢の中には二人以外にも何人かの子供たちが捕らわれていた。

その人数や、こうして監禁する場所が整えられていることから、間違いなく組織立った犯行だろう。奴隷として売り払うためのルートも持っているはずだ。

泣いている子も多い。

「なんでないてるのー？ おかしもらえなくて、つらいの？」

「そんな訳ないでしょ！ お菓子に釣られて誘拐されるなんて、今時あなたくらいよ」

「フィリアだけ？」

「……わたしはいきなり背後から男に襲われて、たぶん睡眠薬が何かを嗅がされたわ。意識を失って、気が付いたらここにいたってワケ」

「へー」

「へーって……あなた、こんな状況なのにまるで動じてないわね？」

少女は呆れたように言う。

「あなたの家、裕福？ そうでなければ奴隷として売り払われるわよ。あなた見た目は悪くないし、かなり高値が付くはず。もし身代金を要求するとなると結構な高額になるはずよ」

「ゆーふく？」

「あなたのお父さん、何をしているのかしら？」

「ぎゃんぶる！ あとね、いつもえっちなことしてる！」

「だ、大丈夫なの、あなたのお父さん……？」

「フィリア、パパのことすきーっ！」

「そう……」

二人の会話が途切れると、地下牢に静寂が戻る

「あーあーっ。しゅごーい！ わんわんひびくーっ！」

ことはなく、フィリアは一人楽しそうにはしゃいでいた。

「ちょっと、いい加減静かにしてなさいよ……」

少女が嘆息したそのときだった。

地下牢の前にも荒っぽい男たちが現れる。

それはフィリアを誘拐した二人組だった。

「おかしきたーっ？」

目を輝かせるフィリアだったが、男たちはそれを無視。

鉄格子の向こうに捕らわれた少女たちを見渡して、指で示した。

「お前とお前とお前、出て来い」

それには金髪少女も含まれていた。

「喜べ。お前らは奴隷行きだ」

その言葉を聞いて、少女はえっ？ と耳を疑う。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！？ 何でわたしが奴隷行きなのよ

！？ 身代金は！？」

荒らげた声が地下牢に反響した。

「ああ、お前は確かエドバン家の娘だったか。提示した身代金を払えねえと、お前の親父が突っ撥ねてきやがったぜ。ったく、せっかく大金を稼ぐ絶好のチャンスだったってのによ」

男は吐き捨てるように言った。

「み、身代金が払えない……？」

そんなはずはない、と少女は頭を振る。

なにせ彼女の家は、この商業都市でも十本の指に入るであろう大富豪なのだ。

「まさか、こんなタイミングで事業が破産しやがるなんてよ」

「破産……？」

少女は信じられなかった。目の前が真っ暗になる。

「な、何かの間違いよっ……そんなこと……」

「うるせえ！ 黙ってとっと出てきやがれ！」

恫喝され、無理やり腕を引っ張られる。

抵抗しようとしたが、大人の男の力に逆らえるはずもない。

「大人しくしやがれ！」

「っ……」

強く頬をぶたれ、少女はよろめいてその場に尻餅をついた。

「早く立ちやがれ。この後も俺たちには仕事があるんだからよ」

そして今度は髪の毛を掴まれ、強引に立たせられる。  
その様子を見ていたフィリアが、首を傾けながら訊いた。

「もしかして、おじさんたちわるいひとー？」

「ああん？」

「おかしくないし、フィリアたちにひどいことする？」

「ったく、おめでたいガキだぜ。この状況でまだ貰えると思ってやがんのかよ。あんなのてめえを誘拐するための方便に決まってんだろーが」

くはははっ、と男たちは嗤う。

「わるいひと、こらしめないとだめって、パパがいつてた！」

「はっ、誰もてめえらを助けてくれやしな」

「えい」

フィリアが握り締めた鉄格子が、ボキンッ！と盛大な音を立てて折れた。

「は？」

予想だになかった光景に、二人組の目が点になる。

虚ろな表情で連行されつつあった金髪少女も、ぽかんと口を開けた。

フィリアは鉄格子を無理やりこじ開け、外に出る。

「フィリア、わるいひと、やっつける！」

どんつ、と石床が凹みそうな勢いで地面を蹴りつけると、フィリアは呆然と立ち尽くす男たちに飛びかかった。

二人組の顔面に同時に足裏がめり込む。

「ひでぶ!？」

仲良く左右対称に吹き飛び、地下の壁に激突する男たち。

完全に気を失っていた。

どころか、ほとんど瀕死状態である。

「せいはいかんりょーっ!」

謎の決め台詞を発するフィリアに、捕らわれていた子供たちはしばし言葉を失っていた。

「ぐほっ!？」

「カーラまでやられた!？ 一体何なんだよこのガキはッ!？」

商業都市メルシアでも名の知れたギャング“ブラッドファング”。その構成員たちは皆、泣く子も黙る厳つい容貌をしているが、今は彼らの方こそ泣きたくなるような状況だった。

誘拐し、地下牢に閉じ込めていたはずの子供一人によって、腕自慢の仲間たちが瞬く間にやられていたのである。

もちろんその子供とはフィリアのことだ。

地下牢を他の子供たちとともに脱出した彼女は、次々と現れるギヤングスターたちを蹴散らしていた。

「武器を使い！ 多少傷つけても仕方ねえ！」

ついには武器を持って攻めかった。

右からは剣を、左からは戦斧を手にした男がフィリアに躍りかかる。

「えい」

「なっ……」

「受け止めやがった!？」

フィリアはあっさりと素手で受け止めると、刃を握力だけで粉碎した。

「ほい」

「「ぶへっ!？」」

フィリアの小さな拳が男たちの腹を穿つ。

数十メートルも吹っ飛ばされ、泡を吹きながら悶絶した。

彼我の圧倒的な実力差を理解したギヤングスターたちは、顔を引きつらせて後ずさる。

「おい、ガキ相手に怖がってんじゃねえよ！」

リーダー格の男が怒号を張り上げるが、もはや誰もが及び腰だ。一方、フィリアに護られている子供たちは、大の大人を齒牙にも

かけない強さを目の当たりにして、生氣を取り戻しつつあった。

「す、すごい……あなた、何者なの……？」

「フィリアはフィリアーっ！」

「名前のことじゃなくて……」

そのときだった。

廊下の奥から一人の男が姿を現した。

「うるせえな。何やってんだ、テメエら」

その男が苛々と吐き捨てた瞬間、ギャングの構成員たちが一斉に冷や汗を流す。

「ぶ、ブルド親分！？」

先ほどまでこの場を仕切っていた男が悲鳴じみた声を上げる。

ブルドと呼ばれたその男こそ、それまで小規模な組織でしかなかった「ブラッドファンク」を、僅か数年で数倍の規模にまで拡大させた張本人だった。

そしてその素行からギルドより追放されたものの、かつてはアラック冒険者として名を馳せた実力者でもある。

決して大柄という訳ではないが、全身から放たれる威圧感以外の連中とは異次元。そして髪型も異次元だ。なおその部分に触れてはいけないというのは、この組織に入った構成員が真っ先に教えられることである。

子供たちでさえすぐにその男は別格だと悟った。脱出できるかも

しないという希望が、あっという間に萎んでいく。  
そんな中

「へんなあたまーっ！」

フィリアだけは空気を読まず、ブルドの“リーゼント”を指差して大笑いしたのだった。



## 第50話 魔導人形VSギャング頭領

重力に逆らい、前方に強く雄々しく突き出す前髪。

ブルドは自らの髪型リーゼントに誇りを持っていた。

同じ髪形をしている人間を、ブルドは未だかつて見たことがない。各地から色んな人間が集うこの商業都市においてもだ。まさしく異端で奇抜なヘアスタイルである。

だがブルドはこれが最高にイカした髪型だと信じて疑わなかった。

「親分！ 今日もその髪型、最高っす！」

「世界で最も憧れる髪型っす！」

構成員たちは一斉に全力で賛美する。ブルドは短気だが、髪型を褒められると機嫌が良くなると知っているからだ。

「はっ、これはオレだけに許されたオレだけの髪型だ。テメェら真似すんなよ？」

「わ、分かっています！」

「マネできないの、マジで残念っす！」

もちろん誰も内心では残念だとは思っていないが、物凄く残念そうに悔しがった。

と、そのときだった。

そんなブルドの頭髪を指差し、フィリアが笑いながら叫んだのだ。

「へんなあたまーっ！」

「「いきなり最大の地雷を踏みにいきやがったああっ!?!?」」」

その場にいた誰もが一瞬にして凍りついたのは言うまでもない。

「……今、なんつった？」

案の定、ブルドはキレた。

「へんなあたまー」

フィリアが素直に復唱し、ブルドの額にますます血管が浮き出す。

過去、同じように禁忌に触れてしまった人間の行く末は 良く  
て半殺し。

涙ながらに「私が間違っていました。その髪型は世界最高です」  
と必死に謝罪し、それでようやく半殺しである。

「……オレにとってガキはただの商品だ。ガキを虐めて喜ぶような  
趣味はねえ」

だが相手が子供とあっては、彼も少しは自重するらしい。  
と思いきや、

「前言を撤回しやがれッ！ そうしたら半殺し程度で済ませてやる  
ッ！」

やっぱり半殺しにはするんだっ!?!? と構成員たちは一斉に心  
中でツッコんだ。

「ど、どう見ても最高だろ？」

「素晴らしい髪型だって！ な？ な？」

さすがに彼らにも少しは人の心があるらしく、今だけは誘拐云々のことは忘れてフィリアに必死に訴えかける。

「わかんない」

「「「空気を読めええつ！」「」」

フィリアと一緒に地下牢に閉じ込められていた金髪少女もまた、青い顔をして訴えた。

「嘘でもいいから褒めておきなさいよ！ あんな頭してるくらいだから、絶対頭の方もおかしいわよ！ 何されるか分からないわ！」

「おい聞こえてるぞ、ガキ！」

「ひっ」

ブルドに恫喝され、少女は悲鳴を漏らす。

「おじさん、わるいやつらのおやだまー？」

「おじさんだと！？ オレはまだ三十だ！」

さらにブルドの神経を逆撫でしていくフィリアである。

「フィリアがたおす！」

「……舐めやがってクソガキがッ……。どうやらテメエには身体に分からせてやるしかねえようだなア、オレの髪型の素晴らしいさをよ！」

ブルドは恫喝めいた怒号を上げると、背中 of 剣を抜いた。

ただの剣ではない。刃の部分が蛇の腹のように分割していて、鞭のようにも扱える特殊な剣だ。扱いは非常に難しいが、ブルドは完璧に使いこなすことができた。

「親分がスネイクソードを抜いた!？」

「分からせるも何も、端から殺しにかかってますぜ!？」

構成員たちが目を剥く中、ブルドは剣を突き出した。

剣先が蛇のごとくうねり、フィリア目がけて襲来する。

「しかも最初から大技っすか!？」

普通の刺突と違い、剣の起動がぶれるため一流の剣士ですら対処が難しい超絶技だった。

だが急所を一刺しして終わり　　というのでは、髪型を馬鹿にされたブルドの気が収まらない。まずは寸止めで生意気な子供に恐怖を与えてやるつもりだった。

しかしそんなブルドの内心など知る由もなく、これから起こるであろう凄惨な光景を想像して子供たちから悲鳴が上がる。

そして次の瞬間、

「えい」

フィリアが剣先を指先で摘まみ取っていた。

「……は？」

ブルドは思わず頓狂な声を漏らしてしまう。

「う、受け止めた!？」

「親分の必殺技を!？」

「い、今のはオレが寸止めしたからだッ!」

驚愕する部下たちに、ブルドは声を張り上げる。

実際には予定していた箇所よりも少し手前だった気がするが、それは恐らく少しばかり手元が狂ったせいだろう。そうに違いない、とブルドは自分に言い聞かせる。

「だが次はマジで当てるぜ! オレの髪型を潰えるなら今の内だ!」

「おなかすいたー」

「聞けよ!？」

ブルドは苛立ちながら再び剣を繰り出す。

今度は足元を狙う　と見せかけ、直前で剣先が跳ね上がった。フィリアの顎先目がけて鋭い刃が迫る。

「わんっ」

がちん、という音が鳴った。

フィリアが剣先に噛み付き、なんと歯でブルドの必殺技を止めてしまったのだ。

「歯で防いだ!？」

「真剣白歯取り!？」

「誰が上手いこと言えつつた!？」

ギャングスターたちは騒然となった。

「あうあうあー」

剣先を噛んだままフィリアが何か言おうとしているが、まったく聞き取れない。

「くそっ！ 放せ！      っ！？」

ブルドは強引に剣を引っ張って取り戻そうとするが、ビクともしなかった。

物凄い咬合力である。

「あう！」

バギンツ！ という金属音が響いた。

「くくく 噛み砕いたあああっ！？」

特殊合金でできた硬質な刃を、噛んで粉碎してしまったのだ。

バリバリバリ、という嫌な音を奏でながら、フィリアはさらに刃を咀嚼し、

「おいしくなーい」

うへえ、と口から吐き出した。

ぱらぱらと砕けた金属が地面に落ちる。

「な、何なんだよテメエは！？」

「こんどはこっちからいくー」

そう宣言した直後、地面を蹴ったフィリアの姿が掻き消えた。一瞬にしてブルドに肉薄すると、えいつ、とサマーソルトキック

を繰り出す。

それをブルドが回避できたのは奇跡に近かっただろう。  
あるいは、幾多の戦いを経て培ってきた勘のお陰か。咄嗟に上体を逸らしたことで、フィリアの短い脚は本来狙った顎下を掠めてしまっ

だが前方に突き出しているリーゼントはそうはいかなかった。  
フィリアの足が直撃する。

フィリアちゃん、よほどのことがない限り、本気を出しちゃだめですよ、というティラの教えを守って多少手加減したとはいえ、音速に近い速度の蹴りだ。

靴先が髪の毛との間で凄まじい摩擦熱を生み出し

発火した。

「お、オレの髪があああつ!？」

轟ッ、と勢いよく燃え出した己の頭髮に悲鳴を上げるブルド。

「親分!？」

「み、水だ! 早く水を持ってこい!」

構成員たちが慌てて消火しようと走り回る。  
一方、フィリアは思いつ切り目を輝かせた。

「しゅーい! ばーにんぐへあーっ! かっくいいーっ!」

どうやら燃え盛る頭髮が気に入っ

「早く消せええっ！」

「親分！ 水持ってきやした！」

「けしたらだめー」

「うおおおおいつ！？」

そして消火活動を妨害し始めるフィリア。

「早く消してくれええっ！」

「だめー！」

……この後、フィリアたちは脱出に成功。  
というより、追い出された。

ブルドの髪はなんとか無事に消火されたものの、自慢のリーゼントは見るも無残なチリチリヘアになってしまったのは言うまでもない。

「くそつたれ！ あのクソガキのせいで散々な目に遭っちまった！」

どうにか怒り狂う冒険者の罵倒から解放されたルーカスは、路地裏で吐き捨てる。

稼いだ挑戦料はすべて返金。壊れた義手はもう使えない上に、賞金だった金貨十枚はあの幼女に渡す羽目になってしまった。



お陰で無一文である。

「っ！ あいつはっ……」

そのとき、まさにその忌まわしき少女が、すぐ目の前の通りを横切るのが見えた。

……ちなみに、ギャングの拠点から脱出した直後のことである。

（はっ、これはツいてるぜ。あのガキをぶち殺して取り返してやる……ッ！）

昏い目でそう決意するルーカスは、秘かに彼女の後を付けていった。

「……どこ？」

少女はキョロキョロと周囲を見渡しながら首を傾げている。

どうやら迷子になったらしい。すでに陽が暮れはじめ、都合のいいことに今は人通りが少ない路地。

絶好のチャンスだ。ルーカスは隠し持っていたナイフを取り出すと

「そうはさせないっす」

背後からの声に凍りついた。

振り向くことができない。過去、表だって言えない様々な仕事に手を染め、幾つもの修羅場を潜ってきたルーカスには分かった。こいつはマジでヤバイ、と。

「あの子にはうちも用があるっすよ。だから手を出されると困るっ

す」

ルーカスは首をかくかくと必死に頷かせるだけで精一杯だった。

青年が逃げるように去って行った後、闇將軍メアはひとりごつ。

「あの幼女、ターゲットが連れていた子供で間違いないっすね。人質を取るなんて趣味じゃないっすけど、今回ばかりは仕方がないっす」

フィリアに新たな脅威（笑）が迫っていた。

## 第50話 魔導人形VSギャング頭領（後書き）

本来あの前髪のツツパリは「ポンパドール」とか言うそうですが、リーゼントの方が定着していて分かりやすいのでリーゼントにしました。

## 第51話 魔導人形VS闇將軍

「どこどこー？」

ギャングの拠点を後にしたフィリアは迷子になっていた。すでに夕暮れ時。辺りが薄らと暗くなり始めている。

普通の子供であれば怖くなったり両親が恋しくなったりして泣き出してしまうところだが、フィリアはまったくそんなことはなかった。

「わーい！ おいしそうなにおいー」

夕飯の支度を始めた家が多く、漂ってくる美味そうな匂いにはしゃいでいた。立ち止まることもなく、どんどん進んでいく。

と、そのとき前方に立ちはだかる人影があつた。

「お嬢ちゃん、もうすぐ暗くなる時間ですよ？」  
「だれー？」

もちろん、レイン帝国の四将が一人、闇將軍のメアである。

ルシーファを襲った（実際には襲われたのだが）ときと違い、彼女は普通の格好をしていた。地味な衣服を着て、髪はお下げにしている。しゃべり方はともかく、その辺にいる善良そうな町娘にしか見えなかった。

彼女は今、ターゲットの連れであるフィリアを誘拐しようとしているのだ。

（あの宿には二度と近付きたくないっす……）

思い出ただけで背筋がぞつとする。

その一件により彼女はかなり慎重になっていた。

あんなヤバイ女を傍に置いているということから、メアの中ではターゲットの危険度が大きく上方修正されていた。まともに対峙するのは危険だと判断し、最も組し易いであろう連れの子供を狙うことにしたのである。

「すぐその住人っす。子供が一人で歩いているのを見かけて、心配になって声をかけたっすよ。この辺りは物騒っすから。……おうちはどこっすか？」

「わかんない」

「じゃあ、これからお姉ちゃんがパパとママのところに連れて行ってあげるっすよ」

命令はあくまでターゲットに関してであり、メアはその周辺にまで危害を加えるつもりはなかった。それでも抵抗されれば、少々手荒な手段に出ざるを得ない。大人しく付いて来てくれるというのなら、それに越したことは無かった。

だがフィリアは首を左右に振った。

「フィリア、ついていかなーい」

「……どうしてっすか？」

「エルザがいったー。しらないひとについていったら、だめ！  
って」

学習したフィリアである。

ちなみにエルザというのは、フィリアと一緒に地下牢に囚われていた少女のことである。

「……そうっすか」

仕方がない、無理やり拘束するしかないかと、メアは内心で決断する。

部下たちに命じ、人払いは済んでいた。

幼女を一瞬で気絶させるなどあまりにも容易い。

メアは自然な動作で、しかし特殊な歩法によって距離を詰め、フィリアの首筋に手刀を叩き込もうとした。

パシッ、と手を払われた。

いや、もう少し正確な擬音を使うならば、ボキッ、が正しいかもしれない。

「~~~~~ッ!!!!???」

小指があらぬ方向に曲がっていた。驚きと激痛に思わず声を上げそうになるが、暗殺者の矜持でどうにか堪える。

な、な、なんなんすか、この子供は……っ!?

メアは今の攻防だけで悟っていた。マグレでも何でもなし。目の前の幼女はこちらの動きを完璧に見切っていたし、その小さな身体に秘めるパワーはドラゴンのそれにも匹敵するということを。

「やっぱりわるいひと！」

「くっ……」

メアの決断は早かった。

作戦は即座に諦め、すぐにその場から離脱しようとする。

しかし回り込まれてしまった！

「速っ！？」

足の速さだけなら四将の中でも随一とまで言われているはずのメアだったが、フィリアはそれを遥かに凌駕していた。

「じょ、冗談じゃないっす！ 何でこんな化け物ばっかなんすか！？」

「せいばーい！」

「ぶほっ！？」

フィリアのパンチを受けてメアは吹き飛ぶ。

一瞬で意識が刈り取られそうなほどの威力だった。

ゆうに五百メートルほどは宙を舞い、やがて錐揉みしながら地面に落ちていく

「おっと、大丈夫か？」

石床に激突する寸前、メアの身体は何者かによって受け止められていた。

「た、助かったっす……………っ!？」

メアは助けてくれた相手を見上げ、凍りついた。  
何とターゲットその人だったのだ。

だが相手はこちらが暗殺者であるとは知らない。  
メアは平静を装い、礼を言おうとして、

「おっ、誰かと思ったら俺のストーカーじゃないか」  
「ファッ!？」

メアの口から思わず頓狂な声が漏れた。

「ずっと俺の後を付けていただろ？ 知ってるんだぜ」  
「ななな、なんの話っすか？ は、早く下ろしてくれると嬉しいっすけど……………」

内心でだらだらと汗を掻きながらもメアは懸命に知らないふりをする。

「レイン帝国の闇將軍なんだろ？ メアちゃん」

って、完全にバレちゃってるっす!？ しかも名前まで！

「大丈夫大丈夫。暗殺者がターゲットに恋をするなんて展開、物語じゃよくあるしな」

「一体どういふことっすか!？」

「恥ずかしがらなくていいって。さあ一緒に逝こっ!」

「ぎゃあああっ! 放して! 放してくれっすううっ!」



必死に暴れるメアだったが、物凄い力で掴まれていて逃れられない。

メアの頭を先日悲劇が過ぎった。

また犯されるッ……！？

「何やってるんですか。早くフィリアちゃんを見つけてください」  
「いでっ」

と、そのターゲットの頭を杖で叩いたのはエルフの少女だった。  
僅かに力が緩んだその隙に、メアは全力を振り絞って脱出を図る。  
だが甘かった。

「ハハハ、逃がさないぜ？」

「ひいいいっ！」

「だから何やってるんですか！」

ズガンツ、としてはいけないレベルの殴打音が響く。

そして今度こそメアは拘束から逃れることに成功し、脱兎のごとく路地へと飛び込んだ。

「もう嫌っす！ こんな連中、絶対に相手にしたくないっす！」

空に向かって叫びながら、彼女は本気で暗殺者を引退することを決意したのだった。

「お礼？」

「エルザがね、いえにきてほしいっていった！」

街の冒険を堪能してご満悦なフィリアが、そんなことを言ってきた。

もっと詳しく話を訊いてみると、どうやらギャングに誘拐されていた子供たちを助けたらしい。

……というか、フィリア自身が一度は誘拐されたそうだ。

「何をやっているのだ……」

エレンが呆れ顔で嘆息する。

「フィリアちゃん、もう二度と知らない人に付いていったらダメですよ？」

「うん！ しらないひとはね、ちゃんとせーばいするの！」

「そうしてください。　って、成敗！？」

そんなわけで翌日、俺たちはフィリアと一緒にそのエルザという少女の屋敷に行くことにした。

エドバン家の屋敷と言えば、大抵の人が知っているほど有名な豪邸らしい。俺には　探知・極　スキルもあるし、道を尋ねる必要はなかったが。

実際、めちやくちや大きな屋敷だった。

この家の娘を誘拐したギャングは、きっと多額の身代金を要求したことだろう。

エドバン家は元々異国の貴族だったが、落ちぶれてこの都市に逃

れてきた際、商売の道に入ったらしい。そして運よく大成功。今ではここ商業都市メルシアで、十本の指に入るほどの大富豪にまで成長したそうだ。

「おお、よく来てくれたね」

俺たちを迎えてくれたのは、エドバン家の当主だというダンディなおっさんだった。出自が関係しているのだろうが、その雰囲気は商売人というよりは貴族だ。

広い屋敷の中へと案内される。

……随分と静かだな。執事とかメイドとか、まるで見当たらない。しかもこれだけ豪華な屋敷だというのに、調度品の類いがほとんど見当たらなかった。

『エドバン家はつい先日、事業に大きく失敗して破産してしまいました』

えっ、マジで。

「あっ、エルザ！」

「フィリア、来てくれたのね」

フィリアが急に駆け出したかと思うと、ドレスに身を包んだ少女がいた。フィリアに微笑んでみせるが、しかし憂いが隠し切れていない。

「エルザ、まだげんきないー？」

「い、いえ、大丈夫よ」

きつと頭のいい子で、自分の家の状況を理解しているのだろう。

「……何かお礼ができたらいいいんだけど、実は情けないことに破産してしまつてね。この屋敷もじきに売り払わなければならないんだ」

エドバン家の当主は申し訳なさそうに言う。

「エルザの身代金ですら、まともに払うことができないような状況だつたんだ……」

もしフィリアがいなければ、娘が奴隷として売り払われていたかもしれないそうだ。

「ちなみにどんな事業を？」  
「実はカジノを経営していてね」

へー、それは奇遇だ。俺も最近かなりカジノにお世話になってる。がっぽり儲けさせてもらつてるからな。

幸運・極 スキルのある俺は、今のところどんなゲームをやっても負けなしだ。

イカサマではないかと疑われたほどだが、幾ら調べてもらつても証拠なんて出ない。だつてただの運だから、出るはずがない。

まだ稼いだ金を半分くらいしか支払つてもらつていないんだが、しつかり請求しないとな。

「ずっと順調だつたんだが、とんでもない賭博師が現れてね……」  
「なるほど」

「どんなゲームをやっても絶対に負けないらしいんだ」

「……ん？」

「最初はイカサマを疑ったのだが、どんなに調査してもそんな様子はない」

「……」

「その賭博師の手に掛ければ、一年の売り上げをたった一日で稼がれてしまうほど……それでこの有様だよ。　　ん？　どうしたんだい？」

はい。

どう考えても間違いありません。

「その賭博師、俺だ」

調子に乗ってやり過ぎました。  
ごめんちゃい。

## 第52話 久しぶりのクエスト

「カルナさん、いつまで寝てるんですか？ もう昼ですよ」

俺が宿の部屋で昼まで寝ていると、ティラが呆れた様子で起こしてきた。

「ティラと一緒に寝てくれたらすぐ起きる」

「嫌です。そもそも言ってることが矛盾してます」

俺はしぶしぶ身体を起こしたが、

「あゝ、ギャンブルができないと力が出ない……」

「……完全にダメ人間の台詞ですね」

先日的一件もあって、俺はギャンブル禁止令を出されてしまったのだ。

確かにあれ以上やり続けていると、この都市のカジノが壊滅してしまうだろうが、ギャンブル依存症になりかけていた俺には辛いことだった。

『むしろ症状を治すための良い機会かと』

「でもギャンブルしたーい。全財産を賭けたときの、あのドキドキ感をもう一度味わいたーい！」

「どんなやり方してたんですか！？」

結局は 幸運・極 のお陰で勝つただけだな。

でも、もしかしたら……って考えると凄いプレッシャーがあつて、

その感覚が病み付きになってしまふ。  
もちろん勝ったときの爽快感も最高だが。

「逆に一度破産して酷い目に遭って見た方がいいんじゃないですかね……」

と、ティラは溜息を吐いてから、

「今日はみんなで久しぶりに冒険者ギルドにでも行ってみませんか？　息抜きにちょうどいい依頼があるかもしれないよ」

という訳で、俺たちはメルシアの冒険者ギルドにやってきた。

今日はメンバーが全員揃っている。  
そろそろと女連れ子供連れなので、やはり冒険者たちの注目が集まってしまふ。しかも美女揃いなので、むさい男どもが羨ましそうだ。

「よ、よかつたら俺らのパーティに入らねえか？」

中にはいきなり勧誘してくる輩おこいがいた。

しかも声を掛けた相手はよりにもよってルシーファだ。

彼女はこれ見よがしに鼻を摘まんで、

「近づかないでいただけませんか？　あまりの悪臭のせいで、わたくし鼻が曲がりそうですわ」

「なあっ!？」

そして辛辣極まりないルシーファの言葉に瞬殺されている。可哀想に。

「もちろん女性冒険者なら臭くても大歓迎ですわ! エレンさんの筋トレ後の脇のにおいとか最高ですよ! ハアハア……」

「あ、あたし、いつもそんなに臭っていたのか……っ!？」

「……恥ずかしいので一刻も早くその会話はやめてください」

掲示板前までやってきた。

見渡してみるが、どれもことかDとか、低ランクの依頼ばかりだ。

「おっ、けどこれなんかいいんじゃないか？」

【依頼ランクF】コスプレモデル募集

女性冒険者限定。美人限定。色んな服を着て写真を撮影させていただきます。報酬：金貨一枚。

「素晴らしいですわ! ティラ様があんな服やこんな服を……ぐへ」

「着ませんから。ていうか、何で冒険者にこんなこと依頼してるんですか……」

結局、ティラの強い反対により却下されてしまっ。

「カルナ。この依頼、受けるべき」



シロが下の方に張ってあった依頼を指差した。

【依頼ランクC】ビーチの魔物の討伐

ヌーデイストビーチに現れた海の魔物を討伐してください。早く裸になりたいです。報酬：金貨三枚。

「素晴らしいですわ！ 一糸まとわぬ姿のティラ様が砂浜で……ぐへへ」

「そういう依頼じゃないですよね！？ ……いずれにしても、そんな下品なビーチは早く潰れるべきです」

「それはだめ。裸になれる場所は必須」

「あなたはどこだろうと勝手に脱いでるじゃないですか？……」

これもまたティラの強い反対で却下となった。

「むっ。カルナ、この依頼なんかどうだ？」

今度はエレンが別の依頼を示してくる。

【依頼ランクD】筋肉自慢急募

初開催のボディビル選手権と一緒に盛り上げてください。鍛え上げられた冒険者の筋肉が必要です。報酬：金貨二枚。成績次第で追加報酬あり。

「エレン、完全にお前の趣味だろ」

「素晴らしいですわ！ 全身の筋肉という筋肉を余すところなく見

せるには、やはり全裸で挑むべき」

「何でもかんでもそういう方向に持っていけないでくれませんか？」

これは俺とティラが反対して却下。ぶっちゃけ出場者は野郎ばかりだろうし、野郎の筋肉なんて興味がない。

「Sランクの依頼はないのか」

『さすがにめったに出されるようなものではありません』

せめてSとは言わずとも、AとかBくらいの依頼はないものだろうか。

とちょうどそのとき、タイミングよく新しい依頼が張り出される。

【依頼ランクA】古城の調査および討伐

フラム村西の丘上にある古城に、危険度A相当の魔物である吸血鬼が棲み付いたとの情報あり。調査をお願いします。報酬：金貨5枚。吸血鬼の討伐で金貨20枚。なお、古城はダンジョン化しているためご注意ください。

「よし、これにしよう」

「は、反対だ！」

エレンが大声で異を唱えてきた。

「何でだ？」

「ききき、危険だからだ！ 吸血鬼と言えば、アンデッドの王とも言われるほどの魔物なのだぞ！」

「要するにアンデッドモンスターが怖いんだな」

「べべべ、別に怖くないぞっ!？」

「じゃあ大丈夫だな。よし、決定」

エレンの顔が真っ青になる。

「ままま、待てっ! あたしは別にいいのだ! ゴーストやゾンビなど、これっぽっちも怖くないのだから! だがフィリアもいるのだ! 子供をアンデッドモンスターの巣窟になっているだろうダ  
ンジョンに連れて行くなど、もっての他だろう!」

「フィリアは全然怖くないよな?」

「うん! だいじょーぶ!」

「ほ、本当に大丈夫なのか? 夜眠れなくなるんだぞ!? 一人でトイレに行けなくなってしまうのだぞ!？」

「おい、エレン……今、後ろに」

「ぎゃああああっ!？」

「嘘だつて」

高所恐怖症だったりもするし、こいつ弱点多いよな……。

「おお、これは雰囲気のある城だな」

「……ですね」

「ん」

本当に吸血鬼が住んでいそうな古城だった。

立派なお城なのだが、外壁は蔦で覆われ、庭は荒れ放題。城全体に澱んだ気配が満ちていて、時折カラスの鳴き声が聞こえてくる。そして今にも雨が降り出しそうな曇天の空が、それに拍車をかけていた。

「エレン、大丈夫か？」

「……ダイジョウブナノダ」

返事が片言で返ってきた。大丈夫じゃなさそうだ。

「たのしそーっ！」

一方フィリアは目をキラキラさせている。彼女にとっては遊園地のアトラクションのような認識なのかもしれない。

「フィリアちゃん、一人で勝手に行くと迷子になりますよ」

「はい！」

朽ち果てた庭を走り回るフィリアに、ティラが注意している。……本当に遊園地に来た母娘のようなやり取りだな。

崩れた城門を潜り抜け、俺たちは城内に入った。ダンジョン化しているとのことなので、恐らくモンスターが現れることだろう。俺の探知・極 スキルにも反応がある。

「出るな、出るな、出るな……」

ぶつぶつとエレンが呟いている。そんなに怖いのか……。

「安心してくださいまし、エレン様。天使であるわたくしの手に掛

かれば、アンデッドモンスターなど一瞬で昇天させることができずわ。もちろん、ティラ様の手に掛ければわたくしも一瞬で昇天してしまいますけれど」

「後半の補足どう考えても要りませんよね？」

本人が言う通り、天使はアンデッドモンスターに強い。

俺にも 死霊術・極 スキルがあるし、幾らアンデッドモンスターが出ようと敵ではないだろう。

「う〜〜あ〜〜」

「っ！」

前方から呻き声が聞こえてきたかと思うと、柱の陰からふらふらと人影が現れた。

ゾンビだ。

「ぎゃあああああっ！ 出たあああああっ！」

悲鳴を上げたエレンが俺に抱き付いてくる！

「昇天させて差し上げますわ」

ルシーファが天力を使い、ゾンビを浄化させようとする。

「待った。もう少しこのエレンの胸の感触を堪能したい」

「っ！ なるほど、その手がありましたか。さすがですわ、カルナ様」

「早く！ 早くどうにかするのだああっ！」

「エレン様っ、次はわたくしにつ、わたくしに抱き付いて下さいませ！」

「……何やってるんですか……。ゾンビが反応に困ってますし、早く対処してあげてください」

騒ぎ立てる俺たちを前に、ゾンビはどことなく困ったように突っ立っていた。

### 第53話 ヴァンパイア

「うう……お願いですから、出ないでください……」

情けない呻き声を漏らしながら、薄暗い廊下を一人の女性が歩いていた。

漆黒のローブに身を包み、頭にはとんがり帽子。  
典型的な魔法使いの格好だ。

しかしローブ越しにも分かるほどに胸部は豊かで、足が長い。  
スタイルは抜群で、容姿も端麗。

地味な服装であるにもかかわらず、それを覆すほどの華やかさを  
醸す美女だった。

そんな見た目とは裏腹に、びくびくびく、と彼女は挙動不審めい  
た様子で進んでいく。

「いくら学院長命令だからって、なんでわたしが一人でこんなダン  
ジョンに来なくちゃならないんですかあ……。こんなの職権乱用で  
すう……。そんなんだから、鬼畜ババアなんて陰で言われるんです  
よあ……」

ぶつぶつと恨み節を吐き出しながら、おっかなびっくり前進して  
いると、

「うーあー」

「ひいひいっ！ 出たあああっ!？」

突然、曲がり角からゾンビが姿を現した。

「うええっ、何で目玉が飛び出してるんですかあっ！」

「ああああ〜」

「う〜〜〜」

「他にもいたあっ！」

一体だけではない。さらに四、五体、遅れて姿を見せる。いずれ劣らぬ悍ましいアンデッドモンスターたち。

盛大に吐気を催しつつも、彼女は必死に魔法を発動した。

「ブレイズウェイブ！ ブレイズウェイブ！ ブレイズウェイブ！  
ブレイズウェイブうううっ！！」

中級の火魔法の連射によって、ゾンビたちは瞬く間に燃え上がった。  
肉をこんがりと焼いて、後に残ったのは炭化した骨だけ。

「も、もう動かないですよね……？ 嫌ですよお？ いきなり『うあー』とか言って襲い掛かってきたら、わたし、盛大に漏らしちゃう自信がありますからねっ？」

完全なオーバーキルだったが、女性は慎重にその骨の脇を通り抜けた。

と、そのときだった。

廊下の向こう、暗がりの中に人型のシルエットが浮かび上がる。

「ひっ、また出たあっ？ もうやめて あれ？」



首を傾げる。

というのも、こちらへ歩いてくるその人影が、アンデッドモンスターとは思えないしっかりとした足取りをしていたからだ。

やがてその姿を完全に捉えると、彼女はホッと安堵の息を吐いた。

「よ、よかったぁ……わたし以外にもこのダンジョンに挑んでる人がいたんですね……」

白髪の青年だった。

ゾンビのように肉が腐っていたり、スケルトンのように骨だけだったり、あるいはゴーストのように身体が透けていたりしない。ちゃんとした肉体を持つ人間だ。

「あ、あの、実はわたし、このダンジョンで入手できる素材を探してるんです……。で、できれば」

「ああ、なんて美しいんだ」

「へっ？」

いきなり「美しい」なんて言われ、彼女は面食らう。

もちろん初対面とは言え異性からそんなふうに褒められて嬉しくない訳ではないが、何か嫌な予感がした。

「どうだい？ 君は老いという醜い枷から解き放たれ、その美しさを永遠に保ち続けていたいとは思わないかい？」

「そ、それって、どういう……？」

白髪の青年は大きく腕を広げ、爛々と目を輝かせながら告げたのだった。

「僕は死を超越せし吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>。ぜひとも君を僕の眷属にしてあげようじゃないか！」

「ゾンビよりヤバい相手に出会ってしまったあああっ!？」

「昇天してくださいな。バニッシュ」

ルシーファが放つ天力の光に触れると、それだけでアンデッドモンスターが次々と天に召されていく。

「まるで天使のようだな」

「失敬ですわね。わたくし、正真正銘の天使ですわ」

ゾンビの群れを一掃したルシーファは、純白の翼を広げながら長い髪を優雅にかき上げる。その仕草だけを見ていると確かに完璧な天使なのだが……。

「……ティラ殿、もう大丈夫だろうか？」

「はい。すべていなくなりましたよ」

黒い布で頭部をすっぽりと覆っているエレンが、恐る恐る顔を出す。周囲にアンデッドモンスターがいないことを自分の眼でも確認してホッとしている。

「エレンママ、どくろー!」

「ぎゃあああつ!？」

そこへ骸骨を頭に被ったフィリアがぬつと横から現れ、エレンが甲高い悲鳴を上げた。

「フィリアちゃん、そんなものどこから持ってきたんですか!」

「そこにおちてたー」

「ダメですよ。ちゃんと捨ててきなさい」

「はい!」

「大丈夫です、エレンさん。今はフィリアちゃんです」

「ほ、本当かつ?」

エレンは布の中に頭を隠して床に蹲っていた。  
おっかなびつくり立ち上がる。

「べ、別に怖い訳ではないのだけどな? 怖い訳ではないのだが…

…」

「エレンさん、そこはもう認めてください」

「うう……」

視界を遮断したエレンは、先ほどからティラに手を引っ張ってもしらないながら移動していた。もう完全に強がっても仕方がないレベルだ。

「ママー、ぞんびさんこわくないよー?」

「子供には怖さが分からないのだ!」

「普通それ逆じゃないか?」

「むっ、虫だつて子供の頃は平気だが、大人になったらグロテスクだと気づいて嫌いになる者も多いだろう!」

意外と説得力があるような気がすることを言うエレンである。

「ただのアンデッドモンスターでこれですし、吸血鬼に遭遇したらどうなるんでしょうね……」

ティラが半ば呆れた様子で言う。  
エレンは子供の用に耳を塞いだ。

「きーきーたーくーなーいー」

「安心しろ、エレン。吸血鬼の見た目は普通の人間と変わらないからな」

「あーあーあーあーあーあーあー」  
「聞いてねー」

怖がるエレンを連れて、俺たちはさらに古城の奥へと進んでいく。

「おっ、なかなかの大物が現れたぞ」

ワイトA

種族：ワイト族

レベル：45

スキル：死霊術 呪術

「ワイトですわね。アンデッドの中でも上位の魔物ですわ。弱い人間なら近づいただけで死んでしまいますの」

「あーあーあーあーあーあー」

「エレンさん、うるさいので黙っていてください」

ワイトがこちらに気づいて近づいてくる。

見た目は木乃伊だ。身体中から禍々しいオーラが吹き出し、水分を失った唇が何やら呪詛めいた言葉を吐き出していた。

「バニツシュ。……はい、昇天させましたわ。エレンさん、もう大丈夫ですわよ」

しかしルシーファの手に掛かれば、上級アンデッドも一瞬で天へ召されていく。

塵ひとつ残らず掻き消えてしまった。

「ほ、本当か？ 本当にもういないのだなっ？」

耳を塞いでいた手をどけるエレン。

そのときだった。

ああああああっ！

どこからか悲鳴のようなものが聞こえてきた。

「今、悲鳴が聞こえませんでしたか？」

「ん、聞こえた」

「ひっ、悲鳴！？ ギャああああああっ！」

「エレン、お前の悲鳴の方がよっぽどかいぞ」

探知・極 スキルで調べてみる。

「お、生きている人間の反応があるな」

「行ってみましょう！」

俺たちは声がした方へと急ぐ。

エレンを無理やり引っ張り、途中で遭遇したアンデッドを昇天させながら辿り着いたのは、ダンスパーティーでも開けそうな広い部屋だった。

『気を付けてください、マスター』

「分かってるって。……おい、そこにいるやつ出て来いよ」

俺は虚空に向かって呼びかける。

探知・極 スキルがはつきりとそこにいる存在を感知していた。

不意に、霧のようなものが収束して人の姿を形作っていく。

「へえ、よく分かったねえ」

薄ら笑いを浮かべて現れたのは、白髪青年。  
もちろんただの人間ではない。

「お前が吸血鬼だな」

「ふふふ、その通り。だけど、今日はツいているねえ。こんなにも僕の眷属に相応しそうな」

「残念ですわ。男ですの……」

何かを言いかけた吸血鬼だったが、その前にルシーファが天力の光を放った。

「バニツシュ」

「ぎゃあああああっ!?!」

……せめて話くらい最後まで聞いてあげようぜ?

### 第53話 ヴァンパイア（後書き）

現在、下記の作品も同時連載中です。よろしく願いします。

『邪神無双』邪神が黒い笑顔で人助けを始めたようです』

<http://ncode.syosetu.com/n2123do/>

## 第54話 エルフのお師匠様

ダンジョンの奥で遭遇したのは白髪のイケメン吸血鬼だった。

レクイエムヴァハール

種族：吸血鬼族

レベル：63

スキル：吸血 霧化 操血術

「今日はツいているねえ。こんなにも僕の眷属に相応しそうな」

「バニッシュ」

「ぎゃああああっ!？」

気取った態度で何かを言いかけるものの、ルシーファに容赦なく天力の光を浴びせられ、吸血鬼は大きな悲鳴を上げた。

だがさすがは高位のアンデッド。一撃では昇天されないようだ。

「い、いきなり攻撃してくるなんて酷いじゃないか!？ だ、けど、僕は不死身の吸血鬼だ。この程度の傷、すぐに治……………治らないッ!？ まさか、この光は……………」

吸血鬼はルシーファの正体に気づき、愕然と目を見開く。

「貴様は天使……………っ!？ なぜこんなところに……………っ!」

「吸血鬼などに教える義理はありませんわ。早く消えてくださいませ」



ルシーファはいつになく冷たい声音で断じる。  
天使にとって吸血鬼は忌むべき存在だからな。

吸血鬼は先ほどのまでの余裕が嘘のように慌て出した。

「ま、待ってくれ！ 見逃してくれ！ まだ僕は死にたくない！」

「エクスプルシオン」

「ひぎゃあああああつ！？」

さらに強力な浄化の光を浴び、吸血鬼の身体が見る見るうちに消失していく。

もがき苦しみながらやがて消滅してしまった。

「大物っぽい雰囲気が登場したのに、瞬殺かよ……」

ちょっとだけ吸血鬼に同情しなくなってしまった。

「……残念でしたわ。美少女吸血鬼であれば見逃して差し上げましたのに」

そしてルシーファの男女差別が酷い。

「こ、これで任務完了だろう！？ すぐにギルドに報告に戻るのだ！ きつとあたしたちの帰りを待っている！」

「エレンさん、怖いからってそう急かさないでください。さっきの悲鳴が気になります」

「ん、あそこに何かいる」

シロが指差す方に視線を向けると、確かに誰かが床に倒れていた。

「見た感じ、ゾンビではなさそうですが……もしかして先ほどの悲鳴の主でしょうか？」

「うう……」

近づいてみると、呻き声を漏らしながら身を起こした。

「あ、あれえ……わたし、こんなところで何をしてたんでしょう……？」

「だいじょーぶ？」

「ひゃあっ！？」

フィリアが声をかけると、その人物は悲鳴とともに座ったまま二十センチほど飛び上がった。

「た、食べないでえ！ わたし、美味しくないですう！」

「食べません。安心してください、私たち人間ですから」

「ほえっ？」

ティラの言葉に頓狂な声を漏らし、恐る恐るこちらを向く。

「よ、よかったあ……」

大きく安堵の息を吐き出している。

その舌足らずな口調から子供っぽく思えるが、実際には美女と形容してもいいだろう大人の女性だった。

綺麗な金髪に端正な小顔。

背が高く、細身ですらりとしていながらも胸はしっかり膨らんだモデル体型。

そして耳が少し尖っている。

エルフ……ではなく、どうやらハーフエルフのようだ。

「それよりこんなところで何をされているのですか、リシエル先生」

「うう、実は鬼ババアに命令されて、このダンジョンにしかない素材を　　へっ?。」

女性はティラを見上げ、目を丸くした。

「お久しぶりです、先生。八年ほど前、エルフの里で魔法を教わったティラです。族長ディアスの娘ですが、覚えておいでですか?」

彼女はティラの知り合いだったらしい。

だが当の本人は盛大に汗を掻き、思いつ切り目を逸らしながら否定した。

「ななな何のことでしょう?　ににに似ているだけの別人ではない

ですかあ?　わたし、リシエルなんてハーフエルフ、見たことも聞いたこともありませんけどお……?」

「おかしいですね。この帽子にリシエルっていう刺繍がされていますが?」

「しまったあ!？」

どうやら自分の持ち物に名前を書いておくタイプらしい。

「うう、まさかこんなことでバレてしまうなんて……」

「いえ、それが無くてもバレバレですけどね……。何で嘘ついたんですか……」

呆れ顔のティラ。

女性      リシエルは涙目になって、

「だ、だってえ！　こんな見苦しいところを弟子に見られたなんて、恥ずかし過ぎですう！　頼りになるしっかり者のリシエル先生で通っていたのにい！」

「当時から気づいてましたよ？　先生が色々と抜けた方だということとは」

「ふええええっ！？」

随分と残念な感じの人だな。

「エレンと同じ残念系美人か。キャラが被ってるな」

「あ、あたしはここまで酷くないぞ！？」

「どの口が言うんだよ……」

ティラが改めて彼女のことを紹介してくれる。

「リシエル先生は魔法のエキスパートで、有名な魔法学校で教師をされています。前にエルフの里に立ち寄られた際にご指導いただいたことがあるんですよ」

「リ、リシエルですう……その、お恥ずかしいところを見せてしまいましたぁ……」

リシエル    37歳

種族：吸血鬼族

レベル：43

スキル：    雷魔法

火魔法

風魔法

回復魔法

37歳なのか。

ハーフとは言え、やっぱりエルフの血が混じっているから若く見えるんだろうな。

そして確かに魔法使いとしては中々の実力のようだが……

「もう素材とかどうでもいいので、こんなところは一刻も早く出たいですう……」

「いいんですか？ 学校の上司からの命令では？」

「う……じ、実はそうなんです……。しかも学院長直々の命令で……。でも、こんな目に遭ってるのに時間外手当すら出ないんですよあつ！ 酷いと思いませんかあ！？」

リシエルは半べそを掻きながら切々と訴えてくる。

……ブラックな学校のようにだ。

「けど、そのまま外に出ると太陽の光で激痛に襲われるぞ」

「へ？」

「吸血鬼化してるから」

「ふえええつ！？」

俺が教えてやると、リシエルは顔を真っ青にした。

いや、最初から血の気が感じられなかったが。

あの吸血鬼に血を吸われ、眷属にさせられてしまったらしい。

よく見ると牙も生えていた。

「ううううつ、最悪ですう……こんな身体じゃ結婚もできないじゃないですかあつ！」

「心配するのはそこですか……？ 結婚云々以前にそのままじゃ討伐されてしまいますよ？」

「はっ！？」

リシエルは愕然としたように目を見開いた。

「まだ死にたくないですう！　どうしたらいいんですかあっ！？」

そんな彼女を哀しげに見下ろし、ルシーファが嘆息する。

「吸血鬼となれば、天使として見過ごすわけにはいきませんわね…

…」

「ひいいいっ！」

尻餅について情けなく後ずさるリシエル。

「ですが美人なので見逃しますわ！　いえ、むしろわたくしがあなたを傍でお守りして差し上げますの！　ぐへへへ……」

やはりこいつの男女差別は酷い。

「安心しろ。俺が元に戻してやるから」

「ほ、ほんとですかあっ？　お願いしますう！　何でもしますからあ！」

リシエルは救世主を見つけたような顔で俺に縋りついてきた。

『死霊術・極　で生者に戻す、回復魔法・極　で蘇生する、時空魔法・極　を使って彼女が吸血鬼化する前まで時間を巻き戻す、など方法は幾つかあります』

まだ吸血鬼になって間もないようだし、時間を巻き戻すのが一番手っ取り早そうだな。

リシエル 37歳

種族：吸血鬼族

ハーフェルフ族

よし、上手く行ったぞ。

第55話 一人でトイレに行けない37歳

リシエル 37歳

種族：吸血鬼族

ハーフエルフ族

「これでよし、と」

吸血鬼化していたリシエルが元のハーフエルフへと戻った。  
青白かった顔に血色が戻り、口の牙も無くなる。

「ほ、本当に戻ったんですかあっ!？」

「ああ」

「ふええっ、ありがとうございますううっ!」

リシエルが感極まったように俺に抱き付いてくる。

こうして立ち上がると、こいつ俺よりも背が高いんだな。

俺は少ししゃがんで、彼女の大きな胸に顔を埋めてみた。

「何やってるんですか（怒）」

ティラに杖で頭を叩かれた。

「よかったですね、リシエル先生」

「うううう、これで学校に戻ることができます……」

「よしよし、よかったねー」



シロに肩車してもらったフィリアが、涙を流すリシエルの頭を優しく撫でている。

どっちが子供だか分からないな。

「それで素材の方はどうするのですか？」

「はうう、そうでしたあ……。……頑張ったけれど、見つからなかったことにしたらダメですよね……。？」

「私に訊かないで下さいよ……。？」

ティラは溜息をついて、

「ちなみにその素材というのはどんなものなんですか？」

「実は、こうしたアンデッドモンスターが巢食うような場所でしたか手に入らない、貴重な素材で……。？」

「どうやら“怨念の宝玉”という素材らしかった。

様々な負の感情が凝縮することで、時に宝石のような塊が生まみ出されるらしい。

「随分と物騒な素材を探しているんですね」

「ナビ子さん、どこにあるか分かるか？」

『そうですね……。このダンジョンですと、恐らく最奥のボス部屋にある可能性が高いかと』

高位のアンデッドモンスターほど、強い怨念を持っているかららしい。

「じゃあ、ボス部屋を目指そう」

「ふふふつ、見るのだ！　これならアンデッドモンスターも怖くない！　完璧だろう！」

ボス部屋へと向かう途中、一体どこで見つけたのか、エレンが全身トアーマー鎧を身に着けていた。  
ティラが半眼で訊く。

「どうしたんですか、それ……？」  
「廊下に飾ってあるのを見つけたのだ！」

先ほどまでの怯えた様子はどこへやら、エレンは元氣よく甲冑越しに胸を張った。

お化けを怖がっていた子供が、布団を頭から被って安心するのと同じようなものなのだろう。

俺は教えてやった。

「エレン、それ呪われてるぞ。動く鎧だ」

「っ！？　ぬ、脱げない！？　うわあああつ、耳元で呻き声が聞こえてくる！？　助けてくれええっ！」

ほんとアホだな、こいつ。

すぐに呪いを解呪してやったので普通の鎧に戻ったが、エレンは怖がって捨ててしまった。

「あのお……すごく言い難いんですけどお……」

さらにしばらく進むと、おずおずとリシエルが手を上げて言った。

「と、トイレに、行きたくなってしまいましたあ……」

もじもじと下半身の辺りを気にしている。かなり我慢していたらしい。

『その角を曲がって少し行けばトイレがあります。ただ……』  
「使えないだろ？」

『はい。水が流れません』

「ということは、どこでも一緒だな。その辺で適当にすればいいと思うぞ。ほら、あの柱の陰とか」

俺がそう提案すると、リシエルは涙目で訴えてきた。

「そ、そんなの嫌ですよっ！　いくら廃城と言っても雰囲気的にちゃんとトイレでやりたいですう！」

「……ちっ」

「今もしかして舌打ちしましたあっ？」

俺たちはナビ子さんのナビに従ってトイレへ。

そこは廊下よりもいっそう陰々とした空気に満ちていて、俺でもちよつと利用するのに躊躇してしまうほどだった。

「うううっ……お願いですう！　ティラさん、一緒に付いてきてくださいい！」

リシエルがティラに泣き付いた。

「いやそこは俺が」

「いえ、わたくしが」

「あなた方は黙っていてください！……分かりました、付いていきますから。って、押さないでくださいっ。何で私を先頭にしてるんですかっ？」

「だ、だつてえ……」

完全にリシエルの方が子供に見える。  
やがて個室の手前まで来たところで、

「ちゃんとここで待つてますから」

「中まで来てくれないんですかあっ！？」

「さすがにそこまでできませんよっ！」

「じゃあ俺が！」

「いえわたくしが！」

「お二人はトイレ内に入って来ないでください！」

リシエルがおっかなびつくり個室のドアを開けた。

ギィ、と錆びついた金属音が鳴り響く。

「な、何も出ませんよね……？ 嫌ですよお？」

『ご安心を。この場所にアンデッドモンスターの反応はありません』

「そ、そうですね……良かつ　って、今の誰の声ですう！？」

そう言えばさつきから声の数が一人分多くないですかあっ！？」

今さらナビ子さんの存在に気づいたらしい。

「リシエル先生。後で説明しますから早く済ませてください」

「ううう、分かりましたあ……あの、ドアを開けたままでもいいですかあ……？」

「ダメです」

「ティラさんが厳しいですう……」

リシエルはしぶしぶドアを閉めた。

「ティラさん、そこにいますよね？」

「……」

「い、いますよね？ ……あの、ティラさん！？ ティラさあああ  
ん……」

「ちゃんといますから！」

「お約束だと便器の中から手が出てくるんだよねー」

「ひいっ！？」

「カルナさん、ワザと怖がらせないでください！」

「ティラ様！ いかがですの、お師匠様の排尿音は！？」

「変なこと聞かないでください！」

やがて無事に用を足したらしく、リシエルが個室から出てくる。

「はあああ、すつきりしましたあ……」

「……そうですか」

さて。

寄り道も済んだし、先に進もう

「……ま、待ってくれ！」

としたところ、不意にエレンが呼び止めてきた。

なんだなんだと振り返る俺たちに、彼女はもじもじしながら言ったのだった。

「あ、あたしも、したい……」

一緒に済ませろよ。

ボス部屋に辿り着いた俺たちを待ち構えていたのは、ワイトよりも強力な怨念を撒き散らす木乃伊だった。

ワイトキング

種族：ワイト族

レベル：65

スキル：死霊術

呪術

魔力吸収

「死者ノ領域ニ、何用ダ、生者ドモ……」

「こ、こいつ、しゃべったぞ!？」

「ワイトキングだな。吸血鬼にも劣らない、最高位のアンデッドモンスターだ」

「気を付けてください。精神力が弱いと、声を聞いただけで霊界へと引き摺り込まれてしまうと聞いたことがあります」

「ひえええっ、こんな相手とどうやって戦うんですかあっ!？」

「エクスプルシオン」

「バ、馬鹿ナ……コノ我が……ッ!？」

例のごとくあっさりとルシーファによって浄化された。  
ボスモンスターエ……。

「えっ、えっ？ 消えちゃいましたあ……？」

リシエルがぼかんとしている中、俺はワイトキングが手にしていた杖が地面に落ちているのを発見する。

・憎悪の宝杖：魔力＋５３０

この杖の先端に、禍々しい色をした宝石のようなものが付いていた。

・怨念の宝玉

「どうやら怨念の宝玉を使って魔法杖にしていたみたいだな」

「こ、これで素材を持って帰れますう！」

「あ、待て。直接触ると呪われるぞ」

嬉しさのあまり飛び付こうとしたリシエルを慌てて制する。

「そ、そうでしたっ。これに入れて持ち帰るように言われていたんですしたあ！」

リシエルは腰に下げていた巾着袋のようなものから、ごくごく小さな箱を取り出した。

手袋をして、その中に宝玉を入れる。

「これで任務完了ですう！」

ダンジョンを脱出すると、改めてリシエルが礼を言ってきた。

「本当に助かりましたあ。これで鬼ババ　学院長先生もわたしへの評価を改めてくれるはずですよ！」

「良かったですね、先生。ですが、任務は帰るまでが任務です。せっかく苦勞して手に入れた素材を、途中で落したりしないでくださいね？」

「い、言われなくても分かってますよお！」

「久しぶりにお会いして、正直かなり心配になってしまいましたので」

「うう、いつの間にか、ティラさんがわたしの先生みたいになってますう……」

実際、ティラの方がよっぽど先生らしい。

「それはそうと、俺たちもその魔法学校とやらに行ってみてもいいか？」

魔法学校と言えば、異世界モノではお約束の展開だ。

入学するのは色々と面倒そうだし遠慮するが、ぜひ一度どんなところか見てみたかった。

……ちよつと気になることもあるしな。

「皆さんであればぜひ歓迎しますう！　ふふふつ、わたしの先生らしいところを見せて差し上げますよお！」



## 第56話 魔法都市

「な、な、な、何なんですかぁ、これは!？」

NABIKOを前に、ティラの魔法の師匠、ハーフエルフのリシエルが驚きの声を上げた。

「中に入れるんですかつ？ えええつ、広い!？」

キャンピングカータイプの車内に入った彼女は目を丸くしている。

『ようこそ、NABIKOへ』

「ひえええつ、どこからともなく声が!？ もしかしてゴースト!？ ゴーストですかあっ!？」

いちいち反応が大きくて面白い。

『ゴーストではありません。わたくしはナビ子と申します。以後、お見知りおきを』

「は、はぁ……こ、こちらこそ……?」

リシエルが目をはちくりさせながら曖昧に頷きを返している。生憎、この世界の人たちに 道案内・極 スキルであるナビ子さんのことを正確に伝えるのはちょっと難しい。

そもそも“スキル”という概念が一般的ではない。

中には 道案内 スキルを所持している人もいるそうだが、こうした人格めいたものまでは備わっていたりしない。

ティラたちだつて未だによく分かっていないだろう。

「動き始めましたあ！？　もしかしてこれ、魔導具ですかあっ？」

キャンピングカーが走り出し、リシエルがまた声を上げる。  
窓の光景が流れていくのを見ながら、彼女は呆然と呟いた。

「す、すごいですう……。自動で走る魔導具を作っている研究室が魔法学院にありますけど、こんな大きなものがこれほどの速さで……。まさか、伝説の古代文明のオーパーツ……。一体どこで手に入れたのですか……。？」

「俺が作った」

「えええええっ！？」

「ちなみに飛ぶこともできるぞ。ナビ子さん」

『畏まりました。第三形態へとトランスフォームいたします』

NABIKOが飛行タイプへと変形した。

両翼が出現し、離陸する。

「この方が早く目的地に着くぞ」

「飛んでますう！？　本当に飛んでますううっ！？」

しばらくの間、リシエルは窓に張り付いて、ひえー、とか、ふおー、とか喚き続けていた。

やがて落ち着きを取り戻し彼女はリビングのソファに腰掛けて、

「カルナさん、あなた一体何者ですかあ……。？」

「ただのランク冒険者だ」

「ただのランク冒険者が吸血鬼化した身体を元に戻したり、こん

な魔導具を作ったりできるわけないじゃないですかあっ！」

まあ、確かに。

「うちの学院にすれば、すぐにでも教授に昇進できますよおっ！  
……うう、羨ましいですう！ わたしなんて万年講師で、どんどん後輩に追い抜かれていってるというのに……」

涙目で俺を睨んでくるリシエル。

「そ、そうですね！ カルナさん！ ぜひわたしと一緒にこの魔導具を売り出しましょう！ きつと大儲けですう！ ああ、そうしたら学院を辞めて、面倒な授業や学生への対応からも、学院長や教授から理不尽な要求からも解放されますう……っ！」

「先生……」

「ハッ！？ い、今は嘘、嘘ですう！ だから学院長や教授には黙っててくださいいっ！」

ティラのジト目に気づいて、リシエルは慌てて前言を撤回した。

「け、研究、研究、楽しいなあ」

「……ワザとらしく誤魔化さないでください」

「ほ、ほんとですよお！？ 好きな研究ができるからこそ、あんな環境でも何とか学院に残り続けているんですからあ！ 薄給、イジメ、セクハラ、なんのそのお」

この人、意外と逞しいのかもしれない。

「ところで先生は今、何の研究をされているんですか？」

「ずばり、時間魔法ですう！ 幻の魔法と言われ、最近ではその存

在すら疑われているものですけど、わたしはきっと本当にあると信じてるんですう！　だって夢があるじゃないですかあ！　自由に時間を止めたり巻き戻したり！　それに空間魔法が存在するんですから、きっと時間魔法だってあるはずですよ！」

幻ねえ……。

『現在、時間魔法を使用できる魔法使いは存在しないということになっていきます』

俺、使えるんだけど？

『はい。マスターは　時空魔法・極　スキルをお持ちですので、時間魔法も使うことが可能です』

だよねえ。

「一生かかっても証明できないかもしれないかもしれません！　でも、わたしは生涯をかけて追究していききたいのですう！」

リシエルは鼻息を荒くし、熱く夢を語る。

……うん、俺が時間魔法を使えることは黙っておこう。  
ていうか、吸血鬼から元に戻す際にも使ったんだけどな？

「ちなみに時間魔法が使えたらどうしたいんだ？」  
「人生の絶頂期だった学生時代に戻りたいですよ！」

結構ありきたりな理由だった。

魔法都市リグレーン。

世界で最も魔法研究が盛んだとされている都市国家に、俺たちはやってきていた。

普通はそれなりに厳しい入国審査があるということだったが、リシエルのお陰ですんなり通ることができた。さすがは魔法学院の講師ということか。

『この都市の大半が幼い頃から魔法を学んでいます。その中で、この都市最高峰であるリグレーン魔法学院に入学できるのはせいぜい五パーセントほど。この学院で教職に就ける者となると、0・1パーセント以下といったところでしょう』

万年講師だと嘆いていたが、意外とエリートだったらしい。

「元々、リグレーン魔法学院はシャルーナ王国と呼ばれる国のいち研究施設だったんですけど、王国が滅びた後にこの施設だけが残って、新たに魔法中心の都市を作り上げたんですう。ですので、今でもこの都市の中心は学院で、学院長先生が都市の代表も兼任されてるんですよ。ほら、見てください！ あれがリグレーン魔法学院ですう！」

リシエルが指差す方向には、都市の真ん中に聳え立つ巨大な建造物があった。

「すごいな。建物全体に結界が張られてるぞ」

「レッドドラゴンのプレスにも耐えられる強力な結界ですよ！」

「……俺のワンパンで破壊できるけどな」

「ふええっ？　じよ、冗談ですよねっ？」

『可能です』

魔法都市だけあって、至るところで当たり前のように魔法が使われているようだった。

すぐ傍を竹箒に跨った少女たちが通り過ぎていく。

「おおっ、箒に乗って移動とか、魔法都市っぽい」

ていうか、この世界でも箒なんだな。

『箒での飛行はかなり古いものですが、どうやら一周回って最近の流行らしいです』

そうなのか。

てか、もつと高いところを飛んでくれたらスカートの中を覗けるんだけどなあ。

『残念ながら出力の問題であれ以上の高さを飛ぶことはできません』

残念過ぎる。

怪しげな魔導具や魔法の素材などが売られていたり、露店の雰囲気もこれまでの都市にはないものだった。

「魔導具の製造はこの都市の重要な産業なんですよあ。小規模な工房も沢山あって、日夜色んな商品が開発されてるんですう」

「へー。あの人形も？」

「あれは最先端の魔法技術を利用して作られた人形ですね！　なんと、こちらの言葉に返事を返してくれるんですよ！」

とある露店に置かれていたのは、ビスクドールのようなちよつとリアルなタイプのお人形さんだった。

フィリアが近づいていくと、

「コンニチワ」

「しゃべったーっ！」

「オナマエ、オシエテ」

「フィリアはね、フィリアなの！」

「フィリア。ヨロシク。ワタシ、アンネロッテ」

「あんねろってー。よろしくーっ！」

「ヨロシク」

そのやり取りを見ていた初老の店主が、自慢げに笑った。

「はっはっは、気に入ってくれたかい、お嬢ちゃん。賢いだろ、アンネロッテは。儂が作ったんじゃぞ」

「しゅごーい！」

……今あなたが話しているその少女も、魔法で動いてる人形なんだけだね？

てか、どの露店のどの商品も大したものじゃないな。

俺が作れば遥かに性能の高いものができあがるだろう。

『この都市の魔法技術のレベルが低いのではなく、あくまでもマスターが異常なのだということをお忘れないようお願いします』

どうやらそういふことらしい。

特に惹かれる商品も無かったので、適当に冷やかしつつ進んでいくと、

「……何だ、この気配は？」

俺の察知スキルが異様な魔力を感知した。

一瞬遅れて、ルシーファもまた何かを察知したらしい。

「どうやら悪魔のようですね」



## 第57話 上級悪魔

魔法都市は騒然としていた。

その原因となっているのは、突如として町中に出現した悪魔の群れだった。

「あ、悪魔だっ！」

「早く逃げろ！      っ！？      か、身体が……？」

逃げようとする人々が、一斉にその動きを止める。

「ふふふ、まさかこの私から逃げられるとでも？」

下級の悪魔たちを従えながら、そう楽しげに笑ったのは、背中に漆黒の翼を生やした人型の悪魔だった。

その名はハーバル。

爵位こそ持たないものの、上級悪魔の一体に数えられていた。

そしてハーバルの特技は、自分の思い通りに相手を操る魔法。

魔法都市の住民とは言え、上級悪魔の膨大な魔力に逆らうことはできない。

「た、助けてっ……」

「やめてくれええっ！」

身体が動かないのが悪魔の仕業だと知った人々は、これから己の身に起こる事態を想像し、恐慌に陥っていた。

「皆様、ご安心を。この私、下級の悪魔とは違い、収穫したそのま  
まを汚く喰い殺すような真似は致しません。ちゃんと料理してから  
美味しくいただいて差し上げますから」

ハーバルは大袈裟に両腕を広げてみせると、歌うように告げた。

「さあ、まずは服を脱ぎましょうか」

男も女も子供も、ハーバルの魔法に抗うことはできず、屈辱と恥  
辱に顔を歪めながらも服を脱いでいく。

一系まとわぬ裸体が悪魔の前に並んだ。

ハーバルは舌なめずりして、

「ああ、やはり新鮮な食材は美味しそうですね！ 特にその若  
いお嬢さん、ほど良い脂肪が乗っていて、実に私好みの身体をして  
おられます。うーむ、悩みますねえ。生のまま刺身にするか、ステ  
ーキにするか」

どこからともなく出現した巨大なナイフが、悪魔の手元でキラリ  
と光る。

「とりあえず下処理を済ませつつ考えましょうか」

「いやあああつ！」

泣き叫ぶ女性を見ながら、ハーバルは恍惚とした笑みを浮かべた。

「ふふふ、極限まで痛覚を感じなくして差し上げますよ。だってそ  
うすれば、長く恐怖を味わいながら死んでいくことができるでしょ  
う？ 自分の身体が切り刻まれるところを生きながら見せられると  
きの表情、私、大好きなんですよねえ」

腹部を切開しようと、ハーバルがナイフの先端を女性の胸部に向ける。

女性は目を瞑ろうとするが、ハーバルはそれを許さない。さらには気を失うことすらできなかった。

しかし女性の肌が傷つけられることはなかった。  
刺し入れようとしたナイフが、ぽとりと地面に落下する。

「……ん？」

自分の意図と反する事態が起こり、ハーバルは眉をひそめた。  
ナイフを手放してしまったのか？　だがそんなへマを自分がするわけがない。

とりあえず落ちたナイフを拾い上げようとしたが、直後、なぜか身体がゆっくりを後ろ向きに倒れていった。

足で支えようとするが、力が入らない。

ハーバルはそのまま背中から地面に激突した。

「一体、何が……？」

今や空を見る羽目になって困惑するハーバルの顔を、一人の青年が覗きこんできた。

「どうだ？　自分の身体が切り刻まれるところを生きながら見せられる気持ちは？」

そこでようやくハーバルは気が付く。

肩から先には右腕が、腰から下には下半身がないことに。

「ぎ、ぎやああああああッ!？」

街の人々を襲っていたハーバルという名の悪魔が、俺の足元で間抜け面を晒している。

「どうだ？ 自分の身体が切り刻まれるところを生きながら見せられる気持ちは？」

「は？」

最初は何を言っているのか、という反応を示した悪魔だったが、すぐに自分の状況を察したらしい。

「っ!？ わ、私の身体が      ツ!？      ぎやああああああッ!？」

右肩から先には腕がない。

それはナイフを握ったまま足元に落ちていた。

さらに上半身と下半身が綺麗に泣き別れていて、上半身に少し遅れて下半身もまた地面へと倒れていった。

「安心してください。もう大丈夫です」

先ほどハーバルに胸を切り裂かれかけていた女性に駆け寄ったテ

イラが、マントで彼女の裸体を隠してあげている。

「き、貴様ああっ!? 一体、私の身体に何をしたああっ!」

無様に地面に倒れた悪魔が声を荒らげ怒鳴ってくる。

先ほどまでの丁寧な口調はどこへやら、あっさり化けの皮が剥がれたな。

いや、さすがに胴体真っ二つにされたらガンジーでもキレるか。

『キレる以前に死ぬかと』

そりゃそつだ。

「何って、ちよつと軽く切ってみたただけが?」

「ふざけるなッ! 人間ごときが、上級悪魔であるこの私に傷を付けられるはずないだろうッ!」

「そう言われても、現にお前そうなってんじゃん」

「……ッ!」

まあ、さすがに俺でも普通に剣を振っただけでは、上級悪魔の身体を両断するなんて芸当はできない。

絶対切断・極 スキルを使ったのだ。

豆腐でも切るかのようにスパツといったぜ。

「てか、そんな状態でもしゃべれるんだな。さすが悪魔だ。しゅーい」

「黙れっ! どんな手を使ったかは知らないが、私をこのような目に遭わせたことを後悔させてやる!」

おっ、何か魔法を使ってきやがったぞ。

街の人たちにもかけている支配魔法だな。

「ははははっ！ これで貴様は私の操り人形　ふがつ！？」

俺は顔面を踏み付けてやった。

「なぜ効いていない！？」

「効くわけねーだろ」

俺の魔法耐性はリミットブレイクして軽く3000を超えているからな。

「か、下級悪魔どもっ！　何をしているっ！？　早くこいつを殺せッ！」

ハーバルが配下の悪魔たちに呼びかける。

だが助けはこない。

下級悪魔たちはすでに全滅していた。

「他愛も無いですわね」

ものの数秒で十体以上はいた下級悪魔を仕留めてしまったルシーファが、艶然と微笑みながら近づいてくる。

ハーバルが愕然と目を見開いた。

「ま、まさか上級天使……？　な、なぜこんなところに……」

「訊かれても、男の悪魔などに教える義理はありませんわ」

「女の悪魔ならいいのか……」

「むしろ美少女悪魔はわたくしの大好物ですよ！」

こいつ、本当に天使だよな……？

「く、くくく……くははははっ！」

ハーバルがいきなり笑い出した。

気でも触れたのだろうか？　とっていると、その全身から禍々しい魔力が膨れ上がった。

「っ！　いけませんわ。この悪魔、自爆する気ですの！」

「くくくつ、忌々しい天使を道連れにできるというなら本望だ！

そして人間ども！　せいぜい死ぬ寸前まで恐怖し、泣き叫ぶがいい！」

悪魔の叫びに、助かったと思って安堵していた街の人たちが悲鳴を上げる。

「ふははははっ！　もっと泣け！　喚け！　そして死　」

「テレポート」

「……ね？」

俺は転移魔法を使い、ハーバルと一緒に街から数十キロは離れた荒野へと飛んだ。

周囲の景色が突然変わったため、悪魔の目が点になる。

「ここなら好きなだけ自爆できるぞ。あ、ちなみに俺はたとえ巻き込まれたところで死なないから」

「き、貴様あああつ！」

直後、臨界点を超え、ハーバルの身体が凄まじい魔力波を放出しながら爆散した。

巻き込まれても死にはしないが、あえて巻き込まれる必要もないため、俺はその寸前で転移魔法を使って街に戻る。

「う、動けるっ……？」

「まさか上級悪魔を倒してしまうなんて……」

「ありがとう！」

ハーバルが死んだことで、街の人たちにかかっていた支配魔法が解けたらしい。

街の人たちが涙ながらに礼を言うてくる。

「魔導警備隊だ！」

「悪魔はどこだ！？」

ちょうどそのとき、この都市の治安維持部隊が駆けつけてきた。  
もう倒しましたけど？



## 第58話 魔法学院

「リグレーン魔法学院の学院長を務めるブラマンテよ。わざわざお越しただいてありがとう」

そう言っただけで俺たちを迎えてくれたのは小柄な老婆だった。  
魔法都市のトップでもある彼女は「氷の魔女」という二つ名があるらしい。

ブラマンテ 108歳

種族：人間族

レベル：84

スキル：氷魔法

水魔法

風魔法

召喚魔法

無詠唱

魔力操作

って、108歳！？

エルフならともかく、人間族でこの年齢はすごいな。  
しかもこんな高レベルは初めて見たぞ。

「あれで百歳を超えてるらしいんですよ。人間族だというのに、ほとんど化け物ですよねぇ」

リシエルがこっそり耳打ちしてくる。

「聞こえているわ、リシエル先生？」

ブラマンテがにっこりと微笑んだ。

ただし目は笑っていない。リシエルの顔が一瞬で青ざめた。  
ごほん、とブラマンテは咳払いして、

「悪魔を討伐してくれたこと、改めてお礼を申し上げますわ」

悪魔を倒した後、俺たちは彼女から直々に呼び出されたのだった。

「まあ、たまたま近くを通りかかったんで」

「それは本当に幸運だったわ。聞けば、相手は上級悪魔。魔導警備隊でも、討伐には相当な犠牲が必要だったでしょう。なのに被害もほとんどなく、死者はゼロ。あなたたちのお陰よ」

「わ、わたしが彼らを連れて来たんですう！」

リシエルが先ほどの挽回とばかりに主張する。

「そう。それはお手柄ね、リシエル先生」

「えへへ、それほどでもないですよ」

ワザとらしく謙遜しながらも、リシエルは小声で「やったあ！褒賞が出るかも！？」と呟いていた。

「しかし、いきなり街中に悪魔が出るなんて随分と物騒な都市なのだな？」

そんな質問を学院長にぶつけたのはエレンだ。  
するとブラマンテは愁いを帯びた顔をして、

「悪魔召喚」

という一言を口にした。

「すなわち、悪魔を召喚するための魔法ね。世界最先端の魔法研究都市を自負しているリグレーンだけれど、この悪魔召喚に関してだけは実行することはもちろん、研究すること自体も禁止しているわ……だというのに、探究心に負けて手を出してしまう魔法使いは少ないのよ」

今回もそうした一部の魔法使いたちが、悪魔召喚を実行した結果だろうと、彼女は推測しているようだった。

犯人はまだ捕まっていないそうだが。

「実を言うと、ここ最近になって多発しているの。先月もとある魔法研究所で上級悪魔が現れ、研究員たちが襲われるという事件があったわ。どうにか魔導警備隊が討伐に成功したけれど、訓練された隊員にも多くの犠牲が出たわ」

普通、上級悪魔が現れたら小さな都市くらいは壊滅するものだが、その程度の被害で済んでいるのは、やはり実力のある魔法使いが多くいるからだろう。

「申し訳ないわね。せっかく来ていただいたというのに、こんな状況で」

「いえ、そんなことは……。私も前々からこの街には来てみたかったんです。あ、申し遅れましたが、私はティラと言います」

「あなたね。リシエル先生の弟子だというのは」

「はい。以前、エルフの里で指導を受けたことがあります」

「そう。せっかくだし、何か興味のある授業があれば好きに覗いていつてちょうだい。先生方には私の方から伝えておくわ」

「ありがとうございます」

カルナたちが退出した後。

リシエルは一人だけブラマンテ学院長の部屋に残されていた。

「件の素材のことだけど」

「それならすっかり手に入れてきましたあ！」

嬉々として報告するリシエル。

悪魔討伐の功績に加え（倒したのはカルナたちだが）、頼まれていた素材をちゃんと入手してきた（実際にはこれもカルナたちのお陰だが）のだ。

もしかしたら昇給のご褒美があるかも！？ いえ、ついに昇進！？ などと、彼女の頭の中は今、完全にお花畑状態だった。

そうですか、とブラマンテは淡々と頷いて、

「もしかして彼らに手伝ってもらったなんてこと、ありませんよね？」

リシエルは凍り付いた。

「誰にも知られないようにお願いね、と申しましたよね？」

ブラマンテが笑顔で確認してくる。

そうだ。確かにそう言われた。極秘の任務だと。さらに「正直あなたではとても心許ないけれど、今は暇な人があなたくらいしかないのよ」とかなんとか言われて、ふざけんなこのババアと思ったのだった。

だがそんなこと、アンデッドモンスターの巣窟に単身で足を踏み入れなければならないという恐怖ですっかり頭から抜け落ちていた。

だらだらだら、トリシエルの顔から大量の汗が吹き出していく。どどど、どうすればっ？　どうやってこの状況を切り抜けたらいんですかあっ！？

焦燥に駆られながらも必死に頭を回転させた拳句、リシエルがとったのは、

「りしえる、わかんない？」

「幼児退行したフリして誤魔化しても無駄だわ」

この後めちゃくちゃ叱られた。

せつかなので、俺たちはリシエルの授業を受けてみることにした。

「……学院長の鬼い……悪魔あ……クソババア……早く老衰して死ねばいいのに……」

ぶつぶつと物騒な呪詛を吐き出しながらリシエルが教室に入ってくる。

……何かあったのだろうか？

彼女が受け持っているのは専門的に研究している時空魔法についての講義ではなく、『魔法陣学』という一年生が学ぶ最も基礎的な授業らしい。

全部で三十人ほどの生徒たちが受講していた。

リシエルの教え方は思いのほか分かり易かったが、じつと座って訊いているのが苦痛になってきた俺は途中から堂々と爆睡した。

「……カルナさん、カルナさん。授業終わりましたよ？」

ティラに身体を揺すられて目を覚ます。

「うう……やっぱりわたしの講義なんて、つまらないですよねぇ……」

「いや、ちゃんと頭には入っているから安心してくれ」

「ほとんど寝てたじゃないですかあっ！」

博覧強記・極 スキルのお陰で、寝てても耳に入ってきた情報を完璧に記憶しているのだ。まさに睡眠学習というやつだな。

「そちらの白い方もずっと寝てますしい……」

「シロはいつものことだから気にするな。おい、起きろ、シロ」

「……ん？ もう朝？」

椅子の上に器用に丸まって寝ていたシロが、むくりと上体を起こした。

ちなみにエレンは魔法にはあまり興味がないということで、フィリアと一緒に魔法都市の観光に行ってしまった。

ルシーファは恐らく可愛い女の子をナンパしているだろう。

「座学ではなく、今度は実技の授業を見えますかあ？」

「お、そっちの方が面白そうだな」

リシエルに案内されてやってきたのは、ちょうど魔法実技の授業が行われているという訓練場だった。

魔法がばんばん飛び交っている。

生徒たちが模擬戦を行っているようだ。

「へえ。思ってたよりはレベルが高いな」

「このクラスは最も優秀な生徒ばかりを集めたS組なんです」

「あら、リシエル。お久しぶりね？」

俺たちが訓練場の端で見学していると、一人の女性がこちらへとやってきた。

「げっ……バーバラ……。なんであなたがここにいますかっ？」

「サマンサ先生が体調を崩しちゃって、あたしが代わりを任されたのよ。S組の実技なんて、あたしくらいでなければ任せられないものね。……ところであなたの方こそ、雑用は無事に終わったのかしら？」

「ざ、雑用じゃないですよっ！」

褐色の肌に、グラマラスな体型。

耳はエルフと同じくピンと尖っている。

ステータスを見るまでもなく、どうやら彼女はダークエルフのようだ。

「……学生時代の同級生なのに、わたしより先に准教授に昇進して、わたしより先に結婚して、いつもわたしを見下してるんです……魔法の暴発で死ねばいいのに……」

リシエルが怨念の籠った声で教えてくれた。



## 第59話 エルフVSダークエルフ

ダークエルフの魔法教師、バーバラが切れ長な目を俺たちの方へと向けてくる。

「へえ？ 里に引き籠ってばかりのエルフがこんなところにやって来るなんて、随分と珍しいわね。最近、人間との交流を始めたって聞いていたけれど、あの非文明的な種族も少しはマシになったのかしら？」

軽くデイスられ、ティラがむっと眉根を寄せた。

お約束通り、エルフとダークエルフはあまり仲が良くないようだな。

それからバーバラは、たった今、気づいたといったふうに、

「そう言えば、あなたにもエルフの血が流れていたっけ？ 道理でお間抜けなわけね」

「なあっ？ そんな」

リシエルが反論するより先に、ティラがきっぱりと否定した。

「リシエル先生が間抜けなのを血筋のせいにしないでください。単にリシエル先生自身の問題です」

「ちょ、ティラさあんっ!？」

リシエルが情けなく悲鳴を上げる一方、バーバラは「先生ですって？」と首を傾げた。

「はい。以前、リシエル先生からご指導いただいたことがあるのです。今回はそのご縁で、学校の見学をさせていただいています」

ティラが経緯を簡単に説明すると、バーバラはおかしそうに唇を吊り上げた。

「リシエルの弟子にしては意外としっかりしているわね。……そっちの子は？」

「俺はティラの旦那だ」  
「違います」

と、そんなやり取りをしているところに、バーバラとよく似た少女がやってきた。

「何かあったの、バーバラ先生？」  
「アーシェラ」

アーシェラと呼ばれたその少女もダークエルフだった。魔法実技の授業を受けていたこのクラスの生徒だろう。まだ幼さの残る顔つきながら、そのプロポーションはバーバラにも引けを取らない。

「いいなあ、ダークエルフ……。乳がデカくて、エロくて」  
「カルナさん？ 聞こえてるんですけど？」  
「あつ」

「“あつ”って何ですか、“あつ”って！？ しかも今、私の胸を見ながら言いましたよね！？」

アーシェラがティラの胸を見て、ふふっ、鼻を鳴らした。

「今、笑いました！？ 笑いましたよね！？ 初対面なのに人の胸を見て笑いましたね！？」

「ごめんなさい。さすがに笑うのは失礼だったわね。ちゃんと憐れむべきだったわ」

「憐れまないでくださいっ！ まったく、これだから淫乱ダークエルフはっ……。その格好も何なんですか。魔法を上達させるのに、そんな男性を誘惑するような格好をする必要はないでしょう！」

言われてみれば、他の生徒や教師が全身を覆うローブを纏っているというのに、ダークエルフの二人だけは随分と露出の多い格好だった。

「そんな台詞は、せめて魔法でわたしに勝つてからにしてもらいたいわね？」

よほど魔法の腕に自信があるのか、アーシエラは随分と挑発的に言った。

バーバラが自慢げにアーシエラのことを紹介してくる。

「彼女はあたしの姪っ子なの。小さな頃からあたしが魔法を教えてあげていた甲斐もあって、今はこの二年生のS組でもトップ。つまりは生徒一の魔法使いということになるわね。ふふっ、あなたの弟子とどちらが上かしら、リシエル？」

そして良いことを思いついたとばかりに、バーバラは手を叩く。

「そうだわ。せっかくだし、あなたもアーシエラと模擬戦をしてみたらどう？ 見ているだけではつまらないでしょう？ ねえ、アーシエラ、妙案だと思わない？」

「そうね。わたしも同じ相手とばかりで飽きてきたところだったし、

ちょうどいいわ」

アーシエラは乗り気だ。

一方のリシエルは、ぐぬぬ、と呻って奥歯を噛む。

「……く、悔しいですけど、アーシエラさんはこの学校の未来の教授として、将来を嘱望されてるほどなんですう……さすがのティラさんでも……」

「いいじゃん。面白そうだし、やってみたらどうだ？」

「ちょ、そんなに気軽に言わないでくださいよおっ！？ 絶対、今後もそれをネタにしてわたしを馬鹿にしようって魂胆ですよっ！」

俺が促すと、リシエルが横から怒鳴ってくる。

「ティラが勝てばいいんだろ、勝てば」

「そ、そうですね……」

「私は構いませんよ、リシエル先生」

「ティラさんっ!？」

ティラは涼やかな顔をして、二人のダークエルフを見遣る。

「負ける気は毛頭ありませんし」

「へえ」

アーシエラは面白そうに口端を吊り上げた。

「よし、じゃあ負けた方が俺に胸を揉まれるということでもいいな？」  
「いい訳ないでしょう（怒）」

訓練場の中央で、ティラとアーシェラが対峙していた。

「アーシェラが模擬戦やるらしいぜ」

「あの相手のエルフは誰だ？」

「リシエル先生の弟子らしいぞ」

「リシエル先生？ 誰だったっけ？」

「ほら、万年講師の……」

学年首席の生徒が戦うとあって、S組の生徒たちは皆、自分たちの模擬戦を中断して観客になっている。

「アーシェラ。リグレーン魔法学院トップの実力を見せてあげなさい」

「ええ。そのつもりよ」

伯母の叱咤にアーシェラは自信ありげに応じる。

「ティラさあん！ こうなったら、あのムカつくダークエルフの鼻を明かしてやって、ぜび先生の日頃の鬱憤を晴らしてくださあい！」  
「前々から思っただけですけど、リシエル先生ってかなり自己中ですよ……」

リシエルの応援にティラは半眼で呻いた。

「では、模擬戦開始よ」

バーバラの合図で、すぐさま詠唱を開始したのはアーシュラだ。

「集え、猛る灼熱の焰よ。怨敵を喰らい、骨も残さず焼き尽くせ」

あれは上級の火魔法　イラプションだろう。

「いきなり上級魔法!？」

「さすがバーバラ、詠唱がめちゃくちゃ早い!」  
「てか相手、黒焦げにされるぞ!？」

生徒たちが口々に驚きの声を上げる。

「サンダーストーム」

一方、ティラは無詠唱で中級の雷魔法を放った。  
閃光が宙を貫き、詠唱途中だったバーバラに直撃する。

「あああああつ!？」

悲鳴が轟いた。

「「「え?」「」「」

見学していた生徒たちが一斉に目を丸くする。  
バーバラも「は?」と目を見開いていた。

「う、うそ……でしょ……っ?　む、無詠唱で、中級魔法を……っ!?!　しかも、いつ魔力が収束したのかすら分からなかったなんて……?」

地面に膝を付いたアーシユラが、信じられない、といった顔で呻く。

どうやら無詠唱で中級魔法を撃つというのは、この学院のトップクラスの生徒たちでも驚くレベルのことらしい。

ティラさんは普段から連発してるけどなあ。……主に俺やルシーファに向けて。（危険なので良い子はやめましょう）

『そのお陰で熟練の域に到達したのでしょうか』

まさか日々のツツコミがこんな力を発揮するとは……。

「くっ……だけど、威力は大したことないわねっ！」

「今のはあえて威力を抑えましたので」

だよな。

今の一撃、いつも俺やルシーファが喰らっているより遥かに弱かった。

あのダークエルフもかなり高い魔法耐性値を持つてはいるが、普段の威力だったら即死してもおかしくないだろう。

「わ、わたしだって、無詠唱くらいできるのよっ！　ファイアアロ  
ーっ！」

「サンダーボルト×3」

「ぎゃああああっ!？」

アーシエラが中級の火魔法を一発放つ間に、ティラは三発放っていた。

「う、あう……」

何度が雷撃を浴びて、アーシエラは痙攣したように身を震わせている。息を荒らげ、髪を乱し、褐色の肌に汗が浮かんでいる様は、何だかとてもエロい。

「そろそろ降参してください」

「こ、降参なんてっ……するわけ、ないでしょっ……この、貧乳エルフっ……」

プチッ。

アーシエラの禁句に、ティラの頭からしてはいけない音がした。

その後、なかなか負けを認めないアーシエラは、何度もティラの雷を喰らった。

幾ら手加減しているとは言え、さすがにこれ以上はマズイ。

なぜなら

「はぁ、はぁ……こ、これ……意外と、気持ちいいかも……」

目覚めてしまうから。

「俺やルシーファのようにな」



## 第60話 プラマンテ学院長

「こ、今回は……わたしの負けよっ……」

ダークエルフのアーシエラは、悔しげに自らの敗北を認めた。

「まさか首席のアーシエラが負けるなんて……」

「あのエルフ、何者なんだ……？」

一部始終を見ていたS組の生徒たちは、学年トップが惨敗したことに驚きを隠せない様子だ。

「やったやったあ！ さすがティラさんですう！ どうですうどうですう！？ 彼女、わたしの弟子なんですよあ！ 見ましたあ？

見ましたよねえ、バーバラ？ 今の気持ちはどうですかあ？ 自慢

の弟子が、見下していたわたしの弟子に負けちゃった今の気持ちはあ？」

「ぐっ……」

模擬戦前までは色々と喚いていたリシエルだったが、弟子の勝利に鼻高になっていた。

そんな彼女に勝ち誇られ、バーバラは忌々しげに顔を思いきり歪めている。

……確かに、あれはムカつくわー。

「だ、だけど！ 次は絶対に負けないわよ！ また勝負なさい！」

アーシエラはティラに向かって指を突きつけ、そう宣言した。

「いいでしょう。次も振り返ちにして差し上げます」

ティラが涼しげに感じると、ダークエルフの少女の口端が微かに緩む。

「……ま、また……あれを……ふふ……ふふふ……」

やっぱり目覚めてしまったらしい。

魔法学院の見学を終えた俺たちは、学院の尖塔の上で真っ裸で昼寝していたシロを回収した後、街で遊んでいたエレン、フィリア、ルシーファと合流した。

「……疲れたのだ……」

なぜかエレンがぐったりとしている。

「何してたんだ？」

「フィリアが迷子になって、ずっと探し続けていたのだ……」

どうやらまたフィリアが勝手に一人でどこかに行ってしまったらしい。

「どこに行ってたんだ、フィリア？」

「フィリアね、ほーきにのってた！　びゅーんって！　れーす！」  
レース？

『この都市では、飛行用魔導具を使ったレースが定期的に開催されています。恐らくそれに出場されたのかと』

ナビ子さんが教えてくれる。

あの筈の乗り物は、使用者の魔力放出量に応じて速度が変わるらしい。

確かにフィリアが乗れば、物凄い速さが出るだろう。

「ゆーしょーしたらもらった！」

言つて、フィリアは自分の身体ほどもある優勝トロフィーを掲げてみせた。

そこには“リグレーン・フライングカップ”という文字が刻まれていた。レース名だろう。

『最高クラスに位置づけられているレースですね。ちなみに賞金は大金貨三百枚』

しかもフィリアは過去最高タイムを出し、ぶっちぎりで勝ったらしい。

てか、何がどうなって出場することになったんだよ……。

「それ、子供でも出られるのか……？」

『予選レースを通過すれば年齢に関係なく可能ですが、予選は半月前に終了しているはずです』

普通そうだよねえ。

「たのしかったー」

ま、本人が喜んでいいるから何でもいいか。

「わたくしは可愛い見習い魔法使いちゃんと××してましたわ」  
「お前には聞いてない」

心なしか、ルシーファの肌はいつも以上に艶々していた。

「皆さん、これからどうされるんですかあ？ ティラさんには、ぜひともうちの学院に入学してほしいですけどお……」

「申し訳ありません、先生。今のところそのつもりはないです」

リシエルから勧誘を受けるティラだが、あっさりと断ってしまっ  
た。

「エルフの性分とでもいうのか、大勢の人がいるところは苦手です  
し……」

「うう……そうですね……残念ですう……」

肩を落としたリシエルは、ぼそりと呟く。

「ティラさんという逸材を学院に入学させた功績があれば、わたし  
も昇進できるかもしれないのに……」

「先生、聞こえてますよ？」

このハーフエルフ、結構、腹黒いよな……。

「一応もつしばらくの間はこの都市に留まるつもりだ。気になることもあるしな」

「？ 気になること、ですかあ？」

「……ようやく準備が整ったわ」

リグレーン魔法学院の地下。

そこには学院の中でもごく一部の人間しか知らない秘密の地下室があった。

小さな灯りが幾つか揺らめくだけの薄暗い空間に、数人の男女が集まっている。

「決して少なくない失敗と被害があったけれど、これであの国にも対抗できるようになるはず……」

「こ、今回は上手く行くでしょうか？」

「大丈夫よ。先日の失敗の原因は究明し、きちんと克服済み。召喚のための素材も質がいいし、今度こそ成功するわ」

「しかし、よくここまで高品質の素材が手に入りましたね？」

「ええ。……それに関連して少し予定外のことが起こってしまったけれど……いえ、問題はないわ。些末なことだから」

彼らがそんなやり取りを交していると、ずっと黙々と働いていた人物が手を上げた。

「準備が完了しました。すぐにも発動できます」

「さすがね。魔法陣も素材の配置も完璧よ」

「おおっ、ついに……」

部屋の中心に複雑な文様が描かれていた。

どこか禍々しさを感じさせるその図形は、詠唱とはまた異なる原理で魔法を発動させるためのもの

魔法陣である。

彼らは一様に緊張の面持ちを浮かべながら、そこに魔力を注ぎ込もうとする。

「それでは悪魔召喚をはじめましょう」

だがそのときだった。

地下室にこの場にいるはずのない人物の声が響いたのは。

「ブラマンテ学院長……？ まさか、悪魔召喚を主導していたのは学院長だったんですかあ……？」

「な、なぜあなたがここに……？」

目を見開いて驚きを露わにしたのは、この学院の長にして、魔法都市のトップでもあるブラマンテだった。

彼女の周囲には五、六人の教師たち　恐らく幹部クラスだろうがいて、彼らもまた突然の闖入者に驚き、今まさに足元の魔法陣に注ぎ込もうとしていた魔力を霧散させてしまう。

「それにあなたたちまで……。ここは関係者以外、立ち入り禁止のはずよ?」

ブラマンテは厳しい顔つきで訴えてくるが、その声は少し震えていた。

「まさか、悪魔召喚を主導していたのは学院長だったんですか……?」

リシエルが恐る恐るといった様子で問う。

すると学院長を初めとする教師たちは苦々しげに顔を歪めた。

そんな彼らに代わって、俺が答えてやった。

「その通りだ。ここ最近、都市内で頻発していた悪魔召喚はすべて、そのブラマンテ学院長が主導して行っていたものだ」

「あの“怨念の宝玉”の利用方法は色々ありますけれど、高位の悪魔を召喚するための媒体としても使えるんですの。ちやうど悪魔召喚が多発しているタイミングで“怨念の宝玉”を欲しているとなると、さすがに誰だって怪しみますわ」

俺の言葉を引き継いで、ルシーファが言う。  
ブラマンテは大きく嘆息した。

「……まったく、不運にもほどがあるわね。“怨念の宝玉”なんて呪われた素材、使い道に通じている者なんてそうそういないはずなのに……」

だから事情を知らないリシエルに入手を頼んでも、問題ないと判断したのだろう。

一応は他言しないようにとは注意していたようだが、リシエルが偶然にも俺たちに出会い、知られてしまったのだ。

「ですが、なぜそんな自分の都市に被害をもたらすようなことを？」

当然の疑問を口にしたのはティラだ。

「……悪魔の力が必要だからよ」

ブラマンテは昏い声音で言う。

「知ってるかしら？ 先日、東方の軍事大国として知られるあのレイン帝国が、ついにこの魔法都市の隣国にまでその勢力圏を広げてきたことを」



## 第61話 大悪魔（ ）召喚

「この都市をレイン帝国から護るためには、もっと戦力が必要。そう考えたわたしは、強力な悪魔を呼び出し、使役するしかないと考えたの」

ブラマンテ学院長は溜息交じりに明かした。

「幸い悪魔召喚については、過去の悪魔召喚者たちから押収した資料のお陰で、すでにかんりのデータが蓄積されていた。それを応用すれば、上級悪魔すらも支配下に置くことが可能であるとわたしは考えたわ」

そして彼女は極秘に悪魔召喚プロジェクトを進めたのだという。

「支配下に置куつて……失敗してたじゃないですかあつ？」

「失敗したのは数えるほどよ。それに最初から多少の犠牲は覚悟していたわ」

リシエルが声を荒らげて問い詰めるが、ブラマンテは冷静に受け流す。

「そして今回の召喚は今までの集大成。犠牲者のためにも、必ず成功させなければならないのよ。……だから邪魔はさせないわ！」

ブラマンテが右手を上げると同時、彼女の周囲に複数の魔法陣が現れた。召喚魔法だ。

「悪魔だっ!?」

「まさか、すでに使役に成功していたのですか!?!」

エレンとティラが息を呑む。

現れたのは五体の悪魔たち。  
いずれも中級の悪魔だな。

「彼らを排除なさい」

これまでの実験で成功した個体たちで、ブラマンテの支配下に置かれていたようだ。彼女の命を受けて、一斉にこちらに向かって襲い掛かってくる。

そうして悪魔をけしかけている隙に、先ほど中断してしまった悪魔召喚を再開させるつもりようだ。教官たちが魔法陣に魔力を注ぎ始める。

だがそんな時間を許す俺たちではない

「甘いすわね。中級悪魔ごときが、このわたくしを止められるとでも　あああっ、サキュバス!　サキュバスですわあ!」

「おおっ!　ほんとだ!　サキュバスだ!　淫夢を!　俺に淫夢を見せてくれ!」

「って、何やってんですか　　ッ!?!」

俺とルシーファはサキュバスに夢中になり、あっさりと戦線離脱。

「あの変態たちは当てにならない!　あたしたちだけで魔法の発動を止めるぞ!」

「わ、分かりました!」

「はい」

「ん」

いつもはダメ子なエレンがリーダーシップを取り、悪魔召喚を防ごうと立ち向かう。

中級の悪魔たちをティラたちが相手取っている隙に、エレンはブラマンテたちに躍り掛かった。

「召喚はさせ」

「フリージング」

「ひゃっ!？」

エレンの身体が一瞬で凍り付いた。

“氷の魔女”の異名を持つブラマンテの仕業だ。

そのときついに魔法陣が発動してしまう。

禍々しい光が地下室に膨れ上がり、そして魔法陣の中心に圧倒的な気配を誇る存在が降臨する。

「ひえええっ、成功しちゃいましたあっ!？」

「召喚は上手くいったわね。後は契約を……」

そうして姿を現したのは

「ふう、どうにか間に合ったわ! 危うくもう少しで漏れちゃうところだっ……………た?」

パンツを半分近くまでずり下ろした、橙色の髪的美少女悪魔ちゃんでした。

とっても可愛い半ケツです！

「え？ なに？ これ？ どういうこと？ え？ トイレは？ 便器は？」

パンツを脱ぎかけたその体勢のまま、彼女は目を丸くしている。しかしすぐに自分のお尻に皆の注目が集まっていることに気づいて、見る見るうちに顔が赤くなっていった。

「きゃあああああつ！？ なになになに！？ 何なのよ！？ あんたたち何者！？ ここ、トイレよね！？」

慌ててパンツを上げながら、涙目でその場にしゃがみ込む。どうやらちようどトイレに入った瞬間だったらしい。

あんまりな呼び出され方だ。最高です。

「……と、とにかく、成功よ。上級 いえ、最上級の悪魔を召喚したわ」

「しっかり学院長の支配下に置かれています！ 後は主従の契約を交すのみです！」

「わかったわ。……さあ、最上級悪魔よ。あなたの真名を教えてくださいうだい」

それでもブラマンテたちは気を取り直して、悪魔に命令する。

「何なのよあんたたち！？ もしかして召喚！？ この公爵悪魔たるあたしを人間ごときが召喚したっての！？ なんて屈辱なの！ いえ、百歩譲って召喚するのはいいとしても、せめてタイミングくらい考えなさいよ！」

美少女悪魔は喚き散らす。

もつともな言い分だった。まあでも、召喚する方としては相手がどんな状況かなんて分からないもんなあ。

「っ！？ しかも魔界に戻れない！？ 何で！？」

「今のあなたはわたしの支配下に置かれているわ。そしてこのままだと魔力が枯渇して死んでしまう。あなたに残された道は、わたしの従魔になることだけよ」

「何であたしが、あんたみたいなババアの従魔にならずにちゃんないのよ！？ 勝手に決めないでよ！」

と怒鳴った直後、美少女悪魔の頬が引き攣った。見る見るうちに顔が蒼くなっていく。

「は、早く……ま、魔界に戻しなさいっ……」

「そういう訳にはいかないわ」

ブラマンテは突っ撥ねる。

美少女悪魔は涙目で叫んだ。

「だって、漏れちゃう！ 漏れちゃうのよおおおっ！」

切実に訴えてくる悪魔に、さすがのブラマンテたちも動揺する。

「は、早く契約なさい！ そうすればトイレに行かせてあげるわ」

「嫌っ！ 嫌よ！ そんな屈辱は                      くあ w s e d r f t g y ふ

じこーp」

拒絶する悪魔だが、もはや限界らしい。発する言葉がおかしくなった。

そしてついに臨界点を突破する。

「だ、だめええええええええっ！ 出ちゃうううううううっ  
っ！」

じよばじよばじよばじよばじよばじよばじよば。

足元に水溜りができるほど大量だった。

召喚した最上級悪魔が目の前でお漏らしするという、誰も予想だにしなかった展開に、ブラマンテたちは固まっている。

「ママー、あのおねーちゃん、あしもとがぬれてるよー？」

「……フィリアちゃん、何も見なかったことにしてあげましょう」

子供は時に残酷である。

「ひぐ、ひぐ……ひぐ……」

一方、人前で大量失禁するという恥辱を味わった美少女悪魔は、下半身を盛大に濡らしながら泣いていた。

「……許さない」

泣き声に混じり、怨念の籠った言葉がその可憐な唇から洩れる。

「許さない許さない許さない許さない！！！」

悪魔の全身から凄まじい魔力が吹き荒れた。

「っ！？ し、支配魔法が破られますっ！？」

「何ですって！？」

ブラマンテたちが慌て出した。どうやら美少女悪魔は、怒りに任せて無理やり束縛を打ち破ろうとしているらしい。

そして凄まじい爆音とともに、ブラマンテたちが嚴重に施していた支配魔法が破壊される。

「殺す……殺してやる……」

「ひ、ひいいいっ！」

逃げ出そうとする教師たちだったが、最上級悪魔の威圧に腰が砕け、その場に尻餅をついた。唯一、ブラマンテだけが氷魔法を発動して悪魔を封じようとするが、

「無駄よ」

「なっ！？」

悪魔の一言で魔力が霧消する。

「が、学院長ですら敵わないなんて……」  
「も、もうこの魔法都市は終わりだ……」

じよばじよばじよば……。

教師たちが失禁した。

おいやめろ、誰も見たくない。

「このあたしを怒らせておいて、楽な死に方ができると思わないことよ!」

「そこまでにしてあげてくださいませ」

割り込んだのはルシーファだった。

美少女悪魔は苛立った様子で振り返る。

「今のあたしに指図するなんて、いい度胸」

「ふふふ、久しぶりですね、ベルちゃん?」

「げっ!?! あんたはルシーファ!?! 何でこんなところにいるのよっ!?!」

どうやら二人は知り合いだった。



## 第62話 天使と悪魔

「げっ！？ あんたはルシーファ！？ 何でこんなところにいるのよっ！？」

お漏らし系美少女悪魔は悲鳴めいた声を上げた。

「知り合いなのか？」

「ええ。実はベルフェーネ　ベルちゃんとわたくしは、のっぴきならない関係なのですわ」

ぽつと頬を赤く染めるルシーファ。

「ちよつと、誤解を招くような表情しないでよ！　あと気安く愛称で呼ぶな！」

一方、美少女悪魔　ベルフェーネは声を荒らげてルシーファを糾弾する。

「ああ、今でも思い出しますわ。数百年前に勃発した天使と悪魔による天魔戦争。熾天使だったわたくしも公爵級悪魔のベルちゃんも、大勢の部下を率いる大将で、当然ながら敵同士でしたわ。互いに愛し合っていないながらも、戦わざるを得ないという悲劇……」

「愛し合ってなんかないし、あたしは本気であんたを殺す気だったんだけど！？」

どうやら二人の間での認識が大いに異なるらしい。

「けれどそんな中、わたくしたちは自軍を抜け出しては秘かに会い、愛を確かめ合っていたのですわ」

「あんたがいつも勝手に悪魔の陣地にいるあたしのどこに来てたんでしょうが!？」

「時には唇を重ね合わせ」

「あんたが無理やりキスしてきたんでしようがあああつ!　しかもファーストキスつ、ファーストキスだったのにいいいっ!」

「時にはこっそり互いの下着を交換し合い」

「あれはあんたの仕業だったの!?　あたしの下着が、知らない人の下着と間違えられてるって思ってたわよ!」

ルシーファは当時から変態だったようだ。

「会いたかったですわあああつ!」

「あたしは会いたくなんてなかったわよ!　って、こっち来るな!」

抱きつこうとしたルシーファだが、ベルフェーネに殴られた。

床に崩れ落ちた天使は恍惚とした顔で叫ぶ。

「あああつ、聖水っ!　ベルちゃんの聖水ですわあああつ!」

「匂いを嗅ぐなあああつ!」

「採取!　採取しなくてはなりませんわ!」

「もうやだあああつ!　早く魔界に帰してよおおおつ!」

暴走するルシーファの前に、もはやベルフェーネはブラマンテたちをどうこうするどころではなさそうだ。……ある意味、天使の陰で悪魔が封じられている。

ブラマンテたちは使役することを諦めたようで、今のうちに悪魔を魔界へ帰還させようとしていた。

その試みは成功し、ベルフェーネの足元に魔法陣が展開される。

「あつ、戻れる!？」

「嗚呼! 再びわたくしたちは離れ離れになってしまうのですわね!」

「うつさいわよ! あんたなんか」

言い終わる前に美少女悪魔の姿が消えた。

魔界へと帰ったのだ。

これで一件落着。

「ベルちゃんの聖水が残されてますわあああつ!」

地面にはお漏らしの痕が残っていたが。

「つて、ここどこよ!? 何で元いた場所に帰してくれないのよおつ!? パンツが濡れてて不快だし、早くシャワー浴びて着替えたいんだけどおおおおおつ!」

「……あなた方のお陰で助かったわ」

悪魔が去った後、ブラマンテ学院長は深く頭を下げ、礼を言った。

「やはり最上級悪魔を使役するなんて、無謀だったのね……」

今回の失敗がよほど堪えたのか、項垂れている。

「げ、元気出してくださいよおっ！ この魔法都市だって、優秀な魔法使いが沢山いるんですからあ！ レイン帝国にだって負けないですよ！」

「ありがとう、リシエル先生。けれど、あなたに言われても……と  
いうのが率直な感想よ」

「酷いですう！？」

レイン帝国、か。

獣人の国エクバーナを侵略しようとしていた軍を叩き潰したり、  
送り込まれてきた暗殺者を返り討ちにしたり、これまでもちよくち  
よく相手してきたが、随分と面倒な国だな。

『東方の歴史ある大国ですが、かつては他国とも比較的良好な関係  
を築いていました。しかし近年、新たな皇帝が玉座に就いて以降、  
急速に軍国主義化が進み、次々と他国を侵略しているようです』

と、ナビ子さんが教えてくれる。

うーむ、今まで放置してきたが、そろそろ何とかした方がいいか  
もしれんな。俺の今後の異世界満喫ライフに悪影響が出そうだし。

「次はレイン帝国に行ってみるか」

「ええっ？ や、やめた方がいいですよっ？」

「どのみちすでに“四将”クラスに追われてるしなあ」

「……は？」

「いや、こつちの話」

そして俺たちはリシエルやブラマンテに別れを告げ、魔法都市を後にした。

NABIKOに乗って、目指すはレイン帝国である。

隣国のサマンザという国を経由していくつもりだ。つい最近、陥落して帝国に属国化させられたらしいが。

「ティラ様、申し訳ありませんでしたわ」

「？ 何の話です？」

リビングで寛いでいると、不意にルシーファがティラに謝った。

「ティラ様というご主人様がありながら、昔の愛人に興奮するなど不忠の極みですわ……」

「いえまったく気にしていないどころか、ぜひあのまま一緒に魔界に消えて欲しかったくらいです」

ティラは無表情で言う。

「ああ！ やはり怒っておられますわね！ だけど、これはある意味、嫉妬してくださっているという証拠ですわ！」

「人の感情の誤読が酷過ぎると思うんですけど！？」

「機嫌を治してくださいませ！ お詫びに御命令いただければどこだろうとペロペロ致しますわ！ 足でも唇でもお尻でも！」

「じゃあ床でも舐めていてください」

「分かりましたわ！ ティラ様のお身体だと思って、誠心誠意舐めさせていただきますの！ ペろペろ！ ああ、ティラ様だと思うとただの床も、美味！ 美味ですわあああつ！」

「色々と高度過ぎて御し切れないんですけど、この堕天使！？」

本当に床を舐めながら興奮してるぞ、この堕天使……パネエ……。

「それにしても、あの悪魔も災難だったな……。トイレ中にいきなり人前に召喚されるなんて、あたしだったら丸三日は立ち直れぬぞ」

エレンはあの悪魔少女に同情しているようだ。

三日って意外と短い気がするけどな？

「お風呂中にいきなり他人が現れる事案もあつたなあ」

「それは貴様のことだろう！？ あのときは本当に驚いたのだっ！」

ところで、俺は 召喚魔法・極 というスキルを持っている。

あの学院長たちは必要な素材を集めたり、複雑な魔法陣を描いたり、かなり色んな準備を整えた上で上級悪魔を召喚していたが、俺の手に掛ければそんな面倒な手間は必要ない。

その悪魔の真名さえ分かれば、簡単に召喚することが可能だった。こんなふうに。

「ベルフェーネⅡサターニアⅡディアブロス、サモン召喚」

リビングが禍々しい光に包まれ、そして少女のシルエットが現れた。

「はあ……ようやくシャワーを浴びることが出来るわ……。ほんと、酷い目に遭っ  
ほえ？」

美少女悪魔が今度は真っ裸で召喚されました。

「何でもいつも最悪なタイミングで召喚するのよおおおおお  
っ！？」

ちなみに真名は鑑定して読み取った。  
これでいつでも召喚し放題だ！

“鬼車鳥”<sup>きしゃどり</sup> という怪鳥の背に乗り、空を翔ける集団があつた。  
彼らの頭には鋭い角が生えている。

鬼族と呼ばれる、極東の島国に生きる者たちだ。だが彼らが今いるのは、サマンザという国であり、さらにその南西に位置する都市国家 リグレーンへと向かっていた。

「桜花様！」

その南西の方角から、鬼車鳥を駆って戻ってくる青年がいた。偵察部隊の一人だ。

「ターゲットは今朝リグレーンを出発し、謎の魔導具に乗ってこちらへと向かっているそうです。このままいけば、我々とちょうどかち合うことになるかと」

「そうか」

桜花様と呼ばれたのは、集団の先頭を走っていた若い女性だ。彼女は報告を受けると、神妙に頷く。その顔には悲壮感さえ漂っていた。

「……あの竜將軍と闇將軍を破ったほどの相手……だが、我々は負ける訳にはいかぬ」

彼女もまたレイン帝国の“四将”の一人。

鬼將軍の桜花だった。



### 第63話 鬼將軍

「うう……ほんと、何なの……何なのよ……」

全裸で強制召喚されたベルフェーネは、ぐすぐすと鼻を鳴らしていた。

「シャワー浴びようとした最悪のタイミングで召喚されるし……あたしの真名が知られてるし……いつの間にか隷属させられてるし……でも何より理解不能なのは」

涙の滲んだ目で俺を睨みつけてきて、彼女は叫ぶ。

「何であんたの方が、公爵級悪魔であるこのあたしよりも強い  
のよおっ!？」

レイン帝国へと向かう途中。

人気のない荒野にて、俺はベルフェーネと一戦交えていた。

『俺に勝てたら隷属を解除してやる』

『はっ、なんて愚かな人間なのかしら。いいわ。あたしの力を思い  
知って平伏するがいいわ』

と、戦う前は自信满满だったお漏らし系美少女悪魔ちゃんだが、  
二十秒で決着が付いた。

ステータス的にはルシーファとほぼ同等。

そして悪魔らしく、即死魔法や精神干渉系魔法などの凶悪な魔法を筆頭に、多彩な魔法を使うことができた。  
だが生憎、魔法耐性がリミットブレイクしている俺に魔法攻撃はほとんど効果がない。

「よしよし、今日からお前はうちのペットだ」

「ペット！？　せめて従魔よね！？」

「まずはトイレから躡けないといけないな」

「やめてよ！？　傷口に塩を塗らないで！」

彼女は召喚魔法で呼び出しているため、いるだけで俺の魔力が消費されていく。魔力回復・極　があるため別にどうってことないのだが、本人が「魔界に帰してよお」と訴えてくることもあり、いったん帰還させてあげることにした。

今後は必要に応じて呼び出すつもりだ。

サモン  
「召喚」

「ああ、気持ちいい。やっぱりたまにはバスタブにお湯を張って浸かりた　　って、だからこういうタイミングで呼び出さないでって言うてるでしょ！？」

『警告。上空から複数の敵性個体が接近中です』

ナビ子さんの警告が車内に響いたのは、サマンザという国に入っ  
てしばらく進んだ頃のことだった。

「空からですか？ 一体何が……」

『まだ探知範囲外ですので、詳細は不明です』

「……前方一キロ、上空百メートルといったところか。数は……四  
十二。デカいのと小さいのがペアになってるみたいだな。何かに乗  
っているのか？」

ナビ子さんに代わり、俺が直接 探知・極 で探ってみた。俺の  
探知の場合、半径三キロが有効範囲なので十分圈内だ。

大よその場所を特定すると、今度は 千里眼・極 を使って視認  
してみる。

「おおー、鳥に人が乗ってる。前は竜騎兵だったが、こんな部隊も  
あるのか」

いや、よく見ると普通の人間じゃない。

頭に角が生えている。

やがて彼らは五百メートルほどの範囲にまで近づいてくると、一  
斉に弓を引いた。

放たれた矢が五月雨のごとく降り注いでくる。狙いは完全にこの  
NABIKOだ。

何本かが車体に直撃する。

『損傷はゼロです』

ミスリル  
聖銀を大量に含んだ合金でできたこの車体に、矢程度では傷一つ付かない。

「しゅごーい！ あめあめーっ！」

「ん、美味しい。もぐもぐもぐ」

フィリアは矢の雨が面白かったのか、リビングを駆け回って喜んでいる。シロは外のことにはまったく興味がないらしく、さっきからずっと俺が作ってやったパンケーキを頬張っていた。

「緊張感なさすぎですね……」

「ご安心くださいませ、ティラ様。わたくしがいる限り、何が来ようと指一本触れさせませんわ！」

「むしろあなたに触れてほしくないです」

「はうんっ！ ティラ様は相変わらず辛辣ですわあ！ ハアハア」

連中を迎え撃つため、俺はキャンピングカーの屋根の上に登った。

「空を飛んで戦うのもいいが、向こうに地上までお越し願おうか」

使うのは 威圧・極 スキル。

レイン帝国軍を相手にするときも役立ったものだが、数も少ないし今回はちょっと抑え気味に。

「オオオツ                    パイイイツツッ！！！！！！」

『マスター、なぜその言葉を？』

「いや、何となく叫びたくなって」

意識を失った怪鳥が次々と地上へと落下してくる。  
見たことない鳥だな。鑑定してみると、きしゃとじ「鬼車鳥」とかいう魔物だった。

その中に、他とは毛並みが違う上位種と思われる怪鳥が交じっていた。それに乗っているのがこの部隊の指揮官だろう。

「……い、今は、一体……？」

気を失っている騎獣者が多くいる中で、指揮官はちゃんと意識を保っていた。

怪鳥の頭に寄りかかり、ちょっと苦しそうではあるが。

女性だ。

しかもかなりの美人である。

着物っぽい服を着ていて、頭部には一本の角が生えていた。  
極東の島国に住むという鬼族だな。

特筆すべきは胸だろう。

でかい。

もしかしたらエレンよりでかいんじゃないか？

揉みたい。揉みだきたい。

俺が不純なことを考えていると、彼女は俺に気づいて鋭い眼光で睨みつけてきた。

「お、おぬしは……っ！」

「おっす。俺がターゲットのカルナだぞ、鬼將軍の桜花たん？」

「っ！？ なぜそれを……」

彼女はレイン帝国の“四将”の一人だった。

先日の闇將軍に代わり、俺を狙って襲撃してきたのだろう。

「……これはもしや、おぬしの仕業か？ 一体、どんな妖術を使った？」

おっぱいの大きな桜花たんは、周囲の有様を見渡して警戒を露わに訪ねてくる。

「ちょっと咆えてみた」

「う、嘘を吐け！ それでこんなことになるわけがない！」

「こんなことってどんなこと？ もしかしてお漏らししちゃったとか？」

「そそ、そんなこと、ある訳がないだろう！？」

やっちゃったっぱい。

最近よく美女美少女がお漏らししちゃってるよな……。いいぞ、もつと漏らせ。

「してない！ してないからな！」

彼女は懸命に否定しつつ、怪鳥から降りようとした。

この鳥はあくまで移動用らしい。

ところが足に力が入らなかったのか、途中で引っくり返って地面に頭から落下してしまう。

「桜花様っ……！」

「……っ、ご無事ですか……！」

周囲にいた他の鬼族たちが、弱々しい声で彼女の名を呼ぶ。

加勢しようという意志はあるようだが、俺の威圧にやられて身動きが取れない様子だった。

「大丈夫か？」

「……む、無論っ！」

桜花は齒を食い縛ってなんとか二本の足で立つと、腰に差ししていた刀を抜き放った。

「はあああああっ！」

地面を蹴り、裂帛の気合いとともに躍り掛かってきた。先ほどまで動くことすらままならなかったというのに、なかなか大した奴だ。

俺は斬撃を半身で躲すと、彼女の腹部に軽く拳を見舞った。

「がはっ……ぐ……あ……」

「その状態じゃ俺を倒すのは無理だと思うぞ？ いや、万全でも難しいけど」

「ま、まだ、分からぬ……っ！」

唾液を散らして叫び、桜花は刀を振るう。

俺はそれを二本の指で挟み込むようにして受け止めた。

「な……」

愕然とする桜花。

俺はもう一発、同じ個所に拳を喰らわせた。

「がっ……げぼっ……げぼっ……おえええっ……」

彼女はくの字に身体を折り曲げると、激しく嘔吐した。  
膝を折って倒れ込む。

「わ、我らは、絶対に負けられぬ……ひ、姫様の……ため……」

それでも俺を掴もうと手を伸ばしてくる。  
しかしそれは俺に届かずに空を切った。

桜花はずしやりとその場に崩れ落ちる。

そして動かなくなった。意識を失ってしまったらしい。

鬼族は極東の島国に住む一族だ。

レイン帝国に侵略され、現在はその属国となっているが、彼女たち自身に戦う動機などないはずだった。

先ほどからずっと無言を貫いている桜花へ、俺は訊ねた。

「あんたら鬼族は自国を侵略したレイン帝国を恨んでいるはずだろ？  
？　なのは何であんなに必死だったんだ？　何か弱みでも握られているのか？」

「……」

だが桜花は苦悶の表情を浮かべるだけで、何も答えない。



「答えないと、そのエレンよりデカい乳揉むぞ」

「くっ……確かにあたしより大きいっ……これではあたしの存在価値がっ……」

「この間は胸なんて何の役にも立たないって言っていましたよね？」

愕然とするエレンにティラがツツコミを入れる。

「……好きにするがいい……」

桜花の唇から弱々しい言葉が漏れた。

え、マジで？ 好きにしているの？ ほんとに揉むよ？

……まあ冗談は置いておいて。

話したくないというのなら仕方がない。

あまりやりたくはなかったが、あの手を使おう。

俺は桜花へと近付いていった。

ティラが「本当にやるつもりですか！？」と叫んだ。信頼がないな……。

「ちょっと詳しく調べさせてもらっぞ」

鑑定・極 は対象に触れることで、さらに詳しい情報を得ることができる。

そして俺は桜花の記憶の中を探った。

情報が流れ込んでくる。

思わず顔を顰めてしまった。

「……なるほどな。桜花たんが必死だった理由が分かった」

予想した通り、随分と胸糞悪い話だった。  
そしてさらに俺の予想が正しければ

レイン帝国。

そこには俺と同じ転生者がいる。

## 第64話 もう一人の転生者

「ご、ご報告いたします……。桜花將軍は属国のサマンザ領内でタ―ゲットに遭遇……。しかし交戦するも敗北、現在は拘束されて……」

報告する鬼族の兵士の声は震えていた。

「ほんと、どいつもこいつも使えないねえ。これで四将のうち三人がやられたんだっけ？」

答えたのは玉座に腰掛ける男だった。

年齢は二十歳かそこら。

何の特徴もない、一見するといかにも平凡といった印象を受ける青年だ。

だが他でもない、彼こそがレイン帝国の現皇帝だった。

ほんの一年前のことだ。

どこからともなく現れたこの青年一人の手によって、精鋭ぞろいの帝国軍が無残な敗北を喫したという事件は、帝国全土を震撼させた。

そして青年は前皇帝を玉座から引き摺り下ろすと、自ら皇位に就いた。

それ以来、その圧倒的な力と恐怖によってこの国を支配している。

「確か彼女、鬼族の英雄だったっけ？ もう戦士より娼婦か性奴隷にでもなった方がいいんじゃないの？ いい身体してたし、そっちの方が絶対向いてると思うよ。……よし、戻ってきたらそうしよう。」

つて、捕まっちゃったんだっけ？」

「っ……」

一族が誇る英雄を貶され、兵士の瞳に憤怒の色が湧き上がる。しかし彼はぐつとそれを堪えた。刃向っても絶対に敵わないと理解しているし、何より同胞たちにまで危害が及ぶ可能性がある。

だがそんな兵士の内心を嘲笑うかのように、皇帝は言った。

「それはそうとき、君たち鬼族には今回の失敗の罰を与えないとねえ？ ていうか、最近ちよつと態度が反抗的なんだよね。隠していても丸わかりだよ？」

「っ！」

鬼族の兵士は息を呑む。

皇帝はその様をおかしそうに眺めてから、傍らにいた大臣の一人に命じた。

「鬼姫ちゃん、だつたっけ？ ここに連れてきてよ」

兵士の表情が絶望に染まった。

そして縋るように皇帝に訴える。

「お、お待ちくださいっ……ど、どうかっ……あの方だけはっ！」

その反応に戸惑う大臣だが、皇帝は意に介さず続ける。

「それとき、いつものように全員ここに集めて」

「や、やめてくださいっ……私ならどうなっても構いません！ けれど、あの方だけはああっ！」

兵士はもはや半狂乱の態だった。

「うるさいなあ」

皇帝は鬱陶しそうに腕を横薙ぎに振るった。

次の瞬間、屈強な鬼族の兵士の身体がボールのように吹き飛んでいた。

壁に思いきり叩き付けられ、兵士は沈黙する。

「今日は楽しいショーが見れそうだ」

玉座の間に大勢の人間たちが集っていた。

この国の高級文官・武官の他、帝国に侵略されて属国や植民地となった国々の代表者たちの姿もある。

皆、一様にその表情は暗い。

玉座に座る皇帝へ、誰もが強い反発と不満を抱いているのだ。

しかしその想いを各々懸命に堪え、その場で恭しく首を垂れている。

「あつ……あのっ……い、一体、これから何が、あるのでしょうか……っ?」

兵たちに拘束され、一人の少女が運ばれてきた。

鬼族の伝統衣装に身を包んだ、美しい少女だった。

歳は十四、五といったところだろう。

あどけない顔に戸惑いの表情を浮かべ、玉座に集まった者たちをびくびくと見渡している。

「く……鬼姫様……」

この場に参集させられた鬼族の者たちが奥歯を噛み締める。

その様子を皇帝はニヤニヤと眺め見ていた。

鬼將軍の敗北を理由にはいるが、要するにこれは見せしめだった。

皇帝は国内の有力貴族たちの娘や属国の姫君などを人質に取っている。

最近、反抗の機運が高まりつつあったため、改めて自分に逆らえばどうなるかということを知らしめておくべきだと考えたのである。

「まあそれ以上に、単純に僕が楽しみたいだけなんだけどね」

そのとき、ずん、と大きな足音が響いた。

姿を現したそれに、集まった者たちが思わず驚きの声を漏らす。

それはオーガだった。

一体だけでなく、全部で三体。

狂暴で知能が低く、そのため魔物に分類されている。

だが調教されているようで、後ろにいる魔物使いの命令に従順に従っていた。

オーガたちが鬼姫と呼ばれた少女の目の前までやってきた。

興奮しているのか、ふうふうと鼻息が荒い。

少女は恐怖の表情で身長二メートルを超すその巨体を見上げ、あ、あ、と声にならない声を漏らすだけだ。

「ま、まさか……」

皇帝の意図に気づき、誰かが愕然と呻いた。

直後、魔物使いの指示で、オーガの一体が鬼姫の衣装を無造作に掴み、引き千切った。

「きゃああああっ」

鬼姫が悲鳴を上げる。

衣装を破られ、彼女の白く美しい肌が露わになる。

「あははははっ！ なかなか素敵なおショーだろう！？ 鬼族はオーガから進化した種族とも言われている！ 言わば、オーガは鬼族の下等生物だ！ そんな連中に、鬼族の頂点に君臨する美しき鬼姫が蹂躪されるなんて！ まさに神への冒瀆！ 控えめに言っても最高じゃないか！」

「き、貴様ああああっ！」

哄笑する皇帝へ怒りを露わに躍り掛かったのは、鬼族の戦士だった。

さらにはもはや我慢ならないと、彼に加勢する形で他種族の者たちまで一斉に皇帝に攻めかかった。

「馬鹿だねえ。君たちごときに僕を倒せるとでも？」

刀で斬り掛かった若い鬼族の戦士が、次の瞬間には天井に激突していた。

続く熟練の戦士も腕を捻られてあっさり地面に叩き付けられ、帝国騎士ながら皇帝に反旗を翻した青年も何もできずに宙を舞った。

さらに、皇帝の左右に魔法陣が展開し、二つの上級魔法が同時に発動する。

放たれた凄まじい冷気が、一瞬にして皇帝に躍り掛かるうとしていた者たちを氷漬けにした。

そんな中で、全身に浴びる冷気を物ともせず、皇帝に一撃を加えて見せたのは二足歩行の巨大な蜥蜴だった。

リザードマンである彼は、“四将”の最後の一人、獣將軍バロアだ。

「ふーん、君まで僕に刃向うんだ」

「な……」

だがバロアが渾身の力で放った拳を後頭部に受けながらも、皇帝は蠅でも止まったかな？とばかりに平然としている。

「これで四将も全滅だね。ま、元からあった奴をそのまま流用してみたってだけで、別にあってもなくてもどっちでも良かったんだぞさ」

「ぐっ!?!」

獣將軍バロアの巨体が宙を舞い、玉座の間の外まで吹き飛んでいった。

それでお終いだった。



「じゃあ続きをやるうか」

体術でも魔法でも各国の最高クラスの戦士たちを圧倒しておきながら、まるで何事も無かったかのように皇帝は笑う。  
ば、化け物……と誰かが呟いた。

「いやっ……や、やめてっ……やめてくださいっ……」

鬼姫は必死に訴えるも、興奮し切ったオーガたちはますます乱暴に彼女から衣服を剥ぎ取っていく。  
もはや誰一人として彼女を助けようとする者はいない。助けられる者もない。

が、そのときだった。

「控えめに言ってもクス野郎だな、お前」

突然、皇帝の背後からそんな声が聞こえてきた。

「……誰だい、君は？」

振り返った皇帝は眉をひそめる。

見たことのない男がそこにいた。  
いつの間にそこにいたのか。

まるで気配に気付かなかったことに、皇帝は内心でかなり驚いていた。

「不本意なことに、お前と同じ異世界人だよ」

男は吐き捨てるように言った。

## 第65話 チート対チート

「不本意なことに、お前と同じ異世界人だよ」

俺は吐き捨てるように言っただけだ。

「……へえ」

そいつ 鑑定・極 で調べてみたら、ライトというらしいので今後はそう呼ぼう。ていうか、キラキラネームだなあ は余裕ぶって笑ってみせたが、内心の動揺を隠し切れていなかった。増長しているが根は小心者のようだ。

「なるほど君か。僕の計画を散々邪魔してくれたのは。それにしても、どうやってここまで来たんだい？ 転移魔法かな？ でも、一度行ったことのある場所じゃないと行けないはずだよね？」

サマンザとこの場所はかなり離れている。

当然ながら 探知・極 の範囲外だ。

だが俺は 鑑定・極 で桜花の記憶を読み取った。

お陰でこの場所のことを頭の中にイメージすることができ、転移が可能になったのだ。

まあ、それをわざわざこいつに教えてやる義理なんてないけどな。

「オグルアッ！」

「ひいつ」

と、そんなことを考えている間も、オーガたちが鬼姫の少女を襲っていた。

おっと。まずあっちから先にどうにかしないとな。

「オーガどもは 死ね」

俺がそう呟いた直後、オーガたちの目から光が失われた。動きも停止する。

そして、どさどさとその場に倒れ込んだ。

オーガたちは死んでいた。

「え？ え……？」

鬼姫は何が起こったのか分からず、目を白黒させている。ライトが声を荒らげた。

「お前っ、今、何をした……っ？」

「ちよつと呪いをかけただけだ」

呪術・極 を使い、呪い殺してやったのだ。

俺が教えてやると、ライトは若干頬を引き攣らせつつも、

「……なるほど。それが君のスキルというわけかい？」

「ああ」

「く……くくくっ……くははははっ！」

おいおい、こいつ、いきなり大声で笑い始めたぞ？  
しかもいかにも悪役のテンプレっぽい笑い方だ。

とかなんとか思っている、

「  
ステイル  
窃盗　！」

ライトが俺に向かって右手を翳し、いきなりそう叫んだ。  
その瞬間、俺の中から何かが喪失する感覚があった。

「……今のは……」

「ははははっ！　馬鹿だねえ！　僕の前であっさりスキルを発動しちゃうなんて！」

ライトはまた笑い始めた。

そして訊いてもいないのにぺらぺらと教えてくれる。

「僕が女神から貰った力は　ステイル　窃盗　っ！　これはねえ、使用するときを見さえすれば、どんなスキルだろうと奪うことができるというもののさ！」

「へー」

確かに俺の　呪術・極　はこいつに奪われてしまったようだ。  
うわー、たいへんだー（棒読み）。

「もつとも、最初はただ相手の物を盗むだけのスキルかと思っていたんだけどね。だから友人たちと一緒にこの国に勇者候補として転生したとき、僕だけが失格の烙印を押されてしまったんだ。こんな盗賊が持つようなスキルを持っているなんて危ない奴だと、仲間たちも僕を遠ざけた」

なんか勝手に身の上話を始めたぞ……。

「だけどあるとき僕は気づいたのさ！ このスキルには、相手のスキルを盗む力もあるんだってねえ！」

それさつきも聞いた。

大事なことから二回言ったのだろうか。

「そこから僕の快進撃が始まったのさ！ この世界でスキルの存在はほとんど知られていないけれど、スキルを持っている人は多い。言わば才能だね。僕はその才能を 窃盗 を使って奪い続けた。もちろん、僕を見捨てた友人たちからもスキルを奪ってやったさ！ ただの一般人に成り下がったときの彼らの顔ときたら……あはっ、あはははははっ！」

ライトは腰を折って大笑いし、

「君ももつともつと絶望すればいいよ！ スキルのない転生者なんて、もはや」

俺はライトが余所見している間に転移魔法を使った。

ライトの背後に移動。

後頭部を掴むと、床に叩きつけてやる。

「ぐべっ！？」

床が割れ、破片が四散した。

「なっ、何をするんだ……っ！」

ライトは俺の腕を振り払い、すぐに起き上った。

額から血が垂れていたが、どうやら自然治癒力を高めるようなス

キルも持っているらしく、すぐに血が止まる。

「話が長い。あと笑い方がキモイ」

「く……くふふふ、くはははっ、スキルを奪われたというのによくそこまで横柄な態度を取っているからかい？　ただで残念、それもたつた法系のスキルを持っているからかい？　だけど残念、それもたつた今、僕の前で見せてしまったよねえ！　窃」

俺は剣を抜き、ライトに斬り掛かった。

「　　つと！」

ライトも咄嗟に剣を抜き、俺の斬撃を受け止めた。  
なかなかの反応だ。

「へえ、よく分かったねえ。それともマグレかい？　実は集中しないと僕は　窃盗　を使えないんだ。だからこうして接近戦を始められちゃうと嫌なんだよねえ」

言葉とは裏腹に、ライトは余裕そうだった。  
自分からそんな弱点を話しちゃうような阿呆は大抵負けるんだけどな。

「もつとも、　剣才　と　闘将　のスキルを持つ僕に、接近戦で敵う相手なんていないだろうけどねえ！」

俺の剣を受けるだけだったライトが、急に攻めに転じてきた。  
目にも止まらぬ速度で次々と繰り出される斬撃。  
刀身は強い闘気を纏い、その一撃一撃が重い。

まあ、闘神と武神を持つ俺には大した攻撃じゃないけどな。

「っ……ど、どういうことだっ？　なぜ僕の剣が通じない……っ！」

俺を一向に攻め崩せず、さすがに焦り始めたようだ。

「こ、皇帝陛下と互角に渡り合っている……っ？」

「何者だ、あの男は……？」

さつきから俺たちの攻防を見守っていた観客たちが、口々に驚きの言葉を口にする。

てか、このままだと彼らを巻き込んでしまいそうだな。

俺は戦場を移動することにした。

転移魔法を使って、外へ。

「っ……」

「ここなら思いっきりやれるだろ？」

俺とライトは街から一キロ、上空五百メートルほどのところに転移していた。

ライトも風魔法で空を飛べるらしく、俺と対峙して宙に浮かんでいる。

「……だったら見せてあげようじゃないか。僕の奥の手を」

ライトが低い声音で唸るように言った。

直後、俺の背後に突如として魔法陣が展開していた。



発射された炎の塊を、俺は飛行魔法でギリギリ回避する。

ライトが詠唱した様子はなかった。

つまりあいつは今、無詠唱で魔法を発動したのだ。

逃げたその場所に、また別の魔法陣が展開する。

しかも今度は二つ同時だ。

飛来した氷の矢を、俺は咄嗟に加速することどころにか躲した。

「はははっ、どうだい、すごいだろう？　無詠唱　と　並列思考

のスキルを持つ僕だからこそできる、魔法の同時多重発動だよ！」

ライトは高らかに種明かしをしてくれた。

二つ以上の魔法を同時に発動することは不可能ではないが、二つ以上の魔法陣をまったく同時に展開するのは不可能だ。

なぜなら二つの詠唱を同時に行うことが不可能だからだ。まあ口が複数あれば可能かもしれないが。

普通は口が一つしかないので、どんなに高速で詠唱したところで必ずタイムラグが生じてしまう。

だが無詠唱発動ができ、かつ複数のことを同時に思考できる能力を持つなら、この問題は解決する。

「なるほど。奥の手というだけのことはあるな」

次々と魔法陣が虚空に現れる。

しかも無詠唱のため、気が付いたときにはもう魔法が発動されている。

なかなか厄介な攻撃だった。

「はははっ、ちょこまかと！　どうやら逃げるのだけは上手のようだねえ！　だけど、これならどうだい！？」  
「おっ？」

俺の周囲を取り囲むように、無数の魔法陣が出現していた。  
全部で十……いや、十五はあるか。  
しかもそのすべてが上級魔法だ。  
逃げ道はない。呪文を詠唱している暇もない。

「あははははははっ、終わりだねえ！　僕に逆らったことを後悔しながら死んでいきなよ！」

ライトは勝利を確信したらしく、一際大きな哄笑を轟かせた。

そんな彼に残念なお知らせがあります。

「いや、これくらいのこと俺にもできるぜ？」

こっちも無詠唱による魔法の同時多重発動を使い、対処することにした。

俺の周囲に一瞬にして十五の魔法陣が展開される。

「……へ？」

あっさり奥の手を真似されたライトは、何とも間の抜けた声を漏らしたのだった。

第66話 転生担当女神が100人いたのでチートスキル100  
個貰えた

俺が発動した計二十の魔法が、ライトの魔法をあっさり押し返していた。

「……ど、どいう、ことだい……？」

しばらく呆然としていたライトが、声を絞り出すようにして訊いてくる。

「まさか、お前も無詠唱ができるのか……？ くそっ……ならばこれはどうだっ！」

ライトは続いて超級魔法の魔法陣を展開させた。  
まだやる気か。なかなか往生際の悪い奴だな。

「超級魔法 プリムストーン 地獄ノ業火」  
「超級魔法 プリムストーン 地獄ノ業火」

俺もまったく同じ魔法で対抗する。

二つの火炎放射が激突し、凄まじい熱風が一带に吹き荒れた。  
うお、さすが超級魔法同士……むちゃくちゃ熱い……。

「っ……ば、馬鹿なっ……しかも、僕の方が押されているだ……っ！？」

ライトは全力で飛行し、迫りくる火炎の渦をギリギリ回避した。

「はあっ、はあっ、はあっ……だ、だけど、超級魔法の魔力消費量は甚大！　そう何度も放つことはできないだろう！　しかし僕には魔力回復のスキルがある！　ははははっ！」

息を荒らげながら、ライトが勝ち誇ったように笑う。

こいつ、この状況でまだ自分の方が上だとも思っているのだろうか。どれだけプライドが高いんだよ。

俺はその希望を完全に打ち砕いてやることにした。

「神級魔法　　大罪浄化ス煉獄ノ炎　」

「し、し、し、神級魔法だとおおおっ！？　ぼ、ぼ、僕ですら使えない魔法だぞっ！？　く、くははははっ、なるほど、ただのはったりだな！　しかも超級を遥かに超える魔力消費量の神級魔法など、さつきから魔法を使いまくっている君に使えるわけが　」

虚空に超巨大な立体魔法陣が顕現した瞬間、ライトの笑みが凍った。

「う、うそ、だろう……？」

「避けないと死ぬぜ？」

世界が真っ赤に染まった。

まるで太陽が地上に降って来たかのようにだった。

魔法陣から吹き出した超々高熱の火炎の竜巻。

それが太陽フレアのような爆発現象を引き起こしながらライトに襲いかかった。

「ひiiiiiiiiっ！　て、て、て、転移魔法……っ！」

ライトは必死に転移魔法で逃げた。こいつも一応使えるらしい。次の瞬間、つい先ほどまで彼がいた場所を炎の大瀑布が呑み込んでいく。

初めて神級魔法を使ったけど、出鱈目な威力だな。

上方向に放ったから、たぶんそんなに被害は出ないと思うが…。

「窃盗 ツ！」

突然、背後から声がした。

転移魔法で移動したライトがそこにいた。

「は、はははははっ！ 馬鹿め！ 馬鹿め馬鹿め馬鹿めええっ！ 油断したな！ 油断したなああっ！ お前のその規格外な魔法スキル、僕が奪ってやったよ！ あははははっ！」

どうやら俺の 自然魔法・極 が奪われてしまったようだ。そのせいで飛行魔法が使えなくなり、俺の身体が落下を始める。

「あははははははっ！ 残念だったねえええっ！ このまま地面に叩き付けられて終わりだよ！」  
「じゃあ返してもらっわ」

俺は 強奪・極 を使った。

自然魔法・極 が戻ってくる。

ついでに奪われたままだった 呪術・極 も返してもらった。

俺が再び飛行魔法で宙に浮かぶと、ライトはもう何度目か分から

ないアホ面で、

「…………ど、ど、どういうことだ…………？」

「俺が持っているスキル　強奪・極　で奪い返したんだよ。ちなみにこれ、名前からも分かる通りお前の　窃盗　の上位互換だからな」

「な…………ん、だと…………っ？」

「あとついでに言っておくと」

愕然とするライトへ、俺はさらなる絶望を突きつけてやった。

「俺はお前の　剣才　の上位互換スキルである　武神　を持っているし、

お前の　闘将　の上位互換スキルである　闘神　を持っているし、  
お前の　無詠唱　の最上位スキルである　無詠唱・極　を持っているし、

お前の　大魔導師　の上位互換スキルである　自然魔法・極　を持っているし、

お前の　並列思考　の最上位スキルである　並列思考・極　を持っているし、

お前の　魔力回復　の最上位スキルである　魔力回復・極　を持っている」

「な…………な…………な…………な…………」

「それだけじゃないぜ。

俺はお前の　自然回復　の最上位スキルである　自然治癒・極　を持っているし、

お前の 威圧 の最上位スキルである 威圧・極 を持っているし、  
お前の 怪力 の上位互換スキルである 身体強化・極 を持っているし、  
お前の 索敵 の上位互換スキルである 探知・極 を持っているし、  
お前の 動体視力 の上位互換スキルである 五感強化・極 を持っている」

「な……な……い、一体つ……一体お前は幾つのスキルを持っているというんだああつ……！？」

「 百だ」

「ひゃ、ひゃ、百だとおおつ！？ ば、馬鹿を言うなっ！ そんな多くのスキルを持っているはずがない……っ！ 女神から貰えるスキルは、通常一つ、多くても二つか三つのはずだ！ ……っ、そ、そうか！ 君もその 強奪・極 で他人のスキルを奪ったのだなっ！ この偽善者め！ 貴様だって、所詮は僕と同じじゃないか！」  
「そんなことしてねーよ」

唾を散らして喚くライトに、俺はやれやれと肩をすくめながら否定する。

「嘘を吐け！ そうでないと説明がつかないだろう！」  
「ちなみにお前、なんていう女神からスキルを貰ったんだ？」  
「女神ソーナだ！ それがどうした！？」

女神ソーナか……確か、いたよう、な……？

俺は 博覧強記・極 を使い、頭の奥底に眠る記憶を呼び覚ます。

あー、こいつか。

そしてさも覚えていたフリを装って、

「ああ、覚えてる覚えてる。結構印象的なやつだったし。左右で目の色が違ってて、髪は虹色だろ？」

「っ、君も同じ女神だったのか……っ!？」

「確か、八十七番目だったな」

「八十七番目……？ な、何を言っている……？」

まあそつだよな。

普通は何言つてんだこいつつてなるよな。

俺だって最初は訳が分からなかったし。

「俺さ、転生担当女神が100人いたんだよ」

「……は？」

またもアホ面を晒すライトに、俺は真実を告げた。

「転生担当女神が100人いたから、チートスキル100個貰えたんだよ」



第66話 転生担当女神が100人いたのでチートスキル100  
個貰えた(後書き)

基本属性魔法・極 を 自然魔法・極 という少し汎用性の高い  
スキルに変更します。

## 第67話 みんなペットにするの？

「ば、ば、ば、馬鹿なっ……あ、あ、あ、ありえない……っ！」

わなわなと唇を震わせるライト。

「信じるかどうかはお前の勝手だ」

Mr.都市伝説みたいな言い方になってしまった。  
怯えるライトに、俺は構わず近付いていく。

「ひ、ひいっ！ く、来るなああっ！」

ライトは背を向けて逃げ出そうとした。

だがジタバタと宙を泳ぐだけで、その場から移動することができない。

「逃げられないぜ？ だって今のお前は、俺の飛行魔法でそこに浮かんでるだけだからな」

「ど、ど、どういうことだっ？ くそっ、転移魔法……っ！ 転移魔法っ！ っ！？ な、なぜ発動しない！？」

「言っただろ？ 俺にはお前の 窃盗 の上位版、 強奪・極 があるって」

「ま、まさかっ……」

「お前のスキル、すでに俺が全部奪ってやったぜ」

「~~~~~っ！！！！！！！！」

ライトが愕然と目を見開く。



「アッ

！……！……！……」

「暫定的にこの国の皇帝になることになったカルナだ。よろしくな」

玉座に腰かけた俺は開口一番そう告げた。

「ま、まさか、あの皇帝が破れるなんて……」

「し、信じられない……」

俺の前に跪くこの国の文官武官とその他諸々。

彼らは一様に蒼ざめた顔をしていた。

めっちゃ俺にビビってる。

まあ無理もないか。

前回の皇帝があんな奴だったわけだし。

「……あひやひや……あひや……オーガのお いんぽが……僕の中に……ひやははあ……」

その前皇帝のライトは俺の足元に転がり、ぶつぶつと呻き声を漏らしていた。

「一体何をしたんですか？」

「酷いうわ言を呟いているが……」

と、呆れ顔で訊いてきたのはティラとエレンだ。

知りたいなら後で事細かに教えてあげよう、ふふふ……。

「しゅごいしゅごーい！ パパがこーてーっ！」

「……この国、暑い」

彼女たちだけでなく、フィリア、シロも俺の背後にいる。

フィリアはやたら目をキラキラさせているが、シロは興味なさそうに服を脱ごうとしている。おいこら、こんなところで脱ぐな。

転移魔法でいったんNABIKOのところまで戻り、また転移魔法でここまで連れてきたのである。ちなみにルシーファもさっきまで居たんだが、「美女のにおいがしますわああっ」と叫んで後宮の方に行ってしまった。

ほら、やっぱり俺の人間性の素晴らしさを証明してくれる子たちがいた方が信頼してもらいやすいだろ？

と思っていたら、フィリアがとんでもない爆弾を投下してくれた。

「パパー、みんなペットにするのー？」

「ちょ、フィリアたん！？」

この状況で何言っちゃってるの！？

お願いだから空気読んで！

「くっ、やはり今度の皇帝も国民を奴隷としか思っていないのか…

…」

「いや奴隷どころかペット扱いだぞっ……………」

「見ろ！ 後ろに首輪を付けさせられた少女がっ……………」

「幼女までペットにしているのか……………」

うおおおっ、しまった！

シロの首輪のせいで説得力が……………っ！

しかもフィリアのことも完全に勘違いされている。

「我々まであんなふうに……………」

「いやさすがに男までは……………」

「だが見ろ、前皇帝のあの様子……あれは恐らく……」

「まさか、両刀使いだということのか？……」

いやないから。絶対ないから。

ていうか、ひそひそ言っただけの全部聞こえてるからな？

「あ、安心しろ。俺にそんなつもりはない」

慌てて取り繕うが、しかし彼らの不信に満ちた表情は変わらない。

俺と同じ異世界人のせいで色々と酷いことになっているこの国を、  
どうにかしてやらないかと思っただけで自ら皇帝を志願したんだが、やっ  
ぱ辞めておけばよかったぜ……。

「パパー、フィリアもこーてーやりたーい！」

「お、そっか。じゃあフィリアに任せませ！ 頑張れよ！ 我が家  
は自主性を重んじる教育方針だからな！」

「わーい」

「冗談ですよー！？」

いや、割と本気だぞ？

「パパのいうことをきくのーっ！」

と、フィリア皇帝陛下からのお言葉をいただいたので、俺は早速改革を始めることにした。

ちなみに今の俺の立場はこの国の「すーぱーだいじん」である（フィリアが新しく作った役職）。

「とりあえず人質はすべて返還。こいつが皇帝になってから属国や植民地にされた国は、全部独立させて元通りにする」

各国の代表者たちがどよめいた。

「ほ、本当ですか……っ？」

「で、ですが、やはり無条件という訳ではありませんまい……？」

「いや、無条件だ。どころか、こつちから賠償金を出す。どの国も筆り取られまくって、かなり貧窮しているみたいだしな」

「賠償金っ！？ 我々ではなく、そちらが支払うと！？」

「なっ……なんと！」

俺の提案に驚愕する各国代表者たち。

しかし慌てたのはこの国の高官たちだ。

「そ、そんなことをしては、今度は我が国が傾きます……っ！」

「侵略には多額の戦費がかかったのですぞ……っ？」

「くちごたえはゆるさないの！」ズゴーン！（フィリアが床板を踏み抜いた音）

「ひいひいっ……」

「……その辺については考えがある。っーか、そもそもこの国はまづ無駄な支出から」

それから俺は大蛇を振るって様々な改革を断行しまくった。  
当然、俺に執政の経験なんてあるわけないのだが、政治経済・



極 や 指揮統率・極、 未来予測・極 なんかのスキルがあるし、まあ間違ったことはしないだろう。

あと、あくまでフィリアは暫定の皇帝なので、ちゃんと後釜を用意しなければならぬ。

次期皇帝の候補は、ライトが来るまで王族だった連中だ。

それが一番波風が立たなくていいんだが、王族もなかなか微妙な奴が多くて頭を悩ませる。もちろんライトよりは遥かにマシだが。

「というわけで、君に決めた！」

「きめたーっ！」

俺（とフィリア）が指名したのは前々皇帝の第八皇子。

思わずハッとさせられるような美少女 ではなく、男の娘

である。

「えええっ、ぼ、ぼ、ぼくですかあああっ？」

「うん。だって可愛いから」

## 第68話 そんな成長は望んでない

「というわけで、君に決めた！」

「きめたーっ！」

「え、えええっ、ぼ、ぼ、ぼくですかあああっ？」

俺（とフィリア）が居並ぶ王族・貴族たちの前で指名してやると、彼は頓狂な悲鳴を上げた。

色々考えた上で俺が選んだのは、ライトに王位を奪われた前々皇帝の第八皇子。

まだ十二歳の少年だ。

というか、男の娘。

煌めく銀色の髪に綺麗な碧眼。小柄で細身の身体つき。顔立ちは端正で可憐。どう見ても少女にしか見えない。名前はジーナという。

「そうだ。次期皇帝はお前だ、ジーナ」

「ど、どうしてぼくなんですか……？」

彼女、じゃない、彼の疑問ももつともだ。

帝位継承順位が低い上、母親が平民、しかも特段優れた才能もないとされている。

普通ならまず間違いない皇帝にはなれなかっただろう。

だが俺は確たる自信を持って告げた。

「だって可愛いから」

「どんな理由で選んでるんですか                      ツ!？」

ティラツツコミである。

「じゃなかった。えっと、あれだ。あれ。そう。ビビツときた」  
「は、はあ……」

実際のところは俺の 鑑定・極 の結果だ。  
彼は王族たちの中で唯一 賢帝 というスキルを持っていたのだ。  
今はまだ頼りないが、きっと良き皇帝になってくれるだろう。

まあ 鑑定・極 で他の王族たちを詳しく調べてみたら、ロクでもない奴も多くて消去法的に彼にせざるを得なかったというのもあるんだが……。

「む、無理ですよお……」

しかしそんなことは知らないジーナは、内股でもじもじしながら弱々しく首を振る。

その仕草は完全に女の子だ。かわいい。そっと抱きしめてやりたい。  
い。

「大丈夫だ。俺が保証する」

「ほ、ほんとに、ばくでも皇帝が務まるのですか……?」

上目づかいで恐る恐る訊いてくるジーナ。  
うわ、なにこれ。すげえかわいい。ぎゅっと抱きしめてやりたい。

「ああ、安心しろ。俺が手取り足取り教えてやるから……ハアハア」

「ちょ、何で興奮してるんですか！？ 手取り足取り何を教えるつもりですか！？ 全然安心できませんから！」

ハッ、いかんいかん……。

つい、可愛ければ別に男の子でもいいかなとか思ってしまった。

「……や、やはり両刀使いだっただのか……」

「しかも少年愛……」

おいこらそこ聞こえてるから。

今のはちよつと血迷いかけただけだから。

「は、はいっ！ 頑張りますう……っ！」

ジーナは胸の前でぎゅつと両手の拳を握り、女の子がよくやる「がんばる！」というポーズを取った。

「一緒に頑張ろうグヒュヒュ……」

さすがは 賢帝 のスキル持ちで、ジーナは非常に優秀だった。俺が教えることを、スポンジのように見る見るうちに吸収していた。

一応同時並行で彼を支えられる人材の育成も行っているし、この様子ならそう遠くない内に帝位を譲ることができそうだ。

一方、彼はエレンからは剣の指導も受けていた。

「ぼく、もっと男らしくなりたいんです！」

「あたしの訓練は厳しいぞ！」

「か、覚悟の上です！」

「よし、ならばあたしが貴様を男にしてやろう！」

などと、やけに熱血なやり取りをしてたっけな。

まあどんなに鍛えたところで、そう簡単に染みついた女の子っぽさは抜けないだろう。

と思っていたのだが

僅か二週間後、ジーナはマッチョイケメンになってました（泣）。

分厚い胸板、盛り上がった上腕二頭筋、太い前腕、割れた腹筋。まるでその筋肉を見せびらかすかのように、タンクトップのシャツ一枚だけを着た彼は、

「カルナ先生。これでオレも少しは皇帝に相応しい男になりましたかね？」

しかも言葉使いまで変わってしまったあああっ！？

「ああ、いいぞ、ジーナ！　もうどこからどう見ても貴様は男の中の男だ！」

自信満々で宣言するエレンに、俺は全力で詰め寄った。

「何やってんだよ、エレンっ！　おまつ……ダメだろ！？　これはダメだろ！？」

「……貴様は何を言っているのだ？　しっかり筋肉が付いて、男らしい身体つきになったではないか？」

まったく理解できない、という顔で首を傾げるエレン。

「それがダメだって言っただよ！　男の娘をマッチョイケメンにするとか、誰得だよ！？　あんなに可愛かったのに！　あんなに可愛かったのに！　あんなに可愛かったのに！」

俺はただただ慟哭するしかなかった。

「俺のジーナたんを返せええっ！」

「あたらしいこーてーとしてがんばるの！」  
「はっ、謹んでお受けいたします」

フィリアからジーナへと、皇帝の証したる聖冠が授与された。

ジーナ皇帝誕生の瞬間である。  
万雷の拍手が鳴り響いた。

「……ああ、これでもう、あの理不尽なのになぜか興奮を覚えてしまつ罵倒を聞くことができなくなるのか……」

「……もつと罵られたかつた……」

「……フィリアたんハアハア……」

新皇帝の誕生を喜ぶ声に混じつて、前皇帝を惜しむ声もちらほらと聞こえてくる。

いや、そんな変態はごくごく一部だけだな？

でないとこの国の将来が心配になる。

まあ二割くらいか。

……多くね？

「ありがとうございます、カルナ先生。オレが皇帝になれたのは先生のお陰です」

戴冠式の後の祝賀会で、ジーナは真つ先に俺に声をかけてきた。  
相変わらずマッチョイケメンのままである。くそう……。

「そ、そうだな……。だが大変なのはこれからだ。お前が皇帝になったことを良く思っていない連中も多いしな」

「心配は要りません。オレは強くなりました。そんな奴らはぶつ飛ばしてやればいいんです」

ジーナは鍛え上げられた上腕二頭筋を見せつけながら言う。

「え？ いや、そこは暴力で解決しちゃダメだろ？ 俺が言うのも  
なんだけど……」

あれ、おかしいな？

俺、もつとちゃんと教育したはずだったよな……？

俺が思わず首を傾げていると、そこへエレンがやってきた。

「そうだ、貴様は強くなった！　あたしの厳しい訓練によくぞ耐え抜いた！」

「エレン師匠っ！」

「あたしが教えた通り、どんな困難も力で捻じ伏せていくのだ！」  
「うっす！」

どうやらエレンによって頭まで脳筋化してしまったようだった。  
うん、これは再教育が必要だね。

色々と予定外のこともあったが、レイン帝国の立て直しを概ね終えた俺たちはこの国を発つこととなった。

元々俺たちは部外者だ。これ以上この国に干渉し過ぎるのもよくないだろうし、もう俺たちがいなくてもやっていけるだけの土台はできている。

最後のあいさつをするために謁見の間を訪れると、玉座に腰掛けるジーナはすでに涙目になっていた。

「ふええ……ほんとに、行っちゃうんですね……」

「ああ。元から長居するつもりはなかったからな。けどジーナ、今



のお前なら立派に皇帝としてやっていけるはずだ」

「うう………すごく不安ですけど………ばく、なんとか頑張りますう………っ！」

ジーナは涙を拭くと、胸の前でぎゅっと両手の拳を握り、女の子がよくやる「がんばる！」というポーズを取った。かわいい。頭撫でながら抱きしめてやりたい。

「って、何でジーナさん元のキャラに戻ってるんですか  
ッ  
!？」

ティラの声が謁見の間に響き渡った。

「しかも見た目まで元に戻ってるんですけどっ？」

「戻した。やっぱりジーナさんは男の娘じゃないとダメだ」

「戻したって！　どうやったんですか！？　あの筋肉はどこに行っ  
たんです!？」

「そ、それをぼくの口から言うのは………は、恥ずかしいですう………」

頬を赤く染め上げ、恥ずかしそうに顔を俯けるジーナ。

「ティラ。世の中には知らない方がいいこともあるんだよ」

「何をしたのか物凄く気になるんですけど!」

「くっ………あたしがせっかく強くしてやったというのに!」

ティラが咆哮じみた悲鳴を上げる一方で、エレンが悔しげに拳を握り締めている。

「あ、そうそう。もし何か困ったことがあったら、こいつを頼ってくれていいぞ」

そうして俺が紹介したのは、俺だった。

「えええっ！？ カルナさんが二人いるっ！？」

「どうも、俺はカルナ2号だ」

「まあ双子みたいなものだと思ってくれていいぞ」

影分身・極 という、その名の通り自分の影分身を作り出すチートスキル。

同時に何体でも生み出すことが可能で、しかも時間制限なしなのだが、その分、能力が等分されてしまうという欠点もある。

なので俺はこの分身体に、最低限の戦闘力とこの国に必要なスキルだけを渡しておいた。

カルナ2号

種族：影分身

レベル：40

スキル： 政治経済・極 指揮統率・極 怪力 索敵

動体視力 剣才 闘将 無詠唱 大魔導師 並列思考

魔力回復 自然回復 威圧

それでもAランク冒険者以上の強さはあるんだけどな。  
なお、スキルの大半はライトから奪ったものだったり。

ちなみに影分身の容姿や性格は、少しカスタムすることができる。  
性格は真面目に。

そして顔はちょっと俺より不細工にしておいた。

『……さもしいですね』

え？ 何か言ったかね、ナビ子さんや？  
まあ元がイケメンだからこれでも十分にイケメンだけどな！

『……………』

## 第69話 出会ってしまった二匹の変態（前書き）

なんか勢いで誰得な話を書いてしまいました。。。2話で終わります。

## 第69話 出会ってしまった二匹の変態

オレの名はギース。

アルサーラ王国の王都の冒険者ギルドで、ギルド長 だった男だ。

クビになってしまったのは、執務室でオ ニーをしているところを、受付嬢のリユーナに見られてしまったことがきっかけだ。ちなみに体勢はV字開脚。

ちゃんとノックをしたらしいのだが、どうやらシコるのに夢中でオレは気が付かなかったらしい。

さらに最悪だったのが、彼女に見られてしまった驚きで、つい発射してしまったことだ。思いのほか飛距離も出てしまい、彼女の靴に引っ掛かってしまった。

俺はこの一件を揉み消そうとした。

だがリユーナは冒険者たちからも人気のある美人受付嬢だ。

そんな彼女がショックで寝込んでしまったこともあって、このことは瞬く間に冒険者たちの間に広がってしまった。そして大規模なボイコットが起こったのである。

彼らの要求はオレの解任だった。

オレは当初こそ強気で抵抗したが、ギルドの職員たちからも猛反発に遭い、ギルド本部からも見放され、結局、辞職することになってしまったのだ。

くそ！ 男なら誰だって一度や二度は興味本位で外でやったことあんだろ！？ オレの場合、その場所が執務室で、毎日だったってだけだ！

しかも退職金も出ねえとか、オレがどれだけ今までギルドに貢献してきたと思ってるんだよ！

不満は幾らでもあるが、もうどうしようもない。

幸いギルド長は解任されたが、冒険者をクビになった訳ではない。これからはまた一冒険者として、地道に活動していくしかなさそうだ。

しかしこれはこれでいいかもしれないと、オレは思い始めていた。しがらみの多いギルドマスターと違い、今のオレは自由だ。どこにだって行ける。

そう思うと、ふと脳裏にある少女の顔が浮かんた。

「……ああ、またあの子に肥溜めでも見るかのような目で見られてえなあ。罵られながら雷撃を浴びてえなあ」

たった一度の邂逅だったが、今もなおオレはあのとときの興奮を鮮明に覚えている。

あれ以来、ギルドで見かけることはないので、エルフの里に帰ってしまったのかもしれない。

よし、決めた。

オレは再びあの子に会おう。

この想いをぶつけるんだ！

そして雷をぶつけてもらうんだ！

こうしてオレの旅が始まった。

エルフの里に向かい、王都を出発したオレは街道を進んでいた。

すると途中、二匹のゴブリンと交戦している旅人を発見する。

ゴブリンは最弱の魔物だ。武器を持った普通の大人なら、二匹程度、一人でもどうにか

「……なりそうにねえな」

旅人は大いに苦戦していた。

剣を振っているが、まるでなっちゃいねえ。

しかたねえな。

オレは嘆息しつつ、旅人を助けてやることにした。

頭にフードを被っているため顔は見えないが、もしかしたら若い女の子かもしれないという打算もあった。

「おらっ」

「ギャギャ!？」

「ふん!」

「グギョ!？」

俺は二振りでゴブリン二匹を仕留めると、息を荒らげている旅人を振り返った。

フードが脱げ、顔が露わになっていた。

「た、助かりましたぞ！」

残念過ぎることに、齢七十は超えていようかというクソジジイだった。

不思議なことになぜか執事服を着ている。

「このライオネル、若い頃はオークを倒したこともあるのですが、まさかゴ布林相手に苦戦するとは。いやはや歳は取りたくないものですな」

どうやらライオネルという名らしい。

「おい爺さん、悪いことは言わねえから、その実力で一人旅は止めた方がいいぜ。まだ王都は近い。とつとと帰りな」

オレはそう忠告してやる。  
だがジジイは首を振った。

「そういう訳にはいきませぬ。わしは姫様のところに行かねばならぬのです」

「姫様？」

「第三王女のエレン殿下のことでございますぞ」

「っていうと、元騎士団長の？」

とんでもない脳筋として知られ、騎士団長も務めていたエレン王女だったが、つい先日、突如として団長を辞めて旅に出たのだ。国民の誰もが知っていることである。

しかしその理由までは誰も知らない。



国王と喧嘩して家出したとか、男と駆け落ちしたのだとか、毎度お馴染みのお騒がせだとか、色々と噂されてはいるが。

まあオレの鋭い勘で言わせてもらえば、駆け落ちの可能性が高いな。

男みたいな性格の女だが、だからこそ一度惚れたら一直線。周囲に反対されようと恋を貫くに違いねえ。はっ、青春だなア、おい。

聞いてみれば、どうやらこのジジイはその第三王女の執事だったらしい。

道理で執事服を着ているわけだ。

……いやいやいや、旅をするときまで着てるのはおかしいだろ？

「で、あんたはあのお転婆姫を連れ戻すようにと、王様から命じられたって訳か。ったく、ひでえ話だぜ、こんな年寄りを」

「いえ、むしろ王様からは止められました」

「止められた？　だとしたら、なんであんたは？」

「もはや老い先短いこの身……。だから、もう一度！　もう一度だけでいいのです！　もう一度、姫様に痛めつけていただきたいのです！」

お、おう……？

「ああああっ！　姫様に殴られたい！　踏みつけられたい！　そのためならどこへだって行きますぞおおっ！」

どうやらこのジジイ、特殊な性癖を持った変態のようだ。オレは自分のことを棚に上げてそう思った。

「まあ、好きにしろや。オレは先に行くぜ。オレはオレでエルフの

子を探さねえとならねえしな」

「エルフでございますか。そう言えばあの方の雷撃も、姫様が振るわれる暴力に負けず劣らず素晴らしいものでしたなあ……」

雷撃、だと？

「ちよつと待て、爺さん。もしかして雷魔法を使うエルフのこと知ってんのか？」

「ええ。姫様と一緒に旅に出ていかれた方でして」

「マジか！？ それを早く言いやがれ！ どこに行った！？」

「聞き込みを行ったところ、エクバーナに行くと話していたとの情報を得ましてな。まずはそちらに行ってみようかと考えておりまして」

「エクバーナか！」

これは有力情報だ。

そう言えば、城に伝手があるとか言ってたっけな。

あれは王女のことだったのか。

ん？ となると、王女が駆け落ちした相手ってのはあのカルナとかいう野郎なのか？

はっ、やるじゃねえか。

「よし、どうやらあんたとオレの目的地は同じらしい。仕方ねえから一緒に行ってやらあ」

「おお、それは心強い。ぜひお願いいたします」

こうしてオレはジジイと共に旅をすることになったのだった。

## 第70話 出会ってしまった三匹の変態

数日かけてオレたちが辿り着いたのは、アルサーラ王国とエクバーナのちょうど国境付近に当たる山岳地帯だった。

「明日は山を越えないとなんねえから、夜明け前には起床するぞ」

「老体にはなかなか辛いですよ」

「どうせあんたはいつも早起きだろうが」

山中で夜になってしまつては危険だ。

そのため山越えのためには早朝に出発するのが常識だった。

翌朝まだ暗いうちに起き出した俺たちは、宿の食堂で朝食を取る。山越えの客が多いこともあって、こんな時間からでも稼働しているのだ。

しかしその割には客が少なえな？

この町から行くルートが、エクバーナへは最短のはずなんだが。

そんなオレの疑問を察したのか、宿の女将が教えてくれる。

「実は最近、山に奇妙な犬男が棲み付いてしまつてねえ。みんな気味悪がつてしまつて、別のルートからエクバーナに行くことが多くなつちまつたんだよ」

犬男？

なんだそれは？

「別に何にもしてこないらしいんだけど……一応、あんたたちも近

くを通るなら気を付けなよ」

意味不明だが、女将が冗談を言っているようには見えなかった。  
オレとジジイは首を傾げつつ、宿を出た。

「もしかして新種のモンスターではないですかの？」  
「さあな」

山道を登っていく。  
かなり険しい道のりだ。

女将が言っていたのはこの辺りのはずだが……まあ、どうせ山に  
棲みついている猿か何かを見間違えただけだろう。  
そんなオチに違いはないと思っていると

「わんわん」

なんかいた。

若い男だ。

まだ二十歳くらいだろうか。  
ちよつと薄汚れてはいるが、イケメンと言ってもいいだろう容姿  
をしている。

つまりそう、普通に人間だ。  
服もちゃんと着ている。

なのに、なぜか首輪をしていて、そこからリード……というか、  
鎖が伸びていた。

そして犬のような座り方で、泣き声も「わんわん」。

「……犬男だ」

「そうでございますな」

このジジイはなぜか平然としているが、あれはヤバイ。  
旅人や商人たちが気味悪がってルートを変えるのも理解できる。  
距離を置いて観察していると、その犬男がいきなり話しかけて（  
？）きた。

「わんわん？」

「いやオレ、犬語なんて分からねえし……」

「エクバーナに行かれるのですか？ お気を付けて  
「普通にしゃべれるのかよ！？」

オレは思わずツツコミを入れてしまった。

「まだ若いというのに、一体何があつたのですか？」

ジジイが普通に質問している。

いやいや、おかしいだろ、お前。  
もっと驚くか怯えるかするだろ、普通は。

「ここですつとご主人様を待っているんです」

どういうことだ？

俺は思わず訊ねた。

「ご主人様だと？ てことはお前、奴隷なのか？」  
「いえ、僕はペットでして」

ますます意味が分からん。

「どのくらいこちらでお待ちなのでございますか？」

「……実はもうかれこれ、一か月近くは……」

酷え話だ。

ペットだか何だか分からないが、こいつはこの場所に一か月も放置されている訳だ。

しかもこの鎖のせいで逃げることもできない

「あつ、この鎖、元々はその岩に括りつけられていたんですけど、岩を割ったので今は自由に動けますよ」

動けるのかよ！

って、まさかその岩って、あれか……？

あんな硬い岩をどうやって割ったのかは疑問だが、つまりこいつは自主的にその“ご主人様”とやらを待っているらしい。

アホだ。こいつ完全にアホだ。

「こんなことを申し上げるのは大変心苦しいことではございますが、もしかして捨てられてしまったのでは？」

「ああ！ やっぱりそうなんでしょうか！？ ……薄々、勘づいてはいたんです……でも……」

「……それはお気の毒でございますな。実は、わしも仕えていた姫様に捨てられてしまいました……その辛い気持ちよく分かります」

「ああ、あなたもペットだったんですね！？」

「いえ、わしはサンドバックでして」

サンドバツク！？

「ですが、わしはまだ諦めておりませぬ。たとえどんなに拒絶されようと逃げられようと、もう一度、姫様に殴っていただくまでは死んでも死にきれぬのです！」

「ああ！ なんとという強い意志を持ったご老人なんだ！ だというのに、僕は……。……。僕は、怖かったんだ……。彼から直接、拒絶されることを……。だからこんなところで、ずっと……。はは、なんて情けない人間なんだろうね……。」

情けない云々以前の問題だとオレは思うのだが……。

「いえいえ、あなたはまだまだ若い。幾らでもやり直せますぞ」  
「本当ですか？」

犬男は縋るような瞳でジジイを見上げる。

ジジイは柔和な笑みを浮かべて頷いた。

何だこの絵は……。

「決めた！ 僕はこれから君を探しにいくよ！ 待っていてくれ！  
カルナ君！」

ん？ カルナ、だと……？

「おい、そいつはもしかして黒髪の男のことか？」

「え？ も、もしかしてカルナ君のことを知っているんですか？  
……？」

「おお、これは何という偶然。実は、我々も彼を追ってエクバーナに向かっているところだったので。いえ、わしが追っているのは同行している姫様の方ですが」

「そうだったんですか！　じゃあぜひ僕も一緒にさせていただいてもいいですか！？」

「もちろんですよ。ギース殿もよろしいか？」

よろしくねえ。

ぶっちゃけオレが仕方なくジジイの同行を許したのは、貴重な情報を提供してくれたその礼だ。

あと、そこそこ金持ってそうだったから。

だがこの若造は違う。

と思ったが、

「僕はアレクと言います。こう見えてAランクの冒険者なので、十分戦力になれると思いますよ！　結構お金も持ってます！　あと、カルナ君の居場所だって分かります！」

「居場所が？」

「はい！　なんたってペットですから！　たとえどんなに離れていようと、ご主人様のところに帰ることができる！　それこそがペットの必須能力です！」

すげえな、ペット。

帰巢本能のようなものだろうか？

すでにエクバーナにいない可能性だってある。

こいつを連れて行けば、そうした場合も対応できるかもしれない。戦力にもなりそうだしな。

ぶっちゃけ、オレはジジイの足手まといっぷりに辟易していたところだったんだ。

「よし、いいだろう。一緒に行こうぜ」



「ありがとうございます！」

こうして新しい仲間を迎え入れ、オレはエルフ少女を探す旅を続けるのだった。

つづ

かない

## 第70話 出会ってしまった三匹の変態（後書き）

どこかで本編と交わるかもしれませんが交わらないかもしれません。

## 第71話 黒輝竜再来！

「はっ、またオレ自ら来てやったぜ！ 今度こそ勝負だ！」  
「ん、めんどろ」

人化してスケバン少女っぽい姿になった黒輝竜　クロの挑戦を、  
シロはたった一言で突っ撥ねた。

「何だよ！？　ちよつとくらい付き合ってくれてもいいだろ！？  
バトルでもレースでも何でもいいからよ！」  
「疲れるから嫌」

黒輝竜は必死だが、シロはにべもない。ちなみに彼女はソファの上で猫のように丸くなったままだ。  
何だか休日にごろごろするお父さんと、遊んでほしい子供みみたいな構図だな。

そんな二人の様子を見ていた俺は、黒輝竜に訊ねる。

「ていうか、前に泣きながら逃げてったのに、何でまた性懲りもなく現れたんだ？」

「泣いてねえし！　あとあれは戦略的撤退って言っただよ！　オレはいずれ竜王になる身として、こいつに勝つ必要があるんだ！」

「そんなこと言って、単にシロのことが好きだけじゃねーの？」

「なななな、何言ってるやがる！？　そそそそ、そんな訳ねえだろ！  
何でオレが白輝竜のこいつに、ほほほっ、惚れなきゃならねんだよ！？」

……動揺し過ぎだろ。

お父さんと遊んでほしい子供というより、むしろ好きな女の子にちよっかい出す小学生の男子だな。雌だけど。

「と、とにかく！ オレと勝負しやがれ！ 内容は何でもいい！  
っ、そうだ！ テメエが好きな大食い対決はどうだ！？」  
「大食い……」

その言葉に少し心を引かれたのか、シロは僅かに反応した。

「どっちが多くての魔物を狩って食べるかを競うやつだ！ 前にもやったことあるだろ！ 覚えてるよな！？」

「ん……覚えてる」

「よし！ じゃあ早速やろうぜ！」

「嫌」

「何でだよ！？」

声を荒らげるクロに、シロはつまらなそうに言った。

「生だと不味い肉が多い」

クロは怪訝な顔つきになる。

「はぁ？ 何言ってるやがんだ？ 肉は普通、生で喰うもんだろっが？」

ドラゴンの主食は魔物や動物の肉だ。

だが人間のように調理することはほぼなく、そのまま生で食べる。

肉以外のものを食うことも、ないとは言わないが、それほど多くないという。

けれどシロは人間の料理の味を覚えてしまつて以降、完全に雑食になつていた。

別に植物性のもので消化できない訳ではないのだ。それに人化していると、人間と味覚はほぼ変わらないらしいしな。

さらに最近は俺の作る料理のせいで、かなり舌が肥えてしまつて  
いる。

だからそこらの魔物の肉ではもはや満足できないのである。  
大抵の肉は焼いたり熟成させたりした方が美味しいしな。

「ちつ、まさかテメエがここまで人間の犬に成り下がつてしまつて  
いたとはな……。ドラゴンとしての矜持はどこに行つたんだ？」

「なにそれ美味しいの？」

「食い物じゃねえよ！　つたく、人間どもがやる料理なんてもん、  
オレにはまったく理解できねえぜ。食えりゃあ何でもいいだろうが」

クロが吐き捨てるように言うと、シロは不満げに口を膨らませた。

「違う。料理は素晴らしい。美味しい食べ物で幸せになれる。絶対  
ドラゴンも見習うべき。特にカルナの料理は最強」

いつになく饒舌に主張するシロ。

クロは面食らつたように目を丸くしたが、すぐに不敵な笑みを浮かべて言う。

「はっ、そこまで言うなら今回はそいつを勝負にしようぜ！　こいつ  
が作った食い物をオレが認めればテメエの勝ち、認めなければオ  
レの勝ちだ！」

それはもはやお前らの勝負ではないのでは？

しかも勝敗を決めるのが勝負する本人とか、どう考えても勝負として成立していないぞ。

「ん、それでいい」

だがシロはあっさりと認めてしまった。

クロが勝ち誇った笑みを浮かべる。

「よし、良いって言ったなっ？　今ので決定だぞ！　やっぱりナシって言っても遅いからな！　くくく、今回こそはついに勝てそうだぜ……っ！」

そんな戦いで勝って嬉しいのだろうかと思っただが、まあ面白そうだからいいか。

「カルナ？」

「ああ、任せておいてくれ」

「はっ、その自信いつまで持つかな！　くははははっ！」

その言葉、そっくりそのまま返してやるぜ。

そんな訳で二体のドラゴン娘たちを連れてやってきたのは、

「おい、何なんだここは？」

「農場だ」

「農場……？」

「野菜とか果物とかを育ててるんだよ」

そこは俺が自ら作った農場だった。

この世界にも地球にもあるような野菜や果物が沢山ある。

だが地球のような高度な品種改良がなされている訳ではないため、どれもそれほど美味しいとは言えない。

そこで、ないなら自分で作っちゃえ、と思って畑や果樹園を作ることにしたのである。

農業・極 スキルを持つ俺の手にかかれば、これくらいは朝飯前だ。

場所はアルサーラ王国の東部。

なぜかずっと放置されてきた土地なのだが、広い平地で、しかも土壌がいい。そのため農業に適している。

俺はエレンの親父さんであるアルサーラの王様に頼み、この広大な土地を買い取らせてもらったのだ。

農場の運営は雇った農奴たちにやらせていた。

常に俺が監督する訳にはいかないので、彼らの統率は 影分身・極 で生み出した影分身に任せている。

農業・極 スキルもこの影分身に渡していた。

「おお、トマトが良い感じに実ってるな」

畑に瑞々しい真っ赤なトマトがなっていた。

シロがじゅるりと口を鳴らす。

「ん、美味しそう」

「食べるか？」

「食べる！」

トマトをもぎ取り、シロに渡す。

「クロはトマト食ったことあるか？」

「その名前で呼ぶんじゃないよ！……トマトくれえ、食ったことあるに決まってるんだろ。出来損ないの血の塊みてえで、まるで美味くなかったけどな」

出来損ないの血の塊で……色だけじゃねーか。

「んんん~~~~っ！」

トマトに齧り付いたシロが、赤い飛沫を散らしながら大きく目を見開いた。

「甘い！ 何これ！？ 甘い甘い甘い！ トマトじゃないみたい！ でも美味しい！ もぐもぐもぐ！」

口の周りをべとべとにしながら一気に丸々一個を食べ切ると、シロは別のトマトへと手を伸ばした。もう一個食うのかよ。

「こいつがこんなに能動的になってるところ、久しぶりに見たぜ……」

クロが目を丸くしている。

それからあまりにもシロが美味そうにトマトを頬張るので、自分も食べてみたいと思ったのだろう。トマトをじいっと見ていた彼女に、俺は一個渡してみた。



「お前も食ってみろよ」

「……」

「ごくり、と喉を鳴らしてから、クロは恐る恐るトマトに齧り付いた。

やや胡乱げだった臉が開く。

「あ、甘えええええええつ!？」

そう、このトマトは甘いのだ。

この世界の普通のトマトの糖度はせいぜい3とか4くらい。地球の一般的なものより甘さが弱い。

だがここで栽培されたトマトは、10を超える糖度があつた。

しかもただ糖度が高いだけではない。

適度な酸味もあり、瑞々しくありながらもトマトの味はしっかりと濃い。

ここまでのトマトを生み出すには、物凄い苦労が あつた訳ではなく、 農業・極 のお陰で簡単に作れてしまった。マジでチートだわ。全世界の農家さんに怒られそう。

「なんだこれ!? 美味え! オレが前に食ったトマトは何だったんだ!？」

クロはあつという間に一個平らげてしまふ。

「こっちのキャベツも食ってみろよ」

「はっ、こんな草みてえなもんが、美味いわけ……………美味えええええつ!？」

「ん！ 甘くて、しゃきしゃきしてて美味しい！」

生でも美味しいキャベツは美味しいのだ。

俺はさらに、なすび、パプリカ、ニンジン、ブロッコリー、アスパラガスなどの野菜を 無限収納 の中から取り出した。

それぞれ旬の時期に収穫し、ここに保存しておいたのだ。時間が停止しているため、新鮮なままなのである。

それらをオリーブオイルで焼いて、塩と胡椒でシンプルに味をつける。たったそれだけで、素材の良さが引き出されてさらに美味しくなる。

「こいつも食ってみろ」

「もぐもぐもぐ！」

「がつがつがつ！」

仲良くシロと一緒に焼き野菜に食らいつくクロ。

「よく噛んで食べるよ」

「……はっ？」

クロの手が止まる。

どうやら我に返ったらしい。

口の中を野菜でいっぱいにながら、クロは強がるように言った。

「お、お、お、思ってたよりは美味いみてえだなっ！ だ、だが、この程度じゃオレを認めさせるには遠いぜ！」

「まあ、今のはまだ料理とは言えないレベルだしな」

「何だと！？」

クロちゃんの餌付けはこれからが本番だ。

愕然とする彼女から「あ、あれ以上のものを食ったら、オレどうなっちゃうんだ……」という小さな呟きが聞こえてきた。

## 第72話 クイーンミノタウロスのモツツアレラチーズ

「おい、何だよここは？ ダンジョンじゃねえか？」  
「その通りだ」

俺は転移魔法を使い、シロとクロをとあるダンジョンの入り口前へと連れてきていた。

難易度Aの未攻略迷宮で、『クレツソス古代遺跡』と呼ばれている。

クロが怪訝な顔をして問い詰めてくる。

「こんなところに何の用なんだ？ オレにもっと美味しい物を食べさせてくれるんじゃないのかよ？」

「せっかくだし、ここで最高級食材を手に入れようと思ってな」

「最高級食材……ごくり」

その言葉だけでシロが喉を鳴らした。

「んなところで？」

「騙されたと思って付いてこいよ」

俺たちはダンジョン内へと足を踏み入れる。

このダンジョンの最大の特徴は複雑極まりないその迷路構造だ。無数の分かれ道に加え、幾重もの階層状になっており、隠し通路や隠し部屋なんかも大量に存在している。

さらに時々前触れなく構造が変化するとあっては、作成した地図

も意味を成さない。過去には多くの侵入者が脱出できずにこの迷宮内で果てたという。

実際あちこちに白骨化した骸が転がっていた。

「だ、大丈夫なんだろうな？　んな黴臭いところで死ぬまで迷い続ける羽目になるとか、冗談じゃねえぞ？」

「安心しろ。すでにダンジョン内の構造はすべて把握してる」

俺の　探知・極　の有効範囲はおよそ半径三キロメートルだ。  
この広大なダンジョンも、すっぽり丸々と入り込む範囲なので迷う心配などない。

「前から思ってたが、テメエほんと何もんだよ……？」

「ん、カルナはすごい」

「ブモオオオーツ！」

突然、特徴的な獣の泣き声が聞こえてきた。

現れたのは筋骨隆々の体軀を誇る牛頭人身の超有名モンスター、ミノタウロスだ。

「こいつの肉、なかなか美味えんだよなあ」

「私もかつてはそう思ってた」

冒険者ですら苦戦する狂暴な魔物だが、神竜であるシロとクロからしてみれば雑魚も同然。むしろ食い物としてしか見ていない。しかしクロとシロのミノタウロスの肉に対する評価は真逆だ。  
俺もシロに同意見である。

「ミノタウロスの肉は筋肉質過ぎてダメだな。硬いし、何より旨味

成分が少なくて料理には使えない」

「ん。もつと美味しい肉がある」

「何だと……！？」

「ま、種類によっては肉が柔らかくてそこそこイケるんだけどな」

「ブモオオオツ

ブモオツ！？」

なにこの状況で暢気に話してんだよとばかりに躍り掛かってきたミノタウロスを、シロがワンパンで吹き飛ばす。迷宮の壁に叩きつけられた牛頭の巨漢は、泡を吹きながら白目を剥いてしまった。

さてと、獲物はどこにいるかな……。

おつ、意外と近いか？

『いえ、直線ルートではそう離れていませんが、大きく迂回する必要があります』

あー、確かに。

面倒だし、千里眼で行き先を目視して、それから転移魔法で移動することにした。

「いたぞ、あいつが今回の食材だ」

そして迷宮の最奥。

恐らくはボス部屋だろう広大な空間にそいつはいた。

普通のミノタウロスが子供に見えてしまうほどの巨体だ。

単純に背丈が大きいというだけでなく、異常なほど横幅があった。というか、もはやほとんど脂肪の塊だ。大きな団子にも見える。言ってみれば、超デブなのである。

クイーンミノタウロスという、ミノタウロス系の魔物の最上位種だった。

たぶたぶとしたお腹には巨大な乳房が十も並んでいて、そこにミノタウロスたちが争うようにしゃぶり付いていた。縮尺的に子供に見えてしまうが、もちろん二メートルを超すガチムチどもであり、ぶっちゃけキモイ。

「ん、あいつの肉、美味しそう」

シロ……よくあれを見て涎を垂らせるね……？

「いや、確かにクイーンミノタウロスの肉は美味い。ちょっと霜降りが多すぎるから、好き嫌いが分かれるところだけだな。ただ、今回の料理に使うのはあいつの肉じゃない。ミルクだ」

「ミルク？」

「クイーンミノタウロスのミルクは極上なんだ」

「じゅるり」

授乳に夢中になっていた女王牛だが、俺たちに気づいて『ブモウッ！』と鼻を鳴らした。

すると周囲を取り囲んでいたミノタウロスたちが一斉にこちらに躍り掛かってきた。

女王牛自体はあのデブさなので、ほとんど動くことはできないのだが、こんなふうに手下（？）のミノタウロスたちを喉けて攻撃してくる。

しかもあのミルクにはミノタウロスを強化させる力があるようで、その強さは並のミノタウロスどもとは比較にもならない。

「邪魔」

「はっ、牛ごときがドラゴン様に勝てるわけねえだろうがよッ！」

だがいかに強化されていようと、神竜たちの敵ではなかった。お得意の突進攻撃を見舞おうとするも、シロとクロに逆に吹っ飛ばされていく。

あっさりとミノタウロスたちを一掃すると、女王牛は怯えたように『ブ、ブモオ……っ』と鼻を鳴らした。

それでもぶよぶよの肉に覆われた腕を懸命に振り上げ、抵抗しようとしている。

「安心しろ、あんたを殺す気はない」

『ブ、ブモ……？』

「違う。ちょっとミルクを貰うだけだ」

『ブモモ……？』

「そうそう」

女王牛はまだ少し警戒しているようだったが、諦めたように大人しくなった。

「もしかして牛の言葉が分かんのか？」

「何となくだけだな」

「なんでもアリだな……」

言語理解・極のお陰だ。

それから俺は女王の乳を搾った。

濃厚なミルクが容器を満たしていく。



『ブモオ……』

俺の搾乳が気持ちいいのか、なぜか恍惚とした顔になっているが気にしない。

「牛の乳なんてほんとに美味しいのかよ？」  
「飲んでみるか？」

懐疑的なクロに、別の小さな容器に入れて渡してみた。  
恐る恐るミルクを口の中に流し込んだ瞬間、目が大きく見開かれる。

「美味ええええええええつ!？」

お約束の反応ありがとう。

「んゝ、んんっ……んゝゝゝ」  
「おい、シロ。直接飲むんじゃない」

シロは女王牛の乳にしゃぶり付いていた。  
ごくごくごく物凄い速さで飲んでいる。

ある程度の量を入手すると、俺たちは女王牛に別れを告げて農場へと戻った。

農場に併設されたコテージ。

必要な材料をすべてそろえた俺は、そこで料理を開始した。

「で、これがそのクイーンミノタウロスのミルクで作ったモッツアレラチーズだ」

拳大のお餅のようになったそれを二体のドラゴンたちに見せる。  
モッツアレラチーズというのは、地球ではお馴染みのイタリア産のチーズの一種だ。

元々熟成過程を経ないフレッシュチーズではあるが、時空魔法を使ってさらに時間を短縮させたため五分くらいしかかかっていない。なお作り方については説明が面倒なので省略する。

「チーズ？」

どうやらクロはチーズのことすら知らないらしい。

「超簡単に言うとも乳を凝縮した食い物だな」

「ん、チーズ超美味い」

そしてモッツアレラチーズと言えば、やはりピザである。

農場で収穫した小麦粉から作ったピザクラストの上に、これも農場で取ったトマトで作ったトマトソースを薄く塗る。

その上に女王牛のモッツアレラチーズをたっぷり乗せると、さらに野菜メインの具材を惜しみなく乗つけていった。

そしてコテージに備え付けられた窯で焼くと完成だ。

「ふおおおおっ！」

窯から取り出した焼きたてのピザを見て、シロが不思議な歓声を上げた。

チーズや生地の「みみ」に適度な焦げ目がついていて、めちゃくちゃ美味そうだな。

「じゅるりじゅるりじゅるりじゅるり」

「すぐ切り分けてやるから、もう少し我慢しろ」

涎を盛大に垂らしながら今にも直接齧り付きそうなシ口を抑えて、放射状に切り分けていく。

切り分けた部分を持ち上げると、チーズがびろーんと伸びた。これこれ！　すげえ食欲そそるんだよなあ、この光景。

~~~~~

真つ先に口の中にピザを放り込んだシロが、あまりの美味さに服を脱ぎ捨てて全裸になった。

って、なぜ脱ぐ。

某料理漫画かよ。

「そ、そんなにかよ!? ごくり……」

クロがそれに続く。

「うみえ えええええええええええええええええつ！？」

うみえ？

言語がおかしくなっているぞ。

しかもシロと同じで服を脱ぎ捨て、真っ裸になっていた。シロは  
 つるぺただが、こいつの方はなかなか良い身体してる。

「って、なんでオレは服を……ッ？」

「ドラゴンの本能。だから不可避」

俺も食ってみた。

美味ええええええええつ！？

ミルクの時点でかなり濃厚だったが、チーズにしたことでさらに味が濃くなっていた。それが生のままでも美味しかった新鮮な野菜たちと絡み合い、それぞれ極上の、それでいて多彩な味を楽しませてくれる。

そしてチーズの食感もいいが、生地サクサク感も最高だ。

『なぜマスターまで全裸に？』

「はっ！？」

俺も気が付けば生まれたままの姿になっていた。

「ん、おかわり！」

「お、オレもオレも！ もっと食わせろおおっ！」

シロに負けじと、クロもどんどん口の中に放り込んでいく。全裸で。

やはりドラゴンだけあって、二人ともんでもない大食漢だ。

それから一枚ごとに色んなアレンジを加えつつ、五十枚を超えるピザを焼いてドラゴン娘たちに振舞ってやった。全裸で。

### 第73話 生命の林檎のアップルパイ

「こ、今回は引き分けてことにしといてやるうじゃねえか！ また来てやるから次こそ決着を付けようぜ！」

散々ピザを食いまくったクロは、そんな言葉を残して去っていった。

まあ意識すると「また食べに来るから美味しい物を用意しておいてねっ！」ということだろう。ツンデレか。

そしてすぐ翌日、クロは再び姿を現した。

「き、昨日言った通り、また来てやったぜ！」

どうやらよっぽど俺の料理を食べたかったらしい。そうならそうと言えればいいのに。

「ベベベ、別に、テメエの料理を食べたかった訳じゃねえんだからなっ！？」

やっぱりツンデレだ。

「負けを認めたら毎日いくらでも食わせてやるぞ」

「ん、毎日が天国」

「マジか……？ って」

ぶんぶんぶんと、クロは欲望を振り払うかのように懸命に頭を振った。

「そんな誘いにオレが乗るわけねえだろ！」

「お、そう言えば昨日のピザの残りが」

「「はむっ!」「」

無限収納 から焼き立てそのままのピザを取り出してみると、シロとクロが同時に噛みついてきた。「待て」ができない犬みたいだ。

「もぐもぐもぐ。やっぱり美味しい」

「ハッ? オレは何をやってんだ!？」

我に返って頭を抱えるクロ。

一方でシロがどんどんピザを食い進めていくので、

「ちょ、オレの分も残しておけよ！」

「知らない。もぐもぐもぐ」

「あゝっ! もう食べ切りやがった!？」

「げっぶ」

「ちなみに今ので最後の一枚だぞ」

「テメエこんちくちよう! 吐け! 今すぐ吐き出せ!」

クロが詰め寄るが、シロは口周りをぺろりと舐めながら知らん顔だ。

ていうかクロ、お前、泣かなくてもいいだろ……。

「ななな、泣いてねえし!」

「安心しろ。今日はまた別の美味いもんを作ってやるから」

言いながら、俺は 無限収納 から瑞々しい林檎を取り出した。

「はむっ！」

シロが俺の手ごと林檎を丸のみにした。

「もぐもぐもぐ……ん……、甘い！　美味しい！　シャキシャキ！」

「シロさんや？　俺の手、君の唾液でべとべと何ただけだね？」

気を取り直して、別の林檎を取り出す。

他にも葡萄やバナナ、パイナップル、キュウイなどなど。いずれもこの農場の果樹園で収穫した果物たちだ。

今にも喰らい付こうとしてくるシロに警戒しつつ、俺はクロに問う。

「お前、果物って食ったことあるか？」

ドラゴンって果物食べ無さそうだな。野菜もだけど。

「ば、馬鹿にするんじゃない！　ええと、あれだ！　スイカ？　とかいう奴を食ったことがある！」

スイカは野菜だけだな。まあ分類の仕方にもよるが。

「ほとんどただの水で、まったく血の味がしなかったぜ」「ドラゴンの味の基準は血なんだな……」

それはともかく、今回もせっかくなのでレアな食材を使いたい。という訳でやってきたのは、大森林。

ティラの故郷のある森林だが、しかしエルフたちすらほとんど足を踏み入れることがないというさらに奥深くへ。

「ん、大きな木」

シロが首をほとんど九十度上向けながら呟いた。

「この世界を造ったとも言われている神の木　“生命の大樹”だ」

それは天を突くように聳え立つ巨大な樹木だった。

大森林の木はどれも背が高く、高層ビル並みの高さがあるのだが、これは軽く千メートルを超えている。

『高さは千百二十四メートルです』

スカイツリーの倍だな。

「食材はあの木の頂上にあるんだ」

「登るの大変」

「ドラゴンの姿に戻って飛んでいきや楽勝だぜ」

転移魔法を使っても良かったが、それだと味気ないので普通に登ってみることにした。ゲームとかで木を登っていくフィールドがあったりするが、俺けっこう好きなんだよな。

シロとクロが竜の姿で木の幹に沿って上昇していく横で、俺は枝から枝へと飛び移りつつ登っていく。

「ひゃっほーっ！」

「おい何でデメエの方が普通に速いんだよ!？」



ドラゴン娘たちを引き離してしまった。

「おっ、クロ、モンスターが来てるぞ」

「っ!？」

それは巨大な蜂の魔物だった。

体長一メートルはあるだろうか。それが全部で七匹ほど。お尻の毒針が一斉にクロの身体に突き立てられる。

……が、黒輝竜の硬い鱗を貫くことはできず、針の方が折れてしまった。

クロが尾をひと薙ぎすると、それだけで蜂の群れが一掃された。

しかしすぐに次の一団がやってくる。

どうやら近くに蜂の巣があるらしい。

『キラーホーネットの蜂蜜は超高級品として知られています』

「よし、採取していこう」

俺は蜂の巣へと突っ込んでいった。

次々と蜂たちが躍り掛かってくるが、軽く撃退ながら巣に接近。

巣の中にまで入り込むと、金色に輝いている蜜を戴いてさっさと脱出する。

味見のため軽く舐めてみた。

「うめええええっ！　こんなに甘い蜂蜜、初めて食ったぞ！」

『私も私も！』

『お、オレも……ッ！』

「後でな。おい、涎垂れてるぞ」

後を追い駆けてくる蜂の大群をあしらいつつ、俺たちはさらに上へ上へと登っていく。

途中で他にも猿や鳥系の魔物にも遭遇したが、苦も無く倒してついに頂上へと辿り着いた。

不思議なことに、そこは枝が蚊取り線香のように回転して足場を作り、広場のような空間を形成していた。

その中心に、まるで大樹をそのまま縮小させたかのような木が生えている。

「あれが生命の林檎か」

その小さな木になっていたのは輝くように真っ赤な林檎だった。

死者すらも蘇らせると言われる伝説の果物である。

「実際に蘇るのか？」

『蘇ります』

蘇るのか……。

『ただし肉体の損傷が軽微である場合に限ります』

「食べたら不老不死になるとかは？」

『いえ、さすがにそこまでの効果はありません。ですが、肉体年齢を幾らか若返らせる効果はあります。元から若いマスターの場合ですと、ステータスが上昇します。また、数十年間はどんな病気にも罹らなくなります』

すげー、さすが超レア食材。

ちなみにこの林檎、数か月に一個しか実を収穫することができな

いらしい。ただし、一個が人間の頭くらいでかいが。

こんなものを美味しい食い物を作るためだけに使うとは、最高の贅沢だな。

生命の林檎を手に入れて農場に戻って来ると、早速料理に取り掛かった。

うお、この林檎、すげえ蜜が詰まってる。

このまま齧りたい気持ちを抑えて、まずは角切りに。そして砂糖とバターで煮詰める。林檎自体の糖度が高いので、砂糖は少量でいいな。

瞬く間に甘い香りがコテージ内に広がっていった。

「早く早く早く！」

シロがやたらと急かしてくる。

「すぐできるから待ってろ」

例のごとく時間魔法も使いながら、パイ生地煮熟した林檎をたっぷりと入れ、オーブンで焼く。生地が焼ける香ばしい匂いが漂ってきた。

すでにシロとクロはオーブンの前でスタンバっている。

おい、涎、涎。

オーブンから取り出し、二人にパイを切り分けてやる。

「うまあああああっ！」

「んああああああっ！」

口の中に放り込んだ瞬間、揃って大声を上げた。

そして服を脱ぎ捨て、真っ裸になる！

俺もパイを齧った。

「うめえええええっ！」

サクサクのパイ生地。そして中は煮る際に調整したため、しゃきしゃきとした林檎の食感が気持ちいい。

だが何よりも最高なのが、やはり味だ。

こんな美味しい林檎、食ったことねえ！

しかもさすが生命の林檎！ 全身から力が漲ってくる。

俺の股間も一瞬でフルパワーだ！

これは全裸不可避！

俺も服を脱ぎ捨てた！

俺たちは生まれたままの姿でアップルパイを無心で食べ続ける。

「……傍から見てみると異様な光景です」

アップルパイを食い尽くすと、次の一品に取りかかった。

クイーンミノタウロスのミルクを利用したアイスクリームに、特製のムース、そしてキラーホーネットの巣から入手した蜂蜜。

さらには農場で収穫した新鮮な果物をふんだんに使って、パフェ仕立てに。もちろん生命の林檎も忘れない。

「あまあああああつ!？」

「あめえええええつ!？」

甘さの爆弾が口の中で弾け、シロとクロが叫ぶ。

「でもうまうま!」

「うめえ! 甘いのうめえ!」

ドラゴンでもやはり女の子は甘いものが好きらしい。  
それから二人は蕩けるような顔で甘味を頬張りまくったのだった。

## 第74話 オークロードの豚骨ラーメン

「こ、こいつのメシなんて、食いたくねえのにつ……食いたくねえのにいい……っ!」

そんなことを言いながら、クロは今日もまた俺のところへとやってきた。

もはや当初の趣旨などどこへやらだ。

くくく、今日も裸に剥いて（食の）快樂に溺れさせてやるぜ……。いつまで強がりが見つかなあ？ げっへっへ。

「で、今回の高級食材はこいつだ」

「って、おいおい、何でこんな化け物がっ!？」

俺がドラゴン娘たちを連れてやってきたのは、農場に併設された厩舎だった。

その一番奥にそいつはいた。

身の丈五メートルはあろうかという巨大な豚頭の魔物。

体重は軽く十トンを超えている。

もちろんただのオークではない。

オークロード。

ごく稀にしか出現しないオークの最上位種族だ。

その危険度はSに指定されており、現れれば一国が滅びるレベルの危険な魔物である。

そいつが今、厩舎の最奥の檻の中で横になって眠っていた。

神竜であるクロも少し怯えた様子で訊いてくる。

「ど、どうしたんだよこいつ？」

「捕まえた」

レイン帝国領内に偶然現れたので、俺が討伐に向かったのだ。

「オークの肉って、ものによっては結構美味いからな。滅多に出ない魔物だし、せっかくだから食材に使おうと思ってティムした」

魔物調教・極 スキルがあっても、さすがに危険度Sの魔物ともなるとティムにはかなり苦戦した。

「その発想、ドラゴンのオレが言うのも何だと思うが、ちょっとおかしいと思うぜ……？」

ちなみにオークロードは全世界で同時に一体しか発生することがないそうだ。

なのでこいつを生存させておこならば、どこかでまた新たなオークロードが生まれ、甚大な被害がもたらされるなんてことを防ぐことができるのである。一石二鳥だな。

こいつにはこの農場で収穫した穀物を中心に食わせていた。

オークは豚と同じで雑食のようだが、動物性のものを与えると肉が硬くなって味が落ちてしまうのだ。質の良い脂肪を付けるには特に麦類がいいようだな。

「ちょっと肉と骨、貰ってくぞ」

そんな少々獵奇的なことを言いつつ、俺は時間魔法でオークロイドの時間を止めた。

さつと必要な部位を切り取ってから回復魔法をかけてやる。見る見るうちに欠損が修復していく。

このやり方で半永久的に食材を確保することが可能なのだった。

「今日は何を作る？」

「ラーメンだ」

「らーめん……って何だその間抜けそうな名前の料理はよ？」

クロが訝しげに眉をひそめる。

「麺料理の一種だよ。って言っても、ドラゴンには麺文化すらないか」

百聞は一見にしかず。

という訳で、俺は早速ラーメン作りに取り掛かる。

農場で収穫した小麦粉を使い、麵から作った。

しっかりとしたコシに、もっちもちの歯応え。

そしてよりスープの絡みやすいストレートの細麵に。

スープは豚骨ダシだ。

もちろんオークロードの骨を使うのである。

特に膝関節の部分の旨味が強いいため、これをメインとして使用。長時間じっくりと煮込んでその旨味成分を余すところなく抽出する。時間魔法で百分の一くらいに短縮できるが。



そしてラーメンに欠かせないものと言ったらチャーシューだ。  
オークロードのロース肉を使い、専用の炉を使って外はカリッと、中はジューシーに。

それを贅沢なほど分厚く切り取って、麺の上に投下する。

さらに農場で採れたばかりの新鮮なネギを刻み入れ、この世界では珍しい海苔を添えるシンプルなトッピングで完成だ。

「じゅるじゅる」

「だらだらだら」

できあがった豚骨ラーメンの濃厚な匂いを嗅いだだけで、シロとクロの口からはもう涎が垂れてきている。

二人の前で俺は 一人でラーメンを食べ始めた。

「うめええええええっ！」

スープが美味い！

麺が美味い！

チャーシューが美味い！

何だこの最高のラーメンは！

「私も食べたい！」

「オレにも食わせろ！」

シロとクロが涎を散らしながら躍り掛かってきた。

「待て」

「「ぎゃう!?!」」

だが二人は目に見えない障壁に激突して仲良く悲鳴を上げた。

俺が作り出した結界に阻まれてしまったのだ。

「「なぜ……？」」

まるで地獄のどん底に落とされたかのような愕然とした顔をして、二人は結界の前で立ち尽くす。

「いやさ、今まで何度か食わせてやったけど、よく考えたら完全なタダ飯喰らいだったよな？」

俺の正論に、シロとクロが「うっ」と声を漏らした。

「まあ、クイーンミノタウロスのミルクとか、生命の林檎とかは収穫を手伝ってもらったからまだいいとしても、今回は本当にお前ら何もしてない」

「ぐっ」

「ぬう」

仲良く喉を鳴らすシロとクロ。

「そんなわけで食いたければ何か面白いことでもやってみろ。そうだな……ペットだし、ペットらしく犬の真似でもしてもらおうか」「ば、馬鹿なこと言うんじゃないやねえ！ オレらは神竜だ！ 神竜が犬ところの真似なんざ」

「わんわん！ へっへっへっへ」

「してやがる！？」

シロはあっさりと犬に成り下がった。

「お座り」

「ばう！」

「伏せ！」

「わうん！」

「服従」

「わうーん！」

腹を見せて仰向けに寝そべるシロ。完全に犬である。

「よし、シロ。偉いぞ。食ってよし」  
「ばうばう！」

シロはラーメンに飛び付いた。

「~~~~~わわわわんっ！」

犬のまま喜んでいる神竜。  
なんかすげえ面白い。

犬 じゃない、ドラゴンだけあって熱いスープも平気らしく、  
がつがつ食っている。

「どうだ？ クロも食べたくないか？」

「ぐぬぬぬぬ……」

「はい、三回回ってワン」

クロはしばし葛藤していたが、結局美味しそうな匂いには逆らえず、ぐるぐるぐるとその場で回って「わ、わん！」と咆えた。

「お座り」

「わ、わん……っ！」

「お手」

「ぐぐぐ……わ、わん……」

「ちんちんかいかい」

「付いてねえよ！」

クロはがつくりと頂垂れた。

「く、屈辱だっ！ このオレがこんなっ……こんな犬みたいなマネを……っ！」

「よし、食っていいぞ」

「わうん！」

「いや、もう犬の演技はいいから」

唇を油でテカテカにしながら、二体のドラゴン娘たちはラーメンに熱中する。

「何だこの肉は！？ めちゃくちゃうめえ！ こんな肉、今まで食ったことねえぞ！？」

チャーシューに驚愕しているクロ。

「オレが今まで食ってた肉は肉じゃなかったのか……」  
「いや肉は肉だろ」

それから二人はラーメンを四度もおかわりした。

さて、せっかく良い豚肉があるんだし、ぜひあれも作りたいな。

用意したのはやはりオークロードのロース肉。

それに塩コショウを適量、小麦粉をまぶして軽くはたき落とすと、溶き卵に潜らせてからパン粉を付ける。

そして油でカラッと揚げると……そう、トンカツのできあがりだ。

「はぐはぐはぐはぐ！」

「うっめええええっ！」

「おかわり！」

「おい、ズルいぞ！ オレもオレも！」

ラーメンを一人五杯も食ったというのに、二人の食欲は留まるところを知らない。

さらにトンカツを五枚もぺろりと平らげてしまう。

ちなみに二人とも素っ裸だ。

しかし、よくそんなに脂っこいものばかり食えるな。  
まあドラゴンだから平気か。

「焼いた肉と揚げた肉は食ったし、次は燻製肉かな」

という訳で、オークロードの腸を使って今度はフランクフルトソーセージを作ってみた。

噛むとパリッの良い音を立てて皮が破け、中から染み出てきた肉汁が口の中へと広がっていく。  
美味い！

「食べたい！」

「オレもオレも！」

「じゃあ、ご主人様の（作った）アツアツでぶっとくて長いモノ（ソーセージ）を（口に）挿れて欲しいの……ってオネダリしてみろ」

「ふ、フザケンな！ そんなこと言えるわけが」

「ご主人様のアツアツでぶっというアレを挿れて欲しいの」

「何の躊躇もなく言いやがった!？」

美味しい物のためなら何だってやるのがシロの生き様である。

「じゃあ……入れるぞ、シロ」

「ん、来て……」

俺は彼女の中に（ソーセージを）挿れてやった。

「ん~~~~~~~~~~~~っ!」

身体を仰け反らせ、シロは逝ってしまう。美味し過ぎて。

「さあて、次はクロの方だな？」

俺は下衆の笑みを浮かべ、ソーセージを彼女の顔の前でちらつかせる。

「くっ……」

「なあ欲しいんだろ？ コレが欲しいんだろ？ 正直に言ってみろよ。ご主人様のアツアツでぶっとくて長いモノを挿れて欲しいの、ってなあ」

「くっくっ……ほ、欲しくなんかねえ……欲しくなんてねえのにい……」

そう言いながらも、すでにクロは濡れていた。  
……涎で。

「どうやら身体の方は正直のようだな？」

「う」……ご主人様のっ……あ、アツアツで……ぶっとくて長いモノ

っ……い、い、い、挿れて欲しいのおおおおっ！」

俺はクロの中にソーセージをぶち込んだ。

「ああああああああんっ！」

やつべー、餌付け超楽しー。

『……もはや餌付け以上のナニカになっている気がします。』

## 第75話 ロック鳥の卵のふわふわオムレツ

ソーセージを使った餌付けが楽しかったので、俺は調子に乗って色々と遊んでみた。

例えば、シロとクロのちょうど中間あたりにソーセージを転移させてみる。

すると二人は驚くべき反応を見せ、両側からほぼ同時にソーセージに齧り付いた。

「もぐもぐもぐもぐ」

「むしゃむしゃむしゃ」

あっという間に両端からソーセージが消えていくとともに、二人の距離が近づいていく。だが二人とも食べることに夢中でそれに気が付いていない。

やがて二人の間からソーセージがなくなり、

「っっ!?!」

唇と唇がぶつかった。

不意打ちのキスに目を白黒させて驚愕するクロ。

「てめっ、何しやが　　っ!?!」

逃げようとするクロだったが、シロがその肩をがっしりと抑えた。その行為の意味をどう考えたのか、クロの顔が見る見るうちに紅潮していく。



だがシロは決して長く口付けをしたがっていた訳ではなかった。  
まだ食べたりないとばかりに、クロの口内にある噛みかけのソー  
セージを狙いに行ったのだ。なんて意地汚い。

「~~~~~っ!？」

シロの舌が口の中に入ってきて、先ほど以上の驚愕を顔に露わに  
するクロ。

水気たつぷりの音が聞こえてくる。

そしてしばらく口の中を蹂躪されると、クロの頭からばふんつと  
湯気が出た。

「ん、ご馳走様」

やがてシロが唇を解放すると、クロはその場にコテンと倒れ込ん  
でしまう。

「あふ……あひゃ……うひゃあ……」

「? 大丈夫？」

白目を剥いてほとんどアへ顔状態となっているクロを見下ろしな  
がら、きょとんと首を傾げるシロ。

へっへっへ、やっぱり百合はいいのう……。

「というわけで、今回狙う高級食材はここにある」

「というわけだって、どいうわけだよ……」

「ん、楽しみ」

俺はドラゴン娘二人を連れて、とある山の麓へとやってきていた。

霊峰マルホーン。

標高は何と12482メートル。

地球で最も高い山であるエベレストよりも高い。

そして食材があるのは、この山頂。

普通なら何日もかかる行程だが、俺はドラゴン化したクロの背中に乗って一気に頂上へと向かう。シロも人化したままクロの背中で寝っころがっている。

「って、何でオレがテメエらを乗せなきゃならねんだよ！」

「ジャンケンで負けただろ？ しかも五回もやったのに全敗」

「くっ……屈辱だっ！」

ちなみにクロは十回中八、九回くらいはグーを出す。

なのでジャンケンがめっちゃくちゃ弱い。

標高が上がるほど、どんどん気温が下がってくる。

一年を通じて温暖な気候の地域なのだが、それでも8000メートルを越えると雪が積もっていた。

やがて山頂へと辿り着く。

そこにあっただのは巨大な鳥の巣だ。

ドラゴン化したクロでさえ、すっぽりと収まるほどの巨大さである。

「何だこのデカイ巢は……？」

「これは神鳥として知られるロツク鳥の巢だ」

「神鳥だと!？」

それは真つ赤な羽毛に覆われているという伝説の鳥だった。

しかし近くにその姿はなく、巢の中にはこれまた巨大な卵が幾つも転がっていた。殻は燃えるように赤く、どれも小錦が入れそうなくらい大きい。

ロツク鳥は基本的に一か所に留まることは少ないらしいので、すでにどこか別のところに棲みついているのかもしれない。

「卵を放置して？」

「全部、無精卵だけだな」

首を傾げて訊いてくるシロに教えてやる。

ナビ子さんが補足した。

『ロツク鳥は単為生殖です。そして有精卵を産むのは自らの死の前だけ。そうやって生まれ変わっていると言われています』

その有精卵は温めなくても孵るし、雛は勝手に育つそうだ。伝説の鳥だけあって、なかなか面白い生態をしている。

俺は巢にあった卵を幾つかを拝借していくことにした。どうせ無精卵だし、このままだと腐って無駄になるだけである。触れてみるとかなり温かった。

と、そのときだ。

頭上から甲高い泣き声が轟いてくる。

「クエエエエエエエエッ！！！」

天を仰ぐと、そこに全長十五メートルはあろうかという巨大な鳥の姿があった。

どうやらまだ近くにいたらしい。

「おい、どうすんだよ！？ 戻ってきやがったぞ！」

さすがのドラゴン娘も慌てている。

勝手に卵を拝借されて怒っているようだ。

無精卵なんだから別に良いだろと思うが、そういう訳にはいかないようだ。

巨大な鳥は大きく口を開けると、そこから火炎を放射してきた。その超高熱で周囲の雪が一瞬にして蒸発する。

だが卵は無事だ。あの赤い殻、炎に耐性があるのだろう。

俺たちはと言うと、転移魔法でロック鳥の背後へと移動していた。背中の気配に気づいて、ロック鳥が咄嗟に顔を上げようとする。

「眠ってもらっぞ」

だがその前に俺はロック鳥に近づいて素手で“ノッキング”した。ロック鳥が気を失って巣の近くへと墜落する。

説明しよう！

某グルメバトル漫画によれば、ノッキングとは脳のある神経組織に的確な刺激を与えることで、一時的に麻痺状態にすることだ！

「いやいやいや、相手はロック鳥だぞ！？ 何でんなことができるんだよ！？」

「これからはノッキングマスターと呼んでくれ」

「これも食べる？」

「ロック鳥って美味いんだろうか……。卵は最高級の食材として知られてるみたいだが」

過去に誰もロック鳥を捕獲して食ったことがないのだろう。

「部位によっては美味そうだけどな」

料理・極 を持つ俺の直感がそう言っている。

「せっかく捕まえたし、一応農場に持って帰ろう」

俺は気絶したロック鳥を抱え、農場に連れて帰った。

オークロードみたいに半永久食材として使えるかもしれないしな。まだ当分目を覚まさないだろうが、念のため鎖に繋いでおく。

「まずはこの卵を使って料理開始だ」

無限収納 から巨大卵を取り出すと、金属並に硬い殻を手刀でかち割った。

予め用意しておいた特注の巨大ボールへ中身が滑り落ちる。

これだけ大きくて重いというのに、黄身も白身も弾力があって盛

り上がっていた。ロツク鳥の卵は産み落とされてから数年は鮮度が持つらしいが、近くに親鳥がいたことからきつとまだ産み立てはやほやだろう。

「てか、これ一個で大量の卵料理が作れそうだな」

だがあえて丸々一個を使って一つの料理を作ることに。  
ボールに砂糖と塩コショウを適量入れると、泡だて器で攪拌させる。……自力で。

「どりゃあああああつ！」

電動よりも遙かに速く、それでいて繊細な動き。  
あつという間に筋が残るくらいまで泡立った。

巨大フライパンに大量のバターを投入し、そこへ一気に流し込む。  
ここからが腕の見せどころだ。  
仕上がり状態を均一にするため、フライパンの操作や火加減に気を配りながら半月状に仕上げていく。

やがてできあがったのは超巨大なオムレツだった。

お皿に乗せると、ぷるぷるとプリンのように震えた。

黄金色に焼き上がり、バターの芳醇な香りがこれでもかと鼻腔を  
擦ってくる。

「完成！」

「いただきます」

シロとクロがその巨大オムレツに顔から突っ込んでいった。

「うまあああああつ！」

「うめえええええつ！」

「ふわふわ！　ふわふわ！」

「口の中でとろけるぜ！」

オムレツはソース次第で色んな味を楽しむことができる。

用意したのは定番のトマトケチャップを筆頭に、デミグラスソース、ホワイトソース、和風ソース。変わり種としてカレーソースなんかも。

さらにはメイプルシロップや生クリームを付ければ、デザート感覚でも楽しめるのだ。

「うまうま！」

「どれも美味えええつ！」

「おお、カレー味も結構いけるな」

そうしてドラゴン娘たち＋俺がオムレツに舌鼓を打っているときだった。

「こらああああつ！　何なんだよお前たちはっ！？　ボクの卵を盗んだばかりか、神鳥であるこのボクを捕縛するなんてふざけんなよおっ！」

と、背後から怒鳴り声が聞こえてきた。  
だが今はオムレツに夢中なので無視。

「ちょ、シカト！？　こっち向けよ！　てかそれ、ボクの卵じゃないかっ！？」

後ろで何やらぎゃあぎゃあ喚いている奴がいるな。

うるさいので俺はそいつの口の中にスプーンでオムレツを突っ込んでやった。

「ふぐっ!？」

「ほれ、お前も食ってみろよ」

「って、何で自分で産んだ卵を

美味あああああいつ!

？」



## 第76話 神鳥も餌付けしてみた

茜色の髪の少女が、俺の作ったオムレツを食べて目を見開いた。

「美味ああいつ！ これ、すつごく美味いよ！ 一体、何なのさこの美味い食べ物！？ って、ボクの卵じゃんかあああつ！ 何で自分で産んだ卵を食わなくちゃなんな」

「ほら、次は生クリーム付けたの食ってみろ」

「美味ああああいつ！？」

口の中に入れてやると、少女の怒号が感激の声に代わる。

『マスター、まずこの少女が何者なのかを確かめませんか？』

いや、とりあえずオムレツを食ってからだ。

『…………』

それから俺とシロクロに謎の少女を含めた四人（？）はオムレツを食いまくった。

途中で二回も新しく作ったので、全部で三個も巨大卵を使ってしまった。たぶん普通の卵に換算すると二万個近くにはなるだろう。四人で分けたとは言え、カロリーやべえ。

ソファにもたれ掛って、大きなお腹をさすりながら一服する。

「げぶ……………」

「おう、さすがにもう食べねえぜ……………」

「あー、食った食った。美味しかったなあ  
あうっ!!」

って、違あああ

妊婦みたいなお腹をした少女が立ち上がった。

「何でボクは普通に馴染んでるんだよ!？」

自分で自分にツッコんでいる。

「誰、この人？」

「そっぴや、いつの間にかいやがったよなあ」

シロとクロが今さらながら少女にのんびりと興味を示す。

「ボクは伝説の神鳥、ロック鳥だよっ!」

茜色の髪を振り乱し、少女は叫んだ。

どうやらあのロック鳥、シロたちと同じように人化することができたらしい。

鎖で繋いでおいたのだが、身体が小さくなれば簡単に抜け出せるしな。

ちなみに彼女の見た目は十四、五歳くらいの女の子で、シロと同じくらいだ。

まだ幼鳥の段階なのかもしれない。

「ボクの卵を返せ!」

「いや、普通に自分で食ってたし」

「うっ、うるさあああいい!」

少女は悔しげな涙目で地団太を踏む。

「だいたいあの卵、無精卵だし置いておいても腐るだけだろ。勿体ない」

「名前を付けて可愛がってたのに！」

名前付けてたのか……。

「大丈夫。卵たちは私たちの血肉になった」

「そうそう、オレらの中で生き続けるぜ」

「そういう問題じゃないでしょ！ てか、そもそも誰だよ君たちは！？ 神鳥のボクに馴れ馴れしくしゃがんで！」

「ん、同じ飯を食った仲」

「あれボクの卵からねっ！？」

少女はもう怒ったぞとばかりに神鳥の姿へと戻る。

おい、室内で変身したら狭いだろ。

「鳥肉、じゅるり」

「あいつ照り焼きにしようぜ！」

「クエエエエツ！？（ボクまで食べる気！？）」

シロとクロはもはや伝説の鳥すらも食材にしか見えなくなっているらしい。

「クエツ、クエツ、クエエエエツ！（焼き尽くしてやる！）」

ロック鳥が体内から炎を吐き出そうとする。

「おいやめろ。コテージを全焼させる気か」  
「グエッ!？」

俺は再びロック鳥をノッキングした。

「何で人間がそんなにあっさりとボクを無力化してるんだよっ!？  
おかしいでしょ!」

意識を奪わず、身体の動きだけを封じるよう調整したため、ロック鳥は床に倒れたまま喚いていた。ちなみに人化してまた少女の姿に戻っている。

「ん、カルナだから」  
「こいつを人間という枠組みで考えたらダメだと、最近ようやくあたしも悟ったぜ」  
「ていうか、君らは何なのさ!？」

ロック鳥の誰何に応じて、シロとクロが竜化した。

「神竜じゃん!？ しかも仲が悪くて有名な白輝竜と黒輝竜だし!」  
目を見開いて驚愕する神鳥少女。  
シロとクロはまた人化する。

「ん。でも今は揃ってカルナのペット」

「ああ、仲良くこいつのペットを　って、違えよ！　オレはこいつに飼い慣らされた覚えなんてねえ！」

「クロ、ここにソーセージがあるんだが、欲しければ三回回ってワ  
ン」

ぐるぐるぐる。

「わん！」

「よしよし、偉いな。食べていいぞ」  
「わおーん！」

クロは嬉しそうにソーセージに齧り付いた。

「完全に飼い慣らされてるよねっ！？」

少女が全力でツツコミを入れてくる。

そうです。もうクロちゃんは完璧に餌付けされてます。

「安心しな、クー子」

「なにその名前っ！？　変な呼び方しないでよ！」

「君もこれからしっかり餌付けして、俺無しでは生きられない身体  
にしてあげるからね？」

「ひ、ひいいいっ！？」

「どうだ、クー子？ もつと欲しいか？」

「ほ、欲しいっ……もつと欲しいよおっ……」

クー子は艶めかしい吐息を漏らしながら、必死に懇願してくる。

「おいおい、自分のアレでそこまでイッてしまっなんて、お前は何て変態なんだ」

「ううう……何でそんないじわるするんだよお……」

俺はそんなふうには焦らしながら、彼女の口の中にソレを入れてやった。

「ん~~~~っ！ 美味しいiiiiっ！」

クー子が幸せそうな声を上げた。

「何なのこの美味しい食べ物！ えっ、プリンって言っの！？ すごい！ ボクの卵がこんなに美味しくなるなんて！」

神鳥の卵料理の第二弾としてプリンを作ってみた。

あのクイーンミノタウロスのミルクも使用。二つの最高級食材が凄まじい相乗効果を発揮して、究極の味を実現していた。

クー子はこれであっさりと陥落した。

「こんなに美味しいものを作れるなら、ボク幾らでも卵を産むよ！」

神鳥による採卵鶏化宣言である。

「よし、これで最高級の卵が半永久的に手に入るぞ」

卵は万能食材だ。

神鳥の卵を使えるとなると、俺のレシピがさらにグレートアップするだろう。

「クー子は食べない?」

シロがじゅるりと舌を鳴らす。

「さ、さすがにそれはやめてよっ!？」

「試してみるか」

「ひええええっ!？」

オークロードにしていたやり方で、俺は神鳥から肉を貰った。

時間が停止している間に終わるため、当人はまったく痛くないし、認識もできない。

「あれ、何が起こったの……?」

目を丸くしているクー子を横目に、俺は早速その肉で料理を開始する。

照り焼き、から揚げ、チキン南蛮、タンドリーチキン……などなど。

米があれば親子丼も作っただけだなー。

生憎まだ俺はこの世界で米を入手できていない。

「うまうまっまー!」

「うめええええっ!」

「美味しい！ 何これ！？ えっ、ボクのお肉！？ 共食いじゃん！ でも美味しいからいいや！」

ロツク鳥のお肉いけるな。

三匹からの評判もいい。

普通の鶏肉よりもずつと美味く、名古屋コーチンにも匹敵するジューシーさ。そして弾力性があって、歯応えがある。

こうして俺は美味しい鳥肉も確保することができたのだった。

「で、勝負の結果はどうなったんだ、クロ？」

「え？ 勝負って何の話だ？ それより次は何を食わせてくれるんだっ？」

クロは当初の目的を完全に忘れていた。



## 第76話 神鳥も餌付けしてみた（後書き）

餌付け編終わり。知識なさ過ぎて飯モノ書くの大変だった。。。

## 第77話 双子天使

レイン帝国を後にした俺たちは、久しぶりにキャンピングカーに乗って東へと進んでいた。

「こんどはどこにいくのー？」

「鬼族の島だ」

桜花からぜひ一度来てほしいって言われているのだ。

「海を渡らないといけないけどな」

「わーい、うみーっ！　いくのはじめてーっ！」

魔導人形として生まれたばかりのフィリアは、知識としては海を知っているものの、実際に見たことはないのである。

「あ、私も海に行ったことないです」

「あたしもだ。大きな川みたいなものだろう？」

どうやらテイラとエレンもないらしい。

二人とも内陸部の生まれなので、当然と言えば当然か。

「海。あいつは、やばい。川とは比べ物にならない」

シロが相変わらず無表情で言う。

「じゃあ俺が海の楽しみ方を教えてやろうじゃないか。……ふふふ……」

「……なんか笑い方がちょっとイヤらしいんですけど……？」

もちろん、海と言ったら水着である。

「はあはあ、ティラ様の水着姿……ぐへへへ……」

妄想の海へと沈んで涎を垂らすルシーファ。  
だが不意にその目が見開かれた。

「っ！？　こ、この天力は……っ！」

直後、NABIKOの進行ルート上に何かが空から降ってきた。  
それは轟音とともに地面に激突し、凄まじい衝撃が車体を揺らす。

『前方に非常に強力な敵性個体が出現しました』

ナビ子さんの警告が車内に響く。

俺たちはキャンピングカーの外に出た。

濛々と上がる土煙。

その奥から彼女は姿を現した。

「ルシーファ……？」

俺は思わずそう呟いてしまう。  
それぐらい瓜二つだったのだ。

顔はほぼ同じ。

だがルシーファが淡い青色の髪を長く伸ばしているのに対して、  
彼女は緑色の髪を肩口で切り揃えている。

胸の大きさも違う。ルシーファは巨乳なのだが、こっちは貧乳だった。

それから表情もかなり違うな。随分と冷たい目をしていた。

ガブリエナ 824歳

種族：天使族

レベル：

スキル：天力・極

鑑定してみると、ルシーファと同じ天使族のようだ。  
ちゃんと背中に純白の翼も生えている。

「ガブちゃんじゃないのですの」

「知り合いなのか？」

「ええ。彼女はわたくしの可愛い可愛い双子の妹なのですわ」

「双子？」

道理で似ているわけだ。

「ガブちゃんたら、もしかしてわたくしが恋しくて会いに来てくれたんですの？ ふふふ、相変わらずお姉ちゃんが好きですわね」

「……違う」

ガブリエナという名の天使は、ルシーファの言葉を冷ややかに蹴した。

「……姉さん……どうやって、抜け出した……？ わたしが、配下の天使百体とともに……全力で、封印した……はず。……姉さんで

も、抜けられる、わけがない……」

はい、この変態を世に解き放ったのは俺です。

「ふふふ、端的に言うとその力は愛の力ですわ！ ティラ様とわたくしの間に結ばれていた見えない赤い糸！ そのお陰で二人は出会い、なんやかんやあつて脱獄に成功したのですわ！ ですわよね、ティラ様っ？」

「違います」

ティラもまたルシーファの妄言を一蹴した。  
てか、俺がしてやったことが「なんやかんや」で済まされたんだが。

「姉さん……一つだけ、確認したい……」

「何ですか？」

「……ちゃんと反省して……もう二度と……天使にあるまじき行為を……しないと、約束できる……？」

「もちろん」

ルシーファの言葉に、ガブリエナは一瞬安堵するような表情を浮かべたように見えたが、

「無理ですわ……！」

という宣言で即座に凍り付いた。  
わなわなと拳を震わせ、ガブリエナの全身から天力のオーラが溢れていく。

「……なら、もう一度……捕えて……今度こそ、更生させる……」  
「なぜガブちゃんはおたくしの性癖を理解して下さらないのです？  
昔は二人であんなことやこんなことをした仲ですのに……」  
「っ……」

ガブリエナの頬が少し赤く染まった。  
だがすぐに忌々しげに吐き捨てる。

「……忘れない……黒歴史……」

「性癖は人それぞれ、天使それぞれですわ。おたくしは自らの性癖を護るためなら、たとえ神にだらうと抗ってみせますの！」

ルシーファ……お前って奴は、たまには良いこと言っじゃないか。  
どこまでも自分の道突き進もうとする彼女の姿に、俺は少なからず感動を覚えた。

最低限、他人に迷惑をかけないでほしいです……とティラが呟いていたが、聞かなかったことにしよう。

「……抗えるものなら、抗えればいい」

ガブリエナの天力が収束し、その両手に一振りずつ剣が出現する。

・天双剣ジオーラム：ガブリエナ専用の二本一対の剣。攻撃力＋1  
000 天力倍化。

完全に本気モードだった。

慌てたのはルシーファだ。

「ちょ、本気ですのっ?」

「……本気」

次の瞬間、ガブリエナの姿が掻き消えたかと思うと、ルシーファの目の前に出現、容赦なく斬撃を繰り出していた。

「っ!?!」

ルシーファは咄嗟に天力の槍を出現させてそれを受け止める。強大な天力と天力がぶつかり合い、凄まじい衝撃波が巻き起こった。

「うわわわっ!?!」

「きゃっ!?!」

近くにいた俺たちは吹き飛ばされそうになる。

「……離れていた方がいい……」

ガブリエナはそうボソボソと忠告を投げかけてから、容赦なくルシーファに二本の剣を振るっていく。

「わたくし愛する妹と戦いたくなんてないですわ!」

「……姉さんに、わたしの気持ち分かる……?」

「ガブちゃん……?」

「姉さんのせいで……わたしまで変態天使と、後ろ指をさされて……近づいたら、下着奪われるとか……妊娠させられるとか、言われて……どれだけ、恥ずかしい想いをしてきたことか……」

……ご愁傷様。

「どこが恥ずかしいことですよ！ わたくしなら興奮しますわ！  
むしろ、その指で乳首ついて下さいませええつ、って願  
いするほどですわ！」

「……姉さんは、頭がおかしい……」

「おかしいのはガブちゃんの方ですよ！ 変態のどこが悪いんです  
の！？ 変態万歳！ わたくしは変態であることに誇りを持ってい  
ますわ！」

そんなまったく正反対な双子天使のやり取りに、ティラが断言し  
た。

「おかしいのはどう考えてもルシーファさんの方です」

「ティラ様！？」

さらにティラはガブリエナへ声援を送る。

「ガブリエナさん、頑張ってください！ 応援してます！」

「……頑張る……」

「普通わたくしが応援される場面ですわよね！？ ふぎゃ！？」

ティラの応援が功を奏したのか、ついにガブリエナの剣がルシー  
ファを捉えた。

「ぐ……さ、さすがガブちゃんですわ……」

膝を付くルシーファ。



「“天罪縛鎖”」

ガブリエナがそう呟くと、どこからともなく現れた巨大な鎖が蛇のように絡み付き、ルシーファを完全に拘束する。

「その鎖は……二百体の天使たちが……天力を練り上げて、生み出したもの……。姉さんでも……逃れることは、不可能……。……天界に、連行する……」

強力な鎖に捕らわれたルシーファは身動きが取れない。  
だが彼女は余裕の笑みを浮かべていた。

「ふふふ、無駄ですね。残念ながら今のわたくしには強力な味方がいますの」

「味方……？」

「カルナ様！ わたくしを助けてくださいませ！」

ルシーファが俺に救援を求めてきた。

確かに俺ならあの鎖を破壊することもできるし、彼女の妹を追いかつこともできるだろう。

だが、

「もうあのまま天界に帰した方が良いと思います」

「そ、そうか……？」

「帰しましょう」

「はい……」

ティラの有無を言わさぬ言葉に、俺は頷くしかない。

「じゃあな、ルシーファ。元気でな」

「なぜですのっ！？ 助けてくださいましっ！ 天界に連れて行かれたら間違いなく強制禁欲生活っ、想像しただけで死にそうですわあああっ！」

「ちゃんと更生してきてください」

「そんな殺生なあああああっ！」

こうして変態天使は天界へと連行されていったのだった。

## 第78話 絆創膏は水着ですか？

変態天使がいなくなってから、数時間ほど。  
NABIKOがゆつくりと停車した。

『海に到着いたしました』

外に出ると、そこには見渡す限りの大海原が広がっていた。  
水が澄んでいて、めちゃくちゃ綺麗な海だ。

「うみーっ！」

「お、大きいですね……」

「これが海か……確かに強そうだな……」  
「ん」

四者四様の反応を示すマイファミリィ。

「せっかくの海だし、海水浴を楽しもうぜ！」

という訳で、俺は 製作・極 スキルを活かして水着を作成した。

「はい、ティラ用の水着」

早速着てもらおうと、ティラに手渡す。

マイクロビキニである。

「こんなの着れるわけじゃないじゃないですか  
ッ！」

受け取るなり、ティラは床の上に叩きつけた。

「大丈夫大丈夫。ちゃんと大事なところは隠れるし。はい、落したよ」

「大事なところしか隠れないのが問題なんですよ！ あと落したんじゃないくて、投げ捨てたんですけど！？ 察してください！」

「おかしいなー。俺が昔いた地域だとみんな普通に着てただけだなー」

「嘘言わないでください！ こんな破廉恥なもの、一体誰が着るっていうんですか！ 騙されたって着ませんよ！」

「ほら、そこに」

俺はティラの背後を指差した。

「くっ……ほ、本当にこんなものを着て泳ぐのが一般的なのか……？」

ちょうどエレンが脱衣所から出てきたところだった。

俺が渡したマイクロビキニを着てくれている。

うん、あれはもうほとんど裸だな。

布面積ほぼゼロ。

当然ながらエレンの巨大な双丘を支えきれるはずもなく、少し動くだけでぼんぼんと肉感的な大振動が起こっていた。

そして下は 自主規制

「着ている人がいた

ッ！ ちょ、エレンさんっ！ 何で着

ちゃってるんですかつ？」

「こ、これを着れば強くなれると言われて……」

「なれませんか！ 騙されてますから！」

「なっ……。くっ、謀ったなああっ！」

エレンは脱衣所へと慌てて引き返していった。

いやあ、良いものが見れたなあ。

ティラがジト目で俺を睨んでくる。

「……あんまりエレンさんで遊ばないでください。頭が弱い人なんですから」

その発言、ちょっとエレンに対して辛辣過ぎやしないか？

「こっちの水着なら大丈夫だろ」

俺はティラに別の水着を渡す。

今度は普通のビキニだ。

だが彼女は眉根を寄せて、

「これも露出多すぎじゃないですか？ ほとんど下着です」

「いやいや、水着ってそういうもんだから」

と訴えるものの、もはや狼少年状態でティラは不信の目を向けてくる。

仕方なく俺はさらに用意していた別の水着を取り出した。

「……まあ、これなら」

ティラはしぶしぶといった様子で頷き、脱衣所へ。  
入れ替わりでエレンが出てくる。

「さ、最初からこっちの普通のやつを渡してくれればいいものをっ」

今度はスリングショットの水着だった。

サスペンダー型のビキニで、胸と股間部分をY字型の布地が覆っているのだが、谷間や横乳がバツチリと見えている。

これもぶっちゃけかなりエロいのだが、前のがあれだったせいか、どうやらこれが普通だと思ってくれたようだ。お馬鹿さんで可愛いなあ。

少しして、ティラがフィリアと一緒に脱衣所から出てきた。

「ママとおそろい！」

「うん、お揃いね」

二人は同じ種類の水着に身を包んでいた。

胸部にはゼッケンが付いていて、それぞれ「ふいりあ」「ていら」とマジックで書かれている。

すなわち、スクール水着である！

うっは、いいね、いいねえ。

露出度は少ないってのに、何でこんなに興奮するんだろうな。

しかもエルフのスク水姿って、貴重だぜ？

実を言うと、ティラには最初からこれを着てほしかったのだよ！

そんな俺の興奮を察したのか、ティラが両手で胸部を隠した。

「……なんか、すごくイヤらしい目で見られている気がするんですけど……。あれ、そう言えば、シロはどうしたんです？」

「ん。準備できた」

そう言いながら姿を現したのは我が家のペット、シロだ。

彼女はその透き通るように白い肌を余すところなく晒していた。要するに全裸である。

「できてませんよね！？ 水着はどうしたんです！？」

「これで泳ぐ」

シロが断言する。

「ダメですから！ ちゃんと着てください！」

「なぜ？ お風呂は裸。なら海も問題ない」

「問題ありますから！」

地球にはヌーディストビーチっていう素敵な場所もあるんだけどな。

一度でいいから行ってみたかった……。

「気にしない。わたしはドラゴン。人と違ってそもそも服は着ない主義」

「それでも人の姿をしているときは着てくださいって、いつも言ってるじゃないですか！」

「俺もぜんぜんまったく気にしないぜ！」

「カルナさんには訊いてません!」

仕方ないなあと嘆息しつつ、俺は別のものを提案することに。

「じゃあ絆創膏はどうだ?」

「ん。それでいい」

「絆創膏!? 今、水着の話してるはずですよね!? どういうことです!?! でもたぶんロクでもないことだと思うので説明しなくていいです!」

結局、ティラの説得もあって、シロはマイクロビキニを着用するということに落ち着いた。

さらにちなみに言っと、俺はブーメラnpantsである。

……え? その情報要らない? 知ってた。

「よっしゃーっ、泳ぐぞーっ!」

俺は真っ先に駆け出した。

誰もいない白い砂浜を走り抜け、海へと飛び込んだ。

「うっはーっ、気持ちいい!」

遅れてティラたちが波打ち際まで追いついてきた。

「わーい! どぶーん!」

「……とう」

「っ、けっこう冷たいですね」

「ぺぺっ、何だこれは! すごくしょっぱいぞ!?!」

フィリアとシロは俺と同じように大胆に飛び込んできたが、ティ



ラとエレンは恐る恐るといった様子で海水に入ってくる。

それから俺たちは水を掛け合ったり、ビーチバレーをやったり、砂でお城を作ったりして遊んだ。

シロだけはずっと水の上にぶかぶか浮きながら寝ていたが。

「さて。そろそろあいつの出番だな」

「……何の話です？」

俺の予言めいた呟きに、ティラが首を傾げたときだった。

「ひゃっ！？ あ、あ、足に何か絡み付いてきたぞ！？」

突然、エレンが悲鳴を上げた。

見ると、彼女の足にぬめぬめと光る太い縄のようなものが巻きついていていた。

直後、水面が大きく盛り上がったかと思うと、海中から巨大な影が姿を現す。

それは無数の柔らかな突起物を持つ、イソギンチャクのような生き物だった。

そう、我らが触手モンスターのご登場である！！

「次回、ヒロインたちが触手攻めでめちやくちやに……！？ 乞うご期待ッ！」

「誰に向かって何を言ってるんですか！？」

**第78話 絆創膏は水着ですか？（後書き）**

絆創膏は水着です。

5・31追記 一部、規約的に危ない描写を修正しました。

## 第79話 頑張れ僕らの触手モンスター

触手に足を掴まれたエレンが、逆さまに空中へと吊り上げられてしまう。

「このっ！」

彼女は空中で身を捻ると、足に巻きついた触手を手で掴み、引き千切ろうとした。剣はキャンピングカーに置いてきているのだ。

「……っ、掴めない……っ!？」

だが触手の表面を覆うぬめぬめのせいで、エレンの手がつるりと滑ってしまふ。

その間にも複数の触手が彼女に襲いかかっていた。

「……んっ……あっ……や、やめっ……」

四肢を触手に拘束されてしまふエレン。

お尻や首周りを触られ、色っぽい悲鳴を漏らす。

「いいぞ、触手！ もっとやれ！ よし、フィリアも俺と一緒に触手さんを応援するぞ」

「うん！ しよくしゅーっ、がんばれーっ！」

「くっ……こんなことでは、あたしは屈しない……っ！」

歯を食い縛り、エレンは触手攻めに耐えようとしている。ふふふ、その強がり果たしていつまで持つかな？

「おい胸だ！ 今度は胸を攻めろ！」

「むねーっ！」

「はうっ……ちょ、あんっ……」

エレンはすでに全身ヌルヌルだ。

俺のテンションはさらにヒートアップ。

「よし、水着の中にも侵入するんだ！」

「なかーっ！」

「……そ、そこはだめっ……」

そのときだった。

「エレンさんっ！」

ティラが放った風の刃が、エレンを拘束していた触手を切り裂いた。

ばしゃーん。

拘束から解放され、飛沫を上げて海に落下するエレン。

「うわっぶ………た、助かったぞ、ティラ！」

「それにしても何なんですか、このイヤらしいモンスターはっ！」

次々と迫りくる触手を風の刃で斬り飛ばしながら、ティラが怒鳴り声を上げる。

しかし触手は無数に存在し、切っても切ってもキリがない。  
彼女が餌食になるのも時間の問題だろう。

「が、ん、ば、れ、しょ、く、しゅ！」  
「がーんーばーれーっ！」

俺とフィリアは拳を突き上げ、懸命に触手に声援を送る。  
もはや触手応援団だ。

ちなみにシロはずっと海面にぶかぶか浮かんで寝ていた。  
相変わらずマイペースな奴である。沖にまで流されないといいけどな。

「あ、あたしが触手をどうにかする！ ティラはその間にデカい魔法を！」

「分かりました！」

エレンとティラが連携を取り始めた。  
ティラを庇うようにエレンが立ち、迫る触手を拳で打ち払っている。

その間にティラが呪文を詠唱。

「おい、まずいぞ触手！ あの魔法を唱えさせるな！」  
「じゃせるなーっ！」

俺の言葉を理解できたのか分からないが、触手モンスターはティラの魔法を阻止すべく、全触手を懸命に振るう。  
だが

「エレンさん！」  
「了解！」

ティラの合図で、エレンが飛び退く。

直後、ティラの上級魔法が発動した。

雷鳴が轟き、触手モンスターを電撃が襲う。

「触手うううっ!？」

「しょくしゅーっ!？」

俺とフィリアはそろって悲鳴を上げた。

ティラの魔法の直撃を受け、我らが触手モンスター様が黒焦げになっってしまったのだ。

自慢の触手も大半が焼け、もはや虫の息である。

「まだだ！ まだ諦めるなっ！ お前の活躍を皆が待っている！  
こんなところでお前は死ぬ訳にはいかないんだっ！」

俺はそう激励の言葉を吐きつつ、触手モンスターに向かって高位の治癒術を発動した。

見る見るうちに傷が癒え、元の素晴らしいぬめぬめを取り戻していく。

元気になった触手モンスターは、再びエレンとティラに襲いかかった。

ヒーローの復活に、俺は快哉を叫んだ。

「さあ、行け！ 触手よ！ 俺たちの夢を叶えてくれ！」

「って、さっきから何やってるんですか、あなたは      ツ!！」

このあとめちゃくちゃ怒られた。

「あの……ティラさん？　そろそろ出してもらえないでしょうか…  
…？」

俺は恐る恐る訊ねた。

「ダメです。もうしばらくそこで反省しててください」

しかし返ってきたのは、ティラ様の冷たいご返答。

俺は先ほどの罰ということで、頭部以外の全身を砂浜に埋められていた。

この状態ですでに一時間。  
皆が海で楽しそうに遊んでいるのを、ずっと眺めているだけ。  
とても暇である。

「まあでも、このアングルから見る世界もなかなか良いものですね  
ゲヘヘ」

「ぜんっぜん反省してませんよね!？」

「ふぎゃ」

ティラに頭踏まれた。

スク水美少女に裸足で頭を踏み付けられるのは、むしろご褒美で

すけどね！

「ティラ、見つけたぞ！」

とそのとき、海の方からエレンの声。

ティラはそれに頷いてから、

「どうやらようやく執行人が現れたみたいです」

「え……執行人で……？」

とても嫌な予感とともに、俺は首を海の方へと向けた。

先ほどとはまた別の触手モンスターがそこにいた。

そいつはエレンに剣でつつかれて誘導されているらしく、真っ直ぐ俺の方へと向かって来ている。

「喜べ、こいつは雌だ」

「……まさか」

俺の頬を冷や汗が流れた。

「逃げないでくださいね？」

ティラが怖ろしい笑顔で念を押してきた。

直後、無数の触手が一斉に俺へと迫りくる。

一部は地面に突き刺さり、砂の中から俺の身体へ

「いやあああああっ！」



男が触手モンスターに蹂躪される。

このあと繰り広げられたのは、そんな誰得展開だった。

慣れると結構気持ち良かったです。

## 第79話 頑張れ僕らの触手モンスター（後書き）

現在、下記作品も同時連載中です。こちらもよろしく願いします。  
『万年Dランクの中年冒険者、酔った勢いで伝説の剣を引っこ抜く』  
<http://ncode.syosetu.com/n0608dy/>

にリンク貼っています。

## 第80話 海賊退治

俺たちはNABIKOで海の上を走っていた。

船首が海水を掻き分けながら進んでいく。

せつかなので第四形態として船の姿へと変形できるようにしたのだった。

天気は快晴。

陽光を浴び、海面がキラキラと輝いている。

甲板に出て風を浴びることもできるし、船内の窓からは海の中を楽しむことができた。

フィリアはさつきからずっと窓に鼻を押し付け、「さかなーっ」「くらげーっ」「しゃめーっ」などと楽しそうに叫んでいる。かわいい。

時々海棲のモンスターが襲ってくるが、迎撃システムに任せていた。

敵対生物の接近を察知すると、ナビ子さんが魚雷を発射して撃退してくれるのだ。

あのビーチから海へ出て、現在、俺たちは鬼族たちの住む島へと向かっている。

エクバーナへ侵攻軍を率いていた巨乳將軍こと桜花から、機会があればぜひ立ち寄ってほしいと言われていたのである。

どうやら彼女らの国は向こうの世界の日本に似た文化を持っているらしく、俺としても一度行ってみたいと思っていた。

ビーチからも肉眼で見えるほどの距離なので、たぶん瀬戸内海を挟んだ中国地方と四国くらいの距離感だろう。

三、四時間ほどあれば着けるはずだ。

「およぐーっ！」

「こら、モンスターも出るから危険だぞっ」

見ているだけでは飽きてしまったのか、水着に着替えたフィリアが海に飛び込み、エレンが慌てて後を追う。

ちょうどそこへ魚人型モンスターであるギルマンが現れたが、フィリアが自分でも気づかない内にバタ足で蹴り飛ばして倒していた。

一方、俺は甲板の上にサマーベッドとパラソルを設置し、上半身裸でのんびりと横になっていた。

今日はばかばかと温かく、そうしていると眠くなってくる。

平和だなあ。

しかしそんなふうに俺たちが平和な船旅を満喫している時だった。

「あれ、船じゃないですか？」

ティラが北東を指差して言う。

「確かに船だな」

けっこう大きな船が海上を進んでいた。

進路を考えると、ちょうどこの船とぶつかりそうだ。

ちなみに船は髑髏のマークが描かれた旗を掲げていた。  
うん、物凄く分かりやすい海賊船だな。

『あの海賊旗はソイル海賊団のものです。この海域では名の知れた海賊団ですね』

ナビ子さんが教えてくれる。

なるほど、暇つぶしにちょうど良さそうだ。

「お頭、なかなかいい女が乗ってたっすよ」

俺たちは縄で拘束され、海賊船の甲板の上にいた。

「ほう、こいつあ高く売れるぜ」

そんな乱暴な口調で俺たちを値踏みするように見てくるこの海賊団の船長らしき人物は、驚いたことにまだ二十代半ばくらいの女性だった。

かなり日に焼けているが、それがかえって魅力にも思えるなかなかの美人である。

「こいつらは牢にぶち込んどけ。貴重な商品だからな、勝手に傷モノにするんじゃないぞ」

「うっす！」

「……てめえだけは大して商品価値がなさそうだし、あとでオレが可愛がつてやるよ」

女船長は俺に顔を近付けて舌舐めずりした。  
マジか。とても楽しみです。

と一瞬期待したのだが、どうやら気持ちいいことではなく痛いことしようとしているようだったので遠慮しておくことにしよう。

「ねー、パパ。そろそろいい？」

フィリアが早く暴れたくてそわそわしている。あとエレンも。

「ああ、いいぞ」

「わーいつ！ えいつ！」

可愛らしい掛け声とともに、ぶちんつ、とフィリアは自分を拘束していた縄を引き千切った。

「「「え……？」」」

ちよつとやそつとでは切れないはずの縄がいとも容易く千切られ、海賊たちが啞然とする。

「誰だこんな脆い縄を使いやがった奴は！？」

「そ、そんなはずはないっすよ、親分！ ちゃんと頑丈なやつを使って縛ったっす！」

「だったらこんなに簡単に千切れるわけがねえだろうが。おい、とつとと拘束し直しやがれ」

「了解っす！」

女船長が苛立ち、船員たちが慌ててフィリアを捕縛しようと彼女に近付いていく。

「たーっ！」

「ぶべっ！？」

「ぎゃっ！？」

「ぐおっ！？」

だが屈強な海の男たちは、フィリアにあっさり吹き飛ばされて海へと落ちていった。

「確かに脆い縄だな」

「ふん、こんなものであたしを捕えられると思うな」

「……ん」

フィリアに続いて、俺とエレンとシロも強引に縄を引き千切った。あとはティラだけだ。

「……あの、私にはそういう常人離れたことはちょっと無理だと思っんですが……。って、あれ？ 意外といけそうかも……。？ んんっ……」

顔を赤くして力むティラ。

「おっ、その力んだ顔、なんか新鮮で可愛いな。だけど力み過ぎてオナラしないでね」

「へ、変なこと言わないでください！」

ツッコミと同時に、ぶちっ、と彼女を拘束していた縄が切れた。

さすがツツコミ系ヒロインである。

「ちっ、しょうがねえ！ てめえら、多少傷つけても構わねえから捕えなおしやがれ！」

「「「おう！」「」」

海賊たちが一斉に腰に差していた湾刀を抜いた。

全部でだいたい二百人くらいか。

俺たちは海賊船の大掃除を開始した。

「ほい。えい。おりゃ」

「ぐおっ」

「ぬあっ」

「あーれー」

次々と襲い掛かってくる海賊たちを千切っては投げ、千切っては投げ。

俺はゴミを掃いて捨てるように、海へと投げ飛ばしていく。  
実際ちよつとこいつら汚いしな。

「わーい！」

「ひいっ」

「こつち来たあああっ！？」

「逃げろおおっ！」

「きーーーーんっ！」

甲板の上を無邪気に走り回りながら、海賊たちに恐怖を与えているのはフィリアだ。

その可愛い見えた目とは裏腹に、魔導人形たる規格外のパワー。屈強な男たちも成す術がない。けどその効果音はやめなさい。



「剣を抜くまでもないな」

「な、何だこの女っ？」

「素手で刀を受け止められた!？」

「ぐぼっ!？」

パワーではフィリアに劣るものの、アルサーラ王国最強、一騎当千の破壊姫の名は伊達ではない。

この程度の海賊たちでは、彼女の拳を喰らえば軽く数メートルは宙を舞って海にジャボンである。

「くそっ、こいつらやべえぞ!」

「あのエルフを狙えっ!」

「おおおっ!」

「あの……ちょっと匂いがきついので、あまり近づかないでいただきますか……?」

「臭いって言われたあああっ!」

「し、しっかりしろっ!」

「っ! お、おい、魔法がっ……ぎゃああっ」

辛辣な言葉で海賊たちのメンタルを削りつつ、ティラが風の上級魔法で海賊たちを吹き飛ばしていく。

「すうすう……」

自分が戦う必要はないと判断したのか、シロは甲板の上に横になって寝息を掻いていた。こんな状況でよく寝れるよな……。

「ちいつ、女子供も相手に何やってやがるっ！」

手下が次々とやられていく中、海賊船の女船長が声を荒らげる。

「仕方ねえ。オレがやる」

そして自ら前に出てきた。

「はっ、少しはできるようだな。だがよ、このオレを誰だと思ってやがる？　かの伝説の大海賊の末裔、ソ　　ぶぎやつ！？」

「えーい！」

口上の途中でフィリアに体当たりを見舞われて吹き飛び、女船長はマストに激突して悶絶した。

うん、フィリア。そこはちょっと空気読んであげても良かったかもしれないな。

「もおやだあ……陸に帰るうつ……ぐすつ……」

「お、お頭あああっ！？　それじゃあ海賊王になるという夢はどうなるっすか！？」

「無理い……だって、あんな化け物がいるんだもおん……」

「いつものお頭はどこに行ってしまったっすかあああっ！」

「ああ、ダメだ……お頭が完全に幼児退行しちゃった……ソイル海賊団も終わりだな……」

俺たちに完膚なきまでに叩きのめされたソイル海賊団は、この後すぐに解散したらしい。

「助けていただき、ありがとうございます」

それはともかくとして、海賊船内には彼らに捕縛された女の子たちがいたので解放してあげた。

女の子と言っても、下半身は魚だけだな。

つまりは人魚である。

どうやら海賊団は彼女たちを捕まえて奴隷商人に売るつもりだったらしい。

人魚には見目麗しい者が多く、かなり高値で買い取ってもらえるそうだ。実際、捕えられていた子たちは美女美少女ばかりだ。

それにしても……この子たち、おっぱい隠さないんだなあ……ハアハア。

五人いるのだが、全員が胸部を惜しげもなく晒している。

俺が凝視してもまったく嫌がったり恥ずかしがったりする様子はないし、たぶん隠さないのが彼女たちにとっては当たり前なのだろう。

何て素晴らしい種族なんだ！

「何で特定部位ばかりじろじろ見てるんですか？」

「見てない見てない」

「鼻の下、伸びてるんですけど？」

「ちょ、杖で突かないで。鼻の穴が広がっちゃうから」

ティラが魔法の杖で俺の鼻の穴をぐりぐりしてきた。

「あの、もしよろしければ私たちの街にいらっしやいませんか？」

と、そこで人魚の一人が提案してくる。この中でも一番形のいいおっぱいをしている女の子だ。……触るのはやっぱりNGなんだろうか？

「街？」

「はい。海底にあるのですが、私たちの魔法があれば人族の方でも呼吸ができるようになっていきます。ぜひとも助けていただいたお礼をしたいのです」

なるほど。人魚さんはなかなか律儀なようだ。

俺は頷きつつ、当然ここで訊いておくべき質問をした。

「ちなみに街の中でも人魚の皆さんはみんなそという格好で？」

「え？ あ、はい。私たちには人族の方々と違って服を着る習慣はありませんので」

「行きます」

それ以外の選択肢はあり得なかった。

「ちょっと動機が不純すぎじゃないですか！？」

「そんなことないさ。やっぱり彼女たちの厚意を無下にしてはならないと思ったからこそだ」

「じゃあ何でそんなイヤらしい顔してるんですか！？」

「普段からこんな顔だ」

「……」

あ、そこは否定してくれないのね!?

そんなこんなで、これからおっぱいの樂園に行ってきます。  
鬼族の島? そんなの後でいいよ。

第81話 おっぱいの樂園にやってきました（人魚の里です）

不思議な感覚だった。

水の中にいるというのに呼吸ができるし、身体がまったく濡れない。

人魚さんたちの魔法の効果である。

……まあ俺の場合は 水中棲息・極 という、水中でも棲息が可能になるというスキルがあるので別に必要なかったのだが。

俺たちは助けた人魚さんたちに連れられて、人魚の里へとやってきていた。

まるで浦島太郎だな。

「みんな！ ただいま！」

俺たちを連れて来てくれた人魚のお姉さん　ちなみに名前はリユーナさん　が手を振ると、そこらにいた人魚たちがこつちを振り返った。

「えっ、リユーナ？」

「うそ、海賊たちに捕まったんじゃないの……？」

「それにタツナたちもいる！」

「無事だったのね！」

わっ、と人魚たちが一斉に俺たちの元へと群がってくる。

「うん！ この人族の方たちに助けてもらっただけです！」

「へえ！」

「ありがとう！」

「うおおおおっ！」

俺は思わず叫んでいた。

人魚たちは服を着ない。

だからおっぱい丸出しなのだ！

俺の目の前で惜しげもなく晒される、生のおっぱいおっぱいおっぱいおっぱい！

しかもそろいもそろって美女美少女ばかりときた。

素晴らしい！

楽園はここにあったのだ！ 俺もここで暮らす！

「……鼻血でてるんですけど……」

ティラがジト目で何か言ってくるが今の俺の耳には届かない。

「族長のところに案内しますね！」

リユーナに先導されて、俺たちは里の中を進んでいく。

真っ白い家々にそれを取り巻く色鮮やかな珊瑚。

「きれい！」

フィリアの言う通り、物凄く綺麗な街だった。

時折魚の群れが目の前を通り過ぎていく。

時折見かける住民人魚もやっぱり皆おっぱい丸出し。

「あれだ。ここは俺たちも服を脱ぐべきだよな、ティラ」

「脱ぎませんよ!？」

「だが俺は脱ぐ!」

俺はズボンに手をかけた。

「ちょ、やめてください脱がないでください!」

「ん、これが自然」

「って、シロがもう脱いじやってるんですけど!？」

シロはすでにスッポンポンである。

「ぬぐーっ!」

「フィリアちゃんまで!? ダメです!」

「パパもぬいでるよー?」

「って、だから脱がないでくださいってば!」

「別に俺が脱ぎたいから脱いでいる訳じゃない! あくまで人族と人魚族の友好のためだ!」

俺の主張にエレンがハツとしたように頷いた。

「確かに、郷に入っては郷に従えと言うし、ここはあたしも脱ぐべきか……」

「エレンさん! そんなにあっさり騙されないでください!」

「あ、みなさん別に脱がなくて大丈夫ですよ?」

「がーん」

リユーナさんの一言で俺の企みがあっさり打ち砕かれてしまう。



空気読んでくださいよお……。

ちなみに人魚たちの寿命は人族と大差ないらしいが、人族と違って基本的に死ぬまで若い姿のままだという。

だから里には若い女性ばかりなのだそうだ。

それと、男の人魚はいない。

繁殖期になると一部の女性が一時的に性転換するらしい。

素晴らしきかなこの百合システム！ 俺やっぱりここに永住する！

やがて族長が住むという家に到着した。

きつと彼女も物凄い美女に違いない。俺は期待に胸を膨らませ、リユーナに続いて中に入る。

「おお、お主らがリユーナたちを救ってくれた恩人か。歓迎するぞ」  
そう言っただけ俺たちを迎えてくれたのは、人魚の干物だった。

「……あれ。おかしいな？ 人魚なのに皺くちやのババアなんだけど……」

俺は目を瞬かせる。

うん、あれだ。きつと俺の目が一時的におかしくなったんだ。

軽く目を揉んでから、俺は改めて視線を向ける。

やっぱりそこにいたのは皺くちやのババアだった。

胸なんてだらーんとヘソの下くらいまで垂れ下がっている。

今まで見てきたおっぱいで得た鋭気を、根こそぎ持って行かれそうになるレベルの悍ましさだ。

「人魚って死ぬまで若い姿なんじゃないのか……？」

「さすがに百五十年も生きておるからのう」

ババアもとい族長は遠い目をして言った。

「何でそんなに生きてしまったんだ……」

「その発言物凄く失礼ですよね！？」

「せめて服を着てもらえないか……？ 目が腐りそうなんで」

「かっかっか！ 随分と冗談好きな人族じゃのう！」

いや冗談とかじゃないんで。マジなんで。

「ともかく、今晚は宴じゃ！ 御客人方、存分に楽しんでいってくださいよ！」

里の中央にある広場で盛大な宴が催されていた。

沢山の人魚たちが集まっている。

給仕してくれている人魚たちもおっぱい。

ダンスを披露してくれている人魚たちもおっぱい。

歌を歌ってくれている人魚たちもおっぱい。

右を見ても左を見ても生のおっぱいおっぱいおっぱいおっぱいなのだ。

ああ、やっぱりここは楽園だったよ……。

ちなみに何やら少し前に悍ましいものを見たような気もするが、すでに忘却の彼方へと追いやったので問題ない。

「どうじゃ？　楽しんでおるか？」

「ぎゃあああつ！」

目の前に突如として化け物が現れたので、俺は思わず悲鳴を上げていた。

垂れた乳が視界に入る。

うおおおつ、目がっ、目があああつ！

「なんじゃ、大袈裟な。そんなにわしの裸が魅力的か？」

「破滅的だよ！　腰をくねらせてポーズ取るのやめろ！　本当に目が腐る！　死ぬ！」

「かつかつか、そんなに照れんでも。良ければ揉んでみてもええぞ？」

「んなことしたら手が腐るから！　細胞が一瞬で死滅する！」

しかもどうやって揉むんだよ。

引っ張るくらいしかできないだろ。

めちやくちゃ伸びそうだな……。

「なんだか少し、眠くなってきました……」

俺がこの里の唯一の汚点とやり合っていると、不意にティラが俺の肩に頭を預けてきた。

うお、何だこの突然の素敵シチュエーション！？　地獄に仏とはこのことか！？

「……すうすう……」

と思ったが、何やら様子がおかしい。  
人前で寝ることなどめったにないティラが、あっさりとそのまま  
寝落ちしてしまった。

「……あたしも……眠い……」

エレンが頭をふらふらせ、こてんとその場に倒れ込んでしまっ  
た。

「お？」

直後、俺も睡魔に襲われる。

あ、これ食事に睡眠薬盛られてたな。

「許せ、御客人方。里の者を護るためには、こうするしかなかった  
んじゃ」

皺くちゃババアが申し訳なさそうにしつつも、冷厳とした口調で  
告げた。

「お主らには海神様の生贄になってもらう」

## 第82話 海神様

どうやら食事に睡眠薬を入れられていたようだ。

まあ 状態異常耐性・極 とか 自然治癒・極 を持つ俺には効かないけどね。

「族長！？ 一体何をされたのですっ？」

俺たちを里に連れて来てくれたリユーナが、異常に気付いて声を荒らげる。

「こやつらには里の者に代わって海神様の生贄になってもらう。特にこの二人の娘は海神様の好みに十分に合うじやろう」

「そんな……っ！ この方たちは私たちを助けて下さったんですよ！？」

「……許せ、リユーナ。これも里のためじゃ。もうこれ以上、犠牲を出すわけにはいかぬ」  
「だからって……っ！」

言い合う族長とリユーナ。他の人魚たちも驚いているところを見るに、どうやらこの件はほとんど族長の独断らしい。クソババアめ。

俺は訊いた。

「ふーん、海神様が。どんな奴なんだ？」

「巨大な双頭の怪物じゃ。遙か昔に海山の麓に封印され、祭られていたのじゃが、つい最近、目を覚ましてしまったようなのじゃ。そして月に一度、里に現れては娘たちをさらっていく……」

「なんか昔話によくありそうな展開だな」

ヤマトノオロチとかな。

「……って、なぜお主、眠っておらんのじゃ!？」

と、そこでようやく俺が平然としていることに気づいて、族長が悲鳴じみた声を上げた。

「ん……ちよつとくらつとした」

「ママどうしたのー?」

俺だけじゃなく、シロとフィリアにも効いていない。  
ドラゴンと魔導人形だからな。

「な、なぜ効いておらぬ……っ? 丸一日は目覚めぬ量だったはず  
……っ!」

ババアが垂れた乳をブランコみたいに揺らしながら驚いている。  
ぐおっ……何という精神攻撃だ……っ!

俺は悍ましいものから目を逸らしつつ、ティラとエレンに回復魔法を使う。

二人ともすぐに目を覚ました。

「……あ、せっかくだしエツチなことしておけばよかったな」  
「聞こえてるんですけど!？」

ティラが叫んだそのときだった。  
遠くから獣の唸り声のようなものが轟いてきて、広場に集まって

いた人魚たちから悲鳴が上がった。

「っ！ これは、海神様の声じゃっ！ 皆の者、建物の中へと避難せよ！」

族長が大声で人魚たちに指示を飛ばす。

夜の帳が落ちつつある暗い海の向こうから、巨大な影がゆっくりと里に近づいてくるのが見えた。

「ドラゴンか」

それは双頭のドラゴンだった。

蒼い鱗を持つ水棲の海竜で、見たところ全長は五十メートルを軽く超えているだろう。

鑑定・極 を使って、もう少し詳しく調べてみる。

「千年以上を生きた古竜だな。だとすれば超竜クラスか」

ドラゴンは一般的に、下位竜、中位竜、上位竜の三種類に分けることができる。

上位竜が最も強く、例えばレッドドラゴンはこの上位竜に相当する。

だがその上位竜の上にも伝説級とされるドラゴンがいて、それが超竜だ。

種族的にこのクラスに位置づけられるドラゴンもいれば、長い年月を生きた古竜が超竜へと進化するケースもある。

目の前の海竜は後者だった。

「目には目を、歯には歯を、そしてドラゴンにはドラゴンだ。と言う訳で、シロ、任せた」  
「ん」

我が家のペットは、主人の意図を察してすでに全裸待機していた。いや、単にいつものように裸になってただけだが。

シロの身体が煌々と輝き、そして白きドラゴンが姿を現す。彼女は普段は人の姿をしているが、その正体は超竜のさらに上位に位置づけられる神竜の一種、白輝竜なのだ。

「な、な、なっ……」

突然現れた伝説の竜に、ババアが腰を抜かしている。

「行ってくる」

それだけ告げると、シロは身を躍らせて水中を爆発的な速度で駆けた。

海竜はシロの十倍近い大きさだ。

それでもシロは怖れることなく一気に肉薄すると、口腔から衝撃波を吐き出した。

『ぎゃっ！っ！』

いきなり攻撃を喰らい、頭の 하나가悲鳴を上げた。

『いったいなーっ！ 何すんだよいきなり！』



古竜のくせに随分子供っぽい口調だ。

『あのドラゴンの仕業だよ！』

『はんっ、まだ幼竜じゃないか！』

『しかも水の中でばくらに盾突くなんて良い度胸だね！』

二つの頭はそんなやり取りを交しながら、反撃とばかりにシロに牙を剥いて襲いかかった。

しかしシロは悠々と水中を泳ぎ、双頭竜の攻撃をあっさり躲していく。

『こいつ、なかなか素早いよ！』

『いったあっ』

逆にシロが吐き出す衝撃波は、確実に双頭竜にダメージを与えている。

『くそ、これならどうだ！』

突如、海中に渦が発生した。あの海竜が引き起こしたのだろう。高速回転する渦がシロを呑み込む。

『あははっ、そこから脱出するのは不可能だ！そのまま攪拌され続けて海の藻屑になればいいよ！』

『ん？ これくらい簡単に出られる』

『うわーっ？ 簡単に出てきちゃった！？』

あっさり渦から脱出してきたシロに、双頭竜が悲鳴を上げた。それからはほとんど一方的な展開だった。

幼竜とは言え、さすがは神竜。しかも海中という相手のフィール

ドにおいて、シロは古き竜をまるで寄せ付けなかった。

ボロボロになった海竜は力では勝てないと判断したのか、抗議の声を上げた。

『同じドラゴンなのに、何でボクらの邪魔をするのさ!』

『そうだそうだ!』

『飼い主の命令』

『飼い主? 君、ドラゴンのくせに人魚なんか飼われてんの?』

『違う。飼い主は人族』

『ぷぷぷつ、人族に屈するなんて、情けないドラゴンだね!』

『美味しいものには抗えない』

そう返しつつ、シロは海竜の背中に噛みついた。

『ぎゃあ!』

『いたい!』

『……硬い。けど、料理すればいける?』

『ひいひい!』

『お願いだから食べないで!』

食材にされかねないと知った双頭竜は、情けない声で許しを請う。

『大丈夫。ちゃんと残さず食べる』

『そういう問題じゃないから!』

『そこまでだ、シロ。放してやれ』

「ん」

俺が声をかけると、シロはあっさり海竜の鱗から牙を抜いた。

と、そのとき海竜の身体がいきなり縮み始めたかと思うと、気づけば二つの頭を持つ人族の少年の姿へと変身していた。

人化したのだろう。てか、人化してもやっぱり頭は二つのままなんだな……。

俺をシロの飼い主と判断したらしく、少年は俺の前で土下座して嘆願してくる。

『許してください！』

『ぼくら食べても美味しくないですから！』

確かに食っても美味しくなさそうだ。

まあ食うか食わないかはとりあえず置いておいて、俺は竜語で二人（？）に命令した。

『お前たちがこれまでさらっていった人魚たちを返してもらおうか』

### 第83話 巨乳VS貧乳VS垂れ乳

俺たちは海竜の住処である洞窟へとやってきていた。  
一応さらわれた人魚たちは生きているらしい。

食用でなかったことは不幸中の幸いだ。  
ただ、だとしたら、さらっていった目的はいわゆる「みだらな行為」とか「わいせつ行為」ということになる。フィリアはシロに任せて里に置いてきて正解だった。

たとえ助けてあげたとしても、心の傷を癒すことまではできない。  
何とも気が重いぜ……と思っていたのだが

「おかえりなさいー」

「あれ、お客さん？」

「海の中に人族なんて珍しー」

洞窟の奥から人魚たちが飛び出してきた。

「……普通に元気そうですね……？」

ティラが目を丸くする。

しかも誰一人として拘束されてはおらず、これでは幾らでも逃げ放題だ。

俺は彼女たちに、助けにきたのだと伝えた。

「えー、帰らなくちゃだめなの？」

「ここ結構居心地良くてさー」

「だってあの街、ババアが煩くて」

すると帰ることを拒まれてしまう始末。

「おい。お前、この子たちを洗脳したんじゃないだろうな？」

「そんなことしてないよ！」

「してないしてない！」

俺が睨みつけると、海竜は慌てて首を振った。

実際、鑑定して調べてみても、彼女たちが状態異常を起こしている様子はない。

「単純にボクたちの魅力のお陰だよ！」

「そうそう！」

海竜が胸を張って主張する。

人魚たちが姦しく争いながら擦り寄っていく。

「この人の吸い付きが気持ち良くて……」

「病み付きになっちゃった！」

「ねえ、また吸ってよ！」

「あ、ずるーい！ 今度は私の番なんだから！」

……な、何の話だ……？

「順番だよ！ 順番！」

「みんなちゃんと吸ってあげるから、喧嘩しないで」

そして、俺たちは信じられない光景を目の当たりにする。

海竜が人魚の胸に吸い付き出したのだ。

「「え……」」

目の前でいきなり繰り広げられた淫行に、ティラとエレンが固まった。

左右同時に攻められ、人魚は恍惚とした顔をしている。

なるほどなー。

こいつ頭が二つあるから、二つのおっぱいを同時に吸うことができるのかー。

って、

「ふざけんな、この野郎っ！」

「いだあっ」

「いでえっ」

俺は双頭竜の頭に怒りの鉄拳を叩き込んだ。  
そして心の底から叫ぶ。

「俺にもおっぱい吸わせろよおおっ!!」

「怒るところはそこですか      ツ!？」

「別にいいけど……」

「彼女たちが良いって言うなら……」

「マジか!？」

俺は血走った目で人魚たちの方を見た。

「わたしは嫌」

「私も」

「あたしも」

「なんか噛み千切られそう……」

がーん……。

いや、まだだ。

まだ諦めるのは早い！

「ティラ、一生のお願いだ。吸わせてくれ！」

「絶対に嫌です」

「じゃあ、エレン！」

「あ、あたしだって嫌だからな！」

「優しく吸い付くから！」

「「そう言う問題じゃない（です）！」」

二人にまで一蹴され、俺はがつくりと頂垂れた。  
あああ、この世界には神も仏もないのか……。

「くそお……羨ましいぜ……」

歯噛みしながら、ふと俺はあることに気が付いた。

「……おっぱいの大きさ、偏ってないか……？」

海竜に連れて来られた人魚たち。

胸の大きなグループと胸の小さなグループにくつきりと分けることができ、その中間層がまったくいなかったのだ。

「ぼくは巨乳だけでいいって言ったんだけど、このバカが言うことを訊かなくてさ！」

「バカは君でしょ！ 巨乳の何がいいのさ！ こんな脂肪の塊じゃないか！」

すると突然、二つの頭が言い争いを始めた。

「この柔らかさの価値が分からないなんて、君こそバカなんじゃないの？」

「小さい方が感度がいいんだよ！ 女の子が興奮してる顔、この価値が理解できない奴こそバカだとぼくは思うね！」

「はっ、おっぱいについて議論してるのに、おっぱい以外のことを持ち出してくるなんて論外でしょ！」

「その考えこそおっぱいへの冒涇だよ！ おっぱいと女の子は不可分だ！」

「巨乳にはロマンが詰め込まれている！ 貧乳には何も詰まっていない！」

「小さい方が密度が濃いに決まってるでしょ！」

「巨乳こそ至高だ！」

「いいや、貧乳こそ最高さ！」

……なあ、こいつらの首、もいじゃっていいかな？

俺は声を大にして叫んだ。

「どっちも素晴らしいに決まってるだろうがあああああっ！！」

おっぱいの大きさに貴賤などない！

それこそがこの世の真理だ！



「だから俺はティラの胸とエレンの胸、どちらも揉みたいし吸い付きたいツツッ!!」

この後、二人に思いきり殴られました。

帰りたくないと主張する人魚たちをどうにか説得し、彼女たちを連れて里に戻ってきた。

これからどうするかは彼女たち次第だが、里の皆が心配しているし、一応元気な顔を見せておくべきだろう。

「おおお……よく無事で……」

さらわれた娘たちの姿を見て、族長のババアは声を震わせて彼女たちの帰還を喜んだ。

それだけ心配していたということだろう。

「御客人方……なんと礼を言ってよいことか……しかもあのような不届きな真似を……」

ババアが俺たちに頭を下げて謝ってくる。

まあ里の娘たちを思つての行為だったわけだし、許してやるか。

「どうかっ、どうかこのババアの乳で許してくれぬかっ？ 吸うのも揉むのも自由じゃ！」

「むしろその垂れ乳に需要があると思つていることが許せねえよ！？」

俺が全力でツツコミを入れたときだった。

「な、なんだ、あのおっぱいは……っ？」

「い、今まで見たことがないよ……？」

この事件の元凶たる海竜が、ババアの乳を見て驚愕していた。そりゃそうだろう。あれはもはやおっぱいではない。別のナニ力だ。

「す、素晴らしいよっ！」

「あれはきつと」

「新しいおっぱいの形つつっ……！」

……え？

ぽかーんとする俺たちを後目に、海竜は鼻息荒くババアに迫った。

「お願い！ そのおっぱい、吸わせてくれないかい！」

「ぼくもぜひ吸いたい！」

「かっかっか！ わしの乳は安くないぞ？」

いや安いどころか廃棄物だろ。

「な、何でもするから！」

「どうかこの通り！」

「そこまで言うなら仕方がないのう」

「「やったあ！」」

そして海竜はババアの垂れ乳に飛び付いた。  
ババアがビクツと魚体を痙攣させる。

「はぁっん」

やめろ！ ババアの喘ぎ声なんて聞きたくない！

「おおおっ！　すごい、すごいよこれっ！」

「本当だ！　今までのどのおっぱいとも違う！」

二つの頭は声を揃えて叫んだのだった。

「「ぼくたちはこのおっぱいを求めていたんだっつっ！！」」

こうして、双頭竜の長年の論争に終止符が打たれた。

彼らが巨乳にも貧乳にも興味を失ったお陰で、さらわれていた人魚たちも里に帰ることを決意。

逆に族長は里を出て、双頭竜の住処に身を寄せることとなった。

めでたしめでたしである。

「オチが酷過ぎじゃないですかね!？」

「俺もそう思う……」

## 第84話 桜花戦隊ラブレンジャー

鬼族が住む島はそのまま「鬼が島」と呼ばれていて、だいたい北海道くらいの大きさである。

人口は全部で三百万人ほどだ。

島に上陸した俺たちは、この国の首都である「華都」へと向かった。

「おー、なんか懐かしい感じの家だなー」

道中で見かける家々は古い日本家屋によく似ていて、見てみると郷愁が湧いてきた。

この国の主食はやはり米らしく、あちこちにのどかな田んぼが広がっている。

完全に日本の田舎の光景である。

なんか無性に米が食いたくなってきた。

やがて首都へと到着する。

道が碁盤の目状に整備されていて、まさしく京都のような都市だった。

漆塗りのでっかい門を潜る キャンピングカーのまま通れる大ききだった と、この国の政治的・宗教的中心である鬼姫がいるという宮城へ。

つまるところ彼女は、日本でいう昔の天皇みたいな立場らしい。

宮城の前で下車。

門番らしき男たちに用件を伝えると、最初は警戒されたものの、

すぐにながりと態度が変わった。すんなり中に通される。

「ひろーい！」

宮城内にはだだっぴい庭が広がっていた。  
門番が桜花を呼びに行ってくれているが、しばらく待たされそう  
だ。

と、そのときだった。

突然、腰に刀を帯びた五人組が空から俺たちの前へと降ってきた。  
もちろん全員が鬼族だ。年齢は二十代から三十代くらいだろうか。

「お前がカルナだなっ！」

その内の一人が、俺を睨みつけて怒鳴る。  
というか、五人とも俺に親の仇でも見るような視線を向けてきて、

「女の子を四人も侍らせているなんて、許せん！」

「このリア充め！」

「一人くらい俺に寄せえええっ！」

「……死ねばいいのに……」

口々に怨嗟の言葉を吐いている。

「……何ですか、この人たち？」

ティラが不審者を見るような目で五人組を睨む。  
無理もない。

こいつら見た目からして明らかに怪しい。  
なぜかそれぞれ色の違う法被のようなものを着ていて、背中には

「桜花様ラブ」とか「桜花たんは俺の嫁」とか書かれたりしている。

ちなみに容姿的にもちよつとアレだ。

「桜花様に何の用だ!？」

「用っていうか、普通に会いにきたただけだが」

俺がそう言つと、彼ら五人はショックを受けたような顔になり、

「くっ……もうそんな気安い仲になつているだと……っ!？」

「許さん! 許さんぞおおっ!」

「俺たちを差しおいてっ……こんな人族ごときがっ……」

「違う……っ! 桜花たんはっ……桜花たんは俺の嫁だああっ!」

「……もう死ぬしかない……」

こいつらの相手、しないとダメかな……?

「……お前ら何者?」

とりあえず確認したが、正直訊なければよかったと後悔することとなる。

彼らが突然、口々に名乗り始めたのだ。

よく分からないポーズとともに。

「桜花様のためならたとえ火の中の水の中……あわよくばお湯の中ベツドの中……っ! 自称親衛隊だけどどう見てもお前が一番危ない型ファン、レッドっ!」

「多くは望まない。ただ遠くから見守るだけでいい。それが俺の基本スタンス……ただし裏切りは絶対に許さああんっ! 突然

豹変してアンチに変わる型ファン、ブルーっ！」

「桜花ちゃん関連グッズに買いそびれはなしッ！ 使用済みの私物なら、どんな大金を出しても惜しくはないッ！ 限界を超えた浪費で借金地獄に陥る型ファン、イエローっ！」

「桜花たんは俺の嫁……桜花たんは俺の嫁……桜花たんは俺の嫁……桜花たんは俺の嫁……桜花たんは俺の嫁えええっ！ 妄想は実現すると信じて疑わない！ 夢見る妄想乙女型ファン、ピンクっ！」

「……桜花と結ばれないなら死ぬ……生きる意味ない……桜花、君のせいだからね……君が僕を殺したんだよ……あははっ、あははははっ……鬱病責任転嫁型ファン……ブラック……」

そして彼らは一か所へと集まると、

「『五人そろって、桜花戦隊ラブレンジャーっ!』」

全員で決めポーズ（かなりキモイ）を披露してくれたのだった。

……このまま帰っていいかな？



「桜花様と会いたければ、俺たちを倒していけッ!」

桜花戦隊ラブレんジャーのレッドが声を張り上げた。

「じゃあお言葉に甘えて」

「ぶべっ!?!」

「ぎゃっ!?!」

「ぐあっ!?!」

「げえっ!?!」

「……っ!?!」

バタバタバタと、五人同時に地面に倒れ込む。

瞬殺である。

放置していると邪魔そうだったので、気を失った彼らを一か所に集めていると、そこに見知った美女がやってきた。

「カルナ殿! 来てくれたのだな! って、これは一体……?」

気絶した五人組を見て、桜花は目を丸くする。

「桜花戦隊ラブレんジャーらしいぞ」

「な、なんだそれは……? あっ、こいつ見たことあるぞ! 過去に私をストーカーしていた奴だ! いや、こいつだけではない。あいつも、そいつも……ぜ、全員そうだっ!」

どうやら前科者だったらしい……。

「なんか襲われたんだよ、いきなり」

「鬼姫様の恩人になんてことを……っ！ カルナ殿、すまないっ」  
「いや別にいいって」

それにしても、さすがは鬼族の英雄だ。

アイドル並みの人気があるようで、非公認のファンクラブが結構あるという。

ちなみに鬼姫は桜花と違ってめったに公の場に出ないため、人物像すらほとんど知られていないようだ。

哀れ桜花戦隊ラブレンジャーは、衛兵に引っ立てられていった。

桜花に案内され、俺たちは謁見の間へと通された。

床は畳み張りで、襖や欄干まである。本当に日本風の建物だ。

もしかしたら過去に俺と同じような日本出身の異世界人が訪れたことがあるのかもしれない。

前方には一段高くなっている場所があつて、恐らくはそこに鬼姫が来るのだろうが、まだ姿を現していなかった。

とそのとき、襖の向こうから微かに話し声が聞こえてきた。  
何だろうか。

五感強化・極 がある俺は、つい盗み聞きしてしまう。

「お、桜花っ……その……わ、わたし、へ、変じゃないかな……？」  
「もちろんだ。鬼姫様はいつもご立派にお勤めを果たしておられる」  
「そ、そうじゃなくてっ……あの……み、見た目が……おかしくな  
い……かなって……」

「姫様はお美しくあられると思うが……」

「……あ、ありがとう……」

「さ、姫様。すでにカルナ殿がお待ちだ」

「……」

「どうなされた？」

「うう……や、やっぱり、恥ずかしいよっ……」

「……恥ずかしい？ 何をおっしゃっておられるのか」

「だ、だって……その……うううう……」

「……？ あまりお待ちしては……」

「そ、そう、だよね……よ、よしっ」

ぱんぱん、と頬を叩く音がしたかと思うと、ゆっくりと襖が開いた。

鬼姫の登場である。

十二単を思わせるカラフルな衣装に身を包んだ彼女は、しかしその場に立ち止まったままだ。

「……姫様？」

背後に侍る桜花が訝しげに声をかけると、ようやく鬼姫は何ともぎこちない動きで歩き出した。ただただ前方だけを見据え、こちらとは目を合せようとしない。

と、そのとき、

「ふぎゃ……」

恐らく裾を踏んでしまったのだろう、ボタンと盛大な音を立てて鬼姫が転んでしまった。

「姫様っ!？」

桜花が慌てて駆け寄る。

「お怪我はありませんか、姫様っ？」

桜花が必死に声をかけるも、鬼姫は倒れた体勢のまま、時が止まったように動かない。

大丈夫か、と思ってみていると、いきなり鬼姫は、がばつと顔を上げた。

ぎりぎりとかラクリ人形みたいに首がこっちに向いた。目が合う。

その瞬間、ボツ、と鬼姫の頭から湯気が立ち上った。

「いやああああっ！」

そして大声で悲鳴を上げたかと思うと、立ち上がって襖の向こうへと逃げていく。

ボタンという音が聞こえたので、また転んだのだろう。

「ひ、姫様っ？　どうなされたのだっ？」

「うわあああんっ！　カルナさまに恥ずかしいところ見られたああっ！　絶対変な女だと思われちゃったあああっ！」

そして奥の方からそんな絶叫が轟いたのだった。

もちろんそこの鈍感系主人公とは一線を画する俺が、彼女の気持ちに気づかないはずがない。

「鬼姫ちゃんはどうやら俺にぞっこんらしいな！」

「そういうことは気づいても口にしない方がいいと思っんですけど？」

「あたしもそう思っぞ」

「ぞっこんー？」

## 第85話 酔っ払いエルフ

「あゝ、極楽極楽」

鬼姫との謁見が終わった後、宮城内にある湯殿へと案内された。  
檜の香りがする浴槽に肩まで浸かり、俺は目いっぱい寛いでいた。

「湯加減はどうだ、カルナ殿？」

そこへ桜花が入ってくる。

「ちょうどいいぞ」

「そうか、それはよかった」

「ただ、少し足りないものもあるな」

「足りないもの？ それは、一体……」

当惑する桜花に、俺は言ってる。

「ずばり、背中を流してくれる女の子だ！」

呆れたような視線が返ってきた。

「……それは必要か？」

「必要に決まってるだろ！ あと、できれば一緒に入ってくれと嬉しい！」

ますます桜花の視線が厳しくなる。  
が、そんなことなど気にせず俺は訊いてみた。

「鬼姫ちゃんとかどうだ？」

「阿呆。鬼姫様にそんなマネをさせられるか」

「じゃあ桜花さんで」

「な、なぜ我がそのようなことを……」

「あーあー、鬼族の感謝の気持ちというのも所詮その程度なのか。国を救ってあげたのにな」

「ぐぬぬ……」

俺の挑発に、桜花は悔しそうに歯軋りしてから、

「い、いいだろう！ 我ら鬼族は恩義に報いる高潔な民族だ！ そのことを我が身を持って証明してやろうではないか！」

桜花たん、マジでチョロイ。

いったん浴室から出て行った彼女は、しばらくして身体にバスタオルを一枚巻いただけの格好で戻ってくる。

うお、良い身体……っ！

エレンに勝るとも劣らない二つの巨峰に、むっちりとした四肢が堪らんわー。

それに、長い黒髪を頭の上に括り上げたことで露わになったうなじの色つぽさよ。

「あ、あんまりジロジロこっちを見ないでくれ……」

無理です。

しかも恥ずかしそうに頬を赤らめているのが、かえってそその。

俺は 博覧強記・極 スキルを使い、この光景を脳に焼き付けた。

「じゃあ洗ってもらおうか」

「ばっ、ばっ、前を隠せっ！」

俺が湯船の中で立ち上がると、桜花は頬を赤くして顔を背けた。彼女の目の前で、彼女の方を向いて座る。

「向きが逆だろう！？ 洗うのは背中だ！」

「桜花たんが良ければ俺の身体を余すところなく洗ってほしいな」

「ちょ、調子に乗るな！」

桶でスコーンと頭を叩かれた。

「……まったく。恩義がなければ刀で成敗しているところだぞ」

ぶつぶつ言いながら、不満をぶつけるように桜花は俺の背中にお湯をぶっかけてきた。

それから石鹸をタオルに擦り付けて泡立てる。

「できればおっぱいで洗ってほしい」

「貴殿は下品なことしか考えられないような病気にでも罹っているのではないか!？」

男の大半がそうだよ！

それから桜花は俺の背中を丁寧に洗ってくれた。

……残念ながらおっぱいではなかったが。

ばしゃっ、とお湯が注がれ、泡が落ちる。

「こ、これでいいだろう？」

「よし、次は一緒に湯船に浸かろうか」



「そそそ、それもするのか!？」

抵抗する桜花をあだこうだと言いくるめて、俺はついに彼女との混浴に成功する。

ただしタオルは巻いたままだったが。

「湯が白くて、どうせ見えないんだから外せばいいのに」

「……それはそうだが、なぜだか外したくない」

浴槽の端っことから、桜花がジト目で俺を見ってくる。

しかしこの状況、桜花戦隊ラブレんジャーの連中が見たら発狂しそうだな……。

結局、最後まで桜花はタオルを外してくれなかったが、美女付きのお風呂はなかなか最高だった。

「いい湯でしたね」

「お陰で少しのぼせてしまったのだ……」

「すつきりーっ!」

「ん」

俺だけでなく、ティラたちもお風呂を借りていたらしい。

頬が火照り、髪がしっとり濡れていて、しかも浴衣姿だ。良いですなあ。

その後、俺たちは大広間へと通された。

そこにはずらりと豪華な料理が並んでいた。島国だけあってやはり魚料理が多い。

どうやら今から宴会が催されるらしい。

「貴殿らのお陰で我が民族は救われた。これはほんのお礼だ」

「お礼ならさっきお風呂で見せてもらった桜花さんの裸だけで十分なのに」

「見せてないだろう!? 捏造するな!」

ちなみに今度は毒を盛られているなんてことはないようだ。

人魚の里での一件があったのでちょっと心配になってしまっが、桜花たちがそんなことをするはずもない。……桜花戦隊ラブレンジヤーならやりかねないが。

活け造りされた刺身を口にする。

うん、新鮮で美味しいな。

「おお! お米だ!」

最も嬉しかったのが、この世界に来てまだ一度も食べたことなかったお米があったことだ。

味もなかなか悪くない。

これなら白米だけでも食べられるな。

「うまうまうま」

グルメドラゴンのシロすらも満足させる味のようで、美味しそうに食べている。

この島にはちらし寿司の文化もあるらしい。

酢飯に魚介や椎茸、大葉、海苔などが混ぜ込まれている。

ただ、どうやら握り寿司はなさそうだ。

あと、酒も美味かった。  
米を発酵して作った清酒だ。  
やっぱり日本人の口に合うなあ。

余興として鬼族の女性たちが演奏に合わせて民族舞踊を見せてくれた。

俺は右から三番目の子が可愛いと思った（男の大半はこうした視点でしか見てない）。

「うへへえ、このおみじゅ、のんできると、なんだか気持ちよくなってきたのだ〜？」

「おい、エレン。それは水じゃないぞ。お酒だ、お酒」

エレンが酒を飲んで完全に酔っ払っていた。

顔を赤くし、でろーんと畳の上に寝っころがるエレン。浴衣がはだけで、大きな胸が零れ落ちそうになっている。

「ちょっとエレンさん。こんなところで寝ないでください」

「べつどにつれてって〜」

「しょうがない方ですね……」

侍女たちに頼んでエレンを寝室へと運んでもらった。

「まー、これ、おいひくて、なんかふわふわしゅるー？」

「フィリアちゃんまで！？ 何でお酒飲んでるんですかッ!？」

魔導人形でも酔っ払うらしい。

「はっはっは、お前らだらしないな〜。俺なんてあと二十リットル

はいけるぞ」

「それ物理的におかしくないですか!？」

「ティラ殿も一杯どうだろうか？ 我が国のお酒は世界一。中でもこの“鬼祭”は最高峰の銘柄だ。自信を持ってお勧めできるぞ」

横から桜花がティラにお酒を勧めてくる。

彼女もすでに結構な量を飲んでいるようで、頬が赤らんでいた。

「そ、そうですか……それなら、少しだけ……」

ティラが御猪口に口を付ける。

「あ、美味しい」

「そうだろう!」

「辛口なのにすごく飲みやすいですね。それでいて奥深い味わい。でも爽快感があります」

あまりお酒に強くないのか、ティラは一杯だけですでに顔が赤くなっていた。

そしてとんでもないことを言い出す。

「ふふふ、何だか急に雷魔法を放ちくなりました」

「え？」

「あ、カルナさん。そこに立っていただけですか？ 的にしたいので」

「うん？ ちょっと意味が……」

「早くしてください（怒）」

「お、おう？」

「サンダーボルト」

「ぎゃう!」

マジで当てて来た！？

酔った勢いで言ってしまったギャグじゃねえのかよ！

「もう一発行きますよー」

それから俺はティラの雷撃を浴び続ける羽目になってしまった。

「あはははははは！ カルナさん、これすごく楽しいです！ 次は頭を狙いますね！」

「嬉しそうにとんでもないこと言ってるんだが！？」

ティラを酔わせると危険だということが分かりました。

俺にとってはご褒美だけだな！（ビクンビクン）

## 第86話 山賊

宴会の翌日、俺たちは桜花に案内されて華都の名所を見て回っていた。

「綺麗な花ですね」

ティラが感心したように言うと、桜花は誇るように頷いた。

「うむ。これはこの島固有の木で、我々は“桜”と呼んでいる。春になるとこんな風に桃色の綺麗な花を咲かせてくれる」

どうやらこの世界にも桜があるらしい。

「きれーっ！ しゅーっ！ っ！」

「食べられる？」

広い庭園。

そこには何十本もの桜の花が植えられていて、今はちょうど満開の時期らしく、辺り一面が桃色に覆い尽くされていた。

「桜花という名は、この花の名前から付けられている。我にとっても特別な花だ。……貴殿らに一番いいときに見てもらえてよかった」

「よし、せっかくだし花見をしようぜ。お酒持ってきて」

「……昨晚、散々飲んでたじゃないですか」

俺が提案すると、ティラが呆れ顔を向けてくる。

「ところで、あの後の記憶がないんですが……」  
「……お、思い出さなくていいと思うな」

どうやら昨晚の痴態を覚えていないらしい。

「あたしもお酒はこりこりだ！」

「エレン、水と間違っただけだお前がいけないんだろうが」

普通は間違えないが、そこはお馬鹿なエレンだから仕方がない。  
と、そんなやり取りをしているときだった。

「……桜花様、少々ご報告が」

「どうした？」

「昨晚、また奴らが現れたそうです」

「なに？ まったく、せめて春くらい大人しくしていればいいのに  
……」

兵士から報告を受けた桜花が、忌々しげに顔を顰めた。

「何があつたんだ？」

「いや、これは我ら鬼族の恥とも言えること。遺憾ながら、あまり  
御客人に話せることではない」

「……なるほど。また山賊のせいで被害が出たのか」

「なぜそれを！？ ……いや、貴殿のことだ。もはやいちいち驚い  
ていてはキリがないか」

嘆息して、桜花は包み隠さず教えてくれた。

「紫苑？」

「うむ。ここ最近、手下に略奪行為を繰り返させている山賊の親玉

の名前だ」

ちよつと女性っぽい名前だな。

「どんな奴なんだ？」

「生憎、奴自身は都から近い山の中にずっと潜んでいて、一度も見ることがない。手下どもも兵が駆けつける前に山に逃げ帰ってしまうため、なかなか捕まえられずにいるんだ」

「山狩りすればいいんじゃないのか？」

「それができれば苦労はしない。実は奴らは山中にあるダンジョンを根城としているんだ。そこでの地の利は完全に向こうにあつて、逃げ込まうとお手上げた」

桜花自身、討伐隊を率いてにそのダンジョンに入ったことがあるらしい。

だが内部があまりにも広くて複雑な構造をしているため、途中で探索を断念してしまつたらしい。

「だがこれ以上は捨て置けぬ。今度こそとつ捕まえてやらねば……」

鬼族たちの都は周囲を山々に囲まれた盆地にある。

北東部に位置しているのが冥王山と呼ばれている山で、山賊の一味はこの山中にあるダンジョンを根城にしているという。

「本当に良いのか？ 正直、貴殿が力を貸してくれるというのなら、



それ以上心強いものはないが……」

「ああ。これくらい大したことじゃない。それに、お風呂でプレイを頑張ってくれたお礼だ」

「プレイって言うな！ 何だかイヤらしいことをしたみたいではないか！？」

「ふれいー？ ままー、ふれいってなにー？」

「……フィリアちゃんにはまだ早いです」

山賊一味を今度こそ捕えてやろうと意気込む桜花に同行し、俺たちはその冥王山へとやって来ていた。

やがてダンジョンの入り口が見えてくる。

山の中腹にぽっかりと空いた巨大な穴だ。

「あれがそのダンジョンだ。怖ろしく広大で複雑な構造をしていて、一説には地獄にまで繋がっているとまで言われている」

見張りと思われる山賊が何人が警備に付いていて、随分と周囲に警戒を払っている。

山賊なんて基本的には荒くれ連中の集まりなのだが、その様はまるで忠実な兵士のようなだった。

「とりあえず警備の奴らを倒すか」

「私に任せてください」

ティラが雷撃を直撃させ、山賊たちをあっさりと気絶させる。

俺たちはダンジョン内へと足を踏み入れた。

内部の雰囲気は一般的な洞窟型ダンジョンのそれ。ただし桜花が言った通り、途轍もなく広大だった。

俺が 探知・極 の範囲を最大にしても、まだ全貌を確かめることはできない。少なくとも半径三キロメートル以上はあるということだ。

「さすがに山賊たちはそこまで深いところにはいないようだな」

すでに俺は連中の居場所を特定していた。

比較的浅いところに複数の拠点を構えているようだ。それでもかなり道が複雑なので、闇雲に進んではなかなか辿り着けないだろう。

しかしこのダンジョン、もっと深いところに行くとかかなり危険な魔物がわんさかいるんだが。

『世界でも指折りの危険度を誇るダンジョンですので。ただし地上の空気を嫌うため、大抵は深層にしか棲息していません。そのお陰で、彼らが地上に出てくるようなことが避けられているのです』

と、ナビ子さんが教えてくれる。  
なるほど。だから山賊たちも浅い層になら住むことができているのか。

「その分かれ道を右だな」

「……貴殿にはそんなことまで分かるのか……」

桜花に驚かれつつ、暗い洞窟を進んでいく。

「横道に山賊が隠れてるぞ。気を付けろ」

「む、ならば我に任せてくれ」

途中で何度か山賊が襲い掛かってきたが、桜花がほとんど一人で

倒してくれた。

鬼族の英雄と言われているだけあって、並の山賊程度に後れは取らない。

「てか、何で英雄って言われてるんだ？」

「恐らく、島の漁業に深刻な影響を与えていた海の魔物を討伐したことがきっかけだろう。それから何度がそうしたことがあり、気が付けばそう呼ばれるようになっていた」

その後、宮廷で鬼姫の護衛を務めることとなったのは、彼女が女であったことと、そうした実績が認められてのことだという。

「……もつとも、レイン帝国には手痛い敗北を喫し、属国にされてしまったがな。貴殿の助けがなければ、今もあの暴君の命じるままに幾つもの罪を重ねていたことだろう」

桜花は自嘲気味に言う。

「今回の件も、改めて自らの不甲斐なさを痛感させられている。自国に湧いた賊すらも、貴殿らの力を借りなくては成敗できぬとは……これで英雄とは、我に期待してくれている皆に情けない」

真面目だな。

責任感の強い子なのだろう。俺より年下（二十歳らしい）なのに偉いことだ。

俺なんて、期待されるとかえってやる気をなくすタイプだからな。

「あんまりストレス貯めると肩凝るぞ。それでなくてもおっぱいが重いだろうに」

「む、胸をジロジロ見るな！」

そんなことを話しながら、やがてその場所へと辿り着いた。ちよつとした広さの空間に、幾つものテントなどが設置されている。

すでに俺達が現れることを見越して準備していたようで、物々しく武装した山賊たちが出迎えてくれた。

途中から山賊がほとんど妨害に來なかつたが、それはこの場所に集まっていたためだろう。あえてここまで通したのかもしれない。

そして彼らに護られた最奥で、そいつは一人胡坐を掻きながら祭壇めいた台座の上に座っていた。

「よく迷わずここまで來たねえ。さすがは英雄様といったところかな」

長い黒髪が特徴的な、美しい容姿の青年だった。

頬がほんのりと赤らんでいるのは、お酒を飲んでいるからだろうか。

桜花が問う。

「貴様が紫苑か……？」

「いかにも。僕がこの一団を束ねている紫苑だよ」

とてもそうは見えないが、どうやらこいつが山賊の親玉らしい。

## 第87話 天から三物を与えられた男

「貴様が紫苑か……？」

「いかにも。僕がこの一団を束ねている紫苑だよ」

貴公子然とした容姿の紫苑は、薄い笑みを浮かべながらあっさりと名乗りを上げた。

「君のことを待っていたよ」

「なに？」

「だけど」

怪訝な表情をする桜花に、紫苑は少し落胆したように溜息を吐く。

「ダメだね。君じゃあ、この僕の美しさには釣り合わない」

……何を言ってるんだ、こいつは？

「鬼族一の美貌でファンも沢山いると聞いていたから、君には期待していたんだけどねえ」

「……何だか知らぬが、物凄く腹立たしいことを言われた気がする」

桜花が眉根を寄せて睨みつける。

しかしそんな視線など意に介さず、紫苑はティラやエレンたちへと視線を流す。

そしてやはり嘆息した。

「他にも何人か連れてきてくれたみたいだけど、残念ながら全員落

第点さ」

「……私も今、猛烈にイラっしました」  
「あたしもだ」

こめかみに青筋を浮かべるティラとエレン。  
そりゃ、いきなり顔を見ながら「落第点」とか言われたら誰だつて腹立つだろう。

「らくだいー？」  
「お腹すいた」

まあ、フィリアは不思議そうに首を傾げ、シロに至っては話すら聞いていない様子だが。

「そんなことより自分の身の心配をしてはどうだ？ 我らは貴様を捕まえにきた。これ以上、貴様らに都を荒らさせはせぬ」

「ははは、ちよつと物をくすめたりしたくらいで大袈裟だね」

「大袈裟なものか！ 窃盗や強盗は犯罪だ！ 被害の規模を考えれば重罪に処せられる可能性もある！ さらに貴様は若い女子も誘拐しているだろう！？」

声を荒らげて問い詰める桜花。

一方の紫苑はなぜかキョトンとしていた。

「罪？ 何を言っているんだい？ この僕が罪に問われるはずがないだろう？」

「っ？ 貴様こそ、何を言っている？」

「だって僕はこんなにも美しいんだよ？ だつたら何をしたらって問題ないじゃないか？」

あかん、こいつ話が通じないにも程があるだろ……。  
桜花はもちろん、ティラやエレンも絶句している。

「そうだよね、みんな？」

俺達が哑然としていると、紫苑は配下の山賊たちにそう問いかけた。

「もちろんです！」

「紫苑様は神にも等しいお方！」

「ゆえに紫苑様こそ絶対です！」

……この山賊たち、どこか規律に厳しい兵士のようなと思って  
いたが、むしろ宗教の信者と表現した方が適切かもしれない。

「彼らの言う通り。この僕は誰しもが平伏すべき存在なのさ」

こいつ、殴っていいかな？

「唯一、困ったことがあるとすれば、僕に釣り合うような配偶者が  
なかなか見つからないことなんだ。都で噂になっっている美女を何人  
も連れて来てもらったけれど、やはりこの僕という世界一美しい花  
を前にしては雑草同然。お陰でまだ童貞でねえ」

「ふざけるな！ そんなことのために、娘たちを浚っていたという  
のか！？」

「そうだよ？ どれもブスだったから、丁重に貶して帰って貰った  
けれどね」

戻ってきた娘たちは皆、例外なく塞ぎ込んでいると聞いていたが、  
それが原因だったのか……。

桜花が刀を抜いた。

「貴様のような下衆を許してはおけぬ！ 我が成敗してくれる！」

そう宣言し、単身で突っ込んでいく。

そうはさせるかとばかりに山賊たちが一斉に彼女に躍り掛かった。

だが桜花は右腕を一閃。

それだけで最前列にいた山賊四人がまとめて吹き飛ばされる。

次々と襲い掛かる山賊の群れを桜花はまるで意に介さなかった。何十人もいた山賊たちが、あっという間に斬り伏せられていく。

「安心しろ、峰打ちだ」

やがて山賊の手下どもを全滅させた桜花は、紫苑を鋭く睨み付けた。

「次は貴様の番だ」

「へえ、容姿と比べれば剣の腕の方が多少はマシのようだね」

「……戯言を」

吐き捨てる桜花を前に、紫苑は余裕ぶった表情で立ち上がる。

腰から剣を抜くと、構えることなくぶらりと提げるように持った。

てか、こいつ……

両者の距離がゆっくりと詰まっていき、最初に仕掛けたのは桜花の方だ。



雷のごとき速度の斬撃。

だがそれを紫苑は軽く受け流していた。

「っ!？」

目を剥く桜花。

直後、紫苑の剣が目にも止まらぬ速さで翻り、逆に桜花を襲う。

激しい金属音が響き渡る。

彼女は辛うじて斬撃を受け止めていた。

しかし紫苑はまるで流れる水のごとき巧みさで、すぐさま次の攻撃へと移っている。

「く……っ!」

間断なく繰り出される紫苑の剣技に、桜花は防戦一方だった。

険しい表情で、どうにか耐えているといった様子。

一方の紫苑は涼しい顔をしていた。

「見ての通り、僕は容姿だけでなく剣術までもが美しい」

「っ……」

「そして人心を掌握する力も持っている」

紫苑の戦いぶりに、先ほど桜花にやられて地面で呻いていた配下たちが口々に叫び出す。

「紫苑様!」

「さすが紫苑様だ! あの桜花を押している!」

「やはり紫苑様は我らが神だ!」

苦しげに顔を歪める桜花へ、紫苑は平然と言い放った。

「僕は天から二物も三物も与えられて生まれてきたのさ」

この台詞だけを聞くと、なんて自信過剰な奴だと思っただが、

紫苑 20歳

種族：鬼族

レベル：62

スキル： 剣技・極

指揮統率・極

美容・極

鑑定してみると、こいつマジで最上位のスキルを三つも持ってやがるんだよなあ……。

「がっ……」

桜花が弾き飛ばされ、地面を転がった。

すぐさま立ち上がるが、力の差は歴然だった。

彼女では紫苑には勝てないだろう。

「もつとも、僕はこの力を使って何か大きなことを成し遂げたいとか、そんなことは露ほども思っていないけれどね。ただ僕は自分が好きなように生きたいだけ。そしてそれを邪魔するというのはなら返り討ちにしてやるだけだよ」

せっかく才能を持って生まれたのに、それを社会に還元するどころか、自分の道楽にしか使っていない。

まったく、宝の持ち腐れだな。

『マスターとそう大差ない気が?』

いやほら、俺は一応、国とか救ってるし?

「桜花、下がってる。こいつは俺が何とかしてやる」

俺は悔しげに拳を握り締める彼女の胸を、ぽんと叩いてやる。  
バトンタッチだ。

「カルナ殿……って今、我の胸を叩かなかったか!？」

「気のせい気のせい」

喚く桜花を後目に、俺は紫苑と対峙する。

「人間族がわざわざ鬼族同士のイザコザに介入してくるなんて、随分と正義感が強いんだねえ」

「正義感? 馬鹿を言え。協力したら桜花たんが今度こそ生おっぱい揉ませてくれるかもしれないっていう、ただの下心だ」  
「揉ませるわけがないだろう!？」

マジで?

いけると思っただけだな……。

「だが、それはついさっきまでの話。今は違う。俺は今、正義感に燃えている」

「か、カルナ殿……」

俺は叫んだ。

「イケメン死すべし！ という猛烈な正義感になアツツ！！！」

「それ、正義感じゃなくてただの嫉妬ですよネツ！？」

ティラのツツコミが洞窟内に響き渡った。

「ははははっ！ なかなか面白いことを言っじゃないか！ だけど、果たしてそれを成すだけの力が君にあるだろうか？」

大声で笑い出す紫苑。

俺は鼻を鳴らすと、不敵に笑った。

「はっ、楽勝だ」

断言する。

「なんせ、俺は天から百物を与えられてるんでな」

## 第88話 天から百物を与えられた男

「なんせ、俺は天から百物を与えられてるんでな」

俺の言葉に、紫苑は「はははっ」と笑い声を上げた。

「君が？ その顔で？」

「顔のことはほっとけ」

残念ながら顔をイケメンに変えてくれるチートは無かったんだよ。  
いや、 変身・極 はあるんだが、あくまでも変身だからなあ。

『大差ない気がします』

言い方が違うだけで実質は同じだけどさ。

まあもし本当に元となる顔そのものを変えることができたとしても、やったかどうかは分からないけどな。整形なんかもそうだが、何となく抵抗がある。

……それはともかく。

「随分と自信があるようだけれど、この僕には勝てぶぎやっ!？」

紫苑の口から変な悲鳴が上がったのは、俺が一瞬で距離を詰めて顔面に拳を叩き込んでいたからだ。

『いきなり顔を狙うとは、イケメンに対する嫉妬が強すぎでは?』

後方に吹っ飛んだ紫苑は、鼻骨が折れ曲がって鼻血を噴き出していた。ザマア。

「し、紫苑様!？」

「まさか、紫苑様が殴られた!？」

配下の山賊たちが驚愕している。

「ぼ、僕の美しい顔が……っ!？」

痛み以上に、どうやらそちらの方が気になるらしい。紫苑はわなわなと唇を震わせながら、折れた鼻に恐る恐る触れている。

「は、早くポーションを持ってこい……っ!」

怒鳴りつけられ、配下が慌ててポーションを取りに行こうとするが、それを見逃す俺ではない。

土魔法で小石をぶつけ、ポーションを破壊してやる。

「おいおい、その程度で済むと思うなよ？」

はっはっは! 顔の形が分からなくなるまでボコボコに殴ってやるぜえっ!

「よ、よくも僕の美しい顔に傷を付けてくれたなあああっ!」

怒りを爆発させ、紫苑が刀を手に躍り掛かってきた。

こいつは 剣技・極 スキルを持っている。  
だが所詮、剣だけだ。

あらゆる武技を極めた 武神 スキルを持つ俺の敵ではない。

ステータスでも俺の方が圧倒しているしな。

紫苑が振るう剣を、最上級天使すら凌駕する敏捷値に任せて軽々回避していく。

「ば、馬鹿なっ！？ 僕の剣が当たらないなんてぶっ！？」

剣閃の間を縫って拳を再び顔面に見舞った。

「か、顔だけはやめてぐがつ！？」

「え？ 今、なんて言った？」

「だ、だから顔はやめでぐあっ！？」

「聞こえないなー」

『……下衆マスター』

気が付けば、紫苑の顔は蜂の大群にでも襲われたかのように真っ赤に膨れ上がっていた。

「おっ、なかなか良い顔になったじゃねーか」

「ひ、ひいいいつ……」

俺にはどうあがいても勝てないと悟ったのか、紫苑はこちらに尻を向けて逃げ出した。

そして奥にあった小さな通路へと逃げ込んでしまう。

ま、逃げたところで無駄だけだな。 探知・極 の範囲内ならどこにいようと丸分かりだ。

手下どもの拘束は桜花とティラたちに任せて、俺は紫苑の後を追った。

かなり狭い通路だな。

人が一人ギリギリ通過できるかどうかといった広さだ。

途中で幾つも分かれ道があつて、ちょっとした迷路のような構造になっている。

人が逃げるには最適な場所かもしれない。

だが紫苑が進んだ方向は分かっている。

その後を追つて進んでいくと、やがて急な下り坂になつていった。結構地下深くまで下りていけるようだ。

つて、このまま行くと、ヤバイ魔物の巣にぶち当たつてしまうんだが。

山賊の頭領だつた父親が、都からさらつてきた貴族の娘を孕ませ、  
そうして生まれたのが紫苑だつた。

父親は山賊の親玉に相応しい容姿をしていて、有体に言えば不細工な男だつた。

だが幸い、都で人々の噂になるほどの美貌の持ち主であつた母親のお陰か、紫苑は父親とは似ても似つかないほど美しく生まれてくることができた。

物心がついた頃、紫苑は安堵した。



こんな醜い男に似なくてよかった、と。

成長するにつれて、山賊団の中に彼に心酔する者が着実に増えていった。

やがて醜い父親に反旗を翻して、十五のときに一団を乗っ取ってしまう。

それはとても簡単なことだった。  
しかし当然のことだと思った。

なぜなら自分はこれほど美しい。

美しい存在の前には、すべてが平伏するのだから。

「はあ、はあ、はあ……」

紫苑は息を荒らげ、暗い坂道を駆け下りていた。

「くそっ……この僕がっ……なぜこんな美しくない目に……っ！」

忌々しげに吐き捨てる。

これほど美しい自分がなぜ、あんな醜い男に追い詰められているのか。

その事実には、紫苑は著しく困惑していた。

そのせいである。

ここが世界でも最高レベルに危険なダンジョンであることを失念してしまっていたのは。

気づけば広い空間に出ていた。

ここまでくれば、さすがに奴も追ってはこれまい。そう思い、安堵の息を吐き出したそのときだった。

「っ!？」

突然、逆さまに空中へと吊り上げられていた。

何かが右足に絡まっているのだ。

白い、糸のようなものが……

「蜘蛛の糸……?」

ハッと見上げた紫苑が見たものは

壁や天井を敷き詰め、蠢く、無数の蜘蛛だった。

「う、うあああああつ!？」

悍ましいその光景に、紫苑は思わず醜い悲鳴を上げてしまう。もちろん奴らは魔物だ。体長一メートル以上もある蜘蛛の魔物。

しかし紫苑を吊り上げていたのは、背中から真っ白い女の上半身が生えた蜘蛛だった。

最上位の蜘蛛型モンスターであるアラクネである。

他の蜘蛛より二回り以上も大きい。

「オイシ、ソウ……」

片言だが声を発するアラクネ。

一見すればその女の姿をした上半身は美しい女性に見える。

だがその醜悪な下半身と連結していることで、より一層悍ましい。

「こ、こんな化け物に食べられるなんて御免だ！」

紫苑は足に絡み付く糸を斬り裂かんと、刀を振るう。

まるで鋼鉄の糸のような硬さだったが、それでも紫苑の斬撃は糸を断ち切った。

が、それも一瞬のこと。

恐らくはアラクネの配下であろう、他の蜘蛛たちから一斉に糸が射出され、紫苑の全身を覆い尽くす。

懸命に逃れようとするが、暴れれば暴れるほど、粘着質な糸に絡み付かれ、かえって身動きが取れなくなってしまふ。刀を振ることすらできなくなった。

完全に無力化された紫苑に、一斉に蜘蛛たちが躍り掛かってくる。

「ひいひいっ！？ やめっ、やめてくれっ！？ こんなっ、こんな醜い死に方は嫌だあああっ！」

次の瞬間、紫苑は蜘蛛たちに群がられ、その餌食に はな  
らなかつた。

突如として巻き起こった風が、蜘蛛の群れを吹き飛ばして一掃する。

もはや目も開けてられないほどの豪風の中、

「まったく、何やってんだよ……」

と、呆れた声が聞こえてきた。

ようやく瞼を開いた紫苑は、その声の主を見た。

先ほどの人間族の青年だ。

糸で拘束された紫苑をぶら下げ、空中に浮遊している。

「レベル50前後のタラントラと、そいつらを従えるレベル70越えのアラクネか。さすがは最高峰のダンジョンだな」

直後、彼の周囲に無数の魔法陣が出現する。

この男、まさか魔法まで使えるというのか……と紫苑が驚愕しているところ、

「殲滅開始」

雷撃の嵐が巻き起こった。

目が眩むような光が視界を染め上げ、爆音が聴覚を支配する。

「な……な、な……」

紫苑は啞然とした。

あれだけいた蜘蛛どもが、ほとんど塵ひとつ遺さず消し飛んでいたのだ。

「おっと、一匹残ってしまったか。配下を盾にして身を護ったのか」

生き残っていたのは先ほどのアラクネだった。

糸を吐きながら、怒り狂ったように凄まじい速度で突っ込んできた。

「無駄だ」

だが人間族の青年が右手を一閃。  
それだけでアラクネの上半身と下半身が泣き別れた。  
続いて青年が左手を突き出す。

それだけで巻き起こった衝撃波がアラクネを吹き飛ばし、遠くの壁の中にめり込ませた。

それで終。

先ほど紫苑とやり合った際には物凄く手を抜いていたのだとは  
つきり分かるほどの圧倒的な強さ。  
それを目の前でまざまざと見せつけられ、紫苑は

ああ、なんて美しいんだ……！

心の中で感嘆の叫び声を上げたのだった。

## 第89話 夜這い

山賊一派を壊滅させ、都へと戻ってきた。

そして俺たちは再び謁見の間へと通されている。

「姫様。今日こそはしっかりと感謝のお言葉を」

「で、でも……」

「いつも通りになさればいいだけだ」

「それができたら苦労しないよお……」

襖の向こうから聞こえてくる桜花と鬼姫のやり取り。

どうやらまた鬼姫ちゃんが躊躇しているらしい。

「カルナ殿たちは二度に渡って我らを助けてくださった。一度目に至っては、鬼姫様ご自身が危ういところを救われたのだ。鬼族の姫として、直接その礼を伝えることもできぬとあらば、我ら一族にとつての大きな恥であろう」

「そ、そう、だよね……。が、頑張るっ！」

桜花の強い説得もあつて、鬼姫は決意したらしい。

ゆっくりと襖が開いた。

そして、やはり十二単を思わせるカラフルな衣装に身を包んだ鬼姫が、恐る恐るといった様子で部屋に入ってきた。

……顔は緊張で強張り、同じ方の手足が一緒に出ている。おいおい、そんな歩き方していたら、また前回みたいに

「ふぎやつ!？」

俺の予想は的中した。

またしても裾を踏んでしまつて、鬼姫は盛大な音とともに転んでしまふ。

完全に前回の焼き直しである。

直後、入ってきたときのぎこちなさが嘘のように素早く立ち上がると、鬼姫は猛スピードで逃げていった。

「ふ、ふええええええんっ！」

「姫様っ!？」

「またやつちやつたあああっ！ カルナさまに、歩くこともまともにできないダメ女だっと思われちゃったあああっ！ もう死ぬ！ 死んでやるうううっ！」

「姫様あああっ!？」

「本当に何度も申し訳ない。……姫様は普段はしっかりとされた方なのだが……」

結局、謁見はまたも無しになって、そのことを桜花が謝罪しにきた。

「その代わりと言つてはなんだが、また宴席の場を用意させてもらおう。我らの感謝の気持ちだ。遠慮なく食べてくれ」

「俺は桜花と一緒に風呂に入ればそれで充分なんだけどな」

「あ、あれはもう勘弁してくれつ。……しかも前回、あの後に姫様がなぜかとても機嫌を悪くされてしまったのだ」

不思議そうに首を傾げる桜花。

「じゃあ鬼姫ちゃんと一緒に入るか」

「さすがにそんなことはさせられぬ！」

結局、その日は一人寂しくお風呂に入った。

そして前回に勝るとも劣らない規模で宴会が開かれる。

「今日は絶対にお酒を飲まないのだ！」

「……私もやめておきます」

「フィリアはー？」

「フィリアちゃんもやめておきましょうね」

前回のことで懲りたのか、エレンたちは断酒を決意していた。

「うまうま」

「うめえええっ！」

シロは相変わらず料理を食いまくっていた。

……なんか約一匹、呼んでもいない奴が交じっていた気がする。

その夜のことだった。

畳に敷かれた布団の上で俺が横になっていると、廊下から誰かが近づいてくる気配。

それが襖の前で制止した。



ついに俺に惚れた桜花が夜這いに来てくれたのだろうか？  
それとも鬼姫ちゃんか？

大穴でティラが？

そんな妄想が俺の頭を過る。

やがてゆっくりと襖が開いた。

その人物は白無垢に身を包んでいた。

頭には角隠しと呼ばれる帯状の白い布を被っている。

神妙に部屋に入ってきたのは、桜花でも鬼姫でもティラでもなかった。

薄闇の中、月明かりに照らされて浮かび上がるのは、薄らと白粉を施した美貌。

その長い睫毛が震える。

瞳は愁いを帯びたかのようにしっとり濡れていて。

紅を施した唇から零れたのは、

「カルナさま……わたくし、あなた様と褥を共にさせていただきと  
うございます……」

俺の答えは決まっていた。

「ダメに決まってるだろ」

はつきり言い捨てると、縋りつくように訴えてくる。

「な、なぜでございますか……？ わたくし、こんなにもあなたさまを慕っているというのに……っ！」  
「なぜ？ 決まってんだろ」

俺はこいつの正体を看破していた。

「お前だからだよ、紫苑！」

「っ！？ な、なぜ分かったんだいっ！？」

愕然として後ずさる。

そう、この美貌の持ち主の正体は、山賊の親玉・紫苑だった。

紫苑 20歳

種族：鬼族

レベル：62

スキル： 剣技・極

指揮統率・極

美容・極

鑑定・極    スキルを持つ俺には丸わかりだ。

「てか、どうやって抜け出してきたんだよ。お前、監獄に入れられたはずだろ？」

「ふふふ、僕の美貌があれば看守を誘惑することなど訳ないさ」

紫苑は何でもないことのように言う。

「大方、女に変装して俺に復讐しに来たってところか。だが残念だったな。俺にハニートラップは通じない。もう一度、監獄送りにし

「やるよ」

「そうじゃない！　僕は決して、君に危害を加えるために監獄を抜け出してきた訳じゃないんだ」

「……どういうことだ？」

何か猛烈に嫌な予感がするのだが……。

案の定、紫苑は言った。

「僕はただ君に抱いてほしただけなんだ！」

……何なんですかね、この展開？

「僕を助けてくれたときに見たあの圧倒的な強さ！　あれは僕の美に対する概念を完全に破壊してくれたんだ！　強いということはこんなにも美しいんだってね！　ゆえに君はとても美しい！　そしてあの瞬間、僕は君になら抱かれてもいいと思っただよ！　ずっと見つからなかった僕に相応しい相手！　それは君以外にいない！」

紫苑は怒涛の勢いで俺に対する想いを口にする。

「さあ！　お願いだ！　僕とセ　クスしてくれ！」

さらに紫苑は着ていた白無垢を脱ぎ捨てた。

下着を身に着けていなかったようで、それだけで真っ裸になる。すでに天を突いている下半身のアレ。

「男のアレなんて見たくねえんだよおおおおっ！」

「大丈夫！　僕はお尻にも自信があるんだ！　見てごらん、このプ

リツとした上向きのお尻を！　きつと君を満足させられるはずさ！」  
「ケツ穴見せんじゃねえええっ！」

確かに男とは思えないほど良いケツしてるけどよ！

「そうか！　君は受けの方なんだね！」

「鼻息荒くしながらこっち近づいてくんない！」

幾らそこらの女より綺麗な顔をしているとはいえ、こいつだけはダメだ。

なんて言うか、生理的に受け入れがたい。

男の娘のジーナちゃんならイケるんだけどな、デュフフ……。

「さあ、一つになろう！」

「バシ　ーラ」

……思わずド　クエの呪文を口走ってしまったが、紫苑の姿が掻き消えた。

転移魔法によって強制的に飛ばしてやったのだ。

ほとんど無意識だったので、どこに転移したのかもよく分からない。だがとにかく遠くに飛んでくれということだけは意識したので、少なくともこの島内ということはないだろう。

「海の底にでも飛んで、そのまま水死してくれたらありがたいんだがな」

「くそつ、本当にこっちで会ってんのかよ!？」

「間違いないはずです! この先からカルナ君の匂いがします!」

「つて、じーさん大丈夫か!? 死にそうだぞ!？」

「……」

「返事がねえ!？」

ギース、ライオネル、アレクの三匹の変態たちは今、猛吹雪の中にいた。

獣人の国・エクバーナでは、残念ながら彼らに会うことはできなかった。

一か月ほど前までは確かにいたらしいのだが、すでに旅だってしまったのだという。

どこに行ったのかという手がかりも見つからなかった。

しかしそこでアレクがペット能力を発揮した。

「北です! 僕のご主人様は北にいるはずです!」と主張する彼に従って、エクバーナの北方にあるガロナ火山へと向かうことに決めたのだ。

そしてその途中、こうして酷い嵐に巻き込まれてしまったという訳である。

「このままだと凍え死んじゃうぜ。どこかに集落でも」

と、そのときだった。

突如として、ギースの頭上に男が出現したのは。

「……は？」

しかもこの猛吹雪の中にあつて、一糸まとわぬ全裸である。  
加えてなぜか完全に勃 しており、その部位からギースの顔面  
目がけて振つてきて

べちゃ。

「ぎゃああああああああああっ!？」

こうして、四匹の変態は出会ってしまったのだった。

## 第90話 握り寿司

「この国には何かが足りないと思っていたんだが、それが今、ようやく分かった」

「どうしたんですか、藪から棒に？」

俺が唐突に口にした言葉に、ティラが怪訝そうな顔を向けてくる。

「それは握り寿司だ！」

にぎりずしー？ とフィリアが首を傾げた。

「何なのだ、それは？」

「なんか美味そうじゅるり」

エレンが眉をひそめ、シロは握り寿司という言葉聞いただけで涎を垂らしている。

この鬼族たちの国は、日本とよく似た文化を持っている。

気候や地理的な条件が似ているせいだろう。

食文化もそうだ。

米、刺身、丼物、うどん、天ぷら……などなど。

こうした日本ではお馴染みの料理が、この国でもごく一般的な食べ物として知られていた。

しかしそんなこの国でも、日本にはあってこの国にはない料理があった。

それが握り寿司だ。

散らし寿司はある。

それから魚を発酵させた熟れ鮓なれずしなんかもある。

しかしどうやら、握り寿司だけはまだ発明されていないようなのである。

『日本でも握り寿司が考案されたのは江戸時代と、比較的新しいですから』

なぜナビ子さんが日本の歴史を知っているのかは疑問だが、とにかくこの国には美味しいお米と新鮮な魚があるというのに、握り寿司がないのである。

だが食べたい。

しかし食べれる場所はない。

だったら俺が握ればいいじゃないか。

という訳で、俺はこの世界で初めての握り寿司を作ってみることにしたのだった。

まずはお米選びから。

地球ほどは品種への理解はないようだが、それでも美味しいお米とそうじゃないお米の区別くらいはあって、品種改良に近いことは行われているらしい。

俺は幾つか産地を回って見て、握り寿司に最も合う品種を選んだ。

もちろんお酢にも拘った。

当然、お寿司に必須のワサビや醤油にも手は抜かない。

しかしやはり最も大切なのはネタだろう。

特に魚介は鮮度が命だ。

そして同じ種類の魚でも、どこで獲るかによって味がまるで違う。



俺は自ら海に出て、探知・極を駆使しながら漁獲した。時には遠洋で、時には近海で。

準備が整ったら調理開始だ。

握り寿司は握ってすぐに食べるのが一番美味いため、同時に販売もスタートする。

「へい、らっしやい！」

「って、こんなところでなに勝手に店を開いているんだっ!？」

宮殿の中に自作のキッチンとカウンターを作って店舗を構えていると、桜花から怒られてしまった。

『当然かと』

しかしこの程度で引き下がる俺ではない。

「文句があるなら、俺の握った寿司を食ってからにしてもらおうか?」

江戸っ子っぽく(?)不敵な笑みを浮かべて桜花を挑発する。

「いや文句も何も、ここは国の政治を司る御殿であってだな……」

言いながらも、しぶしぶカウンター席に座る桜花。

「へい、お待ち！」

「別に待ってなどないが………っ!？」

二貫の握りを乗せた皿を前に、桜花が目を剥いた。

「なんだ、これは……？ キラキラと輝いているぞ？ こんな新鮮な魚、初めて見た……。こ、このまま食べればいいのか？」

「いや、軽くその醤油を付けて食ってくれ」

「これか？」

桜花が恐る恐る握りを口に運ぶ。

次の瞬間、

「う、うまああああああああああああああああっ  
！？」

宮殿内に大声が響き渡っていた。

「ななな、何だこの美味さは！？ 入れたと思ったら一瞬で溶けて、口の中にあり得ないほどの旨味が広がったぞ！？」

「それは大トロだ。マグロの中でも特に脂身の多い部位だな」

「マグロ！？ デカいだけで味が悪いからほとんど漁獲されない魚ではないかっ？」

マグロは足が早い。

つまり痛みやすいのだ。

近海で獲れたとしても、保存技術の乏しいこの世界では、どうしても食べるまでに味が大きく落ちてしまう。

そのためマグロは食材に適さないとされてしまっていたのだ。

目を丸くしている桜花だが、驚くのはまだ早い。

「炙りトロ」

「うまあああああああいつ!？」

「かんぱち」

「ぷりっぷりしてるうっうっうっうっうっ!」

「イクラ」

「プチプチ旨味が弾けるうっうっうっうっうっ!」

食べる度に絶叫する桜花。

その声を聞きつけたのか、宮殿に仕える官吏たちが次々とやってきた。

「こ、こんなところで勝手に料理を振舞うなど、幾ら我が国を救ってくれた方とは言えうまああああああああああつ!？」

「神聖な祭りごとの場で一体何をうめえええええええええええええええつ!？」

頭の硬い官吏たちも、俺の握り寿司の前にあっさりと陥落した。

「あ、あの……一体、ここで何を……?」

「姫様っ!？」

さらには鬼姫まで姿を見せる。

「か、カルナさまの手料理……っ!？」

「え、ええ。しかし食べた者たちが例外なく異常な反応を示しておりまして……。姫様はおよしになった方がよろしいかと……」

「うまああああああああああああああああいつ!？」

「ひ、姫様あつ!？」

鬼姫も一瞬で落ちた。

「こ、これは一体……もぐもぐ……何という……もぐもぐ……料理なんだ……？」

桜花が口の中をいっぱいにしながら問ってくる。

「握り寿司だ」

「にぎり、寿司……もぐもぐ……こんな、こんな美味しい寿司があったなんて……もぐもぐ……ぜ、ぜひもつと大勢の同胞に……もぐもぐ……食べてもらいたい……」

という彼女の提案もあって、その後、俺は都内に店を構えることになった。

店名は『にぎりずしざんまい』である。

『マスター、それは完全にパクリでは？』

「問題ないだろ。どうせここ、異世界だし」

そしてあつという間に都中、いや、国中に握り寿司の噂が広がったのだった。

店の前には今日も長蛇の列ができている。

軽く千人は超えているだろうか。

握り寿司を食べるため、今や国中の鬼族たちが俺の店を訪れていた。

てか、一秒で百貫くらい握ってんのに、列が全然減らないんだが……？

その原因の一端はこいつらにあった。

「うまうまうまうまうま」

「うめえうめえうめえええっ」

「美味しい美味しい美味しい！」

ドラゴン娘たちである。

あと、なぜかロック鳥のクー子もいる。

こいつらの胃袋、一人当たり二、三百人分くらいはあるからなあ。

「おい、何でクロがいるんだよ」

「ベベベ、別にもぐもぐいいだるもぐもぐっ!？」

食べるかしえべるかどっちかにしろ。

そのとき急に行列の方が騒がしくなった。

何事かと視線を転じると、空から黒くて長いものが降りてくるのが見えた。

「お、おい、何だあれは？」

「ど、ドラゴン!？」

「うわっ、逃げろ！」

そいつは漆黒の鱗で覆われたドラゴンだった。

集まっていた人々が騒然となる。

一目散に逃げ出した。

「ドラゴンなんか怖くねえ！ 俺はあの寿司を食う！」

「おうよ！ あれを食うためなら死んでもいい！」

「はははっ！ お陰で行列が減ってくれたぜ！」

そんなことを言いながら、逃げようとしてもしない鬼族たちもいるが。

やがてそのドラゴンがすぐ近くまでやってきた。

悲鳴を上げる人々。風圧で寿司のネタが吹き飛んだせいだ。そっ  
ちか。

黒輝竜 B

種族：黒輝竜

レベル：39

スキル：咆哮 竜気 限界突破

「こいつ、クロと同じ黒輝竜じゃん」  
「ん？」

寿司を食べることに集中していたクロは、俺の言葉でようやく同  
朋の出現に気が付いたらしい。頬に米粒をつけたまま叫ぶ。

「って、何でデメエがここにいるんだよっ！？」

『やっと見つけたです！』

その黒輝竜が人化する。

女の子の姿になって地面に着地した彼女は、クロに向かってこう  
言った。

「たいへんなのです、ねーさま！」

## 第91話 ドラゴン姉妹

『やっと見つけたです!』

突然現れたその黒輝竜は、人間の幼女へと姿を変えた。  
褐色の肌をした可愛らしい女の子だ。

見た目は七、八歳ほど。

フィリアと同じくらいだろうか。

「たいへんなのです、ねーさま!」

その幼女はどこか焦った様子で、俺の握った寿司を喰いまくっていたクロのところへ駆け寄った。

頬に米粒を付けたクロが目丸くする。

「何でデメエがここにいるんだ?」

「決まってるです!　ねーさまを連れもどしにきたですよ!」

幼女は少し舌足らずな声で叫ぶ。

「ねーさま…….ということは、クロさんの妹さんでしょうか?」

「そうみたいだな」

少なくとも同じ黒輝竜であることは間違いない。

それに漆黒の髪に褐色の肌、何よりややキツめな目付きなど、クロとよく似ていた。

「はやくおうちに帰るです!」



少女はそんなことを言いながらクロの服の袖をぐいぐい引つ張っている。

俺はカウンター越しに声をかけた。

「よしよし。何があつたか知らないけれど、とりあえず落ち着こうね、チロちゃん」

「テメエ人の妹にまで勝手に名づけしてんじゃねえよ!？」

チビクロだからチロである（安直）。

「ねーさま! どーしてニンゲンなんかといっしょにいるです!」

チロが俺たちをギロリと睨んでから、クロの方へと視線を戻して訴えた。

「まさか、ニンゲンごとくとモダチになつたなんて言わないです!？」

「ななななっ、んなわけねえだろっ!？」

慌てたように否定するクロ。

そうそう。友達じゃなくてペットだもんな。

「ねーさまはしょうらいドラゴンのちよーてんに立つべき方ですよ! ニンゲンごとくとたわむれているヒマなんてないです!」

このチロちゃん、随分と人間を見下しているらしい。

「なあ、チロちゃん」

「それまさかあたちを呼んでるです!？ かつてに呼ぶなですよ!」

「とりあえずこれ食ってみ」

「なんですかこれは！？ ふん、です！ ニンゲンの食い物なんて、だれが食べるもぐもぐもぐ！？」

転移魔法を使って大ト口の握りをチ口の口の中に入れてみた。

「うま

いです！？」

チ口の目が見開かれる。

頬がだらしなく垂れ下がって、釣り上がっていた目尻も下がった。

「はふううう……飲みこむのが、もったいないですう……」

「おかわりあるぞ」

「ほんとです！？」

続いてネギト口の軍艦巻きを食べさせてみる。

「うま い！？ これもうまいのです！ もつと欲し

って、こんなことしてるバアイじゃないですよ！？」

ハッとしたように我に返るチ口。

「ねーさま！」

「もぐもぐもぐ」

「そんなもの食べてるバアイじゃないです！」

「て、テメエに言われたくねえよっ！」

チ口は大声でクロに詰め寄った。

「たいへんなですよ！ はやくおうちに帰ってくるですよ！ かー

さまが怒ってるですよ!」

「母様が!？」

母親が怒っていると聞いて、クロがさっと蒼ざめる。

どうやら怖い母親らしい。

「まあまあ、もう少しゆっくり食べていきなよ、チロちゃん」

「だからそんな呼びかたはやめろと言ってもぐもぐもぐ、うま

い!」

俺がまた口の中に寿司を入れてやると、一瞬で恍惚とした表情になるチロ。

チロちゃん可愛い。

もつといっぱい食べさせてあげたいし、餌付けしたい。

それから俺はチロちゃんのために沢山寿司を握ってあげた。

もちろん子供の舌に合わせてワサビ抜きである。

さすがは小さくてもドラゴン。

大食いチャンピオンも真っ青な速度で、小さな口の中に次々と消えていく。

「もぐもぐもぐ……さっきのぶちぶちしたのおかわりほしいです!」

「イクラな」

「あと、たまごもなのです! もぐもぐ……」

「あいよ」

「オレは甘エビくれ!」

「ほらよ」

「あつ、ねーさまズルいです! あたちも甘エビ食べたかったです

「！」

クロが食べようとしていた甘エビを、チロが横から掻っ攫ってしまふ。

おいおい、それは……

「ふぎやう！？ ななな、なんなのですかこれは！？ 鼻が！ 鼻がッンとするです！」

ワサビが効いたらしい。

クロ用に握った寿司を横取りしちゃうからだよ。

「毒！？ 毒なのです！？ ねーさま、毒が入ってたです！」

「毒じゃなくてワサビだ。テメエが子供のくせに大人のを食うからだ」

「こ、子どもあつかいはやめるです！」

仲が良いのか悪いのか、言い争うドラゴン姉妹。

やがて満腹になったのか、チロは膨らんだお腹をさすりながら満足げに息を吐いた。

「あふう……食った食ったですう」

俺がお茶を出してやると、「かたじけないですう」と言って、ずずと啜った。

と、そこでチロは小さく首を傾げた。

「……？ なにかわすれてる気がするです？ ……………ハッ！？」

小さな目が見開かれる。

どうやらまた正気を取り戻したらしい。

「だからこんなことにきたわけじゃないですよ！？　たいへんなのです、ねーさま！」

「もぐもぐ……だから何が大変なのか、もぐもぐ、まずはそれから言いやがれ」

まだ食べ続けているクロが鬱陶しそうに応じる。

チロは焦燥に満ちた顔で叫んだ。

「かーさまが！　里のみんなが！　……ちゅ、りゅーおうちに“せんふこく”したです！」

「ぶふうううっ！」

クロの口の中から大量の米粒とネタが飛んできた。  
うわ、汚ねっ。

てか食べ物粗末にするな！

「な、何だと！？　そ、それは本当なのか！？」

「ほんとなのです！　だからねーさまを呼びにきたです！　かーさ  
またちはすでに戦いのじゅんぴをしてるです！」

「それを早く言いやがれ！」

どうやら緊急事態らしい。

『竜王はすべてのドラゴンを統べる存在です。一方それに反旗を翻

したのは、彼女の話から推測するに最強種の一角である黒輝竜でしょう。もし戦争でも始まれば、その余波で地上に天変地異じみた被害が発生することは必至です』

なるほど。そりゃ大変だ。

「クロのかーちゃんは黒輝竜のリーダーか何かなのか？」

「そ、そうだ。前々から竜王に対しては強い敵意を持っていたけどよ、まさか本当に反旗を翻すとは……」

クロは顔を青くしながら教えてくれる。

「もぐもぐもぐ。カルナ、おかわり」

「って、何でテメエはこんなときに平然とまだ食ってやがんだよ！  
？ テメエとも無関係な話じゃねえだろ！」

いつもの様子で喰い続けていたシロに、クロが大声を張り上げる。

「竜王はテメエの親父だろうが！」

え？

竜王ってシロの父親なのか？

『そうです。現在の竜王は白輝竜で、彼女はその二番目の子供に当たります』

マジか。

「えええええっ！？ こいつ、りゅーおうのむすめです！？ さっきからねーさまより食べるやつがいると思ってたら、はっきりゅー

だっただす!？」

驚愕するチロ。

さらに警戒する犬のように喉を鳴らして、

「気をつけるです、ねーさま! あたちたちをまつさつしにきた、りゅーおうの“しかく”かもです!」

「ん、もぐもぐ、心配いらない。パパとは、もぐもぐ、もう三年くらい、もぐもぐ、会ってない、もぐもぐ」

シロは食べながら答える。

「と、とにかく、こうしちゃいられねえ。オレは里に帰らせてもらうぜ」

「そうですよ、ねーさま! いそぐです!」

クロが立ち上がり、チロと一緒に帰ろうとする。

「……の前に、大トロあと一つだけ喰わせてくれ」  
「なにしてるです、ねーさま! ……あたちも大トロほしいです」

大トロを口の中に放り込んでから、黒輝竜の姉妹はドラゴン化して去って行った。

## 第92話 世紀末ドラゴン

黒輝竜たちの集落があるのは、とある山岳地帯。

その中には大規模な噴火によって巨大なカルデラが形成された山があつて、まさにそのカルデラの部分に彼らは棲んでいた。

家の数はせいぜい五十棟といったところ。

意外にもどれも人間サイズである。

どうやら彼らは普段、人化して暮らしているらしい。

確かにドラゴンのままだと身体が大き過ぎて何かと不便だろうしな。

全員が黒輝竜という訳ではなく、むしろ黒輝竜の数は少ないようだ。

せいぜい数頭ほどで、あとの百頭以上は黒輝竜に従属している別種のドラゴンたちらしい。

そして集落に戻ってきたクロとチロが真っ先に向かったのは、集落の中でも一際大きな屋敷だった。

恐らくあれが二人の実家で、そこにこの集落の長であるという母親がいるのだろう。

「ねーさまを連れかえってきたです!」

ちょうど会議でも開いていたのか、広間には集落の代表と思しきドラゴンたちが集まっていた。

って、なんだこいつら?



随分と変な格好してるんだが……。

簡単に言うと、全員がパンクロッカーのような格好をしていたのだ。

ツンツンに逆立てた頭髮。

ドギツイ化粧。

耳ピアスや鼻ピアスは当たり前。

黒い服に安全ピンやら鎖やらを大量に取りつけ、動くたびにジャラジャラという音を鳴らしている。

若者ならまだいい。

怖ろしいのは爺さん婆さんまで似たような姿をしていることだ。薄い頭髪で無理やりトゲトゲにしていたり、皺くちやの顔を真っ白に塗りたくっていたりするのはぶっちゃけ痛い。

……ここはもしかして世紀末なのだろうか？

「ハッハー……ッ！ 竜王なんざ、怖くねえぜええっ！」

「」

本当に世紀末かもしれない。

その中の一人、グラスンを付けた老人パンクロッカーがチロに気づいた。

「おお、よく連れて来たじゃねえか！」

「おおじーさま！」

「馬鹿野郎！ 大叔父様だ大叔父様！ “じ”の後を伸ばすんじゃない！ それだとジジイに聞こえるだろ！」

どうやらクロたち的大叔父らしい。

……いや、大叔父って、普通に爺さんだろ。

「大叔父御！ 竜王に宣戦布告したってのはほんとかよ！？」

クロがその大叔父らしき人物に詰め寄った。

「正気かよ！？ 竜王傘下のドラゴンどもは、オレたちより圧倒的に数が多いんだぞ！？ 勝負にならねえよ！」

「ヒヤッハーハーっ！ だからこそ血が騒ぐんじゃねえかよ！」

「そうだそうだ！ さすがは怒羅愚<sup>ドラグ</sup>！ お前さんの言う通りだ！」

どうやらこの爺さん、怒羅愚という名前らしい。

「どっからでもかかって来いや！ ヒヤッハーハーっ！」

「竜王なんざワンパンだぜ！ ヒヤッハーハーっ！」

「黒輝竜こそドラゴンの頂点だ！ ヒヤッハーハーっ！」

ヒヤッハーヒヤッハーうるさい。

と、そのときだった。

「ヒヤハーハーハーハーッ！！！！ テメエら準備はいいかアアアアアアッ！！！！」

凄まじい怒声と共に部屋に入ってくる人物がいた。いや、竜物か？

「か、母様……っ！？」

クロがビクツと肩を震わせて縮こまる。

グレンカ  
愚連華

種族：黒輝竜

レベル：108

スキル：咆哮　竜気・極　限界突破

どうやら彼女がクロの母親で、この黒輝竜たちのトップらしい。  
愚連華って……また暴走族みたいな名前だな……。

そして当然のように彼女もまたパンクロッカーだった。

まず、凄いモヒカンだ。

その長さはゆうに頭部以上。

重力に逆らい、天を貫いてやるぜヒヤッハーとばかりに突き立っている。

まるで鶏の鶏冠、もしくはウニだ。

鼻と耳に加え、唇や瞼にまでピアスを下げていた。

真っ黒い口紅に、目を囲むように縁取ったこれまた黒い強烈なアイシャドー。

服装はやはりパンクファッション、あるいはSMの女王様の格好と言った方がいいかもしれない。網タイツにやたらとヒールの高い靴を履いていた。

「ヒヤッハー……ッ！　馬鹿娘たちも戻ってきたことだし、作戦会議を始めるぜヒヤッハアアアアッ……！」

「……ヒヤッハー……ッ……！」

どう考えても会議の雰囲気じゃないと思う。

「じゃあ、まずはこっちの戦力を整理するぜ」

急に普通の口調に戻った！？

「アタシら黒輝竜が全部で六。まあ成竜じゃねえのが二人いるがな」

その二人というのはクロとチロのことだろう。

「だがアタシの娘だけあって、そこそこ戦力にはなるだろうよ。それからこの集落にいる奴らが百五十ほど。そこから老人や子供、それから戦力にならねえ下位竜どもを除けば、戦える成竜は百前後だ。内訳は超竜が十、上位竜が三十、中位竜が六十つてとこだな」

それから愚連華は竜王側の戦力を告げた。

「白輝竜が五。超竜が約三十。上位竜が約百。そして中位竜が約二百。それが竜王のいる集落の戦力だ」

「や、やつぱ歴然じゃねえか、戦力差が！」

悲鳴じみた声で叫んだのはクロだった。

だが愚連華は不敵に笑って、

「ヒャッハー！ッ！これはあくまでも主力の差だ！実を言う  
とよ、アタシらと同じく打倒竜王に燃えている同志たちがいるんだ  
よ！ オイ、いいぜ！入って来やがれ！」

そのときだ。

ドアを開け、のっそりと姿を現したのは身の丈二メートルをゆう

に超える巨漢だった。

無論、ドラゴンが人化しているのである。  
だが人化してさえこの身体の大きさだ。

「まさか、無限竜!？」

超竜の一種、無限竜。

生まれてから死ぬまで際限なく巨大化し続けることから、その名が付いたという。

中には百メートル規模の個体まで存在しているらしい。

超竜の中でも最強種の一角で、その強さは神竜にも匹敵する。

「おでらも、きょうりよく、ずる」

その巨漢は片言で告げた。

無限竜はあまり知能が高くないようだ。

さらにその無限竜の巨体の陰から、別のドラゴンたちが姿を見せる。

「わいも前々から今の竜王には不満をもってたんでえ。せやから今回は黒輝竜サンたちに協力させてもらいますわあ」

しゃべり方に独特な訛りがあり、目が糸のように細いそのドラゴンもまた、超竜の一種。

宝竜と呼ばれる竜種で、金銀財宝を大量に集める傾向があることからその名がついたという。

「我々も力を貸そう。現竜王は竜王に相応しくない」

いかにも武人といった雰囲気はこのドラゴンもまた、超竜の一種だ。

尾が剣のようになっていて、それを振り回して斬撃を放つことから、刃竜と呼ばれている。

他にも何体か、超竜クラスのドラゴンが現れては、黒輝竜への協力を宣言したのだった。

彼らはそれぞれ集落を持っており、そこには他の竜種も棲息しているという。

そして超竜が四十体ほど、上位竜が百体以上、中位竜が二百体以上、新たに戦力として加わることになった。

「ヒヤッハーッ！ 見たか！ これでアタシらの勝ちだ！ なにせ、こっちには超竜が七十体以上もいるんだからア！」

愚連華が勝ち誇ったように言う。

……計算は間違えてはいるが、竜王側の戦力を超えたのは間違いないだろう。

もちろん竜王の集落も、他の集落からの応援を募る可能性があった。

なのでその前に一気に攻め込んで、竜王を討つぜヒヤッハーということとなった。

「こ、これは大変なことになったぜ……」

戦力差から考えてさすがに武力行使には出ないだろうと想像していたらしいクロが、わなわなと唇を震わせている。

黒輝竜ではあるが、彼女はこの戦いに乗り気ではないようだ。

「安心しろ、クロ。俺が何とかしてやる」

「って、何でデメエがここにいるんだよ!？」

え？ 最初からずっ〜といたぞ？

まあ 隠密・極 を使ってたから、誰も俺の存在には気づいていないけどな。

完璧にスパイをこなした俺は、続いて竜王のところに行ってみることにした。

竜王 つまり、シロの親父さんだ。

### 第93話 竜王

「よし、シロ。竜王のいるところに連れて行ってくれ」  
「ん」

俺はドラゴン化したシロの背中に乗った。

竜王は彼女の親父さんらしい。

つまりこれから行く場所は彼女の故郷で、実家である。

猛スピードで空を翔けること数時間ほど。

やがて辿り着いたのは空に浮かぶ島だった。

スカイアイランドだ。

以前、ルシーファもこの飛行する島に住んでいたっけ。

いや、あれは捕らわれていたのか。

スカイアイランドの中には、常に移動しているものと制止し続けているものがあるらしいが、これは後者の方らしい。そしてかなり大きかった。

黒輝竜たちのは集落という感じだったが、ギリギリ街と呼んでも大丈夫そうなくらいには家屋数がある。

『あれがうち』

シロが鋭い爪で示した先にあったのは、モスクのようなドーム状の宮殿だった。

白輝竜を象徴しているのか、外装は純白に塗られている。



竜王は代々あの宮殿に暮らすことになっているらしい。  
そして代替わりするたび、外装や内装が竜王の好みに塗り替えられるとか。

恐らく黒輝竜が竜王のときであれば、真っ黒に塗られているのだろつ。

必ずしも竜王は白輝竜であるとは限らないのだ。

宮殿前の広場に降り立った。

俺は 隠密・極 スキルを発動しようとする。

『ん、必要ない』

「人間が入っても大丈夫なのか？」

『誰も気にしない』

シロが人化する。

「付いてきて」

ちゃんと案内してくれるらしい。

彼女に連れられて俺は宮殿内へと足を踏み入れる。

衛兵の姿は無かった。

それどころか、広い廊下なのにが竜つ子一竜見当たらず、がらんとしている。

初めて最初の住人に遭遇したのは、しばらく進んでからだつた。  
硬い床の上にうつ伏せになって、すうすうと寝息を立てている。  
白銀色の頭髮に隠れていて顔は見えない。

ていうか、なんでこんなところで寝てるんだ？  
とりあえず鑑定してみる。

ぺむぺむ

種族：白輝竜

レベル：84

スキル：咆哮　竜気　限界突破

……ぺむぺむ？

「紹介する。姉さん」

どうやらシロの姉ちゃんらしい。  
いやいやいや、寝てるところを紹介されてもな？  
しかも名前がぺむぺむって！　ギャグ？　ギャグなのか？　これ  
なら黒輝竜の方がまだマシだ。

「ん。こっち」

シロの中は今のでちゃんと紹介し終えたと思ったようだ。  
もう先に行こうとしている。

「待て待て。これがシロの姉ちゃん？」

「そう」

「名前はぺむぺむなのか？」

「ん。とてもカッコいい名前」

ドラゴンのセンスが分からない。

シロも将来的にはこんな変な名前を付けられていたのだろうか…  
…。

『まだシロの方がまともですね』

「竜王の娘、つまり王女つてことだろ？ 何で廊下で寝てるんだ？」

「昔からひんやりした場所に顔を押し付けて寝るのが好き」

「確かに気持ちいいけどな！？」

さすがに廊下はやめろよ。

「ん……」

俺たちの声で目を覚ましたのか、シロの姉が小さく呻き、身動きした。

と思いきや、ぐるぐるぐるっと転がる。

廊下の壁に激突すると、そのまままた眠ってしまった。

「たまに場所を変える。そうしたらまたひんやり。あと、長いときは二、三日は起きない」

「とりあえずお前に負けず劣らずの変人だというのは分かった」

転がる際に一瞬だけ見えた顔は物凄い美人だったが、中身はかなり残念なようだ。

……大丈夫だろうか、白輝竜。

さらに進んでいくと、別のドラゴンに出会った。

「あらあら、お久しぶりね」

ニコニコと満面の笑みを浮かべていたのは、見た目言えば三十歳前後の女性だ。

かなりの美人である。

だが恐らく成竜で、実際には百歳を超えているだろう。

ペローネ

種族：虹輝竜

レベル：102

スキル：咆哮 竜気 限界突破

ペローネ！？

「紹介する。ママ」

どうやら彼女がシロの母親らしい。

「あれ、白輝竜じゃないのか？」

「ん。ママは別の神竜の一種。虹輝竜」

よく見ると、彼女の髪の色は少しずつ変化していった。

どうやら鱗の色が徐々に移り変わっていくというのが虹輝竜の特徴らしい。

人化するとそれが髪の色に現れるようだ。

「へー、それでも白輝竜が生まれて来るんだな」

『虹輝竜は突然変異に近い竜種です。強さはそれほどありませんが、稀少度では他の神竜と比べても遥かに上でしょう』

と、ナビ子さん。

「うふふ、どうしたんですか？　珍しいですね、あなたが帰ってくるなんて」

何とものんびりとした声で、彼女はシロを出迎えていた。  
クーデターなんて起こりそうにもない平和な光景だ。

「パパはいる？」

「パパですか？　うふふ、いますよ。久しぶりにあなたの顔を見せてあげてくださいね、きっと喜びますよ」

「ん」

「あらあ？　ところでそちらの方は？」

ようやく俺に気づいてくれた。

「カルナ」

「どうも、カルナです」

「あらあら、あなたがお友達を連れて来るなんて珍しいですね」

シロのお母さん、ペローネが嬉しそうに言う。  
俺が何者なのかはどうでもいいっぽい。

「それにしても、カルナさんですか、うふふ、随分と面白い名前ですね」

「あんただけには言われなくなかったよ！」

やはりドラゴンのセンスは理解不能だった。

そして俺たちは竜王の玉座がある部屋へとやってきた。

魔物の王者とも言えるドラゴンの、さらにその頂点に君臨するのが竜王だ。

さすがの俺も少しだけ緊張しながら中に入る。

「あれが、パパ」

そう言ってシロが指をさした先にいたのは

「……死体？」

玉座と思しき椅子の背もたれ。

そこに人の形をした何かが、まるで雑巾のようにぶら下がっていた。

一応生命反応があるし、生きてはいるようだ。  
ていうか、寝ているだけっぽい。

ちよむちよむ

種族：白輝竜

レベル：122

スキル：咆哮・極

竜気・極

限界突破

なんかまた変な名前の奴だ。

「シロさんや。竜王はどこにいるんだ？」  
「ん、あれ」

……やっぱりあれが竜王らしい。

「うふふ、ちょむちょむさんは、色んな格好で寝るのがお好きなんですよ」

とペローネが教えてくれる。

いくら何でもあの寝方は斬新過ぎるだろ!?

シロの姉ちゃんも酷かったが、まだ可愛く思えるレベルだった。

「っ!?!」

突然、竜王がびくつとなった。

あつ、寝てるときによくなるやつだ。

その拍子に背もたれからずり落ちた竜王は、そのまま玉座からも転落し、地面に頭から激突してしまった。ゴンッ、と痛そうな音が響く。

「すう……すう……」

「そのまま寝続けた!?!」

……本当にこんなのが竜王で大丈夫なのだろうか?

『大丈夫ではないからこそ、クーデターが起きようとしているのかと』

ナビ子さんの言う通りだ。

## 第94話 ちょむちょむと愚連華

「あなた、あなた、起きてください」

「んっ……」

妻に身体を揺すられ、シロの親父さん、すなわち竜王がようやく目を覚ました。

顔立ちはかなり整っていて、身嗜みを改善すればきっと中年二枚目俳優のようになるだろう。

だが生憎とそうした面への意識はまるでないようで、ボサボサの白髪、無精ひげ、だらしなく着崩している上に薄汚れた服装と、橋の下にでも住んでいそうな格好だった。

とてもすべてのドラゴンの頂点に立つ人物（竜物？）には見えな  
い。

床に落っこちて寝ていた竜王は身を起こすと、ふらふらと玉座に近づいていく。

そして玉座の上で丸くなった。

「……あと五日」

まだ寝る気かよ!?

しかも五日って！ 二度寝なのに長すぎだろ！

「だめですよ、この間もそう言って、もう五日経っちゃいましたよ」



どうやらすでに実行済みだつたらしい。  
 そもそも玉座で寝るなよ。

「ん、パパの特技はどこでも何時間でも寝れること。尊敬する」

シロの尊敬ポイントもおかしい。

そう言えばシロも寝るの好きだもんな……。

いつも食って寝てばかりだ。パンダかよ。

となれば、このおっさんにも食い物には弱いかもしれない。

そう考えて 無限収納 から取り出したのは、こんなこともある  
うかと思つて作つておいた肉まんだ。

材料はやはりオークロードの肉。噛めば肉汁が爆発する。

「はむっ  
むぐぐぐ」

「お前のじゃない」

シロが横から首を伸ばして肉まんを喰らおうとしてきたので、額を手のひらで抑えて止めてやった。

「っ！」

その美味そうな匂いが伝わったのか、竜王がガバツと跳ね起きた。

竜王は即座に飛び上がると、肉まんに喰らい付いた。

「うめえええええ  
ツ!？」

溢れ出る肉汁の旨味。しかしその直後に襲いかかってくるのは、ケーシングに閉じ込めてこっそり肉まんの奥に潜ませていた大量の

唐辛子による激辛だ。

「ギャーーーーッ!!!!!!」

竜王が怪獣のような悲鳴を上げた。

「…………危なかった」

もう少しで自分が激辛肉まんの犠牲になるところだったシロが安堵している。

「水水水水ううっ!」

「はい、よく冷えた水」

俺の魔法で、氷点下に近い水が滝のごとくザバーッと竜王の頭上へと降り注ぐ。

「さて、これでさすがに目が覚めただろ」

「ふむ。なるほどなあ。話はよく分かったぜ」

ようやく玉座を玉座として使用した竜王は、俺の話を聞き終えたとそう鷹揚に頷いた。

しかし何ともやる気無さそうに、小指を鼻の穴に突っ込んでホジホジしている。

うわっ、丸めてこっちに飛ばしやがった！

「あらあら、大変なことになってますね」

シロの母親、ペローネが他人事のようにほわほわと微笑む。

「じゃあ早速、各集落に応援を要請するか。おい、つるつるてん！ つるつるてん！ ……なんだ、いないのか？」

なに、つるつるてんって？ 名前？

「パパったら、近衛兵の隊長だったつるつるてんさんなら、とっくに辞めて故郷に帰っちゃってますよ」

「おっと、そうだったか？ ふむ、だとすると……あれ？ 今は誰に命じればいいんだ？」

「さあ？ そう言えば、最近ぜんぜん人を見かけませんね？」

俺もここに来るまで、シロの母親を除けば、シロの姉ちゃんにしか会ってないな。

『ドラゴンたちの宮仕えは有志によって行われます。すなわちどれだけのドラゴンが竜王へ忠誠を誓っているのかは、宮殿の賑わい具合で判別することが可能なのです』

と、ナビ子さん。

「昔はもつといたんですけどね？」

つまり、みんな愛想を尽かして出て行ったってことか……。竜王がこれだもんな。

「まあ、いないなら仕方ねーな」

「うふふ、せつかくですから、応援要請がてら二人でゆっくり集落ツアーと行きませんか？」

「おう、それは妙案じゃねーか」

そしてこの危機感のなさである。

ダメだ、この夫婦……。

もういつそのこと黒輝竜に玉座を譲った方がいいんじゃないのか？

と、そのときだった。

突然、一体のドラゴンが謁見の間へと飛び込んてくる。

急ぎの要件なのか、人化せずドラゴンの姿のままだ。

『竜王様、大変です！ 明らかに殺気立った他集落のドラゴンたちが、この集落に向かって飛んできています！ 警告にも応じません！』

「なに、あいつらもう来たのかよ？」

「あらあら、忙しないですね」

どうやらもう黒輝竜たちが襲来したらしい。

『防衛部隊を結成し、すぐさま迎撃に当たる予定です！』

「じゃあそれで。任せた。……えーつと」

『は！ 俺は近衛兵のびくびくです！』

「おっと、そうだったそうだった。後は頼んだぞ、びくびく」

びくびく。

まあ名前のことは置いておいて、このドラゴンは近衛兵なのか。いるにはいたんだな。

しかし竜王、完全に名前を忘れていたよな……。

ぴくぴくが去っていくと、竜王は玉座の上で丸くなった。

「ペローネ、決着が付いたら起こしてくれ」

「はい」

「また寝るのかよ!？」

そして戦いの決着は付いた。

いきなり襲来した黒輝竜を中心とした反乱勢力に対し、竜王側は兵力数でも戦意でも大きく劣っていた。

その結果、あっさりと防衛線を破られて集落への侵入を許したかと思うと、竜王側は即行で降伏。

あまりにも一方的過ぎで、両陣営にほとんど被害らしい被害も出なかった。

そして現在、ここ竜王の城は完全に黒輝竜の一派によって占拠されている。

黒輝竜のリーダーである愚連華は、勝ち誇った顔で玉座に腰掛けていた。

「ヒャッハー……ッ！ これからはアタシが竜王だ！ 今まで白輝竜どもに後れを取ってはきたが、これからはアタシら黒輝竜の時代だぜ！」

「ヒャッハー……ッ！」

「ヒヤッハーハーツ！」  
「ヒヤッハーハーツ！」

……なかなかうるさい連中である。

前竜王を初めとする白輝竜たちは拘束されて、玉座を我が物とした愚連華の前に座らされていた。虹輝竜であるペローネもだ。ただしシロだけは現在、俺と一緒に 隠密・極 を使って身を隠している。

家族が拘束されている姿を前にしながらも、シロは毅然としていた。

……いや、平然と言った方がいいのか？  
って、ちょっと待て。こいつそもそも目が開いてないような

「すうすう」

寝てる！？

「ヒヤッハーハーツ！ テメエらの処遇を決めねえといけねえな  
ア！」

愚連華が大声を上げた。

「厳罰を！」

「前竜王は処刑しろ処刑！」

「そつだそつだ！ あんな無能は死んで当然だ！」

黒輝竜は元より、反乱に加わった超竜の代表者たちからも厳しい声が飛ぶ。

「あらあら、大変ですね」

ペローネは相変わらず他人事のように笑っている。

「すやすや」

「むにゃむにゃ……」

一方、前竜王とシロの姉ちゃんは寝ていた。

「寝るんじゃねええええっ！」

愚連華が怒声を上げ、前竜王が「ふごっ？」と目を覚ます。

マイペースにも程があるだろ、こいつら。

このままではマジで処刑されかねないぞ。

「ちょむちょむ！ テメエには新竜王であるこのアタシが、直接その処遇を言い渡してやらあ！」

そして愚連華が宣告した。

「テメエはっ………あ、アタシの王配になりやがれッ！」

……ん???

王配って、あれだよな？

『はい。女王の配偶者のことです』

どんな処罰だ？



## 第95話 竜王位争奪戦

反乱軍を率いて竜王の城を落とし、白輝竜たちを拘束したモヒカ  
ンヘッドの黒輝竜・愚連華。

クロの母親でもある彼女が、前竜王の処遇について宣告した。

「あ、アタシの王配になりやがれッ!」

王配、すなわち女王の配偶者のことである。

厳罰を期待し、この場を集っていた反乱軍の代表者たちは、まっ  
たく予想外の彼女の言葉に一瞬静まり返る。

が、すぐに怒号が飛び交った。

「ふざけるな! どういうことだ!？」

「王配!? どこが厳罰だ!」

「殺せ殺せ!」

「黙りやがれええええッ!!!」

だがそれを愚連華は更なる怒号で掻き消す。

再び静寂が満ちた中で、口を開いたのは同じ黒輝竜の爺さん、怒  
羅愚だった。

「うつむ、それは本気か、愚連華?」

「ほ、本気だッ」

「確かに旦那に死に別れた今、お主は一人身じゃが……まさか、ち  
よむちよむに惚れておったとはのう」

「ベベベ、別に惚れてたとか、そういうんじゃないし!？」

愚連華は顔を赤らめて目を逸らす。

……なんて分かり易い。

「かーさま……」

「母様……」

クロとチロも微妙に呆れ顔だ。

「まあクロもシロのこと大好きだしな……」

「ベベベ、別にこいつのことなんて好きじゃねえし!？」

母娘そろって分かり易い。

「あらあら、うふふふ……あなたったら、随分とモテますわねえ」  
「？」

相変わらず笑顔のペローネだが、目が笑っていないかった。

さっきまで眠そうだったちよむちよむも、そのプレッシャーのせいか、さすがに今は目を覚ましている。

愚連華がペローネを睨みつけ、叫んだ。

「ヒャッハー……ッ、そんな余裕ぶつてられんのも今の内だぜ、ペローネ！ テメエは死刑だ！ 死刑！」

どう考えても私情が入りまくった裁定だった。

「あらあら、もしかして、わたくしにちよむちよむさんを取られ

たこと、未だに根に持つておられるんですね。」

「っ！」

「女としての魅力では勝てないから、こんな暴力的な手段に出るなんて。うふふ、モテない女の怨みは怖いものですね。」

「だ、だ、黙りやがれっ！」

バチバチと火花を飛ばし合う女たち。

完全に目を覚ましたはずのちよむちよむだったが、今は再び瞼を硬く閉じていた。

……寝たふりだ。おい。

「ペローネさんを処刑だと!? 冗談じゃねえぞ!」

「そんなふざけたマネが許されるとでも思ってたのか!」

「この竜でなし!」

どうやらペローネはドラゴンたちの間ではかなり人気らしい。前竜王には厳しい処罰を求めている連中が、一転して擁護の立場に回っていた。

お前らも私情が入り過ぎだろ。

「い、異論は認めないぜ! こいつは竜王たるアタシが決めたことだからな! もう決定事項だ!」

愚連華が咆える。

だが他のドラゴンたちはそれを受け入れようとはしなかった。それどころか、

「やっぱこいつもダメだ! 竜王の器じゃねえ!」

「そもそも今まで白輝竜と黒輝竜ばかりが竜王だったのが間違だったんだ!」

「そうだそうだ！ 何が神竜だ！ これからは神竜以外が竜王になつてもいいじゃねえか！」

「よし、ならば俺だ！ 俺が竜王になる！」

「バカ言え！ このオレ様こそ竜王に相応しい！」

「いいや、我らこそ」

「おでも……」

「てめえら無限竜は馬鹿だからかえって酷いことになるだろうが！」

口々に自らこそが新たな竜王に相応しいと主張し始めてしまう。  
皆、神竜に準じる超竜たちだ。

「……だつたら勝負だ！……」

こうして、新しい竜王の座を賭け、ドラゴンたちの戦いが幕を開けたのだつた。

刃竜たちのリーダー、セグルスは内心でこの状況を大いに歓迎していた。

今こそ我ら刃竜の力を示す絶好の時。

彼ら刃竜は、尾に名剣にも勝る鋭い刃を有していることからそう呼ばれている。

その生まれ持った剣の使い方を幼い頃から訓練させられ、超竜と

されるドラゴン種の中でも高い戦闘能力を有する種族として知られていた。

その頂点に君臨する彼は、己の剣技ならば神竜の力すらも凌駕しているという自負があった。

竜王の座には、最強のドラゴンが就くべきだとされている。ならば、自分こそが最も竜王に相応しい。

「がははははっ！ オレたち装甲竜とテメエら刃竜、盾と鉾のどっちが強いか、はつきりさせるべきときがきたみてえだ」

「遅い」

「がっ！？」

それを証明するかのように、セグルスは同じ超竜の一種、装甲竜のリーダーをその天然の刃で斬り裂いてみせた。

装甲竜は並みのドラゴンとは比べ物にならない硬い鱗を有し、防御力だけで言えばドラゴン最強とも言えるだろう。

攻撃の刃竜、防御の装甲竜、などと比べられることもある。

だがセルグスからしてみれば、装甲竜はその高い防御に頼り切り、ロクに戦い方も知らない雑竜。

動きも鈍重で、身体の構造上どうしても装甲が薄い部分があるため、そこを的確に刃で突いてやれば簡単に倒すことが可能だった。

「これはあきまへんわあ。わいは戦うの、苦手やさかいなあ」

同じく超竜の宝竜も敵ではない。

彼らは基本的に財宝集めにしか興味がなく、知略には長けているが、戦闘能力ではそこらの上位竜程度のものでしかないのだ。

本人も自覚しているのか、端から傍観者に回っていた。

「厄介なのは、やはり奴らか。ふ、面白い」

セルグスは不敵に笑う。

まずは超竜の中でも最強種と知られている、無限竜。

その巨体はさながら雲だった。

軽く百メートルを超えているだろう。

無限竜はこの戦いに何体かが参戦しているが、中でもリーダーであるガガグレの全長は三百メートル近い。

刃竜の中でも大柄な部類に入るセルグスですら、せいぜい五十メートル程度なのだ。

さらに強敵を挙げるとすると、これも超竜の獄炎竜。

彼らが吐き出す炎は空一面を夕焼けのように真っ赤に染め上げる。森を一瞬で焼き尽くし、川を干上がらせるほどの超高熱の炎をまともに浴びては、さすがのセルグスですら一溜りも無いだろう。

そしてやはり神竜の黒輝竜も忘れてはならない。

彼らは取り分けて大きな特徴や強みは無い。

刃竜のように攻撃に長けている訳ではないし、装甲竜のように防御に長けている訳でもない。

無限竜のような巨体でもなければ、獄炎竜のように凄まじい炎を吐き出せたりもしない。

だが反面、あらゆる面において他の竜種の平均値を大きく凌駕していた。

攻撃力も防御力も飛翔速度も、圧倒的ではないにしても、いずれも高水準。

器用貧乏と言えなくもないだろうが、セルグスは決して侮っていなかった。

竜王の座を争う上で、やはり一番の強敵だろう。

「だが我は負けぬ」

強い決意を胸に、セルグスはまず無限竜の一体を撃破しようと宙を翔ける。

と、そのときだった。

「グアアアアア！？」

突如、全長百メートルを超す巨体が吹き飛んだのだ。

「な……？」

信じがたい光景に思わず瞠目するセルグス。

その視線の先には小さな影があった。

「あんたらドラゴンに暴れられると地上が大変なことになるからな。俺も参戦させてもらうことにしたぜ」

「人間……？」

## 第96話 刃竜セルグス

刃竜のリーダー、セルグスは我が目を疑った。

全長百メートルを超す無限竜の巨体が、一人の人間の手によって吹き飛んで行ったのだ。

しかも彼の目が確かなら、その人間は無限竜の頭部を素手で殴り付けただけ。

「あ、あり得ぬ。何かの間違いだ。そもそも、なぜ人間が我らドラゴンの戦いに？」

首を振って否定するセルグス。

とそのとき、仲間をやられて憤ったのか、別の無限竜がその人間に躍り掛かった。

次の瞬間、信じがたい光景を目の当たりにしてしまう。

その人間が一瞬で無限竜の後頭部に移動したかと思うと、踵落しを繰り返した。

凄まじい衝撃音とともに、無限竜が頭から真つ逆さまに地上へと落下していく。

「よくも、ゆるぎない」

今度は無限竜のリーダー、三百メートル級の大きさを誇るガガゲレがその人間に襲い掛かった。

しかしまたしても驚愕の光景が。

人間が片手でその突進を受け止めてしまったのだ。



「ばがな……？」

ちよつとした山にも匹敵する自らの巨体を受け止められ、無限竜は愕然としている。

「せーのっ」

「っ！？」

さらにその直後、人間がその場で無限竜の鼻頭を掴んだまま回転し始めた。

大質量が一緒に回り出す。

辺り一帯の空気が攪拌されて暴風が巻き起こった。

顔を打ち付けるその風を前に、セルグスは開いた口が塞がらない。

「おらっ！」

人間が手を離すと、目を回した無限竜が信じがたい速度で天へと高く飛んでいく。

あつという間に豆粒のようになって、無限竜のリーダー、ガガグレは見えなくなってしまった。

ドラゴンたちは一時交戦を中断し、この事態を前に誰もが動きを止めていた。

もちろんセルグスもその一体。

そんな中、最初に動き出したのは獄炎竜だった。

「オラアアアッ！ 人間ごときがオレらドラゴンの戦いに勝手に参入してんじゃねえええっ！」

やたらと沸点が低いのが獄炎竜の特徴だ。

中でもリーダーのフェルノは特にキレやすい。

さっきまではドラゴン相手にキレていたが、どうやらそれ以上に劣等種として見下している人間に対する苛立ちが勝つたらしい。

フェルノは一気に距離を詰めると、口を大きく開けて溶岩流めいたドロドロの液体を吐き出した。

人間はそれをまともに浴びてしまう。

「ハハハハハハッ！ 骨すら残らねえだろ      ツ！？」

ドラゴンの鱗でも耐え切れない超高熱の液体を浴びせ、勝利を確信した様子のフェルノだったが、すぐに瞠目することとなった。

灼熱のマグマの中から、まったくの無傷で人間が姿を現したのだ。

「あつっー。さすがに今は熱かったわ。サウナにしても加減つてもんがあるだろ」

しかも至って余裕の表情。

「ふざけんなアアアッ！ 何で人間ごときがオレ様の炎を浴びて生きてんだよ！？」

「全環境耐性・極 スキルがあるからな。マグマの中でも数日くらいなら普通に生活できるぞ」

「ぜんかん……なんだそれはッ！？」

上位竜ですら蛇に睨まれた蛙状態になるはずのフェルノの威圧感のある怒声を前にしても、あの人間は平然としている。

「しかしお前、ちょっと暑苦しいな。発熱し過ぎだろ。……よし、冷凍ドラゴンにしてみよう」

超級魔法

バーマフロスト  
永久ノ凍土

獄炎竜を襲ったのは極寒の冷氣だった。

水が触れただけで沸騰するほどの温度を誇る彼の鱗が、一瞬にして凍り付いていく。

「ばか、な……」

やがて氷像と化したフェルノは、そのまま地上へと落下していった。

「ふ、ふははは……ふははははっ！」

信じがたい光景を何度も見せつけられ、多くのドラゴンたちが果然としている中で、セルグスはいきなり笑い出していた。

だが決して頭がおかしくなった訳ではない。

「面白い！ あれが人間だろう何だろうと、この際、関係はない。これほどの強者を相手に我の剣がどこまで通じるのか、ぜひとも試して見たくなった！」

セルグスは宙を翔けた。

その巨体を躍らせ、自分より遙かに小さな生き物へと端から全力で立ち向かっていく。

「とくと見よ、我が最強の奥義！ “散華”！」

セルグスの尾が超高速で閃いた。  
さながら花が散るように一度四方八方へと剣閃が広がり、さらにそこから一点目がけて収束していく。  
もちろん、その収束先はあの人間だ。

全方位から迫りくる無数の斬撃。  
その一撃一撃が、山すらも斬り裂く天変地異じみた威力を誇る。  
生身の人間が受ければ、それこそ肉片すら残らないかもしれない。  
だが、

（手応えがない！？ 確かに今、当たったはず）

直後、セルグスの尾部に激痛が走る。

「な……っ!？」

刃竜の証しであり誇りとも言うべき尾の刃が、半ばでぽつきりと折られていたのだ。  
オリハルコンにも匹敵すると言われる強度を誇り、なおかつ竜気を纏っていたというのに。

「……無念」

尾の刃は刃竜の命でもある。  
それを破壊されたということはすなわち、死を意味する。  
完膚なきまでの敗北。  
セルグスは完全に戦意を失い、地上へと落ちていった。

「今のはさすがにちょっと危なかったか？」

刃竜の攻撃を凌いだ俺は、思わずそう呟いた。

いきなり物凄い勢いで突っ込んできたかと思うと、その尾の刃でとんでもない斬撃を放ってきたのだ。

転移魔法で逃げるという手もあったが、時間制限つきだがあらゆるダメージを防いでくれる 絶対防御・極 スキルを使って防いだ。

さらに 絶対切断・極 で反撃。

奴の尾を真つ二つにしてやった。

『まともに受けていれば、恐らく1000ほどのダメージを受けていました』

「大したこと無かった」

俺のHPは確か五万近くあったはず。

1000程度のダメージだと 自然治癒・極 で一瞬で回復するだろう。

『すでに八万を超えています。また、物耐値は7000近くあります』

「えっ、そんなに上がってんだ」

カルナ 22歳

種族：人間族

レベル：94  
スキル：たくさん  
生命：78982 / 78982  
魔力：85129 / 85129  
筋力：7193  
物耐：6982  
器用：6502  
敏捷：7085  
魔耐：7009  
運：7793

ステータスを調べてみると、いつの間にかレベルが94まで上がっていた。

しかも 成長率上昇・極のお陰か、同レベル帯のドラゴンと比べても各数値は遥かに高い。

「ヒヤッハーーーーッ!!!!」

と、そこへ黒輝竜のリーダーで、クロの母親でもある愚連華が突っ込んできたが、

「デメエのお陰で手間が省けたぜええっ！ あとはデメエを倒せば、今度こそ正式にアタシが竜王に ひでぶっ!？」

俺の拳一発で天高くへと吹っ飛んでいった。

「あの愚連華サンが一撃っ!？」

「ヒヤ、ヒヤッハ……………さすがに、笑えねエ……………」

ドラゴンの中でも強者だった連中が悉く敗北したことで、皆、戦意を失ったようだ。

もはや俺に向かってくる者はおらず、あちこちで躁り広げられていた戦いは完全に終結していた。

## 第97話 新竜王誕生

ドラゴンたちは皆、涙を流して喜んでいた。

「うめええええええっ!? 何だこの美味しい肉はああああああっ!?!」

「ヒヤッハーハーッ!!!! ウツメエーハーッ!!!!」

「ごんなうまいの、はじめで……いぎでで、よがっだ……」

人化した彼らは竜王の城に集い、目の前の料理を一心不乱に喰らい続けている。

竜王位争奪戦が終わって。

しかしその後もドラゴンたちの間には一触即発の空気があったので、

「とりあえず美味しいもん喰わせれば落ち着くだろう」

と考えたのだった。

もちろん作っているのは俺だ。

それにしても、さすがドラゴン。

シロやクロもそうだが、途轍もない大食漢である。

しかも竜王の座を賭けて争っていた各種族の代表やそれに準じる者たちがすべて集まっているので、全部で五十体近くもいる。

大量の料理が見る見るうちに減っていく。

影分身・極 スキルによって一度に分身体を二十体も生み出すこ



とで、ようやく人手を確保していた。

ティラたちにも手伝ってもらっている。

「何ですか、この服は……」

「ちよつと胸が苦しいぞ」

「しゅごーい！　かわいい！」

ティラ、エレン、フィリアの三人はメイド服を着ていた。フリルの付いた可愛いタイプのやつだ。

さらにもう一人。

「ちよつと！　何であたしまでこんなことしなくちゃなんないのよ  
おっ！？」

と、不満たらたかなのは公爵級悪魔のベルフェーネである。  
もちろん彼女もメイド服を着用している。

「なかなか似合ってるぞ」

「うるさいわねっ！　あたしは公爵級悪魔よ！？　何でドラゴンど  
もの給仕なんかしないといけないのよっ！」

ベルフェーネは、やってられないわよ！　と叫んでメイド服を脱  
ぎ捨てた。

「人前でお漏らしたこと、魔界中で言いふらしてやろうかな」  
「はっ、できるものならやってみなさいよ。このあたしがそんなこ  
とする訳ないって、誰も取り合わないわよ」  
「ここに証拠写真があるんだが」

俺は懷からベルフェーネが失禁している瞬間の写真を取り出した。

とても良い顔している。

「うわああああっ！？ 何なのよそれはあああっ！？」

もちろんこの世界にはまだ写真なんてものは存在していない。

「しかも幾らでも増やせるぞ。これを魔界中にばら撒くでしょう」  
「やりますやりますやればいいんですよ！？ だからそれだけはやめてええええっ！」

涙目でメイド服を着直すベルフェーネだった。

「おい、シロ、クロ。配膳途中の料理を勝手に食べるな。お前らにはいつも喰わせてやってるだろうが」

「もぐもぐもぐ……誘惑には勝てなかった」

「むしゃむしゃむしゃ……はっ？ ちょっと一口味見するつもりが、全部喰っちゃった……」

無限収納 で一生かかっても食べ切れ無さそうな量の食材を保存してあったはずなのに、もう底を尽きかけているものがある。

急遽、新たに分身体を生み出して食材確保チームを結成した。

「行ってこい」

「「「「「あいあいさー」「」「」」」」

「あー、美味かった……」

「ヒヤッハ……もう食べねえ。げっぷー」

「満腹満腹」

「おなが、ぐるじい……」

ドラゴンたちは膨れ上がったお腹を抑えながら、あちこちで引っくり返っている。

どうやら満足してくれたらしい。

料理も綺麗に平らげていた。

「てか、結局、竜王には誰になるんだ？」

「なんかもう、俺は別になんでもいいや……。こんな美味しいもの食ったら、他のことはどうでもよくなってきた」

「わいも……」

「じゃあ前のままでいいんじゃない？ 別に竜王なんて偉そうにふんぞり返ってるだけで、実質お飾りだしな」

さっきまでのギスギスした雰囲気はどこへやら、仲良くそんなことを言い合うドラゴンたち。

「ところでさ、あの料理人さん、誰が呼んできたの？」

シロとよく似た顔をした女性が、膨らんだお腹をさすりながらのんびりした口調で誰にもなく問う。

シロの姉ちゃんだ。起きてるところは初めて見た。名前は確か、ぺむぺむ。

てか、俺がただの料理人だと思ってるようだ。ずっと寝てたもん  
な……。

「ん、私」

シロが応じる。

「へー、どういう関係なの？」

「カルナがご主人。私がペット」

「何で人間のペットに？」

「ん。カルナのペットになれば、いつでも美味しい物を喰える」

そうシロが答えた次の瞬間だった。

二人の会話に聞き耳を立てていたドラゴンたちが一斉に俺の方を向いて言ったのだった。

「「「「「俺もペットにしてくれ！！」」」」」

俺は今、竜王の玉座に腰掛けていた。

ずらりと並び、俺に向かって首を垂れているのは、様々な種類のドラゴンたちである。

「「「竜王様万歳！」」」

……なんか俺、竜王にされてしまったんだが？

「いいのか？ 俺、人間だぞ？」

「それは些末事でしかない。竜王の条件はただ一つ。それは“最強”であること。貴殿はそれに最も相応しい」

俺の疑問に答えてくれたのは刃竜のリーダー、セルグスというまだ若いドラゴンだった。

俺に尾の刃を破壊された奴なのだが、そのことを恨んでいる様子はない。

ちなみに時間が経てば再生するとか。

俺はちょむちょむへと視線をやる。

「すやー……………ぶぼっ!？」

寝ていたので、激辛肉まんを口の中に放り込んで無理やり起こした。

「むしろ竜王とかマジ重荷でしかないしこっちから頼みたい」

ほんと、愚王にも程があるなこのおっさん。

そりゃクーデター起こされるわ。

「だがそれだけじゃねえ。皆、あんたこそが竜王に相応しいと思っているんだ」

「とか言って、一番の目当ては俺が作るメシだろうが」

「そそそんなことねえぜじゅるり」

涎、垂れてるぞ？

てか、俺だって竜王なんて嫌だ。

こんなに大量のペットを飼うとか、面倒にもほどがある。

が、まあ俺には 影分身・極 という便利なスキルがあるからな。  
魔王は分身に任せればいいだろう。

大して仕事がある訳ではなさそうだし。

「異議ありいいいいっ！！！」

そんな中、唯一俺が魔王になることに反対する者がいた。  
愚連華だ。

「アタシはどうしても魔王になりてえんだよおおおっ！」

「お前じゃダメだろ」

「私情が入り過ぎてる」

「相応しくない」

「引ッ込め」

一斉にブーイングを浴びる愚連華。

「……かーさまは、動機が不純なんです」

チロにまで言われる始末である。

「チクシヨーーーーッ！ けど、アタシは諦めねえ！ ちょむちょむ、いつか必ずテメエをアタシのモノにしてやるからな！ 覚えてやがれッ！」

「たぶん無理」

「何でだよ！？ アタシのどこがいけねえんだ！？」

「ファッションセンス」

「がーーーーん……」

愚連華はよほどショックだったのか、頭を抱えてその場に倒れ込んだ。

いや、ファッションセンスで……。

そりゃ確かにあのパンクファッションは正直微妙だけど、そこ直せばチャンスあるってことじゃないのか？

「……無理だ……このファッションをやめるなんて……アタシには、できねえ……これはアタシの、命そのもの……」

どうやらそう簡単なことではないらしい。

何にせよ、これで一件落着（？）だ。

と、そのときだった。

突然、謎の発光物体がこの謁見の間へと飛び込んできた。

それは俺のすぐ近くで停止する。

光が収まり、その正体が明らかになった。

「ルシーファ？ いや……」

ルシーファとよく似た姿をした天使。

だがルシーファではない。

ガブリエナ 824歳

種族：天使族

レベル：

スキル： 天力・極

「ようやく……見つけた……」

先日ルシーファを天界へ連行していった、ルシーファの双子の妹だった。

彼女はぼそぼそと、しかし切実さを感じさせる声で言った。

「……姉さんを……助けてほしい……」



## 第98話 天獄

ルシーファの双子の妹だという天使・ガブリエナが、ドラゴンの集落にやってきた。

一体何の用だろうかと首を傾げていると、

「……姉さんを……助けてほしい……」  
「どういうことだ？」

思いのほか切実な声音で言われた言葉に、俺は眉をひそめる。

ルシーファはつい先日、この双子の妹によって天界へと連行されていった。

性癖更生プログラムを受けて、清く正しい天使に生まれ変わらせるためだ。

……そんなことが可能なのかどうか分からないが。

「姉さんは……天界の大監獄 “天獄” に入れられた……」  
「天獄？」

「……罪を犯した天使……堕天使を捕えたり……処罰したりするところ……。……わたしは、そこまでするつもりは……なかった……。それに……。まさか最下層なんて……」

ぼそぼそとした説明によると、天界に連行した後は、彼女の監視の下で禁欲生活を行わせ、更生させるつもりだったという。

ガブリエナは最上位の熾天使だ。

その意志に逆らうことができる天使はほばいない。

が、まったくいないわけではなかった。

それが天使長ミカエルである。

ガブリエナと同じ熾天使ではあるが、天使長である現在、その権限はガブリエナ以上。

さらに正義を司る天使として、天界最大の戦力を有しているという。

そのミカエルが、ルシーファを天獄送りにすると決定したのだ。それでもガブリエナであれば、突っ撥ねることも不可能ではなかった。

だがそれを知るミカエルは、ガブリエナが不在のときを狙って屋敷を襲撃、ルシーファを捕えて強引に天獄へと入れてしまったのだ。

さすがのガブリエナと言えども、一度天獄に落とされた者をどうにかすることはできない。

天獄は完全にミカエルの領分だからだ。

どうしたものかと悩んだガブリエナは、ふと俺のことを思い出したのだという。

「姉さんが言ってた……カルナは……姉さんより、強いと……。信じられないけれど……それが本当なら、姉さんを助けられるかもしれない……。そう思って……探していた……」

「つまり、俺にその天獄へカチコミしてくれってことか？」

「……もちろん、わたしも行く……」

「随分と荒っぽいやり方だな」

「それは、向こうも同じ……。それに、正攻法では無理……」

ルシーファがいるのは最も罪の重い天使を収容している最下層だ

とか。

最下層の罪天使が釈放されることは絶対にあり得ず、ただ処刑されるのを待つだけだという。

「いいぜ」

「っ……いいの……？」

俺があっさりOKすると、ガブリエナは目を瞠った。

「なんかすげえ面白そうだしな」

「……面白そう……」

ガブリエナは少し呆れたような顔をする。

いや、だって大監獄だぜ、大監獄？

なんかやたらと中二心を撥られる。

ほら、処刑されかかっている姉を助けるために監獄に乗り込むとか、某海洋冒険マンがみたいじゃん？

『ワンスのインペ ダウンですね』

だから何でナビ子さんが知ってるんだ……？

と言う訳で、やってきました天界。

眼下に広がるのは大雲海。  
空気が澄んでいて、気候はちょっと肌寒いくらい。

別に空の上にある訳ではなく、人間たちが住む世界とは一応異世界に当たるらしい。

と言っても比較的近い異世界なので、大天使クラスにもなれば行き来するのも容易いことだという。

だが人間の身で立ち入るのは難しい。

また、どうにか侵入できたとしても、天界に棲息している狂暴な天界獣に襲われるため、生きて帰るのは困難だ。

ただし天使の助力があれば別で、天使特有の力である“天力”のオーラで全身を覆えば、天界獣が天使と誤認してくれるらしい。  
まあ俺の場合、変身・極スキルで天使の姿に化ければいいだけだ。

「……驚いた……そんなことが、できるなんて……」

ガブリエナがまったく驚いてなさそうな顔で驚いている。

変身・極は隠蔽魔法と違い、単に外見を誤魔化すだけじゃない。  
このスキルで天使に変身すれば、天力すらも操れるようになるのだ。

天獄はかなり危険なので、さすがにティラたちは人間界に置いてきた。

出発する際、「ルシーファさんを助けてあげてください。ただしちゃんと更生するまで地上には連れて来ないでください」とお願い

された。

……正直、更生の方がハードルが高い気がする。

背中に生えた天使の翼を動かし、俺はガブリエナと一緒に雲の上を飛翔していく。

ちなみに雲の上は普通に歩けるらしい。

試しに少し降りてみると、コンニャクや豆腐の上を歩いているような不思議な感触だった。

「見えてきた……」

やがて雲の向こうに、巨大な円形の建造物が見えてくる。

「でかつ」

「あれはごく一部……雲の下は、あの数倍はある……」

目に見えている部分だけでも相当な大きさがあるというのに、どうやらそれですべてではないらしい。

逆円錐状の構造をしているようで、雲の中に尖った部分が突き刺さっているようなのだ。

天獄の周辺には無数の天使たちがいた。

だが 千里眼 で見てみると、どの天使にも顔が無い。

「あれは天獄の護衛用に作られた……模造天使……許可なく近づいた者は……天使だろうと、問答無用で攻撃してくる……」

あの天獄を中心に、半径約千メートル。

そこからは正規ルートを通らない限り、あの模造天使たちが一斉に襲い掛かってくるらしい。

そして正規ルートと言っても、目に見える道がある訳ではない。  
要は空路みたいなもので、天獄に墮天使たちを連行する役目を負  
った一部の天使たちしかその情報は知らないという。  
しかも定期的に変更されているとか。

「どうするつもりだ？」

「強引に……突破する……」

「ちよつと待て」

模造天使たちのステータスを鑑定してみると、能力の各数値はガ  
ブリエナのせいぜい十分の一以下。保有している天力も弱いため、  
実際の戦闘能力はさらに差があるだろう。

一体一体は大して強くない。

が、数が多すぎる。

恐らく千体以上はいるだろう。

それに模造天使どもと戦っていたら、天獄内にいる天使たちも加  
勢にくるに違いない。

「もう少し方法を考えようぜ」

「……分かった……」

「内部を 千里眼 で見れたらいいんだけどな」

そうすれば転移魔法で一瞬なのだが。

『天力による強力な結界が張られていますので、マスターの 千里  
眼 でも中を見通すことは不可能です。また転移魔法も、結界に弾  
かれてしまう可能性が高いかと』

なるほど。

結局、あの正面に見える大きな門から中に入るしかないというところか。

「一つ、いい案を思いついたぞ」

「……どんな……？」

「囃大作戦だ」

俺は召喚魔法を使った。

すると目の前に、ちょうど着替え中だったらしく下着姿のベルフエーネが出現する。

相変わらずナイスタイミングだ。

「何であんたは毎度毎度、変なタイミングであたしを呼び出すのよ  
おおおおおっ！……って、どこよ、ここは？」

ベルフエーネが怪訝な顔で天獄の方へと視線を向けたときだった。  
公爵級悪魔の強大な魔力に反応したのだろう、まだ半径千メートルの外だというのに模造天使たちが一斉にこちらを向いた。

そのときにはもう俺とガブリエナは転移魔法で遠くに逃げていた。

「な、何なのよこれはあああああっ！？」

軽く千を超す模造天使たちがベルフエーネの方へと殺到していく。  
どうやら上手くいったようだ。

さて、今の内に侵入するか。

## 第99話 即死チート

無数の模造天使たちが一斉にベルフェーネへと襲い掛かっていく。

「な、何なのよこれはあああああつ!?!」

ベルフェーネは公爵級悪魔だ。天界ではあまりにも異質なその強大な魔力には、かなり遠くにいた模造天使すらも即座に反応していた。誘蛾灯に引き付けられる虫のように、続々と集まってくる。

あつという間に取り囲まれてしまったベルフェーネは、天力のレーザーを集中砲火のように浴びせられてしまう。  
だが、

「舐めんじゃないわよっ!」

さすが大悪魔。

魔力の障壁であつさりと天力の攻撃を防ぐと、すぐさま反撃に出た。

「「ロジオンハリケーン  
腐蝕暴風」」

突如として巻き起こったのは、禍々しく激んだ風。

ベルフェーネ

種族：悪魔族

レベル：114



スキル： 腐蝕・極

彼女が有する最大の能力が 腐蝕・極 というスキルだ。  
その名の通り、ありとあらゆるものを腐らせ、蝕むことができる  
という力である。

「これがほんとの腐女子というやつだな」  
「違うわよ!？」

相手が天力によって護られた模造天使であろうと、例外ではなかった。

その風に触れた瞬間、模造天使たちの真っ白い身体が黒く変色し、ボロボロと崩れていく。

「あははははっ！ この公爵級悪魔、ベルフェーネ様に挑むなんて千年早ぶぎゃ!？」

だが模造天使たちはその圧倒的な数でベルフェーネに立ち向かった。

腐蝕の風を浴びてすでに身体が崩れるつつある仲間を盾にして、大悪魔を排除しようと攻撃を仕掛けていく。

「グルアアアアアアアアッ!」  
「何かでかいのまで来たんだけどおおおっ!？」

さらに悪魔の魔力に引き寄せられ、天界獣までが姿を現していた。

一方、そんな風に彼女が奮闘している中。  
俺とガブリエナは反対側から天獄へと接近していた。

正規のルートではないため普通ならあの模造天使たちが襲い掛かってくるはずだが、今は完全にベルフェーネに引き付けられており、こっちは来ない。

陽動作戦の第一段階は上手く行ったようだ。

やがて天獄への唯一の入り口である巨大な門の前まで辿り着いた。しかし門は固く閉じられている。

「……全力でやれば……きつと、破壊できる……」

「だから何でそんな強引な方法ばかり取ろうとするんだよ」

今にも門に突っ込んで行こうとするガブリエナの襟首を掴んで止めた。

「ちょっと待ってるよ。すぐに勝手に開くはずだ」

「……?」

そのとき軋み音が響き出したかと思うと、ゆっくりと巨大な門が開き始めた。

俺の予想通りだ。

中から現れたのは、武装した天使たちだった。

全部で二、三十はいるだろうか。

模造天使ではなく、こちらは本物だ。

いずれも模造天使を遥かに超える天力を有していた。

「公爵級の悪魔が現れて暴れ回ってた。当然、模造天使だけに任せず、撃退するために部隊を送り出すに決まってる」

そして出入り口がこの門しかない以上、一時的にこれを開けるしかない。

「なるほど……すごい……」

驚くガブリエナを伴って、天使たちの脇を秘かに通り抜ける。

そして開いた門から堂々と天獄内への侵入を果たしたのだった。

## 天獄・一階

天獄の各階はいずれも綺麗な円形をしているが、一階部分は大きく二つのフロアに分けられていた。

内側の円の部分と、その周囲を覆う外側の環状部分である。

内側にあるのは、捕えた墮天使たちを捕える檻や、彼らに厳しい強制労働を課すための施設。

そして外側の環状部分は、彼らの脱走を防ぐための巨大迷宮となっていた。

門から天獄内への潜入を果たした俺たちにもまた、この迷宮が立ちはだかった。

ルシーファがいるという下層に至る階段は、円の中心にしかない

という。

ゆえにこの迷宮を突破しなければならないのだ。

「……トラップが沢山あって……すごく、危険……」

ガブリエナがぼそぼそと言うように、迷宮内には嫌がらせのように大量のトラップが仕掛けられていた。

堕天使ですら致死性の凶悪なトラップばかりだ。

罪人の脱走を防ぐ目的なのだから当然かもしれない。

だが俺には 探知・極 スキルがある。

かなり高度な隠蔽が施されているものもあるが、どこにどんなトラップがあるか丸分かりだ。

「……そんなにスタスタ歩いて……大丈夫……？」

躊躇なく進んでいく俺に、ガブリエナが目を丸くしている。

トラップの大半は天力によるものだ。

熾天使である彼女なら、その天力を読み取ることである程度まではトラップを判別できるそうだが、それでも完璧にはいかないらしい。

時折、トラップに引っ掛かって無残な死に方をしている堕天使らしき天使を見かけた。

堕天使は翼が黒いため見た目ですぐ分かる。

ちなみに、堕天すると勝手に翼が黒くなるわけではない。

天獄に収容された天使たちは例外なく堕天使として認定され、それと同時に翼を無理やり黒く染められるのである。

天使にとって純白の翼は誇りとも言えるもので、真っ黒にされる

のはかなりの屈辱らしい。

「こんなのも放し飼いにされてるのか」

横道からぬつと姿を現したのは、巨大な獣だった。

天界獣だろう。

見た目はサーベルタイガーのデカイ奴。

だが天界獣の証しとして、背中に天使たちのとよく似た白い翼が生えていた。

天界獣は俺を見るや否や、すぐさま躍り掛かってきた。

「グルアアアアッ！」

死ね。

「ッ!？」

天界獣は一瞬で絶命して地面に倒れ込む。

「今、何をした……？」

「心の中で死ねって思った」

「……？」

相手に攻撃をすると、一定確率で死ぬというのが 即死攻撃 というスキルだ。

だが俺が持つ 即死攻撃・極 は、実際に攻撃をしなくとも、攻撃の意志を持つだけで効果がある。しかも格下が相手なら、ほぼ確実に死ぬ。

ちなみに 呪術・極 スキルで呪い殺すのも、ほとんど似たようなものだ。

ただ天界獣が持つ天力は呪いに強いので、即死させることはできないだろう。

「あんなデカいのには暴れられると、勝手にトラップが発動しかねないからな」

そうしてトラップや天界獣を回避しつつ、複雑な迷路を着実に進んでいく。

やがて俺たちは迷宮部分を突破し、墮天使たちを収容している部分へと辿り着いた。

だがここにはルシーファはいない。

巡回している看守たちの目を掻い潜って、俺たちは下層へと通じる階段を目指した。

天獄では、罪の重い墮天使ほど、より下層に収容されることになるという。

なので一階にいるのは罪が軽い墮天使たちだ。

彼らは懲役期間が終わり、ちゃんと更生されたことが確認されれば釈放される。

だが地下一階から先は、釈放の可能性はほとんどないという。

もはや処刑は決定事項となり、後はどれだけ厳しい処刑方法が取られるかによって、どの階に収容されるかが決まる。

そしてルシーファが収容されているのは最下層である。

俺たちは下層に続く階段に辿り着いた。

かなり長い螺旋状の階段で、覗き込んでみても底が暗くて見えな

い。

まるで地獄にでも通じているかのようだ。

「ともかく、こっから地下に行けるわけか」

「……気を付けて……ここからが、本当の天獄……」

## 第100話 門番×3

### 天獄・地下一階

地下一階に降りた瞬間、全身が焼けるような凄まじい熱風に襲われた。

「うおっ、熱っ<sup>あつ</sup>」

「……ここは灼熱天獄……フロア全体が常に炎に包まれていて……罪を犯した天使たちを焼き殺す……」

ガブリエナが言う通り、あちこちに燃え盛る火の海があった。息を吸い込むだけで喉が焼けそうだった。

まだ火の海からは距離があるが、気温は余裕でサウナを超えている。

たぶん百八十度くらいはあるんじゃないだろうか。

全環境耐性・極 スキルがあるため、俺はたとえあの炎の海に入っても平気だろうが。

獄炎竜が吐き出すマグマの方が高熱だったしな。

一方ガブリエナは天力のオーラで身を護り、炎や熱を防いでいるようだ。

「……私なら……数年は、持つ……」

だがそれは彼女が膨大な天力を有しているからこそ可能な芸当だ。普通の天使ではそんなことはできない。



たとえ天力が切れたとしても天使の高い生命力ならばあくは生き続けるだろうが、いずれ炎に耐え切れなくなり、干からびて死ぬだろう。

一階と違い、地下一階以下での禁錮はほとんど死刑と同じだと言われているのはそのためだ。

ゆえに脱走を試みる者が後を絶たないという。  
しかしそれを拒む最強の門番がいた。

「オオオオオオオオオオッ！！！」

凄まじい雄叫びとともに頭上から降って来たのは、全身から炎を猛らせる巨大な魔人だった。

イフリート

種族：天使族（墮天使）

レベル：

スキル： 天力    断罪劫火・極

「……上階にいかせないため……各階には門番が配置されてる……」

普通こうした強敵は階の最後にいるのがゲームなんかのセオリーだが、考えてみると逃げ出そうとする囚人は上階を目指すもんな。逆に下に向かってると、最初に遭遇してしまうというわけだ。

「イフリートは……元々は天使だった……墮天使に落ちて天獄行きになったけれど……その炎の力を買われて……この階の門番になった……らしい」

随分とマツチした職場じゃないか。

「脱走ハ、許サナイ……」

イフリートは鼻から炎を噴き出しながら、俺たちの前に立ちはだかった。

「いや、脱走じゃないぜ？ 侵入だ侵入。明らかに上の階から来た  
だろ？」

「侵入者……？ 侵入者ハ……排除、スル……ッ！！」

イフリートが炎で覆われた巨大な拳を振り下ろしてくる。  
全長は二十メートル以上もあり、拳だけでも俺より大きい。  
だが、

「ッ！？」

俺は片手でそれを受け止めていた。

「あつっうゝ。炎熱耐性の魔法を重ね掛けして、しかも闘気を拳に  
集中させてんのに、この熱さかよ」

こいつの全身は、熱した鉄板が可愛らしく思えるくらいの超高熱  
だ。

普通ならこうして直に触れると、一瞬でタンパク質が溶けている  
だろう。

「馬鹿ナ……なぜ、受け止メラレタ……？」

イフリートは腕に力を込め、俺を押し潰そうとしてくる。だが生憎と臂力では、いや、臂力でも俺の方が上だ。

「ナラバ、サラナル炎デ、焼キ尽クスマデ」

全身の炎がイフリートの片腕に集中していく。

俺の右手に伝わってくる熱量がさらに上がった。

さすがにこれは熱い。

冷やしてやらないとな。

「ハイマフロースト  
永久ノ凍土」

「ッ!？」

極寒の冷気が炎熱を押し返し、それどころか魔人の巨大な拳を凍り付かせていく。

獄炎竜を凍らせたのと同じ氷の超級魔法である。

「……なんて、魔力……」

ガブリエナが息を吞んでいるが、魔法の威力は基本的にそれに投入する魔力の量に比例するものだ。魔力操作・極 スキルを持つ俺は、一度に膨大な魔力を放出することが可能なため、超級魔法の威力を何倍にも高めることができた。

「コノ程度ノ、冷氣デハ……我ハ、凍ラヌ……」

「おお、さすがだな。獄炎竜はこれで氷像になったんだが」

凍らすことができたのは炎の魔人の片腕までだった。

その部分も凍っているのは表面だけで、しかも内側からの超高熱によって、少しでも気を抜けばすぐに溶解してしまう。

「ガブリエナ、準備はできたか？」

「……たった今、完了した……」

そのときイフリートの全身を天力の光が覆い尽くした。

「ッ？ コレハ……ッ!？」

拳を突き出したままの格好で、身動きが取れなくなるイフリート。その身を封じていたのは、ガブリエナが生み出した天力の結界だった。

「力、身体ガ……ッ！ コレホド強力ナ天力結界ヲ、ドウヤッテ……ッ?」

イフリートはガブリエナの存在に気づいていない。

俺が注意を引き付けて、逆に彼女は気配を消しているせいだ。

熾天使である彼女が、天獄に潜入して姉を助け出したとなると炎上すること間違いなし。

そのため可能な限りバレないように、俺は彼女にだけ 隠密・極スキルを使っていた。

これは特定の人物に対しても使用することができるのだ。

「念のため、もう一つ結界を張っておくか」

俺は 結界魔法・極 スキルも持っている。

イフリートを捕える天力の結界のさらに外側に、今度は魔力で生み出された結界を施す。

これでも中からも外からも移動することはもちろん、念話を飛ばし

たりして連絡を取り合うこともできないはずだ。  
侵入者が現れたという情報が天獄中に伝わってしまうのを、少しは遅らせることが可能だろう。

## 天獄・地下二階

灼熱天獄を抜けてさらに下層へと降りた俺たちを待ち受けていたのは、対称的な極寒の世界だった。

「……ここは極寒天獄……とにかく、寒い……」  
「寒いっていうか、もはや痛いし焼けるレベルだな、これは」

氷点下約百度。

地球で観測された最低気温が、確か南極のマイナス九十度くらいだったけ？

しかも常に吹雪いている。

普通の人間ならたぶんすぐ死んで氷の像になるだろう。

もちろんここにも門番がいた。

「アアアアアアアッ！」

今度は真っ白い身体をした美しい天使だった。  
大きさはイフリートと比べるとずっと低い、それでも二メートルくらいはあるだろう。

クルオネ

種族：天使族（墮天使）

レベル：

スキル： 天力 断罪絶凍・極

どうやらこいつも墮天使らしい。

「侵入者八、排除サセテイタダキマス」

氷の墮天使は冷厳な口調で宣言してくる。

ま、さっきと同じ方法で無力化すればいいか。

### 天獄・地下三階

地下二階の門番も結界に封じ込めることであっさり突破すると、雪と氷で覆い尽くされたフロアを抜けて、今度は地下三階へと降りてきた。

鼻を突く悪臭が漂い、喉や目が痛い。

それもそのはず。

猛毒の沼があちこちにあって、この階層の空気ですら、吸っただけで常人ならあっさり死に至るほどの毒ガスなのだ。

「ここに収容された堕天使は……長くても一週間で……死ぬと言われている……私でも、せいぜい一か月……」

天使ですら一週間しか持たないという。

当然ここでも脱走を図ろうとする者が続出。

しかもほぼ死が確定しているので、みんな命がけである。

そんな堕天使たちを散々返り討ちにしてきた門番がこいつだ。

ファフニールヒュドラ

種族：毒竜

レベル：118

スキル：猛毒分泌・極

この階層の門番はどうやらドラゴンらしい。

本来なら毒竜は上位竜に当たるのだが、こいつの強さ間違いなく神竜クラスだ。

変異種だからか、長く生きて進化したのかは分からないが、毒に対する耐性は完璧なので、この階層の門番に相応しいとされて天使たちに無理やり連れて来られたのかもしれない。

首が全部で十本以上はあるだろうか。

ただし今は沼の中で眠っていた。

「ZZZZ……」

わざわざ起こす必要も無いので、こっさり通り過ぎようとする。

まあこういうケースって、あと一歩のところできちゃってしまつものだと相場が決まつてるよな！。

一本が目覚めちゃったら他の首も起きるだろうし。

「「ZZZ……」」

ん？ まだ起きないの？

普通に通り過ぎちゃうけど、いいのか？

「「ZZZ……」」

……起きなかつたんですけど？

まあいい。先へ進もう。



## 第101話 看守長ゲイム

天獄・地下四階

「ここに……姉さんがいるはず……」

天獄の最下層は地下四階だ。

最も大きな罪を犯した墮天使たちが収容される場所である。

「目がちかちかするな」

思わず目を眇めてしまう。

というのも、絶えず頭上から無数の雷が降り注いでいるせいだ。常に電流を浴び続けなければならない。

それこそがこの最下層の刑罰である。

「……さすがの私でも……天力が切れれば、一週間と、持たない……早く姉さんを……助けないと……」

「あばばばば！ チョーキモチイッ！」

「……何をしてる？」

「おつと悪い。電撃を見たら、つい浴びたくなる癖が出てしまった」  
「控えめに言って、頭おかしい……」

マジで？

『わたくしも同感です』

ナビ子さんまで……。

「にしても門番が見当たらないな。こんな階層、さすがに門番が務まる奴がいなかったのか」

「好都合……」

ん？　ちよつと待て。

「この階層にもルシーファはいないっぽいぞ」

「……え？」

「俺の　探知・極　はこの階層全体をカバーしてるんだが、あいつらしき生物の気配がないんだよ」

「……そんなことは、ない……姉さんは、最下層に、いるはず……」

「いや本当だつて。たぶん、このさらに下の階のようだな」

「下の階……？」

「秘匿されている階層があるのかもしれないぞ」

ただし　探知・極　で見る限り、下層へと通じる階段らしきものはない。

「何か別の手段で下層に行くのかもしれないな。探してみるか」

しかし問題はこの雷の雨だ。

今は階段を降りてすぐの場所だから回避できているが、この階層を移動しようとしたら喰らい続けてしまう。ドラ○エのバリアの床みたいな感じで。

「結界を……張る……」

雷を避けるため、ガブリエナが天力で結界を展開してくれた。

結界に雷撃が当たってバリバリバリという凄まじい音が頭上で響く中、俺とガブリエナは階層を探索していく。

今までの階層もそうだったが、あちこちに牢屋が設置されていて、罪を犯した堕天使たちはその中に捕らわれている。

最下層だけあって数はかなり少ないようだ。

天力によって頑張つて雷撃を防いでいる堕天使もいるが、すでに事切れて焼身死体と化している者もいた。

「おつ、ここが怪しいな」

階層の奥に不自然な小部屋が存在していた。

中には誰もいないが、部屋の中心に大きな水晶玉が浮かんでいる。

「これは……恐らく、転移を引き起こすためのもの……」

どうやら転移して別の場所に飛べるようになっていいるらしい。

その先にルシーファがいるのかもしれない。

天力によって起動するようで、それもガブリエナに任せた。

彼女が天力を流し込むと、水晶玉から煌々とした光が噴き出してきた。

気づけば俺とガブリエナは別の場所へと転移していた。

「なるほど、異空間か」

「天獄に、こんなところがあったなんて……」

周囲には真っ白い空間が広がっていて、一直線に続く足場が浮かんでいる。

恐らくこれも天力で引き起こしている現象だろうなのだろうが、足場の続く先は靄がかかったようにぼんやりしていてよく見えない。とりあえずこの足場に沿って進んでいくしかなさそうだ。

「あら、ガブリエナ様じゃない。お久しぶりねえ」

不意に声が聞こえてきて、靄の向こうから一体の天使が姿を現した。

「っ……ゲイビムっ……」

……ゲイ？

「うふふふっ、天界一の美少女天使、ゲイビムちゃんとはあたしのことよ」

こいつは天使……なのか？

いや、ちゃんと背中に純白の翼が生えているし、鑑定してみても、

ゲイビム

種族：天使族

レベル：

スキル： 天力      筋力上昇・極

と、確かに天使なのだが……

どう見ても女装したおっさんだ……。

筋肉ムキムキの巨漢で、泣く子がもつと激しく泣きそうな厳つい顔つき。

なのにはっちりメイクを施し、ピンク色のフリフリの衣装を身に

纏っている。

「ああん？ 誰がおっさんよお？」

めっちゃ睨まれた！？ 心の中で呟いただけなのに！

「ていうか、あんた見かけない天使ねえ？」

変身・極 スキルで天使の姿に変身している俺へ、ゲイビムは胡乱げな視線を向けてくる。

「……でも、なかなか良い男じゃない」

やめてくれえええええつ！

表情の乏しいガブリエナも顔を歪めていた。  
天使にとっても気持ち悪いのだろう。

「……ゲイビムは……ここ天獄の看守長……。階級は第二位の智天使だけど……強さでは、天界最強クラス……。まさか、こんなところにいるなんて……」

どうやらあの見た目のせいで顔を顰めている訳ではなかったらしい。

てか、こいつが看守長なのか……。

むしろこいつこそ牢獄に入れるべきじゃないだろうか。

見た目だけで墮天使認定していいと思う。

「でも、おかしいわねえ？ 天獄への入場許可なんて出していたかしら？」

分厚い唇に人差し指を当て、可愛らしく小首を傾げて見せるゲイ  
ビム。全然まったく可愛くない。

「……許可なんて取っていない。……姉さんは、どこ？」

言い逃れは不可能と判断したようで、ガブリエナはストレートに  
ルシーファの居場所を問う。

「うふふ、なかなか微笑ましい姉妹愛ねえ。だけど、残念ながらそ  
れが裏目に出てしまったみたい。ここは天獄の秘匿領域。熾天使の  
あなたと言えど、こんなところにまで不法侵入したとなれば、ただ  
では済まないわよおん？」

「……覚悟の、上……」

ガブリエナは天力の槍を顕現させる。

強引にあの化け物を排除して押し通るつもりだ。

「だけど、さすがにガブリエナ様を一人で相手するのは、あたしで  
も辛いわぁ。だ、か、ら……」

そのときだ。

突如として周囲に大量の模造天使が姿を現す。

「うふふ、言った通りここは秘匿領域よぉ？ 侵入者を排除するた  
め、これくらいの備えはしているわぁ」

ステータスを見る限り、ゲイビムは確かにガブリエナに匹敵する  
強さを持っている。

それに加えて、これだけの模造天使だ。

さすがに強引に押し通るにしても骨が折れそうだな。

「だが、こんなときこそ再びあいつの出番だ」

俺は召喚魔法を使った。

「はあ、やっと撒くことができたわ……ほんと、何だったのよ、あのつぺらぼうの不気味な天使は………って!？」

「ベルフェーネ、また頼んだぞ」

突然現れた大悪魔に模造天使たちが一斉に反応した。

さらにはゲイビムも、

「こんなところに悪魔!？ くつ、あの忌々しい輩を早く排除するわよ!」

意識が完全にベルフェーネへと向いた。

「何でこんな役目ばつか押し付けるのよおおおおおおおっ!？」

ベルフェーネが逃げ惑い、ゲイビムと模造天使たちが追い駆けている隙に、俺とガブリエナは先へと進んだのだった。

そしてやってきたのは、秘匿されていた真の最下層。  
そこには

「はあはあはあ！ もつと、もつとだつ！ もつとぼくを強く打擲してくれえええッ！！！」

「嫌あああつ、もう嫌ですわあああつ！ わたくし、男が喜ぶ姿なんて見たくないですのおおおおっ！！！」

全裸で四つん這いになったイケメン天使と、その尻に泣きながら鞭を入れ続けるルシーファの姿があった。

なんだ、これ……？



## 第102話 天使長…？

天獄の秘匿領域。

本当の最下層に辿り着いた俺たちが見たものは

「もつと、もつとだ！ もつとぼくを強く打擲してくれえつ、ルシーファアアツ！！！」

「嫌あああつ、もう嫌ですわあああつ！ わたくし、裸の男が喜ぶ姿なんて見たくないですよおおおつ！」

全裸で四つん這いになったイケメン天使と、その尻に泣きながら鞭を入れ続けるルシーファの姿だった。

「……ナビ子さんや。あの男天使、何者？」

『ここ天獄の支配者として正義を司り、天使長も務めるミカエルです。ルシーファ、ガブリエナの双子天使たちとは、三つ子の兄にあたります』

三つ子だったのかよ！？

「……兄……さん……？」

すぐ横でガブリエナが呆然と呟いている。

どうやら本当に兄らしい。

バチーン、バチーン、とルシーファが鞭を叩きつけるたびに、ミカエルは全身をビクビクと痙攣させ、恍惚とした表情となる。口端からは涎が垂れていた。

「あふあん！？ あああつ、今のはとてもいい鞭だったよおつ、ルシーファアアつ！」

「美少女ならともかく、何が悲しくて兄のお尻を鞭で打たなければいけませんのよおおおつ！？ もう嫌ですわあああつ！」

「手を止めると減刑対象にはならないぞ！？ 懲役500年の君ができる限り早くここから出るには、ぼくのために鞭を振るい続けるしかないんだよ！」

「こんなことをするくらいなら、いつそ死刑にして欲しいですわあああつ！」

ほんと、何なんですかね、これ？

「……見て、しまったわね」

背後から嘆息が聞こえてくる。

女装したおっさんにしか見えない天使、ゲイビムだ。

一度は囁作戦で撒いたのだが、俺たちに追い付いてきたらしい。

「……ゲイビム……知っていたの……？」

「……ええ。わたくしも、何度も鞭でおしばき差し上げたもの……」

おしばき差し上げるなんて敬語、初めて聞いたぞ。

「ミカエル様はとても責任感の強いお方……。天獄の管理に加えて、天使長という重責がきつと大きなストレスになっていたのだから、その結果が……」

アレという訳？

「ええ。いつしかミカエル様は、あんなふうには他者から痛めつけられることによってしか、日々のストレスを発散できないような身体になってしまわれたの……」

哀切な表情で語るゲイビム。

ていうか、ストレス云々以前に、元からドMのド変態だっただけじゃないのか……？

「さらにここ最近、あたしの鞭打ちですら、もう十分な刺激感を与えことができなくなってしまったのよ。筋力ならあたしも負けないけれど、天力の強さではルシーファ様は天界随一。鞭に目いっぱい天力を込めれば、きつと今のミカエル様でも満足できる痛みを与えて差し上げることができる……」

だから強制連行してきたというわけか。

『史上最高に下らない理由でしたね』

「だが分かる！ 分かるぞ！ 痛みに慣れてしまったら、もっと強い痛みが欲しくなる！ その欲望には抗いがたいものだ！」

『……マスターもドMのド変態でしたか』

とそのとき、地面に四つん這いになって尻を突き出していたミカエルが、俺たち招かれざる侵入者の存在に気づいたらしい。

「っ！？ が、ガブリエナ！？ な、なぜここにっ……？ くっ……ゲイビム！ 何をやっているんだ！？ あれだけここへの立ち入りを禁じていたというのに……っ！」

変態天使は愕然としたように目を見開く。

ゲイビムは怒鳴りつけられ、「ご、ごめんなさい！」と慌てて謝

罪した。

「……ああでも……こんな恥ずかしい姿を見られながら打擲されるのも……いいかもしれない……」

やばいぞ。こいつ、かなりレベルの高い変態だ。

「ああ！ ガブちゃん！ それにカルナ様も！ 助けにきてくださったんですねええっ！」

ルシーファも俺たちに気づいて声を上げる。

「……姉さん……助けにきた………つもりだったけど………今、猛烈に助けなくてもいい気がしている………」

「ちょ、何ですのおっ！？」

元から冷たい目をしているガブリエナだが、今はもはや絶対零度の視線を兄妹たちに注いでいる。

「ああああっ！ ガブリエナっ！ その蔑むような視線っ！ そんな目で見られると………逝くううっ！ お兄ちゃん、逝っちゃうううっ！ あああああああああっ！」

ミカエールは昇天してしまった。

「………帰る」

ガブリエナは踵を返した。

「ま、待ってください、ガブちゃん！ この馬鹿はともかく、わた

くしは無実ですわっ！ 鎖を！ この鎖を外してくださいな！ もうこんな毎日は嫌ですのおおおっ！」

「……外したら……反省して、もう二度と、天使にあるまじき行為をしないと、約束できる……？」

「できます！ できますわ！ こんな地獄の日々を思えば、何だって我慢できますの！」

「……」

迷う素振りを見せるガブリエナ。

ちなみにミカエルは白目を剥いて床に倒れ、ビクンビクンしている。

「……分かった」

ガブリエナは天力の槍で、ルシーファの力を封じている鎖を斬り裂こうとする。

「そうはさせないよ」

だがそんな彼女の前に立ちはだかったのは、いつの間にか起き上がったミカエルだった。

「……」

ガブリエナは無言でミカエルの股間目掛けて槍を突き出した。

「あふおっ！？」

股間へ直撃を喰らい、ミカエルが悲鳴を上げる。  
うわ、めちゃくちゃ痛そう……。

「はあはあ……い、今の……今の、もう一回……」

もはや痛みが完全に快感になっているらしい。

ミカエールの要求に、ガブリエナは「……死ね」と呟きながら、もう一発、今度は先ほどよりさらに強烈な一撃を見舞った。

「ぐおおおっ……」

さすがの変態もこれは効いたようだ。

口から泡を吹き、股間を抑えて蹲る。

その隙にガブリエナはルシーフアを拘束していた鎖を断ち切った。

「た、助かりましたの、ガブちゃん！ あとついでにカルナ様！」

俺はついでか。

「……姉さん、すぐに……脱出する」

倒れたミカエールを放置し、俺たちは秘匿領域を出た。

「……はあ、はあ……ふ、ふふふ……逃がしはしないよ、ルシーフア、ガブリエナ」

股間を抑えながらミカエールは立ち上がった。  
すぐ近くで待機していた巨漢の天使に命じる。

「ゲイビム、全力で脱走を阻止するんだ」

「畏まりましたわ」

恭しく応じるゲイビム。

「……ふふふ、いくらぼくの妹たちとは言え、この天獄から脱走することは絶対に不可能だ……。二人とも捕まえて、ぼくのために永遠に鞭を振るってもらうよ……」

不敵な笑みを漏らすミカエルは、自分が二人に打擲される未来を思い描いて、ビクビクンツと身体を震わせるのだった。

第103話 ダメだこいつ、早くどうにかしないと……

天獄一階。

獄門を入ってすぐのところにある巨大な広間に、この天獄にいるほぼすべての看守天使と模造天使たちが集っていた。

天獄内では転移魔法を使うことはできない。

ゆえに脱走しようとすれば、この場所を通るしかなかった。

予想通り、やがてこの一階の迷宮フロアの方から双子の天使たちが姿を現す。

「遅かったねえ、ルシーファ、ガブリエナ」

「……っ！ 兄……さん……」

ミカエルは極秘のルートを通って先回りし、妹たちを待ち構えていたのだった。

「ここまで何の妨害も無いからおかしいとは思ってましたが、ここで待ち伏せしていたんですわね……」

「ふふふ、幾ら君たちと言えど、ここを突破することはできないだろう？」

忌々しげに顔を歪める妹へ、ミカエルは口端を吊り上げて笑いかける。

「さあ、お前たち。遠慮はいらない。彼女たちを捕えるんだ」



ミカエールの命令に応じて、まずは模造天使たちが一斉に動いた。その数は全部で五千体以上。

一体一体の戦闘力こそ姉妹たちに遠く及ばないが、圧倒的な数がそれを覆すだろう。

そのときだ。

迫りくる模造天使の大群を前に、見たことのない天使が立ちはだかったのは。

「ゲイビム、何だあの男は？　そう言えば、先ほどもいたようだけれど」

「分かりませんわぁ。あたしも知らない顔ですし」

傍にいた看守長のゲイビムに確認するが、彼女（？）も首を振った。

「まさか、ガブリエナの彼氏……っ？　くっ、だとしたら許さんぞ！　あの天使だけは殺してしまえ！」

天使長ミカエールはシスコンでもあった。

……変態属性が多すぎて渋滞を起こしている。

先陣を切った模造天使たちが、今まさにその謎の男天使と激突しようとしたとき。

その天使が拳を前方に突き出した。

直後、巻き起こった凄まじい衝撃波が、五十体を超す模造天使たちを一瞬にして粉々にした。

「……は？」

予想だになかった光景に、ミカエルは思わず頓狂な声を漏らす。

目の前で他の模造天使たちが瞬殺されるも、感情を持たない彼らは怖れることなく命令を忠実に果たそうとする。

だがその男天使が右足を振るうと、それだけで発生した音速を軽く越す衝撃波が、模造天使たちを文字通り一蹴してしまう。

目標に到達することすらできず、次々と粉碎させられていく模造天使たち。

瞬く間に数が減っていく。

その信じがたい光景に怯えたのが、意志のある看守天使たちだ。

こうした事態に対処できるよう、いずれも腕に覚えのある天使たちばかりだったが、その場でただ呆然と立ち竦むことしかできない。近づけば、自らもあの模造天使たちと同じ末路を辿るだろうと誰もが確信していた。

「うふふ、なかなかやるじゃない？」

そんな中、妖艶（不気味）で好戦的な笑みを浮かべ、ゲイビムが前に出た。

筋肉ムキムキの看守長は、謎の天使に真正面から突っ込んでいく。

「ラブリーアターツック」

いきなり出た。彼女の必殺技だ。

技と言っても、天力と筋力を全開にした単なる全力のタックルである。

ただしキス顔での。

彼女が言うには、魅惑のキス顔が相手を回避不能状態にするのだという。

美しい天使とキスができるのなら、死んでもいいと誰もが思ってしまうというのだ。

……本当はそのキス顔の悍ましさに恐怖し、身を竦ませて動けなくなっているだけなのだが。

「す、スキル 反転・極っ」

「っ!？」

謎の天使まであと数メートルにまで迫ったとき、突如として彼女の突進の向きが変わった。

まったく同じ速度で、通ってきた軌道を完全に逆走していく。

あのタツクルの最大の弱点は、すぐには止まることができないということ。

ゲイビムはそのまま看守天使たちのところへと突っ込んでいった。ぎゃああああっ！ ひiiiiiiiiっ！ という阿鼻叫喚の悲鳴が轟くが、天使たちは前述の理由により逃げることもできない。

「おえええ……さすがに今の攻撃は危なかった……ある意味で……」

一体ゲイビムに対して何をしたのかとミカエルは驚く一方で、当の謎天使は顔を青くしてえずいていた。

「さすがですわ」

「……すっい……」

妹たちがその謎の天使を称賛している。

シスコンのミカエルにとって、それは面白くない。

「いいだろう。このぼくが直接、相手をしてやろう」

どうやらついにあいつが自ら出てくるようだ。

イケメン天使が煌々とした輝きを放ちながら近づいてくる。

その神々しい姿は、さつきまで妹に尻を鞭で叩かれて喜んでいた奴とは思えない。

ミカエル 824歳

種族：天使族

レベル：

スキル：天力・極

生命：40000 / 40000

魔力：15000 / 15000

筋力：4000

物耐：4000

器用：4000

敏捷：4000

魔耐：4000

運：4000

さすがは天界の頂点に君臨する天使長だ。

ルシーファやガブリエナ以上のステータスである。  
さらにミカエールは、その手に巨大な弓を顕現させた。

・天弓ジャスティス：ミカエール専用の弓。 攻撃力＋2000 天  
力倍化。

「墮天使の脱獄を補助した罪で、これより貴様を処刑する」

ミカエールはそう判決を下すと、天弓の弦を引き絞った。  
放たれたのは無数の光の矢。

さながら流れ星のシャワーだ。

それらは獲物を逃がさぬとばかりに網のように大きく広がりながらも、凄まじい速度で一斉に襲来する。

反転・極 スキルなら矢のベクトルを変えることができるだろう  
が、一度に複数の現象に対して使用することはできない。

あれだけの数の矢となれば対処不可能だ。

「ま、 反転・極 以外にも幾らでも防御手段はあるけどな」

俺は天使の翼をはためかせ、自らその矢の雨の中へと飛び込んで  
いった。

「 絶対防御・極 発動」

次の瞬間、俺の身体に光の矢が直撃する。  
しかし俺はまったくの無傷だ。

絶対防御・極 は、一定時間あらゆる攻撃を防いでくれる防御系  
の最強スキルである。

次々と光の矢が俺を貫かんと襲い掛かってくるが、痛くも痒くもない。

ただ……めちゃくちゃ眩しいな。

気づけば視界が光に覆い尽くされていた。

目がちよつとチカチカするぜ。

それも数秒程度のことだった。

視界が晴れたときには、驚愕のあまり口をぽかんと開けたミカエールの姿が目の前にあった。

「ば、馬鹿な……ぼくの必殺技が……」

愕然とするミカエールへ肉薄し、その顔に拳を叩き込むのは簡単なことだった。

「ひでぶっ!？」

顔面<sup>イケメン</sup>を凹ませ、間抜けな悲鳴とともに吹っ飛んでいくミカエール。

『マスター、相変わらずイケメンには容赦しませんね』

天使長がぶっ飛ばされるといふ信じがたい光景を前に、看守天使たちは言葉を失っていた。

その隙に、俺たちは天獄を脱出しようと出口へと向かう。

すぐ脇を素通りされても、俺たちを止めようとする者は誰一人としていなかった。

「ミカエル様！ 無事かしらあ！？」

ゲイビムが慌てて駆け寄った先には、壁にめり込んだ天使長の姿があった。

「……ぐ、はっ……」

どうにか生きてはいるようだ。  
壁から這い出してくる。

「み、ミカエル様……」

ゲイビムが息を呑んだのは、謎の天使に殴られた天使長の顔。  
天界一の美男使と謳われたそれが、見るも無残なものへと変わり果てていたのだ。

元が美しかったからこそ、あまりにも痛ましい。

もちろん天使の自然回復力があれば、すぐに治るだろう。  
しかし心に刻まれた屈辱はそうはいかない。

「……ゲイビム」

「は、はいっ！」

いつになく真剣な声で名を呼ばれ、ゲイビムは筋肉を震わせて背筋を伸ばす。

一体何を命じられるのだろうか、息を呑んでいると

「ぼくはついに見つけたよ！ 彼だ！ 彼こそが、ぼくをかつてな

い高みに逝かせてくれる存在に間違いない！ ああ！ 今すぐ彼に鞭で打たれたい！ ぼくをもっともっと痛めつけて欲しいいいいい！！

ダメだこいつ、早くどうにかしないと……。

ゲイビムは自分のことは棚に上げて、内心でそう呟いたのだった。



## 第104話 三つ子の魂百までのな

「ただいまー」

「ただいま、帰りましたわ」

俺はルシーファを連れて天界から地上へと帰ってきた。

と言つても、俺の屋敷 スカイアイランドにある竜王の城だが。

竜王になってから、ここは俺の家になっていた。

兼、食堂と言つてもいいかもしれないが。

今日も俺の分身が作った料理を食べるため、大勢のドラゴンたちが訪れていた。

帰還した俺を見つけて、フィリアが嬉しそうに駆け寄ってくる。

「パパ！」

「フィリア。ごめんな、俺が居なくて寂しかっただろう？」

「ううん！ へいきだった！ パパいっぱいいるもん！」

…… あれは俺の分身であつてパパ本体じゃないからね？

「お帰りなさい」

「む、帰ってきたのか」

ティラとエレンも出迎えてくれる。

「……る、ルシーファさんも」

「ご心配は要りませんわ、ティラ様」

微妙に頬を引き攣らせるティラに、ルシーファは天使の笑みを浮かべて告げた。

「わたくし、しっかりと天界で更生してまいりましたの。今後一切、ティラ様にご迷惑をかけず、天使に相応しい振る舞いをすることを誓いますわ」

「えっ、ルシーファさんが真面になっています!？」

ティラは信じられないといった顔をする。

一方のルシーファは、天獄で味わった苦痛を思い出したのか、遠い目をして、

「……もう二度と、あんな目には遭いたくないですの……」

よっぽど辛かったのだろう。

それにしても、俺はあの天使長こそ早くどうにかするべきだと思うのだが……。

「……色々あったけど……今回の件で……姉さんは、ちゃんと反省したらしい……」

と、念を押したのはガブリエナだ。

元々、ルシーファを天界に強制連行したのは、双子の妹である彼女である。

更生された姉を見届けるため、わざわざここまで付いてきたのだった。

ガブリエナが俺の方を見てくる。

「……カルナ……礼を言う……ありがとう……」

ぼそぼそと恥ずかしげにそう呟いてから、彼女は翼を広げて天界へと戻っていった。

「いやいや、そこはお礼としてキスの一つでもしていく場面じゃない？」

「……ぜひとも今度はカルナさんを更生してもらいたいところです」

そう半眼でばやいてから、ティラはルシーファの方へと向き直った。

御淑やかに佇む天使らしい天使の姿に、彼女は満足げに頷きながら、

「それにしても、まさか本当にルシーファさんが真面になって戻ってくるとは思いませんでした。さすがは天界ですね」

そんな彼女には悪いが、俺ははっきりと断言する。

「いやいや、何を言ってるんだ、ティラ？ 変態が変態を卒業できるわけないだろ？ しかもこんな短期間で」

「へ？ ど、どういうことですか……？」

そのときだ。

天使らしい整った笑みを浮かべていたルシーファの表情が、急に、にへら、とだらしないやらしいものへと変貌する。

さらに彼女は無防備なティラに抱き付くと、腹部に思いきり顔を埋めた。

「ぬほおおおおおおっ！ ティラ様のおいしいいいいいっ！

久しぶりに嗅げましたわああああああっ！ すばらっ！ すらですわああああっ！ これだけでわたくし、逝ってしまいそうですのおおおおっ！」

こういうことです。

「ぜんっぜん、更生してないじゃないですか      ツ！！！！」

さっきまでは妹を偽るためのただの演技でした。

「ガブちゃんなんてチヨロイですわあっ！ これでもう、わたくしたちの愛を邪魔する者はいませんの！ ああああっ、ティラ様っ、脇の匂いも嗅がせてくださいませえええっ！」

「ぜったいに嫌ですッ！ サンダースパーク！」

「あばばばばっ！ …… 良いっ、良いですわああああっ！ やっぱり痛めつけるより、痛めつけられたいのですのおおおっ！」

このDM属性……やっぱ兄妹だな……。

「ガブリエナさん！ お願いですからこの変態天使、早くまた天界に連れ帰ってください      いッ！！！！」

ティラの懇願の悲鳴が空に響き渡った。

「……ん？ そう言えば、何か忘れてる気が……？」

その頃、天獄では。

「あばばばばつ！？ な、なんでこのあたしがこんな目に遭わなくちゃいけないのよおおおつ！？ あばばばばつ！？」

公爵級悪魔ベルフェーネが、全身に電撃を浴びながら悲鳴を上げていた。

「そう言えば、何か忘れている気が……？」

『今回、マスターに囷役として利用された公爵級悪魔のことでは？』

「あつ」

そう言えば、ベルフェーネを天獄に放置したままだった。  
たぶん今頃は捕まってるだろうな……。

「サモン  
召喚」

「あばばばば

っ！？」

召喚してみると、髪の毛がちりちりになったベルフェーネが出現した。

どうやら天獄の地下四階に入れられていたらしい。

「こ、今度という今度は、許さないんだからああああつ……！」

怒ったベルフェーネが腐蝕の風を纏って躍り掛かってきた。

「うう……だから、何であなたの方があたしより強いのお……」

一分後、返り討ちにされたベルフェーネは膝を抱えて蹲っていた。

「……マスター、容赦ないですね。むしろ今のは大人しくやられておくべきシーンでは？」

「ばかつ。そんなことしたら美少女悪魔の泣き顔を見れないじゃないか！」

「下衆・極……」

そんなスキルはありませんよ？

「……ほんと、踏んだり蹴ったりよ……。こんな変態人間に隷属させられるわ、領地はどんどん少なくなっていくわ……。公爵から格下げされるのも時間の問題ね……。ああ、いつそもう、あのまま天獄で死なせてくれればよかったのに……。ふふふ、天使どもに殺されるなんて、あたしにはお似合いの屈辱的な死に方よね……」

「……お前も苦勞してんだな……」

「誰のせいだと思ってるのよ!? 同情するくらいなら領地でも寄

「こしなさいっての！」

同情するなら領地くれって、これまた随分とぶっ飛んだ要求だな。

「まあ別にいいけど。領地くらい」

「えっ！？」

## 第104話 三つ子の魂百までのな（後書き）

活動報告にも書きましたが、書籍化が決定しました！

GAノベル様にて10月刊行予定です。よろしく願います。



## 第105話 領土争い

「へー、ここがお前の城か。なかなか立派じゃねーか」  
「当然よ。これでも公爵級悪魔なんだから」

そう自慢げに胸を張るベルフェーネに案内されて、俺は魔界にある彼女の城へとやって来ていた。

いかにも悪魔らしい装飾が随所に施され、雰囲気は禍々しい。  
広くて立派な城なのは確かだが、あまり住みたくはないな。  
まあ悪魔にとっては住み易いのもかもしれないが。

もちろんそれだけでなく、凶悪なトラップや魔物も配備されていて、さながらゲームのラストダンジョンである。

「ぎゃう!？」

「って、何でお前がトラップ引っ掛かってんだよ」

「う、うるさいわね! 定期的にトラップの配置が変わるから覚えられないのよ!」

お尻に刺さった毒矢を抜きながら叫ぶベルフェーネ。  
涙目になってはいるが、さしてダメージはなさそうだ。

ちなみに今の俺は例のごとく 変身・極 スキルで悪魔へと姿を変えている。

これなら人間だとバレることはない……のだが、そもそも城内に全然他の悪魔を見かけないな。

そんなことを思いながら城内を進んでいると、ようやく第一悪魔

と遭遇した。

「お帰りなさいませ、ベルフェーネ様」

そう言つて恭しく頭を下げてきたのは、青い髪の美女悪魔だった。紳士服に身を包んでいて、それが彼女の長身と伶俐な顔つきにとってもよく似合っている。

男装美女キターーーーーッ!!!!

「留守番ご苦労だったわね、ミランジュ」

と、ベルフェーネが労いの言葉を投げかける。

ミランジュと呼ばれた美女悪魔は一礼してから、その青い瞳を俺の方へと向けてきた。

「こちらの方は？」

「こ、こいつは、えっと……あ、あたしの新しい眷属のカルナよっ！」

いや、何で俺がお前の眷族なんだよ。

逆だろ、逆。

ベルフェーネが慌てて耳打ちしてきた。

「ミランジュはお爺様の代からあたしの家に仕えている執事なのっ。……あ、あたしがあんたに隷属させられているなんて、とてもじゃないけど言えないわよっ」

「ほほう、つまり間接的に俺は彼女のご主人様という訳だな。そのことを心と身体にしっかり分かせてやらねば……グフフフ」

「やっぱりこんな奴、連れて来るんじゃないかった……」

「なに言ってたんだ。お前が領地が欲しいって言ったんだろ？」

「言っただけ！ ほ、ほんとに取り戻してくれるんでしょうね？」

俺たちがひそひそとそんなやり取りをしていると、ミランジュが「ごほん」という咳払いとともに割り込んできた。

「ベルフェーネ様、ご報告がございます」

「ほ、報告？」

「先日、傘下のマルコーキ伯爵が離反されました」

「えっ、マルコーキまで！？」

ベルフェーネは悲鳴じみた声を上げた。

「レヴィア公爵傘下に鞍替えしてしまったようです。これで爵位持ちの離反は五人目。我が公爵家の勢力圏は先代のときと比べて、これで三分の二以下にまで減少してしまいました。このままでは近いうちに侯爵に格下げされる可能性があります」

「うぐ……」

魔界では、自らの領地を持つ悪魔に爵位が与えられるという。

そしてその位は、主に領地の広さに応じて決定する。

下から男爵、子爵、伯爵、侯爵、公爵である。

そして爵位ではないが、公爵のさらに上、魔界の頂点に君臨しているのが魔王だった。

魔王領は魔界西部の大半を占めているらしく、多数の爵位持ち悪魔を従えているという。

それに次ぐ公爵級は、ベルフェーネを含めて全部で六人いるらしい。

それぞれ大規模な領地を治めているだけでなく、彼らもまた下位の爵位持ち悪魔たちを多数その支配下に置いていたようだ。

ベルフェーネの領土は魔界東部のほぼ真ん中にあつた。

三方を他の公爵級に囲まれているという立地の不利はあるものの、それでも長きに渡って東部最大の領地を誇り続けてきたという。名のある爵位持ち悪魔も大勢、その傘下に入っていたそうだ。

だがそれがここ最近になって、続々と離反者が現れて勢力圏が瞬く間に減りつつあるという。

「ていうか、全部あんたのせいよ！……あんたがあたしを勝手に呼び出したりなんてするから……その隙を突かれて……」

「いや俺はあんまり関係ないだろ？ お前が領主になった百年前からずっと領地が減り続けてるんだから、どう考えてもお前自身の能力の問題だよな」

「う、うるさいわね！？ 人が考えないようにしてることに、平気で突っ込んでこないでよ！」

「……そこはちゃんと自省しろよ」

魔界では何千年にも渡って、常に激しい領土争いがなされ続けてきたという。

しかし争いというのは、負けた方はもちろんのこと、勝った方にとっても大きな負担になる。

せっかく領土を奪ったというのに、長引く戦いで土地や住民が疲弊してしまつては、得られるものも少ない。

そんな訳で、魔界における領土争いはいつしかスマートなものへと進化してきたのだとか。

爵位持ちの悪魔なら必ず有している“拠点”。

侵略する際にも、必ずそこしか攻撃してはならないことになっているのだという。

そして拠点を落としさえすれば、領地を丸々得ることができるとか。

もしこのルールに違反し、拠点以外の場所で戦った場合は、魔界中を敵に回すことになるらしい。

ゆえに戦いは両陣営の拠点のみという、かなり限定した場所でのみ勃発しない。

お陰で被害を最小限に抑えることに成功している。

「むしろ人間より悪魔の方が進んでるな」

『もつとも、何千年という争いの歴史の果てにようやくその形に落ち着いたのですが』

ともかく、領地を拡大させるためには、他の爵位持ちの拠点を陥落させればいいということだな。

「レヴィア公爵だっけ？　じゃあ、とりあえずそいつの拠点から潰すか」

「ちよ、いきなり無理でしょ！？　公爵級の拠点に飛び込むなんて、自殺行為よ！」

訊けば、爵位持ち悪魔の拠点は、ほぼ例外なく超難度のダンジョンになっているとか。

もちろんこのベルフェーネの城もそうだ。

言わば、相手にとって絶対的に有利なホーム。

拠点に攻め込んで勝つためには。

二階級上であるか、もしくは同格の悪魔が三体協力するか。

どうやら最低でもそれだけの戦力が必要になるらしい。

つまり同格の悪魔の拠点に単体で攻め入っても、まず勝ち目はないということ。

しかも爵位持ち悪魔にとつての最大戦力は、自分自身。

自ら敵陣に攻め込んでしまえば自陣は手薄になり、その間に他の悪魔に拠点を攻められる可能性もあるという。

「なるほどな」

「分かってもらえた？ 領地を奪うのはあんたが思うほど簡単じゃないのよ。まずは下位の爵位持ちから順番に……」

「分かった分かった。よし、レヴィア公爵とやらの拠点へ案内してくれ」

「全然分かってないじゃない!？」

「大丈夫大丈夫」

「何が大丈夫なのよ!？」

「パツと行ってパツと潰してパツと帰ってくればいいんだよ」

「……ダメだわ、こいつ……。期待したあたしがバカだったわ……」

頭を抱えて座り込むベルフェーネ。

「心配するなつて。公爵って言ったって所詮はお前と同格だろ？  
だったら楽勝楽勝」

「その言い方すつごくムカつくんだけど!？」

## 第106話 水没魔城

### 公爵級悪魔レヴィア拠点『水没魔城』

その最奥に位置する玉座に、妖艶な美女が腰掛けていた。

柔らかな笑みを浮かべる美貌に、少し青みを帯びた透き通るような肌。

それを局所的に覆う煌びやかな鱗は、さながらドレスのようだ。

退屈を弄ぶかのように、周囲を遊泳する色とりどりの魚たちをうつとりと眺めている。

その幻想的な光景はまるで絵画のようだった。

しかし彼女こそが、ここ魔界において魔王に次ぐ規模の領地を治めている最上級悪魔の一角。

この拠点の主、公爵級悪魔のレヴィアである。

「レヴィア様！」

「あら、どうしたの？ そんなに慌てて」

突然割り込んできた騒々しい部下の声に、彼女はのんびりと応じた。

「大きな魔力がこの城に近づいて来ています！」

「大きな魔力？」

「恐らく公爵級かと！」

まさか、公爵級悪魔が自ら攻めて来たのか。  
さすがの彼女も表情を険しくした。

通常、悪魔の拠点を攻める場合、侵攻側は最低でも相手の三倍の戦力が必要とされている。

それは魔界の常識だ。

ゆえにこの拠点に攻めてきたとなれば、当然ながらそれだけの戦力を用意しているということになる。

だが果たしてそれだけの戦力を集めることが可能だろうか、レヴィアは思案する。

近年、彼女は次々と新たな爵位持ち悪魔を配下に加えており、勢力を伸ばしつつあった。

全部で六体いる公爵級悪魔の中では、恐らく今や一、二を争う戦力を有するだろう。

まさか、公爵級同士が手を組んだのか？

あり得ないことだ。

なぜなら彼らは皆、プライドの塊。

そして長年に渡る犬猿の仲である。

協力し合うなど、絶対にないと言い切れる。

あるとしたら、それは魔王が魔界全土への侵略に乗り出した場合くらいだろう。

「相手の勢力はどれくらいかしら？」

「そ、それが……その大きな魔力一つしか、感知できていないのです」

「……どういうこと？」



レヴィアは首を傾げた。

「部下も何も引き連れず、公爵級悪魔が単体で近づいてきているということ？」

「お、恐らく……」

どうにも理解しかねる話だった。

あるいは侵攻が目的ではなく、対談を求めているのか？  
しかしそれならあらかじめ連絡を寄こすはずだ。

いきなり単身で拠点に近づいてくるなど、宣戦布告と取られても仕方がない行為である。

「何を考えているのか知らないけれど、一体どの公爵級かしら……？  
もしかして落ち目のベルフェーネあたりが自棄になったとか？  
ふふふ、それならあり得ないこともないかしら？」

頭の悪い公爵級の顔を思い出して、愉悦交じりに微笑むレヴィア。  
他ならぬ彼女の手によって、ベルフェーネは徐々に領地を剥ぎ取られつつあるのだった。

「へっくしょーん！」

と、ベルフェーネが盛大なくしゃみを炸裂させた。

「誰かあたしの噂してるのかしら……？」

鼻を嚙りながら呟く。

「おつ、もしかしてあれか？ レヴィアって悪魔の拠点がある湖ってのは」

「……そうよ」

ベルフェーネの案内を受けてやってきたのは、広大な湖。魔界にしては随分と綺麗で水が透き通っている。

その水底に巨大な城が見えた。

あれこそが公爵級悪魔の根城だという。

「……ほ、本当にあそこに突入するつもり？」

「今さらなにビビってんだよ」

「最初から拒否ってたでしょうが！？ ていうか、あんたは召喚魔法で勝手にあたしを呼び出すんだから、付いていくしか選択肢がないでしょ！」

ベルフェーネは一頻り喚いてから、

「……見ての通り、あいつの拠点は水の中。あたしなら数時間くらいは息を止めてられるけど、どう考えても不利よ。ていうか、そもそも人間のあんたはって何でいきなり脱ぎ出してんのよおおっ！？」

「いや、服が濡れるのは嫌じゃん？」

俺は全裸になっていた。

パンツも脱いですっぽんぽんである。

「せめてパンツくらい履きなさいよ!？」

ベルフェーネは顔を手で覆いながら叫ぶ。

しかし指と指の隙間からちらちらと俺の股間を見ていた。

やれやれ仕方ないな……と肩を竦めつつ、俺は水着を履いた。  
ブーメランパンツである。

「ほら、お前も早く着替えろ」

「あたしにもそんな変態みたいな恰好しろっていつの!？」

「全国のブーメランパンツァーに謝れ」

『……ブーメランパンツァーって何ですか、マスター?』

まあ確かに見た目は明らかにヤバイけどな。

なのに競泳用として定着しているせいか、誰も批判できない点が  
ブーメランパンツの素晴らしいところだと思う。

「女性用の水着があるから。少しでも水の抵抗が無い方がいいだろ」

「し、仕方ないわね……って、付いて来ないでよ!？ 着替えるんだから!」

岩陰で水着に着替え、ベルフェーネが姿を見せる。

ちなみに最初はマイクロビキニを渡したのだが、さすがにエレン  
のように騙されて着てしまうなんてことはなかった。残念。

「これでもまだ布面積少ないんだけど……」

ビキニ姿のベルフェーネが居心地悪そうに身を擦っている。

「てか、悪魔なんだから普段からもっと大胆で扇情的な格好をして  
てもいいと思うんだが」

「あたしを淫乱系の悪魔なんかと一緒にしないでよ！」

どうやら悪魔でも貞操観念はそれぞれらしい。

さらに俺は前に人魚たちも使っていた魔法を使用する。

これがあれば水中でも呼吸ができ、水圧の影響を最小限に抑え、  
さらには水に濡れることも防いでくれるのだ。

「ちよつ、そんな魔法があるなら水着に着替える必要なんてなかつ  
たわよね！？」

「さあ出発だ！」

「ねえ！　ねえってば！？」

俺はベルフェーネの手を引いて湖へと飛び込んだ。

城は厚い外壁と結界に護られていて、正面の門からしか入場が許  
されていないようだ。

壁も結界も破壊できなくはないが、ここは大人しく入り口を通る  
としよう。

門扉はいらつしゃいませとばかりに大きく開かれていた。

城内に誘い込んだ方が、むしろ対処しやすいということなのかも  
しれない。

探知・極　でトラップに注意しつつ、俺たちは城内へと突入した。

内部はやはりダンジョンのようになっていた。  
最初に俺たちを出迎えてくれたのは広大な空間。

色とりどりの珊瑚が群生する、珊瑚の庭園とも言うべき美しい場所だ。

だがジャングルめいたここは、侵入者を排除しようとするハンターたちにとって、実を隠しながら攻撃できる絶好の場所でもある。

近くを通りかかったとき、珊瑚の中に身を潜めていた魚　ピラニアのような鋭い牙を持っている　が一斉に飛び出してきた。

「無駄よ」

ベルフェーネの身体に噛み付いた途端、一瞬にして身が腐って骨だけになっていくピラニア（っぽい魔物）たち。

腐蝕・極　スキルを持つ彼女は、ありとあらゆるものを腐らせ、蝕むことができる。

あんな風に直に触れるなど自殺行為だ。

「エンガチヨ」

「あたしは別に汚くないわよ!？」

一方、俺の方に襲い掛かってきたピラニアたちは、自慢の牙があつさりと折れていく。

物耐が高過ぎる俺の肌には噛み付くことすらできないのだ。

「しかし珊瑚にピラニアって、生態系めちゃくちゃだな」

さらにはピラニアの群れの突撃が合図だったかのように、槍のように尖った口部を持つダツっぽい魔物の群れや、電流を身に纏ったナマズっぽい魔物の群れ、毒を持ったヒトデっぽい魔物など、次々と襲い掛かってきたが、俺たちの敵ではなかった。

「おつ、今度はデカいのが出てきたぞ」

そんな俺たちの前に続いて立ちはだかったのは、有名な巨大イカのモンスターだ。

「クラーケンよ！」

五匹いる上に、どいつも全長二、三十メートルはある。

「触手プレイキタアア！？」

「来ないわよ！」

「確かに、さすがにあの大きさの触手は入らないか……」

「どこに入れる気！？」

## 第107話 レヴィアたん

クラーケンをはじめ、次々と現れる海のモンスターを撃破しながら、俺とベルフェーネは『水没魔城』を順調に突き進んでいた。

やがて俺たちが辿り着いたのは、一際美しい珊瑚が群生する円形の巨大な空間だった。

「久しぶりねえ、ベルフェーネ。ふふ、まさか直接わたしの拠点に乗り込んで来るなんて」

頭上から声が響いてくる。

視線を向けると、七色に煌めくクラゲの上に座る悪魔の姿があった。

「っ！ レヴィア！」

ベルフェーネが忌々しげに叫ぶ。

「あいつがこの城のボス、公爵級悪魔のレヴィアか」

ふわふわと浮遊するクラゲの椅子に腰かけ、優雅にお茶を口に運んでいる。

ていうか、物凄い美女である。

おっとりとした美貌に、長身でグラマラスな身体。服は身に着けておらず、自前の鱗が辛うじて局部を隠している。

とてもエロくて最高です。

「ふん！ どうやらここが最深部のようね！ 思っていたより大したことないじゃない、あんたの城！ これならあたし一人でも十分攻略で来たわ！」

ベルフェーネが勝ち誇ったように宣言する。  
しかしレヴィアは悠然と微笑み、

「だって、せっかくあなたがここまで来てくれたのだから、わたしがお迎えしてあげないと失礼じゃないの」

「そんな風に余裕ぶつていられるのも今の内よ」

「あら？ ふふふ、その言葉、そっくりそのままお返しして差し上げるわ」

そのときだった。

それまで身を潜めていたモンスターたちが一斉に姿を現す。

「ちよっ、なんて数なのよっ！？ これだけであたしの拠点の倍以上はいるじゃないの！？」

海棲のモンスターだけでなく、レヴィアの配下と思しき悪魔もいる。

俺たちをこの場所で待ち構えていたのだろう。

「ここまで辿り着けたのはどうしてかしら？ それはこの場所で確実にあなたを仕留めるために温存していたからよ」

「くっ……」

「本当にお馬鹿ねえ、ベルフェーネは。そんなだから味方が愛想を尽かして離れていくのよ？ それにしても、自暴自棄になつて突入してきたのかと思ったら、本気で攻略しようとしていたなんて……ふふっ……ふふふっ……ごめんなさい、あまりにも可笑しくて……」



レヴィアはお腹を抱えて笑い始めた。  
笑い方まで色っぽい。

「それにあなたの拠点に、すでにわたしの傘下にある爵位持ちたちを向かわせているところよ？ 主が不在で、一体どうやって防衛するつもりかしら？」

「う、うるさいわねっ！ あたしだって何の勝算もなしに乗り込んできた訳じゃないっての！」

「あら？ 何か秘策でも？」

「あるわ！ こいつよ！」

ベルフェーネが俺を指差してきた。

レヴィアは今初めて気が付いたというように、その視線を俺へと向けてくる。

「そのいかにも弱そうなあなたの手下の悪魔が？」

「そ、そうよ！」

おい、俺は手下じゃねーぞ？

「大した魔力は感じないのだけれど……」

ちなみに俺は今、 変身・極 スキルで悪魔へと姿を変えている。

「そうよ！ ほら、見せてやりなさい、あなたの力を！ あのム力つく女をぶっ殺してやるのよ！」

「だが断る」

「何でよおおおおおおおっ！？」

俺はベルフェーネとレヴィアを見比べながら言った。

「あっちのお姉さんの方が好みだからな。俺、これからは彼女のために頑張ることにする」

「ふっざけんなこのクソ野郎があああああああつ!!!」

ベルフェーネが叫ぶ。

一方、レヴィアは俺のラブコールに対して、

「生憎、あなたにはこれっぽっちも興味がないわ?」

マジか……。

俺はその場に座り込み、膝を抱えた。

「何でそんなにショック受けてんのよ!？」

ベルフェーネは大きく溜息を吐いて、

「この拠点を落としたら、あの女をあんたにくれてやるわ!　だから手伝いなさい!」

「よし、手を貸すぜ」

「変わり身早っ!？」

俺は立ち上がった。

俺、レヴィアを配下にしたら、「レヴィアたん」って呼んで可愛がるんだ……。

レヴィアが妖艶に微笑み、配下たちに命を下した。

「やってしまいなさい、あなたたち」

直後、圧倒的な数の敵勢が一斉に襲い掛かってきた。

数十分後。

「う、嘘、でしょう……？」

目の前に広がる光景が信じられないとばかりに、レヴィアが愕然とそんな声を漏らした。

自信満々だった先ほどまでの様子は見る影もない。  
それもそのはず。

あれだけいた配下たちが今や一体残らず戦闘不能に陥り、美しい珊瑚の空間はまさしく死屍累々といった有様へと変わり果てているのだから。

「あー、さすがにこれだけの数を相手にするのは骨が折れたな」

俺はこきこきと首を鳴らす。

「な、何者よ、その悪魔は！？ わ、わたしの配下をほとんど単身で全滅させるなんて、どう考えてもあり得ないわ！？ そんなことができるとしたら魔王くらいじゃないの！」

レヴィアが声を荒らげ問い詰めてくる。

「……いや、あたしとしても、さすがにここまでは予想外だったんだけど……。ほんと、何なのあんな……？」

ベルフェーネも啞然としていたが、先ほどの手下設定を思い出したのか、すぐに取り繕って、

「どうよ！　これがあたしの眷属の力なんだから！」

「う、嘘をおっしゃい！　あなたより明らかに強いじゃない！　なぜあなたなんかに隷属しているのよっ？」

「そ、そこはほら、えっと……そ、そう！　あたしの魅力のお陰よ！　こいつはあたしにベタ惚れなの！」

「さっきわたしの方が好みだって言っていたけれど？」

「あああ、あれは違うのよ！　あ、あたしにちよつと意地悪するこ  
とで、気を引こうっていう魂胆だったのよ！」

俺はメンヘラ彼女かよ。

「と、とにかく！　これであたしの勝ちね！　この拠点は今日から  
あたしのものよ！」

ベルフェーネの宣言に、レヴィアはしばし逡巡する素振りを見せる。

だがすぐに溜息とともに、

「……そうね。どうやらわたしの負けのようね」

まだ最大戦力の彼女自身が残ってはいるが、それでも俺には勝てないと判断したのだろう。

「ベルフェーネ。もう一つ、教えてほしいことがあるわ」  
「何よ？」

「その彼の求愛に、あなたはちゃんと答えてあげているのかしら？」  
「っ！？ こ、答えるって……」

「どうなの？」

「あああ、あたしはそもそも男になんか興味ないし！」

「やっぱり。じゃあ、あなたもわたしと同じなのね」

「同じ……？ 何のことよ？」

首を傾げるベルフェーネに、レヴィアは断言したのだった。

「決まってるでしょ？ あなたもわたしと同じレズビアンということよ」

「……は？」

ポカンと口を開けるベルフェーネを余所に、レヴィアは言う。

「いいわ、ベルフェーネ。わたし、あなたのモノになってあげるわ。ふふふ、あなたの好きにしてくれていいわよ？」

「ちよつ、あんた何か勘違いしてるでしょ！？」

「大丈夫。同性愛は何も恥ずかしいことではないわ」

「だから違うつてば！？ ていうか、そんなのは某天使だけで十分だから！」

「わたしがあなたの領地ばかりを執拗に狙って削り続けていたのは、あなたを自分のモノにしたかったからなのよ」

「それ、できれば知りたくなかったんだけど！？」

「だけど、今は逆でもいいかもしれないと思ってるわ……。あな

たにペットのように可愛がられる毎日……ふふ、ふふふふ……」

その未来を想像してか、恍惚とした顔で妖艶に笑うレヴィア。  
ベルフェーネは涙目になって叫んだ。

「だから、あたしはそんな性癖じゃないってばああっ！……！」

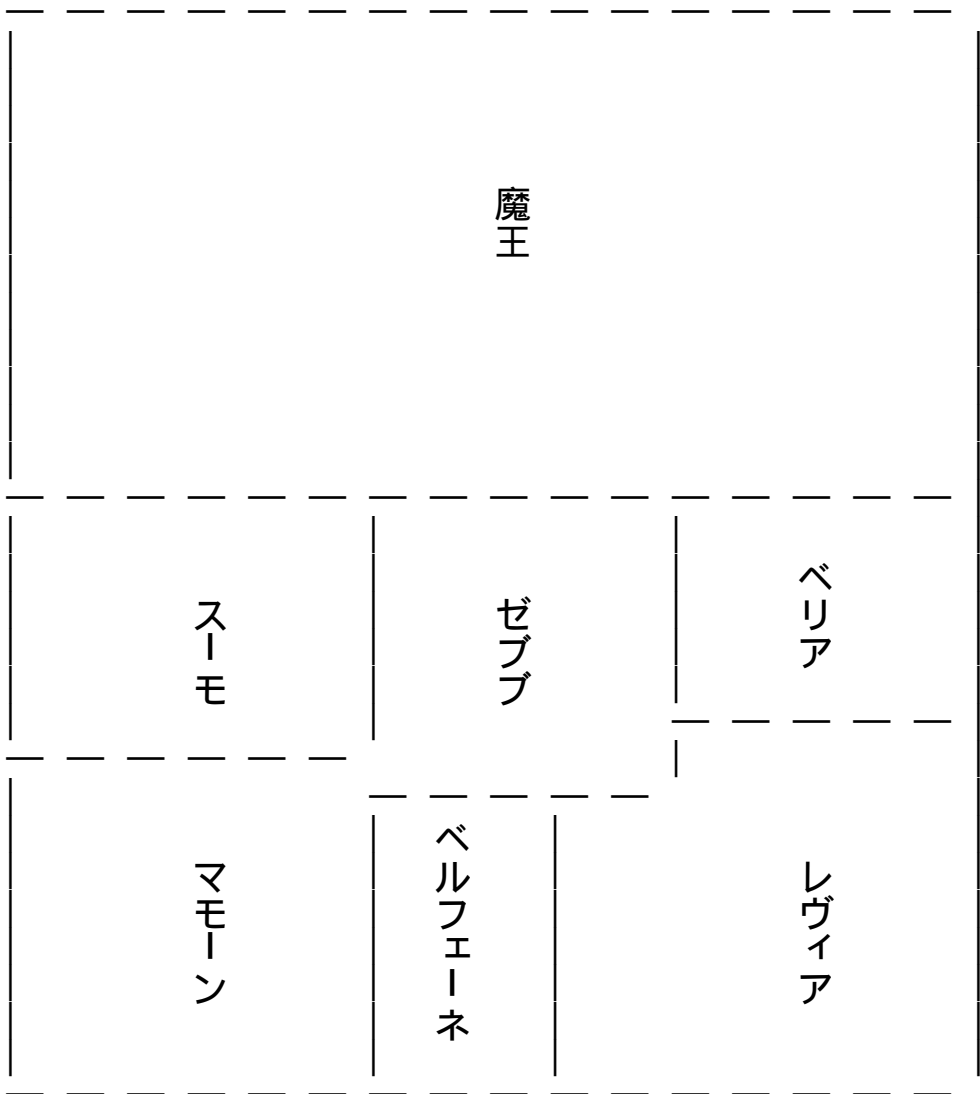
第108話 美女悪魔じゃないし、巻きで（前書き）

勢力図のところ、スマホ縦にすると崩れちゃう……。すいません、横にして読んでください。。。

# 第108話 美女悪魔じゃないし、巻きで

魔界における勢力を大まかな図にすると、だいたい以下のようだった。

ただしこれは、俺が魔界に来る前の状態だが。



魔王を覗く六体はすべて公爵級の悪魔である。囲まれている部分がその勢力圏。



もちろん直轄地もあるが、大半はより下位の爵位持ち悪魔の領地で構成されているという。

まあ中世ヨーロッパの封建社会をイメージすれば分かりやすいだろう。

ただし、それよりも少し王様（＝公爵）の権威や影響力を強くした感じ。

要するに、ほとんど七体の悪魔たちで魔界を七分しているような形だった。

中でも魔王は魔界のほぼ半分をその支配圏としている。

ベルフェーネの支配領域は元々この三倍くらいはあったらしいが、レヴィアをはじめ、他の公爵級との領地争いに負け、公爵級としては最小の勢力にまで落ち込んでいた。

だが今回、レヴィアの拠点をとことにより、一気に魔界第二位の勢力にまで躍り出ている。

さらにその勢いに乗って、俺たちは次々と周辺の領地へと攻め込んだ。

他の公爵級の傘下にある爵位持ち悪魔たちの拠点を攻略していたのだ。

当然、配下と支配領域を奪われた公爵級たちがそれを良く思うはずもない。

真っ先に反撃してきたのは、南部で勢力圏が接している公爵級悪魔マモーンの勢力だった。

傘下の爵位持ち悪魔たちに大号令を出し、ベルフェーネの拠点へと攻め入らせたのだ。

俺たちはその大攻勢を迎え撃ち、そして完膚なきまでに叩きのめした。

まあこつちには俺やベルフェーネはもちろん、レヴィアまでいたからな。

当然の勝利である。

逆に主戦力に壊滅的な打撃を受けたマモン傘下の悪魔たちは、白旗を上げて次々に降伏。

俺たちはベルフェーネの拠点を護り切ったばかりか、逆に敵の支配領域をこっそりといただくことができたのだった。

そうして満を持して、公爵級悪魔マモンの拠点へと攻め込んだ。

『万魔殿』と呼ばれるその拠点は、金銀財宝によって造られた目が眩むような絢爛な宮殿だった。

その最奥にいたマモンは鼠のような容姿をしていた。ただし身に纏っている衣服は随分と豪華だ。

「あ、あり得ないでちゅう！ たった二人で、おいらの拠点を攻略するなんて！」

俺とベルフェーネを前に、マモンは驚きの声を上げる。

「ちゅうって、赤ん坊か……」

『鼠だからではないでしょうか』

いずれにしても公爵級にしては随分と締まらない語尾である。

「だ、だけど……ここの財宝は誰にも渡さないでちゅうツ  
ひでぶ!？」

「美女悪魔じゃないし、巻きで」

……マモーンを倒して拠点とその領地をいただと、次にターゲ  
ットにしたのは公爵級悪魔ゼブブの拠点だった。

鬱蒼とした草木に覆われて昆虫型の魔物がわんさか棲息している  
ダンジョンを進んでいくと、その最奥に巨大な蠅の姿の化け物がい  
た。

「ああ、ベルフェーネ！ 僕に会いに来てくれたんだねブン！」

今度の語尾は「ブン」らしい。

「んな訳ないでしょ！ とつとと降伏して、あんたの領地をそっく  
りあたしに寄こしなさいよ！」

「恥ずかしがらなくてもいいブン！ 君から出ている僕への求愛フ  
エロモン、ビンビンに感じているブン！」

「出してるのはどう考えてもあんたの方でしょうが！」

「つまり僕は両想いということだブン！」

「会話が成り立たないんだけど!？」

ベルフェーネは頭を抱えた。

「……だから、こいつのところだけは来たくなかったのよ……」

「レヴィアのと看といいい、意外とモテモテじゃないか」

「ぜんっぜん、嬉しくないんだけど！」

「けど蠅に好かれるってことは……うん」

「あたしは臭くないから!？」

そのときいきなりゼブブが咆えた。

「そいつは誰だブン！？ 随分と仲良さそうに……ま、まさか、不倫ブン！？ ゆ、許さないブン！ 僕という悪魔がいながら、他の悪魔に手を出すなんて！ 激おこブンブン！」

ブンブンみたいに言うな。

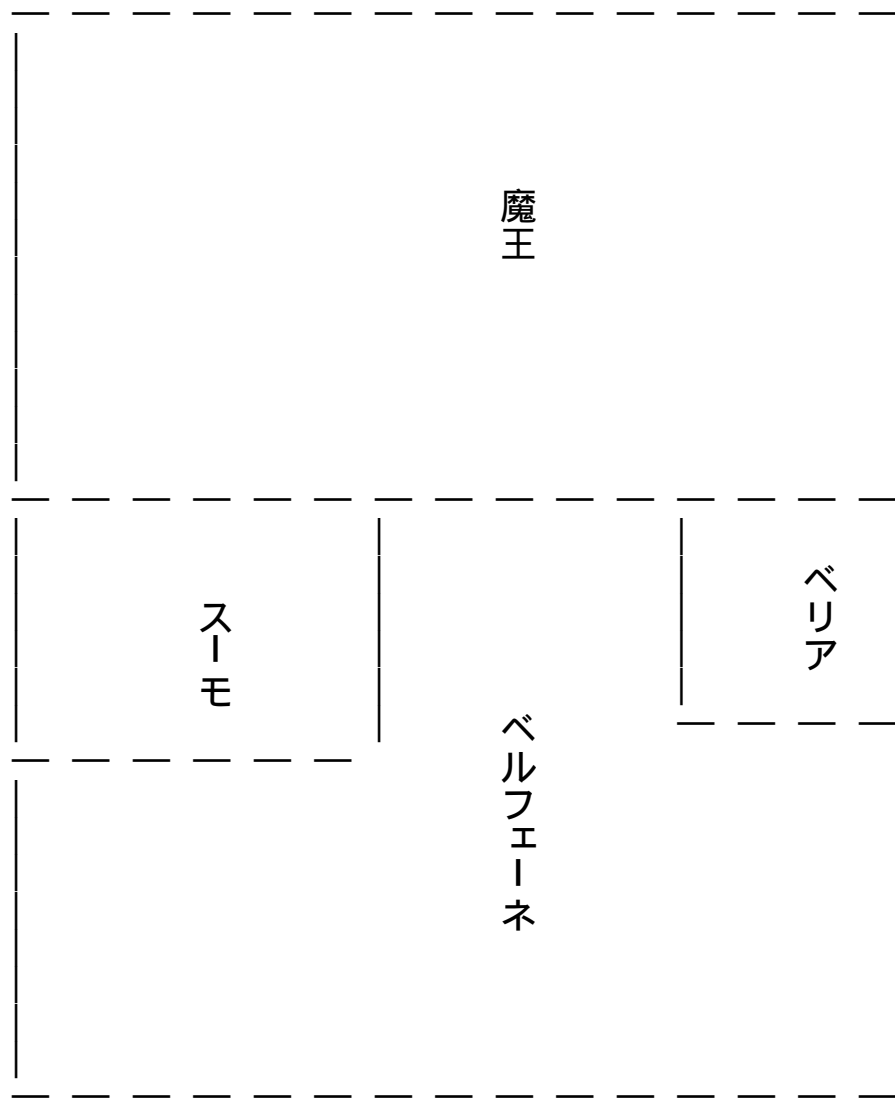
「いい加減っ、その頭のおかしい妄想を止めなさいよおおおおおっ！」

その後、嫉妬心を露わに俺に襲いかかってきたゼブブだが、返り討ちにしてやった。

こいつも美女悪魔じゃなかったのももちろん巻きである。

「ベルフエーネ……一度でいいから……君の……×××の匂いを……嗅いでみたかったブン……ガクッ」

俺の大活躍のお陰で、ベルフエーネの支配領域が一気に広がった。これが現在の魔界の勢力図である。



「すごい！ もうほとんど魔王の支配領域と変わらないじゃないの！」

ベルフェーネが手を叩いて喜びを露わにする。

「じゃあ次は魔王の拠点にでも攻め込むとするか」

俺がそう提案した瞬間、いきなり顔色を真っ青にして慌て出した。

「ばばば、馬鹿なこと言わないでよ！？ あんな化け物に喧嘩なんて売れるわけじゃないでしょうが！」

「そんなにヤバい奴なのか、魔王って？」

「そりゃそうよ！ あたしのお爺ちゃんのそのまたお爺ちゃんの代

から、ずっと魔王に君臨し続けてる伝説級の悪魔なんだから！あたしが独立領を持ててるのだって、あいつが今以上に領地を増やそうと思っていないお陰よ！」

そして公爵級悪魔も、誰一人として魔王の領地には手を出せないらしい。

「しかも魔王には、公爵級にも匹敵する配下がごろごろいるのよ」「そう聞くと大したことなさそうだな。要するに、マモンとかゼブブとか、お前レベルってことだろ？」

キャラは濃いかもれないが。

「ナビ子さん、魔王ってヤバいの？」

『はい。ヤバいです。レベルは314です』

「マジか」

ちなみに俺のレベルが108である。

およそ三倍かよ。

竜王であるシロのーちゃんですらレベル122だったのに。

『その気になれば、魔界でも天界でも地上でも容易く支配できる強さを持っています』

天界最強とされるミカエルを遥かに凌ぐという。

と、そのときだ。

「べ、ベルフェーネ様、報告がございます」

男装美女悪魔のミランジュが部屋に入ってくる。

いつも落ち着いていて淡々としている彼女だが、珍しく動揺しているようだった。

「西部のルガ侯爵から、強大な魔力の持ち主が我が拠点に向かっているとの情報もたらされました」

「強大な魔力？ まだ残っている公爵級かしら？」

今さら攻めてこようとまったく怖くないとばかりに、余裕たっぷりに鼻を鳴らすベルフェーネ。

しかしその直後、ミランジュの継ぎ句でその顔が凍り付くのだった。

「それが……ルガ侯爵によれば、魔王様かもしれない、と」

「……へ？」

フラグの回収が早い。

## 第109話 魔王襲来

「どどど、どうすればいいのよ!? ままま、まさか魔王が自ら乗り込んでくるなんて!」

ベルフェーネは玉座の上で頭を抱えていた。

「そう焦るなつて。むしろこっちのホームにわざわざ来てくれるんだ。好都合だろ」

「あああ、あんたは魔王の怖ろしさを知らないからそんなこと言えるのよ! ていうか、何で魔王が!? あいつの領地には手を出してなかったはずなのに!」

そのとき轟音とともに凄まじい振動が起こった。

「ベルフェーネ様! 城門が破られました!」

「ひいっ! き、来たああああ!」

ベルフェーネが悲鳴を上げる。

その後も次々と彼女の配下から報告が上がってくる。

「だ、第一層を突破されました!」

「第二層もです!」

「ギオス将軍が瞬殺され、第三層も攻略されてしまいました!」

ベルフェーネの城は難攻不落と言ってもいい高難度ダンジョンだ。にもかかわらず、もの凄い勢いで攻略されていつている。



全部で六層あり、その六層目にベルフェーネがいるここ玉座が存在していた。

まるで死のカウントダウンが近づいてきているかのように、各層突破の報告の度にベルフェーネの顔から血の気が失せていく。

「い、今はどこにいるの!？」

「すいません! 見失ったようです!」

「あんな馬鹿みたいな魔力の塊、どうやってから見失うのよおおおおっ!？」

ズゴンッ!!!

突如、玉座の間の入り口である巨大な扉が吹き飛んだ。

「ふむ、どうやらここがゴールのようぢゃの」

そして悠然と何者かが姿を現す。

「ま、魔王……」

ベルフェーネが震える声で呟いた。

ついに魔王がこの場へと辿り着いたのだ。

見た目は十歳かそこの幼い少女だった。

エレンの髪よりもさらに濃く、血のように赤い頭髪。

同色の瞳は愉しげに輝き、弧を描く唇には隠し切れない喜びが現れている。

一見すると無邪気な子供。

しかしそのステータスは圧倒的だった。

サターラ

種族：悪魔族

レベル：314

スキル：魔闘気・極

生命：314321 / 314321

魔力：362823 / 369830

筋力：27021

物耐：25203

器用：20294

敏捷：26418

魔耐：28395

運：16293

「もうなんかすげえインフレしてきてないか？」

「話が長く続くと、どうしても起こり得るものかと」

「何の話だ……」

「正直、普通に戦うことはお勧めしません。即死攻撃・極を使  
って瞬殺するのがよいかと」

いやせつかくのロリ魔王なのに殺すのはダメだ。

男ならいいけど。

『蘇生魔法・極で生き返らせればよいかと思えます』

「それ振り出しに戻るだけじゃね？」

『では胴体を切り離し、首から上だけ生き返らせましょう。そうす  
れば安全です』

意外と怖いこと言うね、ナビ子さん……。

魔王はベルフェーネの姿を認めると、にいつと口端を吊り上げた。

「ベルフェーネはお主ぢやな！」

「ひゃ、ひゃい！」

「最近、公爵級の拠点と次々落としていると聞いたのぢや！」

「そ、それはあたしの力じゃなくて」

「面白い！ 余と勝負するのぢや！」

「えっ？ ちょ、だからあたしの」

「ゆくぞっ！」

魔王が地面を蹴り、玉座であたふたしているベルフェーネに躍り掛かった。

どうやら人の話を聞かない奴らしい。

『魔王の攻撃を一発でも喰らえば彼女は死にます』

そりゃマズイ。

……まあ蘇生すりゃいいっちゃいいが。

俺は咄嗟に間に割り込んだ。

「なんぢや。邪魔をするでない」

魔王が小さな身体で回し蹴りを繰り出してくる。

俺はそれを左腕でガードしようとして、

パンッ！ という音とともに俺の腕が弾け飛んだ。

「は？」

『ガードは下策です。今のマスターの物攻耐性では耐え切れません』  
「それを早く言え」

直後、間髪入れずに魔王が拳を放ってきた。

それが顔面に直撃し、今度は俺の頭が吹き飛ぶ。

やばい、死んだ。

『死神の目溢 スキルが発動します』

次の瞬間、俺はまったくの無傷でその場に立っていた。

「む？ お主、なぜ生きておるのじゃ？」

頭部を吹き飛ばしたはずの相手が何事も無かったかのようにそこにいたのだから、さすがの魔王も目を丸くして驚いている。

ベルフェーネに至っては玉座の上で失禁していた。じよぼじよぼ。

死神の目溢

簡単に言くと、死んでもすぐに生き返るというチートスキルだ。  
ただし一度生き返ると、次の発動までには二十四時間のインターバルが必要だった。

『マスター、もう一度死ぬと終わりです。ですので、いったんロードして、先ほどセーブをした地点に戻ることを推奨いたします』  
「だな」

ロード。

直後、魔王の姿が消える。

「い、今はどこにいるの!？」

「すいません! 見失ったようです!」

「あんな馬鹿みたいな魔力の塊、どうやってから見失うのよおおおおつ!？」

代わりにベルフェーネが配下とそんな言い合いをしていた。

つい先ほど見たばかりの光景である。

セーブ&ロード

これはセーブをした地点へ、ロードで戻ることができるというスキルである。

何度でもやり直せる便利なスキルだが、ロードの発動は任意であるため、死んでしまうと発動することができなくなってしまうという欠点があった。

ただし俺の場合、死神の目溢 スキルと組み合わせれば最強だ。死神の目溢 を使う前に戻っているので、死んでもまた 死神の目溢 が発動し、生き返ることができるのである。

ズゴンッ!!!

玉座の間の入り口である巨大な扉が吹き飛んで、先ほどとまったく同じ台詞とともに魔王が姿を現す。

「ふむ、どうやらここがゴールのようぢゃの」

「ま、魔王……」

ベルフエーネが震える声で呟くのも同じだ。  
もちろん、その後のやり取りも。

「ベルフエーネはお主ぢやな！」

「ひゃ、ひゃい！」

「最近、公爵級の拠点と次々落としていると聞いたのぢや！」

「そ、それはあたしの力じゃなくて」

「面白い！ 余と勝負するのぢや！」

「えっ？ ちょ、だからあたしの」

「ゆくぞっ！」

俺は再び魔王の進路に割り込んだ。

だが今は 闘神 スキルで闘気を全開にしている。

さっきは突然だったこともあって、二十パーセントくらいの闘気しか出せなかったのだ。

『100%でもまだ魔王には及びませんが』

今度の蹴りはどうにか受け止めた。

しかし腕の骨が折れてしまう。

「ほう？ 余の攻撃を受け止めたぢやと？」

「てか、全開にしても折れるのか……まあさっきよりはマシだが」

自然治癒・極 スキルのお陰で骨が修復されていく。

魔王は愉しげに笑った。

「ならばもつと本気で行くのぢや！」

魔王の全身から、闘気とも魔力とも違う謎のエネルギーが吹き出す。

彼女が持つのは 魔闘気・極 というスキル。  
恐らく魔闘気というのは、闘気と魔力を融合させたものなのだろう。

直後、魔王の拳が凄まじい速度で飛んできた。  
両腕でガード。

だがそのガードがあっさりと破壊され、顔面にもろに拳を貰ってしまう。

あー、また死んだ。

死神の目溢 が発動。

「む？ お主、なぜ生きておるのぢゃ？」

魔王は同じ台詞を言い、ベルフェーネはやはり玉座の上で失禁していた。じよぼじよぼ。

再びロードする。

ズゴンッ！！！！

玉座の間の入り口である巨大な扉が吹き飛んで、また魔王が現れた。

「ベルフェーネはお主ぢゃな！」

「ひゃ、ひゃい！」

「最近、公爵級の拠点と次々落としていると聞いたのぢゃ！」

そして繰り返されるまったく同じやり取り。

ゲームと違ってスキップはできないので、聞き直すしかないのが  
ちよつと面倒だな。

「闘気だけじゃダメだったし、今度は身体強化魔法も併用するか」



## 第110話 魔界の大公爵

闘気に加えて、俺は自分にバフをかけまくった。  
補助魔法・極 スキルを持つ俺なら、ステータスは数倍に跳ね上がる。

「ならばもつと本気で行くのぢゃ！」

魔王が魔闘気を使って拳を繰り出してきた。  
先ほどと同じように両腕で防御すると、今度は受け止めることができた。……骨が粉々に砕けたが。

その後も魔王の苛烈な攻撃を受ける度、俺の骨が砕ける。  
自然治癒・極 でも修復が間に合わない。

一方で、俺の攻撃はほぼ通じない。  
物理も魔法も。

魔王の耐性値が強すぎるせいだ。

「これなら無視できるけどな」  
「っ!？」

俺は 絶対切断・極 スキルを使い、反撃した。  
どんな物でも絶対に切り裂く、物耐など完全無視の手刀だ。

だが魔王はその危険度を察したのか、飛び下がって回避。  
勘のいい奴だ。

「くくく、まさかここまでやるとはのう」

魔王は不敵に笑いながら、全身の魔闘気を両腕に収束させていく。うお、なんか必殺技っぽいのが来そうだぞ。

「これを出すのは久しぶりぢゃ！　“魔闘殲滅波”！」

刹那、俺の身体は凄まじい衝撃に呑み込まれ、生命値が一瞬でゼロになっていた。

やーられーたー。

……が、死神の目溢　で即座に復活した俺は、後ろを振り返って啞然とする。

ベルフェーネ城の一部が消し飛んでいた。

それどころか向こうに見える山の山頂がごっそりと無くなっている。

ベタベタなネーミングなくせに、なんて威力だよ……。

『マスターのネーミングセンスもどっこいどっこいかと』

ギリギリ上を通過していったようで、ベルフェーネは生きていた。白目を剥いてまた失禁していたが。じよばじよば。

よくそんなにオシッコ出るよなー、と思うかもしれないが、俺がロードを繰り返しているせいであって、本人としては何度も漏らしている訳ではない。

彼女の名誉のためにもそれだけは言わせてほしい。

ロード。

三度目のロードである。

その後、先ほどとまったく同じ流れを繰り返すと、魔王は再び恐るべき必殺技を使ってきた。

「魔闘殲滅波」！

だが初見ならともかく、二度目の今回は対処できる。

こういう攻撃は、そっくりそのままお返しするに限る。

「反転・極」

魔王の必殺技が反転し、放った魔王自身へと返っていった。

「ぬあー、まさか初見であれを返されるとは思わなかったのぢゃ！」

どこか楽しそうに魔王は姿を現した。

自身の必殺技の直撃を喰らったはずなのに、身体がボロボロになっ  
てはいるものの普通に生きている。

本当は初見じゃないんだけだな。

「ていうか、あれを喰らっても死んでないのかよ」

『いえ、生命値は半分ほどに減っています』

でも半分か。

さっき俺は一瞬で死んだってのに。

『咄嗟に二発目の“魔闘殲滅波”を放って相殺しようとしたようです。……相殺し切れず、ダメージを受けた上に、余計な魔力と闘気を消耗してしまったようですが』

ナビ子さんの言う通り、どうやら魔王は力を使い果たしてしまっただけ、

「今日はなかなか楽しかったのぢゃ！ 余とまともにやり合える相手など、何百年ぶりぢやろうの！ 今度はぜひそっちから余の城に遊びに来るのぢゃ！」

と、満足そうに言い残してあっさり去っていくとする。

ベルフェーネのことはもうどうでもいいらしい。

てか、散々暴れるだけ暴れておいてもう帰るのかよ？  
そうはいくか。

ロード。

「今日はなかなか楽しかったのぢゃ！ 余とまともにやり合える相手など、何百年ぶりぢやろうの！ 今度はぜひそっちから余の城に遊びに来るのぢゃ！」

そう言い残して魔王は去っていくとする。

ロード。

「今日はなかなか楽しかったのぢゃ！ 余とまともにやり合える相手など、何百年ぶりぢやろうの！ 今度はぜひそっちから余の城に遊びに来るのぢゃ！」

そう言い残して魔王は去っていこうとする。

ロード。

『マスター、遊んでないで帰すのか戦闘を継続するのはつきりしてください』

いや、なんか楽しくなっちゃって。

まあこつちとしても別にあえて戦う気はない。

大人しく帰ってくれるならそれでいいだろう。

「今日はなかなか楽しかったのぢゃ！ 余とまともにやり合える相手など、何百年ぶりぢやろうの！ 今度はぜひそっちから余の城に遊びに来るのぢゃ！」

またもそう言い残して今度こそ去っていく魔王を見送る。

にしても嵐のような奴だったな。

魔王と言っても中身は完全に子供だったし。見た目もだが。

俺はベルフェーネの方へと向き直った。

「た、助かった、の……？」

じょぼじょぼじょぼ。

危機が去って気が緩み、ついでお股の方も緩んでしまったのか、

また失禁していた。

「ああ。魔王の脅威を退けてやったぞ」

ちよつと予想より強過ぎたけどな。

『ステゴロで倒すには最低でも魔王の半分のレベルが欲しいところですね』

せめて150くらいは必要ってことか。

「さて。もう十分に領地が広がったし、そろそろ俺、帰ってもいいよな？」

俺はベルフェーネに確認する。

約束は果たしたはずだ。

しかし転移魔法を使って地上に帰還しようとするのと、

「ちよ、ちよつと待つてよ！」

なぜかベルフェーネに呼び止められてしまう。

彼女は目尻に涙を浮かべ、縋り付いてくる。

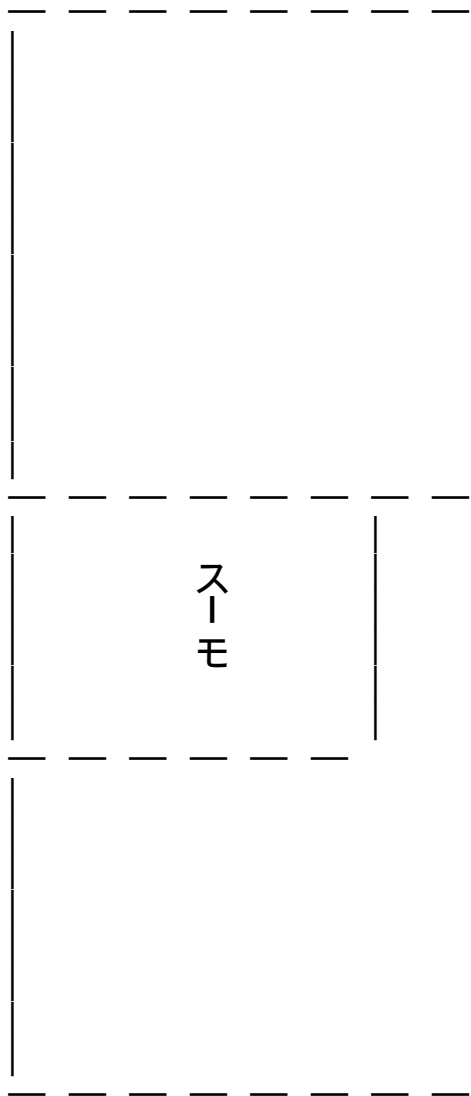
「お願い！ 行かないで！」

まるで別れを告げた恋人に、必死に追い縋るシーンみたいだ。ただしオシッコの匂いがするが。

「また魔王が来たらどうするのよっ！？」

「もう来ないんじゃないか？」





さらにベルフェーネから爵位を譲り受け、俺は公爵級悪魔となった。悪魔じゃないが。

だがすぐに支配下に置いている他の公爵級と同列ではおかしいという声上がり、公爵から大公爵へと格上げされることに。

その後、ベリア公爵とスーモ公爵から、大量の土産とともに使者が来た。

どちらも要約すると「お願いだからうちに攻めて来ないで」という嘆願だった。

「いいよー」と頷いてやると、泣きながら喜ばれた。

別にこれ以上、支配領域を拡大するつもりもないしな。

さて、そうして俺は魔界の大公爵となった訳だが。

「じゃあ、後のことは任せたぞ」

「りょーかい」

例のごとく、分身を置いて地上に帰ることにした。



……こつそりと。

領主が不在だとバレると色々と問題が起こりそうだな。ベルフェーネも泣き付いてくるだろうし。

「何かあつたら呼んでくれ。魔王が来たときとか」

そして転移魔法で地上へ。

「……ん？　ここはどこだ？」

しかしなぜか見知らぬ場所に出てしまった。

『どうやら今までマスターがいたところとは別の大陸のようです』  
「何でこんなところに？」

『魔界と地上の間には時折、強力な魔力波が発生することがあります。その影響を受けて、転移先がズレてしまったのかもしれない』  
「へー。まあいいや。もう一回、転移すれば……」

『マスター、比較的近い場所から面白い魔力を感じます』  
「面白い魔力？」

『どうやら何者かが、異世界人を召喚するための魔法を使おうとしているようです』

それは面白そうだ。

第111話 勇者召喚に巻き込まれたおっさん、即帰還させられる

私の名前は新野新之助。

四十二歳の会社員だ。

私はこの歳ながら未だに独り身だ。

両親や友人たちからは頻りに結婚を勧められている。

何度か女性を紹介されたこともあった。

自分で言うのもなんだが、紹介されて会うことになった女性の多くが私に好感を抱いてくれて、ぜひ結婚を前提としたお付き合いを……と、積極的になってくれた。

その中には容姿や性格などにおいて、結婚相手としては申し分のない人も沢山いた。

だが申し訳ないことに、私はそのすべてをお断りしてきた。

やはり私の好みに合わなかったことが、その一番の理由である。

なぜなら私は

女子高生が好きだからだッ！！！

ああ、女子高生！

あの子供から大人へと変わるちょうど境目の、人生でたった一度しかない儚い時間。

女性が最も美しくなるのはその時だと、私は確信している。

そんな私にとって、二十歳過ぎの女など対象外。  
どんなに美人だろうと、女子高生でなければダメなのだ。

つまるところ、四十二歳の私は完全に詰んでいる。

女子高生と付き合うことを、社会が許してくれないからだ。

しかし！

しかしだ！

見るだけなら犯罪ではないのだ！

最近のお気に入りは、通勤途中によく見かける女子高生三人組だ。

「メグっち、おっはよー！」

「お、おはよう……茜ちゃん……ひゃわっ？」

「やっぱりメグっちの身体は柔らかくて気持ちがいいよー！」

「ちょ、ちよっと、やめてよお、茜ちゃん……」

「こら、茜。朝から何やってんのよー！」

「あ、京っち！ おっはよー！ 見ての通り、メグっち成分を吸収しているのだ！」

「み、みんな見てるでしょうがっ。恥ずかしいから早く離れなさいよ」

「仕方ないなー。じゃあ、あと五分」

「ふえええっ！」

じゃれ合う女子高生たち……なんという眼福だろう。

しかも三人ともアイドル並の美少女ときたら、股間が膨らんでしまっても致し方のないことだろう。

ちなみに、匂いを嗅ぐのも犯罪ではない。

ポーカフェイスは得意だ。

どこにでもいるごく普通のサラリーマンを装いながら（いや普通のサラリーマンだが）、私は秘かに彼女たちの背後を通り、その香りを堪能する。

くんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんかくんか

おっと、少々堪能し過ぎたようだ。

ちなみに女子高生マイスターを自称する私の手にかかれば、匂いだけで彼女たちの健康状態や気分、さらには今朝の食事などのパラメーターを察知することができる。

そんな私が断言しよう。

彼女たちは全員が処女！

間違いない。

ちゃんと処女膜の匂いがするからな。

至福の時間も長くは続かない。

先に見えるあの交差点で、彼女たちは左に曲がってしまうのだ。それまでに今日一日、仕事を乗り切るためのエネルギーをしつかりと蓄えねば！

と、そのときだった。

突然、彼女たちの足元に複雑な文様が現れたのは、まるで魔法陣のような……

ま、まさかこれは……！？

脳裏を過ったのは、私が最近ハマっているウェブ小説。いわゆる異世界モノと呼ばれる作品群が流行っており、独身のため休日になると暇を持て余し気味の私も幾つか連載を追い駆けていた。

普通の高校生が勇者として異世界に召喚され、魔王を倒して世界を救う。

そうした超王道的なパターンを捻った作品が多い。

その中には、高校生の召喚に普通のサラリーマンが巻き込まれ、勇者以上に大活躍するというストーリーもあった。

その魔法陣らしきものは、彼女たち三人をちょうどすっぽり取り込むように展開されている。

彼女たちより二メートルほど後方にいた私は、咄嗟にその中へと飛び込んでいた。

足元の魔法陣に「え？ 何これ？」と驚いていた彼女たちが、今度は突然接近してきた私に驚いて「ひっ？」と悲鳴を上げたが、このチャンスを逃すわけにはいかない。

直後、視界が真っ白に染まったかと思うと

私は彼女たちとともに見知らぬ場所に立っていた。  
大聖堂という言葉が相応しい、荘厳な空間だ。

ひゃっほ~~~~う！

私は歓喜した。

無事に勇者召喚に巻き込まれることができたのだ！

私を待っているのは、この可愛い女子高生たちとのきゅっきゅ  
ふふの魔王討伐の旅（謎）！

「悪いがその立場、俺が貰ったぜ」

「え？」

次の瞬間、またしても私の視界が真っ白に染まる。  
そして気づけば、いつもの通勤路に立っていた。

「……は？」

あの女子高生たちの姿は無い。

まさか、私だけが元の世界に戻された……？

「ああああああああああっ！」

私は慟哭した。

その場に崩れ落ちると、人目をはばからず地面を叩きながら泣き  
叫んだ。

なぜだ！？ なぜ私だけ戻って来たんだ！？

私も女子高生たちと一緒に魔王と戦いたいのにッ！

「女子高生っ！ 女子高生っ！ 女子高生っ！ 女子高生いいいい  
いいっ！ うああああああああんっ！」

警察が来た。

「何なのよ、こっちは……？」

「え、なにになに？ 何が起こったのっ？」

「ふええっ……？」

自分たちが荘厳な空間のど真ん中に立っていることに、大いに困惑する少女たち。

「……どうやら異世界に転移させられたようだな」

「い、異世界……？ ……って、あんた、誰よっ？」

黒い髪を頭の後ろで一本に束ねた少女がこちらを振り返り、警戒する。

「心配するな。俺も日本人だ。お前たちと一緒にこっちに飛ばされたんだろう」

「そ、そう言えば……さっき、いきなり変な人が突っ込んできたよ  
うな……」

おどおどとした小柄な髪の少女が呟く。

「それが俺だ」

「どう見ても別人だったわよね!？」

「見間違いだろ」

「いやいや、あれ完全におっさんだったでしょ!？ しかもあいつ、いつも秘かにわたしたちに近づいてくる怪しいおっさんだったし! ああいう変態ほんとに怖いし、お巡りさんに言おうかと思ってたのよ!」

おっさん、バレてるやん。

だが一つ言いたい。

「女子高生の匂いを嗅ぐくらい許してやれよ」

ツ! ! ! ! !

「こいつも変態だった!？」

活発そうな印象の少女が首を傾げた。

「ねえねえ京っち、あたし、もしかして臭い？」

「……茜、そういう話じゃないから」

「違うん？」

「……一体、何をしているのですか、マスター？」

見ての通り、勇者召喚に巻き込まれてみました。

『巻き込まれたのは別の人でしたよね？ 強引に割り込んだと言っべきかと』

いやいや、責められる筋合いはないぞ。

むしろ俺はこの女の子たちを女子高生好きの変態から護ったんだからな。



褒められるべきだろう。

『確かに、あの男性と比べれば、マスターの方が多少はマシかもしれません……』

おっと、どうやら彼女たちを召喚した連中が来たようだぞ。

## 第112話 遊び人

俺たちが連れて行かれたのは謁見の間だった。

偉そうに玉座に腰掛けているあのおっさんが王様だろう。

小太りで口ひげを生やしている。

何というか、ザ・王様という感じの王様だ。

「ようこそ、異世界の勇者たちよ。お主らを召喚したのは他でもない、我らの世界を脅かす魔王を打ち倒してもらったためだ」

王様は単刀直入に言う。

「わたしたちが勇者!？」

「ま、魔王って……」

そりゃあ、いきなりそんなこと言われたらビビるわな。

「はいはい! 魔王って強いんですかつ？」

「無論だ。しかも大勢の配下や魔物を引き連れている」

「ちょ、ちょっと待ってよ。わたしたち、ただの女子高生なんだけど!」

「心配は要らぬ。勇者として召喚されたお主らは、相応の力を手にしているはず。もちろんさらにレベルアップする必要はあるが、現時点でもここにいる兵士たちにも負けぬだろう」

「へ、兵士って……」

王様の護衛のため、謁見の間には武装した兵士たちがいた。いずれも屈強そうな男たちである。

「ともかく、まずはお主たちの力を確かめるとしよう」

王様の合図で、神官っぽい格好をした男性が水の入った杯を持ってきた。

「これは“神杯”と言って、適性や才能を確かめるための魔導具だ。杯を手にして念じると、水の色が変わる。その色によって判別することができるのだ」

「面白そう！ あたしやりたいー！」

「ちょ、茜っ……」

真っ先に手を上げたのは、さっきから戸惑う様子もなく常に楽しそうにしている女子高生。

「うむ。ではその方から……」

「あたしは赤星茜だよ！」

「アカホシアカネか。相変わらず異世界人は変わった名前だね」

友人たちの心配を余所に、彼女 アカネは何のためらいもなく“神杯”を受け取った。  
すると水の色が濃い青へと変化していく。

「適性は【魔法使い】のようですね。それもこの色の濃さ……相当な才能の持ち主を考えられます」

神官っぽい男が解説する。

どうやら色が濃いほど良いらしい。

王様が満足げに頷いた。

「さすがは勇者だ」

「【魔法使い】ってことは、あたし魔法を使えるようになるのっ?」

「その通りだ」

「わーい」

俺は彼女のステータスを鑑定してみた。

アカネ

レベル：1

スキル： 火魔法      風魔法      魔力回復

確かに魔法系のスキルを多数所有しているようだ。

「次は……」

「じゃ、じゃあ、わたしが行くわ。えっと、京野京子よ」

「うむ。では、キョウノキョウコに“神杯”を」

今度は水の色が真っ赤になった。

「適性は【剣士】のようです。しかもこちらもかなり濃く染まりました」

キョウコ

レベル：1

スキル： 剣技      闘気

続いて、いかにも気の弱そうな少女の番に。

「め、目黒恵美、です……」

水が真っ白になった。

「適性は【治癒士】です。こちらも前の二人に負けず劣らずの才能かと」

メグミ

レベル：1

スキル： 回復魔法      補助魔法

回復魔法だけでなく、補助魔法も使えるようだな。

「素晴らしい！ 三人ともまさしく勇者に相応しい！ それどころか、【剣士】に【魔法使い】に【治癒士】とは、パーティとしてのバランスも申し分も無いぞ」

王様は大満足のようだ。

「では最後の一人。一体、お主はどのような才能を見せてくれるのかの？」

何か随分と期待値が上がっているようだ。  
神官が俺に“神杯”を渡してくる。

これ、俺が普通にやったらどうなるんだ？

『“神杯”が壊れます』

マジか。

『スカウター同様、測定値に限界がありますので』

何でナビ子さんがスカウターを知っているのかはさておき、貴重な魔導具っぽいし壊しちゃうのはマズイだろう。

ま、適当に擬装するか。

その結果、水が濃いピンク色になった。

「おお、これもかなり濃いではないか。どうだ、神官よ？ 彼の適性は？」

「しょ、少々お待ちを。あまり見たことがない色でして……」

神官がちよつと慌てる。

ローブの中から分厚い書物を取り出し、しばし目を通していたが、

「これは……【遊び人】？」

「【遊び人】？」

「は、はい。どうやら、彼の適性は【遊び人】のようです」

「【遊び人】とは……一体、どんな能力があるのだ？」

「えっと……その名の通り、様々な遊びに関する才能があると、この取説には……」

それ、取説だったのかよ。

「……それは魔王討伐に役立つのか？」  
「わ、分かりません」

困惑している王様と神官。

『何でまたそんな半端なものにしたのですか、マスター？』

いやいや、遊び人を馬鹿にすんなよ！？

突然、悟りを開いて賢者に転職できるようになれるんだからな！

だが【遊び人】の素晴らしさが分からないのか、謁見の間にいる文官・武官たちからは、遊び人？ おい、遊び人だって……。何だそりゃ。役に立つ訳ねーじゃん。プークスクス。などという声が聞こえてくる。

「役に立つに決まっているだろう！」

俺は声を大にして訴えた。

「今から見せてやろう！　遊びこそ、魔王を打ち倒す最強の力であることを！」

そして　俺は服を下着もろとも脱ぎ捨て、裸になった。

「何で脱いでんのよ　　ッ！？」

キョウコが叫ぶ。

安心してください。

股間だけはお盆で隠してます。

「後ろは丸見えなんだけど!？」

「……俺の後ろに立つな」

『さいとう先生に謝って下さい』

ゴ　ゴっぽく言ってみたら怒られた。

「はわわわ……」

「わっ、お尻お尻!」

メグミは顔を両手で覆いつつも指の隙間からバッチリ見ていた。  
アカネはなんか嬉しそうにお尻お尻と連呼している。

「お、王様の御前でっ!」

「何と不敬な……っ!」

「よい、お前たち」

いきり立つ臣下たちもいたが、それを王様が制した。

「魔王を打ち倒す力を申したな?　ならば見せてみるがいい」

俺は頷き、

「とくと見る!　これぞ日本が世界に誇る裸芸だッ!」

お盆を持つ手を入れ替えたり、一瞬で裏返しにしたり。

あるいはお盆を手放してその場で一回転し、キャッチしたり。  
もちろん絶対に股間を見せてはならない。

見せそうで見えない。

ギリギリの緊張感。



次第に謁見の間にいる人たちが真剣な目になってくる。

「な、何だ、あのアホな芸は……っ!?」

「いや、ただアホなだけではない！ 高度な技術がなければあれは不可能だ！」

「ほ、本当に見えないぞ！ 動体視力には自信があるのだが……っ！」

さらに俺の芸はヒートアップしていく。

側転や側宙、回転ジャンプなどのダイナミックな動き。  
時には新体操めいた優雅なポーズも。

「あんな動きをしているというのに、股間だけは完璧に隠しているなんて！」

「よく分からんがすごいぞ！」

「こんな芸があつたとは……っ！」

謁見の間がどんどん盛り上がっていく。

やがてそれが最高潮に達したとき、俺は最後の決め業を披露した。

両腕を大きく上げてのグ○コ走り。

お盆は風圧でどうにかくつついている。

「「「おおおおっ！」「」」

やがて裸芸が終わると、凄まじい拍手が巻き起こった。  
王様まで立ち上がり、手を叩いている。

「素晴らしい！」

「これが……これが裸芸！」

「異世界にはこんなものがあるのか……っ！」

さすがは裸芸、大好評のようだ。

異世界にすら通じる、まさに万国共通の芸だな。

「やめて！？ 日本のイメージが……っ！」

キョウコだけ頭を抱えているが。

「良いものを見せてもらった！ お主がいれば、きっと魔王も打ち倒せると信じておるぞ！」

「何で！？ 今でどうやって魔王を倒すのよ！？」

満足げな王様に、キョウコが全力でツッコむ。

「そう言えば、まだ聞いていなかったの。お主、名はなんと申す？」

「俺の名は」

王様に訊かれ、俺は答えた。

「カルナ１００％だ」

「絶対違うでしょ！？」

## 第113話 四つの試練

「四つの試練？」

「そうじゃ。さすがに勇者と云えど、真っ直ぐ敵地に乗り込むのは危険じゃ。やはりもつと強くなるための修行が必須じゃろう。そしてそのためにお主らが取り組むべきは、四つの試練じゃ！」

王様が言うには、この大陸の各地にそのためのダンジョンが存在しているらしい。

勇気。

知恵。

力。

運。

そのダンジョンには、この四つのテーマに乗った試練が用意されているとか。

誰が用意したのか知らんけど。

「生憎、ダンジョンに入れるのは勇者であるお主らだけじゃ！ 従って、勝手に行つて勝つてに攻略して勝手に強くなつてもらうしかない！ そしてそれが一番の強くなる道なのじゃ！」

「それって……要するに丸投げじゃ……」

JK三人組の中では一番大人しそうな少女、メグミがボソツと呟く。

「べ、別に、勇者の訓練に人員を裂くことができないとか、そういう訳ではないぞ!？」

王様は慌てて言い訳する。

さらに俺たちの不審の視線を避けるように、配下に命じた。

「お、おい、早く旅立ちの饞別を持ってくるのじゃ!」

俺たちは城を出て、フィールドに立っていた。

「本当にわたしたちだけなのね……」

「楽しみ!」

「……だ、大丈夫かな……?」

それぞれ期待と不安の表情を浮かべるJKズ。

魔王の侵略を受けつつあるのは大陸の西方だという。

ここから西へと向かいつつ、各地にある試練を攻略していくというのがこの冒険の基本的な流れとなるだろう。

「最初は北西に行ったところにある勇気の試練だな」

「勇気ならあたしに任せて! 失敗を怖がったことなんて一度もないもん!」

「茜ちゃん……それって、単にアホなだけじゃ……」

アカネは能天気で、メグミは意外と口が悪かった。

「よし、出発だ！」

「おーっ！」

「は、はい……」

「ちょっと待ったあああっ!!」

記念すべき冒険の第一歩を踏み出そうとしたそのとき、キョウコの声が響き渡った。

足を止め、振り返る俺たち。  
一体どうしたというのか。

「あんた、その格好で旅する気!？」

「そうだが？」

「なに当たり前なこと訊いているんだ、みたいな顔しないでよっ! ? 普通に考えておかしいでしょ! ? 裸じゃないの、あんた!」

「いや、ちゃんとお盆で隠してるだろ」

「そういう問題じゃないから! てか、茜と恵美もなんで自然に受け入れてるのよ! ?」

俺は王様に裸芸を見せたときのままの格好だった。

「王様から貰った防具はどうしたのよっ!」

「大したものじゃなかったから返した」

「どう考えても裸よりはマシだと思うんだけど! ?」

王様からの餞別は酷いものだとは相場が決まっているが、意外とちゃんとしたものをくれた。

どれも宝物庫に保管されていた一級品の装備らしい。

【魔法使い】のアカネは魔法使いっぽいローブと杖を、そして【治癒士】のメグミは僧侶っぽい服と槍を貰っている。

そして【剣士】のキョウコは剣と鎧だ。

「【遊び人】の俺にとってはこれが最も戦いやすいからな」

「さすがに防御力を無視し過ぎでしょ!？」

「いや、お盆は盾にも使えるぞ?」

「盾に使ったら隠すものが無くなるでしょうがッ!? って、お盆くるくるさせんなっ! メグミも横から見ようとしなっ!」

「……チッ」

「えっ、今なんか舌打ちしなかった!？」

「……気のせいです」

アカネが「はいはい!」と手を上げた。

「それ、あたしもやってみたい!」

「そうか。だが裸芸の道は辛く険しいぞ?」

「望むところだよ、師匠!」

「よし、では早速、修行開始だ。まずは服を脱いで裸になるところからだ」

「いえっさーっ」

「ぬ、ぐ、なッ!」

服を脱ごうとするアカネを、キョウコが全力で止めた。

「何で止めるのっ?」

「止めるに決まってるでしょうがッ!？」

「裸芸の修行ができないじゃん!」

「あんなのできなくていいから！ ていうか、あたしたち魔王を倒しに行くのよね！？ そんなことやってる場合じゃないでしょ！」

「あ、そっか」

「……チツ。もう少しで合法的にJKの裸を見れたのに余計なことを……」

「あんたも舌打ちしないッ！ しかもどこが合法なのよ！ この変態ッ！」

「俺は変態じゃない。なぜならJKを前にしても勃起していないから！ 疑うなら確認してもらってもいいぞ！」

「その発言がもう完全に変態なんだけど！？ ……だから確認させようとしなくていいからッ！ 誰も見たくないからッ！」

キヨウコは散々喚いてから、

「はぁ……もうその格好でいいから、早く行くわよ」

結局、俺はこの姿で魔王討伐の旅に出発したのだった。

「やはり男として俺が最前列を進むべきか」

「いやあんたは最後尾にいなさい！ 絶対に前に出ないでよー！」

そんなに俺のお尻を見たくないのか。

「っ！ 魔物よ！」

牧歌的な草原のフィールドを歩き始めて二十分ほど。  
キヨウコが叫んだ。

最初のモンスターに遭遇する。

でかい蛙だ。

俺の腰くらいの背丈があった。

「うえっ、気持ち悪い」

「……ですね……」

アカネとメグミが顔を顰めている。

「そ、そんなことで戸惑ってる場合じゃないでしょ！ 相手はモンスターなんだから！」

やや嫌そうな顔をしつつも、気丈に剣を構えるキヨウコ。

そこへいきなり蛙が飛びかかってきた。三メートルくらいの跳躍。

「きゃあっ！？」

ずばっ！

急にあんなにジャンプするとは思っていなかったのか、キヨウコは思わず悲鳴を上げたが、慌てて振った剣が蛙をあっさり両断してしまった。

「え？ た、倒せた……？」

自分でも驚いている。

「京っち、すごい！」

「……な、なんか、弱かったですね……」



まあ最初のモンスターなんてこんなものだろう。  
今まで剣を持ったことすらなかっただろうが、 剣技 スキルが  
あるため怖がりながらもちゃんと振れていたしな。

その後も彼女たちは遭遇するモンスターを、苦戦することもなく  
順調に倒していった。

俺はというと、ずっと応援に徹している。  
もちろん裸芸での応援だ。

「むしろ気が散ってマイナスなんだけど!？」

岩壁のど真ん中にぽっかり空いた穴。  
それが最初の試練であるダンジョン“ 勇気の洞窟 ”の入り口だった。

「入るにはこの岩壁を登らないといけないってわけね」  
「そ、それだけで、勇気が試されるよね……」

幸い岩がごつごつしているため、ロッククライミングに必要な足  
場は沢山ありそうだ。

「よし、じゃあ俺から登ろう」  
「ちよっと待ちなさい」

お手本も兼ねて、真っ先に登ろうとしたらキョウコに制止させられた。

「あんたは最後よ」

「何でだ？」

「上を見たらあんたのお尻が丸見えなんて、地獄じゃないの！」

人のお尻を何だと思っているんだ。

まあいい。

ここは素直に受け入れるとしよう。

「分かった。じゃあ俺は最後だ」

「あ、みんな、ちゃんとズボンに着替えてから登るわよ」

「くっ、機先を制された!？」

せつかくJKのパンツを拝める絶好のチャンスだったというのに！

「そもそもあんたその格好で登れるの？ 片手が塞がってんのに…」

…」

「いざとなったらお盆を放り捨てるから大丈夫だ」

「それはそれでやめて欲しいんだけど!？」

まあ本当はジャンプしたら届くんだけどな、あの高さくらい。

## 第114話 勇気の試練

ロツククライミングを経て辿り着いたダンジョンの入り口に何かいた。

真つ黒い球状の物体に、胴体がくっ付いた奇妙な生き物だ。

頭部と思われるその黒い塊には、目と口の他に、まん丸い鼻とほっぺが三つ並んでいる。

「ようこそ、勇気の洞窟へ！ 勇者には最も必要なもの！ それが勇気さ！ だからこれから君たちの勇気を試させてもらうよ！ あっ、ボクはこの試練のマスコットキャラクター、アンアンマンだよ！」

「アン アンマン？」

「違うよ！ アンアンマンだよ！」

どうやらあの頭、すべて餡でできているらしい。

「ちなみに外はこしあん、中はつぶあんさ！」

何で餡を餡で包んじゃったんだろうな……。

アカネが目を輝かせて、

「すごい！ お腹が空いたら顔を千切って食べさせてくれるのかなっ？」

「え？ ご飯を上げるのは親の仕事でしょ？ 何でボクがそんなことしなくちゃなんないの？」

……くれないらしい。

「しかも顔を顔を千切るとかwww グロ過ぎwww そんな奴どこにいのwww」

アン　ンマンがめっちゃデイスられてる……！

「ていうか、何でこの世界にこんなパロキヤラがいるのよ！？ しかも色々と酷いし！」

「……子供たちのトラウマになりそうです」

「アン　ンマンとやなせ先生に謝るべきだな」

「そんな格好している君にだけは言われたくないけどね？　もうそれだけで十分に勇者だよな？　試練必要ないよね？」

俺だって餡子剥き出しにしてる奴にだけは言われたくなかった。

『マスター、こういう言葉があります。“どっちもどっち”』

「……勇氣と言うより、単に恥を感じる機能が壊れているだけでは……？」

そしてメグミが一番手厳しい。

「さあ、最初の課題だよ！　向こう側に渡ることができればクリアだ！」

アンアンマンが指し示した先にあったのは、底がまるで見えない巨大な穴。

幾つもの柱がそれを貫いていて、そこを足場にしていけば向こう

へ渡ることができそうだ。

「わー、怖い」

「こ、これ、落ちたら死ぬわよね……？」

「……ひえっ」

柱の足場は人が一人どうにか立てるくらい大きさ。  
足場同士の距離はせいぜい一、二メートル程度なので、ジャンプすれば飛び移るのは簡単そうだ。

ただし恐怖は足を竦ませる。

確かに勇気が無ければ向こう側まで辿り着くのは難しそうだ。

「あたしから行くねっ」

アカネがぴよんぴよんと柱から柱へと飛び移っていく。

「よ、よくそんな平然といけるわね……」

「あ、茜ちゃんは、危険を危険だと感じられるだけの頭がないから

……」

「……」

怖がりながらも、それにキョウコとメグミが続いた。

アカネはすでに半分を超えている。

キョウコも【剣士】だけあって順調だ。

一番ビビっていたメグミだが、何とか頑張って進んでいる。

三人とも意外と高いところは平気なようだ。

そして俺はと言えば、まだスタート地点で、彼女たちがジャンプ

した瞬間に捲れ上がるスカートの中を覗こうと地面に伏せていた。  
パンチラ！ リアルJKの生パンチラですよ！

ちなみにすぐ隣ではアンアンマンが同じような体勢でパンチラを  
拝もうとしている。

おお、心の友よ！

「あんたら何やってんのよ！？ 死ね！」

キョウコがブン投げてきた剣がアンアンマンの頭部に突き刺さっ  
た。

四人とも無事に向こう岸へと渡り終えた。

「よく頑張ったね！ 最初の課題クリアだよ！」

頭に剣が突き刺さったままのアンアンマンが言う。

餡でできているので痛くないのだろうか、何ともシュールだった。

「まあこんな感じで何個か課題が続くから、適当に頑張ってよ（鼻  
ホジ）」

餡子の鼻くそを穿るアンアンマンに見送られる。

どうやら彼の役目はチュートリアルだけらしい。

別にそんなの要らないだと突っ込んではいけない。

「……あのマスコット、別に必要なかったですよね……」

あー、言っちゃった。

洞窟を先へと進んでいく。

すると突然、視界が真っ暗になった。

「きゃっ、な、何っ！？ 停電！？」

「いや最初から電気なんてないだろ」

さっきまではダンジョン的な謎パワーで視界が確保されていたの  
だろう。

だが今は完全な闇だ。

「どうやらこれが次の課題のようだな」

「こ、怖いですね……」

「どっちに進めばいいかわからないよー」

「ねえみんないる！？ いるよね！？」

「いるいる。とりあえず声は聞こえるみたいだな。互いに声を掛け  
合いながら進んで行こう」

「ぜ、絶対、置いて行かないでよ！？」

キョウコは高いところは平気だったが、どうやら暗闇は苦手らしい。

「ひいっ！？ な、何か柔らかいものに手が当たったんだけど！？」

「安心しろ。それは俺だ」

「な、なんだ、あんたか……」

「ただし俺の尻だけだな」

「いやああああああっ!？」

「怖いなら掴んでいいぞ？」

「何で手を繋ぐみたいな感覚で言ってるのよ!？」

しばらく暗闇が続き、やがて明るくなった。

「二つ目の課題クリア。楽勝だったな」

さらにその後も順調に課題を攻略していく。

具体的な内容は割愛するが、いずれも勇気の試練らしい課題だったと言っておこう、うん。

そして、ついに俺たちは最後の課題へ。

「よくここまで辿り着いたね。ここが最後の課題の場だよ」

「あっ、アン　ンマンだー」

再び登場したアンアンマン。

先回りしていたようだ。

「で、どんな内容なんだ？」

「ふふふ、それはね……このボクを倒すことさ!」

突如としてアンアンマンの身体が膨張を始めた。

筋肉が膨れ上がったのだ。

着ていた服が弾け飛ぶ。

「これは……亀　人っ!」

そう。



まさに、フルパワーでか はめ波を放つときの亀 人である。

「なるほど、お前はこのダンジョンのボスであるというわけか」

「その通り。オレを倒すことができれば、お前たちはこの勇気の試練を完全攻略したことになる。ただし、負けた場合は」

ムキムキになったアンアンマンが低くなった声で告げる。

口調も変わった。

「ここで死んでもらう」

周囲の空気すら変わる。  
本気だ。

「ちょ、ちょっと……」

「……っ、強そうです……」

その威圧感に、思わず後ずさるキョウコとメグミ。  
だが入り口の扉は固く閉じられており、ボス部屋から出ることができない。

「そんなことでは魔王を倒す事などできないぞ？」

ムキムキのアンアンマンが一步、前に出る。  
と、そのとき、

「ファイアーランス！」

「あぢい！？」

炎の槍がアンアンマンの頭部に直撃した。

放ったのはもちろん【魔法使い】のアカネである。

「熱い熱い熱い!？」

頭部に火が付いてしまったアンアンマンは、床の上をコロコロ転がって必死に消火しようとする。

「……え？」

「……？」

どうにか火を消すことに成功し、アンアンマンは立ち上がった。

「ほ、ほう。なかなか勇敢な者もいるではないか……」

強がってはいるが、声が苦しそうだ。

たった一撃で大ダメージを負ったらしい。

「もう一発いくよ!」

「あっ、ちよつとタンマ」

「ファイアーランス!」

「ぎゃーっ!？」

アンアンマンは悲鳴を上げて逃げ惑った。

「……もしかしてあいつ、弱い？」

「みたいですな」

「待てって言ってるだろ!？」

「ファイアー……」

「こ、降参! 降参するから、もうやめてくれ!」

アンアンマンはあっさりと白旗を上げてしまった。  
だがアカネはそれを無視して、

「ファイアーランス！」

「やめろって言っただろ！？」

「餡子って焼いて食べると美味しいんだよね」

「まさかお前、オレを食べる気か！？」

「うん」

「いやいやいや、普通、この姿見たら食欲なくすだろう！？」

「別に？」

「なくしてくれよ！」

アンアンマンは元の姿へと戻ってしまった。

「ふう、まったく、これだから最近の若い者は……。ともかく、この通りボクはとても弱い。要するに見た目に騙されちゃダメって教訓だね。どんなに相手が強大に思えても、決して怯まず、諦めないこと。これは勇者にとってとても大事なことだよ」

意外とまともなこと言ってる気がする。

どうやら強そうなのは見た目だけで、果敢に立ち向かう勇氣さえあれば簡単に突破できるものだったようだ。

「ということとは……」

「うん、勇氣の試練、見事クリアだよ！ おめでとう！」

これで二つ目の試練は無事突破のようだ。

「ねえやっぱり食べちゃだめなの？」

「ダメだって言ってるでしょ！」

「いけず。せっかく美味しそうに焼いたのに！」

## 第115話 くまの さん

「君たちにこれを授けよう」

そう言ってアンアンマンがくれたのは剣だった。

「“勇気の剣”さ。これがあればきつと魔王を倒すことができるはず。じゃあ頑張ってね」

アンアンマンに見送られて、俺たちは“勇気の洞窟”を後にした。

「これはキョウコの装備だな」

「まあ、あたししか剣を使える人はいないしね……」

キョウコは“勇気の剣”を装備した！

「すごい！ よく斬れそう！」

「……た、試しに、何か斬ってみたらどうかな……？」

「そうね。じゃあそこの変質者を」

「誰が変質者だ、誰が」

「どう見たって変質者じゃないのよ！」

ともかく、これで最初の試練を突破したぞ。

何か強そうな武器も手に入れたし、次の試練の場所へ

「ふはははは！ 貴様らの旅もここで終わりだ、勇者ども！」

突然、立ち塞がる巨大な影。

「な、何者よ!？」

「このオレは魔王軍四天王が一人、獣王ピーだ!」

「ま、魔王軍四天王!？」

「何で名前に自主規制が入ってるんだ？」

「違う! よく言われるが、ピーは名前だ!」

ずんぐりとした体躯。

鋭い牙と爪。

そして、全身を覆い尽くすはちみつ色の体毛。

ピーと名乗るそいつは 熊。

ていうか、くまの ピ さんだ。

「かわいい!」

「……かわいいですね」

「確かに、かわいいわね」

うん、どこからどう見ても紛うことなき愛くるしいクマさんだよな。

「だ、黙れ! 人が気にしていることを……っ!」

どうやら本人は見た目にコンプレックスがあるらしい。

それにしてもこんなところに魔王軍の幹部が現れるなんて……

「まあ最初に出てくるということは最弱ってことだな」

「な、なぜそれを!？」

凶星らしかった。

「だが貴様らひよっこ勇者どもを踏み潰すなど朝飯前よ！」

ピーさんは牙を剥いて叫び、襲い掛かってきた。  
それを迎え撃つJK勇者ズだったが、

「アチヨー！」

「きゃっ!？」

「ホワチャー！」

「ひゃっ？」

「アチャチャチャチャー！」

「くっ！」

いかに四天王最弱とは言え、魔王軍の幹部だ。  
こんな序盤で勝てるような相手ではなかった。  
手も足も出ず、一方的にやられる勇者たち。

ていうか、なんでカンフーなんだ……。

「ふははははは！ どうしたその程度か！」

「っ、強い……」

「……勝てる気がしないです……」

「どうすればいいの？」

ピーさんはドヤ顔で勝ち誇る。

「どうやらまだ勇者が弱い序盤の段階に倒しておくという、オレの  
作戦に間違いなかったようだな！ オレってば頭いい！」

「うー、ズルいよおっ！ 強い敵はもつと後から出てくるはずじゃ

ないの！」

「ふはははは！ なぜわざわざ勇者が育つのを待たねばならんのだ！」

「ごもつともである。」

彼女たちだけでは敗北は必至。

仕方がない。

ここは俺の出番だな。

「俺が奴を引き付けておく！ その間にみんなは逃げるんだッ！」

こつという場面に相応しい感じで言ってみた。

「なっ……ま、待ちなさい！」

「キョウコ、止めてくれるな。俺がやらねば誰がやる」

「そうじゃなくて、その格好で前に出ないでって言ってるのよ！」

俺のぷりぷりのお尻から慌てて目を逸らすキョウコ。

そっちかー。

「……さっきからずっと気になっていた。しかし触れては負けだと思っ  
て触れなかったのだが……何だ、貴様は？」

先頭に出てきた俺を見て、ピーさんが訝しげに誰何してくる。

俺はカッコよく名乗りを上げた。

大声で。

「空前絶後のオオオオオッ！ 超絶怒濤のチン芸人ッ！ 裸を愛し、



裸に愛された男オツ！

全裸、半裸、ノーパン、すべての裸の生みの親アツ！　そう我こそはアツ！

身長172センチ！　体重62キロ！　貯金残高5万4千円！  
キャッシュカードの暗証番号は0281ツ！！　財布は向こうの世界の自宅に置いています！　今がチャンスです！　もう一度言います！　0281ツ！　『おっぱい』と覚えてくださあああい！

そうすべてをさらけ出した俺は！　カルナ~~~~~100ツ、ボフォツ！　%ツツツ！！

イエエエエエエエエエエイツ！！

ジャステイス！！！！　「（両手をお盆から放すも、身体を反らすことで落とさない）」

ふっ……………決まったぜ。

「……………さあ、女勇者どもよ、続きをしようではないか」

な……………無視、だと……………？

『無理もないかと』

「それにしてもそのもふもふの身体……………抱き付いたら気持ちよさそうだな」

「やめろ！？　それだけは絶対にやめてくれ！」

何か物凄い勢いで拒否られた。

「そもそも何で貴様は裸なんだ！？ 変態か！？」

「お前だつて裸だろ。ナカーマ」

「オレは獣だからいいの！ 貴様と一緒にするな！」

けど、くまの<sup>ビ</sup>さんはちゃんと服着てたぞ。

いや下半身は何も付けてなかったか……。

「くそ！ 物凄く相手にしたくないが、まずは煩わしい貴様からぶち殺してやる！」

ピーさんが巨体を躍らせて迫ってくる。

「に、逃げなさい！ 何の武器も持っていない遊び人のあんたじゃ瞬殺されるわ！」

「心配するな。武器ならちゃんとある」

「どこによ！？」

「これだ！」

俺はお盆をブーメランのごとく投げ付けた。

「それは投げちゃダメでしょうがああああっ！？」

隠すものを失ってしまったが、背に腹は代えられない。  
そう、仕方がないのだ。

キョウコの怒号が轟く中、お盆が回転しながら一直線にピーさんへ。

「ふっ！ くだらん技だ！」

それをピーさんは鼻を鳴らして迎え撃とうとして

ザンッ。

「は……？」

胴体が真つ二つに両断された。

「「え、えええええええっ！？」」「

「ま、まさ、か……こ、こんなもので……？」

ピーさんの巨体が崩れ落ちる。

「バカめ。どういう技が見切れんのか」

俺は決め台詞（？）とともに戻ってきたお盆をキャッチし、再び股間を隠す。

「いやいやいや！？ それお盆よね！？ 何でお盆でそんなことができるの！？」

「む、無念……ぐふ……」

こうして俺たちは四天王最弱のピーさんを倒したのだった。

「獣王が勇者どもにやられたようだ」

「まさか、もう勇者はそこまでの力を……？」

「だがあいつは四天王最弱……」

## 第116話 知恵の塔

「ここが二つ目のダンジョン、“知恵の塔”だな」

俺たちの目の前には、天高く聳え立つ巨大な塔があった。

「知恵……俺の得意分野と言っても過言じゃないな」

「……あの、いかにも頭の悪そうな格好で言われても……」

メグミの指摘は相変わらず厳しい。

「でもこれ、どうやって中に入るのよ？」

「ほんとだー？ 入り口がないよ！」

キョウコが言う通り、塔の周辺をぐるりと回ってみるが、入り口らしきものがまったく見当たらない。

三百六十度すべてがただの壁になっているのだ。

「なるほど。中に入るところから試練は始まっているということだな」

変わったものがあるとすれば、塔の近くに立っている石像だろう。七、八歳くらいの少年の像だ。

「……み、見てください。ここに、ヒントらしき文言が……」

メグミに言われて像の台座に注意を向けると、そこには確かにそれっぽいことが書かれていた。

『我、試練の闇に覆われし刻、知恵の道を示さん』

「……どういう意味でしょう……？」

「全然わかんない」

「闇っていうことは、もしかして夜まで待たないといけないってこと？」

首を捻って考えるJK三人だが、なかなか答えらしきものに思い当たらない様子。

「はっ、随分と簡単だな」

「えっ？ あんたこの意味が分かったの？」

「まあ見てろって」

「すごい！」

「……そんな格好してるのに……」

彼女たちの称賛の視線にお尻を向けると、俺は塔へと近づいていく。

「ちよっ、だから前に立たないでって……」

そして拳を強く握り締めると、

ずいとおおおおおんっ！！

壁をぶん殴って穴を開けた。

「えええええええええっ！？」

「どうだ。入り口が現れたぞ」

「どうだも何も物理で作っただけじゃないの！？ 問題は！？ さ  
っきの問題、解けたんじゃないの！？」

「問題が解けたとは一言も言っていない」

「ていうか、この壁、殴って破壊できるようなものの……？」

俺が開けた穴から塔の中へ入る。

『ちなみに塔の作る影があの子の石像を覆ったとき、少年が動き  
出して外壁にある入り口を開くためのスイッチの場所を教えてください  
る仕掛けになっていました』

いや分かってたけど？

ほら、その時間まで待つのも面倒だしさ？

「さて。今度はどんなマスコットが出てくるんだろうな」

と、あんまり期待せずに呟いたときだった。

「真実はだいたい一つくらい！」

こ、このフレーズは……！

まさか！

「名探偵コナン！」

そうして俺たちの前に現れたのは、蝶ネクタイに半ズボン姿の

おっさんだった。

太っているし脂ぎっているし、なんかブヒブヒ言ってそう。

あと禿げてる。

「これのどこがコ ン君なのよ!？」

「もしかして未来のコ ン君？」

「さすがにあんな風にはならないでしょ!？」

「……どう見ても事件を解決してくれるというより……法を犯すタイプの人です……」

こら、メグミ。

それは偏見だ。

…… たぶん。

「吾輩はコ ンではないでござる! 頭脳は大人、下半身も大人! その名は江路川コカン!」

いや全部大人じゃねーか。

しかもなんで苗字が日本人っぽいんだよ。

あと“ござる”口調って。

突っ込みどころが多過ぎて間に合わん。

「常に理性と欲望が高い水準でせめぎ合っている! それが吾輩なのでござるよ!」

「ねえ、アンアンマンと言い、何でこんな変な奴ばつかなの……?」

「……この試練を作った人、頭おかしい……」  
散々な言われようだが、コカン君は気にした様子も無い。  
さすがあの見た目だけあって、デイスされるのには慣れているのかもしれない。

「それにしてもよく塔内へ入ることができたでござるな。物理で入り口を作る。うむ、それも立派な答えでござる! 真実はだいたい



「一つくらいだが、答えは一つとは限らないのでござるよ！」

おっ、何か意外とまともなこと言ったぞ。

「知つての通り、ここは“知恵の塔”！ お主らの頭脳を鍛えるための場所でござる！ 強大な力を持つ魔王を倒すには知恵も必要不可欠でござるからの！」

それを聞いて、アカネが「うへえ……」と舌を出した。

「あたしの苦手な奴だ。でもメグっちは得だよな？」

「そうそう。恵美はいつもテストで学年一桁だし」

「べ、勉強とは違うと思うよ……」

テストなんて懐かしいな。

「ちなみに俺も高校時代はずっと一桁だったぞ」

「うそ？ あんたが？」

「点数がな！」

「……よくそれで卒業できたわね……」

「単位を取る方法は一つとは限らないんだよ」

そう、真実は一つでも答えは一つではないのだ。

「では早速、最初の試練を与えるでござる！ その扉に入るでござる！」

コカン君がコカンをもっこりさせながら叫んだ。

「ござるござるウザいし何でももう勃ってんだよと思いつつ扉を開けてみる。」

するとその先にはさらに二つの扉があった。  
ただし扉にはそれぞれと×が書かれている。

「いわゆる×ゲームでござるよ！これから吾輩が問題を出すでござるから、正解だと思った方の扉に入るでござる」

なるほど。

何となく知恵っぽい試練だ。

「それでは第一問でござる。『A君、B君、C君の三人が、股間の大きさを比べてみました』」

「どんな状況よ！？」

「いや、やるだろ？ほら、女が胸の大きさ比べたりするみたいに」「し、しないわよっ！」

A君「僕のが一番大きかった」

B君「僕のが一番小さかった」

C君「僕のはA君より大きく、B君より小さかった」

「『この三人の内、正しいことを言っているのは二人だけで、一人は嘘を吐いている。そして、それはC君である』……さて、これはでござるか、それとも×でござるか？」

つまり、嘘つきがC君だと思えば○の扉を、別の二人のうちのだちらかだと思えば×の扉を開けるということだな。

「ふん、これもまた簡単な問題だな」

俺は高らかに答えを告げた。

「俺のが一番大きい！」

「そんなこと誰も聞いてないわよ!？」

「確認してみるか？」

「しないから！　そもそも比べようがないでしょ!？　だからお盆外そつとするなあああっ！」

キョウコは溜息を吐いてから、少し自信ありげに言った。

「堂々と自分が一番大きいと言ってるAが怪しいわね」

「……京子ちゃん、そういう心理の問題じゃなくて、論理パズルだよ、これ……」

「xなら勘でもいけるよ！」

「あつ、ちょ、茜!？」

アカネが勝手にxの扉を開けてしまった。

『正解は○ですね。A、C、Bの順で大きいです。つまりC君が嘘をついています』

だよな。

もちろんわかってたさ。

てかこれ、間違えると何が起こるんだろ？

「わつ、何かでつかいのがいる!？」

扉の向こうに待ち構えていたのは、巨大な亀のようなモンスターだった。

「ちよつ、何よあれ!？」

「タラクスか。亜竜の一種だな。つまり不正解だとこんな風に強い魔物と戦う羽目になるということか」

「その通りでござる! 倒さない限り、次の問題には進めぬでござるよ!」

キョウコとメグミがアカネをジト目で睨んだ。

しかし能天気なアカネはまったく気にした様子はなく、

「でも倒せばいいってことだよね!」

その通りだ。

ゴールする道は一つじゃないからな。

## 第116話 知恵の塔（後書き）

いよいよ今週、書籍版が発売されます！

発売日が13日なのか15日なのか分かりにくいですが、たぶん13日（金）です！

よろしく願います！

## 第117話 ハーポット

×問題の後も、俺たちは知恵（というよりほとんど物理）を駆使して試練を突破していった。

「というわけで、次が最後の課題でござるよ！」

今度も前回同様、マスコットがラスボスとして立ちはだかるのだろうかと思っていると、

「これがその舞台でござるよ！」

巨大な四角いリングへと連れて来られた。

リングは白黒の市松模様になっており、両側に向かい合うようにして複数の人間大サイズの“駒”が並んでいる。

「……しよーぎ？」

「違うわよ。チェスよ、チェス」

「ちえす？」

「え？ 茜、チェス知らないの？ ボードゲームよ。西洋版の将棋みたいなやつ。あたしもやったことないけど……」

「……わ、わたしも無いよ……」

チェスの駒の種類は、ポーン、ナイト、ビショップ、ルーク、クイーン、そしてキングの六つ。

ポーンは八つあるが、その他の駒は二つずつ。

ただしキングとクイーンは一つずつだ。

相手のキングを追い詰めればチェックメイトとなって勝ちである。

「片方のキングがないぞ？」

「ふっふっふ、これはただのチェスではないでござるよ！ お主らのうちの誰かがキングの駒になって戦うのでござる！ 名付けて、リアルバトルチェス！ どうでござる？ なかなか面白い趣向でござろう？」

ハーポッーのパクリだろ……

と、誰もが思った。

あと、ござる口調でチェスの説明をするのは致命的に合っていない。

「ちなみに他にも普通のチェスと違うところがあるでござる。各駒にはHPと呼ばれるものが設定されていて、実際に攻撃することによって相手の駒を倒すのでござる。ただし攻撃にはワンターン必要で、攻撃できる範囲は移動範囲と同じでござる。駒のHPがゼロになると盤上から自動的に消えてしまうでござるよ。そして当然、キングも攻撃を受けるでござるし、死んだら負けでござる」

長々と説明してくれる。

……死ぬところまでやるのかよ。

「ちょ、そもそもチェスの基本ルールすら知らないんだけど！？」

「そこにルールブックがあるでござる」

「……い、今から覚えて、しかも命を懸けて戦えと……随分と酷い試練ですね……」

「これくらい乗り越えることができずして、魔王を倒せるはずがないでござろう？」

俺はお盆で股間を隠しながら前に出た。

「よし、俺がやろう」

「あんたチェスのルール知ってんの!？」

「知らん」

「知らんって……」

「だが昔よく婆ちゃんとおセロをやっていたが、8割は俺が勝っていた」

「……それ別に自慢にもならない気が」

「まあ俺に任せておけって」

ボードの上、キングの位置に立つ。

「それでは対局開始でござる! 先手はお主に譲るでござるよ!」

チェスは先手の方が大きく有利だと聞いたことがある。

そこは少しハンデを付けてくれるようだ。

「ま、どっちみち必要ないけどな。必殺、お盆チョップ」

そう呟きながら、俺は目の前にいるポーンにお盆を叩き付けた。

説明しよう!

必殺、お盆チョップとは、その名の通りお盆を縦方向に持って相手にチョップを見舞うというものだ。

なおこのとき俺の股間のガードは甘くなっている。

『甘いどころか丸見えです』

HPがゼロになったらしく、ポーンはあっさり消滅する。

「「「……は?」」」



初手、自駒が邪魔だったので倒しました。

キングの駒である俺は真っ直ぐ突き進んでいく。

一手で一マスしか進めないものでちよつとまどろっこしい。

「キング自ら向かってくるなんて、何を考えているでござる!?!  
しかも自駒を破壊するとか意味が分からんでござるよ!　そもそも  
幾ら最弱の駒であるポーンと言えど、一撃で倒されるとかどうい  
うこととござるか!?!」

さすがのコカン君も驚いている。

いや、何も考えてないけど?

思考加速・極 スキルを使えばチェスなんて楽勝なんだが、面倒  
だし。時間かかるし。

前進を続ける俺の前に敵のポーンが立ちはだかった。

剣を手にする兵士の駒。

俺のターンでこいつの目の前に移動したので、次は相手のターン。

「……こんなに簡単に決着が付いてしまっているのかとは思って  
ござるが、これも勇者のための試練。手心は加えぬでござる!　ポ  
ーン、攻撃でござる!」

ポーンが剣を振るって攻撃してくる。

背後からJKたちの悲鳴。

「秘技、お盆ガード」

パキン！

俺がお盆で受け止めた瞬間、ポーンの剣が真つ二つに折れた。

「「「へ？」「」」

説明しよう！

秘技、お盆ガードとは、その名の通りお盆を盾のように扱って敵の攻撃をガードするというものだ！

なおこのとき俺の股間はガードされていない。

「どうだ？ 凄いだろ、俺のお盆は。攻撃にも防御にも使える最強の武器だ」

「いやいやいや！？ そんなお盆があつて堪るかでござる！」

「じゃあ、次は俺のターンだな。必殺、お盆チョップ」

お返しとばかりにポーンの脳天にお盆を叩き込み、消滅させる。

「また一撃で！？ どうなってるでござる！？ 第二の試練の段階で、勇者がここまでの戦闘力を有しているなど、完全に計算違いでござるよー！」

コカン君が驚いているが、気にせず敵陣に突っ込んでいく。

キングは一マスずつしか動けず、また攻撃もすぐ隣のマスにしかできないルールなので、ルークやビショップから遠距離攻撃をされると反撃もできない。

当然のごとく集中砲火を受けるが……しかしダメージゼロ。

「ちよつ、最大の攻撃力を誇るルークでも無傷！？ お主一体、何者でござる！？」

「俺か？ 俺はカルナ100%、遊び人の勇者だ」

「遊び人！？」

ついにはクイーンまで攻撃してくるが、無視して敵のキングへと一直線。

王冠を被ったおっさんの駒だが、追い詰められて一瞬、頬が引き攣ったようにも見えた。

「奥義、お盆首狩り」

お盆でおっさんの首が飛んでいく。

説明しよう！

奥義、お盆首狩りとは、その名の通りお盆で敵の首をチョンしちゃうというものだ。

なおこのとき俺の股間は（ry

敵のキングが消滅する。

チェックメイト（？）である。

「うーむ……最後の試練がほとんど知恵（物理）で攻略されてしまったというのは残念でござるが、クリアはクリアでござる」

アンアンマンのとき同様、試練を乗り越えた俺たちに、コカン君はあるものをくれた。

「“知恵の杖”でござる」

「これは【魔法使い】のアカネ用だな」

「わーい！」

アカネは“知恵の杖”を装備した！

「試してみる！ ファイアーランス！」

「ぎゃっ！？ ちょ、何で拙者目がけて撃つでござるか！？」

「すごい！ 威力が上がってるよ！」

こうして無事に“知恵の塔”をクリアした俺たち。  
だが塔を下りて次の試練に向かおうとしたところ、やはり立ちはだかる影があった。

「私は魔王軍四天王が一人、仮面ライ

ぶちっ。

「ふえ？ さっき何か声が聞こえた気が？」

「どうしたの、茜？」

「うーん……………何でもないよ！」

「どうやら蟲王までもが勇者どもにやられたようだ。……だが心配は要らない。よく考えてみたら、あいつこそ四天王最弱だしな」

「まあバツタだから……サイズも……」

第117話 ハーポット（後書き）

書籍版が発売中です！ よろしくお願ひします！

## 第118話 モヒカン骸骨

「まさかオラが負けるとは思わなかったな。てえしたやつだ」

“力の迷宫”で、バナナではなく人参を食っている猿という謎のマスコットキャラクターを倒し、俺たちは三つ目の試練をクリアした。

「……この武器、誰が装備すればいいのよ？」

「重そう！」

クリア後に貰ったのは“力の鉄球”とかいう重量武器だった。

鎖に巨大なトゲトゲの鉄球がくっ付いた武器で、振り回して敵を攻撃するのだろう。

「【遊び人】の俺には装備できそうにないな」

「あんた、片手が常に塞がってるものね……」

「じゃ、じゃあ……私、ですかね……？ 基本、何も持っていないですし……」

【治癒士】のメグミは武器らしい武器を持っていなかった。

護身用のナイフを腰に付けているくらいだ。

「使えるの？」

「試しにやってみたらいいんじゃないか」

「……はい」

「ヤホホホホホ！」

おつ、ちょうどいいところに敵っぱいのが現れたぞ。

「泣く子も漏らすルルンバ海賊団船長代理！　　だったこともある現魔王四天王が一人、冥王ブルドックとはこの私！　皆さんのお命頂戴に参りました！」

身長三メートル近いモヒカンヘアーの骸骨だった。

「三人目の四天王……？」

「えっ？　二人目じゃないの？」

いや二人目はアカネが倒しちゃったからね。  
ぶちっ、って。

それはそうと、プ○さん、仮面ラ○ダーと続いて、何でブ○ックなんだよ。

そこは主役のル○イが出てくるところだろ。

「まだお若い方の命を奪うなんて、とても尻が痛みますが……まあ私、尻なんてないんですけどね！　ヤホホホ！」

いや、まんまブ○ックのスカルジョークじゃねーか。  
ただし慣用句は間違えている。

「こう見えて私、実はアンデッドなんですよ！」

「いや、見りゃ分かる」

「……えい」

メグミが手に入れたばかりの“力の鉄球”を振り回し、モヒカン骸骨目がけて投げ付けた。



「ヤホホホ！ 皆さんが死んだら、ちゃんと骨を拾って　グボア！？」

横合いから飛来した鉄球が直撃し、モヒカン骸骨が吹っ飛んでいく。

「つ、使えそうです……」

「すごい！ メグっちパワフル！」

「しかも相手、骨だけだからか、簡単に吹き飛ばされたわね……」

モヒカン骸骨が起き上る。

鉄球を喰らった側の骨がバキバキに折れていた。

「ちよつ、まだ台詞言い終わる前だったのにいきなり何するんですか！？　びっくりし過ぎてう　こ漏れそうでしたよ！　いえ私、う　こなんてしないんですけどね！　ちなみに今のはスカトロジョー　ギャウツ！？」

もう一発喰らい、モヒカン骸骨は再び吹っ飛ばされる。

「だから台詞の途中はやめてと！？」

「……すいません……ジョークがつまらなくて……つい……」  
「ガーン……」

モヒカン骸骨はショックを受けたのか、頭を抱えた。

「酷い……もう私、生きていけない……いえ、すでに死んでるんですけどね！　おっと、さすがに鉄板ネタ過ぎましたか？　ヤホホホホ！」

「えい」

「ノオオオオツ!？」

三度、鉄球を喰らうモヒカン骸骨。

「ぐぬぬっ……あなた方は私を怒らせましたよ！ 出でよ、スケルトンたち！」

あちこちの地面が盛り上がったかと思うと、五十匹以上もの骸骨たちが地中から這い出してきた。

「逝け！ ホネホネ部隊！ もう逝っちゃってますけどね？ ヤホホホホ！」

「……えい！」

メグミの鉄球がスケルトンたちをまとめて薙ぎ払った。  
モヒカン骸骨より遥かに脆いようで、あっさり粉碎されて粉々になる。

「ノオオオオオオツ!? ちょ、私のホネホネ部隊が！ なんてことを！ 遺族になんてお詫びしたらいいのか！ 考えるだけで禿げそうですよ！ こんなときこそ育毛剤を頭皮にしっかり塗り込んで……って、私、頭皮なんてありませんけど！ ヤホホホホ！ これぞスカ プロジョーク！」

こいつ、うぜえ。

「ヤホホホホ！ 冗談はここまでにしておきましょう！ 私、本気を出しちゃいますよ！」

メグミにやられたスケルトンたちの骨が動き出した。  
そしてモヒカン骸骨の身体に集まっていく。

やがてそこに現れたのは、身長十メートルを超す巨大骸骨だった。

「これぞ私の奥義、骸骨合体！ こうなったからには、もは手加減なんてできませんよ！ ヤホホホホ！」

「手加減も何も、お前、さっきから一方的にやられていただけだろ」

それからは意外と普通のバトルになった。

キョウコ、アカネ、メグミが戦い、俺が後ろで裸芸を披露する。

ここまで一緒に戦ってきただけあって、随分と連携が良くなってきた。

『マスターは別に連携などしていないのでは？』  
「いや、こう見えてすげえ力になってるんだよ」

「ノオオオオオツ！？」

モヒカン骸骨の身体が断末魔の悲鳴と共に崩れていく。  
どうやら倒せたらしい。

「……ヤホホホ……私を倒すとは、さすがは勇者……。しかし、  
それでは魔王様には太刀打ちでき」

「次が最後の試練だね！」

「“運の神殿”ってここから南西の方角よね？」

「……運の試練って、どんな感じなのかな……」

「運なら【遊び人】の俺に任せておけ」

「 ちよつ、無視しないでくださいよおおおっ！ あとまだ生きてます！ しばらくしたら復活します！」

物理攻撃では倒せないようなので魔法で浄化しておくことにした。

「 イヤアアアアアア！？」

「 冥王ブルドックもやられたか……」

「 まったく、どいつもこいつも四天王の名に泥を塗りおつて……」

「 だが俺様は他の連中とは違う」

「 四天王最強の名をほしいままにするこの私が、今度こそ勇者どもを血祭りに上げてくれよう」

「 とところで何で一人なのに台詞が分かっているかつて？」

「 くくく、我ほどになれば一人で何人もの役を演じ分けることが可能なのだ！」

「 ……一人って、寂しいな……」

俺たちはついに最後の試練となる“運の神殿”にやってきていた。神殿というだけあって、神聖さを感じさせる荘厳な外観だ。果たしてどんな試練が待っているのか、緊張とともに俺たちは神殿内へと足を踏み入れる。

「なっ……」

「これが……」

「……最後の試練……？」

そこで俺たちが見たものは

天井からぶら下がる巨大なシャンデリア。いかにも高級そうな大絨毯に覆われた床。ずらりと並ぶ様々な形状のテーブル。勢いよく回転するルーレット。そして、無数のスロットマシン。

「……カジノ？」

そう。

そこは巨大な賭博場だったのだ。

「ぼくウサえもん！」

……何かウサ耳の生えた某青い狸みたいな生き物が現れたんだが。

## 第119話 カジノ

神殿の中はカジノになっていた。

そしてウサ耳の生えた謎の生き物が出迎えてくれる。

「ぼくウサえもん！」

見た目は某青い狸そっくりであるが、色々とバランスが悪いせいでキモイ。

なあ、この大陸はもしかして中国なのか？

どう考えてもパクリばかりだし、パクリにしてもクオリティがアレだし。

そのウサえもんは言う。

「世の中やっぱりお金だよな、お金！ 道具を買うにもお金！ いじめっ子をぎゃふんと言わせるにも金！ 金持ちの自慢話を『そのくらい僕のうちでは日常のことさ』と鼻で笑ってのけるにもお金！ 好きな女の子に振り向いてもらうにもお金！ そう！ お金があれば何でもできるのさ！」

こんなド えもんは嫌だ。

「という訳で、最後の試練は至ってシンプルさ！ ここカジノで、君たちにはお金をたあああっぷり稼いでもらう！ 1000億バニーだ！」

「1000億バニーって、多いのか少ないのか分からないんだが」「じゃあ君たちは今どれくらいお金持つてる？」

「40万ゴールドくらい」

ゴールドはこの大陸各地で共通して使われている通貨の単位だ。文明レベルが違うが、まあ日本円と同程度と考えてもらえばいい。何だかんだで結構貯まっている。冒険もすでに終盤戦だしな。

「10ゴールドで1バニーだから、全額換金しても4万バニーだね」  
「マジか」

つまり250万倍に増やせてこと？  
おいおい、どんな無理ゲーだよ。

「そうは言っても、やるしかないわね……」  
「カジノ楽しそう！」  
「……やったことないですけど……」

とりあえず換金することにしたのだが、アカネが勝手に全額をバニー通貨に変えてしまった。

「ちょっと！ どうやって生活するのよ!？」  
「その心配はいらないぴょん!」  
「ぴょん?」

ウサエもんによれば、このカジノ内には宿泊施設やレストランなどもあるという。

そしてすべてバニー通貨で支払うことができるそうだ。

「それから換金以外にも、バニー硬貨を手に入れる方法があるぴょん!」

なぜか唐突に語尾にぴょんを付け始めたウサえもんだが、その辺はとりあえずスルーして、俺たちはカジノの奥に連れていかれた。

「ここは……ダンジョンか？」

「そうだぴょん！ この先はダンジョンになっていて、モンスターも出るぴょん！ そしてこのモンスターを倒せば、必ずバニー硬貨を落とすぴょん！」

「なるほど。じゃあバニー硬貨が無くなったらその都度、ここで稼げばいいってことだな」

「ザツツライト！ ……ぴょん。もちろんさすがにそれで1000億バニーまで貯めるのは難しいぴょん！」

つまりここはあくまで元手を確保するためのもので、1000億バニーに達するためには、やはりカジノで大勝ちしないとダメだということだ。

カジノの方へと戻ると、とりあえず4万バニーを四人で分けることにした。

一人一万バニーずつだ。

「ダンジョンに潜れば幾らでもお金が入手できるんだ。ちまちまやらずに、どんどん賭けて行こうぜ」

「おーっ！」

という訳で、各々好きなゲームで遊ぶことに。  
そして数時間後。

「ゼロになっちゃった！」

「……同じく」



「私事です……」

三人ともすっからかんになっていた。

「見事に大負けしたなー」

「そういうあんたはどうなのよっ!？」

「ふっふっふ。聞いて驚くなよ?」

「まさか、大勝ちしたの……?」

「クレーンゲームをコンプリートしたぜ!」

そこには空っぽの筐体と、大量のぬいぐるみがあった。

「何をしてんのよ!？ てか、何でクレーンゲームなんてあるの!？」

「完全な娯楽用だぴょん!」

「意味ないじゃない!」

「ちなみに一万バニー注ぎ込んだ」

「バカなの!？」

いやさ、最初はちよつとやってみるかー、くらいの気持ちだったんだぜ?

でもほら、中毒性あるじゃん、クレーンゲーム。

やってるうちに終われなくなっちゃって、気づいたら最後までしてたんだよ。

「しかもこのぬいぐるみ、どれもパチモンじゃないの……」

「欲しいならあげるぞ、このツルピ チュウ」

「要らないわよ！？ 何なのこの耳のない禿げたピカ ュウは！？」

しかし弱ったな。

これで完全に無一文になってしまった。

「今からダンジョンに潜るんですか……何だか、疲れました……」

「早く休みたいよー」

「仕方ないじゃない。宿代もないんだから……」

「そんな場合に備えて、無料の部屋も用意してあるぴょん」

「本当！？」

ウサえもんに案内されたのは、物がごちゃごちゃと積み上げられた窓もない狭い部屋。

部屋っていうか、どう見ても倉庫だった。

「適当に寝てくれていいぴょん！」

「ほ、埃だらけなんだけど？」

「適当に掃除すればいいぴょん！」

「毛布とかは？」

「そんなのあるわけないぴょん！」

「あの、食べ物……？」

「もちろんないぴょん！ あ、でも水ならトイレがあるから大丈夫ぴょん！」

「トイレの水……お、お風呂は……」

「ないぴょん！」

なんもねー。

キョウコがウサえもんに詰め寄った。

「こんな場所で寝れる訳ないでしょ！　だいたい男女いるんだから、せめて二部屋くらい貸しなさいよ！」

「……あ、あん？　無一文のてめえらにわざわざ施してやってんのはこつちだぞ？　調子に乗ってんじゃねえぞ、コラ？」

「ひっ？」

ウサえもんがキレた。

「という訳で、我慢するぴょーん！」

さつさと立ち去ろうとするウサえもんだったが、ふと何かを思い出したのか立ち止まって、

「そうそう。お金さえあれば、極上のスイートルームに泊まれるようになるぴょん！　部屋には露天風呂やプール、さらにはメイドや執事まで付けられて、無料でマッサージだって受けられちゃうぴょん！　もちろん、美味しい物もたーくさん食べられるぴょん！」

その言葉に皆の目の色が変わった。

「おはようございます、ご主人様」

「うむ、おはよう」

メイドの声で俺は目を覚ます。

ふかふかのキングサイズベッドで寝ていた俺の目に真っ先に飛び込んでくるのは、窓いっぱい広がる青い空だ。  
カーテンから差し込む朝日が心地よい。

ベッドの上で身を起こすと、メイドがグラスを差し出してくる。  
受け取るとワインを注がれる。

「うん、良い香りだ」

三十年物の高級ワインを朝から嗜む。  
それがここ最近のマイブーム。

優雅に朝ワインを楽しんだ俺は、ベッドから降りてその場に立つ。  
するとさかさずメイドが傍にやって来て、寝間着を脱がし、服を着せてくれる。

「本日はどちらで朝食をお召し上がりになりますか？」

「今日はこの部屋で食べよう」

「畏まりました。すぐにお持ちいたします」

寝室から出ると、そこには広々としたリビングルーム。

家具や調度品はどれも最高級品。

しかし自己主張し過ぎることもなく、内装としつかりと調和している。

そう。

ここは最高級のスイートルーム。

朝食&メイド付きで、何と一泊1000万バーニーもするのだ。

屈辱の倉庫から始まったカジノでの戦い。

だが今や俺は、たった一日で軽く数千、数億万バニーを稼ぎ出す最強のギャンブラーとなっていたのだった。

【遊び人】の運の強さは伊達じゃない。

「決めた。一生ここで暮らそう」

「って、そんな訳にはいかないでしょうがああああっ！」

「どうしたキョウコ。ここは俺のスイートルームだぞ？ 最近ようやく一泊数千バニーの格安ルームに泊まれるようになったお前の来る世界じゃないぞ？」

「くっ……あたしだって、もっと勝ってダイエットと美肌効果のある岩盤浴とかしたいのにつ……って、そうじゃなくて！ そんなに勝ちまくってるならとっとと1000億バニー貯めて試練をクリアしなさいよ！」

「は？ なに言ってるんだ？ 1000億バニーくらい、とっくに貯まってるに決まってるだろ？」

「貯まってるのかい！？」

「言っておくが、お前にはやらないぞ？」

「そういう話じゃなくて！ 魔王！ あたしら、魔王を倒すために旅をしてるんじゃないが！」

「……………ハッ？」

そう言えば……………そうだったな……………うん。  
忘れてました。

「何で忘れてんのよおおおおっ！？」  
「てへへろ」

## 第120話 魔王…？

「おら、1000億バニーだ。持ってけ、ドロボー兔！」

俺は大量のバニー硬貨をウサえもんにブン投げた。

「ぐばおっ！？ …… た、確かに、1000億バニーだぴょん！  
合格！ 合格だぴょん！」

硬貨に埋もれながらもウサえもんが試練攻略を宣言する。

「さすが最後の試練だったな。今までで一番時間がかかってしまった」

「…… あんたが本来の目的を忘れたからでしょうが」

キョウコがジト目で睨んでくる。

「結局スイートルームに泊まれなかったからって僻むなよ」

「ひ、僻んでなんかないし！ スイーツバイキングができなかったからって、別に全然これっぽっちも気にしてないし！」

スイーツバイキングやりたかったのか……。

「そうそう、これがクリア特典の装備だぴょん！」

ウサえもんが思い出したように何かを手渡してくる。  
それは鏡のように磨き抜かれた銀色の丸いトレイだった。

「“運のトレイ”だぴょん！」

「何でトレイなのよ!？」

「食事を運ぶという本来の用途以外にも、盾や投擲武器としても使えるぴょん！」

「だから何でトレイなのよ……」

「ちなみにう　ことがトイレとかとは全く関係ないぴょん」

「分かってるわよ！」

「問題は誰が装備するかだが……」

「どう考えてもあんたしかないわよね？」

いや、アカネがモノ欲しそうな顔で見てるぞ？

「茜には杖があるでしょうが」

「これじゃ隠せないよ！」

「別に隠す必要なんてないでしょっ!？」

そんな訳で、俺が装備することになった。

それまで使っていたお盆に別れを告げ、“運のトレイ”を新たに身に付ける。

何となく防御力が上がった気がする！

しかし今まで頑張ってくれたこのお盆には愛着がある。  
もちろん捨てる訳がない。

「よしよし、お前はこれから食事を運ぶ用途で使ってあげるからな」  
「それだけは絶対にやめてよ!？　たとえ洗っても嫌だから生理的に！」

「酷い……このお盆が何したっていうんだよ！」  
「お盆っていうかあんたのせいでしょうが!？」

そして、すべての試練を攻略した俺たちは、とうとう魔王城へとやってきたのだった。

「こ、ここが魔王城ね……」

「それっぽい！」

「……ほ、本当に私たちだけで魔王を倒せるのかな……」

JK三人組は不安そうな顔で、眼前に聳え立つ巨大な城を見上げている。

「よし、気合を入れるためにみんなで円陣でも組むか」

「あんただけはごめんなんだけど」

この最終局面でまだ好感度が上がり切ってないだと……！？

『そもそも好感度が上がるようなエピソードは一切なかったかと』

なんだと……？

それじゃあエンディングで誰ルートにもならないじゃねえか！

「ていうか、あんた結局、最後までその格好を貫いたわね……」

「これが俺の勝負服だからな」

「服も何も、裸じゃないのよ！」



俺たちは魔王城へと突入した。  
さすが魔王城だけあって複雑な内部構造をしており、強力な魔物が次々と現れた。

だが四つの試練を乗り越えた今の俺たちは、立ち塞がるあらゆる脅威を跳ねのけ

「ついに来たぞ。ここが魔王の間だ」

「ひ、広い……」

「あーっ、あーっ！ 声が反響する！」

「ちょ、茜、デカい声出さないでよっ」

魔王城の最奥。

いかにもラスボスがいそうな雰囲気の大広間へと辿り付いていた。

「ここまで来たか、人間の勇者よ」

低く太い声が響いた。

そして薄闇の中、突如として浮かび上がるのは巨大なシルエット。

「この大魔王バラメス様に逆らおうなど、身の程を弁えぬ愚か者どもめ。ここに来たことを悔やむが良い」

「こ、こいつが魔王っ………？」

「何か、カバミたーい」

「だ、ダメだよ、茜ちゃん………！ 滑稽な姿を笑ったら塵にされちゃう………！」

「誰がカバだ！ 誰が滑稽な姿だ！ 二度とそのような口を効けぬよう、その腸を喰らい尽くしてくれるわ！」

魔王バラメスが襲い掛かって来た！

「茜、恵美、サポートをお願い！」

「了解！」

「う、うん！」

……あれ、俺は？

俺だけ“めいれいさせろ”じゃないの？

「あんたは“かってにしてなさい”よ！」

そうしてJK三人組＋俺はバラメスに立ち向かった。

バラメスの攻撃！

キョウコは184のダメージを受けた！

バラメスは激しい炎を吐いた！

キョウコは109のダメージを受けた！

アカネは77のダメージを受けた！

メグミは98のダメージを受けた！

カルナはダメージを受けない！

キョウコの攻撃！

バラメスに102のダメージを与えた！

アカネはライトニングバーストを唱えた！

バラメスに84のダメージを与えた！

メグミはオールヒールを唱えた！

キョウコの傷が回復していく！

アカネの傷が回復していく！

メグミの傷が回復していく！

カルナには効果がなかった！

カルナは裸芸を披露した！

キョウコ、アカネ、メグミは無視した！

バラメスは見とれている！

バラメスの攻撃！

キョウコは上手く回避した！

キョウコの攻撃！

バラメスに108のダメージを与えた！

アカネはエクスポーションを唱えた！

バラメスに123のダメージを与えた！

メグミの攻撃！

バラメスに58のダメージを与えた！

カルナは裸芸を披露した！

キョウコ、アカネ、メグミは無視した！

バラメスは見とれている！

バラメスはファイアーキャノンを唱えた！

アカネは234のダメージを受けた！

キョウコの攻撃！

バラメスに99のダメージを与えた！

アカネはエクスプロージョンを唱えた！

バラメスに121のダメージを与えた！

メグミはオールヒールを唱えた！

キョウコの傷が回復していく！

アカネの傷が回復していく！

メグミの傷が回復していく！

カルナには効果がなかった！

カルナは裸芸を披露した！

キョウコ、アカネ、メグミは無視した！

バラメスは見とれている！

「って、何なんだ貴様はさっきから戦闘中にふざけた踊りを踊りお  
つて！？ 見せそうで見えないし、ついついドキドキハラハラして  
見入ってしまうではないか！？ お陰で一回攻撃しかできぬではな  
いか！」

バラメスが咆えた。

「まさか、あんたの裸芸が魔王に効くなんて……」

「裸芸は人種の壁すら超えるんだよ」

ドヤ顔でお盆を一回転させる俺。

「目障りだ！ 貴様から死ねい！」

バラメスはファイアーキャノンを唱えた！

カルナのお盆が魔法を跳ね返した！

バラメスは214のダメージを受けた！

「ぐおおおっ！？ ま、魔法を跳ね返したと！？ どんなお盆だ！？」

使つとマホ○ンタのと同じ効果を発揮します。

「……ま、まあいい。見たところ他に武器はないし、攻撃してくる気配はない。とりあえず放っておこう。あの芸も単に見なければ良いだけだ。そう、嫌なら見なければいいのだ」

バラメスは俺を放置することにしたようだ。

「ところで魔王バラメスさんや」

「なんだ？ って声をかけて来るな！ 今、必死に貴様を意識外に追いやる努力をしているところなのだ！」

「俺、他に魔王を名乗ってる奴を知ってるんだけど。魔王って勝手に名乗っていいものなのか？」

「……なんだと？ く、くくく、くははははは！ どこのどいつか知らぬが、我を差し置いて魔王を名乗るなど片腹痛い！ 相対する機会があれば圧倒的な力の差で一捻りしてくれるわ！」

「そうか。じゃあちよっと呼んでみる。おい、魔王！」

「なに？」

「む！ カルナよ！ 余を呼んだのはお主か！ また余と勝負してくれる気になったのか！」

召喚魔法で呼び出したのは、見た目こそ少女だが、魔界の頂点に君臨する真の魔王。

「まあ後でな。その前に、そいつと戦ってやってくれ」

「お？ 何ぢや、そこにいるのはもしかしてバラメスぢやないか？」

「知ってるのか？」

「うむ！ 余の勢力圏内に領地を持つ男爵級悪魔だったのぢやが、圧政が酷過ぎて余自ら叱りに行ったことがあるのぢや！」

バラメスの顔が見る見るうちに真っ青になっていく。

「まままま、魔王様あああああつ！？」

「違っんです。ついほんの出来心だったんです。一度でいいから魔王になり切って見たかったんです。ええ、地上でならきつと誰にもバレないだろうって。この小さな大陸を狙ったのは強い人間がいないだろうと思ったからです。はい。決して魔王様を貶めようとか、成り代わってやろうとか、そんなつもりは毛頭ありませんでした。許して下さい」

魔王、いや、男爵級悪魔バラメスは土下座していた。

「ふむ、どうやらお主らには迷惑をかけたようぢやの。こやつは余

が魔界に連れ帰ってきつちり再教育するのぢや」

「ひiiiiiiiiっ！」

本物の魔王はバラメスの首根っこを掴むと、ずりずりと引き摺っていく。

魔界へと通じるゲートっぽいものが開き、その向こうへと消えていった。

「……終わったな」

「いやいやいや、予想外の展開過ぎて付いて行けないんだけど！？あいつ魔王じゃなかったの！？あの幼女が本物の魔王！？しかもあんたと知り合いなの！？」

「まあ細かいことは気にするな」

「全然細かいんだけど！？」

「……これ、わざわざ四つも試練を攻略する必要はなかったんじゃない？」

「でも楽しかったからいいじゃん！」

こうして、勇者たちの戦いは終わった。

キョウコ、アカネ、メグミ。

そのJK三人組の名は、魔王を倒した異世界の勇者として、彼女たちが地球へと帰還した後も人々から讃え続けられたという。

え？ 俺？

なんか【遊び人】じゃカッコつかないからって、歴史の闇に葬ら

れたよ。

最後まで登場しなかった四天王「えっ？俺がトイレ入ってる間に魔王様やられた？」



## 第121話 ダンジョンクリエイト

「俺、ダンジョンを作ろうと思うんだ」

「また唐突に何を言ってるんですか……」

ティラがジト目で見てくる。

「てか、久しぶりだな、ティラが登場するの」

「……それはカルナさんのせいですね？ 一体どこ行ってたんですか？ 魔界に行くと言ったつきり、全然帰ってこないから清々していたところだったんです」

「そこは心配してくれるところだと思っぞ？」

俺は端的にこれまでの冒険譚を伝えた。

「ちょっと勇者召喚に巻き込まれて女子高生たちと一緒に偽物の魔王と戦ってた。全裸で」

「……何一つとして理解できる要素がないんですが……」

おかしいな？

全部ちゃんと真実なのだが。

「女子高生っ？ 女子高生って何ですのっ？ 聞いたことないですけど、何となくエロい響きがしますわぁっ！」

ルシーファが鼻息荒く訊いてくる。

さすがの嗅覚だ。

初めて聞いた単語なのに、その卑猥さを感じ取るとは。

「分かるのか？」

「もちろんですわ！ 聞いただけで濡れてしまいますのおおっ！」

内股気味になってハアハアと息を荒らせるルシーファ。

『……別に女子高生という言葉自体は卑猥でも何でもありません』

「ですがわたくしにはピンピンに感じ取れますわ！ 一見清らかそうな言葉の背後にある淫らな欲望の渦が！ これは……そう！ 処女！ 処女という言葉の持つ卑猥さとよく似ていますの！ ですが女子高生にはそれ以上のものを感じます！ ああ！ 女子高生！ わたくしも女子高生と したいですのおおおっ！」

……こいつ、天界に拉致られて以降、更生されるところか、下手したら前より変態に磨きがかかっている気がする。  
やっぱり抑圧されるとかえってよくないのかもしれない。

ちなみにここは俺の家になった竜王の城だ。

魔界にも城はあるのだが、あつちは暗くて辛気臭いので、こつちの方がお気に入り。

スカイアイランドという空に浮かぶ島の上にあるからな。

今日も俺の分身が作った料理を食べるため、大勢のドラゴンたちが訪れている。

「もぐもぐもぐ」

「うめえうめえ」

「うまいのです！」

「おかわりなのだ！」

シロとクロ、それからクロの妹のチロちゃんもいる。  
こいつらずっと食ってる気がする……。

そしてそんな大食いドラゴンズの中に、なぜかエレンまで交じっていた。

てか、なんか前に見たときより随分と太ってる気が……。

「フィリアがいないな？」

「フィリアちゃんなら部屋でパパと遊んでますよ」

「え……？」

ティラの言葉に俺は凍り付いた。

「な、なぜだティラ！？ 俺の何がいけなかったんだ！？ あんなに愛し合っていたというのに、離婚して他の男とくっ付くなんて……っ！？」

しかも親権までその男に奪われてしまったとか！

「愛し合った覚えも結婚した覚えもないんですけど！？ だいたい、フィリアちゃんが遊んでいるのはあなたの分身です」

なんだ、そういうことか。

「びっくりした。てっきり自宅で堂々と不倫しているのかと」  
「……だから結婚してないですから」

ティラは溜息を吐いてから、

「それで、ダンジョンを作ろうってどういうことですか？」

「おお、そうだったそうだった。いや、そのまんまの意味なんだけど」

俺の持つスキルの一つ、ダンジョンクリエイト・極。これを使ってダンジョンを自作してみようと思ったのだ。

『ダンジョンは異空間内に作られますので、入り口はどこでも構いません。もちろん城や塔など、外観を作成することも可能です』

なるほど。

じゃあ、とりあえず練習としてこの城内で作ってみるかな。

『ダンジョン生成には、ダンジョンポイント DPが必要です。』

このDPを消費することで、部屋や魔物を作り出すことができます『ふんふん』

『DPを稼ぐ方法は二つあります。一つは自身の魔力をDPに変換する方法です。レートは魔力1＝1DPになります。二つ目はダンジョン内に入ってきた生命体を吸収する方法です。獲得DPは相手の魔力量に応じ、こちらが魔力1＝1DPのレートです』

「よし、とりあえず俺の魔力をすべてDPに変換しよう」

カルナ

魔力：1 0 1 2 3 9 / 1 0 1 2 3 9                      9 / 1 0 1 2 3 9

所有DP：0                      1 0 1 2 3

『ではまず入り口を作成してください』

穴：10DP

階段：20DP

扉：30DP

穴を作ってみると、床に穴が現れた。

本当にただの何の変哲もない穴だ。

穴の向こうは真っ黒い空間になっている。

一応、壁に作ることもできるらしい。

階段も試してみたが、これも非常にシンプルなのができた。  
十段ほどの長さで、その先はやはり真っ黒い空間だ。

「これって決まったものしか作れないのか？」

「いえ。ディテールの変更も可能です。その際は具体的にイメージしていただければ。ただし消費するDPが跳ね上がります」

どうせ大量にDPはある。

穴と階段を消して、螺旋階段を作ってみることにした。

「おー、できたぞ」

床に穴が開いて地下へと続く階段が出現する。

頭の中でイメージした通りに螺旋を描きながら、1000段くらい。

「……長すぎかと。こんぴらさんですか」

「まあ練習用だから、練習用」

てか、こんぴらさんて。

ちなみにDPは500ほど消費した。

階段を下りた先に通路を作ってみた。

一直線に20キロほど。

DPは1000使った。

『長すぎかと。国道12号線ですか』

「練習だから、練習。ていうかナビ子さん、日本のこと詳し過ぎかよ」

国道12号線は北海道にあるという日本一長い直線道路である。  
長さは30キロ弱。

「この通路を抜けた先がボス部屋だ」  
『シンプルに嫌なダンジョンですね。先が見えず精神的に苦しそうです』

「確かにちょっと退屈かもな。よし、ちょっと仕掛けを施してみるか」

やってみると5000DPもかかった。

だが 魔力回復・極のお陰ですでに俺の魔力は全快している。  
この分だとDPが枯渴することはなさそうだな。

あとは魔物を適当に配置して、と。  
よし、これでできあがりだ。

いったん城に戻る。

「ダンジョンができたぞ」  
「もうですか!？」

報告したらティラが驚いた。

「挑戦してみるか？」

「やめておきます」

「そんな即答しなくても……」

「カルナさんが作ったダンジョンなんて、どう考えてもロクなモノじゃないでしょう」

「いや、別に変なの作ってないって。……今は」

今は？ と眉根を寄せるティラを後目に、俺は食堂へ。

「エレン。ちょっといいか」

「もぐ？」

口の中を食べ物でいっぱいにながら、エレンがこちらを振り返る。

まだ食ってたのかよ。

「……やっぱ太ったな」

「す、少しだけだぞ!？」

「少し？ どう見ても以前の倍以上に膨らんでるだろ」

「そそそ、そんなに!？」

「あーあ、この腹、ぶよぶよじゃねーか」

エレンのお腹をむにと摘まんでみた。

前は筋肉の上に薄く脂肪が付いている程度で、しっかり引き締まっていたというのに今や見る影もない。

「二の腕も」

ぷにつぷにだ。

「おっぱいも」

ぽよんぽよんだ。

「何で普通に触ってるんですか!？」

エレンは完全におデブちゃんになってしまっていた。

「お前、剣の修行のために騎士団長を辞めて国を出たんじゃなかったのか？」

「そ、そう言えっ!？ くっ……あたしとしたことが、食への誘惑に負けるなど……もぐもぐ」

言ってる傍から食ってるし。

「そんなお前に良いダイエット法があるぞ」

「ほ、本当か!？ もぐもぐ」

名付けて、"ダンジョンダイエット"である。



## 第122話 ダンジョンダイエット

どすん、どすん、どすん、という、とても女の子の足音とは思えない音を響かせ、ダンジョン入り口へと向かうエレン。  
やがて入口へと辿り着くと、

「……はあ、はあ……す、少し休憩させてくれ」

と言つて、その場にしゃがみ込んだ。

「もう疲れたのかよ!？」

「だ、だって、身体が重くて……もぐもぐ」

「そう言いながら食うな」

「ああ」

どこからともなく取り出して食べ始めた肉まんを、俺は横からひつつた。くっ。

エレンは悲しそうな声とともに肉まんを目で追う。

「ダンジョンを無事に攻略することができたら、最高に上手いものを食わせてやるから」

褒美で釣る作戦。

「ほ、本当か!？」

「ああ」

「よし！ 俄然、やる気が湧いてきたのだ!」

エレンは気合を入れて立ち上がろうとする。  
だが、

「……た、立てない」

自力で立つことすらできないのか……。

ともかく、エレンの“ダンジョンダイエット”が始まった。

「ひぎい……こんなの、無理い……」

1000段続く螺旋階段の300段辺り。

そこで限界がきたらしく、エレンは座り込んでしまった。

「まあそうなるだろうな」

「あの身体ですからね……」

階段部はダンジョンの入り口であって、まだダンジョンの中ではない。

ちょっと長くし過ぎたかもしれん。

ちなみにダンジョン内の様子は遠見の魔法でリアルタイムに確認できる。

しかもスクリーンに映し出すこともできるので、大画面でエレンの全身を堪能することが可能だ。

……今はまったく色気を感じないが。

「お腹すいたのだ……」

「エレン、頑張れ」

魔法で声を飛ばす。

「もうあと200段ほどで給食ポイントが待っているぞ」

給水ポイントならぬ給食ポイントである。

「……献立は？」

「豆腐サラダ」

「いやーだーっ！ もつとがつつりしたものが食べたいのだ！  
カツ丼！ ピザ！ ラーメン！ チーズインハンバーグ！」

こいつダイエットする気ないだろ。

「じゃあ階段を下りきったらカツ丼を食わせてやる」

「頑張るのだ！」

エレンは勢いよく立ち上がった。

カツ丼を食べるためにダンジョンでダイエットをする姫騎士。  
もはや何言ってるか分からない。

それからエレンは三時間近くもかかったものの、とうにか階段の  
一番下まで辿り着いた。

ぜえぜえと息を荒らげ、びっしょりと汗を掻いている。

「カツ丼！ カツ丼！！ カツ丼！！！」

頭の中はカツ丼でいっぱいのような。

仕方がない。

約束だから食べさせてやろう。

「もぐもぐもぐ！ おかわり！」

三十秒で平らげてしまった。

しかもおかわりを要求してくる。

「ある訳ないだろ」

「……そ、んな……」

絶望的な表情を浮かべるエレン。

そんな彼女に再び“アメ”を。

「ずっと直線が伸びてるのが見えるだろ？ このダンジョンはそ

れだけなんだが、一キロ進むごとに給食ポイントが設けられている」

「……どうせまた豆腐サラダとかなのだろ……」

「次の給食ポイントはピザだ」

「よし、頑張るのだ！」

……ダイエットの前に食への欲望をどうにかしなければなら  
ない気がする。

どこまでも長く伸びる通路を、エレンはゴール目指して走り  
歩き出した。

「ひい、ひい、ひい……」

ひいひい言いながら歩き続けるエレン。  
十分ほど経ったところで振り返った。

「ど、どうだ？ もうすぐ一キロではないか？」

「いや全然だぞ」

「なっ」

まだ二百メートルほどしか進んでいない。

「くっ……」

エレンは再び歩き出す。

さらに十分ほど経ち、

「こ、今度こそ、もうすぐだろう！」

振り返ったエレンは目を見開く。

「これだけしか進んでいないのか！？」

「ようやく五百メートルつてところだな」

「ぐぬぬ……ピザまでの道のりがこんなに遠いとは……！」

完全に目的が変わっている。

「ピザ……ピザ食べたい……とろりとしたチーズ……さっぱりした  
トマトソース……」

虚ろな目をして歩き続けるエレン。

そしてついに一キロ地点に辿りついた。

「ピザだあああああっ！」

俺が用意しておいたピザに凄まじい勢いで喰らい付くエレン。  
巨大サイズにしておいたというのに、あっという間に平らげてしまった。

「げふ……ああ、やはり何かをやり遂げた後のメシは最高なのだ……」

その場にごろりと横になってしまふ。

「おい、まだやり遂げてないからな？ ダンジョンはもちろん、ダイエツトもまだまだこれからだからな？」

しかも今のピザで軽く2000キロカロリーは追加されただろう。

「分かっているのだ……だが今はしばし、休息を……」

と、そのときだ。

通路の先から人影が現れたのは。

「そう言えば言い忘れていたが、このダンジョン、ちゃんと魔物も出るからな」

「なにっ！？」

オークである。

豚頭の魔物は通路で寝転がるエレンを発見し、鼻を鳴らした。

「ブヒ（でぶ）」

「今こいつ、あたしを見てデブって言わなかったか！？ オークに！ オークにデブって笑われた！」

あまりの屈辱だったのか、エレンは目を剥いて叫ぶ。

「いや、エレン。言いたくないが、はっきり言おう」

俺は心を鬼にして断言した。

「今のお前、オークよりデブだからな」  
「ふがつ！？」

エレンは豚のような悲鳴を上げた。  
乙女（？）としてさすがにショックだったのだろっ、ぶるぶると全身を震わせている。  
贅肉がぶるんぶると揺れた。

「ぜ、ぜ、絶対に痩せてみせるのだあああつ！」

それからエレンは暴食の罪を悔い改め、頑張った。  
時々襲いくる魔物を倒しながら、長い長い通路を懸命に進んでいく。

給食の量も減らした。

しかしなかなか前に進まない。

というのも実はこの通路、地面が逆ベルトコンベアになっているからだ。

しかも先に行くほど速度が上がるといいう仕様である。  
なので下手なペースではむしろ後退してしまう。

『なかなかの鬼畜仕様ですね』

「だがこれ乗り越えたとき、エレンは元の美しい身体を取り戻すはずだ！ 頑張れ、エレン！ 負けるな、エレン！」

ちなみにBGMはZ R Dの『けないで』である。

そして、数時間後

ついにエレンがゴールまであと一歩のところまで迫っていた。

「エレン！ もう少しだ！」

「エレンさん、あと少しです！」

「ママがんばってーっ！」

「ん」

最後の声援をエレンに飛ばす。

俺だけでなく、みんなも一緒になって応援してくれている。

「はあ、はあ、はあ……」

最後の力を振り絞って走るエレン。



ベルトコンベアの速度もかなり上がっているため、苦しそうだ。

それでも少しずつ終わりが近づいてくる。

あと100メートル。

あと50メートル。

あと10メートル。

あと5メートル。

そして、エレンがついに通路の終着点へと辿り着く

バンッ、と通路の先にあるボス部屋の扉が開いたかと思うと、中から巨大なスライムが飛び出し、エレンに強烈なタックルを見舞った。

「ぐげっ!？」

吹き飛ばされるエレン。

数十メートル先に落下した彼女は気を失い、そのままベルトコンベアに運ばれてスタート地点へと戻っていった。

「そっいや、部屋に入ろうとしたらボスがいきなり飛び出して攻撃してくるっていう、初見殺しのトラップを仕掛けてたんだっけ」  
『マスター、鬼畜です』

## 第123話 コスプレダンジョン

「痩せた！ 痩せたのだ！」

エレンが嬉しそうに飛び跳ねている。

少し前までは同じことをすれば、地面が揺れ、贅肉が揺れ、息が切れていただろうが、今はとても軽快だった。

「安心するのはまだ早いぞ。隠れたところに贅肉が残っているかもしれない」

「の、残ってなどないぞ！」

本人はそう主張しているが、しっかりとチェックせねばなるまい。

「ふむ。太腿は大丈夫のようだな。二の腕は……ここも問題ない」

余計な肉は無くなり、しっかりと引き締まっている。

「ふふん、どうだ。完璧だろう？ あたしは完璧に乗り越えたのだ！」

ドヤ顔で胸を張るエレン。

「いや、一番落とすのが大半なのが腹周りの肉だ。見せてみる」

「な、何でそんなところまで見せねばならないのだ！？」

「……やっぱ落ちてないのか」

「ちゃんと落ちてるのだ！」

「嘘を吐け。見せられないのはまだぶよぶよしてるからだろ？」

「そんなことはない！　だったらその目で確かめてみる！」

エレンは服を捲ってお腹を見せた。  
可愛らしいおへそが露わになる。

「どうだ！　お腹もこの通りだ！」

「おお、確かに贅肉がなくなってるな」

太鼓腹が完全に引っ込んでいる。

「だが胸はどうだ？　胸はまだ贅肉だらけなんじゃないか？」

「だったらその目で確かめ　　って、その手に乗るかあああつ  
！　そもそも胸は最初からすべて脂肪なのだ！」

ちっ。

さすがにアホエレンでも引っ掛からなかったか。

「……できれば胸の肉も落として、小さくしたいのだが……」  
「その発言、全世界の貧乳女子に恨まれるぞ」

そう。

ついに彼女はダイエットに成功したのである。

「良かったな、エレン。これでデブって呼ばれなくなるな」  
「そんな呼び方していたのか！？」

それもこれもダンジョンダイエットのお陰だ。  
このダイエット法、きつと現代日本で売り出したら大反響間違いなしだな。

『……どうやって売り出すのかに目を瞑ったとしても、問題だらけかと。何より地球人にはハード過ぎです』

エレンはぶんぶんと剣の素振りを始めた。

「少し鈍ってしまったから、その分を取り戻さなければならぬ！」

そんな彼女に、俺はちょうどいい訓練方法があると教えてあげる。

「また新しいダンジョンを作ったんだ」

「面白い！今のあたしならどんなダンジョンでもどんと来いだ！」

自信満々に胸を叩くエレン。

「……どう考えてもまたロクでもないダンジョンしか想像できないんですが……」

横からティラの溜息が聞こえてきた。

エレンが足を踏み入れた先にあつたのは、鬱蒼と木々が茂る森林フロア。

例のごとくスクリーン越しに俺たちは見ている。

「獣系のモンスターが出現するフロアだ」

「ふむ」

「なので、エレンもそれに相応しい格好をしてもらった」  
「へ？ って、何だこれは！？」

エレンの頭にはケモミミが、お尻には尻尾が付いていた。  
さらに身に纏っている服はもふもふの毛皮になっている。

「獣人のコスプレだ！」

「こすぷれ……？」

「なかなか似合っているぞ」

「ほ、本当か？ って、そんなことはどうでもいい！ この手袋は何だ！？ これでは剣が持ちにくいではないか！」

手には肉球ぶにぶにの手袋を嵌めていた。

「外れないのだ！？」

「このダンジョンでは強制的に衣装が変更されるようになってる。当然、外すことはできない」

「何だと！？ それでは訓練にならないだろう！」

「甘ったれるな！」

「っ！？」

「実戦で必ずまともに剣を振れる状況だと思うなよ！ そうした状況に対応できてこそ、真の剣士と言えるだろう！」

「な、なるほど……！ さすが師匠なのだ！」

エレン、マジでチョロイぜ。

「……で、実際は何の意図があるんです……？」

「強いて言えば俺の趣味だ」

「そんなところだろうと思いました」

森の中を獣人コスで駆け回るエレン。  
うん、なかなか可愛いな。  
いい静画がたくさん手に入りそうだ。

森林フロアを攻略すると、次に待ち受けているのは雪山フロアだ。  
もちろん、ここでは別のコスチューム。

ちなみに衣装は自動で変更される。  
エレンは真っ赤な服に身を包んでいた。

「こ、これは一体何なのだ……？」

「サンタクロースだ！」

「さんたくろーす……？」

「クリスマスになると、女は皆それを着て、好きな男に『今夜のプレゼントは、あ、た、し』と身体を捧げるんだよ。リア充死ね」

『マスター、それは本来のクリスマスではありません』

「な、なんと破廉恥な衣装なのだ……っ！？」

戦慄するエレン。

恥ずかしそうにしながらも彼女は白銀の世界を駆け回った。

続いては砂浜フロア。

当然のごとく水着である。

「ひゃう！？ あ、相変わらず布面積が少なすぎないだろうか！？」  
「問題ない問題ない」

水着姿で砂浜を走るエレン。

下からの素敵アングルや胸のアップ、いただきました！

さらに病院フロア。

エレンは白衣の天使の姿へ。

最近絶滅を危惧されているナース服だ。

『病院フロアですか……もはや何でもありですね』

「なんだここは！？」

ファンタジー世界の住人であるエレンは、見たことのない無機質な建物に戸惑っている。

……どうでもいいが、ドジっ娘属性のあるエレンには医療行為をしてもらいたくないな。

ただしぜひ尿瓶だけはお願いしたいハアハア。

ちなみに病院フロアには、それらしいアンデッド系のモンスターが出現する。

「ぎゃああああっ！ 来るな！ こっち来るなあっ！」

そう言えば、エレンはお化けが怖い子だった。

「ぐすんぐすん……」

泣きながら病院フロアを突破したエレンが続いて足を踏み入れたのは、屋敷フロア。

ここではメイド服のコスチュームである。

「はい、カメラに向かって、『お帰りなさいませ、ご主人様』」  
「何の話だ!？」

さらに学校フロア。

もちろん制服である（夏服）。

「さらに雨を降らす!」

『室内ですが?』

「関係ない!」

エレンはあつという間にびしょびしょに。

白い制服が透けて下着が見えている。

「そう! これだ! やはり雨に濡れたJKの透けブラこそが最強!  
ティラたんにもぜひやってもらいたい!」

「絶対にやりませんッ!」

こうして七変化で俺の目を楽しませてくれたエレンは、ついに最後のフロアへと辿り着く。

「ここでの衣装は………全裸だ!」

「そのどこか衣装ですか      ッ!？」

自分が真っ裸になってしまったことに気づき、エレンは慌てて大事な部分を手で隠した。

「な、何だこれは!？」

「それが最後の衣装だ!」

「裸ではないか!？」

「いや、そうじゃない。よく見る。ちゃんと服を着ている」



「どこがなのだ!？」

「そうか……エレンには見えないのか……」

「!？」

「それはな、実は“馬鹿には見えない”服なんだ」

「な、何だと……!？」

「つまり“馬鹿以外にはちゃんと見える”はずだ」

もちろん真つ赤な嘘です。

しかしアホの子であるエレンはそれを信じてしまったらしく、

「い、いや! よく見たらあたしにも少し見える……気がするのだ!  
! う、うむ! これが最後の服か! なるほど!」

むしろ“馬鹿にしか見えない”服と言ってもいいかもしれない。

「ちなみに最後は都市フロアだ」  
「なっ!？」

大勢の人々（NPC）が行き交う中へ、全裸のエレンは放り出されていた。

## 第124話 ただいま信者募集中

「エレンさん！ 騙されないでく むぐむぐ!？」

俺は余計なことを言おうとしたティラの口を塞いだ。  
ティラさんの唇が手に……！  
後でペロペロしよう。

「ふがはがふが！（絶対に洗ってください!）」

何か言ったかな？

「ちなみに最後は都市フロアだ」

「ひ、人がいっぱいいるのだ……!」

「安心しろ。すべてNPCだ」

「えぬ、ぴーしー……?」

「簡単に言つと偽物つてことだな」

西洋風の大都市を、多数のNPCが行き交っている。

真っ裸なエレンに気づくこともなく、それぞれがそれぞれの役割を演じていた。

「だから安心して裸体を晒していいぞ」

「今、裸体つて言つたのだ!？ 本当にあたしは服を着ているんだよな!？」

「おっと、その通りだ。うん、ちゃんと服着てる着てる」

だから手で隠す必要ないぞ。

「し、しかし……ご、これは……その……な、なんというか……」

誰にも見られていないとしても、やはり恥ずかしいのだろう。

エレンは身をよじって生まれたての小鹿のようにふるふる震えている。

「ちなみにダンジョンボスは都市の中央に見えるあのお城にいる。敵は兵士たちだから気を付けろよ。これもNPCだけど」

そう告げた直後、道の向こうから武装した集団が姿を現した。

「いたぞ！ 罪人だ！ 捕えろ！」

「こつち見てるうううつ！」

「大丈夫だ。向こうは裸だとは思ってない。戦うんだ」

「だとしてもこんな格好で戦うのは嫌だああっ！」

エレンはぷりぷりのお尻を見せて逃げ出した。

「追え！」

全裸の少女を追い駆ける兵士たち。

なかなか力オスな光景だ。

「あああ！ わたくしも！ わたくしも全裸で大都市を駆け回りたいですわああっ！」

変態ルシーファが大興奮している。

「やりたいなら後でやらせてやるぞ」

「ほんとですよ！？　ちなみにNPCを襲つても大丈夫ですよ？」

「残念ながら攻撃は不可能なんだ……服を脱がすこともできない……」

「それは残念ですわ……」

「……会話の内容、酷過ぎませんか？」

ティラが半眼でツツコンでくる。

その間にエレンは兵士に取り囲まれてしまっていた。

「くっ……これでは剣が抜けないのだ！」

剣を振るおうとすれば、大事なところを手で隠すことができなくなる。

葛藤するエレン。

「服を着てるから大丈夫だつて」

「本当だな！？　本当なのだな！？」

「まさかエレン、その服が見えないのか？」

「いいや、見えている！　間違いない見えているのだ！　あたしは馬鹿ではないからな！」

馬鹿じゃん。

エレンはついに剣を抜いた。

抜群のプロポーションを誇る裸体が、余すところなく白日の下に晒される。

俺も股間の剣を抜きた（ry

「とああああっ！」

エレンは兵士たちを蹴散らしていく。  
剣を振るう度に巨乳がぶるんぶるんと躍動し、もうこりや辛抱堪らん。

すべての兵士を倒したエレンはキツと鋭い目を都市の中心にそびえる王城へ向けた。

「こ、ここまで来たからには、必ずボスを倒してやるのだ！」

覚悟を決めたのか、エレンは胸や下半身を隠すことをやめて走り出した。

次々と現れる兵士を吹き飛ばしつつ、城に向かって疾走する。

「だんだん気にならなくなってきたぞ……っ！」

多くのNPCがいる大通りを真っ裸で通過するエレン。  
どうやら慣れてきたらしい。

「いや、むしろ……なんだか少しずつ快感になってきたのだ……っ？」

エレンが目覚めようとしている……！

「ダメですエレンさん！ そっちの世界に行つてはいけ　ふがふが！？」

「なんとというか……すごく開放的なのだ……！」

エレンは走りながら両腕を大きく広げた。

まるで自分の裸をNPCたちに見せびらかせるかのように。

「そんなエレンにサービスだ」

俺が仕様を変更すると、NPCたちのねっとりした視線が一斉にエレンへと向いた。

「ふあっ！？ み、見られている！？ あたし今、見られちゃってる！？」

恥ずかしがりながらも、エレンは身体を隠そうとはしない。

「ああっ！ だが……ハアハア……この視線……ハアハア……悪くない……」

さらに俺はNPCたちに台詞をしゃべらせてみた。

「おい、あの女、裸だぞ」

「ひゅう！ いい乳してやがるぜ！」

「あのお姉ちゃん、何で服着てないのー？」

「こら、見ちゃダメよ」

裸だって言っちゃったよ。

しかしそれには気づかず、エレンは恍惚とした表情で走り続ける。

「はうっ……これっ、しゅ……いいっ……」

飛び散る大量の体液（汗です）。

エレンはもはや完全に目覚めてしまったようだ。

やがて王城に辿りつき、着飾った貴族たちが行き交う美しい廊下を、やはり全裸でエレンは進んでいく。

「ハアハア……こ、こんな格好で……王宮の廊下を歩くなんて……ハアハア……」

そしてついにボスのいる王の間へ。

そこには大勢の兵士たちがいて、エレンは彼らの注目を一身に浴びることとなった。

「見られてるうううっ！　こないっぱいの人に見られちゃってるうううっ！」

喜ぶエレンに、兵士たちが襲い掛かってくる。

「んあっ！　あっ！　んんっ……！　ふあああっ！」

いやらしい嬌声を響かせながらも、兵士を圧倒するエレン。

「もう、らめえ……あたし、おかしくなっちゃうのだあ……っ！」

すべての兵士をやっつけ、残ったのは玉座に腰掛ける王様だけだ。巨漢の王が剣を手に立ち上がる。

「まさか、王である余の前にそのような姿で立つ者がいようとは」

「あんっ……言わないでえ……」

「貴様のその不敬なる行為、万死に値する！」

そして、まったくもってコンセプトの分からないラストバトルが始まった。

エレンが勝った。

ダンジョンを無事にクリアしたエレンが戻ってくる。

「ハア、ハア……どうにか攻略したのだ……っ！」

未だに息が荒く、目は熱に浮かされたかのようにトロンとしている。

白い肌に浮かんだ汗が何ともいやらしい。

そしてまだ全裸だ。

「いい加減、服を着せてあげてくださいよッ！」  
「はっ!？」

エレンも自分の格好に気付いて目を見開く。

慌てて服を着ようとしたエレンだったが、何を思ったか、その途中で手を止めて

「も、もう少し、このままで構わないだろうか……?」

やはり目覚めていた。



「ダメに決まってますから                    ツ！」

とティラが叫ぶが、一方でエレンを後押しするのは全裸教の信者たちだ。

「ん、やはり全裸は至高。我々は生まれたままの姿に回帰すべき」

「わたくしもっ、わたくしも脱ぎますわああっ！」

「カルナ100%、再び参上ッ！」

現在の信者は、シロ、ルシーファ、そして俺の三人。

ただいま信者募集中です！

「だから脱がないでください                    ツ！！」

## 第125話 ノーディストダンジョン

「やばい……俺は今、素晴らしいアイデアを思いついてしまったかもしれない」

ティラが半眼で見てくる。

「どうせまた頭のおかしいやつですよね?」

頭がおかしい言わない。

「それは」

「言わなくていいです」

「それは」

「言わなくていいですって」

俺は言った。『言っんですか』

「ノーディストダンジョンだ!」

ノーディストビーチのダンジョンバージョン。

すなわち、全裸でしか入ることができないダンジョンである!

裸でダンジョンを攻略するエレンを見ていて思いついた。

「俺、天才かもしれん……!」

これなら合法的に全裸を拝めることができる！

「……最悪なアイデアですね」

「そもそも服を着ていることが異常なんだ！ なぜ性器を疚しいものだとして隠すのか！ 裸を恥ずかしいと思うその思考こそが恥ずかしい！ 人は本来、裸で生きるものなんだよ！ それこそが自然だ！」

俺は声高らかに訴える。

「カルナ様の言う通りですわあああつ！」

「ん。カルナは正しい」

ルシーファとシロが賛同してくれた。

「……確かに、一理あるのだ」

「ちよつ、エレンさんまで！？ 早く正気を取り戻してください！」

そんなわけで、俺は早速、ヌーディストダンジョンを作ることにした。

入り口に結界を張り、衣服を脱がなければ結界を通り抜けられないように設定。

武器はいいが、防具はダメだ。  
ただし靴や靴下は問題ない。

ダンジョンは全十階層。

エレンが攻略したダンジョンを流用して、階層ごとに特徴を出す。

せっかくだしプールとか温泉も作ろう。

むしろ雪山のフロアなんかは、ずっと温泉に浸かりながら進んで行けるようにすればいいかもしれない。

だって裸だし。寒いし。

所々に食堂や酒場、休憩室なども用意しておこう。

もちろんすべて裸でしか利用できない。

てか、もはや完全にスーパー銭湯とか健康ランドだよな、これ。しかも無料の。

そもそも、そういう感覚で利用してもらった方が入りが良さそう  
だ。

各所に宝箱を配置し、稀少なアイテムを入れておく。

ただし防具以外。

他ではなかなか手に入らないアイテムを入手できるということが、このダンジョンのウリの一つである。

そうだ。大人の玩具なんかも入れておこう。

しかし何と言ってもこのダンジョン最大のアピールポイントは、  
クリア報酬だ。

【イケメンの王様と結婚できます】

『マスター、イケメンの王様とは？』

「もちろん、俺！」

『……』

おい何で無言になる？

「どこからどう見てもイケメンだろ、ほら」

俺は宣伝用に作ったポスターを見せる。

そこには爽やかに微笑む超絶イケメンが写っていた。

「確かにイケメンですけど……これ、かなり修正が入ってますよね？」

「うむ……カルナとはほとんど別人なのだ」

「パパ？」

「ん？ 誰？」

いいんだよ！

最近は写真の加工なんて当たり前だしな！

俺も何度AVのパッケージに騙されたことが……！

『そもそもこの世界にはまだ写真も無ければ、加工技術もありませんが』

「王様というのも嘘ですよね？」

「それは本当だ！ 俺は竜王だしな！ 竜王だって王は王だろ！」

うん。

間違っていない。

イケメンの王様の玉の輿に乗れる。

この謳い文句に惹かれない女などいない！ たぶん。

『本物を見たら幻滅するのでは?』

「心配は要らない。絶対にクリアできない難度にするからな」

死なないけど、クリアはできない。

そんな感じのダンジョンにするつもりです。

「あとは入り口を各地に作って、ダンジョンに転移できるようにすれば、世界中から女性冒険者が集まってくるって寸法だ。もちろん宣伝にも力を入れるぞ」

というわけで、早速、作ってみましたヌーディストダンジョン。

全十階層で、一見すると川だが実は流れるプールがある森林フロア、温泉の湧いている雪山フロア、飲食店やお土産屋さんも充実している遊園地フロア、まさしくヌーディストビーチの砂浜フロアなど、どこも大変楽しめる作りになっています。

我ながらなかなかよくできたと思う。

さらに予定通り入り口を各地に設けた。

オープン日やダンジョンの場所を記載したポスターをあちこちに貼り、チラシも配っている。

いずれも大都市から近く、アクセスもバッチリだ。

『自ら宣伝するダンジョンなど前代未聞です』

「怪しさ満載ですし……」

そして ついにオープン初日がやってきた。

レイン帝国。

少し前までは暴君によって支配されていたこの国だが、とある英雄によって救われ、現在は賢帝ジーナによってかつてない平和と繁栄を謳歌していた。

とりわけその王都の活況ぶりは著しい。

暴君の治世には見られなかった活気が、今日も街の至るところに満ちている。

そんな王都にある冒険者ギルドも、大勢の冒険者たちで賑わっているのだが、今日はいつにも増して騒がしかった。

掲示板の前に大勢の冒険者たちが屯しているのだ。

「これ本当か?」「すげえ!」「そんなところにダンジョンが……」などという声が聞こえてくる。

依頼を貼りつけた掲示板ではなく、イベントの告知だったり、注意喚起だったり、クエストとは関係のない情報が貼られている掲示板だ。

そのため普段はそれほど人が集まるような場所ではない。

と、そこをちょうど通りかかる一人の青年がいた。

二十歳ほどのイケメンである。

背中に大きな剣を背負っていることから、彼も冒険者だろう。

「何があつたんでしょうか？」

訝しみながら、彼は近くにいた冒険者に話しかけた。

「あれを見るよ」

その冒険者が指差す方向へ、青年は視線を向ける。

そこにあつたのは、掲示板に貼られているとあるポスター。

「こ、これは……!？」

瞬間、青年が目を見開く。

そして何を思ったか、冒険者たちを強引に掻き分けて掲示板に近づくと、貼ってあつたポスターを引き剥がしてしまった。

「あつ、おいこら!」

「何しやがる!？」

冒険者たちの怒声が響くが、青年はそれを無視して全速力で走り去っていった。



「た、大変です！」

血相を変えて部屋に飛び込んできたのは、Aランク冒険者のアルクだった。

その手には、先ほど掲示板から剥がしたポスターが握られている。

「何だ、騒がしい」

「どうされたのですか、アルク殿」

応じたのは、ギースとライオネルだった。

そこは彼らが宿泊している宿の一室だ。

カルナたちを追って旅を続けていた彼らは、ついにここ、レイン帝国の王都にまで辿り着いていたのである。

アルクが興奮した様子で、そのポスターをテーブルの上に置く。

「見てください！　これ、間違いなくご主人様ですよ！」

実はそれはカルナが作成したポスターだった。

そこには随分と美化された彼の写真が載っていて、

「は？　これのどこがあいつだよ。全然違うじゃねえか」

「確かに似てなくもないですが……」

二人の反応に、アルクは声を荒らげた。

「何を言っているんですか！？　どこからどう見ても僕のご主人様じゃないですか！」

そこへ近づいてくるもう一人の男がいた。  
彼はテーブルの上のポスターを覗き込み、

「っ！ 間違いない！ これは彼だ！」

と、叫んだ。

もちろん四匹目の変態、紫苑である。

「ですよーね！？ ちゃんとご主人様の匂いもしますし！」

「ああ！ 今にも彼の声が聞こえてきそうなくらいだよ！」

有力情報のゲットに、喜びを爆発させるアルクと紫苑。

「……………本当かよ？ オレには別人にしか見えねえんだが……………」

どうやら彼らの記憶の中では物凄く美化されているらしいなと、  
結論付けるギースだった。

「とにかく！ このダンジョンに行ってみましょう！」

「ふふふ……………待っていてくれ、カルナ君……………」

変態たちの魔の手が、カルナに迫る……………。

## 第126話 おもてなし

オレはギース。

訳あつて冒険者ギルドのギルド長を辞め、今は各国を旅している。

その目的は、過去にたった一度だけ、ギルドの執務室で会ったエルフの少女と再び出会うことだ。

彼女に肥溜めでも見るかのような目で見られたい。

罵られながら雷撃を浴びたい。

ただただその一心で、オレは旅を続けていた。

最初は一人旅だった。

だが道中で一人、また一人と増えていき、現在はオレを含めて四人のパーティとなっている。

ジジイのライオネルは元々アルサーラ王国の王宮に仕えていた執事で、パーティの最年長。

姫様の後を追いつけて単身、王宮を飛び出したらしいが、戦闘力はないに等しく、正直言つてただのお荷物だ。

ただし何度も死にかけているにも関わらず、なぜかしぶとく生き残っていたりする。

アルクはAランク冒険者の青年だ。

イケメンでもあり、旅の途中、何度も若い女に言い寄られているが……その本性を知ると大抵は去っていく。

わんわん、僕はご主人様のペットだから！　なんて言われたら当然だろう。

最後の一人は、つい最近になって新たに加わった紫苑という男。中性的で美麗な顔立ちをしており、アルクとはまた違ったタイプのイケメンである。

ちなみに鬼族という極東の島国に住んでいる人種だ。

紫苑との出会いの瞬間は今でも忘れねえ。

なぜか全裸のこいつが空から降ってきて、オレの顔に股間がうげえええ。

幾ら美男子だからって、オレにそういう趣味はねえ。

ほ、ほんとだぞ!?

ライオネルは姫さんを、アルクと紫苑はカルナという野郎を探しているため、エルフ少女を追っているオレと行動を共にしていた。まあ本当にこの三人が同じところにいるか、確証はねえんだが。

今はレイン帝国という国に来ていた。

少し前までは暴君によって支配されて暗黒の時代が続いていたらしいが、どこからともなく現れた英雄によって暴君が倒され、今は新たな皇帝の下で平和を謳歌しているとか。

で、その英雄こそがあのカルナという野郎らしい。

都市のあちこちで話題になっている。

しかし残念ながらすでにこの国を出た後だとか。

今は次の目的地へと向かう準備を進めているところなのだが……。

紫苑によれば、彼らは鬼族の国にいたらしい。

なので海を越えてそこに行くべきか……。

けど、もういない可能性もあるっぽいなあ。

しかも頼りの（？）アルク犬が、「うーん……何だか物凄く遠くに行ってしまった気がします……」と唸っていて、まるで当てにならないのだ。

そんなある日のことだった。

アルクがポスターのようなものを手に、借りている宿の一室へと飛び込んだきたのである。

「ご主人様を見つけました！」

オレたちはレイン帝国の王都からそう遠くない場所へときていた。

そこは草原地帯であり、今までなら何もない原っぱがずっと広がっているだけだったそうなのだが……。

「本当にあるぞ……」

「いつの間にこんなところに……」

それは門だった。

草原の中にぽつんと立っており、冒険者たちが驚いているところを見ると、本当に突如として出現したらしい。

さすがは探検精神と度胸に溢れた冒険者たちだ。  
そんな怪しげな門だというのに、我先にと争い、次々と中へ入っていく。

「で、本当にあの向こうにあるダンジョンを攻略すればあいつに会えるんだな？」

「そのはずです！」

オレが再確認すると、アルクは自信満々に頷いた。

こいつがつい先日、どこからか持ち帰って来たのは、新しいダンジョンを開設したというポスターだった。

正直、意味が分からねえんだが。  
ダンジョンの多くは魔力が凝集して自然に作られるもので、お店のオープンみたいなノリでお知らせを出すようなものではない。

まあ人工的にダンジョンを作るのも、決して不可能というわけではないらしいけどな。

昔の大魔導師なんかは、自分の力を示すためにダンジョンを作ったそうだし、実際、それが各地に残っていたりする。

「ともかく入ってみましょう！」

「そうですな」

アルクに促され、オレたちはその門を潜った。  
もちろんいつものメンバーだ。

門を通過する際、一瞬、嫌な眩暈がしたが、すぐにその向こう側へと抜けていた。

俺がチートスキル ダンジョンクリエイト・極 で作った最高傑作 “ヌーディストダンジョン”。

それがついにオープンした。

「ナビ子さん、客の入りはどうだ？」

『開場前から各地の入り口前に行列ができ、オープンと同時に大勢の冒険者たちが雪崩れ込んできました』

「はっはっは！ やはりな！」

各地の入り口を潜ると、まずは脱衣所になっている。

そこで服を脱いでロッカーに預けなければ、ダンジョンへと繋がる扉を潜ることができない仕組みだった。

きつと今頃は女冒険者たちが、引き締まった裸体を惜しげもなく晒しながら続々とダンジョン内に入って来ているところだろう。

『ところでマスター、なぜ触手モンスターの姿になっているのですか？』

「決まってるだろう？」

おもてなし





[illegible]

「何で男ばっかなんだよおおおおおおお  
っ！」

そこは地獄だった。

右を見ても左を見ても、男、男、男。  
男がゲシュタルト崩壊するレベル。  
しかもどいつもこいつも全裸だ。

『そういうダンジョンにしたのはマスターかと』  
「違う！　こんなの違う！　俺の期待していた天国は一体どこにいった！？」

「むしろなぜ女性が集まって来ると考えていたのかが理解できません」

くそっ！

こんなことなら男の入場を禁止しておくべきだった！

「は、はは……なかなか恥ずかしいな、ジョニー」  
「そ、そうだな……しかしジョン、お前、随分と立派なモノが付いてるな」

「いやいや、そういうジョニーだって」

「こらそこ、男同士ではにかみながら股間比べをするんじゃないねえ！」

「う、うおっ！？ 何だこの触手モンスターは！？ や、やめろそこはっ……ア ツ！？」

ガチムチのおっさんがモンスターにやられている光景なんて見たくねえ！

「ダメだこれは……完全に失敗だ……おえええ……」

嘔吐しそうになりながら、俺がこの地獄と化したダンジョンを脱出しようとしたときだった。

「近い！ 近いですよ！ ご主人様がすぐ近くに感じる感じがします！」

どこかで聞いたことのある声が聞こえてきた。

## 第127話 四匹の変態、ヌーディストダンジョンに挑む

門を潜った先は脱衣所になっていた。  
奥には扉があつて、

『ヌーディストダンジョン』 入り口。      裸にならなければ入れません』

と書かれてある。

「おいおい、マジで脱ぐのかよ……」

オレは思わずそう呟いた。

ヌーディストダンジョンなど、ここにくるまでどうせ冗談だろう  
と思っていたのだが、どうやら本当らしい。

周囲を見渡してみると、屈強な冒険者たちが戸惑いながらも、素直に防具や下着を脱ぎ始めていた。

しかし、男ばっかだな……。

ちょっと期待してはいたのだが、まあさすがに男女別々になつて  
いるわけじゃねえし、女冒険者には抵抗があるだろう。

「ギースさん！ 早く行きましょう！ って、まだ脱いでいないんですか！」

「お、おう」

そんなことを考えていると、アルクに咎められる。

金髪のイケメンはすでに真っ裸になっていた。

「って、お前……案外でけえんだな……」

アルクのアレはなかなか立派だった。

イケメンでAランク冒険者のくせに、ソコまで強力とか……お前、  
どんだけ恵まれてんだよ？

まあさすがにオレの逸物ほどじゃねえけどよ。

「ちょ、あんまりジロジロ見ないでくださいよ……」

いやそんなに見ちゃいねえし、恥ずかしそうに頬を赤く染めるん  
じゃねえよ！

オレにそっちの気はねえから！

「これはなかなか開放感がありますな」

弛んだ身体を惜しげもなく晒しているのは、ライオネルのじいさ  
んだ。

こんなクソジジイの裸なんぞ、誰も見たくは……

「何だこのでかさは……っ!？」

ジジイの股の間にぶら下がっているソレに、オレは目を見開く。

圧倒的巨根がそこにあった。

「ま、負けた……オレが……ち○この大きさに……」

見比べるまでも無い。

それほど彼我の戦力差は明白だった。

「いや、若い頃はもう少しあったのですがね……。やはり歳には敵いませぬな」

マジか。

オレはこのとき初めてこのジジイに尊敬の念を覚えたのだった。

「まったく、ただ服を脱ぐだけだというのに、一体何を悠長にやっているんだい？ この奥にカルナ君がいるかもしれないんだ。早くしてくれ」

と、そこへ紫苑がやってくる。

「っ！？」

オレは思わず息を吞んでしまった。

女みてえな顔立ちをしているとは思ってはいたが……身体の方もなんて綺麗なんだよ、こいつは。

華奢な体躯に、柔らかそうな白磁の肌。

股間にアレが付いていなければ、マジで女と見間違えてもおかし  
くはない。

そんな奴が、一系まとわぬ姿で堂々と立っているのだ。

自然と下半身に血液が集まり……って待て待て待て！？

こいつは男だ……こいつは男だ……！

オレはそう必死に自分に言い聞かせながら、息子をどうにかこうにか宥めると、急いで服を脱ぎ捨てた。

「ほう。これはこれは、ギース殿もなかなかのものををお持ちのよう  
で」

「お、おう」

「……しかし心なしか、少し硬くなっておられるような……」  
「オレほどになると年中発情してるからな！　これがデフォなんだ  
よ、デフォ！」

やべえ、収まり切れてなかったみたいだ……。  
てか、このクソジジイ、人のち〇こを観察すんじゃないよ！

苦しい言い訳をしながら、オレは先に進もうと歩き出す。  
服を着てはダメだが、武器は大丈夫らしいので、愛用の剣を手  
にしている。

やがて奥の扉を潜り抜けた先は、鬱蒼と木々が生い茂る森林型の  
ダンジョンとなっていた。

「すげえな。ここまでの規模のダンジョンはなかなかないぜ」

草木を掻き分けながら、奥へと進んでいく。

色々と怪しげなダンジョンである上、まだ情報も乏しい。

どんな魔物が出現し、どんな罠が仕掛けられているのかも分から  
ないため、細心の注意を払っていかねばならないだろう。

この雰囲気からして、獣系や昆虫系、植物系、あるいは鳥系の魔  
物が多そうだが。

と、そのときだった。

オレたちの前にキノコの化け物が現れる。

大きさは人間の子供くらいだろうか。

毒々しい、いかにも危険な色をしている。

この手のキノコモンスターは、ヤバイ息を吐き出すと相場が決まっていた。

「毒息を撒き散らす前に仕留め　うおっ！？」

しまった！　もう吐いてきやがった！

しかも大量だ。

辺り一帯に紫色の怪しい煙が一瞬にして広がり、咄嗟に呼吸を止めたが、幾らか吸い込んでしまった。

オレだけじゃねえ。

四人全員が、ともに毒息を浴びてしまった。

クソキノコめっ！

って、いねえ！？

キノコの魔物は毒を撒き散らすだけ撒き散らして、どうやら逃げていったらしい。

戦闘力はなく、毒だけが厄介なタイプの魔物だったのだろう。

すでに毒を受けてしまった以上、キノコが逃げたところで事態が好転するわけではない。

オレたち冒険者は毒への耐性を持っているが、それでもあまりに

強い毒だとあっさり耐性を越えられてしまう。

命に別状がないタイプでも、麻痺や睡眠の状態異常に陥り、無防備になっている間に魔物に喰われちまう可能性もあった。

まだこの毒がどういった種類が分からねえが、効果の弱いものであつてほしいと願うしかない。

「こ、これは……？」

「か、身体が熱く……！？」

早速、毒が回って来ちまったらしい。  
全身がやたらと熱い。

だが痛みはなかった。  
耐性を越える猛毒だとしたら、もう意識を失っている頃だろうし、  
どうやらその手の毒ではないようだ。

眠気も無いし、身体が痺れる感じも無い。  
なんだ、この感じ……？

ただ身体が熱く……呼吸が荒くなって……むしろやたらと目が冴えて……股間が……って、何で股間が！？

ギンギンだった。

……これと似た感覚を知っている。  
ちようどアレを飲んだときの、異様な興奮。

そう、精力剤だ！



「……ぎ、ギースさん……僕、なんかもう、我慢できそうにないです……」

「おおおおっ！？　すごい、すごいですぞおおおおっ！？　これほどまで猛ったのは一体何年ぶりのことでしょうかああああっ！　わしも我慢できそうにないですぞおおおおっ！」

おいやめる！

オレたちは男同士だ！

「くっ……まさか、カルナ君以外で発情するなんて……」

紫苑が性欲に耐えるように、ぷるぷると裸体を震わせている。その様はか弱い乙女にも見え……

……この際、綺麗なら男でも良いか？

「ハアハア……」

「ま、待てっ！　なぜ鼻息を荒くしながらこっちに近づいてくる！？　ちよっ、やめっ……」

「……危ないところだったぜ……」

オレは安堵の息を吐いていた。

キノコの化け物が吐き出した毒息のせいで、性的に興奮してしまったオレたちは、あろうことが男同士で互いを襲おうとしてしまったのである。

どうにか理性で打ち勝ち、その場から逃げて一人で処理をしたため事なきを得たのだが。

「酷い目に遭いましたね……」

「今後はあのキノコの魔物には特に気を付けなければいけませんな」「まったくだよ……彼と再開するまで、僕は絶対に綺麗な身体の手までいなければならないんだからね！」

その後、再び合流したときには、四人ともぐったりしていた。

「それはそうと、こんなものを見つけたんですが」

アルクがそう言って取り出したのは、いかにもお宝が入ってそうな箱だった。

蓋の上にはプレートが張り付けられていて、何やら文字が刻まれている。

「宝箱と書いてますな」

「なんじゃそりゃ」

何で宝箱が自ら宝箱と主張してんだよ。

「いえ、このダンジョンには随所に宝箱が設置されていると、手引書に書かれています。中には貴重なアイテムが入っているとか」

「手引書って何だ、手引書って？」

「入り口に置いてありましたけど？」

アルクは何やら冊子みたいなものを手にしていた。  
ますます意味の分からないダンジョンである。

「畏じゃねえのか？」

「匂い的には大丈夫そうけど……」

「お前もう本格的に犬になりつつあるな？」

話し合った結果、十分に注意しつつ開けてみることとなった。

ガチャ、と蓋が開く。

「……どうやら畏ではなさそうですね」

「何が入ってたんだ？」

箱の中を覗きこむと、そこにあったのは  
謎のアイテムだった。

ち〇こを模した

「こんなもん要るかあああああああっ！」

思いきり押し折ってやった。

## 第128話 目には目を、変態には変態を

「はあ、はあ……ったく、なんてダンジョンだ……」

「これは予想以上にキツイですね……」

ダンジョンに潜り、まだ一、二時間程度しか経っていない。

だというのに、オレたちはすでに疲弊のあまりぐったりしていた。

それもこれも魔物やトラップが酷過ぎるせいだ。

どれも殺傷力としては皆無に近く、その点では安全なダンジョンと言えるかもしれない。

だがその代わり、ガリガリと精神力を削ってくるのである。

媚薬入りの息を吐く人面キノコ。

粘液に媚薬が混じっているスライム。

落とされると媚薬入りのローションの海に転落する穴トラップ。

喉の渴きを癒してくれると見せかけて、中に媚薬が入っているヤシの実。

執拗に“穴”を狙ってくるぬるぬるの触手モンスター。

媚薬多過ぎだろ。

しかも時々置かれてある宝箱には、謎の性具が入ってやがるし。

お陰でダンジョンのあちこちで、男の冒険者同士が

……と、とにかく、そうした点を除けば、ダンジョン攻略の難易度自体は決して高くない。

むしろ途中に温泉や食堂、酒場、宿泊所なんかがあったりして、

冒険者たちの中にはのんびりとそれらを楽しんでいる者も多かった。

オレたちはそういうのを無視して、とにかく先へ先へと進んできたため、何度も魔物やトラップの餌食になり、精神的に困憊しちまったが、気長に攻略するのなら比較的楽なダンジョンだろう。

「それでも何とか八階層まで辿り着いたぜ」

全十階層だと聞いているし、あと少しだ。

「ぬおおおっ！？ た、助けてくださいれっ？ 触手がっ、触手がわしの尻をおおおおっ！」

って、ジジイがまた触手にやられてやがるっ！？

何回目だよ、くそつたれ。

「だからあれだけ触手には気を付けろって言っただろうが！ 助けるのも命がけ もとい、尻がけなんだぞっ！？」

「すいませぬっ……はうんっ！ うあっ！」

「おい変な声出すな！？」

っーか、なんか顔が微妙に嬉しそうじゃねえか、あのジジイ？

まさか散々やられて、そっちに目覚めて………いやダメだ考えないようにしよう。

触手は尻を狙ってくる以外、何もしてこない攻撃性皆無（？）のモンスターなのだが、全身が粘液に包まれて弾力に富んでいるため、なかなか剣が通らない厄介なやつだ。

結局、どうにかこうにか倒してジジイを助け出すまでに、オレは

二回も掘られちゃった。

「……くそっ、マジでケツが気持ち悪い……」

気持ち悪い以外の感想なんて出てきやしねえ。  
いや本当に。

だんだんと快感を覚え始めてるとか、んなことはねえかな？

……ほ、本当だぜ？

と、そのときだった。

「近い！ 近いですよ！ ご主人様がすぐ近くに感じる感じがします  
」！」

同じくケツを何度か触手にやられてぐったりしていたアルクが、  
不意に叫び出した。

さらに紫苑が、

「確かに僕も感じる……！ カルナ君の波動を……！」

お前らほんとどうなってるんだよ？

もちろんオレはまったく感じない。

「まあゴールが近づいてきてるってことだろ。先に進もうぜ」

あの男が本当にこの先にいるのなら、その傍にはあのエルフもい  
る……はずだ。

もし彼女と再会したら、ぜひケツに……

……って、違う！

何でそこでケツが出て来るんだよ！？

オレは必死にケツのことを頭から振り払おうとするが、そのとき  
脳裏に天啓が降ってきた。

「いや、待てよ……？　むしろ、それじゃねえか……？」

あのエルフ少女へケツを差し出すオレ。  
すると思いきり蔑んだ目をしながら、彼女は穴めがけて電撃を

ブヒイイイイイッ！

やべえ……これだ。

これしかない。

ぞくぞくぞくっ……。

「？　どうしたのだ、ティラ？　とても顔色が悪いようだが」

「い、いえ……なにか今、物凄い悪寒が……」

「近い！　近いですよ！　ご主人様がすぐ近くに感じる感じがします

！  
」

どこかで聞いたことのある声が聞こえてきて、俺は嫌な予感を覚えた。

隠密・極 スキルで姿を隠しながら確認してみると……そこにいたのは、いつぞやのイケメン冒険者である。

何であいつがここにいるんだ……？

しかも他にも見たことのある連中が。

あのおっさん、アルサーラの冒険者ギルド長じゃねえか。  
執務室でブリッジオ ニーしてやがった変態野郎だ。

それにあのじいさん、確かエレンの執事か何かじゃなかったか？  
生命値が低いくせに、エレンから死ぬギリギリまで殴られて喜ぶ  
ドMジジイだっけ。

げっ…… あいつは紫苑！？

こいつは以前、女装して俺に夜這いをかけようとしてきやがった  
ので、バシ〇ーラで強制転移させた鬼族の男だ。

『どうやら偶然にも四人が集合し、レイン帝国の入り口からこのダ  
ンジョンに入って来たようです』

何でそんな変態ばっかが集まっちゃったんだよ！？

『そして今まさに、もう一人の変態〓マスターと合流しようとして  
いるところです』



俺をあいつらと一緒にするなッて！

『ですが、このままでは彼らがダンジョンを攻略してしまうのも時間の問題かと』

もう八階層まで突破されていた。

万一、奴らにダンジョンクリアを成し遂げられてしまったら、クリア報酬を与えなければならない。

その報酬は【イケメンの王様と結婚できます】  
つまり、

「俺だよ、コンチクショウ！」

ちなみにこの報酬は、チートスキル ダンジョンクリエイト・極のシステムによって保護されているため、キャンセル不可能だ。後から勝手に報酬を変更することはできないのである。基本的には。

「何でそんな報酬にしたんだよ……」

だ、だが！

まだ奴らがこのダンジョンを攻略できるとは限らない。  
なにせ、最後には強力なボスが待ち受けているのだから。

『いえ、あの四人なら簡単に倒せるかと』

……や、やばい。

強力と言っても、レベルはせいぜい60ちょいだ。

そう言えば、紫苑のレベルって60越えてたっけ……？

アルクやおっさんもレベル40前後はあったはずだ。

『今はもう少し強くなっています』

「くっ、だったら、もっと強力なボスを連れてくればいいだけだ！」

てか、どうせなら絶対に勝てないと思わせるくらいの奴がいいな。  
あるいは、二度と挑みたくないと思わせられるような……

「っ！ そうだ、あいつだ！」

俺の脳裏に、ある人物（？）のことが思い浮かぶ。

「目には目を、歯には歯を、変態には変態を、ってやつだな」

「はあ、はあ、はあ……っ、ついにここまで来たぜ……」

思い出したくないような目に幾度も遭いつつも、オレたちはどうにかボス部屋へと辿り着いていた。

「ここまできたら絶対にクリアしてやるぜ……ッ！」

「もちろんです！ 僕たちならきつとやれます！」

一体どんなボスが待ち構えているのか分からねえが、こっちの戦力は十分だ。

たとえレッドドラゴンだろうと怖くねえ。

「行くぜ！」

オレたちは扉を開くと、部屋の中へと躍り込んだ。

そこにいたのは

「うふふ、いらっしゃあゝい」

ピンクのフリフリ衣装を身に付け、ばっちりメイクをした筋肉ムキムキの巨漢だった。

しかも背中には純白の翼が生えている。

「美少女天使のゲイムちゃんであゝす、うっふん」

不気味な笑みを浮かべながら、そいつは野太い声でそんなふうにな乗った。

……ど、どこからツッコんでいいのか分からねえ。

どう見ても美少女じゃねえし、あんな不細工な天使がいるはずがねえ。

「あら。突っ込むなら、こっちからよ?」

お尻を突き出し、そんなことを言う化け物。

……そうだ。あれは美少女でも天使でもねえ。

化け物だ。

「にしても、思っていた以上に素敵なメンバーじゃない。いきなりだっけけれど、この仕事、引き受けてよかったわあ……じゅるり」

化け物のねっとりとした視線と舌なめずりする音に、背筋を凄まじい悪寒が走った。

「て、てめえがボスってことか?」

「そうよ。こんな美しいボスが相手なんて、あなたたちついてるわねえ。あたしもついてるけど、ここに。うふふふ……」

化け物は股間を指差しながらまったく笑えない下ネタを吐く。

そのとき紫苑が吐き捨てるように言った。

「……なんて気持ちの悪い存在なんだ。しかも自らを美と評するなんて……。美というのは、この僕にこそ相応しい言葉だ。貴様のような化け物には使ってほしくないね。言葉そのものが穢れてしまう」

直後、

「……ああん? テメエ今なんだった?」

化け物の纏う気配が激変した。

「「「~~~~っ!?!」」」

叩きつけられる圧倒的な殺気。

自分で言うのも何だが、精鋭ぞろいのはずのオレたちが、それだけで一瞬にして戦意を吹き飛ばされて、身体を震わせながらその場に膝をついてしまう。

「な……なんだ、こいつは……?」

「か、勝てない……」

「ひいっ……」

「? どうしたのですかな、皆様?」

絶対的な力の差を前に愕然とするオレたち。

ジジイだけはなぜか平然としているが……鈍感にも程があるだろ。

化け物が青筋を浮かべながら近づいてくる。

「うふふふ……失礼な子たちにはお仕置きをしなくちゃねえ?」

や、やべえっ……逃げねえと……っ!

慌ててその場から逃げ出そうとするが、恐怖で竦んだ身体はまともにも動かなかった。

地面を這うようにして移動するのが精いっぱいだ。  
アルクや紫苑も同じだった。

「ラブリーアターツツク」

「「「ぎゃああああああああああああああああっ!

！！！  
「「「

オレたちは全滅した。

変態どもの相手を変態がしている頃。

「あああああああつ！　　いいいいいいつ！　　いいよおおお  
つ！　カルナくううううんつ！　　やはり君の打擲は最高だあああ  
あああつ！」

「くそおおおおつ！　　何で俺は裸の変態天使（ミカエル）に鞭入れして  
んだよおおおつ！？」

ゲイビムを召喚する対価として、俺もまた変態の相手をしていた。

って、わざわざゲイビム使った意味がまったくねええええつ！

## 第129話 NABIKO・改

「酷い目に遭った……」

天界から竜王の城へと帰還した俺は、倒れ込むようにぐったりと玉座へと座り込んだ。

ルシーファの兄である天使長、ミカエル（全裸）を鞭で延々し  
ばき続けるという、過去最大の苦行を終えてきたのである。  
体力はともかく、精神的にキツイ。

しかしそのお陰でゲイビムが、変態四人組の心を完璧に押し折っ  
てくれたようだ。

連中はダンジョンの攻略を諦め、逃げ出した。  
恐らくもう二度と挑んでくることはないだろう。

にしても、もうダンジョンは懲り懲りだ……。

『自業自得かと』

ただあのヌーディストダンジョン、結局、野郎ばかりの地獄にな  
ってしまったわけだが、せつかく作ったのだし、取り壊すのも勿体  
ない。

何だかんだで制作にかなりの時間を費やしてしまったしな。

今回は臨時でゲイビムを召喚したが、どんな奴らが現れても絶対  
に敗北することのない強力なボスを配置して、後は放置してやろう。  
自動モードにしておけば、勝手に宝箱やモンスターを配置したり、

発動後のトラップを修復したりできるらしいし。

「そして俺は再び旅に出るぞ！」

気づけば最近ほとんど竜王の城に籠ってたからな。

ここは初心に立ち返って、各地を旅する日々を再スタートしよう。

しかしその前に一つ、やっておきたいことがある。

というわけで、俺はしばらく城の庭に放置していたキャンピングカー、NABIKOの元へとやってきた。

この竜王の里に来るのに使ってからほとんど利用していないため、かなり汚れてしまっている。

とりあえず魔法で洗車してから、

「こいつをさらに改造する」

現在のNABIKOは二階建てだ。

一階にリビング、台所、トイレ（ウォシュレット付き）、バスルーム、さらに俺用の寝室があり、二階には二部屋あって、どちらも寝室として利用していた。

「まず、もっと部屋数を増やす」

狭いのも美少女たちの匂いが充満してハアハアできて良かったが、今のままでは乗員数が限界だ。

もっと色んな施設を増やしたいしな。

さらに今のところトランスフォームは、



第一形態のキャンピングカー

第二形態のゴーレム

第三形態の飛行機

と、状況に応じて三つのタイプを使い分けることが可能だったが、これも新しいトランスフォームを導入するつもりだ。

そして一週間が経った。

「よし、完成だ！」

というわけで早速お披露目会である。

お披露目会にはティラ、エレン、フィリア、シロ、ルシーファに加えて、竜王の城に入り浸っているクロやチロを初めとするドラゴンたちが参加した。

「見た目は変わってませんね」

「今はキャンピングカー形態だからな」

扉を開ける。

するとそこには広々とした玄関が。

「玄関があるのだっ!？」

「ひろーい！」

今までは扉を開けるとすぐリビングになっていたのだが、ちょっと家らしくしてみたのである。

しかもすぐ横に二階へと上がる階段があつて、開放的な吹き抜け構造になっている。

「すでに広さがおかしいんですけど……」

キャンピングカーの天井より、内部の天井の方が高い。

「時空魔法で空間を拡張しているからな」

玄関に入つてすぐ右手の扉。

その先には今までの倍近い広さのリビングがあつた。  
さらに奥にはダイニングキッチンが。

「ん。いっぱい料理作れそう」

「た、確かに……じゅる」

飲食店の厨房並に設備が整ったキッチンを見ただけで、シロとク口が涎を垂らしそうになっている。

まるでパブロフの犬のようだ。

一階にはサウナ付き大浴場（男女共用にしたかったがそうすると誰も入ってくれなくなりそうなので断念した）の他、遊戯室やリビングよりさらに広い宴会場、それからカラオケルームなども設置した。

「二階にはそれぞれの個室を用意したぞ」

二階へと上がる。

一番手前の扉を開けた。

「ここがエレンの部屋だ」

「す、すごいのだっ！」

筋トレ用の器具なんかが置かれており、いつでもトレーニングに励むことができる環境が整っていた。

ちゃんと剣を振るうスペースもある。

「シャワールームもあるから汗を掻いてもすぐに流せるぞ」

「なんて至れり尽くせりなのだ！」

「これでもう太らずに済むな」

「そ、その黒歴史を思い出させないでくれっ！」

エレンは早速とばかりにバーベルスクワットを始めた。

「一、二、三、四、五……くうつ、足に効くううつ！」

気に入ってくれたようで何よりだ。

「カルナさんにしては意外とちゃんとした部屋ですね？」

「俺だつてたまには真面目なときくらいあるぞ」

「……たまにではなく、いつもそうならいいんですけど」

筋トレに没頭してしまったエレンを放置し、次の部屋へ。

「こっちがティラの部屋だ」

「これは……」

ティラの部屋には、まるで図書室のようにずらりと大量の本が並んでいた。

本好きのティラが目を輝かせる。

「すごい……もしかしてこれ、全部私のために集めて下さったんですか？」

「当然だ」

「見たことのないものばかりですが……」

一冊を手に取り、ぱらぱらとページを捲ってみるティラ。

「随分と紙質がいいですね……それに印刷も……」

すべて地球から取り寄せた本だからな。

チートスキル 楽園ショッピング で購入したのである。

楽園は本も扱ってる便利なネットショップなのだ。

ちなみに自動翻訳の魔法を使い、この世界の言語に翻訳してあるので、ちゃんとティラでも読めるはずだ。

「どうだ？ 惚れ直したんじゃないか？」

「そもそも最初から惚れてませんけど」

そうつつけんどんに言いながらも、ティラは嬉しそうだ。

「デレた。ついにデレた」

「だからデレてませんって！」

そのまま読書に集中してしまったティラを置いて、次の部屋へ。

「で、ここがシロの部屋だな」

中に入ろうとして、

「おっと。この部屋では靴は脱いでくれ。……シロは元から裸足だが」

この部屋だけは畳敷きになっているのだ。

独特の匂いが鼻を突く。

日本人の俺には安心する匂いだ。

「ん。面白い匂い」

そう呟く様子からして、シロ的にも別に嫌いな匂いではないようだな。

屏風や掛け軸、座布団などもあり、そこは完全に和風の部屋だった。

シロとは真逆の雰囲気だが、たぶん気に入ってくれるだろうというか、そもそもシロはデザインなどどうでもいいと考えるタイプなのでまったく気にしないだろう。

ではなぜわざわざ和風にしたのかというと、アルモノを設置するためだった。

「あんだありや？ テーブルか？ 布団か？」

「あんなの見たことないのです」

首を傾げるクロとチロの視線の先には、そのアルモノが。

部屋のど真ん中に鎮座するそれは

炬燵。

「っ！」

突然、目をカッと見開いたかと思うと、シロは物凄い速さでその中へと潜り込んでしまった。

「さすがシロだな。見ただけでこの素晴らしさを悟ったとは」  
「ん。最高」

シロは炬燵にすっぽりと収まり、首だけ出した状態で頷く。  
最初からその至高の入り方をマスターするとは……。

常に快適な温度を保つようにしてあるため、いつ入ってもぬくぬくの炬燵。

テーブルの上にはみかんが常備されている。

もちろんこの炬燵は、食べることの次に寝ることが好きなシロの習性を考えて設置したものだった。

どうやら気に入ってくれたようだな。

「……？ 中に何かいる」

シロが少しだけ眉間に皺を寄せた。

炬燵の中から何かを引っ張り出してくる。

シロとよく似た白銀色の髪の美女だった。

ぺむぺむだ。

シロの姉ちゃんの。

「姉さん、何してる？」

「何かに呼ばれた気がしたの、そしたらさ、ここに天国があったの。」

至福の表情で応じるぺむぺむ。

一体いつの間に潜り込んでいたんだ……。

ちゃんと鍵をかけていたし、お披露目を始める前に入るのは不可能だ。

ということは、他の部屋を回っている間に一人でこの部屋に辿りつき、炬燵を発見したのだろう。

「さすが姉さん。寝ることに關しては敵わない」

感心するシロ。

以後、この部屋は姉妹の共同部屋になった。

## 第130話 竜小屋

炬燵の中で丸くなってしまったドラゴンを放置して、俺は隣の部屋へ移動した。

「こっちにクロとチロの部屋もあるぞ」

「えっ？ オレらの部屋もあるのかっ？」

「ほんとなのです！？」

これまで一緒に部屋を見て来たからか、二人は期待に目を輝かせた。

俺はそんな二人を案内する。

「ここだ」

そこはファンシーな壁紙や絨毯で彩られた可愛い部屋だった。ピンク色のベッドには天蓋が取り付けられており、まるで御伽の国のお姫様でも暮らしてそうな雰囲気である。

「さ、さすがにこれはちょっと可愛すぎねえか……？」

「少なくとも、ねーさまにはぜんぜん合わないです……」

「そうそう、オレは女らしさの欠片もねえし、こんな　　って、おい、誰が女らしさの欠片もねえだ！」

「それ、じぶんで言っただす」

俺は二人の勘違いを訂正した。

「何を言っただ？ この部屋はフィリアのために作ったものだぞ」



「わーい！　かわいいっ！　ふかふかーっ！」

フィリアは喜んでくれたようで、ベッドにダイブして小さな身体をバウンドさせている。

「二人の部屋はそれだ」

俺は部屋の隅に置かれていたあるものを指差す。

「つて、犬小屋じゃねえかよ！？」

それは小屋だった。

と言つても、人が何人か入ることができるほどの大きさだ。

「ペットだしな。正確には竜小屋だ」

「だからオレらはペットじゃねえ！」

「あたちもです！」

俺は小屋を指さして「ハウス」と言ってみた。

「入るか！」

むう、どうやら気に入ってくれなかったらしい。

ちゃんと中にはトイレも作ってたのに。

「ただのトレーじゃねえか！？」

「トイレ用トレーだぞ。トイレシートは吸水性に優れて、しかも強力消臭！　大型犬でも使えるワイドタイプだ」

「今はつきり犬って言ったよな！？」

クロはそう鋭くツツコんでから、

「だいたいアイツにはちゃんとした部屋があるってのに、何でオレらにはこれなんだよっ？」

「第三級ペットだからな」

「だからペットじゃねえし！ しかも第三級ってなんだよ！？」

「ペットに相応しい行動を取っていれば加点され、自ずと階級が上がって行くんだ。シロのように個室を貰えるチャンスがある。だからお前たちも頑張れよ」

「頑張つて堪るか！」

俺はベッドの上で半分目が閉じかかっていたフィリアに声をかける。

「フィリア」

「ふえ？」

「ちゃんと二人を賤げるんだぞ」

「はい！」

部屋を出ようとすると、クロとチロが「おい待ちやがれ！」「ペツトじゃないのです！」「言いながら追いかけてきたが、フィリアが「ハウスハウス！」と叫びながら二人を強引に犬小屋、じゃない、竜小屋へ連れ込もうとする。

「ちよっ、やめろっ！？ だからオレはペットじゃねえ！」

「めっ！ おとなしくするの！」

「なんであたちらが怒られてるです！？ ていうか、力が強すぎるのですっ！」

うんうん、フィリアならちゃんとやってくれそうだ。

『……マスターには彼女たちの悲鳴が聞こえないのでしょうか？』

フィリア部屋を後にした俺は、魔界からベルフェーネを召喚した。

「ふえっ？」

現れた彼女は下着姿だった。

うむ、眼福、眼福。

「だから何でいつもいつも変なタイミングで呼び出すのよ　ッ！  
？」

どうやら着替えている最中だったらしい。

いやー、またやっちゃったみたいだなー、めんごめんごー（棒）。

『マスター、しっかり見計らった上で召喚されてますよね？』

ナンノコトカナ？

「今回呼び出したのは他でもない」

「ちよっ、何事も無かったかのように進めないで！　せめて着るもの出してよっ！？」

「ベルフェーネのために個室を用意したんだ」

「人の話を聞いてよ！」

俺はその部屋へと向かった。

何を言っても無駄だと悟ったのか、ベルフェーネは涙目になりながらも下着姿のまま後をついてくる。

「ここだ」

「これはっ……」

部屋に入るなり、ベルフェーネが目を睜った。

俺の渾身の一室だからな。

驚くのは当然だろう。

部屋の真ん中に便器があった。

「って、何でこんなところがトイレになってるのよ!？」

「これならいつでも好きなときに用を足せるだろ？ もう二度と漏らす心配もない!」

ベッドからも近いので、寝ているときに尿意がきても大丈夫だ。

「人をそういうキャラにしないで欲しいんだけど!? だいたいあんたが勝手に召喚するから……その……も、洩らしちゃうんでしょうが……!」

部屋のだ真ん中に便器を置くなんて我ながら斬新な発想過ぎて心配だったのだが、どうやら気に入ってくれたようだな。

「何で満足そうな顔してんのよ!？」

「よし、じゃあ早速、使い心地を試してみてくれ」

「人の話を聞いてっば!」

「さあ早く。俺のことなんて気にせずに。ぐへへ……」

「しかもあんたの目の前でやれっというの!？」

残念ながら追い出されてしまった。

ドアの向こうから声が聞こえてくる。

「すごい、便座が温かいんだけど！」

何だかんだで実際に座ってみたらしい。

「便座が温かいのは暖房機能が付いてるからだ」

「このボタンは？ …… ひゃあっ！？ ちよっ、何か出て来たんだけどー！？」

「温水でお尻を洗ってくれる機能もあるんだ」

「ど、どうすれば止まるの！？」

「一番左のボタンを押せば止まるぞ」

「一番左ね！ ひゃわん！？ ぎゃ、逆に勢いが強くなったんだけど！？」

おっと、どうやらボタンを間違えたようだ。

『マスター、前にもまったく同じことをしていた気がするのですが？』

はて、何のことやら？

「んんっ……あっ……だ、だめえっ……」

「大丈夫か！ 今助けてやるぞ！」

「入って来ないでよおおおおっ！？」

とりあえずこれで主要な部屋はすべてお披露目できたな。  
みんな喜んでくれたようで何よりだ。

「おかしいですね。最後の二つは悲痛な叫び声が聞こえてきた気がしますか？」

「うん、気のせい気のせい」

俺は今、自分用に作った部屋にいる。

ホテルの最上級スイートルームのような高級感溢れる一室だ。

二階のキャンピングカー前方に位置する場所で、広い窓からは前方を見渡すことができた。

マジックミラーになっているため、全裸でいても外から見られる心配はない。

「だからと言って、全裸になる必要はまったくないかと」

と、さつきからちよくちよく俺にツツコんできているのは、見た目十六、七歳くらいの少女だった。

いかにも大和撫子といった清楚な雰囲気、黒髪美少女で、インテリジェントな眼鏡をかけている。

生徒会長とかやってそう。

しかし着ているのはメイド服だ。

なのにしつかりと着こなしていて、とても似合っていた。

そんな彼女に冷めた目で裸体を見られ、俺は今、大変興奮しています。

「マスターが見られて喜ぶ性癖なのは理解していますが、早く服を着てください」

そう言わずに、もうちょっと見られよハアハア。

まあ冗談はさておき。

彼女のこともお披露目しないといけないな。

「じゃあ、ナビ子さん、俺がみんなをリビングに集めるから、呼んだら出てきてくれ」

## 第131話 魔導人形ナビ子さん

「今日はみんなに紹介したい人がいるんだ」

「えっ、誰ですか？」

「何者なのだ？」

「あたらしいぺつとー？」

「ん。お腹すいた」

キャンピングカーのリビング。

俺はティラたちに告げた。

「俺の新しい愛人だ」

「違います」

「ちよっ、勝手に出てきちゃダメだろ」

「マスターが勝手に愛人などのたまわれるからです」

いきなり現れたメイド服姿の美少女に、ティラたちが目を丸くする。

「この人は……？」

「改めまして、ナビ子です」

「えええっ？ ナビ子さんというのは、このキャンピングカーではなかったのか!？」

エレンが頓狂な声を上げた。

「正確には、マスターが所有される ナビゲーション 道案内・極 というスキルです。今まではNABIKOに取り付けられた外部スピーカー等によ



って、皆様とコミュニケーションを取らせていただいていたのですがこの度、マスターにより新たに人型の肉体を与えられたのです」

そう。

この美少女の正体はナビ子さんであり、その身体は俺が製作した魔導人形だった。

「ぐへへっ……美少女っ……美少女が追加されましたのおおっ！」

鼻息荒く喜んでいるのはルシーファだ。

「フィリア様と基本設計はほぼ同じです」

大賢者が作ったフィリアだが、鑑定・極スキルでその構造を完全に解析していた俺にとって、それを元に一から新しい魔導人形を作り出すことくらい簡単なことである。

「おなじー？」

「つまり我々は姉妹と言えるかと」

「しまいー？ フィリアの、おねーちゃん？」

「いいえ。わたくしの方が後に作られましたので、フィリア様は姉に相当します」

「フィリアが、おねーちゃん？」

「はい」

「わーい！ いもーといもーと！」

ナビ子さんに抱きついて大はしゃぎするフィリア。  
どう見てもフィリアの方が妹だが。

「これからはメイドとして皆様に御仕えさせていただきます。何かございましたら、何なりとお申し付けください」

スカートの端を軽く摘みながら、優雅に一礼するナビ子さん。  
彼女にはありとあらゆるメイドスキルを搭載しており、お辞儀の仕方も完璧だった。

「もちろんメイドだから戦闘もできるぞ」  
「それメイドじゃないですね!？」

それから俺たちはいったん外に出た。  
よし、これくらい開けた場所なら十分だろう。

俺はナビ子さんに命じる。

「その力を見せてやってくれ。相手はエレンがいいだろう」  
「畏まりました、マスター。エレン様、どうかご容赦を」  
「へ？」

ナビ子さんが右腕を前方に掲げると ガシャン。  
手首が折れ曲がり、中から銃口が飛び出してきた。

「参ります」

ズブズブズブズブズブズブズブズブズブズブッ！

ナビ子さんの腕から連射されたのは無数の銃弾だ。  
一秒間に約七十発を撃つことが可能。  
彼女の右腕は機関銃になっているのである。

「ぬおおおおおおっ!？」

エレンは咄嗟に腰の剣を抜いてこれに対処。  
嵐のように迫りくる弾丸を、なんとすべて剣で斬り落としていく。

「おお、さすがエレン」

銃弾を剣で斬るなんてどう考えても人間業ではなく、漫画の世界だな。

まあここは異世界だし、似たようなもんだ。

「何なのだこれはっ!？ あたしを殺す気か!？」

「違う! これは剣の訓練だ!」

「はっ? そうか! これは訓練! うむ! 頑張るのだ!」

相変わらずアホでチヨロイ。

「ナビ子さん、左腕も使っていいぞ」

「了解です」

今度は左腕の手首が変形する。

ラグビーボールのような楕円体の銃砲だ。

直後、そこから球状のエネルギー弾が発射された。  
正確に言えば、太陽エネルギーを圧縮した弾丸である。

「つまり、ロツ○バスターだ！」

もちろんチャージもできるよ！

エレンは咄嗟にそれも剣で斬ろうとするが、

「エレン、それは剣では斬れないぞ」

「ぬわっ！？」

刃をすり抜けてしまう。

慌てて上体を反らして回避するエレン。

あれはエネルギー弾だからな。

細い刀身では一部を防ぐだけで、そのまま通り抜けてしまうのだ。

「つと、ぬおっ、くっ！」

剣では防げないと悟ったエレンは、右に左にと動いて懸命に回避していった。

「こ、これでは剣の訓練ではないのでは！？」

「阿呆！ 身のこなしを鍛えることも大事な修行だ！」

「な、なるほど……っ！」

実際にはナビ子さんのための試し打ちです。

「よし、かなり慣れてきたようだな。なら、連射速度を上げよう。

ナビ子さん」

「畏まりました」

「ぬうっ！？」

ペースアップしたことで、エレンは段々と避け切れなくなってしまう。

エネルギー弾が掠め、その部分の防具が破壊されていく。  
結果、エレンはどんどん裸に近づいていった。

「いいぞ、ナビ子さん！ その調子だ！ ハアハア」

「こ、これはもう訓練ではないだろう！？」

「阿呆！ そんな状況でも戦えずしてどうして超一流の剣士と言える！ お前は入浴中に暗殺者に襲われたとき、裸を見られることに戸惑っていたら死ぬぞ！」

「確かにその通りだ！」

「それに先日のダンジョンでの訓練を思い出せ！」

「はっ！？ そ、そうだ！ 裸を見られることなど大したことではない！ むしろ堂々と見せてこそ一流の剣士！ ハアハア」

見られることの快感を思い出したのか、エレンは鼻息荒く頬を紅潮させる。

「よし、ナビ子さん、そこでチャージショットだ！」

「……了解です」

ナビ子さんの左腕のバスターが発光し、エネルギーを充填。

そして先ほどまでの数十倍の威力を誇る巨大なエネルギー弾が発射された。

「来るのだ！」

それをエレンは避けようともせず、その場に仁王立ちして待ち構える。

ずどおおおんっ！

エネルギー弾はエレンに直撃した後、そのまま空彼方へと消えていった。

「ふ、ふふふふ……耐えた……あたしは耐えたのだ」

まともにエネルギー弾を浴びたエレンだったが、一歩たりとも動いていなかった。

なんと、あのチャージショットを完全に耐え切ってしまったのだ。ただし防具はすべて焼失し、完全に真っ裸である。

「うへへ……み、見られてる……みんなに見られてるう……」

「よくやったぞ、エレン！」

俺は感動を分かち合うため、両腕を広げて彼女に近づいていく。いざ、全裸ハグ！

「いい加減にしてください　　ッ！！」

ティラに杖で頭を叩かれた。

「しまったな。ナビ子さんのお披露目会だったはずが、気づいたらエレンの全裸お披露目会になってしまった。あー、しまったしまっ

た」

「マスター、白々しいにもほどがあるかと」

ちなみにナビ子さんの性能はこれだけではない。

「おっぱいからレーザービームを発射することも可能だ」

いわゆるチクビームだ。

ただし服に穴が開いてち○びが丸出しになってしまつので、その都度、修復しなければならぬのが難点である。

「あと、尻から火も出せる」

その威力は獄炎竜のブレス並だ。

こちらもパンツとスカートの後方部分が確実に消失してしまつ。

「……どちらにも絶対に使いたくありません」

ナビ子さんが半眼で呟く。

「しゅごーい！ みたーい！」

「フィリアちゃん、ダメです」

目をキラキラさせながら要求するフィリアだったが、それをティラが咎めた。

「どーして？」

「ダメなものはダメです」

「ぶー」

せっかく作つたのになあ。

まあでも、いつか使わざるを得ない状況がくるかもしれない……  
(フラグ)。

「一体どんな状況ですか、マスター」



### 第131話 魔導人形ナビ子さん（後書き）

ルシーファ「ところで、なぜわたくしの部屋の紹介シーンがカットされてますの？」  
作者「自主規制」

## 第132話 脳筋王女の帰還

「エレン様、お父様よりお手紙が届いております」  
「父上から？」

ちょうどNABIKOに乗って旅へと出発しようとしていたときに手紙が届いた。

どうやらエレンの父親であるアルサーラ王国の王様かららしい。  
たまに忘れそうになるが、エレンはこれでも一国のお姫様なのだ。

ちなみにこの世界には、相手がどこにいるのか分からなくても、その場所まで手紙を運んでくれる伝書鳩の上位種みたいな便利な鳥が存在していて、それを使って届けたようだ。

「何の用なのだ？」

エレンは手紙を開いた。  
俺も横から覗き込む。

え？ 人の手紙を勝手に読むなって？  
ははは、お義父さんからの手紙だし、別に俺が読んでも問題ないだろう？

そこに書かれていたのは、

わし、危篤。

マジか。

一行目に衝撃を受けつつ、次の行へと目をやる。

絶対に帰ってくるな。

……ん？

何だ、これは？

いいか、絶対じゃぞ？ 絶対に絶対に帰ってきたらダメじゃからな？

念を押す三行目には、文字から必死さが滲み出ていた。

「た、大変なのだ！」

エレンは目を剥いて叫んだ。

「すぐに帰らなければ！」

「いや、帰って来るなって書いてあるが？」

「何を言っているのだ！ 父上が今にも死にそうだというのに帰らないなど、あたしはそんな親不孝者ではない！」

珍しくエレンから正論が返ってきたぞ。

「きつと剣の修行に勤しむあたしのことを慮って、あえてこんなふうに書いてくれているのだ！」

「少し前までぶよぶよに太ってたけどな」

「あるいは本当は帰ってきて欲しいという意味かもしれない！ そう！ つまりフリというやつなのだ！」

確かにフリっぽく見えなくもないが、普通、こんな命のかかった  
場面で使わないと思う。

「とにかく！ 急いでアルサーラに帰るのだ！」

というわけで、久しぶりにやってきました、アルサーラ王国の王  
都。

さすがに危急とあって、NABIKOではなく転移魔法を使った。  
いきなり城内に転移することもできたのだが、常識人の俺はちゃ  
んとそのへんを弁えている。

城の外に転移した。

「マスター、いきなり浴場に転移したときのことをもうお忘れす  
か？」

「はて、そんなことあったっけな？」

残念ながら全然思い出せない。

「思い出せるのはエレンの裸体だけだ。はあはあ」

「覚えてるじゃないですか……」

「覚えていると言えば、ティラはギルド長のオナ○ーを覚えている  
か？」

「それを思い出させないくださいよッ！？ せっかく記憶の奥底  
に封印していたんですからッ！」

あのおっさん、すでにギルド長を解任されているそうだが。  
しかし今さらだが、どういう経緯でアルクや紫苑と一緒にいたの  
だろう？

いや、別に詳しく知りたくないが……。

「ああっ、ティラ様っ！　ぜひわたくしのオ　ニーも見てください  
ませええっ！」

「死んでも見たくないですからッ！　って、こんなところで脱ごう  
としないでください　ッ！」

「わーい！　ただいまーっ！」

「はじめてきた」

そういえば、フィリアは一度来たことがあったんだっけ。  
一方シロは初めてだな。

「帰ったぞ！　あたしだ！」

エレンが声をかけると、城門を護っていた兵士が愕然と目を見開  
いた。

「っ！？　え、え、え、エレン団長！？」

その兵士は何を思ったか、慌てて城の中へと駆け込んでいく。

「た、大変だっ！　エレン団長が……エレン団長が帰ってきてし  
まったぞおおおおっ！」

城内から次々と悲鳴が聞こえてきた。

「そ、そんな……団長が帰ってきたなんて……」

「俺、今日付けで騎士団を辞めさせてもらいます」

「エレン王女が!? 最悪だ……! しかもこんなタイミングで……!」

エレン、お前どんだけ嫌われてんだよ。

「皆……あたしが帰ってくるのをそんなに待っていてくれたのか……ぐすっ」

「お前は一体どんな耳してんだ?」

「だがすまぬ! 今日は一時的に戻っただけなのだ! 父上が危篤だと聞いて……そ、そうだ、父上! こうしてはおれぬ! 早く父上のところに行かないと!」

エレンは城内に駆け込んだ。

「ひいいいっ!」

「エレン王女だ!?!」

「こ、殺される!」

城内の人たちが蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

ティラが半眼で呻いた。

「……まるで敵が城内に攻め入ってきたような雰囲気なんですけど、実際にはただの帰省だ」

城内を進んでいくと、奥から慌てた様子でおっさんが出てくる。禿げあがった頭にはびっしりと汗を掻いていた。

「え、エレン殿下っ、お帰りになられたのですねっ。しかし一体なぜまた急にっ……」

「久しぶりなのだ、大臣！」

どうやら大臣らしい。

「もちろん父上が危篤だと聞いて駆け付けたのだ！」

「さ、左様でございますかっ……」

エレンが脇を通り抜けようとすると、大臣は咄嗟に立ち塞がった。

「で、ですが、生憎と陛下は今お休みになられているところでして……部屋には何者も入れると命じられているのですっ……」

「む？ そうなのか？ なら仕方がない」

エレンの言葉に、大臣は一瞬安堵の表情を浮かべたが、

「少々手荒だが、無理やり叩き起こすしかないのだ！」

続く一言で血相を変えた。

「なぜそんな方向に！？ 陛下はご病気なのですよっ！？」

「だからこそだ！ きつとあたしの顔を見れば元気になるはずなのだ！ 父親とはそういうものだ」と相場が決まっている！」

「いえいえいえっ、た、確かにエレン殿下のお顔をご覧になれば、お喜びになることは間違いないでしょうがっ……そ、それは目を覚まされてからでも良いかとっ……」

トンデモ理論を展開するエレンを、大臣は必死に説得しようとしている。

と、そのときだった。

「エレン姉様？」

「む？」

廊下の向こうから姿を見せたのは、十歳ぐらいの少年だった。

少女と見間違えてもおかしくない可愛らしい顔立ちで、華奢な体軀。

エレンとよく似た赤い髪をしていて、子供にしては随分と豪華な服を身に付けていた。

この少年はアルサーラ王国の第一王子。  
つまりエレンの弟だった。

前回来たときに、ちらつとだが見たことがあった。  
話はしなかったが。

「おおっ、エスベルト！ 元気にしていたか！」

「はい。エレン姉様も御息災のようで何よりです」

嬉しそくに駆け寄る姉に対して、子供とは思えない落ち着いた様子で応じる弟。

エレンよりずっと利発そうな印象である。

「しかし相変わらず線が細いな！ ちゃんと食べているか？ 訓練は欠かしていないだろうな？ よし、久しぶりにあたしが稽古をつけてやるのだ！」

「そ、それはまたの機会ということにして……今日は父様のために帰国されたのでは？」



「はっ！ そうなのだ！ こうしれはおれん！ 急いで父上の元に行かねば！」

「あつ、姉様！」

何とも忙しなく走り出すエレン。

そんな姉の後ろ姿に溜息を吐いてから、エスベルトは俺たちの方へと視線を転じた。

「えっと……確か、姉様の師匠の……カルナさん、だったでしょうか？」

「ああ」

「お久しぶりです。姉様がいつもご迷わ……お世話になっています」  
言い直したぞ。

「お陰さまでこのところずっと王宮は平和でした。ありがとうございます」

「気にするな。確かに騒がしい奴だが、あれはあれでうちのパーティに必要な人材だ」

主におっぱい要員として。

「……むしろエレンさんこそいつも酷い目に遭ってる気がするのですが……」

ティラが何か呟いているが気のせいだろう。

「王様は無事なのか？」

「……今のところは小康状態にあります。だからこそ姉様を近付けなくなかったのですが……。姉様は病人に対しても容赦ありません

ので……」

やはりフリではなく、本当に帰ってくるなという意味だったらしい。

……だったら最初から手紙を出さなければよかっただろうに。

第132話 脳筋王女の帰還（後書き）

書籍2巻が今日明日くらいから全国の書店に並び始めるようです！  
よろしくお願いします！

### 第133話 気合なのだ

エスベルトの案内で、王様の寝室までやってきた。  
護衛と思しき兵士たちが倒れている。エレンの仕業だろう。

中から怒号と悲鳴が聞こえてきた。

「え、エレン！？ なぜ帰ってきたのじゃ！？」

「いつまで寝ているのだ、父上！ そんなことだから病気が治らぬのだ！ 病は気から！ 気持ちが強ければ、病になど打ち勝てるのだ！」

「わしをお前のような化けも 人間離れた存在と一緒にするなっ！」

「そんな甘いことを言ってるからダメなのだ！ さあ今からあたしと不眠不休で訓練だ！」

「ひいいいっ！ 死ぬっ！ わし本当に死んじゃうっ！」

「気合だ！ 気合だ！ 気合なのだああっ！」

お前はア○マル浜○か。

中に入ると、王様はエレンによって裸に剥かれそうになっているところだった。

「おおっ、お主は確かカルナ殿！？ エレンを止めてくれぬか！？」

俺に気づいた王様が助けを求めてくる。

パンツ丸出しなので威厳も減ったくれも無かった。

仕方ない。

俺はエレンの服を引き剥がしにかかった。

「何であたしが裸にされそうになっているのだ!？」

「そういう遊びをしてるんじゃないのか？」

「父上を訓練着に着替えさせようとしているだけだ!」

ともかくエレンの蛮行を止めることに成功し、王様はベッドの中へと逃げ込んだ。

「うう……絶対に帰ってくるなとあれほど書いたのに……」

中からそんな嘆きの声が聞こえてくる。

だからそもそも手紙を出さなければよかったのにな。

と、そのとき部屋の中に煌びやかな衣装を着た女性が入ってきた。

「あら。エレンさん、帰ってらっしゃったの？」

「母上、久しぶりなのだ」

どうやらエレンの母親らしい。

つまり王妃ということか。

鑑定してみると、実年齢は四十二だった。

さすがエレンの母親だけあって美人である。

赤い髪は母譲りのようだな。

だが随分とおっとりとした感じの女性だ。

「……母さぁん……わし、娘に殺されそう……」

「まあ、エレンったら、お父さんを虐めてはいけませんよ」

「虐めてなどない！ 気合を注入していたのだ！」

そんな主張をするエレンがいては本当に国王が死んでしまいそうなので、彼女を引っ張って俺たちはいったん外へと出た。

「……で、ですが、思ったより元気そうですね？」

パンツ姿の王様を見て頬を引き攣らせていたティラが、気を取り直したように指摘する。

それに答えたのは第一王子のエスベルトだ。

「はい。ただ、不定期に凄まじい痛みに襲われるようでして……そのときは会話すらできないほどなんです。一応、何人もの治療師に診てもらったのですが、未だに病名も定かではなくて……」

なるほど。

まああれは回復魔法じゃ治らないしな。

「あの……実は、カルナさん、あなたに相談したいことが」

「俺に？」

不意にエスベルトがおずおずと切り出してきて、俺は首を傾げる。

「別に構わないが」

「ありがとうございます。……えっと、ここで話せる内容ではありませんので、よろしければ僕の部屋までお越しただけですか？ あ、皆様も一緒に来ていただいても構いません。……姉様も」

エレンについては若干迷った様子だった。

そうして彼の案内で、王宮の廊下を進んでいく。  
その途中だった。

またいかにも王族といった服装の女性と遭遇する。

「……脳筋女が何をしに帰ってきたのかしら？」

じろりとエレンを睨みつけた彼女は、年齢的には二十歳くらいだろうか。

長身のエレンよりだいぶ背が低く、随分と華奢だった。

「姉上……」

鑑定してみると、どうやら彼女はエレンの姉の第二王女らしい。  
名前はイシュリナ。

だが見た感じ、髪の色がエレンやエスベルトとは違う。

俺の疑問を察したのか、

「……イシュリナ姉様のお母様は、僕やエレン姉様とは違い、第一王妃様なのです。第一王妃様は姉様がお生まれになったあとに亡くなられて……」

エスベルトが小声で教えてくれる。

「決まっている。父上に会いに来たのだ」

「それはただの建前で、本当は王位を狙っているわけではありませんの？ でも残念。生憎とお父様があなたに王位を継承することなどありませんわ。だってそんなことしたら、一週間で国が潰れてしまいますもの」

「そんなつもりはない。あたしは剣に生きると決めているのだから」

「……ふーん、そうですの」

姉妹仲はあまりよくないらしいな。

腹違いだから仕方ないのかもしれないが。

ちなみにエレンやエスベルトと母親を同じくする第一王女はすでに他国に嫁いでおり、この国にいないようだ。

「それにしても、姉上は相変わらずモヤシみたいな身体をしている。顔は青白いし、下手をすれば父上よりも病人みたいなのだ。どうせ着替えも食事も入浴もすべて侍女に任せているのだろうが、せめて最低限のことくらい自分でやるべきだろう」

「うるさいですわ。あなたみたいな筋肉馬鹿と一緒にしないで欲しいですの。あたくしはあなたと違って正統派の王女ですもの」

性格もかなり対照的のようだ。

「あの、姉様方……御客人もいることですし、あまり喧嘩は……」

睨み合う姉妹に割り込み、仲裁しようとするエスベルト。

「……ふん。第一王子のあなたに免じて、今日のところはこの無礼な妹を許しておいて差し上げますわ」

偉そうに鼻を鳴らしてから、第二王女は去っていった。

それから俺たちはエスベルトの私室へと移動し。



「すみません、お見苦しいところを見せてしまいました……」

「大変だな。面倒そうな姉ばかりで」

「はい……」

エレンが声を上げた。

「それ、もしかしてあたしも入っているのか!？」

むしろ自分は除外されていると考えている時点で論外だと思うぞ。

「それで俺に話というのは？」

「は、はい。……実は現在、父様の病気以外にも、大きな問題を抱えていまして……」

「王位継承の問題か」

「……そうなんです。王宮は二つの勢力で真つ二つに割れている状態です……」

つまり王様が死んだとき、誰が次期王の座を継ぐのか、第一王子派と、先ほどの第二王女派で争っている状態なのだろう。

ありがちな話だ。

「原則的に王位には男が継ぐことになっているのですが、僕がまだ十歳であるということと、第二王妃の子供ということもあって、反対の声も強いのです」

なるほど。

対して向こうは女性だが、第一王妃の娘。

年齢的な面での問題もない。

あとせめて五年くらい王様が長生きしていれば、第一王子が断然

有利だったのだろうか。

「それで、なぜそのことを俺に？」

「……その、レイン帝国を立て直したという話を窺いまして……」

そういや、そんなこともあったっけな。

どうやら彼はレイン帝国の男の娘皇帝・ジーナと知り合いらしく、彼から俺のことを何度か聞かされていたようだ。

「せめて何かアドバイスをいただければ嬉しいなと……。エレン姉様を手懐けていただいているばかりか、こんなことまでお願いするのはとても申し訳ないのですが……」

「なんかあたし、猛獣みたいに言われていないだろうか!？」

……ふむ。

王位継承の問題は背後に様々な利権が絡まっていることが多いため色々と面倒なのだが……今回の件は別にそんなに難しそうではないな。

「要するに王様の病気を治せばいいだけだろ」

「えっ？ 治せるんですかっ？」

### 第133話 気合なのだ（後書き）

書籍2巻が15日に発売されました！ よろしくお願いします！

## 第134話 搜索令状

「治せるのならさつき会ったときに治せばよかったじゃないですか……」

「いや、実はそうはいかない事情があるんだ、マイハニー」

「誰がマイハニーですか！」

そろそろ認めてくれてもいいのに。

相変わらず恥ずかしがっているティラから、第一王子のエスベルトへと向き直り、

「王様のあれは病気というより呪いだ」

「呪い、ですか……？」

「ああ。俺なら解呪するのは簡単だ。だが……そうすると、呪術者を特定することができなくなってしまう」

あの呪いは、常に呪術者が霊的なパスを繋いでいないと効果が無いタイプのものだった。

だからそのパスを辿っていけば呪術者の下へと辿り着くことが可能なのだが、呪いを解いてしまうとパスも失われてしまうので、それができなくなってしまうのである。

「犯人が分かった方がいいだろう？」

「も、もちろんですっ」

というわけで、俺は早速、呪術者を探すことに。

「一つ頼みがあるんだが」

「は、はい！ 何なりと！」

俺は王様から出ている霊的パスを辿り、俺は王宮を出た。  
街中を進んでいく。

あまり大人数でぞろぞろと移動しては怪しまれるので、俺一人だ。

『マスターは一人でも怪しいことが多いですが』  
「なんでや」

ただしナビ子さんは一緒である。  
人形の身体の方だけを置いてきた形だ。

俺はその建物へと足を踏み入れる。

「あつ、ちょっと、勝手に中に入らないでください！」

慌てて制止しようとしてくる警備員に、俺はあるものを突きつけた。

「こ、これは……だ、第一王子殿下の……！？」

「殿下直々に発行してもらった搜索令状だ。建物内を調べさせてもらっぞ」

「は、はい……」

頷く警備員を後目に、俺は建物の奥へと踏み入った。

「え？ 男？」

「ちよつ、なんでここに男がつ！？」

堂々と廊下を進んでいくと、あちこちから黄色い悲鳴が上がった。  
少女ばかりだ。

それもそのはず。

ここは主に貴族の令嬢たちが通っている女子学園の寮なのだ。

『マスター、霊的パスは微妙にこの寮から逸れていると思いますが？』

誤差があるかもしれないからな。

念には念を入れてだ。

『…………』

俺は近くの扉を開けてみる。

鍵がかかっていたが魔法で開錠した。

「きゃっ！？」

ちよつど着替えの途中だったのだろう、その先には下着姿の少女がいた。

「ななな、何よあんた！？」

「第一王子殿下の搜索令状だ。この部屋を調べさせてもらっ  
「っ！？」」

俺は部屋の中に立ち入ると、中を物色する。

タンスを開けるとそこには女性物の下着が入っていた。

「どうやらここではないようだな」

口をパクパクしている少女を残して、俺は外へ出る。

「この中はどうだ？」

『ただの女子トイレです。今は人っ子一人いません』

「やはり調べてみないと。なんなら誰か来るまで待たないと」

『完全に理解不能です』

一通り個室を調べてみたが、何の異変もなさそうだった。  
まあついでだし、ここで用を足しておこう。

帰り際、ちょうどトイレに入って来ようとしていた少女と鉢合わせた。

「きゃああああああつ!?!」

少女は一目散に逃げていく。

「この寮は外れようだ」

『最初からそのように申し上げています』

女子学院の寮を後にした俺は、続いて銭湯へと向かった。

「いらつしゃいませ!」

「客ではない」

「え? で、では一体……あつ、そっちはダメですよ!!」

慌てて俺を止めようとしてくる店員に、俺は搜索令状を見せる。

「だ、第一王子の命令とあれば……」

まさに水戸黄門の印籠だ。

『完全に悪用かと。どうやら最も渡してはいけない人物に渡してしまったようです』

「何を言っている。これはあくまで犯人を見つけ出すための捜査だ」  
『ここは先ほどの寮以上に無関係の場所ですが？』

さて、頑張つて搜索しよう。

俺は女湯へと足を踏み入れた。

全裸の女性たちが突然現れた男に気づき、騒然となる。

「きゃあああああつ！」

「何で男がつ！？」

「変態！ 変態よ！」

響き渡る悲鳴を上回る声で、俺は叫んだ。

「静かに！ これは覗きではない！ 第一王子の命令だ！ 国家を揺るがす一大事につき、諸君らには捜査に協力する義務がある！」

「え、うそ？」

「国家の一大事って……」

俺の言葉に、一瞬裸を隠すことを忘れて狼狽える女性たち。



眼福です。

脳内メモリに保ぞ……じゃない。

『……マスター』

「俺は搜索のために仕方なく女湯に来たんだ。イヤらしい気持ちな  
どこれっぽっちもない」

ナビ子さんから伝わってくる凍てつくような雰囲気、俺はそう  
断言する。

『ではその下腹部の状態についてご説明下さい』

「俺の息子が勝手に喜んでるだけです」

「や、やっぱりただの変態よ！」

「出てけ！」

「死ね！」

次々と桶が飛んできた。

どうやらこの世界にも桶があるらしい。

魔法も飛んできたが、すべてノーダメージだ。

「ここにはいないようだな」

しっかり堪能……じゃない、搜索をしてから、俺は踵を返して女  
湯を後にした。

『もしここが現代日本なら確実に犯罪者として連行されています』

「どうやら犯人はこの建物の中にいるようだな」

俺はとある高級宿の前にいた。

犯人はこの宿に宿泊しているらしい。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「部屋の中を調べさせてもらうぞ」

「えっ？」

「これが第一王子の搜索令状だ。合鍵を貸してもらおう」

「は、はい……！」

慌てた様子の女将から鍵を受け取ると、俺は宿になっている二階へと続く階段を上がっていく。

「この部屋だな」

俺はドアを開けて中に入った。

シャワーの音が響いている。

さすがは高級宿だ。各部屋にシャワーが備え付けられているらしい。

俺はシャワールームのドアを開けた。

「えっ!?!」

そこにいたのは二十代半ばくらいの女性だった。  
しかもかなりの美女だ。

長く艶やかな黒髪に、健康そうに引き締まった褐色の肌。

胸は大きく腰は括れていて、肉感的で美しい肢体の持ち主だった。

呪術者というより、見た目は娼婦である。

それが裸で湯を浴びているのだが、別に俺はそれが見たくてこの  
タイミングで乗り込んだわけではない。

ないったらない。

『もはや説得力は皆無です』

彼女はいきなり現れた俺を前に、裸体を隠すことも忘れて呆然と  
立ち竦んでいる。

色々と丸見えだ。ありがとうございます。

「大人しくしろ。お前が王様に呪いをかけたということは分かっ  
ている」

「っ!?!」

そこからの女の反応は素早かった。

片手を突き出すと、その腕が蛇へと姿を変える。

牙を剥いて俺に襲い掛かってきた。

「無駄だ」

俺は蛇の頭をあつさりと捕まえ、握り潰す。

蛇は何もなかったかのように消失し、女の片腕が再び現れた。

「な……」

「言っておくが、俺に呪術は一切効かないぞ」

## 第135話 不老薬

「……間違いないわ。私が国王に呪いをかけたのよ」

王都内にある宿の一室に泊まっていた呪術者を捕まえて王宮に戻ると、主要な人物たちが集まる中で、彼女はあっさりと白状したのだった。

若い女性である。

しかもかなりの美女。

「父様。彼女に見覚えはありますか？」

「し、知らぬ！ わ、わしはそんな女など知らんぞ！」

エスベルトが訊ねると、王様は慌てたように否定した。  
だらだらだと顔から大量の汗を流している。

「……うふふ、お父さん？ それは本当ですか？ 本当の本当に本当ですかあ……？」

「ひいっ！？」

女の勘が働いたのか、王妃が笑顔で王様に詰め寄る。  
だがその目はまったく笑っていない。  
それどころかブラックホールのような深淵と化していた。

「彼女の呪いは性的な接触をしなければかからないものはずだ。  
そうだよな？」

「ええ、その通りよ」

俺が確認すると、美人呪術師はすんなりと頷いた。

「カルナ殿おおつ！？」

「お父さん……？ こっちにいらっしやい……？」

「ま、待ってくれっ！　ほんの出来心でっ……」

「ほんの出来心？　ほんの出来心で、こんな若くて綺麗な女性として  
 っぽり楽しまれたと……？」

「ひいひいっ！」

王妃が悲鳴を上げる王様を引き摺っていく。

「ああっ！　また痛みが！　く、苦しい……っ！　母さん待ってくれ！　このままではわし、死んじゃう！」

「いや、呪いならもう解けてるはずだぞ」

「カルナ殿おおおつ！？」

仮病作戦も虚しく、王様は王妃とともに隣の部屋へと消えていった。

「ぎゃあああああああああつ！」

凄まじい叫び声が聞こえてくる。

一体どんなお仕置きをされているのだろう。

南無。

「ともかく、これで王様も死なずに済んだわけだ」

「……むしろもつと早く死んでしまふ可能性ありませんか、これ……？」

「一度死んで性根を叩き直すべきなのだ！」

断末魔めいた悲鳴が轟く中、父親が呪術師と何をしたのか大よそ理解しているようで、エスベルトが頬を赤くしながら、

「で、ですが、一体どうやって父様に近づいたのです……？ ……いえ、宮中に彼女を雇った者がいると考えた方が自然……。だとすると、誰が……？」

「……第二王女殿下から依頼されたのよ」

もはや観念しているようで、依頼主のことを暴露する美人呪術師。

「姉様が……？ まさか、王位のために父様を殺そうとするなんて……」

この場に第二王女の姿はない。

すぐに俺たちは第二王女の居室へと向かった。

「姉上！ 失礼するのだ！」

ノックもなしに扉を開け放ったのはエレンだ。

第二王女は残念ながら着替え中ではなく、優雅にソファに腰掛けてティータイムを取っているところだった。

不愉快そうに、突然の乱入者を睨む。

「何の用かしら？ 汗臭い足であたくしの部屋を踏まないでください？」

「あ、汗臭くなどないのだっ！ ……くんくん」

即座に否定したものの不安だったのか、エレンはしゃがみ込んで足の匂いを嗅いで確かめている。

「って、そんなことより！ 見損なったのだ！ まさか、父上を呪い殺そうとした犯人が姉上だったとは！」

「……どういふことかしら？ 何の根拠があつて、姉に対してそんな妄言を吐いているのかしら？ ついに頭の中が筋肉だけになってしまったの？」

「証拠ならあるのだ！ よし、入って来るのだ」

部屋に入って来た美人呪術師を見て、第二王女の顔が驚きに染まった。

「……し、知りませんわ、そんな女」

どうやら白を切るつもりらしい。

俺は軽く精神操作の魔法を使ってみることにした。  
告白させるのだ。

「あたくしがやりました」

……秒で罪を認めた。

すごいな、こんなに効果があるとは。  
検察要らずだ。

『マスターは 精神操作魔法・極 をお持ちですので』



もしかして俺のことを好きにさせたりもできる？

『……………可能です、悪用は推奨しません』

はははー、そんなことしないってー（棒）。

「一体なぜそんなことをしたのだ、姉上！」

エレンが第二王女を問い詰める。

すると第一王女は、ちらりとエスベルトの方を見てから、

「だって……だって！ 早くしないと大人になってしまっんですもの……！」

と、切実な顔で叫んだ。

「……はい？」「……」

ぽかん、とする一同。

「ど、どうということなのだ……？ あたしにも分かるように言っただ！」

「……このパターン、なんとなくまたロクでもないやつのような気がする……」

ティラの察しが良くなってきた。

俺は部屋の奥へと進むと、置かれていた本棚を横にスライドさせた。

「そんなところに隠し扉が……？」

扉を開け放つと、そこにあったのは

「植物……？」

せいぜい十畳ほどの広さの部屋の中で、大量の植物が栽培されていた。

作業台のようなものが部屋の一面を占め、その上には化学実験でも行つような器具類が所狭しと置かれている。

「一体、姉様はここで何を……？ ま、まさか、魔薬を作つて……！？」

エスベルトの推測は大きくは外れていない。

ちなみに魔薬というのは、地球における麻薬のようなものだが、魔力が込めているため、その効能は多彩で、しかも強力だ。

俺は 鑑定・極 を使い、植物や作りかけの薬を分析する。

「なるほど、謎はすべて解けた」

「えっ、本当ですか？」

俺は頷き、そして第二王女のお秘密を看破する。

「彼女は秘かに、身体の成長を止めるための魔薬の開発を行っていたんだ！」

「……いえ、どういうことかさっぱりなんですけど」

「分らないのかね、ティラソンくん？」

「誰ですか、それ……」

ホームズばりの名推理を披露しようとしたのだが、その前に犯人が告白を始めた。

「その男の言う通り。あたくしはここで不老薬を作っていたんですの」

通常なら自分の若さを保つために、と考えるだろう。  
だが彼女の場合、そうではなかった。

「もちろんエスベルトに飲ませるために……！　だって、成長したら今のこの貴い姿が失われてしまいますのよ！？　そんなの……？　そんなの絶対に許せんわ……！」

「……え？」「」

一同が再びぼかんとする中、第二王女は弟のエスベルトへと熱っぽく視線を向け、

「ああ……可愛い……貴い……可愛い……貴い……ハアハア……絶対に失ってはダメ……そんなことになれば、国家の、いえ、人類にとっての重大な損失……！」

そう、彼女は重度のショタコンだったのだ！

「けれど開発はなかなか進まず、このままでは間に合わない……！　そこであたくしは女王になって、国家予算を注ぎ込むことを考え

たんですの！」

さすがはエレンの姉と言うべきか、発想が常人のそれではない。

「けれど、そのためには邪魔者を排除する必要がある……！　だからその呪術師を雇ったんですわ……！」

その結果、危うく娘に殺されかけた王様（父親）。

「ほんと、なんで拗らせている人ばかりなんですかね……」

ティラが表情の抜け落ちた顔で呟いた。

「やっぱこの世界ちよつとおかしいよな」

「カルナさんにだけは言われたくないです」

ちなみにエスベルトは固まっている。

事件の真相が予想の斜め上過ぎた上に、自分が姉からそんなふうに見られていたことを知ってさすがの神童もフリーズしたのだろう。

「だけでもうお終いですわ……」

座った目をして、第二王女がいきなり走り出した。

「せめて、その貴い姿のまま死なせて差し上げますの！」

隠し持っていたナイフを手に、エスベルトに斬りかかったのだ。

だが咄嗟に割り込んだエレンが、そのナイフを叩き落とす。

エレンのくせに良いところを持っていきやがったぞ。

「ああ……エスベルト……」

最後の悪あがきも失敗に終わり、第二王女はその場に崩れ落ちたのだった。

## 第136話 里帰り

王様は助かり、第二王女が犯人であったことが判明した。

「これで一件落着だな」

「……そうですかね？　むしろ今後のこの国の行方が非常に心配なのですが……」

「そこはまあエスベルトが頑張るだろう」

そのエスベルトは「唯一まともなのは僕だけ……だから僕が何とかしないと……」と呟いていて、使命感に燃えているようだ。

「これはあたしも修行の旅を切り上げねばならないかもしれないな……」

「そ、それだけは絶対にやめてください、姉様っ！」

エレンがぼそりと言うと、エスベルトは悲鳴じみた声で叫んだ。

「大丈夫ですから！　姉様はこれまで通り、剣の道を追い求めているばいんです！」

「む？　そうか？」

「カルナさん！　これからもエレン姉様のことをよろしく願います！」

エスベルトの目は「どうか早急に連れ帰ってください」と必死に訴えていた。

とはいえエレンにとっては久しぶりの帰省なので、それから数日

滞在して、

「せっかくだし、ティラさんの故郷にもいくか」

「いいんですか？」

「お義父さんとお義母さんに意思を固めたことを報告しないとだしな」

「固めてませんし固める気もありません」

「ああああああっ！ ティラ様の故郷っ！ その響きだけでわたくし漏れてきちゃいますわああああああっ！」

「やっぱり行くのはやめましょう」

そんなわけで。

アルサーラの王都を出発し、やってきたのは大森林にあるエルフの里。

「ここがティラ様ご聖誕の地……はあはあ……」

里に入るや、ルシーファが涎を垂らしながら興奮している。

まるでアニメの聖地巡礼に来たオタクのようだ（偏見）。

「……カルナさんのとき以上に両親に会わせたくないんですけど……」

「心配は要りませんわあっ！ わたくしTPOは弁える天使ですもの！」

「どの口が言うんですか……天使として最低限の倫理観すらないのに……」

「もちろん下の口ですわ！」

「カルナさん。この堕天使をどこか遠くに飛ばしていただければ、エレンさんを好きにしています」

「お安い御用だ」

「ちよつ、何であたしを売るのだ!？」

俺はルシーファに転移魔法を使う。

「じゃあな、兄のミカエルに可愛がつてもらってこい」

「それだけは絶対に嫌ですわああああああ」

ルシーファを天界の監獄に飛ばしてから、俺たちは里の中へ。  
後でエレンの胸を揉ませてもらう。

「なぜあたしが……酷いのだ……」

「すいません、背に腹は代えられませんでしたので」

ティラの屋敷に行くと、ご両親が出迎えてくれた。

「ティラああああああつ!？ うおおおおつ! 会いたかつ  
たぞおおおおつ!」

相変わらずのティラパパが、感極まった様子で勢いよくティラに  
抱きつこうとしたが、ティラはあっさりとそれを回避。

「ぶごつ!？」

ティラパパは壁に激突した。

「なぜ避けるのじゃあゝつ!？」

「お母様、ただいま帰りました」

「あら、お帰りなさい」

「まさかのスルーっ!？ わし、スルーされた!？」

「お義父さん、息子が帰りました」



「お前のパパになったつもりはな〜っ！」

相変わらずティラパパは元気のようにだ。

「うああああん！」

「あらあら、お父さんが大きな声を出すから。よしよし、良い子だからねー」

「って、お母様……？ その子は一体……」

ティラママがなぜか赤ん坊を抱いていた。

ようやく首が座りはじめたばかりといったところだ。

ティラママは赤ん坊をあやしながら言った。

「あなたの妹よ？」

「……何で教えてくれなかったんですか」

ティラがジト目で問い詰めると、ティラママはあっけらかんとした様子で、

「だって、その方が驚くと思って」

二人目の子が生まれたのは、二か月ほど前のことらしい。

「となると、やったのはちょうど俺たちが里を去った頃か」

「変な推測しないでくださいよ!？」

それまで呪いで苦しんでいたティラママが元気になったわけだし、そりゃあやることはやるだろう。

「レーラというのよ。お姉ちゃん、よろしくねー?」

ティラママが手を振らせてみると、すっかり泣き止んだ赤ん坊は、円らな目をティラに向けて「あうあう」という声を発する。とても可愛い。

しかも姉妹だけあって、ティラとよく似ていた。ぜひお義兄さんにおしめを代えさせてほしい。

「……カルナさん?」

「なんでもないです」

ティラは時々ナチュラルに心の中を読んでくるから怖い。……エツちな妄想も読み取ってくれるかな? ハアハア。

フィリアが俺の服の裾をくいくいと引つ張ってきた。

「いもーとー?」

「いや、フィリアから見たら……叔母?」

レーラは生まれながらにして叔母さんなのか……。

「それにしても、あの天使を連れて来なくて良かったです」  
「確かにな。さらっていきそうだ。『自分好みに育てたかった』とか言って」

「さすがにそこまでは……………するかもしれません」

天使の名誉のために言っておくが、もちろんルシーファが特殊なだけです。

……ミカエル……ゲイビム……うつ、頭が……。

ティラパパがでれでれの顔をレーラに寄せていく。

「レーラちゃん、次はお父さんに抱っこされたいでしゅね？」

「うあああああっ！」

レーラは再び泣き出してしまった。

「なぜじゃ！？　なぜわしはダメなんじゃあっ！？」

生まれたばかりの娘にまで拒否られるティラパパ。

「よしよし、お義兄さんになら抱っこされてもいいよなー？」

「あうー」

俺が抱きかかえると、レーラはあっさりと泣き止んだ。

柔らかいし温かい。

「あらあら、お兄ちゃんには懐いてるみたい」

「あうあう」

「何でじゃ！？　何でわしはダメでこいつはいいんじゃーっ！？」

はっはっは。

やはり純粋な赤ん坊は誰の心が清らかなのか、直感的に分かるよ

うだな。

『マスター、魅了魔法を使いましたね？』

うん。

ところでナビ子さん、せっかく身体を作ってあげたのに、何ゆえまた台詞だけの人に？

『やはりこちらの方がしつくりきますので』

身体の方はNABIKO内に放置されているという。  
頑張つて作ったのに……。

もしかしておっぱいからレーザービーム出せるようにしたのが気に入らなかったのだろうか。

『それもあります』

あるのか。

「そうそう。ティラさん、あなたのお友達がいらっしゃってるわよ？」

「え？ 私のですか？」

ティラママの言葉に、ティラがキョトンと目を丸くする。

どうやらティラの部屋にいるらしい。

「誰でしょうか……？」

「そもそもティラに友達がいたのか……？」

「し、失礼ですねっ！ 私にも友達の一人や二人……い、いると思います」

いなさそうだ。

部屋に移動し、扉を開ける。  
すると中にいたのは、

「はあはあ……ああつ、今わたし、あの人の匂いに包まれてるうっ……はあはあ……」

毛布にくるまり、枕に顔を埋めてティラ成分を堪能している変態  
天使 じゃない。  
グラマラスな褐色美少女だ。

「こいつは……アーシエラ？」

魔法都市でティラに敗北を喫した、学年首席のダークエルフだった。

「何でここに……って、人のベッドで何やってるんですかッ！？」

## 第137話 残念リシエル

「人のベッドで何やってるんですか                    ツ!？」  
「っ!」

ティラの叫び声でこちらに気づいたらしい。

ダークエルフの美少女アーシエラが、慌ててベッドから飛び降りた。

その際、大きな胸がばいんと跳ねる。  
ありがとうございます。

「……お、お久しぶりね。御邪魔させてもらっているわ」

何事も無かったかのように取り澄ますが、口の端には涎が付いていた。

「何であなたが人のベッドで寝ているんですかっ!」

「そうだぞ! それは俺のベッドだ!」

「あなたのもありません!」

ティラは母親に訴えた。

「何で勝手に家に上げているんですか? しかもダークエルフですよ?」

「だってティラに初めてお友達ができたって聞いて、嬉しくて……」  
「と、友達くらいいますって……っ!」

フィリアが眉をハの字にして訊く。

「ママ……ぼっちなの？」

「だから違います！　って、どこでそんな言葉を覚えたんですかッ？」

アーシエラがどこか偉そうな口調で言った。

「あら？　友達が一人もいないなんて随分と可哀想ね？　もしあなたがどうしてもというのなら、わたしが友達になってあげてもいいわよ？」

「遠慮します」

ティラに即答されて、アーシエラはちょっと動揺しながら、

「……な、なんでよ？　これでもリグレーン魔法学院では、“男子に訊いた女友達にしたい人ランキング”で第一位なのよ？」

それ、友達と言いつつどう考えても身体目当てだぞ。

アーシエラはダークエルフだけあって、かなりエロい身体をしているのだ。

しかも水着並に露出度の低い服装で、その褐色の肌を惜しげもなく晒している。

「ああ、なるほど。わたしと一緒にいたらその真っ平らな胸が目立ってしまうものね」

納得がいったというふうに頷くアーシエラ。

ティラのまな板……じゃない、胸を貶すのは厳禁だ。

むしろティラは貧乳の方がいいと俺的には思うのだが、本人はかなり気にしているので沸点が低く、即座に雷撃が飛んでくるのだ。

「はあはあ……くる……あれがくるわあ……」

こいつ、雷撃を浴びたいがためにわざと煽ったな。

しかしティラはぶるぶると全身を震わせながらも、耐えたようだった。

「ちよつ、何で撃つてこないのっ？」

「……それをするところちが負けるタイプの相手だと思いましたので」

「そんな……」

愕然とするアーシエラ。

「それでも毎日のように変態の相手をさせられてますので」

「ティラも大変だな」

「その半分はあなたなんですけど？ その自覚ありますか？ なさそうですよ？」

「激おこティラたんかわいい」

それにしても、一体彼女は何のためにここに？

まさかティラのベッドに包まれてハアハアするためだけに来たわけではないだろう。

「ち、違うに決まってるでしょ！ この森の奥地にある生命の大樹に、魔法触媒の材料を採取しに来たのよ」



生命の大樹か。

以前、シロクロと一緒に高級食材を採りにいった大木だ。

「そうそう。リシエル先生と一緒にいらっしやったのよ」

眠ってしまった赤ん坊を抱えながら、ティラママ。

「リシエル先生が？」

リシエルはティラの魔法の師匠であるハーフェルフだ。  
37歳なのだが、強烈なドジ娘属性の持ち主である。

だが屋敷にリシエルの姿はなかった。

「リシエルなら出かけて行ったわよ。最近、里の近くによく蜘蛛系の魔物が出るらしくて、それを討伐するって言ってたわね」

「もしかして一人でですか？」

「たぶんそうじゃないかしら。一応、止めたんだけど、『わたしを誰だと思ってるんですかあ！ リグレーン魔法学院の助教ですよっ！ 助教っ！』と言って意気揚々で行ってしまったわ」

声マネがちよつと似ていた。

万年講師だったのに、助教に昇進したのか。  
たぶん俺たちのお陰だろうけどな。

「先生が一人で魔物の討伐に……嫌な予感しかしないんですけど」

弟子にガチで心配される師匠、それが残念美人のリシエルなのだ。

というわけで、俺たちはすぐにリシエルの救出に向かうことにした。

どうも美人過ぎる助教ことリシエルです！

そう。

助教ですよ、助教！

ついにわたし、昇格しちゃったんです！

これまでの頑張りが認められ、長き不遇の時代から脱したのです。ふふふ、もはやわたしの時代がきたと言っても過言ではありませんね！

もう誰にも万年講師なんて言わせませんよ。

目指せ教授！

いつかきつと、あの性悪アーシエラを追い抜いてみせます！わたしの目の前で悔しげに膝をつく姿が目に見えようです。

と、それはそうと、わたしは今、エルフの里のある大森林にやってきています。

母親の生まれ故郷で、親戚も暮らしているここは、わたしにとって第二の故郷と言える場所です。

一時期、ここで暮らしていたこともありますし。

ティラさんに魔法を教えたのはそのことです。

今ではすっかり一流の魔法使いに成長した彼女ですが、わたしのことを「先生」と呼んで慕ってくれています。

お陰でわたしの株も上がりました。

……今のうちに里の子供たちに魔法を教えておけば……ふふふ……。

そんな打算もあつて、わたしはこのに居る間だけでも魔法教室を開こうとしたのですが、

「あ、残念リシエルだ」

「ほんとだ、残念リシエル」

「その呼び方はやめてくださあいっ！」

なぜか子供たちからまったく慕われないです……（泣）。

「だって失敗したじゃん」

「木に火をつけて大人に怒られたし」

「うぐっ……」

そうなんです。

子供たちの前で意気揚々と火魔法を披露していたら、誤って近くの木に引火させてしまったのです。

めちゃくちゃ怒られました。

「ですがっ！ わたしはリグレン魔法学院の助教っ！ ほんのー握りの一流魔法使いなんです！ これから挽回してやりますよっ！」

気合を入れ直します。

すでに“当て”はありました。

最近この里の近くに、今まではいなかった魔物がよく出没するといのです。

魔物を倒し、さらにはその原因を突き止めれば、きっと子供たちのわたしへの目も変わることでしょう。

というわけで、わたしは単身、里のさらに奥へとやってきていました。

あ、そういえば、こういう魔物が出るのか聞いてませんでしたねでも問題ありません。

「どんな魔物でもどんとこいですうー！」

と、意気揚々と叫んだまさにそのときでした。

ぐるんっ。

「へ？」

いきなり視界が上下逆転しました。

なぜかわたしは空中へと逆さまに吊り上げられてしまったのです。右足に何かが巻き付いていて、それがわたしを引っ張り上げたようなのです。

そうして宙を舞ったわたしが目にしたのは

巨大な蜘蛛でした。

「ぎゃああああああつ!? 蜘蛛っ!? わたし、蜘蛛は大の苦手なんですけどおおおつ!?」

何でよりによって蜘蛛なんですか!?

いえ、確かにどんな魔物でもって言いましたけど!?

ジタバタと暴れてみますが、足を拘束する糸を振り解くことはできません。

それどころか、木と木の間に作られた巨大な蜘蛛の巣へと捕えられてしまいました。

糸は強力な粘着力を有していました。

しかも動けば動くほど、身体に絡みついて身動きが取れなくなっていくという絶望仕様。

「ひいいいっ!?!」

巨大蜘蛛が私の方へと近づいてきます。

死にたくないいいいっ!

蜘蛛に食べられてなんて、死んでも嫌ですよっ!

「ふぁ、ファイアーランス!」

私は火魔法を発動しました。

蜘蛛の糸は火に弱い。

そのことを思い出したのです。

炎の槍を受けた糸は燃え上が            りませんか？

どうやらこの糸、火への耐性があるようです。

……ヲワタ。

## 第138話 う〇ち？

「そもそも先生、蜘蛛が苦手だったはずなんですが……」

「たぶん聞いてなかったんだろ」

「あり得ますね……」

残念美人のリシエルを追って森の奥へと入っていくと、遠くから悲鳴が響いてきた。

「ぎゃああああああっ!？」

どうやら予想していた通りらしい。

「……まず間違いないリシエル先生の悲鳴ですね」

「そうだろうな」

俺たちは冷静に頷き合った。

「もうちょつと急いだ方がいいと思うのだがっ？」

焦るエレンに、ティラが言う。

「ゆっくりで構いません。今後のためにも、先生にはしっかり懲りてもらわないといけませんし。それに先生のことですから何だかなだでしばらくは耐えるでしょう」

もはやどっちが先生なのか分からないな。

千里眼　を使って様子を確かめてみると、リシエルが巨大な蜘蛛の巣に引っ掛かってジタバタと暴れているところだった。しかしますます身体に糸の粘液が絡み付いて、身動きが取れなくなっていく。

リシエルは火の魔法を放って、糸を焼こうとしている。だが糸に耐性があるらしく、まったく効いていない。

そこへリシエルよりも大きな蜘蛛が近づいていき、毒の牙を突き立てようとする。

「ひいいいっ!?!」

あー、これはさすがにマズイわー。

俺は転移魔法で彼女の下へ。

いきなり現れた俺にびっくりしている巨大蜘蛛を蹴り飛ばす。…ぐっしやりやってしまわないように力を加減した。

「大丈夫か？　って、気絶してら」

リシエルは白目を剥いて口から泡を吹きながら気を失っていた。美人が台無しである。

しかも蜘蛛の糸に衣服を溶かす成分があつたらしく、彼女が着ていたローブがボロボロになっていて、ほとんど裸同然と化していた。今も現在進行形で服が溶けつつある。

「ふむ」

「なに観察してるんですかッ！　早く助けてあげてくださいよッ!」



じっくり見ていると、いつの間にかティラがやってきていて怒鳴られた。

「いいですか。先生は色々と抜けているんですから、もっと慎重に行動するように心がけてください」

「……ぬ、抜けてる……」

目を覚ましたリシエルはティラから説教されていた。

「何ですか？ 自覚がないんですか？ 誰がどう見ても抜けているでしょう？」

「……うう、わたし、それでも助教なのに……」

「他に適任がいなかったからではないですか」

「そんなことないですよっ！」

涙目で否定するリシエルだが、ティラはあくまで厳しく、

「そうですね。であるなら、助教らしくもつと落ち着いて下さい」

「……」

「返事は？」

「はいいっ」

……本当にどちらが先生なのか分からない。

「はあはあ……わたしもあんなふうに厳しく調教されたい……」

二人のやり取りを見ながら、アーシェラがうつとりしている。

「調教じゃないですから！……はあ、せっかく墮天使を追い払ったというのに」

新たな変態が現れたことに嘆くティラ。

「それにしても、一体どうして大樹グモがこの辺りにいたのでしょうか。しかも沢山……」

実はリシエルを助けた際に倒した一匹だけではなかった。何度か同じ種類の蜘蛛に襲われ、撃退していた。

「大樹グモとは何なのだ？」

エレンが訊く。

「生命の大樹に棲息している蜘蛛のことです。魔物ですが、大樹にとっては益虫のようなもので、大樹にとって悪い生き物を捕えて食べてくれるんです」

生命の大樹というのは、この大森林の奥地にある巨大な木のことだ。

前に登ったときも何度か魔物に遭遇したので倒したが、あれらは恐らく大樹と共生していたのだらう。

「少し嫌な予感がしますね……」  
「見に行ってみるか」

元タリシエルとアーシェラが魔法触媒の素材を採取しに行く必要があったわけだし、俺たちもそれに同行することにした。

森の中を生身で行くのは大変なので、NABIKOに乗って進むことと三十分ほど。

生命の大樹へと辿り着いた。

大森林の樹木はどれも背が高いのだが、生命の大樹は軽く千メートルを超えている。

幹の太さも尋常ではなく、地面に近い方だと直径五十メートル以上ありそうだ。

「あの……どう見てもヤバそうなのがあるんですけど……」

ティラが遥か上空を見上げながら言った。

「確かになんかいるな」

「暢気そうに言わないでくださいよっ！」

生命の大樹の上の方に、巨大な何かがくっ付いているのだ。焦げ茶色で、ラグビーボールみたいな形状をしている。

「うーちー？」

フィリアが首を傾げながら言った。

確かにうーちっぽい。

しかもなんか湯気っぽいのが出てるし。すごい出したてホヤホヤ感。

「う○ちう○ちう○ちーっ！」

「ちよっ、フィリアちゃん！ 女の子がそんな下品な言葉を連呼してはいけません！」

「う○ちだめー？」

「ダメです」

「う○！」

最後は別に伏せ字にしくてもいいと思う。

ちなみにフィリアは魔導人形なのでう○こはしない。  
アイドルと一緒にだな！

「あれは恐らく……」

「サナギか」

そう。

それはまさに、昆虫が幼虫から成虫へと姿を変える際に取る姿  
サナギだった。

一見う○こっぽいけど。

しかしその大きさは規格外。

たぶん全長五十メートルくらいあるだろう。

ちなみに湯気っぽく見えたのは瘴気だ。

それが汚染しているのか、周辺の葉が枯れ、幹が腐っている。  
大樹そのものが苦しそうに見えた。

「もしかして大樹グモが逃げてきたのはそのせいでしょうか……？」

と、ティラが呟いたそのときだった。

う〇こ……じゃない、サナギが大きく震え出したかと思うと、背中がぱっくりと割れていく。

「変態！ 変態だ！」

俺は思わず叫んだ。

「た、確かに変態なのだ！」

「へんたいー？」

「ん。変態」

「変態変態連呼しないでください！ 確かに変態ですけど！」

【へんたい（変態）】動物の正常な生育過程において、その形態を変えること。

そうこうしている間に、中から成体が出てきた。

蝶……いや、蛾と言った方がいいか。翅の柄が地味だし。

そもそも蝶と蛾の間には明確な境がなく、単に人間がそう分類しているだけらしいけどな。

翅を広げると、全長はゆうに百メートルを超えているだろう。

俺はまたも思わず叫んだ。

「モ〇ラだ！」

今にも双子妖精の歌声が聞こえてきそうである。

謎の巨大蛾は大樹の幹から飛び立った。  
それだけで空から大量の鱗粉が降ってくる。

「っ！ これは……」

その鱗粉は禍々しい瘴気を纏っていて、鱗粉を浴びた木々が驚くほどの早さで枯れ、腐っていく。

まるで枯葉剤を撒いているかのようだ。

巨大蛾が通過した一帯が、死の森と化していった。

「も、森がっ……」

無残な光景を前に、ティラが愕然としたように息を吞んでいる。

「しかもあっち、里の方ですよっ！」

リシエルの悲鳴にハッとする。

巨大蛾が飛んでいく先にはエルフの里があった。

リアスモ○ラなどと言って喜んでいる場合ではない。

俺は転移魔法を使い、巨大蛾のすぐ上へと飛んだ。

「とりあえず倒そう」

## 第139話 巨大蛾

俺は転移魔法を使い、単身で巨大蛾の上へと飛んだ。

「何だ、この禍々しい瘴気は……」

思わず顔を顰める。

巨大蛾の全身から立ち昇るのは、瘴気 澱んだ魔力だ。

それが鱗粉に纏わりながら地上へと降り注ぎ、瞬く間に大森林の木々を枯らしているのである。

俺のことなど羽虫程度にしか思っていないのか、無視して悠々と飛んでいく。

しかしその進行方向にはエルフの里があるので、早くしないと里にまで甚大な被害が出そうだ。この鱗粉を人間が浴びたらどうなるか分からないしな。

「物理攻撃はやりたくないし……」

下手にグロテスクな死体が残るような倒し方はしたくないので、火魔法で一気に焼き尽くしてやることにした。

ただし森が燃えないよう、俺はまず巨大蛾を閉じ込める形で巨大な結界を展開させた。

その上で、

「プリムストーン  
地獄ノ業火」

結界内部に放ったのは超級の火魔法である。

一瞬にして巨大蛾が凄まじい炎に包み込まれた。

ちなみに俺は 結界魔法・極 を持っているため、超級魔法でもこの結界を破ることはできない。

『~~~~~ツ!?!』

炎の中で暴れる巨大蛾。

「おいおい、マジかよ」

信じられないことに、火達磨と化してもまだしぶとく生きていた。結界を破って逃げようと、何度も体当たりをかましている。

「神級魔法 大罪浄化ス煉獄ノ炎」

ならばと俺は、最上位の火魔法をぶっ放した。

炎の大瀑布が巨大蛾を襲う。

その圧力で結界が軋み、破られそうになったが、どうにか堪えた。

やがて炎が収まると、そこには大量の灰だけが残っていた。

だがそれでも未だに膨大な瘴気を漂わせている。

「……さすがにその辺に捨てるわけにはいかないだろうな」

仕方がなく 無限収納 で収納しておくことにした。



すでに汚染されてしまった大樹や森の木々を浄化するのに、ルシ  
ーファが役に立った。

天力を使えば、比較的簡単に瘴気を取り除くことができたのであ  
る。

「ティラ様のためなら何だってしますわああっ！」

「……いつの間に戻ってきたんですか？」

天界の監獄に飛ばしたはずだったんだけどな。

まあお陰で助かった。

巨大蛾が死んでも瘴気は消えず、汚染は拡大し続けていた。

俺のスキルでも何とかできなくはなかったが、たぶんかなり時間  
がかかっただろう。

それから俺たちはリシエルとアーシエラが必要としていた素材を  
一緒に採取してから、エルフの里へと戻った。

「それにしてもあれは一体、何だったのでしょうか？ 普通の魔物  
とは違うように見えました……」

と、ティラ。

俺も同意見だった。

あんなタイプの魔物に遭遇したのは初めてだ。

「ナビ子さん？」

『……申し訳ありません。わたくしにも詳細は分かりかねます』

マジか。

ナビゲーション

道案内・極 であるナビ子さんの中にも情報がないらしい。

『そもそもわたくしはその名の通り、あくまで道案内を専門としたスキルです。』

辞書的な利用法はあくまで副次的なものだという。

「長老が？」

「左様。あの巨大な蛾の姿は里からも見えたのじゃが、そのことを聞いた長老が急に取り乱し始めたそうなのじゃ」

里に帰ってきた俺たちに、ティラパパが言う。

「すまないが、その魔物を討伐した君に少し長老のところに行ってもらいたいのじゃが……」

それくらいお安い御用である。

もし長老がああ魔物のことについて何か知っているのだとすれば、こちらとしても話を聞きたいところだった。

あまり大人数だと迷惑になりそうなので、俺とティラが代表して会いにきた。

エルフの長老は、名をトコロと言った。  
なんと五百年も生きているという。

長寿種であるエルフでも、せいぜい長生きして二百年ちよつとだ  
ということを考えれば、驚くほどの高齢である。

さすがによぼよぼだった。

もはや見た目では男か女かの区別すらつかない。

「長老様、お久しぶりです。族長ディーガの娘ティラです」

ティラが挨拶する。

長老は耳を傾けた。

「ああ!？」

どうやら聞き取れなかったらしい。

ティラは先ほどより大きな声で、ゆっくりと言った。

「……長老様、お久しぶりです。族長ディーガの娘ティラです」

「ああ!？」

やはり聞き取れなかったらしい。

ティラはさらに大きな声で、

「ぞくちようディーガのむすめティ  
ラです！」

「ああ!？」

「……………もう良いです」

ティラは諦めた。

「ごめんなさいね？ 曾爺様は耳が遠くて……」

長老の曾孫だという女性が謝ってくる。

「これ、そもそも会話が成立しない気がするんですけど……」  
「俺に任せてくれ。念話で話してみよう」

念話なら耳が悪くても伝わるはずだ。

「っ！」

長老は驚いたようだった。

そして歯の抜け落ちた口を動かし、

「ふがふがふが」

長老は何かを伝えようとしている！

「ふがふがふが」

長老は何かを伝えようとしている！

「ふがふがふが」

長老は何かを伝えようとしている！

「なるほど……」

俺は神妙に頷いた。

「今ので分かるんですか!？」

「念話で聴き取ったからな」

「じゃあ、わざわざふがふが言わせなくても良いじゃないですか…」

…」

長老の話によれば。

かつて、強大で邪悪な存在がこの世界を支配しようとしていたという。

それは何体もの凶悪な魔物を従えており、その内の一体に禍々しい鱗粉を撒き散らした巨大な蛾がいたらしい。

その蛾が通った場所は醜悪な大地へと変わり果て、鱗粉を浴びた人々が次々と死んでいったというから、先ほどの魔物と非常によく似ている。

「それで、どうなったんですか……?」

そこに突如として現れたのが、神々から特別な加護と力を授かった一人の英雄だった。

英雄は死闘の果てにその邪悪な存在を打ち倒し、世界に平和をもたらしたという。

「ふがふがふが」

「もう千年も昔のことだ」

「ふがふがふが」

「子供の頃に曾爺さんから聞かされたことがあった」

「ふがふがふが」

「あの蛾はきつとその邪悪な存在が復活する前触れ?」

「ふがふがふが」

「もう世界はお終いじゃ？」

長老は頭を抱えて、怯えるようにぶるぶると身体を震わせた。  
ぶつちやけ世界が終わるより先に長老の方に寿命が来そうだが。

そもそもこの長老が生まれる前のことだろ？

それじゃあ、ただの神話か、それとも実際にあった歴史なのか分からない。

「ふがふがふが」

「西のグレア砂漠に、千年前に栄えた大帝国の遺跡が？」

「ふがふがふが」

「その中には英雄の墓と言われているものもある？ なるほど、そこに行けば何か手がかりがあるかもしれないのか……」

長老に礼を言って、俺たちは屋敷を後にした。

『グレア砂漠は、エクバーナからずっと西へ行ったところにあります』

エクバーナは獣人の国だ。

あそこから北方には温泉を求めて行ったことがあるが、西には行かなかったな。

しかし砂漠かあ。

どうせ砂ばかりで何も見どころのない場所だろう。

長老の話もただのよくある伝承の一つで、あの蛾は偶然それに登場する魔物と似ていただけかもしれないしな。

『ちなみに現在は女だけの戦闘民族であるアマゾネスたちが国を作っています』

「よし、行こう」

ナビ子さんの情報を受けて、俺は即座に今後の方針を決定した。

「……明らかに不純な動機ですね？」

「何を言っているんだ、ティラ！　もしかしたら本当に世界に危機が迫っているかもしれないんだぞ！　例え火の中、水の中、そして鍛え抜かれたむっちむちの美女たちの中、ぐへへ……俺はどこにだって行ってみせる！」

## 第140話 アマゾネスの国

エルフの里を後にした俺たちは、魔法都市に戻るリシエル、アイシエラと別れて、アマゾネスの国があるグレア砂漠へと向かった。

エクバーナを通過し、西へ。

やがて前方に広大な砂漠が見えてきた。

「これがグレア砂漠かー」

『広さはゴビ砂漠と同程度です』

相変わらず地球の情報を知っているナビ子さんは謎だ。

「すなーっ!」

NABIKOの窓から外を眺め、フィリアが嬉しそうに飛び跳ねている。

「本当に見渡す限り砂ですね。方角がまったく分かりません」

「しかも昼は凄まじく暑く、夜は逆に凍えるほど寒い。砂漠に行くには相応の準備と覚悟が必要だと言われているのだ」

「ん。暑い嫌い」

しかし例のごとくNABIKOに乗っていれば勝手に目的地まで連れて行ってくれるし、室内は常に快適な温度に保たれている。

『地中から敵性個体が接近中。サンドワームのようです。撃退します』



さらに魔物が現れても、勝手に倒してくれるから楽ちんだ。

この砂漠を徒歩で横断するとか、マジで大変そうだな。

俺たちがこんな緩い旅をしていると知ったら、普通の旅人が怒りそう。

「それにしても随分と過酷なところに住んでるんだな、アマゾネスは」

『都市は数少ないオアシスに築かれているため、そこまで酷い環境ではないようです』

「そうなのか」

女だけの戦闘民族　アマゾネス。

たぶん褐色でむっちりむちで性欲旺盛なんだろうなあ……ハアハア。

「あああつ、アマゾネスの美女たちに囲まれて、わたくし、あんなことやこんなことをしたいですのおおっ！　じゅるり……っ！」

変態天使がいつにも増して興奮している。

砂漠に入って、およそ二日。

先日の大改造のお陰で各々が退屈することなく過ごしていると、ナビ子さんのアナウンスが車内に響いた。

『目的地が見えてまいりました』

皆がリビングに集まってくる。

砂漠の中に突如として現れたオアシス。

かなり大きく、びつくりするくらいその一帯だけ緑が豊かだ。  
街の周囲は粘土質の壁があり、外敵の侵入を防いでいる。

あれがアマゾネスの街　　ゾラスか。

『言い忘れていましたが、ゾラスは男子禁制です。男性が立ち入ると、有無を言わず奴隷にされてしまいますのでお気を付けください』

と、今さらながらナビ子さん。

「ではカルナさんは入れませんね」

「パパだめー？」

「ここはアタシたちに任せておくのだ！」

ふっふっふ。

この俺を誰だと思っているのかね？

チートスキルを百個持つ変態、カルナ様だぞ？

『……変態という自覚はありなのですね』

変身・極

そう、俺にはこのスキルがあるのだ！

「どうかしら？　これなら完璧でしょ？」

くねくねと色っぽく身を擦じらせながら、俺は髪を掻きあげてウインクしてみせる。

変わったのは口調だけではない。

身体も完全に女性のそれと化していた。

女体化である！

鏡で確認してみると、そこには俺の面影を残しつつも、どこからどう見ても可愛い女性姿があった。

髪が伸びる代わりに身長が縮み、胸や尻が膨らみ、全体的に丸みを帯びた体型になっている。

「パパがママになった！？」

フィリアが目を白黒させた。

「そこまでして街に入りたいのですか……」

「もちのろん」

「本当に貴様は度し難い変態なのだ……」

ルシーファが俺をちらちら見ながら葛藤していた。

「美少女……いいえ、これは男……でも美少女……いいえ、中身は男……」

ちなみに奴隷にされたらどうなるんだろうか？

『まず、奴隷同士で何度も何度も繰り返して戦わせます。かなり高い確率で死ぬ、命懸けの戦闘です。そうして生き残った強い男だけが、繁殖のための種として利用されるようになります。もちろん数が少ないため、一人で多数の女性を相手にするようです』

やっぱ俺、男に戻るわ！

「アマゾネスたちの奴隷になるううっ！」

ついに男の夢であるハーレムに辿りついたと思ったが、良く考えてみたらアマゾネスにも必ず一定の割合でブスがいるはずだ。

そうした女どもとやらなければならぬというのは、さすがにちよつと抵抗があつた。

AV女優とか、よくあんなキモイ汁男優とできるよなあ。

『……………』

というわけで、女体化したまま街へ

入ろうとしたら、入口のところで門番に見咎められた。  
男並みの体格をした、ゴ○ラみたいな顔の中年女性だ。

……よかつた、こんなの性奴隷にされたりしたら死ぬところだつた。

「お前たち、異国の旅人か？ 珍しいな」  
「そうよ」

どうやら単に他の国から来る者が珍しいので声をかけてきただけらしい。

ちなみに「そうよ」と答えたのは俺だ。女だからな！

「砂漠を越えるのは大変だっただろう？」

「まあね」

「ふむ。若いのに、なかなかの強者のようだ」

感心されてしまった。

「砂漠を越えられぬ弱者に、我が国に入る資格はないからな」

つまり砂漠を越えてここまで辿り着くことができた女ならば、滞在する権利があるということか。

俺たちは城門を潜って街の中に入った。

「ふおおおおおおっ！ 本当に女性ばかりですわああああっ  
！」

ルシーファが涎を垂らしながら声を上げている通り、道行く人たちはその大半が女性だった。

たまに見かける男はすべて鎖を付けられている。

アマゾネスたちは想像していた通り、黒々とした髪に、健康的に日焼けした褐色の肌をしていた。

たまにゴリゴリのマツチヨがいるが、その多くは適度な筋肉で、しっかりと引き締まった均整の取れた身体をしている。

全体的に胸やお尻が大きく、むっちりむちだ。

要するにエレンみたいな体型がいっぱいいる。

しかも暑いからか、露出が高く、ほとんど水着のような格好で素晴らしい。

ああ、あそこの足の長いお姉さんに蹴られたいぜ……。

「ハアハアハア……わたくし、我慢できる気がしませんわぁ……デユフフ……」

ルシーファがふらふらとアマゾネスの多い一帯へと歩いていく。

「……アレとは他人のフリをしましょう」

というティラの提案もあって、俺たちはルシーファを放置して街中を進んだ。

道行く人のほとんどがアマゾネスで、やはり俺たちのような異邦人が珍しいのか、ちらちらと好奇の視線を向けられる。

全裸で歩きたい。

「それで、英雄の墓とやらはどこにあるんだ？」

『どうやら街の地下にある遺跡がそう呼ばれているようです。入り口はここから北西に三キロほどの場所です』

「とりあえず行ってみるか」

ナビ子さんの指示に従い、街を歩いていく。

やがて、全体的に地味な色合いの街の中では珍しく、豪華絢爛な建物が現れた。

黄金の屋根と真っ白い大理石でできていて、所々に宝石が埋め込まれている。

「もしかして王宮か？」

『そのようですね。遺跡への入り口はこの王宮内にあるようです』

さすがに王宮に自由に出入りすることは難しかったようで、近づいただけで衛兵たちに取り囲まれてしまった。

おっ、何人か美人がいるぞ。

「何の用だ、異国の者よ?」

「ここは我らが女王陛下の住まう御殿だ。異邦人は立ち去るがいい」

強い口調で咎められる。

「その女王に会わせてくれないか?」

「駄目だ」

にべもない。

王宮の中に遺跡があるとすれば、入るにはその女王の許可が必要だろう。

しかしその女王に会えないとなればお手上げじゃないか?

「どうしたら会えるんだ?」

「陛下との謁見は真の強者にしか許されておらぬ」

真の強者?

## 第141話 武術大会

俺たちは街の一角にある闘技場へとやってきていた。

戦闘民族であるアマゾネスたちは、その本能に従って、日夜、厳しい訓練と戦いに明け暮れているという。

ここ闘技場では定期的に武術大会が開催されていて、女たちの熱い戦闘が繰り広げられているのだ。

「異民族がアマゾネスの女王に会うには、この大会に参加して一定以上の成績を上げないといけない、か」

王宮の衛兵に言われたのは、そんな条件だった。

で、その大会がちょうど数日後に行われるらしいので、だったら言われた通りに出場してみるのが手っ取り早いだろうと判断したのである。

「あたしに任せておくのだ！ アマゾネスどもに修行の旅の成果をみせてやろう！」

代表してエレンが出ることになった。

鼻息が荒く、かなり気合十分だ。

とりあえずエントリーしないといけないので、闘技場に併設された事務所へ。

「我らがアマゾネスの武術大会は甘くないぞ。無残な戦いをした弱者は殺されることもあるのだ。貴様にはその覚悟があるか？」



と、事務所受付のアマゾネスに脅された。  
受付とは思えない筋肉質の美女である。

「心配は要らないのだ！ むしろ優勝してみせよう！」

エレンは胸を叩いて宣言する。

「……ふん、随分と自信家のような。その鼻っ柱が押し折られるだけで済めばいいがな」

鼻を鳴らし、皮肉っぽく言いながらエントリーシートを渡してくる事務系アマゾネス。

「さて、宿を探さないとな」

ぶっちゃけ俺の今の最大の関心事は、武術大会などよりそれだった。

もちろんちゃんとお風呂のある宿でなければならない。  
それも大勢が一度に入れる大浴場。

だって女湯しかないに決まっているからな！

女湯しかなければ女湯に入るしかないよね？

それなら仕方ありませんね……とティラも折れてくれるに違いない。

『そんなはずないかと』

ぐへへへ……アマゾネスの美女たちの裸体が目に浮かぶようだぜ……。

「別にNABIKOに泊まれば良くないですか？　こんなことを言うのはこの国に申し訳ないですけど、NABIKOほど快適な設備が整っている宿があるとは思えません」

……勘のいい女は嫌いだよ……。

数日後、武術大会の日がやってきた。

大会に出場するアマゾネスたちは百人を超えているという。

まずは予選が行われ、本選に出場できるのは僅か八名だけらしい。

予選は八組に分かれていて、二十人以上が一斉に戦うらしい。勝ち残れるのはたったの一名だ。

エレンは予選第一組への出場だった。

大歓声の中、アマゾネスたちに交じって早速エレンが舞台上がってくる。

「エレンさん頑張ってください！」

「ママがんばれーっ！」

「ん」

俺たちは観客席から応援だ。

「任せておくのだ！」

エレンは必勝を宣言するかのように剣を高く掲げてみせた。

ちなみにエレン以外は全員がアマゾネスである。

となると、下手をすれば協力して真っ先に倒されてしまう可能性もあった。

「だがエレン。お前ならやれると俺は信じているぞ」

なぜならこれまで彼女は、幾つもの過酷な試練を乗り越えてきたからだ。

裸に剥かれたり。

胸を揉まれたり。

触手に襲われたり。

「それ剣の修業とはまったく関係ないですね？」

予選が始まった。

「さあ、どこからでもかかってくるのだ！」

エレンが威勢よく叫んだ。

そんな挑発をしたら一斉に襲い掛かってこられるかもしれないが、それだけ自分の力に自信があるのだろっ。

……単にアホなだけかもしれないが。

だがそんなエレンの威勢とは裏腹に、アマゾネスたちはまったく

見向きもせず、同族同士でぶつかり合った。

彼女たちが使う武器は、剣や槍、斧、爪、バトルブーツ、鞭、ブーメラン、あるいは徒手空拳など、非常に多彩だ。

「……ど、どこからでもかかってくるのだ！」

エレンは再び声を張り上げた。

しかしやはりアマゾネスはエレンを放置。  
同族だけでやり合っている。

……もしかしたら雑魚は放っておいても良いと判断されたのかも  
しれないな。

「……いいもん、いいもん……どうせあたしなんて……」

エレンが拗ねてしまった。

三角座りになって、指先で地面をぐりぐりしている。  
まるで修学旅行の班決めで、一人だけ仲間外れにされてしまった  
子のようなだ。

誰か、可哀想なエレンを構ってあげてくれ。

そのとき、アマゾネスの一人が忌々しげに声を荒らげた。

「弱者め！ 神聖な大会を穢す貴様のような輩を、我らは許さぬ！」

どうやらエレンの様子が気に障ったらしい。

自身の体躯ほどもあるうかという巨大な斧を手に、エレンに襲い  
かかった。

うじうじしているエレンの頭めがけ、振り下ろす。

「潔く死ぬがいいぞ！」

マジで殺す気だ。

だが次の瞬間、

ズゴンッ！！

という凄まじい音とともに巨大な刃がエレンの後頭部に激突した  
かと思うと、刃が粉々に砕け散った。

「……へ？」

彼女の口からそんな声が漏れる。

頭に斧の一撃を喰らったエレンは、それでようやく気づいたらしく、

「おおっ！？」

目を輝かせながら立ち上がった。

「もしかしてあたしと戦ってくれるのかっ！」

やっと出会えた相手に、エレンはとても嬉しそうだ。  
ちなみにまったくの無傷である。

一方、信じられない形で武器を破壊してしまったアマゾネスは、

「……き、棄権する」

エレンの化け物っぷりを理解したのか、あっさりと白旗を上げた。  
エレンは天国から地獄に突き落とされたかのような顔になった。

「な、なぜなのだ……」

しかしそこでエレンは思い直したらしい。

「そっちが来ないのなら、こちらから行ってやるのだ！」

エレンが地面を蹴った。

一瞬にして一番近くでやり合っていたアマゾネスの二人に肉薄すると、剣を一振り。

「「っ!？」」

二人のアマゾネスが剣圧だけで吹っ飛んでいった。  
そろって観客席に突っ込み、激突して気を失う。

「どんどん行くのだ！」

さらにエレンは自分からアマゾネス同士の戦闘へと割り込み、次々と撃破していく。

「何だあいつは!？」

「っ、強い!？」

エレンが只者ではないと気づいたのだろう、同族同士で戦ってい

たアマゾネスたちが、エレンを警戒するようにいったん動きを止めた。

すでに半数近くが脱落しており、残るは十人程度だ。

「まとめてかかって来るがいい！」

調子を取り戻したエレンが挑発気味に言う。

「異邦人が舐めるな！」

「戦闘民族の力を見せてやるわ！」

今度こそアマゾネスたちは挑発に応じてエレンに躍りかかった。

「どりゃあああっ！」

エレンは気迫の叫び声を轟かせ、剣を一閃。

それだけでまるで竜巻のごとき衝撃波が巻き起こって、アマゾネスたちをまとめて吹き飛ばしてしまった。

「ふふん！ どうだ！」

予選をあっさりと勝ち抜いたエレンは、本選へと歩を進めた。

そして本選でも一回戦、二回戦と、圧倒的な強さで勝ち進んでいく。

ぶつちやけ予想していた通りの展開だ。  
まあステータスがまるで違うからなあ。

確かにアマゾネスたちは戦闘民族だけあって高いステータスを有しているが、この旅の間に何だかんで人類最強クラスにまで成長したエレン（現在レベル89）が相手となると、やはり相手が悪いと言わざるを得ないだろう。

「……むう。本選に行けばもう少し骨のある相手も出てくると思っていたのだが……」

もっと張り合いのある戦いを望んでいたエレンは不満そうだった。



第142話　なんで出場しなかったんだ！（血涙）

結局エレンは決勝でも圧勝。

期待通りに武術大会で優勝してくれたのだった。

「む」

本人は納得がいかなそうに唸っているが。

「とにかく、これで女王様にお会いできそうですね」

「そうだな。よくやったぞ、エレン。ご褒美だ。師匠としてちゃんと揉んでやろう」

「稽古をつけてくれるのか！」

「胸を」

「そ、そんなご褒美など要らぬのだッ！」

「俺にとってはご褒美だ」

「何で貴様にご褒美をやらねばならないのだッ!？」

そんなやり取りをしながら、闘技場を後にしようとしたときだった。

俺たちの行く道に大勢のアマゾネスたちが立ち塞がった。

よく見ると試合でエレンに倒された者たちの姿もある。

「……何の真似なのだ？」

エレンが眉根を寄せて睨みつける。

負けた腹いせに、集団でエレンを痛めつけようともいうのだろ

うか。

確かに戦闘民族である彼女たちにとっては、飛び入りで参加した異民族のエレンに優勝を搔つ攫われてしまうなど、大いなる屈辱に違いない。

「たたかうのー？」

と、フィリアが小首を傾げたそのときだった。

「……エレンお姉様あああああつ……！」

アマゾネスたちが黄色い悲鳴を轟かせた。

「……へ？」

エレンがぽかんと口を開ける。

そこへ彼女たちが一斉に群がってきて、

「あああつ、あたし、エレンお姉様に触っちゃったわ！」

「私も私も！ もう一生手を洗わない！」

「この燃える炎のような髪……まさに強者の証……素敵……」

「お願い！ 抱いて！」

エレン、大人気である。

アマゾネスたちは完全にジャニーズを追っかける熱狂的なファンと化していた。

『この国では、男性はあくまで子を産むための道具であり、むしろ

女性同士の恋愛が一般的のようです。そして強い女性ほど憧れと好意の対象となり易く、中には大勢の女性を囲っているアマゾネスもいるほどです』

くそおおおっ！

何で俺は出場しなかったんだよおおおおおっ！

俺たちはNABIKOへと戻ってきていた。

「酷い目に遭ったのだ……」

散々アマゾネスたちに揉みくちやにされたエレンがぐったりしている。

「大丈夫ですか？」

「どうにか……」

街の宿に泊まっていなくてよかったな。

下手をすれば特定され、大勢のアマゾネスが押しかけてきていたかもしれなかった。

そうしてNABIKOに一泊し。

翌朝、俺たちは今度こそ女王に謁見するため、王宮へと向かった。

「あつ、エレンお姉様よ！」

「本当だ！」

「「「エレンお姉様ああっ！」」」

「ひいいいっ!？」

途中で何度かエレンの熱狂的ファンに遭遇して追い駆け回されたが、どうにか振り切って王宮へと辿り着く。

「それにしてもすごい人気だな、エレン。……代わって欲しいぜ」

「代われるものならあたしも代わりたいのだ……」

先日は門前払いをかましてきた衛兵が、エレンを見るなり頬を赤らめて、

「これはエレンお姉……エレン殿！ 先日は貴殿の実力を侮って大変な無礼を働いてしまい、失礼いたしました！ もちろんお通り戴いて構いません！ 女王陛下がお待ちです！」

すんなり通してくれた。

どうやら彼女もエレンのファンになったらしい。

王宮を案内され、女王陛下の待つ謁見の間へ。

「よくぞ参ったの。我はティグリア「バル」グラトアス。この国を治める者ぢや」

ティグリアと名乗ったそのアマゾネスはまだ若かった。せいぜい二十代後半といったくらいだろう。

アマゾネス特有の艶やかな黒髪に、褐色の肌、そして引き締まったグラマラスな肉体。

切れ長の目の周囲に独特な紋様を刻んだ女王は、大人の色香を放つ美女だった。

色気たっぷりの年上お姉さん。

ぜひ筆おろしされたい。

『……もう少し欲望を押えてください』

ナビ子さんが俺の心を勝手に読むのが悪いと思います。

『女王の座には、当代で最も強い者が就くことになっているのです』

だから若いらしい。

ちなみに昨日の武術大会に出ていなかったが、あれは一つの予選会であり、年度の最後に各武術大会の優勝者が集うより上位の大会があつて、その優勝者が女王に君臨するのだとか。

俺たちは事情を話した。

「なるほど、それで我が国に来たというのか」

ティグリアは頷いて、

「しかし、この遺跡は我らアマゾネスにとって神聖なものぢや。さすがに異民族の者を入れるわけにはいかぬ」

おいおい、なんかダメっぽい流れだぞ。

「……だが、この国では強さこそすべて。どうしてもというのなら、それに相応しい力を証明してみせるがよい」

そう言って、ティグリアは玉座から立ち上がった。  
コキコキと首や手首を鳴らし、好戦的な笑みを浮かべている。  
戦う気満々だ。

さすがアマゾネス。  
とても分かり易い。

「ふむ。昨日の大会では物足りないと思っていたところなのだ。ぜ  
ひあたしが　ぶべっ!？」

俺はエレンを押し退けた。

「俺　じゃない、私が戦うわ!」

宣言する。

もし女王に勝てば!  
彼女は俺に惚れるはず!  
そうして夢のTSSレスセック

「フィリアちゃん、やっちゃってください」  
「わーい!」

ティラの言葉で、フィリアが地面を蹴った。

「なっ!？」

凄まじい速度でティグリアとの距離を詰めると、

「えいつ！」

「あああああああつ！？」

拳一発で吹っ飛ばす。

ティグリアは強かに壁に叩きつけられ、あつさりと気を失ってしまった。

「フィリアあああああああああああつ！？ 何やってんだあああああああつ！？」

俺は泣いた。

「パパー？」

「フィリアお姉様あ……」

「よしよし」

「ふへへ……」

女王ティグリアはフィリアにしな垂れかかり、頭を撫でられて恍惚としている。

「何でこうなった……」

またしても絶好のチャンスを逃してしまった俺は、弱々しく呻く

しかない。

「ああでも、ティラたんが俺に嫉妬してくれたと思えば……。そうだよな……。旦那が他の女に手を出そうとしていたんだ……。そりゃあ、嫁としては是が非でも阻止しようとするよな……。ふふふふ……」

「だから嫁になった覚えはありません」

ともかく、これで遺跡に入ることができるようになった。

「気をつけるがよい。長き年月を経て、今や高難度のダンジョンと化しておる。まだ我々ですら、その全貌を把握できておらぬのぢや」

ティグリアに見送られ、俺たちは薄暗い遺跡の中へと入っていく。

しばらく進むと魔物が現れた。

ガチャガチャという音を鳴らし、近づいてくるのは全身鎧。しかし中に人は入っていない。

「リビングアーマーか。……。おりゃ」

剣を振り上げ斬り掛かってくるが、その前に胴部を蹴って吹っ飛ばす。

通路の遥か向こうにある壁に激突し、バラバラになってしまった。

「どんどん進むぞー」



第142話 なんて出場しなかったんだ！（血涙）（後書き）

書籍版3巻は4月15日頃に刊行です。

## 第143話 聖剣（もろい）

地下遺跡は非常に複雑な迷路になっていた。

しかも立体的なので、上がったたり下がったりしなければならない。  
探知・極 スキルで全貌を把握していても、混乱してしまいそう  
なくらいだった。

もちろんトラップも仕掛けられていた。

足元の床が消失し、針山に落とされそうになったり。

天井が落下してきたり。

壁から矢が飛んできたり。

感知・極 スキルで事前に察知できるのだが、相変わらずエレン  
がやたらと引っ掛かってくれるので進むのに難儀した。

「くっ……トラップがこれほど多く仕掛けられているとは……なん  
て危険なダンジョンなのだ……ッ！」

そんな台詞の割に、エレンは嬉しそうに頬をニマニマさせている  
のでどうしようもない。

DMだよな、こいつ。

「わーいわーい、とらっぷとらっぷー」

フィリアはフィリアで遊具とでも勘違いしているのか、トラップ  
を歓迎している。

現れる魔物はリビングアーマーの他に、ゴーレム、ガーゴイルなど。

大抵はワンパンで倒していく。

やがて、いかにも何かのイベントが発生しそうな最奥の大広間へと辿り着いた。

「何だこの絵は？」

壁に沢山の絵が描かれていた。

不気味な生き物たちが、何体も。

翅の生えた毒々しい蛙だったり、首が百以上ある蛇だったり、足の生えたサボテンのようなものだったり。

それらよりずっと小さいのだが、人間らしき者たちが喰われたり逃げたりしている様も描かれていた。

これが本当に人間だとすれば、生き物たちはかなり巨大だということになる。

「見てください、これ」

「蛾だ」

ティラの指差す方向を見ると、先日、大森林に現れたあの巨大な蛾とよく似た生き物が描かれていた。

「もしかして実際にあったことを絵にしたのか……？」

思い出すのは長老の言葉だ。

ふがふがふが。

違う、念話で聴き取った方を思い出さないとダメだ。

「強大で邪悪な存在と、そいつが従える魔物か」

「もしかしたら本当にあつたことなのかもしれない……。そして後世に警告するため、この場所に絵を描いたと……」

だとすれば、本当にこの遺跡は、その邪悪な存在を打ち倒したという英雄の墓なのかもしれない。

広間の奥には、祭壇のような、あるいは墓のようなものがあつた。しかし近くにはそれ以上に立派に設えられた台座があつて、そこには一本の剣が突き刺さっていた。

「おおつ、もしかこれはその英雄が残したいわゆる“伝説の剣”つてやつか？」

いかにもそんな雰囲気醸し出している。

「伝説の剣！？　ぜ、ぜひとも欲しいのだった！」  
「あつ」

エレンが真つ先に飛び付いた。

おいおい、その剣を抜くのは主人公であるカルナ様に決まってるだろ！

させるか！　とばかりに俺はエレンを追い駆ける。

だが俺の手は彼女のぷりっぷりのお尻を撫でるに終わってしまう。

「どこ触ってるんですか

ッ！？」

「だが悔いはない！」

エレンが剣の柄を掴み、思いきり引き抜こうとする。

ふっ、しかしどうせアホのエレンに抜けるはずがない。

こういう剣を抜けるのは選ばれたものだけと相場が決まって

ズボッ！

「抜けたのだ！」

えええ……。

伝説の剣<sup>たぶん</sup>を手にしたエレンは、嬉しそうに剣を素振りする。

「すごく軽い！ これならドラゴンの鱗でも斬れそうなのだ！」

「……ん」

シロが小さく顔を顰めたそのときだった。

ブンッ、ペキッ！

「へ？」

エレンの握力に耐え切れなかったのか、伝説の剣(?)の柄が折れてしまった。

くるくる回って刀身が飛んでいき、壁に激突する。

パリンッ！

刀身も折れた。

「ええええええっ!？」

エレンが悲鳴を上げ、その場に崩れ落ちる。

「で、伝説の剣を、壊しちゃったのだ……」  
「まあもう千年以上も昔の剣だしな」

恐らく最初から脆くなっていたのだろう。

と、そのときだった。

祭壇の方から何やらゾクリとする気配が漂ってくる。

いつの間にか足のないおっさんが立っていた。  
身体が透けている。

「すっけすけーっ!」  
「ゴーストか」

一瞬、死霊術で浄化してやろうかと思ったが、すぐに思い直す。  
こういうシーンで現れるゴーストは、物語の進行上、重要な役割  
を持っているものだからな。

「もしかして……千年前の英雄？」  
「何を言っているのだ？ 英雄がこんな……こんなパツとしない容  
姿なわけないだろう？」

エレンが反論してくる。

パツとしないどころか、ぶっちゃけかなり不細工なおっさんだった。

禿げているし、小柄だし、小太りだし、顔もお世辞にも美形とは言い難い。

だが、

「不細工なおっさんが英雄でもいいじゃないか！ 英雄がイケメンだなんて誰が決めた！？」

俺は力強く反駁する。

「そうだよな、不細工なおっさん？」

「貴様の方が失礼だと思うぞ！？ あたしは不細工だなんて一言も言っていないからな！？ はっきり言う失礼だと思って、ちゃんとオブラートに包んだのだ！」

「エレンさんのその発言も随分と失礼だと思いますけど……」

おっさんゴーストが弱々しく言った。

『……どうせワシはとても英雄に見えんよ……』

話を聞くに、このおっさんゴースト、本当に千年前に世界を救った英雄らしかった。

やはり人は見かけで判断してはならないらしい。

「気にするな、おっさん。たとえチビ、禿げ、デブ、不細工と四拍子そろっていても、英雄は英雄だ」

「さっきからあえて言ってますん？ 憑りつかれますよ？」

『お嬢ちゃん、心配してくれなくてもよいぞ。もう慣れておるから

の……』

おっさんは疲れたサラリーマンのように溜息を吐いた。  
どうやら生前にかなり苦勞したらしい。

『お主らがここに来たということは、ヤツの復活が近いということだろう。ヤツは決して普通のやり方では倒すことができぬ。しかし心配は要らない。ワシが神々から賜った聖剣を使えば、ヤツにもダメージを与えることが可能だからだ』

そう言つて、おっさんゴーストは指をさした。

『その台座に……ん？　ない？　そこに剣があつただらう？』  
「もしかしてこの剣のことか？」

俺は先ほどエレンが破壊した剣の残骸を集めて見せた。

『聖剣が壊れとるううううっ！？』

愕然とするおっさん。

「あああ、あたしが壊したわけじゃないぞ！？　ちょ、ちょっと振っただけで勝手にこうなつたのだ！」

エレンが慌ててそう弁明する。

それでも罪悪感があるのか、彼女は必死に、

「な、治す方法はないのか！？」

『たぶん無理だと思う……』

「では他に聖剣は！？」



『少なくともワシはそれ一本しか知らぬ……』

処置なし、という顔で首を振るおっさん。

『で、では頑張ってくれ。ワシはそろそろ逝かねばならない。健闘を祈る』

「ちよっ……」

それからまるで逃げるように消えてしまった。

「最初から最後までまったく英雄っぽくなかったな」

第144話　また女神Aがあらわれた！　また女神Bが（ry

「お久しぶりです、東城カルナさん」

名前を呼ばれてゆつくりと瞼を開くと、目の前に女の子がいた。

物凄い美少女だ。

アイドル？　いや、アイドルでも見たことないくらい可愛いぞ？  
なんか全身から光が出てるしな。

って、女神じゃねーか。

俺が転生する際に出会った女神だ。

名前は確か……

「女神アーシアです。覚えておられますか？」  
「もちろん」

百人いた女神のうちの一人だ。  
最初に会った女神でもあるので、よく覚えている。

辺りはやはり何もない白いだけの空間だ。

「まさか俺、また死んだのか？」  
「いえ、今回はそうではありません。カルナさんに謝らなければなら  
ないことがあります、こうしてお呼びさせていただいたのです」

謝らないといけないこと？

一体何だろうか？

「カルナさんを送り出した世界なのですが……実は近い将来、人類が滅びてしまうことが分かりまして……」

「マジか」

女神アーシアはとても申し訳なさそうに、

「そんな世界に送ってしまい、本当に申し訳ありません」

「ちなみに何で急に滅びることになるんだ？」

「それが……」

遙か昔のこと。

神々の園から追放された一柱の神が、世界の法則を破つてある世界に逃げ込んだという。

邪悪な神　邪神と化したそいつは、その世界を支配しようとした。

もちろん神々はすぐにそれに気づいた。

ゆえに、その世界の人間に邪神を倒すことができる力を与えることにした。

そうして無事に邪神の討伐に成功したと思っていたのだが、

「実は異空間に潜み、ずっと復活のために力を蓄えていたことが分かりまして……」

しかも当時を遙かに凌駕する強大な力を蓄えており、もはやあの世界の者たちの手に負えないのだという。

そこで世界ごと切り捨てることにしたのだとか。  
そうすれば、一つの世界が滅びるものの、それ以上、被害が拡大することは無い。

「ですのでこのたび、カルナさんには特別に他の世界に送り直すことが認められました」

言いながら、女神アーシアは候補となる転生先を幾つか提示してくる。

だが俺は首を振った。

「いや、俺は別の世界に行く気なんてないぞ」

「……え？」

「ほ、本当に良いのですか？」

「ああ。構わない」

「……あなたに与えたスキルでは、邪神に対抗することなど不可能です。あの世界とともにあなたも死んでしまうでしょう。……それでもいいですね？」

何度も確認してきたが、俺の答えは変わらない。

「あそこには愛する嫁や娘、そしてペットがいるんだ」

いるったらいるのである。

「俺一人、別の世界に行くなんてことは考えられない」

「そうですか……」

決意が固いと見てとった女神様は、痛ましげに嘆息して、

「……分かりました。そこまで言うのであれば、あの世界にお戻し致しましょう」

「頼む」

そうして光が俺の身体を包み込む。

女神様に見送られて、元の世界に戻る

「久しぶりね、東城カルナ。もちろん、あたしのことは覚えてるわよね？　女神イスリナよ」

はすが、気が付くと目の前に別の女神様がいた。

やっぱりこうなると思ったよ！

イスリナは気が強いタイプの女神だが、ちょっとバツが悪そうに言う。

「実はあんたに謝んなくちゃいけないことがあんのよ」

だよな。

「あんたを送ったあの世界、もうすぐ滅びるのよ」

知ってます。

「だから今回、特例であんたは別の世界に送り直せるようになったのよ。不幸中の幸いってやつね」

さいですか。

それから当たり前のように、アーシアのときと同じやり取りが繰り返された。

「本気？ あんたあの世界にいたら間違いなく死ぬわよ？」

イスリナは淡白な女神かと思っていたが、意外と心配してくれているようだった。

説得するのに、アーシアのときと同じくらいの時間がかかってしまった。

「あそこには愛する嫁や娘、そしてペットがいるんだ」

「……ふん。そこまで言うのなら好きにすればいいわ」

それでも最後には折れてくれる。

「ま、せいぜい最後のときまで楽しみなさい」

そして彼女に見送られ、今度こそ元の場所に

「久しぶりですわね。女神ウェルミスですわ」

ですよねー。

案の定、それから俺は何度も何度も女神様から同じことを聞かれ、同じことを提案され、同じようにお断りする羽目になった。

そうしてようやく百柱目の女神に。

「ねえ君、随分と疲れてるようだけど大丈夫？」

「だいじょーぶだいじょーぶ」

「まったくそうは見えないんだけど？ ていうかさー、さっきからあたしの話、全然聞いてないっしょ？」

「きーてるきーてる」

「じゃあ、どこの世界に行きたいか希望言って」

「あーそれ、どこにも行くつもりないから」

「はい？」

「あの世界と命運を共にしたいっていうか」

もはや物凄くテキトウである。

「君がそういうんなら仕方ないねー」

「うんうん仕方ない仕方ない」

「じゃね〜」

そして最後の女神に見送られて、俺は元の場所に戻ったのだった。

気づくとNABIKOのリビングにいた。

「カルナさん？ 一体どこに行ってたんですか？ いきなり消えたのでびつくりしましたよ？」

「貴様が急にいなくなるのはいつものことだがな！」

そう言えば、アマゾネスの都市の地下遺跡から地上へと戻り、女王への報告を終えた直後に突如として視界が切り替わったんだったつけ。

俺は怪訝そうにしているティラとエレンをまとめて抱き締めた。

「何してるんですか！」

「何するのだ！？」

しかし振り払われてしまう。

俺は愕然として、

「可愛い妻と娘のために戻ってきた旦那に対して、その仕打ち……」。



さすがに泣くよ?」

「意味が分からないです(のだ)」

……さて。

女神たちが言っていた邪神。

そいつが恐らく、千年前にあのおっさん英雄によって倒された(ことになっている)やつだろう。

おっさんは墓の奥でゴーストになってまで、万一邪神が復活したときに備えてあの聖剣を護り続けていたようだが、神々にとっては完全に想定外だったらしい。

聖剣はそもそも一度しか使うことができず、だからこそエレンが素振りしただけで壊れてしまったのだ。

聖剣もなければ、神々からも見放されたこの世界。

しかし、もちろん俺は世界の崩壊とともに死ぬ気などない。

「要はその邪神とやらを今度こそ葬り去ればいいんだろ?」

女神は全員が口をそろえてどうもできないと断言した。

俺に与えたチートスキルは強力だが、それだけではどう足掻いたところで邪神には太刀打ちできない、と。

だが彼女たちは知らないのだ。

俺がチートスキルを百個も持っているということを。

## 第145話 邪神

その日。

どこまでも続く青い空に、突如として小さな亀裂が走った。

あらゆる光を吸収してしまうような、漆黒の亀裂。

それは徐々に長く、さらには太く広がっていき やがて、人が

一人、通り抜けられるほどの大きさにまで成長する。

漆黒の中から一本の腕が現れた。

短くて太い、人間のものと思しき腕だ。

続いて頭部が姿を現した。

随分と丸っこい頭部だ。

顔の各パーツがどうにもバランス悪く配置されているせいか、愛嬌があるとも言い辛い、率直に言えば不細工な顔面。

前髪は後退して禿げ上がっている。

さらにぽっこりした胴体、逆の腕、そして短い足が出てきて、その全貌が露わになった。

人間のおっさんである。

小柄で、小太りで、禿げたおっさんである。

だが何を隠そう、一見すると不細工な中年にしか見えないこの男こそ、復活した邪神なのだった。

今から千年前。

彼は神々の力を付与された聖剣を手にした一人の男によって、あと一步で消滅してしまうところまで追い詰められた。

どうにか異空間に逃げ込み、それを免れることができたのだが、こうして力を取り戻すまでの長き年月に渡って、その男に対して抱き続けた強い憎しみの感情が、皮肉なことに自らの外見にまで影響を及ぼしてしまったらしい。

「忌々しくもあるが、しかし悪くはない。この姿で奴が救った世界を破滅させるというのも、一興というものだろう」

彼はそう思い直し、男の顔でニヤリと笑う。

……残念ながら、その姿が人間の価値観から見て滑稽なものだということ、邪神である彼は知らなかった。

世界を滅ぼす邪神にしてはどうも締まらない姿ではあるが、その力がかつてを大きく凌駕している。

今なら、たとえあの男と聖剣が再び自らの前に立ちはだかろうとも、軽く破壊することができると、彼は確信していた。

「……だが、これは一体どういうことだ？ 我の復活に先立ち、何体か先兵を送り出しておいたはずなのだがな」

空に浮かんで辺りを見渡しながら、彼は不服そうに呟く。

実は事前に彼の配下とも言える魔物たちを解き放っておいたのだ。

禍々しい瘴気を纏うそれらは、千年前も彼の命令に応じてこの世界を蹂躪し、各地に甚大な被害を与えた。

大地も海も空も、生き物の棲息が不可能な穢れた場所へと変えていったのだ。

しかし今、見渡す限り、豊かな自然が広がっていた。  
瘴気の欠片も窺うことができない。

「私の復活を祝うのが、このような光景とはな……」

邪神である彼にとって、この光と緑に溢れた世界は唾棄すべきものなのだった。

と、そのときだった。

ふと魔力の予兆を感じて、彼は眉根を寄せる。

前方、数十メートルほど先。

そこから転移魔法特有の波長を感じ取ったのだ。

何者かが自分からそう遠くない場所に転移して来ようとしているらしい。

なんと不運な輩だろうか、彼は嘲笑う。

やがて予想していた通り、そこに一人の人間が姿を現した。

何にしても復活した彼が遭遇した最初の生命である。

どうやって殺そうかと、楽しげに思索していると　その人間は、彼の姿を見て一瞬驚いた後、彼にとっては意外な言葉を口にしたのだった。

「あんたが邪神だな？」

「あんたが邪神だな？」

そう問いながらも、俺は内心では首を傾げていた。

こいつが邪神……？

もしかして何かの間違いではないだろうか？

と思っってしまったも、どこからどう見ても、あの地下遺跡で会った英雄のおっさんにしか見えなかったからだ。

『どういう理由かまでは分かりませんが、恐らくその姿を模倣したのでしょう。それくらいは簡単なはずです』

なるほど。

しかしなあ……萎えるだろ、これは。

もっと邪神っぽい禍々しい感じの見た目にしてほしかったぜ。

せっかく意気込んで討伐にきたんだからさ。

『マスター。あの見た目に騙されてはいけません。中身はあくまで邪神。墮落しているとは言え、正真正銘の神です』

ナビ子さんの言う通りだ。

さっきから鑑定しようとしているのだが、すべてエラーになって

しまう。

俺の 鑑定・極 スキルを持っても、どうやら防がれてしま  
うらしい。

「ほう。この我を知った上でやってきたのか」

邪神はどこか感心したように頷いて、

「どうやら死に急いでいるようだな。くくく、いいだろう。ならば  
じっくりと時間をかけて、存分に苦痛を味わせた上で殺してやる  
うではないか」

口端を歪めて嗤う邪神。

しかし見た目が禿げたおっさんなので、まるで似合っていない。  
思わずこつちが笑いそうになってしまった。

そんな俺の様子が予想外だったのか、邪神は少し怪訝そうな顔を  
している。

「言っておくが、お前が送り込んだ厄介な連中たちを全滅させたの  
は俺だぞ？」

「なに？」

百柱の女神たちに会った後、俺は世界各地に次々と現れたこいつ  
の配下たちを倒して回ったのだ。

頑張った甲斐あって、被害はほとんどない。

俺の言葉に、初めて邪神は真剣な顔つきになった。  
おっさんの顔だが。

「まさか貴様は神々から聖剣を与えられ、この我を倒しに来たのか……？　ちつ、奴らめ、我の復活を予測しておったのか……！」  
「いや、持っていないぞ。予測はしていたっばいけど」

だったら新しい聖剣をくれたらいいと思うのだが、今回はそれができない事情でもあったのだろう。

「あと、お前を倒しに来たというのも間違いじゃないぞ」  
「聖剣もなしにこの我を倒すだと？　く、くくく……くははははっ！　なんと愚かな。どうやら私の配下を倒しただけで良い気になっただけだ。だがあんなもの、幾らでも生み出すことができる。この通りだ」

邪神がおっさんの短い腕を頭上に掲げたかと思うと、膨大な魔力が一瞬に収束していく。  
禍々しい瘴気を伴う魔力だ。

やがてそれが弾けて巨大な魔物が姿を現した。

巨大な蛙である。

ただし背中に昆虫のような翅が生えており、宙を飛んでいた。

先日、レイン帝国領内にも現れたやつで、もちろん俺が討伐した。確か地下遺跡の壁画にも似たようなのが描かれていたっけ。

「一匹だけではないぞ」

さらに邪神は、巨大な配下を次々と生み出していく。  
放っておいたら無限に出てきそうだ。

なので早急に本体を叩くことにした。

「神級魔法                      大罪浄化ス煉獄ノ炎」

最上位の火魔法である。

超々高熱の火炎の竜巻が出現し、邪神の身体を焼き尽くさんとする。

「何だ今のは？」

だが次の瞬間、まるでマッチの火が吹き消されるかのように、神級魔法の炎が掻き消えた。

そこにはまったくの無傷のおっさん……もとい、邪神がいる。

「効いてねー」

どうやら大小関係なく魔法そのものが効かないらしい。  
か〇はめ波が効かない天〇飯みたいなものだ。

たぶん物理攻撃も効かない気がする。

ならばと俺は、最強のぶっ壊れスキルを使うことに。

「死ね」

即死攻撃・極    スキルだ。  
効果は相手が死ぬ。

「な……」



邪神の身体がボロボロと崩れていく。

そして灰となって、霧雨のように地上へと落ちていった。

「全員、死ね」

ついでに配下の魔物たちも殺しておく。

一体一体普通に倒していくと面倒だしな。

巨体が次々と灰と化する。

「……倒せちゃった？」

「いえ、さすがにそう簡単にはいかないかと」

舞い落ちる灰から瘴気が噴き出し、一か所に集まっていく。  
気づけばそこに先ほどと変わらないおっさんの姿があった。

おおう、まるで魔人○ウだぜ……。

「今のは相手を即死させるスキルか？ 肉体的な死など超越した神である我に、そんなものが効くとも思ったか」

どうやら伊達に神の名を名乗っていないようだ。

## 第146話 女神召喚

即死攻撃・極 スキルでも邪神を殺すことはできなかった。  
魔法も物理攻撃も効かないし、どうしたもんかね……。

「どうやら貴様に対しては雑魚を幾ら生み出しても無駄なようだ。  
やはり我が自ら仕留めてくれよう」

そう言つて、邪神がこちらに手を翳してくる。

「っ!？」

次の瞬間、俺の全身の骨が粉々に砕け散った。

うお、マジかよ。

それでも俺、この世界最強クラスの物耐値を持つてんだけどな。  
なんか念力っぽいやつだったし、もしかして物耐の高さは無関係  
なのか？

それでも 自然治癒・極 スキルのお陰で瞬時に回復していく。  
てか、痛覚耐性・極 スキルがなければ痛みで気を失っていた  
かもしれん。

「ほう？ 今のに耐えたか。しかもものの数秒で骨が修復している  
とはな」

邪神は余裕の面持ちで分析している。

「ならばこれはどうだ？」

俺の右腕が破裂した。

「うおっ、マジか」

さらに左腕も破裂する。

あっという間に両腕を奪われてしまった。

しかし 自然治癒・極 スキルの力ですぐに生えてきた。

「心臓ならどうだ？」

今度は胸に衝撃がくる。

どうやら心臓が破裂したらしい。

「それでも死なぬか。その上、まるで痛がる様子がない」

俺が平然としているからか、邪神はどこか不愉快そうだ。

やはり邪神だけあって、苦痛や恐怖で悶え苦しむ様子が見たいのかもしれない。

「つまらぬな。とつとと殺すか」

直後、俺の視界が暗転した。

「……………なんだと？」

邪神が驚きを露わにする。

殺したはずの俺が、何事も無かったかのようにそこにいたからだ。

「今の、脳を破壊されたのか？」

『そのようです』

「そりゃ死ぬわー」

### 死神の目溢

二十四時間に一度だけ、死んでも生き返らせてくれるというスキルの効果である。

そしてこれとセットにすると最強なのが、セーブ&ロードだ。俺は即座にロードし、死神の目溢をリセットした。

セーブしていた地点 最初に邪神に遭遇した瞬間へと戻る。  
またそこからやり直した。

「……戻った？」

だが驚くべきことに、邪神は怪訝な顔をして、こいつの視点では初対面のはずの俺をまじまじと見詰めてくる。

「なるほど、どうやら面倒なスキルを数多く持っているようだな」

マジか。

時間が過去に戻ったはずなのに、こいつさっきまでの記憶を引き継いでやがるぞ？

「言っただろう、我は神だと。自らに対して使われた力となれば、それを理解することなど造作もない」

邪神は勝ち誇ったように言い、それから急に楽しげに口端を吊り

上げた。

「その力、思っていたより楽しめそうだ。つまり幾ら殺したところで、貴様は何度でも生き返ることができるとのこと。……しかし、果たして死を永遠に繰り返したとき、貴様の精神はそれに耐え切ることができるかな？」

恐らく百回くらいは繰り返し殺されたように思う。  
だが生憎と俺の精神はまだピンピンしていた。

逆に期待していた効果がまったく得られず、邪神の方が先に限界がきたらしい。

「なぜだ貴様っ！？　これほど何度も殺されて、なぜ平然としている！？」

オリハルコンの精神力　というスキルのお陰です。

「くっ……貴様を直接どうこうしようと考えたのが間違いだったよ  
うだな……」

忌々しげに顔を歪めながら、

「貴様は後でじっくりと料理することにしよう。それまでは世界が壊されていく様を眺めているが良い」

どうやら俺のことは放置することに決めたらしい。

「いやいや、そんなこと許すわけないだろ」

「ふん、止められるものなら止めてみるが良い。貴様ではこの我に勝てぬことも、はつきりと分かっただろう？ 我に少しでも傷をつけることができるのは神の力を宿した聖剣だけだ」

確かに、普通の方法ではこいつを倒すことはできないらしい。  
あの英雄のおっさんが倒せたのも、聖剣があつたからだろう。

「つまり神の力があればいいってことか」

「くはははっ！ そんなもの都合よく手に入るものではない。そもそも奴らは自分たちで作った法則に縛られ、雁字搦めになっているからな。我のように神の地位を捨てた者だけが、こうして自由に動くことができるのだ」

じゃあこれならどうだろう？

俺はとあるスキルを使ってみることにした。

天から光の柱が降ってきたかと思うと、そこに絶世の美女という言葉すら色褪せそうなほどの美少女が姿を現す。

「……へ？ か、カルナさん……？」

突然のことに驚いているようだ。

鏡のような煌めく長い銀髪的美少女で、全身から神々しいまでの光を放っていた。

女神アーシアである。

チートスキル 女神召喚。

その名の通り、女神様を召喚できるありがたいスキルです。

「久しぶり」

「ちよつ、えっ？ ここつて、もしかしてあなたを送り出した世界ですか……？」

「そだよ」

「な、なぜ……っ！？」

女神様はかなり戸惑っている。

「ば、馬鹿なっ……！？ なぜいきなり女神が！？」

一方、邪神は邪神で大いに驚愕している様子。

アーシアもまた邪神の存在に気づき、

「っ！ あ、あなたは……邪神！？」

「ちよつと俺では倒せそうになかったから呼んでみた」

「えええええっ！？」

「同じ神様だったら倒せるだろ？」

しかしアーシアはぶんぶんと首を強く左右に振った。

「いえ、あの、さ、さすがに私では難しいといえますかっ……！」

相手は同族を殺したこともある狂暴な神ですし……っ！ 第一、私の専門は戦いではなく……！」

美貌を青くして焦っている。

意外とピンチに弱いタイプらしい。

初めはちょっと動揺していた邪神だが、自分の相手ではないと分かったのか、笑い出した。

「くくく、くははははっ！ まさか女神まで召喚するとは思わなかったぞ！ だが残念だったな！ 我は武神だ！ そこの女神に負けるはずもない！」

なるほどなるほど。

女神アーシアだけではこいつには勝てない、と。

「そうか。じゃあ百人くらい召喚すればいいか？」

「は？」

女神と邪神の声が重なった。



第146話 女神召喚（後書き）

書籍3巻が発売されました！ よろしくお願ひします！ m（――）

## 第147話 女神100人で一体の邪神をボコる

俺は次々と女神を召喚していった。

ちよつとせつかちな女神イスリナ、  
気位の高いお嬢様系の女神ウエルミス、  
元気で笑いの絶えない女神エーリ、  
おしゃべり好きの女神オッドレッタ、  
金髪碧眼の愛くるしいツインテール幼女神カララナ、  
猫耳の生えた獣人系女神キクラ、  
常に雷を纏っている女神クディングガ、  
露出度の高い淫乱系女神ケラ、  
身長十メートルを超す女神コトラック、  
ケンタウロスのように馬の下半身を持つ女神サダラガ、  
二つの人格が数分ごとに切り替わる女神セラ、  
人間の人差し指ほどの大きさしかない豆粒女神ソイ……まだまだ  
つづく。

すべて俺の転生を担当した女神たちである。

その数はもちろん、総勢100柱。

美しい女神たちがずらりと並んでいる様はまさに圧巻だ。

そのあまりの神々しさに目が眩んでしまう。

くっ、せっかくパンツ見えそうなのに……！

「どういうことよ、これ？」

「なぜわたくしがこの世界に？」

「あっ、コトラックじゃん！　なんでここにー？　てか、相変わら

ずでつかいねー」

「じじ……どこ……知らない……場所……」

いきなり俺によって呼び出された彼女たちは様々な反応を示している。

一方、さっきまで平然と笑っていた邪神は、

「ば、ば、ば、馬鹿なっ！？　なぜこれほどまでの数の女神を召喚することができる！？」

目を剥いて叫び、これまでにない慌て様だ。

「おーい、女神さんたちいいッ！」

俺は声を張り上げ、百柱の女神たちに呼びかけた。

姦しくしゃべっていた彼女たちが黙り、俺に注目が集まってくる。

「まさか、あんたがあたしたちを召喚したの？」

「一体どうやって！？」

「転生時にあなたに与えたスキルは生産系のスキルだったはずよ？」

「えっ？　どういうこと？　彼の転生を担当したのはあたしだけど  
？」

「はい？　それは私ですよ？」

「ちょっと待って！　何言ってるの？　わたしが担当したんだって  
！」

再び騒がしくなる女神たち。

何だか俺を取り合っているみたいで気持ちいい。

って、そんなこと言ってる場合じゃない。

「あんたたちを呼んだのは俺だ！ 詳しいことは後で話すから、とりあえずこの邪神を倒してくれ！」

これだけの人数がいると、説明するだけでもなかなか大変そうだなのでとりあえず後回しである。

そこで邪神に気づいた女神たちが戦闘モードに入っていく。

「確かにあいつは倒しておかないとダメね」

「わーい、邪神だ邪神だ！ 殺そう殺そう！」

「仕方がないのう……」

「しょ、正直、何が起こっているのか未だに理解できませんが……この数がいれば確実に倒せそうですね」

大勢の加勢を得て、女神アジアも戦う気になってくれたようだ。

「じよ、冗談ではないっ！ こんな数の女神と戦えるわけが」

「逃がさないよっとな！」

「っ！？」

逃走を図ろうとした邪神だが、しかしツインテール幼女神カララナに回り込まれてしまった。

「えゝい！」

「がっ！？」

カララナに吹き飛ばされ、百柱の女神たちがいるまさにそのど真ん中へ。

「きゃっほーっ！ リンチだリンチだーっ！」

そうして繰り広げられたのは、まさしくリンチだった。

「ぎゃっ！　ぐべっ！？　ぶごっ！？　あぶっ！」

百柱の女神から次々と攻撃を喰らい、成す術がない邪神。

完全に取り囲まれてしまっているため、逃げることもすらできないようだ。

しかも相手が邪神とあって女神たちの方もまるで容赦がない。

「とつとと消滅しやがれ、クソ邪神が！」

「きやはははっ！　殺せ殺せーっ！」

「あははは、これ、良いストレス発散になるわねー」

……中には好戦的だったり嗜虐的だったりする女神もいるのである。

「……あり、得ぬ……こんな、こと、が……」

それが邪神の最期の言葉だった。

「大丈夫そうですね。今度こそ完全に消滅したはずですよ」

女神アーシアが断言した。

さらに他の女神たちも一斉に頷いてくれる。

アーシアは同族の方をちらりと見て、

「……これだけの女神がいる中では、さすがに異空間に逃げ込むなんて芸当も不可能ですしね……」

ともかく、これでもうあいつが復活することはあり得ないということだ。

「それはそうと、ちゃんと説明してもらわよ!」

と、強い口調で俺に要求してきたのは女神イスリナである。仕方がない。

こうなったら真実を話すしかないだろう。

「女神召喚 スキルで召喚しました。以上!」

端的に伝えました。

「以上、じゃないわよ!? 第一あんたに与えたスキルは、ナヒゲーション道案内・極 でしょ!?!」

納得がいかないとばかりにイスリナが咆える。

そこでおずおずと手を上げた女神がいた。

「あの…… 女神召喚 スキルなら……私が……」

気弱な女神ヨルコだ。

「は? こいつの転生を担当したのはこのあたしなんだけど?」

「いや、だからそれは私だって」

「いやいや、だからわたしが……」

「いやいやいや、わたくしこそが……」

俺は言った。

「全員です」

「……はい？」

百柱の女神たちは神界へと帰っていった。

俺がチートスキルを百個持っていることを説明すると、「あり得ないんだけど……」「前代未聞だ……」「世界のバランスが……」などと驚いてはいたが。

「取り上げられるんじゃないかとヒヤヒヤしてたが、大丈夫だったな」

『特に数の制限があるわけではありませんから』

「もし一個しかダメってなったら、もちろん俺はナビ子さんだけを残したけどな」

『……そうですか』

「今ちよつとドキッとしたら？」

『してませんし、機械に感情が芽生えていく的な展開を期待しないでください』

ばっさりである。

ナビ子さんがデレる日はいつくるのか……。

何にせよ、これで危機は去ったわけだ。  
まさしく俺は世界を救った英雄である。  
女の子にキヤーキヤー言われたい。

『最後は完全に他力本願でしたが』  
「それを言うなら最初から完全にスキル頼みだけだな」

邪神の魔の手から世界を救って、一か月が経った。

俺は相変わらず愛する嫁や娘、そしてペットと共にNABIKO  
に乗ってのんびりと旅を続けている。

時に湖の奥に沈む古代神殿に潜り、幻のアイテムを手に入れたり。  
時に北の大陸に住む巨人族に会いにいき、五十メートル級の巨  
人と戦うことになったり。

時に世界最大の宗教組織に喧嘩を売ったり。

はたまた可愛い嫁たちとスキンシップをしたり。

「嫁じゃないですから！ それはスキンシップじゃなくてセクハラ  
です！」

「貴様、どこを触っているのだ！？」



あるいは娘にケモミミと尻尾を付けてみたり。

「わーい！ たーのしー！」

ペットを餌づけしたり。

「うまうまうま！」

「美味えええっ！」

「うまいのです！」

天使をオリハルコン製の檻に閉じ込めたり。

「ティラ様ああっ！ これがいわゆる監獄プレイですわねええええっ！」

悪魔を召喚してみたり。

「だから何でもいつもトイレ入ろうとしたときに呼び出すのよ  
おおおおっ！？」

ついでに女神様も召喚してみたり。

「えっ？ ちょっ？ カルナさんっ？」

「特に用事はないけど呼んでみた」

「用がないなら呼ばないでくださいよ！？」

ナビ子さんの身体として作った魔導人形をナビ子さんが全然使ってくれないので、仕方なくラブドールとして使ってみたり。

『……………』

とまあ、こんな感じで異世界を満喫しているわけだが。

……あれ、おかしいな？

異世界モノの定番と言えばハーレムなのに、何で俺、未だにラブドールで自分を慰めてるんだ……？

『いいえ、マスター。すでにマスターはハーレムをお持ちかと』

「え？ マジで？ どこに？」

『彼らです』

「彼ら……？」

「ご主人様あああつ！ 散歩に連れてつてくださああいつ！ わんわんわん！」

「ああつ、愛しのカルナ君っ！ 早く僕と合体しよう！」

「カルナくううんっ！ また君に打擲されにきたよおおおおっ！」

「また出やがったあああつ！？」

アルク、紫苑、そしてミカエルという変態どもだ。

『すでに三人もいらっしやいます』

「全員男だろうが！？」

断じてこれはハーレムじゃねえ。

『では変身魔法で女体化させてみては？』

「そういう問題じゃないだろ」

## 第147話 女神100人で一体の邪神をボコる（後書き）

本編はここで完結とさせていただきます。

ここまでお読みいただき、本当にありがとうございました。

書籍版は1～3巻が発売中です。

かぼちゃ先生の素敵なイラスト付きですのでヒロインの裸を見たい方などぜひ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n8429dj/>

---

転生担当女神が100人いたのでチートスキル100個  
貰えた

2018年4月18日20時19分発行